静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第213集

駿河山遺跡Ⅲ

第二東名№91地点
（弥生・古墳・歴史時代編１）

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島田市－５

２０１０

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第213集

駿河山遺跡Ⅲ

第二東名№91地点
（弥生・古墳・歴史時代編１）

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島田市－５

２０１０

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

第二東名高速道路は静岡県を東西約170kmに渡って貫く形で建設が進められています。本書はその建設に伴い実施された島田市牛尾に所在する駿河山遺跡の発掘調査報告書（第３分冊）です。

島田市域では、上ノ山遺跡や上志戸呂古窯、駿河山遺跡、上伊太遺跡の４個所で本調査が行われ、いずれでもその地域の特性を示す貴重な発見がなされています。本書を含む５分冊で報告が計画されている駿河山遺跡は最も大規模な調査が行われた遺跡のひとつで、特に縄文時代中期前半～後期後半・弥生時代後期～古墳時代前期では質・量ともに大井川流域の歴史を語るためには欠かせない資料を提供しています。

本書で報告する弥生時代～古墳時代は、駿河山遺跡が最も盛んであった時期にあたります。大井川中流域から下流域・志太平野へと集落が増加する時期であり、駿河山遺跡もその一つに数えられます。

駿河山遺跡は、大井川の西岸、山間部と志太平野が接する独立丘陵上に位置する遺跡ですが、かつては対岸と尾根続きであったといわれ、調査前から表面採集資料などから大集落の存在が示唆されていました。今回の調査によって判明した弥生時代～古墳時代の集落は、数多くの竪穴式住居・掘立柱建物・方形周溝墓などからなり、当時の人々の生活をありありと窺うことができる好資料に恵まれました。また、出土した土器群は、基本的には静岡県西部地域東側の影響が強いものですが、その中にも県東部地域や伊勢湾岸、近畿地方のものが混じっており、他地域との交流が図られていたことを示すものでした。縄文時代にも見られた文化の合流点がこの時代にも継続していたことが分かり、人々の営みはあたかも大河の流れのように絶え間ないものであることを感じさせます。一方で現代社会に生きる私たちは、彼らのくらしから学び採った情報を充分に理解して活用し、より豊かな生活の糧としなければなりません。

今回の発掘調査ならびに本書の作成にあたっては、中日本高速道路株式会社東京支社（旧横浜支社）、島田市（旧金谷町）教育委員会、静岡県教育委員会等の関係機関各位、地元住民の方々より多大な御理解と御協力をいただきました。さらに、多くの方から様々な御指導・御助言をいただいています。この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。

平成22年３月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長　天野　忍

例　　言

1　本書は、島田市金谷地区における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、静岡県島田市牛尾1174他に所在する駿河山遺跡の発掘調査報告書である。この報告書は弥生・古墳・歴史時代編の第１分冊である。

2　第二東名建設事業に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査においては、それぞれ地点名が付されている。本書は、No.91地点に相当するものである。

3　第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、地区（市町村）単位で実施している。島田市域では本書が第４冊目であるため「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　島田市－５」とした。

4　駿河山遺跡の資料整理は、平成17年12月から実施し平成24年３月までの予定である。報告書は、平成19年度に遺構図版編が刊行されており、続いて縄文時代編、弥生・古墳・歴史時代編を編集・刊行する。本書は、駿河山遺跡報告書の第３分冊であるため「駿河山遺跡Ⅲ」とした。

5　調査は第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、中日本高速道路株式会社（旧日本道路公団静岡建設局）の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、島田市（旧金谷町）の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

6　現地調査・資料整理の期間と当研究所の担当者は以下のとおりである。

確認調査：平成10年８月～10月　足立順司、河合修、川上努

本 調 査：平成10年10月～平成11年３月　足立順司、河合修、川上努

平成11年４月～平成12年３月　及川司、飯塚晴夫、諸星雅一、河合修、石田勉、木崎道昭、大林元

平成12年４月～平成13年３月　及川司、飯塚晴夫、諸星雅一、河合修、中田出、大畑要

平成13年４月～平成14年３月　及川司、加藤理文、河合修、桶田光俊

資料整理・報告書作成：平成17年12月～平成19年３月　河合修、鈴木淑子

平成19年４月～平成20年３月　河合修（４～６月、12月～３月）、鈴木淑子

平成20年４月～平成21年３月　松川淑子（旧姓鈴木）

平成21年４月～平成22年３月　河合修

7　当研究所の担当者とともに梅川光隆（平成11年４月～12年３月）、高山正久（平成12年４月～５月）、真鍋治（５月～平成13年８月）が本調査の一部を分担した。

8　本書の執筆は河合がすべて行った。

9　調査における協力者等は、弥生・古墳・歴史時代編最終巻の文末に記載する。整理作業では、弥生土器・土師器については篠原和大氏(静岡大学准教授)にご指導いただいた。石器石材については一部を伊藤通玄氏に同定いただいた。

10　現地での基準点測量、空中写真撮影及び遺構測量の一部は株式会社フジヤマに委託した。

11　本書で使用した遺物写真図版は、すべて当研究所写真室が撮影した。

12　調査の概要は、当研究所の出版物で一部公表されているが、内容において本書と相違がある場合は本報告をもって訂正する。

13　本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。

14　発掘調査の資料は、静岡県教育委員会が保管している。

凡　　例

1　座標は平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を使用している。

2　グリッドは、1の座標を用い1辺10mの方眼を設定している。また、方位も1の座標による方位（座標北）を基準としている。

3　本書に使用した図表は主に調査によって測量・実測した図を基に作成している。これ以外の図については各図中に出典等を示している。

4　本書で使用した遺構の表記は次の通りである。

　例）SK19543（SK：遺構の種別　　19543遺跡内の全遺構通し番号）

　SH：竪穴住居　　SP：柱穴・小穴　　SK：土坑墓・土坑　　SX：風倒木痕

5　遺構図、遺物実測図の縮尺はそれぞれの図版に明記した。

6　遺構図には遺構と撹乱を同時に表記してある。これらのうち、トーンを落とした。

7　遺物番号は、挿図掲載遺物について種類・挿図の別にかかわらず、通し番号を付した。

8　本文中に用いる色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　1992）を使用した。

9　本書の図中に用いたスクリーントーン等の使い分けは、必要なものを各図の中で表記した他、遺物については次のように統一した。

石器・石製品摩耗範囲

目　　次

序／例言／凡例／目次

第１章　遺跡の位置と環境……9
　第１節　遺跡の位置と地理的環境……9
　第２節　歴史的環境と調査歴……9
第２章　調査の成果……15
　第１節　竪穴式住居の概要……15
　　1　遺構・遺物の概要……15
　　2　竪穴式住居の概要……15
　　（1）形態的な特徴
　　（2）住居の分布
　　（3）住居内の設備
　　（4）床と床下の構造
　　（5）上屋の構造
　　（6）家財道具
　　（7）焼失住居
　第２節　竪穴式住居・住居を囲む溝と出土遺物……20
　　1　竪穴式住居と出土遺物……20
　　（1）楕円形を呈する竪穴式住居
　　（2）楕円形～隅丸方形を呈する竪穴式住居
　　（3）隅丸方形を呈する竪穴式住居
　　（4）方形を呈する竪穴式住居
　　2　住居を巡る溝と出土遺物……243

報告書抄録

挿図目次

第１図　大井川流域の弥生・古墳時代遺跡……11
第２図　大井川流域の歴史時代遺跡……13
第３図　竪穴式住居分布状況……17
第４図　SH70002・70001平面・断面図（床面相当）……21
第５図　貯蔵穴SK70280、炉70668
遺物出土状況・遺物実測図……22
第６図　SH70002・70001平面・断面図（掘方）……23
第７図　SH70009平面・断面図（掘方）……24
第８図　SH14215平面・断面図（掘方）……25
第９図　SH14158平面・断面図（掘方）……26
第10図　SH15968平面・断面図（掘方）……27
第11図　SH13791平面・断面図（掘方）……28
第12図　SH14550平面・断面図（掘方）……29
第13図　SH14550出土遺物実測図……30
第14図　SH13847平面・断面図（床面）……31
第15図　SH13847平面・断面図（掘方）……32
第16図　SH16008平面・断面図（床面・掘方）……33
第17図　SH14347平面・断面図（床面）……34
第18図　SH14347平面・断面図（掘方）……35
第19図　SH14346平面・断面図（掘方）……36
第20図　SH14322平面・断面図（掘方）……37
第21図　炉16249平面・断面図……38
第22図　SH14242平面・断面図（床面・掘方）……39
第23図　SH14356平面・断面図（床面・掘方）……40
第24図　SH14703平面・断面図（床面）……41
第25図　SK15209遺物出土状況・遺物実測図……42
第26図　SH14703炉平面・断面図……42
第27図　SH14703平面・断面図（掘方）……43
第28図　SH18057・18109平面・断面図（床面・掘方・炉）……44
第29図　SH18057遺物出土状況……45
第30図　SH15325平面・断面図（床面・掘方）……46
第31図　SH15325炉平面・断面図……47
第32図　SH14250平面・断面図（床面）……48
第33図　SH14250平面・断面図（掘方）……49
第34図　SH51495平面・断面図（床面）……50
第35図　SH51495平面・断面図（掘方）……51
第36図　SH52984平面・断面図（床面）遺物実測図……52
第37図　炉54708・粘土塊平面・断面図……53
第38図　SH52984平面・断面図（掘方）……54
第39図　SH50800その１、その２平面・断面図（床面）……55
第40図　貯蔵穴SK53886遺物出土状況・遺物実測図……56
第41図　貯蔵穴SK53886遺物実測図……56
第42図　SH50800その１、その２平面・断面図（掘方）……57
第43図　SH50800その３平面・断面図（床面）……58
第44図　貯蔵穴SK54539遺物出土状況・遺物実測図……59
第45図　炉53884平面・断面図……59
第46図　SH50800その３平面・断面図（掘方）……60
第47図　SH50801・54598平面・断面図（床面）……61
第48図　SH50801・54598遺物出土状況……62
第49図　SH50801炉平面・断面図……62
第50図　SH50801・54598平面・断面図（掘方）……63
第51図　SH50610平面・断面図（床面・掘方）……64
第52図　貯蔵穴SK54033遺物出土状況・遺物実測図……65
第53図　SH50610炉平面・断面図……66
第54図　SH51147平面・断面図（床面）・遺物実測図……67
第55図　SH51147遺物出土状況……68
第56図　小穴SP51157遺物出土状況……68
第57図　SH51147平面・断面図（掘方）……69
第58図　SH50001平面・断面図（床面・掘方）……70
第59図　柱穴SP54123付近遺物出土状況……71
第60図　SH50919平面・断面図（床面）……72
第61図　小土坑SK54017遺物実測図……72
第62図　SH50919平面・断面図（掘方）……73
第63図　SH5390平面・断面図（床面）・遺物実測図……74
第64図　SH5390平面・断面図（掘方）……75
第65図　SH1688・3272平面・断面図（床面）……76
第66図　SK4117・4118遺物出土状況・遺物実測図……76
第67図　SH1688・3272平面・断面図（掘方）……77
第68図　SH5194平面・断面図（床面）……78
第69図　小土坑SK5555付近遺物出土状況・遺物実測図……79
第70図　SH5194平面・断面図（掘方）……80
第71図　SH2157平面・断面図（床面）遺物実測図……81
第72図　SH2157遺物出土状況・遺物実測図……82
第73図　SH2157平面・断面図（掘方）……82
第74図　SH3085平面・断面図（床面・掘方）遺物実測図……83
第75図　貯蔵穴SK4337遺物出土状況・遺物実測図……84
第76図　SH5119平面・断面図（床面）、遺物実測図……85
第77図　貯蔵穴SK5424遺物出土状況・遺物実測図……86
第78図　SH5119平面・断面図（掘方）……87
第79図　SH1313平面・断面図（床面）、遺物実測図……88
第80図　SH1313遺物実測図……89
第81図　貯蔵穴SK3081遺物出土状況・遺物実測図……90
第82図　SH1313平面・断面図（掘方）……91
第83図　SH5425平面・断面図（床面）、遺物実測図……92
第84図　貯蔵穴SK5661遺物出土状況・遺物実測図……93
第85図　小穴SP5825遺物出土状況・遺物実測図……93
第86図　SH5425平面・断面図（掘方）……94
第87図　SH1678平面・断面図（床面）、遺物実測図……95
第88図　SH1678平面・断面図（掘方）……96
第89図　SH1822平面・断面図（床面・掘方）……97
第90図　貯蔵穴SK3606遺物出土状況……98
第91図　SH1335平面・断面図（床面・掘方）、遺物実測図……99
第92図　SH2931平面・断面図（掘方）……100
第93図　SH2218平面・断面図（床面・掘方）、遺物実測図……101
第94図　SH328平面・断面図（床面）……102
第95図　貯蔵穴SK2301・2302遺物出土状況・遺物実測図……103
第96図　SH328平面・断面図（掘方）……104
第97図　SH2949平面・断面図（床面）……105
第98図　SH2949平面・断面図（掘方）……106
第99図　SH1440平面・断面図（床面・掘方）……107
第100図　SH1426平面・断面図（床面）……108
第101図　土坑SK3744遺物出土状況……108
第102図　小穴SP3339遺物出土状況・遺物実測図……109
第103図　SH1426平面・断面図（掘方）……110
第104図　SH5678平面・断面図（床面・掘方）……111
第105図　小穴SP5679付近遺物出土状況……112
第106図　SH1203・1200平面・断面図（床面）、遺物実測図……113
第107図　SH1203、貯蔵穴SK3057遺物出土状況・遺物実測図……114
第108図　SH1203・1200平面・断面図（掘方）……115
第109図　SH1234平面・断面図（掘方）……116
第110図　SH4522平面・断面図（床面・掘方）……117
第111図　SH54436平面・断面図（床面）、遺物実測図……118
第112図　SH54436平面・断面図（床面・掘方）……119
第113図　SH4486平面・断面図（床面・掘方）……120
第114図　SH4486遺物実測図……121
第115図　SH70007平面・断面図（掘方）……122
第116図　SH70007遺物出土状況・遺物実測図……123
第117図　SH70008平面・断面図（掘方）……124
第118図　SH14319平面・断面図（床面・掘方）……125
第119図　SH14131平面・断面図（掘方）……126
第120図　SH14083平面・断面図（掘方）……127
第121図　SH15315平面・断面図（生活面・炉）、遺物実測図……128
第122図　SH15315遺物出土状況・遺物実測図……129
第123図　SH13043平面・断面図（掘方）……130
第124図　SH15780（18129）平面・断面図（床面・掘方）……131
第125図　SH51496平面・断面図（床面・掘方）……132
第126図　SH51496遺物出土状況・遺物実測図……133
第127図　SH18127平面・断面図（床面・掘方）……133
第128図　SH53085平面・断面図（生活面・掘方）……134
第129図　SH50896平面・断面図（床面・掘方）……134
第130図　SH50896遺物出土状況……135
第131図　SH54374平面・断面図（床面・掘方）……136
第132図　SH50795平面・断面図（床面・掘方）……137
第133図　炉54355平面・断面図……138
第134図　SH53254平面・断面図（床面・掘方）……138
第135図　SH52243平面・断面図（掘方）……139
第136図　SH51173平面・断面図（床面・掘方）……140
第137図　SH50837平面・断面図（床面・掘方）……141
第138図　SH54721平面・断面図（床面・掘方）……142
第139図　SH51790平面・断面図（床面・掘方）……143
第140図　SH50507平面・断面図（掘方）……144
第141図　土坑SK53788遺物出土状況……144

第142図　SH52100平面・断面図（床面・掘方）…… 145
第143図　SH52101平面・断面図（埋土上・掘方）…… 146
第144図　SH52101遺物出土状況…… 146
第145図　SH53142平面・断面図（床面・掘方）…… 147
第146図　SH53142遺物実測図…… 147
第147図　SH52090平面・断面図（検出面・掘方）…… 148
第148図　SH5447平面・断面図（掘方）…… 149
第149図　SH2934・2933平面・断面図(床面・掘方)、遺物実測図… 150
第150図　SH2934・2933遺物出土状況・遺物実測図１…… 151
第151図　SH2934・2933遺物出土状況・遺物実測図２…… 152
第152図　SH5195・5398平面・断面図（床面・掘方）…… 153
第153図　SH5195平面・断面図（掘方）…… 154
第154図　SH1514平面・断面図（掘方）…… 155
第155図　SH739平面・断面図（掘方）、遺物実測図…… 156
第156図　SH14236平面・断面図（床面・掘方）…… 157
第157図　炉14236平面・断面図…… 158
第158図　SH15589平面・断面図（掘方）…… 159
第159図　SH13641平面・断面図（掘方）…… 159
第160図　SH14306平面・断面図（床面・掘方）…… 160
第161図　SH14390平面・断面図（床面・掘方）…… 161
第162図　SH14390遺物・炭化物出土状況、遺物実測図…… 162
第163図　SH14239平面・断面図（床面・掘方）…… 163
第164図　小土坑SK15894等遺物出土状況…… 164
第165図　SH14176平面・断面図（床面・掘方）…… 165
第166図　SH14272平面・断面図（床面・掘方）、遺物実測図…… 166
第167図　炉14272平面・断面図…… 167
第168図　SH53038平面・断面図（床面・掘方）…… 168
第169図　SH13019平面・断面図（掘方）、遺物実測図…… 169
第170図　貯蔵穴SK15349遺物出土状況…… 169
第171図　SH18050平面・断面図（掘方）…… 170
第172図　SH50799平面・断面図（床面・掘方）…… 171
第173図　貯蔵穴SK53906遺物出土状況・遺物実測図…… 172
第174図　SH50799遺物・炭化物出土状況、遺物実測図…… 173
第175図　SH53409平面・断面図（床面）、遺物実測図…… 174
第176図　炉53409平面・断面図…… 174
第177図　SH53409平面・断面図（掘方）…… 175
第178図　SH52293平面・断面図（床面・掘方）…… 176
第179図　SH50898平面・断面図（床面・掘方）…… 177
第180図　SH53256平面・断面図（床面・掘方）…… 178
第181図　SH50802平面・断面図（床面・掘方）…… 179
第182図　炉50802平面・断面図…… 179
第183図　SH50802遺物出土状況・遺物実測図…… 180
第184図　SH53243平面・断面図（床面・掘方）…… 181
第185図　SH52069平面・断面図（床面・掘方）…… 182
第186図　SH51224平面・断面図（掘方）…… 183
第187図　SH51731平面・断面図（床面・掘方）…… 184
第188図　SH51749・54624平面・断面図（床面）…… 185
第189図　SH51749・54624平面・断面図（床面・掘方）…… 186
第190図　SH1307平面・断面図（床面・掘方）…… 187
第191図　SH1307遺物実測図…… 188
第192図　SH51780平面・断面図（床面・掘方）…… 189
第193図　SH1685平面・断面図（床面・掘方）…… 189
第194図　SH2913平面・断面図（床面相当・掘方）、遺物実測図… 190
第195図　SH2800平面・断面図（床面）、遺物実測図…… 191
第196図　SH2800平面・断面図（掘方）…… 192
第197図　SH2492平面・断面図（掘方）…… 193
第198図　SH492平面・断面図（掘方）…… 194
第199図　貯蔵穴SK432遺物出土状況・遺物実測図…… 194
第200図　SH2707平面・断面図（掘方）…… 195
第201図　SH2895平面・断面図（床面・掘方）…… 196
第202図　SH1059平面・断面図（掘方）…… 197
第203図　SH70005・70006平面・断面図（床面・掘方）…… 198
第204図　SH70006遺物出土状況・遺物実測図…… 199
第205図　SH70005遺物実測図…… 200
第206図　SH70003平面・断面図（掘方）…… 201
第207図　SH70004平面・断面図（床面・掘方）…… 202
第208図　SH70004遺物出土状況・炉平面・断面図…… 203
第209図　SH70004遺物実測図１…… 204
第210図　SH70004遺物実測図２…… 205
第211図　SH70010平面・断面図（床面）…… 206
第212図　炉70379付近遺物出土状況・遺物実測図…… 207
第213図　貯蔵穴SK70380遺物出土状況・遺物実測図…… 208
第214図　SH70010遺物実測図…… 209
第215図　SH14209平面・断面図（掘方）…… 210
第216図　柱穴SP15374・15586平面、断面図…… 211
第217図　SH14389平面・断面図（掘方）、遺物実測図…… 212
第218図　SH15285平面・断面図（掘方）…… 213
第219図　炉15768平面・断面図、貯蔵穴SK15772遺物出土状況… 214
第220図　SH15285遺物実測図１…… 215
第221図　SH15285遺物実測図２…… 216
第222図　SH14549平面・断面図（掘方）、遺物実測図…… 217
第223図　SH15855平面・断面図（掘方）…… 218
第224図　SH15286平面・断面図（床面）、遺物実測図…… 219
第225図　SH15286平面・断面図（掘方）…… 220
第226図　SH15615平面・断面図（掘方）、遺物実測図…… 221
第227図　SH13021平面・断面図（生活面）…… 222
第228図　炉13021平面・断面図、遺物実測図…… 223
第229図　SH13021遺物実測図、
柱穴SP15314・15345遺物出土状況・遺物実測図…… 224
第230図　土坑SK15475遺物出土状況・遺物実測図…… 225
第231図　SH13021平面・断面図（掘方）…… 226
第232図　SH14235平面・断面図（床面・掘方）…… 227
第233図　SH14235遺物出土状況・遺物実測図…… 228
第234図　SH5162平面・断面図（掘方）…… 229
第235図　SH3271平面・断面図（床面・掘方）…… 230
第236図　SH3271遺物実測図…… 231
第237図　SH2508平面・断面図（掘方）…… 232
第238図　SH3032平面・断面図（床面・掘方）…… 233
第239図　柱穴SP3355遺物出土状況・遺物実測図…… 234
第240図　SH5391平面・断面図（掘方）…… 235
第241図　SH5392平面・断面図（掘方）…… 235
第242図　SH1303平面・断面図（床面・掘方）…… 236
第243図　SH1303遺物実測図…… 237
第244図　SH1316平面・断面図（床面相当・掘方）…… 238
第245図　SH1316遺物出土状況…… 239
第246図　Ａ区溝分布状況…… 243
第247図　SD70019遺物出土状況１…… 243
第248図　SD70020遺物出土状況２…… 244
第249図　SD70017・70019・70020出土遺物…… 245
第250図　Ｄ区溝分布状況１…… 247
第251図　Ｄ区溝分布状況２…… 248
第252図　SD302遺物出土状況…… 249
第253図　SD302等出土遺物１…… 250
第254図　SD302等出土遺物２…… 251
第255図　SD302等出土遺物３…… 252

挿表目次

第１表　竪穴式住居一覧表…… 240
第２表　出土土器一覧表…… 253
第３表　出土石器一覧表…… 257

図版目次

図版１　出土遺物１
図版２　出土遺物２
図版３　出土遺物３
図版４　出土遺物４
図版５　出土遺物５
図版６　出土遺物６
図版７　出土遺物７
図版８　出土遺物８
図版９　出土遺物９
図版10　出土遺物10
図版11　出土遺物11
図版12　出土遺物12
図版13　出土遺物13
図版14　出土遺物14
図版15　出土遺物15
図版16　出土遺物16
図版17　出土遺物17
図版18　出土遺物18
図版19　出土遺物19
図版20　出土遺物20
図版21　出土遺物21
図版22　出土遺物22

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

本報告は、駿河山遺跡のうち弥生時代以降に形成された遺構群について詳述するもので、遺跡を取り巻く環境は前時代と著しい差があるものとは捉えられない。遺跡の位置と地理的環境に付いては、平成17年度に刊行した『上ノ山遺跡』及びこの報告と同年度に刊行した『駿河山遺跡』縄文時代編に記してあるのでそちらを参照されたい。

第２節　歴史的環境と調査歴

第１節と同様に、大井川流域の縄文時代遺跡と駿河山遺跡周辺の遺跡分布については『駿河山遺跡』（縄文時代編）においてあらましを述べ分布図を掲載してあるのでそちらを参照されたい。

弥生時代の遺跡は、大井川の上・中流域に少なく下流側に多く営まれている。下流域では丘陵上弥生時代後期の遺跡が主体となるが、中流域では弥生時代前期の資料が得られており、この地域の特異性を感じさせる。なお、低湿地の遺跡は矢崎遺跡などから検出されているが、大井川流域ではいまだ明らかでない。大規模河川の影響をあまり受けない、谷合いの部分から水田開発が進展していったのだろうか。

古墳時代では、前期初頭の集落が駿河山遺跡から検出されているほかは、同時期以降の集落遺跡は明らかでない。流域には古墳時代前期から後期の横穴式石室墳に至るまで多数の古墳が構築されている。

ここでは地形的な特徴から、静岡市葵区小河内から川根本町千頭付近までを上流域、千頭付近から島田市神尾付近までを中流域、これより下流を下流域として弥生時代以降の遺跡について概観する。

１　弥生時代の遺跡

（１）上・中流域の遺跡

弥生時代の遺跡は上流部では見当たらない。

中流部に至ると、縄文時代後・晩期の遺跡が営まれた地域に継続している事例がある。大島遺跡では、弥生時代前期の条痕文系土器が出土し、東海地方西部の影響が及んでいたことが知られる。ここでは水田遺構が検出されていないので、生活自体はさほど変化していない可能性もあろう。また、下開戸遺跡からも前期・中期の土器が若干量出土している。

家山には天王山遺跡がある。ここからは隅丸方形の平面プランを持った後期の竪穴式住居が４軒検出されている。このうちの１軒からは有孔磨製石鏃が１点出土している。このほか、天王山遺跡の北側にある絵下原Ⅱ遺跡や対岸の身成原遺跡も弥生時代の遺跡として知られる。

（２）下流域の遺跡

大井川が志太平野に接する下流域では弥生時代の遺跡がより多く見うけられる。中期の遺物が出土した遺跡は上ノ山遺跡、東山遺跡とごく限られている。他は後期を主体とするもので、河岸段丘上にある遺跡（駿河山遺跡、宮ノ段遺跡、横岡城遺跡）と、現在の島田市北部の丘陵部にある遺跡（山王前遺跡など）、大井川を望む牧ノ原台地斜面の遺跡（天王町遺跡、下坂遺跡など）などがある。

島田市西部にあたる大井川西岸地域では、本報告の駿河山遺跡から弥生時代の遺物が出土することが以前から知られていた。昭和57年に行われた駿河山２号墳の調査に際しても、採集された弥生時代遺物が報告されている。今回の調査では調査区全域から200軒以上の後期後半の竪穴式住居などが検出され、当該期の中心的な集落のひとつであったことが判明している。この結果の一部については巻を改めて報

告する予定である。また、これより西側の丘陵縁辺に形成された河岸段丘上にある横岡城遺跡からも平成８年に茶畑の改植に伴って後期後半の壺が出土している。方形周溝墓とも考えられる溝が検出されていることからも、居住域と墓域が近接して造られている可能性を感じさせる。平野部北端に突出した低丘陵上にある宮ノ段遺跡も弥生時代の遺跡として知られている。

大代川沿いにある上ノ山遺跡はこれまで存在が明らかでなかったが、第二東名の工事に伴って発見・調査が行われ、すでに報告がなされている。中期後半の遺物が出土したことからも、周囲の前身的な集落であることが把握され注目される。

大井川東北岸地域では、北側に広がる丘陵部に遺跡が分布する。この丘陵は小河川による開析が及んだ急峻な地形をもつものが多いが、遺跡はその中でもより平坦あるいは緩斜面を構成する部分に占地しているようにみえる。この部分でより古く位置付けられるのは東光寺谷に沿った東山遺跡で、中期の資料が得られている。東山遺跡は茶畑の改植に伴って調査が行われ、１軒の竪穴式住居が検出されている。ここからは、農耕を示す石器が多数出土している。この周囲には岸遺跡・岸山遺跡・馬半遺跡・大谷池Ⅰ遺跡などが丘陵上に営まれている。

山王前遺跡は大津谷川に沿った台地上に営まれた遺跡で、昭和57～58年に調査が行われている。ここでは縄文時代から集落が営まれているが、弥生時代後期では24軒の竪穴式住居跡が検出されている。周囲の丘陵上にはスモウダン遺跡・落合西遺跡・鳥羽美遺跡・田ノ谷遺跡などいくつもの同時代の集落が形成されており、この場所が地域の中心的な集落のひとつであったことが判明している。大津谷川沿いの低湿地にある矢崎遺跡からは、弥生時代後期に遡る可能性がある水田遺構が検出されている。ここからは畔の芯材に転用された建築材も出土しており、周囲に存在した集落と密接な関係であったことを示唆している。一方で、ここから丘陵を遡った立合遺跡も弥生時代の遺跡として知られている。

島田市南部の牧ノ原台地上にも弥生時代の遺跡が散在する。西から天王町遺跡・下坂遺跡・風西遺跡・長軒谷遺跡・五輪塔遺跡・地蔵原遺跡・松ノ木原遺跡・南原遺跡などがこれにあたる。この部分には大井川の河岸段丘が発達し縄文時代の集落が広く営まれているが、弥生時代ではいずれも小範囲の遺跡となることが特徴的である。

2　古墳時代の遺跡

古墳時代の遺跡は古墳が中心となり、集落遺跡が確認された例は少ない。

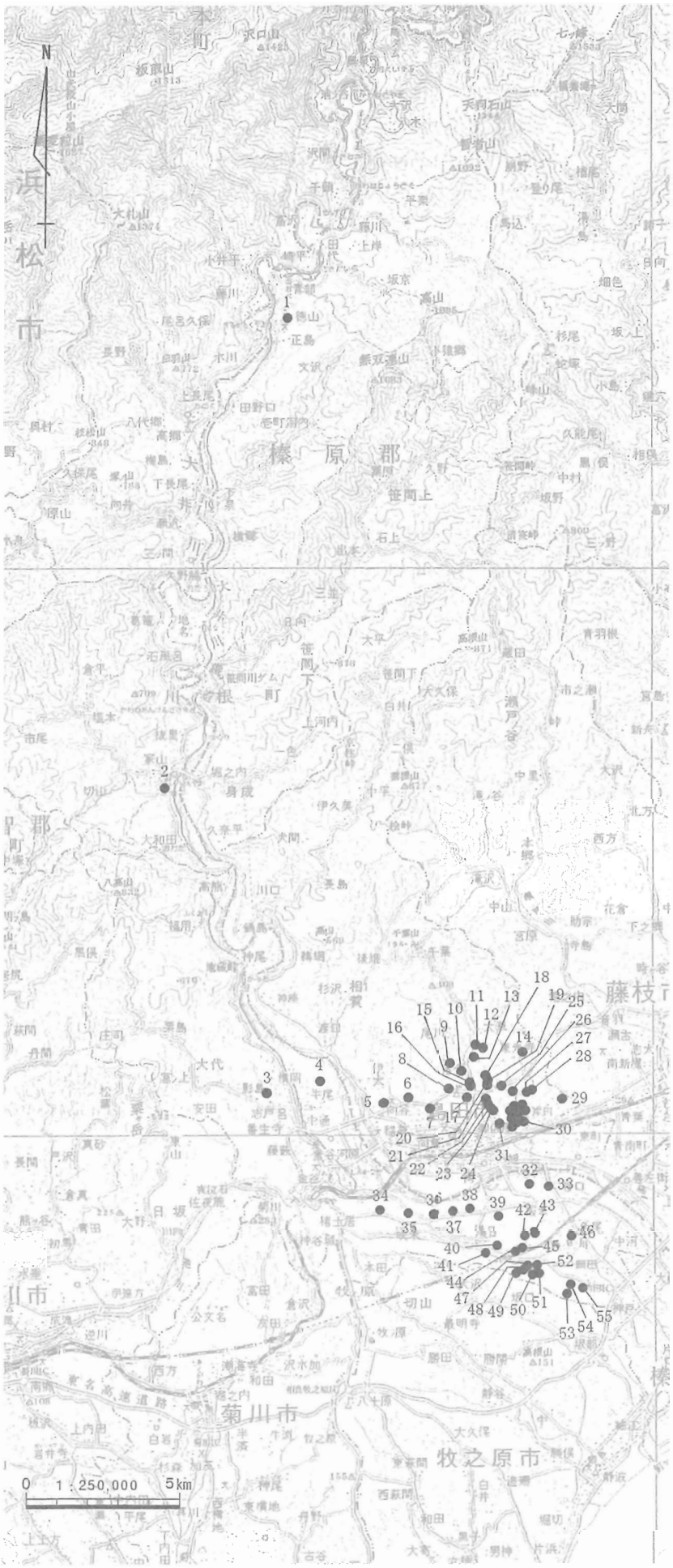
古墳は家山の天王山遺跡以北には今のところ確認されていない。天王山遺跡では古墳時代前期の方形周溝墓（天王山２号墳）が検出されている。今回駿河山遺跡で検出された方形周溝墓群と近似する時期のものであり興味深い。

前期の古墳は旗指古墳・鳥羽美古墳・城山古墳である。これらは島田市北部のごく狭い範囲にあり、いずれも栃山川の支流である大津谷川や伊太谷川が形成した比較的安定した平野部を望む高台に築かれている。城山古墳は昭和51年（1976）に茶畑の改植に伴って発掘調査が行われている。主体部は小口石を持つ木棺直葬で、土器・銅鏃・刀子・槍鉋・鉄剣などが副葬されていた。これらの他、把握されている古墳の多くは、古墳時代後期の横穴式石室を持つ群集墳である。

大井川中流域の家山にある天王山１号墳は、大正14年（1925）に家山小学校用地の造成のため行われていた土取り工事中に偶然発見された。横穴式石室内からは、大刀や６世紀半ば頃の須恵器が出土している。

大井川西岸地域では７個所15基が把握されている。群集墳は、宮ノ段古墳群と駿河山古墳群である。

宮ノ段古墳は少なくとも３基で構成される。１号墳は最も遺存状況がよく、大規模な石室が完存していることから、大井川西岸域を代表する豪族の墓であると考えられる。２号墳は茶畑の造成によりほぼ破壊され、３号墳も石室の一部が露出している。この古墳群は古くから注目されており、明治33年



1　森の段
2　天王山古墳
3　孫ェ門原古墳
4　駿河山古墳群
　　駿河山
5　天神原古墳群
6　伊太口古墳群
7　旗指古墳群
8　田ノ谷
9　落合西
10　鳥羽美
11　山王前
12　菅ヶ谷古墳群
13　スモウダン
14　大谷池Ⅰ
15　城山１号墳
16　供方１号墳
17　鵜田古墳群
18　波田３号墳
19　波田１号墳
20　波田２号墳
21　釣月寺古墳
22　竜雲寺２号墳
23　駒形古墳群
24　二俣古墳群
25　柳沢北古墳群
26　柳沢古墳群
27　雲明山古墳群
28　馬平古墳群
29　下山古墳群
30　東山北古墳群
　　東山中古墳群
　　東山南古墳群
　　姥ヶ山１号墳
　　姥ヶ山２号墳
　　金谷沢山古墳
　　西ノ谷山古墳
　　東照寺古窯
　　香橋寺古墳群
　　地蔵山古墳
31　法信寺古墳群
32　尼沢
33　谷口原古墳群
34　唐沢原古墳群
35　叶釘山古墳群
36　御小屋原古墳群
37　奥ノ沢古墳群
38　本村原古墳群
39　沼伏原古墳群
40　原ノ平
41　船山古墳
42　靈ヶ谷南古墳群
43　靈ヶ谷古墳群
44　沼伏
45　沼伏古墳
46　高根森古墳群
47　水掛渡A古墳群
48　水掛渡B古墳群
49　水掛渡C古墳群
50　9 TEE 古墳
51　六ッ塚古墳群
52　庚申塚古墳
53　稲荷山古墳
54　宮裏中原古墳群
55　南原古墳

第１図　大井川流域の弥生・古墳時代遺跡（国土地理院発行１／25万図に合成）

(1900) と平成９年 (1997) に１号墳の石室内の調査が行われ、須恵器、勾玉、耳環等が出土している。この古墳は現在島田市の指定史跡として保存されている。

駿河山古墳群は６基で構成され、丘陵の南側縁辺に築かれる。周囲は茶畑に造成されているので、現況では把握できない古墳が存在する可能性がある。このうち２号墳は昭和57年 (1982) に茶畑の改植に伴い発掘調査され、長さ6.7mにわたる横穴式石室が検出されている。一方、孫エ門原古墳や狐平古墳、伊之助原古墳など単独墳は、比較的高所の丘陵縁辺に築かれる傾向が窺える。

大井川東北岸地域では25個所110基が把握されている。これらは菅ヶ谷 (２基)・白岩寺 (10基)・法信寺 ((７基)・鵜田(15基)・二俣(５基)・駒形(４基)・竜雲寺(８基) など大津谷川流域にある古墳群と、これらの東にある馬平(２基)・柳沢北(２基以上)・柳沢(５基)・雲明山(５基)・姥ヶ山(２基)・東山北(１基以上)・東山中(７基)・東山南(23基)・香橘寺(４基) など東光寺谷川流域の古墳群に大別できる。いずれの場合も谷奥にある例は少なく、より広い谷底平野、あるいは志太平野の末端に面した位置に主に築かれている。下山古墳群は市内で最も多い16基で構成されている。東光寺谷のさらに東側の志太平野に面する位置にあり、隣接する岩田山古墳群 (藤枝市) と関係が深いものと思われる。

これら群集墳の他、大津谷では供方１号墳、波田１～３号墳、釣月寺古墳、三石山古墳、金谷沢山古墳、西ノ谷山古墳に見られるような単独で丘陵の稜線上に築かれる古墳が目立っている。

集落遺跡は調査例が少なく、様子が明らかでない。大井川東北岸の山王前遺跡、スモウダン遺跡、落合西遺跡、田ノ谷遺跡など、弥生時代の集落が位置する場所が継続的に使われているようである。

今回調査を行った駿河山遺跡からは、前期の竪穴式住居、方形周溝墓、区画溝等が検出されている。これらの一部については巻を改めて報告する。方形周溝墓は平坦部の西側縁辺と中央に連続して築かれている。竪穴式住居は、平坦部の半ばから東側縁辺にかけて造られており、外縁には区画溝が巡って居住域と墓域を分っている。全面からくまなく竪穴式住居が検出された弥生時代後期とはまったく異なる土地利用がなされており、両時代の間に何らかの断絶が強く感じられる。また、竪穴式住居からは、伊勢湾沿岸のＳ字甕と在地の甕が供伴する出土例が得られており、二つの文化の接点として興味深い。

３　古代～中世の遺跡

(１)　上・中流域の遺跡

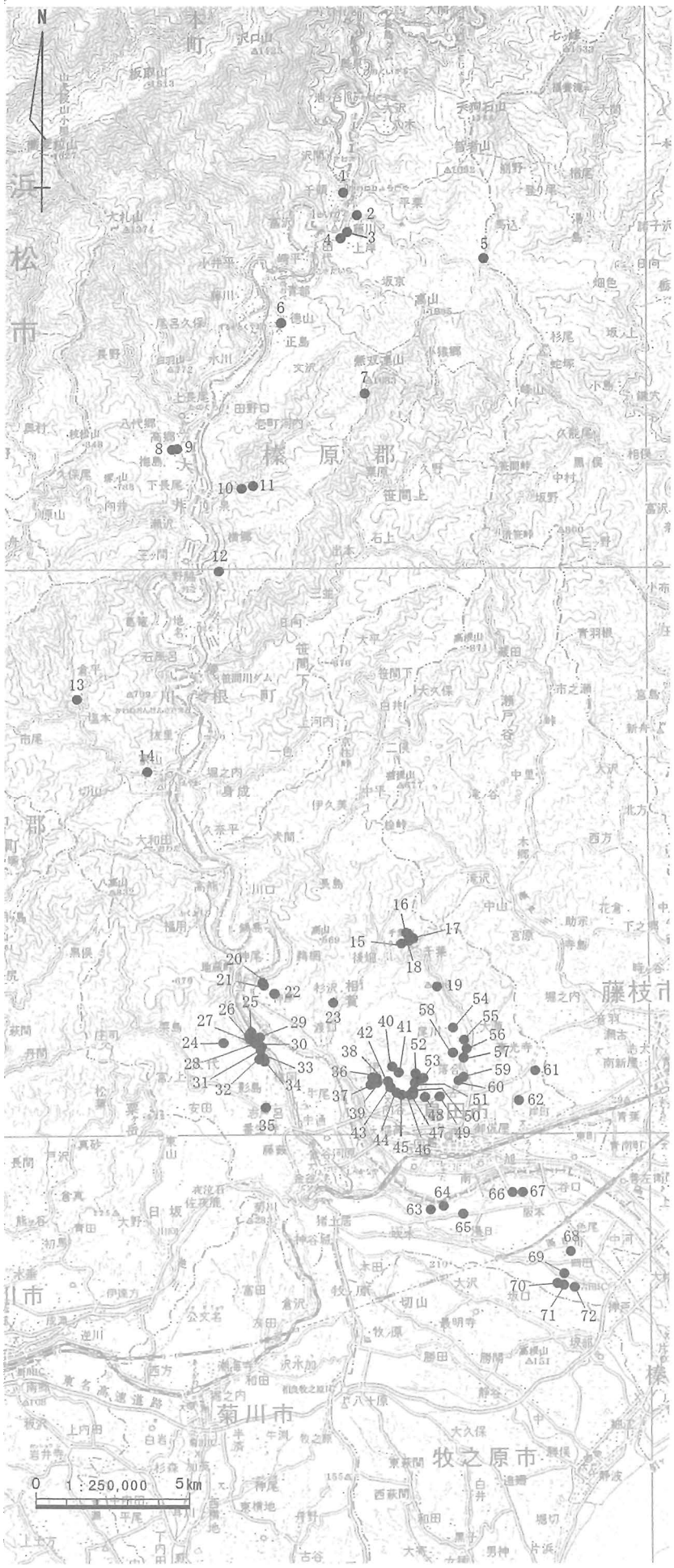
大井川上・中流域では古代の遺跡は希薄である。川根本町下開戸遺跡の調査では灰釉陶器が出土しているので、平安時代後期の集落が営まれていたことが推測されるが、その内容ははっきりしない。

(２) 下流域の遺跡

古代の国郡里制では、大井川西岸域は遠江国にあたる。往時の大井川は志太平野の北西端で平野部に放たれるが、ここから西へ大きく流れを変えて現在の栃山川あたり本流があったと考えられる。焼津市西部の上・下小杉から西側は近世に至るまで榛原郡に含まれることもこの名残と捉えられる。

島田市西部にあたる大井川西岸域では、上ノ山遺跡から奈良～平安時代の遺物と掘立柱建物等が、駿河山遺跡から平安時代後期の掘立柱建物、区画溝が検出された以外は判然としない。一方生産遺跡では、灰釉陶器窯が把握されている。釜谷西窯は11世紀代の窯で、静岡県教委が実施した窯業遺跡調査に伴って発掘調査が行われている。当該期の窯は引き続く山茶椀生産とともに、折戸53号窯式並行期から灰釉陶器生産が開始される大井川東岸の旗指窯と密接に関わるものと考えられる。周辺地域には同時期の窯が複数基所在するようであるが、判然としない。

平安時代のこの地域は、大井川西岸域を広く荘域とする質侶荘に含まれる。この荘園の来歴は、大治３年(1128) ８月の藤原永範寄進状に詳しく記されている。11世紀末には国守大江公資の私領であったものを藤原長家に寄進し本家とし、領家は孫娘が嫁した藤原成季、その子の永実、孫の永範に相伝されたと伝えられる。天永３年(1112)ごろ、本家職が永範に買い取られ、実質のすべてが公資の子孫に帰した



第２図　大井川流域の歴史時代遺跡（国土地理院発行１／25万図に合成）

1　郷平
2　覚仙屋敷
3　小長谷城
4　岸城
5　護応土城
6　土岐館
7　徳山城
8　天王原
9　天王原墳墓
10　徳山城
11　徳山城
12　塩郷砦
13　市城
14　経塚
15　千葉山展望台
16　千葉
17　智満寺
18　智満寺
19　大津山
20　神座A地点古窯
21　神座B地点古窯
22　大沢
23　相賀古窯
24　三ッ沢古窯
25　きつね沢古窯
26　ほろん沢古窯
27　北古窯
28　新兵衛古窯
29　ほろん沢東
30　土山原古窯
31　中古窯
32　南古窯
33　内藤古窯
34　釜谷西古窯
志戸呂城
35　上志戸呂古窯
36　中村Ⅰ
37　中村Ⅱ
38　中村地蔵尊前古窯
39　中村Ⅲ
40　東川根上
41　東川根Ⅰ古窯
42　東川根Ⅱ古窯
43　東川根Ⅲ古窯
44　伊太口古窯
45　旗指１地点古窯
46　旗指２地点古窯
47　旗指４地点古窯
48　旗指８地点古窯
49　菰ヶ谷古窯
50　瀞居寺前D地点古窯
51　瀞居寺前C地点古窯
52　静居寺裏古窯
53　大観堂
54　大津城
55　仲山経塚
56　管ヶ谷A地点
57　管ヶ谷B地点古窯
58　落合
59　居倉
60　野田城
61　岸
62　岸城
63　丸山Ⅰ古窯
64　丸山古窯
65　湯日城
66　尼沢
67　宮上
68　医王寺南
69　竹林寺
70　六千ヶ谷瓦窯
71　南原古窯
72　南原瓦窯

といわれる。史料には、永久２年(1114) 10月14日の源基俊請文案にみえる記載が初見である。永範は、荘域が遠江守源基俊に横領されそうになったため、大治３年に再び本家職を待賢門院御願寺円勝寺に寄進し、自らは領家職として保身を図ったのである。建久元年(1190)、駿河守護武田信義の子息板垣兼信が地頭として質侶荘に入るが、後白河法皇の反発によって兼信は更迭されたうえ、流罪となる。これ以降、地頭は補任されていない。円勝寺領としての質侶荘は、文永年間（1264～75）まで継続していたようであるが、その後は定かでない。

一方、島田市南部から焼津市西部にかけてのかつての榛原郡域には、初倉荘が営まれている。この荘園は、遠江守となった藤原氏によって11～12世紀に成立したものとされ、12世紀半ばには鳥羽皇后である美福門院を所有者とした皇室領荘園となる。美福門院の没後は、全国220ヶ所以上で構成されていたといわれる八条院（美福門院の息女）領のひとつとして経営されている。永仁７年（1299）には、実質的な経営権が亀山法皇から南禅寺に寄進され、以後およそ200年間は南禅寺領となる。「南禅寺寺領目録」には、江富郷・吉永郷・藤守郷・鮎川郷・川尻村・上泉村の地名が見えるので、現在の大井川から栃山川に囲まれた平野部一帯が寺領であったことが分かる。その後、16世紀初頭までに今川氏親の遠江侵攻に伴って押領され、荘園としての機能が失われたことが「南禅寺領所々目録」によって知られている。

初倉荘の荘域ではいくつかの遺跡が調査されている。焼津市にある藤守遺跡は低湿地に立地し、広大な面積を占めており、近接する小杉御厨の一部にかかるものと考えられる。ここでは11～12世紀代の大小の掘立柱建物が検出され、名主百姓を中心とした集落形成が進んでいたとみられる。また、屋敷が密接して設けられた場所が見えないことから、耕地の中に少数の建物による集落が点在する、現在とは異なった集落景観であったと考えられる。また、道路も検出されており、集落間の物流を促す社会資本が整備されていたことを暗示している。一方で丘陵上の遺跡も認められる。宮裏遺跡・高根森遺跡は牧ノ原台地の末端に立地する遺跡で奈良時代～平安時代の遺構が検出されている。平安時代の遺構は藤守遺跡よりもやや古く10世紀の竪穴式住居が検出されている。牧ノ原台地上にあるミョウガ原遺跡ではこれよりもやや新しい11世紀代に下がる可能性がある竪穴式住居が検出されており、近接して掘立柱の側柱建物が建てられている。これらの事象から考えると、11世紀代には、湿気の多い低湿地では掘立柱建物が住居としてもっぱら使われ、より湿気の少ない台地上では従来からの竪穴式住居が依然として用いられていたとみることもできる。かたや、竪穴式住居と掘立柱建物が共用される環境は、用途や身分序列の差が集落内に生じていたことを感じさせる。

島田市東部にあたる大井川北東岸域は、駿河国にあたる。志太平野の西部は大井川が乱流していたこともあり、遺跡として捉えられる部分は谷間を除けば希少である。平安期には谷間に大津御厨、稲葉荘などが認められる。

大津御厨は現在の島田市大草から野田付近の大津谷川に沿う平野部に営まれていたとみられる。鎌倉時代初頭には太皇大后宮御領となり、板垣兼信が地頭に任ぜられている。南北朝期には足利義満が今川泰範に相伝の所領として安堵していることは、今川氏の初期段階からの所領であったこととともに、御厨としての機能がすでに失われていたことを示している。大津谷川の改修工事に伴って調査が行われた石成遺跡・矢崎遺跡では、平安時代後期から鎌倉時代に至る遺構が検出されている。出土遺物の中には、地元で生産された灰釉陶器・山茶椀の他に、より西の地域からもたらされた滑石製の石鍋や瓦器碗が含まれており、集落の中心域あるいは有力者が近在していたことを窺わせる。また、平安時代のこの西側の丘陵に旗指古窯跡群が展開し、灰釉陶器を盛んに焼成している。旗指古窯跡の製品の集積地と考えられる居倉遺跡は大津谷側に沿う平野部の南端部にあることから、窯と大津御厨は何らかの関わりがあったとみられる。

第２章　調査の成果

第１節　竪穴式住居の概要

１　遺構・遺物の概要

遺構は、縄文時代中期～後期、弥生時代後期～古墳時代前期、平安時代のものが主体である。なかでも前２者に該当する遺構が濃厚である。ここでは、本書で報告する弥生時代後期～古墳時代前期の概要を述べる。

弥生時代後期～古墳時代前期の遺構は今回の調査範囲のほぼ全域から検出されている。特に竪穴式住居、掘立柱建物、方形周溝墓、溝などが集落を構成する主要な要素となっている。遺構の量は竪穴式住居が最も多く、当時の生活相を知る上で興味深い資料を提示している。ここでは本書で詳述する竪穴式住居を取り上げてみていきたい。

２　竪穴式住居の概要

（１）形態的な特徴

竪穴式住居はおよそ200軒を検出した。平面形状は大きく分けると楕円形・隅丸方形・方形の３形態が基本であり、従来から言われているようにこの順番で移り変わるものと考えられる。もちろん過渡期にあたるとみられる相互の中間形態と捉えられるものも存在する。特にSH3271では、同一掘方を利用した建て替えにより楕円形状から方形状に移行しているので、形の移り変わりは連続的な時間の経過に伴うものと理解できる。このように、集落全体を見ても営みは継続的であったと考えられる。それぞれの形態における規模は大小様々である。特に楕円形では規模の差が大きくなる傾向が強い。同位置での改修、建て替え、拡張が観察されるのもこの形態が多い。隅丸方形では一辺４m前後が目立ち、方形では一辺４m前後と７m前後の大小がある。方形の住居は小型のものには壁溝が明らかでない場合が多く、大形ではしっかり整えられる傾向がある。方形の住居の場合は規模の差が構築方法や室内の仕様の差を含むものであったと考えられる。また、円形の住居も少量ながら検出されている。円形の住居は主柱穴を伴わないものが多く、上屋構造が他と異なっていたと考えられる

（２）住居の分布

当該期の竪穴式住居は調査範囲のほぼ全域にわたって分布しているが、濃淡が偏る場所もみられる。調査区東端から12ライン付近までには比較的密であるが、I3～I5ラインにはほとんど住居が把握できない。I7ライン以西は再び密になるが、J22～L26・P24～R26グリッド付近にも住居が希薄となる。これら空白域が何であったのかを遺構から検証することは難しいが、森林や広場、畑など集団間の緩衝帯的な役割を伴っていたものと推測することができる。

住居の形態ごとにみても偏りは認められる。最も古い段階に想定される楕円形の住居は、東端から12ラインまで、M16グリッドからJ21グリッド、N25グリッドからV34グリッドと大きく分けて三つの分布が認められる。隅丸方形の住居も、この分布とほぼ同一である。

方形の住居に至ると異なる分布を示すようになる。方形の住居のうち小型の住居は東側ではI11グリッドに見える程度でごく少なく、I27～N32グリッド間に散在している。大型の住居となると調査区中部を大きく掘り割る溝SD50838以東に集中し、以西にはまったく見られなくなる。この方形の住居は、大きな社会的な変動をともなって駿河山集落に導入されているものと考えられる。

また、周囲に溝を伴う住居は調査区の東端にあたるＣ３～Ｅ４グリッド、西端に近いI27～M33グリッ

ドで検出されており、台地の内側には例がない。溝の様子がよく分かるのは後者の分布域である。基幹となるSD302は弧状に均等なカーブをもっており、円形に巡るのであれば直径100m以上に及ぶ可能性がある。この溝から分岐した近似する規模の溝がSH1313や5119の周囲を巡っている。SH2218に伴う溝は、やや離れているのでどのように連結するのか把握できていないが、少なくとも調査区内では15m程度の間隔を置いてSD302の左右に互い違いに造り替えられている様子がうかがえる。SD302が西側で２本が切り合うことや、SH5119が同様に溝で囲まれると思われるSH5678を切っていることからみると、この溝と住居は同一位置で複数回の改修が施されていることが分かる。

（３）住居内の設備

通常主柱穴は4本である。しかし、小型の住居では主柱穴が明らかでないものがあり、屋根の部材を直接地面に差し込んだテント状の構造であったのかもしれない。炉は中央からやや北～北西に寄った位置に設ける場合が多いが、床面が失われている住居では存在を把握できなかったものがある。炉は床面を掘り窪める場合と、粘土を貼って台状に盛り上げる場合がある。炉の上にはSH50802や51496、14703、14209、70010のように時折細長い礫が複数個据え置かれていることがある。SH52984や13021のように台石を置く例もある。これらの礫はいずれも焼けていないので、炉の使用を停止させる際に意図的に置かれたものと考えられる。なお、竈を備えるものは全く存在しない。

貯蔵穴を備える住居も複数棟確認されている。通常は炉の偏りとは反対方向にあたる南～南東の縁で、やや東に寄った位置にある。このことから考えると、住居の入り口は南～南東で貯蔵穴の西側に近接した位置にあったものと思われる。SH50800や3085、14703の貯蔵穴内には土器が据え置かれた状態で検出されている。内容物は残されていなかったが、元来は何らかの有用な有機物が入れられて保管されていたものと考えたい。

今回は壁溝が掘方を押える板壁を据えるための施設であったか否かの判断ができる事例を得ることはできなかった。壁溝の有無は住居ごとに差があるが、当時の掘方の深さや微妙な土質の差にも左右されたのであろうか。

（４）床と床下の構造

床下には馬蹄形の溝を掘りこんでいる例が多い。溝を掘削した後、残土を入れて平らにならした上に床を貼り込んでいる。床は黒色～黒褐色シルトや、これに遺跡のベースとなるⅣ層から掘り取ったとみられる橙色～橙褐色の粘土が混じった土を素材とする場合が多く、１～４㎝程度の厚さで貼り込んでいる。掘方埋土と質の差がみられる場合がほとんどなので、意図的に土を入れて敲き締めているものと考えた。しかし中には掘方の埋土の上面が硬化している例もある。生活することで踏み固められている可能性も考慮しなければならないだろう。

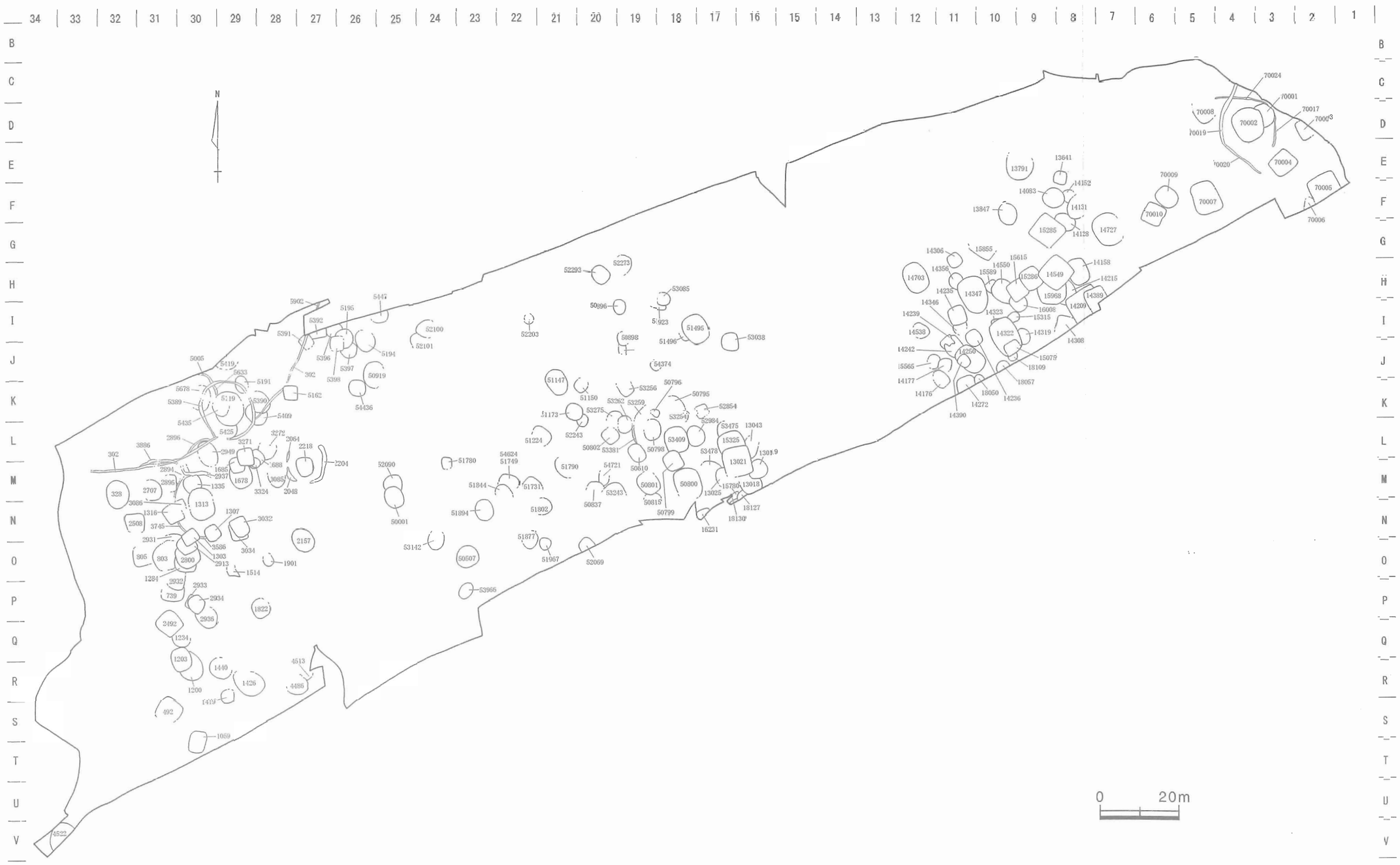
床の張られる範囲は、住居の中央部が主体であり、壁溝際あるいは掘方の立ち上がりに至る例も多くある。柱の周囲も柱の際まで詰めて張られる例と柱穴の掘方に相当する範囲に張られない例がある。また、充分な覆土で覆われているにもかかわらず床面が一部抜けてることがある。住居を放棄する際に床を意図的に壊している可能性も否定できない。

（５）上屋の構造

今回の調査では、有機質の建築材が残っている例がほとんどなく、出土品で上屋の構造を知ることはできない。焼失住居であるSH50799からは炭化した部材の一部が検出されている。直径10㎝以下の垂木と思われる部材の他、屋根材は葦や萱のような材料が用いられている。さらに、これらの上に貼り付いて焼けた粘土が認められた。屋根は有機質の部材で葺かれて、さらに土で覆われていた可能性が高い。

（６）家財道具

当時の住民が住居内に家財道具を残している例はさほど多くない。特に楕円形～隅丸方形の住居に



第３図　竪穴式住居分布状況

は遺物が残されている例は少ない。床面上や貯蔵穴内に土器が残されている例はSH70002・14703・50800・50610・5194・2157・3085・1313・5425・328・1203などである。しかし、この中で破損することなく保たれるのはSH1313の小型の壺62だけで、他はいずれも一部の破片が失われている。このことから、住居が放棄される際には不要な土器を破壊して、一部の破片を拾い出して全く異なる位置にわざわざ捨てているものと考えられる。

一方、大型の方形を呈する住居SH70004や70005、70010では完形近くまで復原できる土器が出土しており、住居が放棄される際の手順に明らかな差が生じている。特に70010では貯蔵穴脇に複数個体の甕が潰れて検出されているので、住居の片隅に片付けられていた土器を割ってその場に集積したものと捉えられる。炉の奥側に伏せられている例もSH14390に認められる。炉の上に据え置かれた状態で検出された甕はなく、使用後はかならず炉から外して片付けられていたものと考えられる。

土器は調査区を全般的にみると、弥生時代後期中葉から古墳時代前期中葉頃までのものが出土している。一時期が抜け落ちることもないので、集落はこの間継続して営まれていたと考えられる。

弥生時代後期中葉にあたる土器はSH50800（16）・53142（106）・492（131）などにみられる。SH5119出土47などもこれに近い時期であろう。いずれも楕円形の住居に伴うもので、細く絞られた頸部をもつ壺が特徴的である。弥生時代後期後半の土器は菊川式に類したもので、SH2157（38）・5119（46）・3339（86）・15315（99・100）・50802（125～127）などに比較的広汎にみられる。また、同時期の折り返し口縁をもつ無台の鉢は少量であるがSH70009（５）や2934（111）、1307（128）から出土している。この時期の甕は台付甕で、胴部が張り口唇部に刻みをもつものが該当する。高坏は見当たらない。

後期後葉の弥生土器から古式土師器にあたる遺物は14703（13）などがある。古墳時代前期の土器には外来の土器が目立ち始める。Ｓ字甕はSH14549（192・193・197）・70005（139）・70010（166）などにあり、高坏や在地の甕を伴って、当時の供伴関係を良く示している。このうちＢ類が192・193・197、Ｃ類が139、166となる。SH70005から出土している142は庄内式の叩き甕である。また、SH15475出土の219は静岡県東部地域に分布する大郭式の大形壺で、更に大きくなる大形壺12はこの前段階にあたるものとみられる。二重口縁をもつ壺（190）はSH15285から出土している。

石器については、台石が据え置かれたまま放置される例がSH50799・70010などにみられる。これらの例では敲石・磨石も近接して置かれている場合がある。一方、利器の存在は把握できない。SH50799の貯蔵穴SK53906出土の台石には砥石に用いたと思われる筋が幾条か残されており、SH14550出土の台石についても平行する擦痕が認められるので、住居内で道具を研いでいたことは確かであろう。住居内に残されなかった道具は退去する際に持ち出しているものと考えたい。

（７）焼失住居

SH15285や50799、14235、14390からは炭化材が検出されており、焼失したものと考えられる。焼失住居はそれぞれ離れた位置にあり、飛び火等によって複数軒が一度に燃え落ちた事例は見当たらない。当初、焼失住居には家財道具が残されていると考えたが思いの他遺物が少ない。不慮の失火でも家財道具を持ち出す余裕があったのだろうか。SH50799の貯蔵穴内には遺棄された遺物が含まれ、SH14390でも一部の失われた土器が床面上に置かれていた。これらの遺物が廃棄される流儀が他の住居にみられる事例と類似することは、これらの住居が、住居を放棄する行為のすでに執り行われた後の姿であるとも考えられる。何らかの要件で廃棄する際に焼き払っている可能性がある。

第２節　竪穴式住居・住居を囲む溝と出土遺物

１　竪穴式住居と出土遺物

竪穴式住居は他の弥生時代～古墳時代遺構と同様にⅡ～Ⅲ層上で検出している。住居の掘方の深さは一様ではないので、検出段階の立体的な位置も同一ではない。床面あるいは床面上に設けられた施設である炉が明らかな場合はこの位置で精査を行い、記録にとどめている。一方で床面が失われ掘方の埋土があらわになった例も少なくない。この場合は掘方下位まで掘削した段階を記録している。また、住居内の土の組成は、床上の自然堆積した可能性のある部分を床上覆土（あるいは単に覆土）、床下の人為的に埋められた部分を掘方埋土（あるいは単に埋土）と床を境に調査実施時から表記を使い分けている。

（１）楕円形を呈する竪穴式住居

SH70002（第４～６図）

【遺構】Ｄ３～Ｅ４グリッドで検出された周囲を溝で囲まれる住居である。一部を確認調査トレンチT1-1によって切られるほか、耕作等の撹乱が部分的に及ぶ。検出面では床面を明確にとらえることはできなかった。便宜的に炉が検出できた高さで一旦精査し、この部分を床面相当として記録にとどめた。

炉は住居の中央若干奥側に設けられる。長軸70cm、短軸50cmの楕円形を呈し、上位に礫を二つ置いている。これらの礫は焼けていないので、炉の使用を中止する際に意図的に置かれたものと理解できる。

壁溝は掘方まで除去した段階で住居の西・南・南東側縁辺に幅15～25cm、深さ６cm前後で確認することができた。本来は住居の縁辺を全周していた可能性がある。

貯蔵穴は南側縁辺にSK70668が設けられている。本来は一辺0.9m前後の正方形状であったとみられるが、検出段階では北側と東側に不定形の張り出しが認められた。深さは35cmで、下端は長辺58cm、短辺47cmの長方形に整えられる。

住居の掘方は底面が平らに整えられ、西側と東側に溝が設けられる。西側の溝は幅60cm前後、深さ７cmで、掘方の縁辺に沿って掘られている。東側の溝は幅0.7～1.4mと北側の幅が広いが、深さは10cm前後と均一である。柱の掘方は３か所で明らかになった。直径35～60cmの円形あるいは楕円形をなす。北側の柱穴はバランスが悪いので、誤認している可能性がある。

【遺物】貯蔵穴と炉の直上から土器と石製品が出土している。

１は壺の底部～体部片である。体部過半でくの字形に折れて体部を垂直に立ち上げる。外面はナデと板ナデによって平滑に整えられる。２は小型の甕の体部～口縁部である。台部は貯蔵穴に遺棄される前に割り取られおり、出土していない。いずれも貯蔵穴の内部に捨てられた状態で出土している。

３は磨石である。平坦面と両側面が使用により滑らかに擦り減っている。４は磨石と敲石の兼用品で、平坦面と両側縁が滑らかに擦り減る。一側縁は縁辺を敲石に使用した際に大きく破損している。

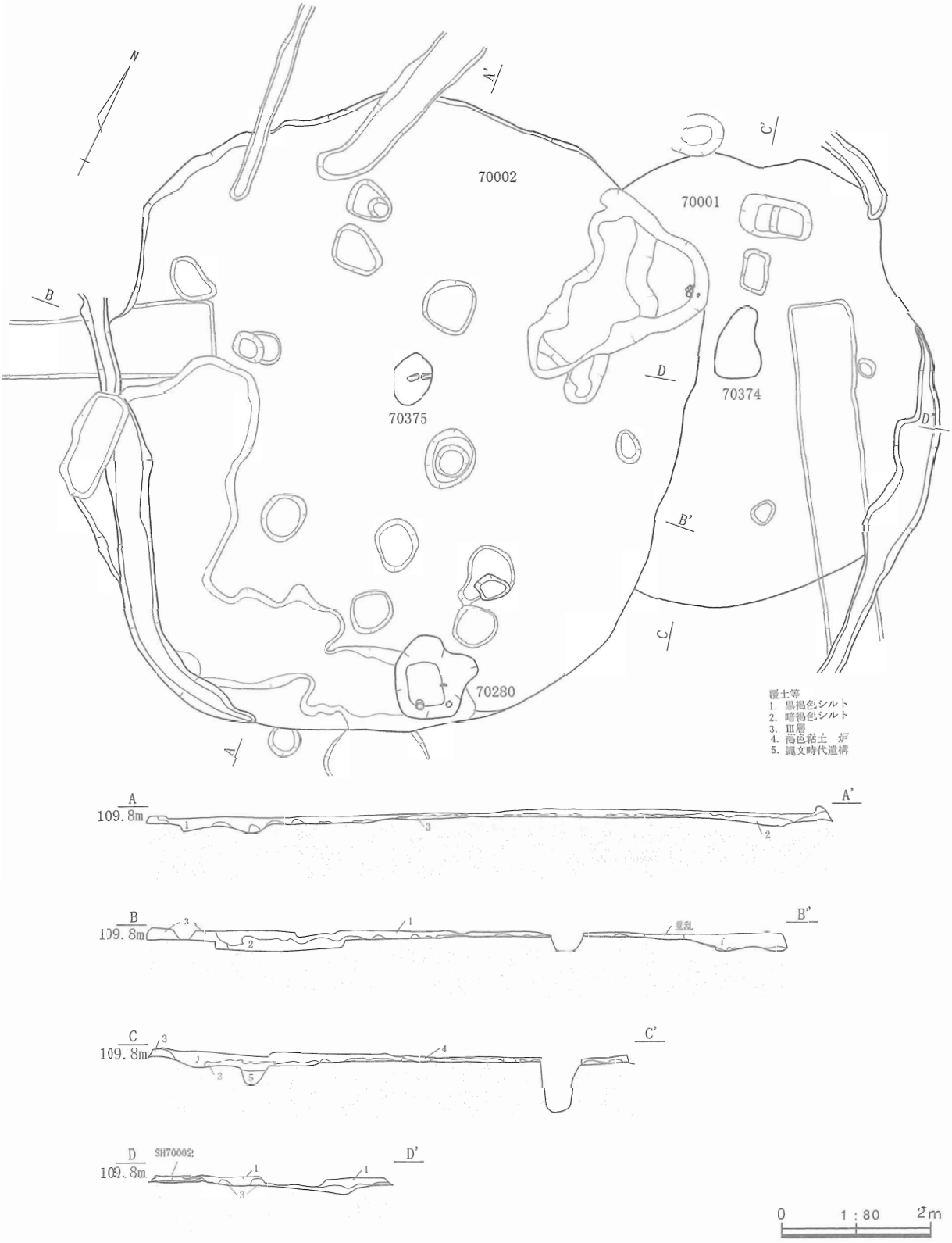
SH70001（第４～６図）

【遺構】Ｄ３～Ｄ４グリッドで検出された。西側の2/5程度をSH70002によって切られるほか、東側の一部を確認調査トレンチT-２によって破壊される。SH70002同様、便宜的に炉が検出できた高さで一旦精査し、この部分を床面相当として記録にとどめた。

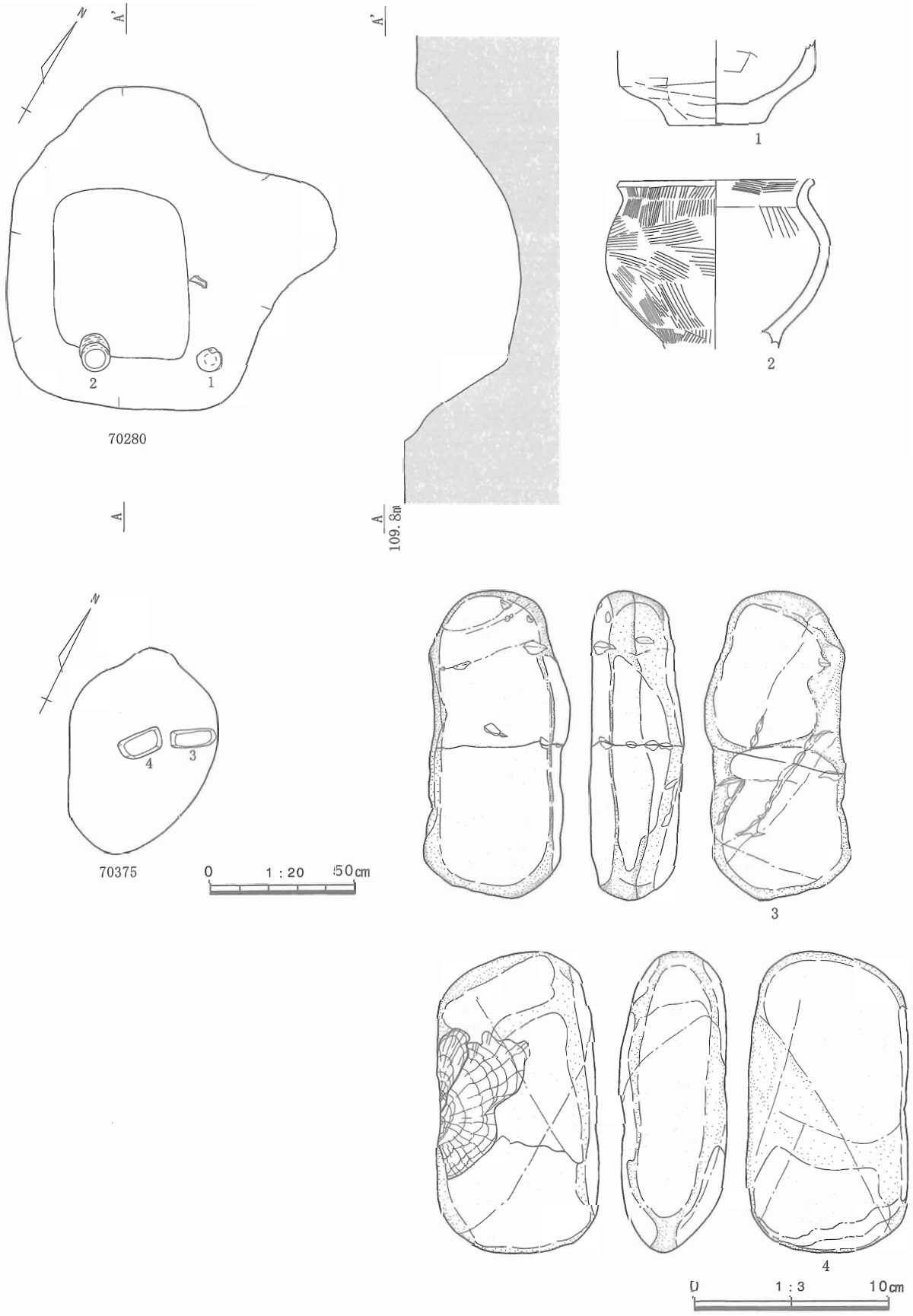
炉は住居の中央若干奥側に設けられる。長軸95cm、短軸60cm前後の不定形を呈する。

住居の掘方は長軸5.5m、短軸4.2m程度の方形状を呈し、床面相当の形状とは異なっている。底面は平坦であるが、東側に溝をもつ。溝は幅1.1～2.1mで南に行くに従って幅が広く、上端も不定形状となる。深さは５cm前後である。柱の掘方は明確に把握することができなかった。

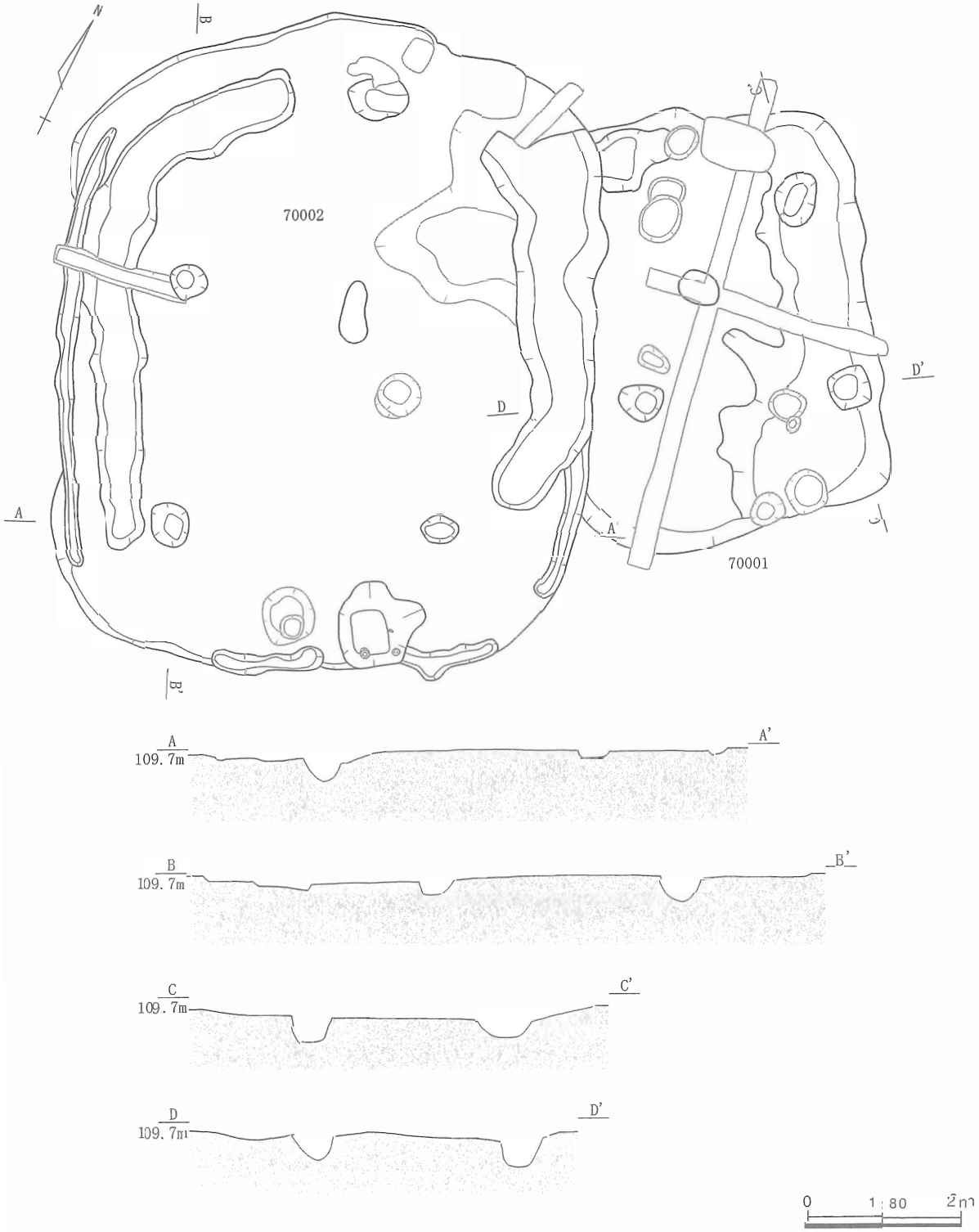
SH70001・70002は楕円形に含めたが、掘方の形状は隅丸方形、あるいは方形に近いものである。ここでは、相互の過渡的な時期にあたるものと理解しておきたい。



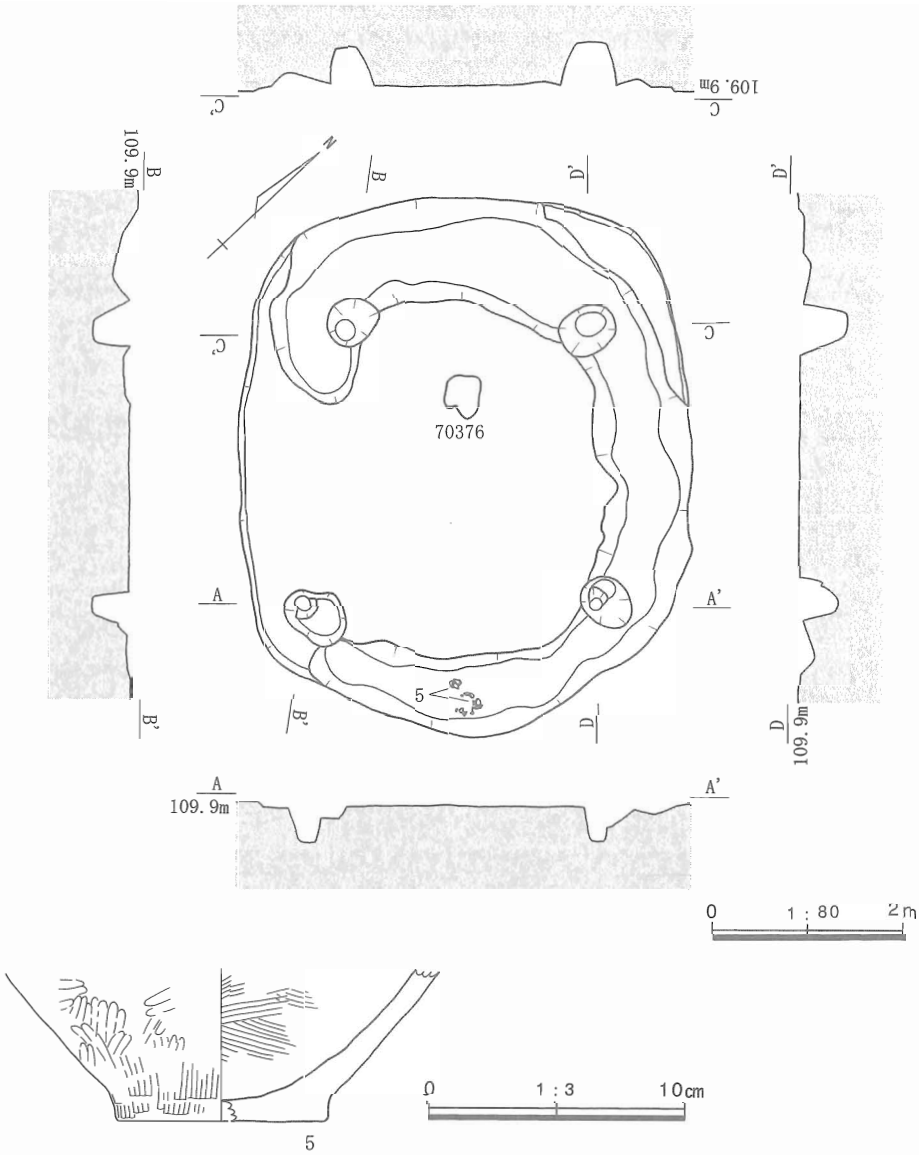
第４図　SH70002・70001平面・断面図（床面相当）



第５図　貯蔵穴SK70280、炉70668遺物出土状況・遺物実測図



第６図　SH70002・70001平面・断面図（掘方）



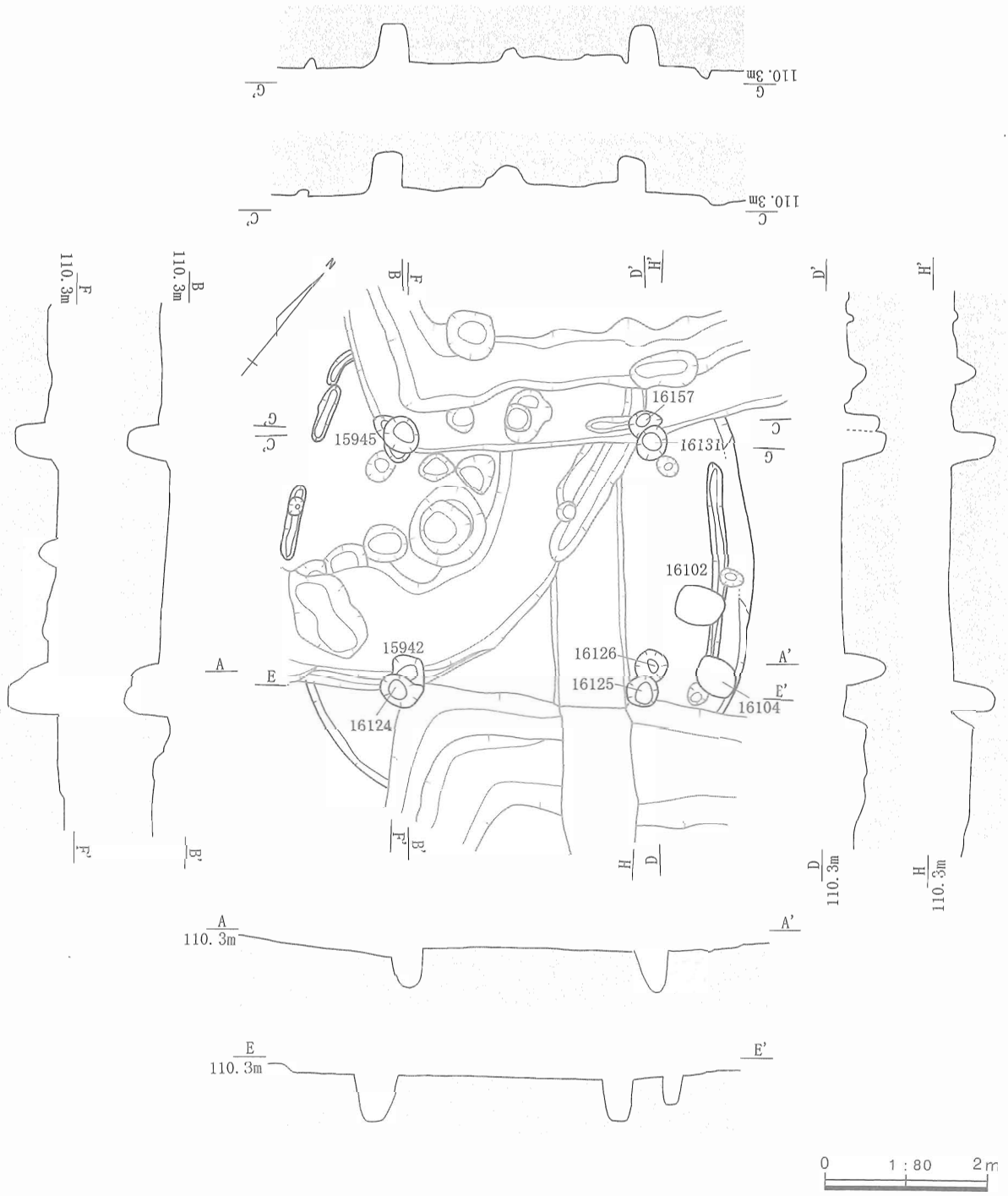
第７図　SH70009平面・断面図（掘方）

SH70009（第７図）

【遺構】Ｆ５～Ｆ６グリッドで検出された。検出面が床面以下となったので掘方の形状のみを把握している。床面に設けられた施設で存在が把握できるのは炉である。住居の中央やや奥側に35～40cm程度の直径をもつ不定形の熱染みが観察されている。また、貯蔵穴は設けられていない。

住居の掘方は底面をほぼ平らに保ち、壁沿いから50cmほど離れた内側に溝を巡らせる。この溝は幅0.7～1.2m、深さが最大で20cmほどで、南西側に開く馬蹄形に掘られている。柱の掘方はこの溝の内径に沿う位置に掘られている。長手方向は芯々で2.9～３m、短手方向で2.6～３mと入口側の間隔がやや広くとられている。

【遺物】住居掘方の溝内から土器が出土している。住居の床下に当たるので、住居の構築時に混入した、あるいは破片が埋め込まれたものと考えられる。５は壺の底部～体部片である。外面は、底部付近に縦方向のハケ調整が施される。やや上がった位置にはこの後に縦方向、上位では横方向のミガキが加えられ平滑に整えられる。内面は横方向のハケ調整が観察される。

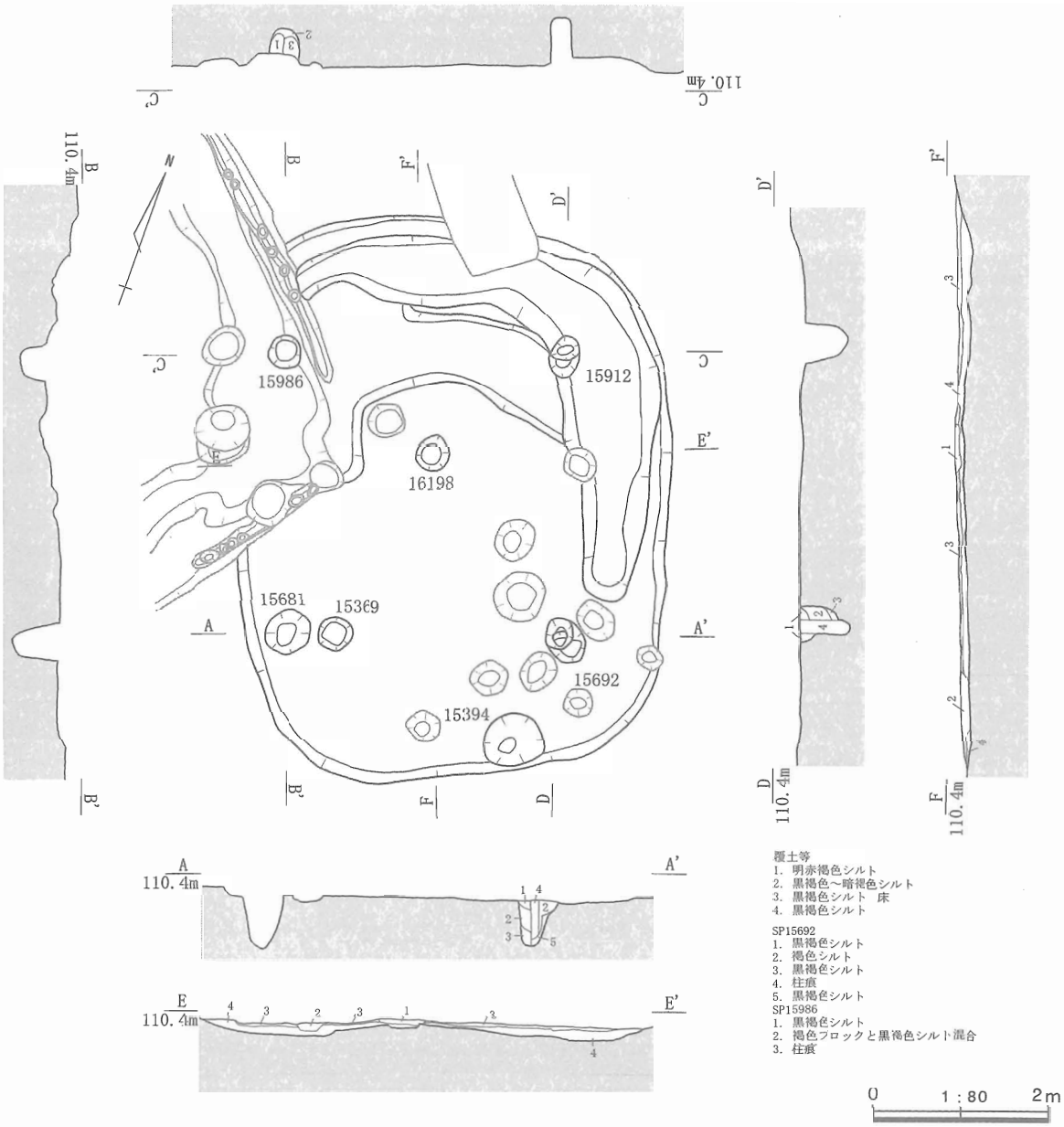


第８図　SH14215平面・断面図（掘方）

SH14215（第８図）

【遺構】Ｈ８～Ｈ９グリッドで検出された。北側をSH14549、西側をSH14968、南側をSH14209に切られ、ほとんどの部分で壊されている。検出面は掘方の底面直上である。したがって床面は失われていた。

壁溝は住居の東側・西側で一部が検出された。幅15～20cm、深さは５cm前後である。柱穴は７か所で確認された。いずれも直径40cm前後の円形で、45～55cmの深さがある。南側のSP15942・16124、SP16126・16125は南に挿げ替えられているものと考えられる。北西側の16157・16131も同様に、西側に挿げ替えられたのだろう。15945に切り合う小穴は浅く、抜き取り穴の可能性がある。



第９図　SH14158平面・断面図（掘方）

SH14158（第９図）

【遺構】Ｇ８～Ｈ８グリッドで検出された。西側をSH14549、北側を確認調査トレンチＴ５-1に切られる。床面・炉は断面では観察されたが面的に把握することはできなかった。黒褐色シルトを素材として利用している。炉の掘方は長軸40cm、短軸35cm、深さは掘方底面から７cm前後の楕円形状をなす。

住居の掘方は底面を平らに整え、北側に溝を設ける。溝は二重に掘られているようにみえる。南寄りでは幅0.8～1.45m、深さ12～14cmで、西側で幅広になる。北寄りの溝は住居掘方の立ち上がりに沿ってU字形に掘られる。幅0.35～1.15mで、深さは10cm前後である。これらは切り合いから北寄りがより新しい。住居の拡張による掘り直しの可能性もあるが、伴う柱穴が明らかでない。柱の掘方は４か所で検出されている。直径31～50cm、深さ53～63cmで、南側のSP15681がやや大きい。SP15692には南側に柱の抜き取り穴と考えられる浅い小穴を伴う。柱穴の間隔は、長手側に芯々で3.3m、短手側に同様に3.1～3.15mとほぼ揃っている。

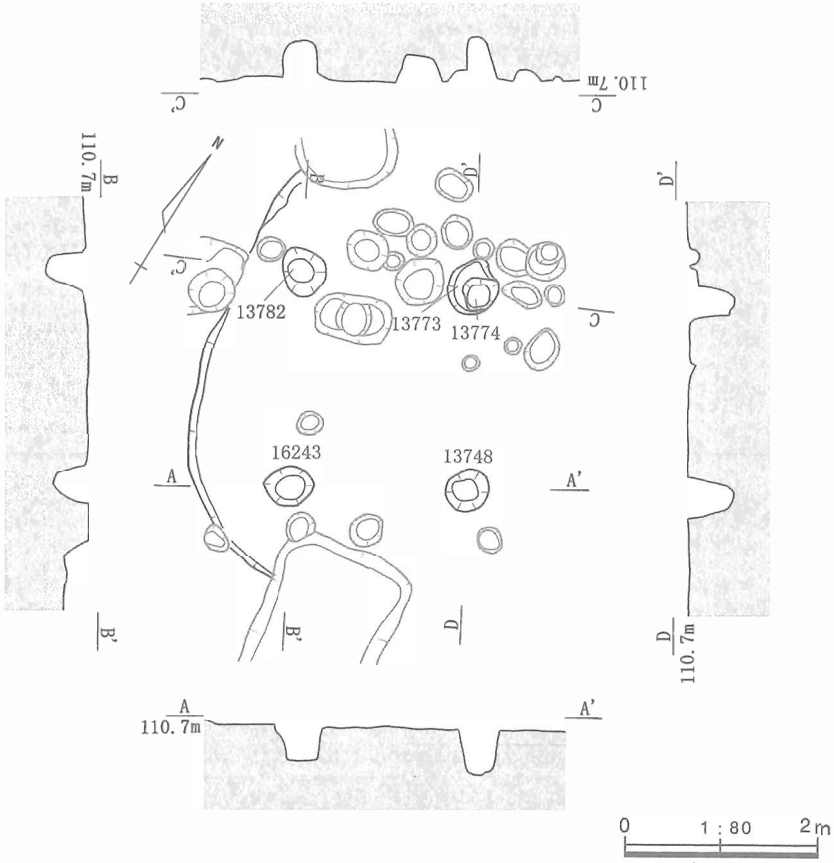
第10図　SH15968平面・断面図（掘方）

SH15968（第10図）

【遺構】Ｈ８～Ｉ９グリッドで検出された。北側をSH15286・14548により壊され、床面は失われていた。住居の掘方は底面を平らに整え、溝を伴う。溝は0.8～1.5m、深さ10cm前後で南側に馬蹄形に巡る。壁溝は幅30cm前後、深さ10cm程で、住居の北～東に検出された。柱穴は４か所で確認された。直径１m前後、深さ80cmほどと大きく、SP15944の断面には直径15cm前後の柱痕を確認した。柱穴の間隔は、長手側に芯々で4.3～4.4m、短手側に同様に４mとほぼ揃っている。土坑SK15523は貯蔵穴であろう。

SH13791（第11図）

【遺構】Ｅ９～Ｅ10グリッドで検出された。南側の一部を耕作による撹乱に切られるほか、時期の判然としない小穴群が北側に密集している。住居の掘方底面が検出面となったため、西側の立ち上がりが一部明らかになった以外は住居の形状は定かでない。住居の掘方底面は平坦で、溝は設けられていない。また、炉や貯蔵穴も把握できない。柱穴の掘方は直径35～45cmの円形状で４か所に検出された。柱穴SP13774は柱の抜き取り穴と思われる小土坑を伴う。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.1～2.3m、短手方向に同様に1.9mとなる。



第11図　SH13791平面・断面図（掘方）

SH14550（第12～13図）

【遺構】H10～１10グリッドで検出された。南側のおよそ1/5をSH15615・16008によって壊されるほか、耕作等による撹乱が複数入っている。

床面は住居の中央部分に残存している。周囲は検出面が低くなったために検出できなかったので、元来は更に広く張られていた可能性が高い。黒褐色シルトを素材としており、硬く敲き締められている。

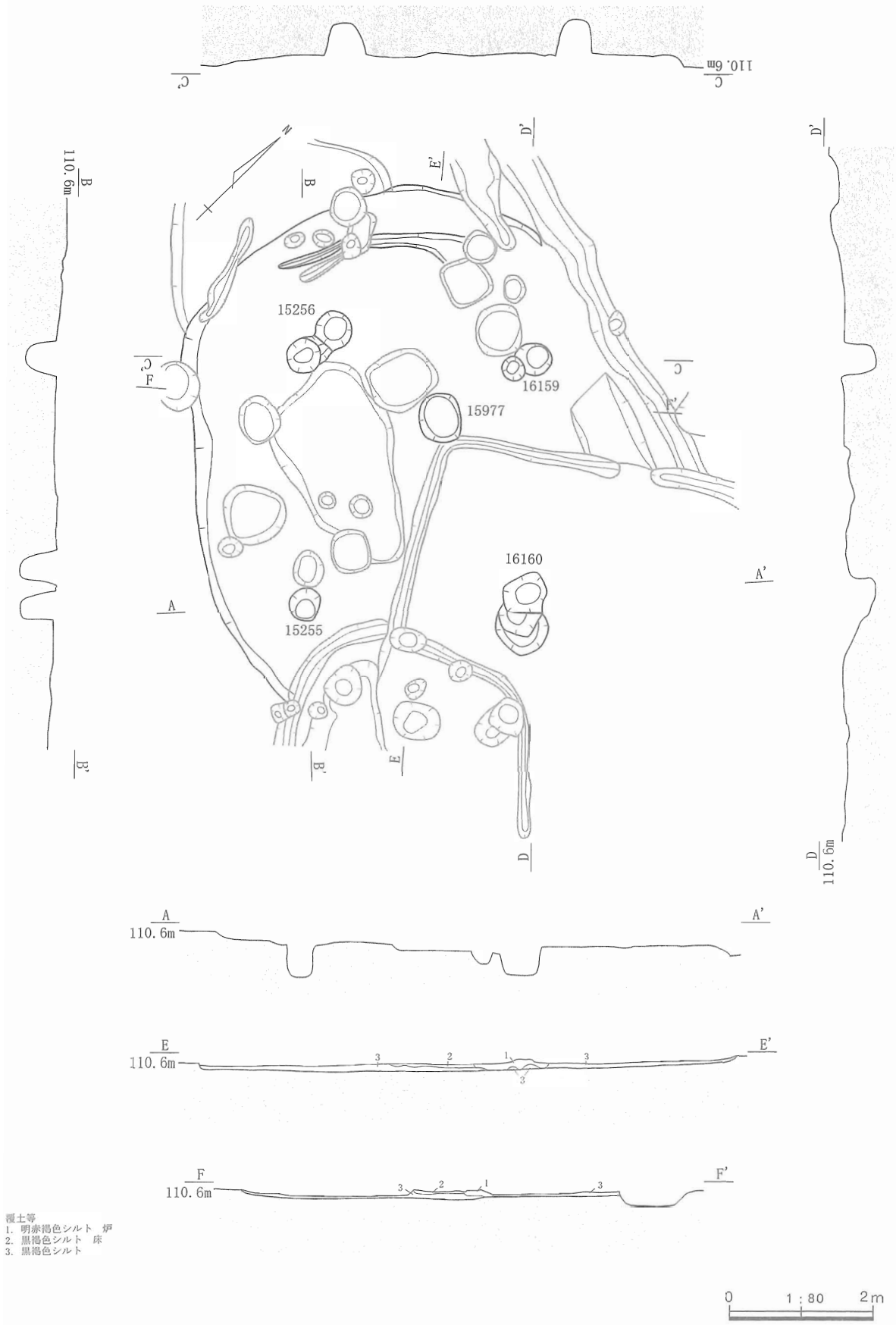
炉は中央やや奥側に検出された。床面を切るかたちで長軸75cm、短軸56cm、深さ10cm程度の楕円形の掘方をもつ。全体的に焼けて明褐色を呈するが下位に観察できる黒褐色シルトが素材として充填されていたものと考えられる。

貯蔵穴は確認できず、元来設けられていないものと考えられる。

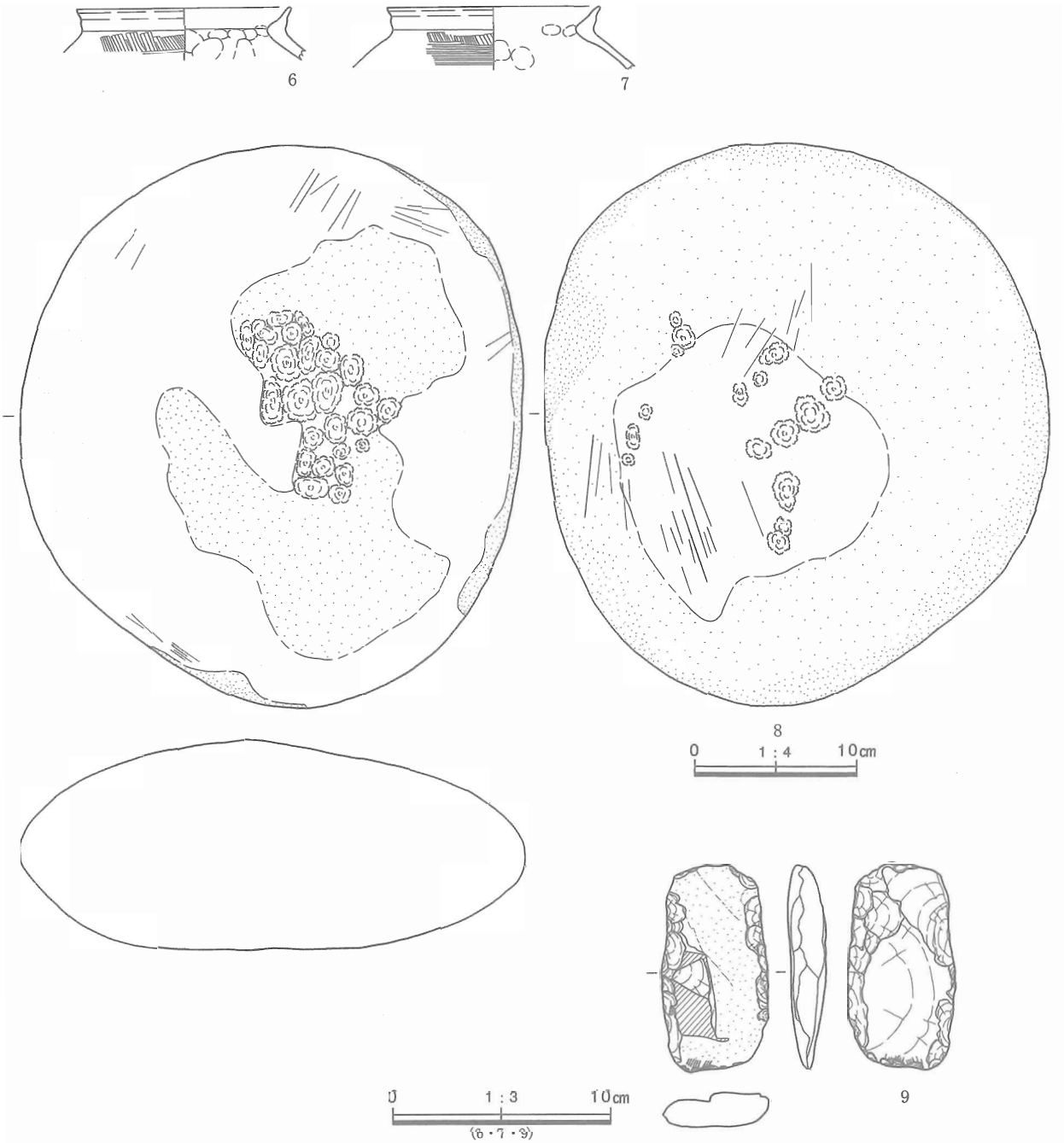
住居の掘方は、底面を平らに整えている。北側に幅10～45cm、深さ２cm前後のごく浅い溝がある。この溝はあまりに小規模で、壁溝の残存部と考えたい。住居の立ち上がりと間隔があるので、ここからさらに北側に拡張されているとみられる。柱穴の掘方は４か所で検出されている。SP15256・16030・16159・15255は直径44～47cm、深さ43～48cmと近似した規模を持つ。SP15256は北側にほぼ同規模の柱穴があり、柱の挿げ替えがより外側に行われていたとみられる。これは住居の拡張に伴うものの可能性がある。SP16159は南側をより浅い小穴に切られているので、柱は掘り抜かれているのだろう。SP15255は抜き取り穴を伴わない。SP16160は直径58cmの不定形で、深さは34cmである。南東側に間口が似通った小穴が複数切り合う。柱の挿げ替えや抜き取りが行われているのだろうか。

【遺物】遺物は土器・石器・石製品が出土している。

６・７はS字口縁をもつ台付甕の体部上半～口縁部片である。口径がほぼ同じなので同一個体の可能

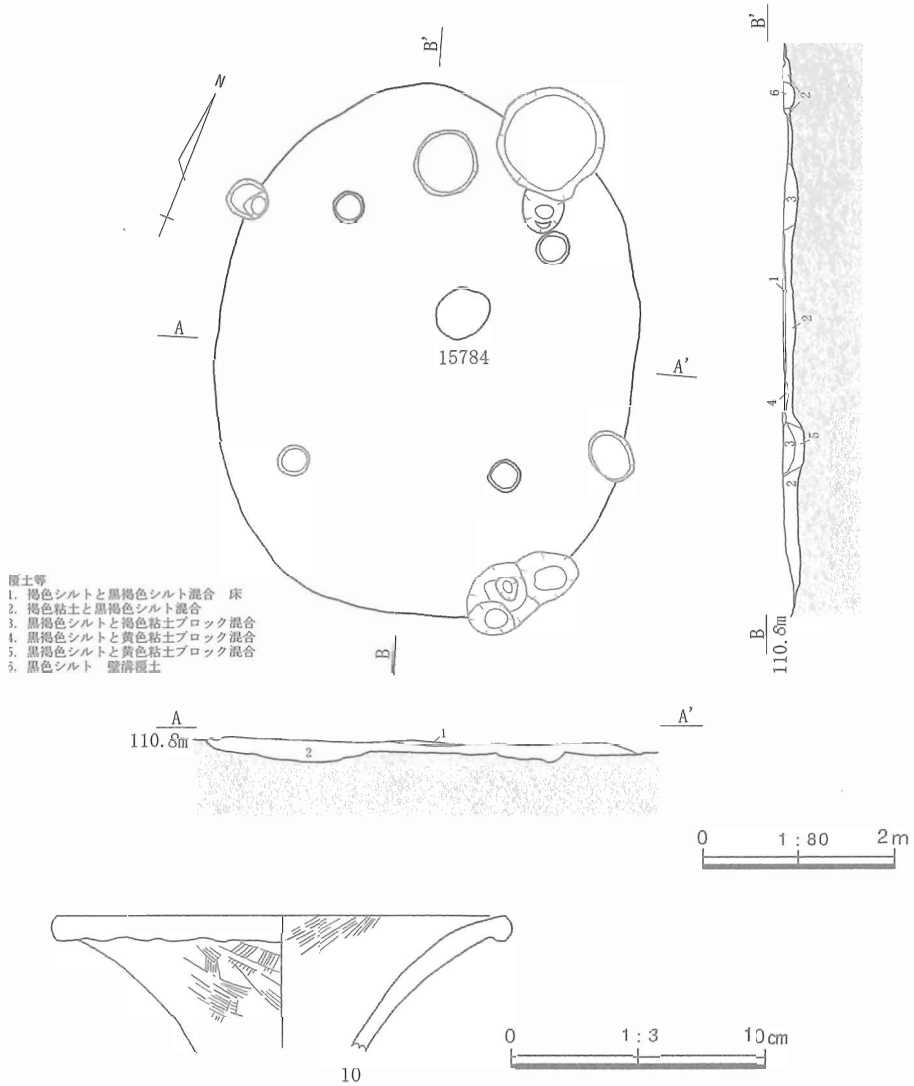


第12図　SH14550平面・断面図（掘方）



第13図　SH14550出土遺物実測図

性があるが、接合しなかったので便宜的に別に扱った。外面の体部上半は縦方向のハケの後、その下に横方向のハケ調整を加える。内面は指頭痕が多く観察される。口縁部は横方向にナデ調整され、平滑に整えられる。6が床上の覆土、7が床下の埋土から出土しているが、7は撹乱の影響等で出土層位が狂っているのだろう。隣接するSH15615の遺物が混入していると考えられる。8は台石であり、床直上から出土している。平坦面は敲き、磨り両用となる。片面の外縁部が広く摩耗して滑らかになっており細かな擦痕が複数個所で認められるので、砥石としても用いられていたとみられる。9は短冊形の打製石斧である。表面には原礫面を広く残し、先端部は使用によるものとみられる細かな擦痕が観察される。縄文時代の遺物であり、床下埋土に混入したものである。



第14図　SH13847平面・断面図（床面）

SH13847（第14～15図）

【遺構】F9～G10グリッドで検出された。耕作等による攪乱を一部に受けているが、遺存状況は比較的良好であった。検出面が床面直上となったので壁の立ち上がりは明らかでない。

床は主に住居中央部に認められた。検出段階で周囲が若干下がってしまったので、元来はほぼ全面にわたって張られていたものと推測される。褐色シルトと黒褐色シルトが混合したものを材料としており、２cm内外の厚みで硬く敲き締められている。床面上には脆弱な覆土による直径30～35cmの円形のプランが３か所観察された。これらは柱痕跡の一部と考えられる。

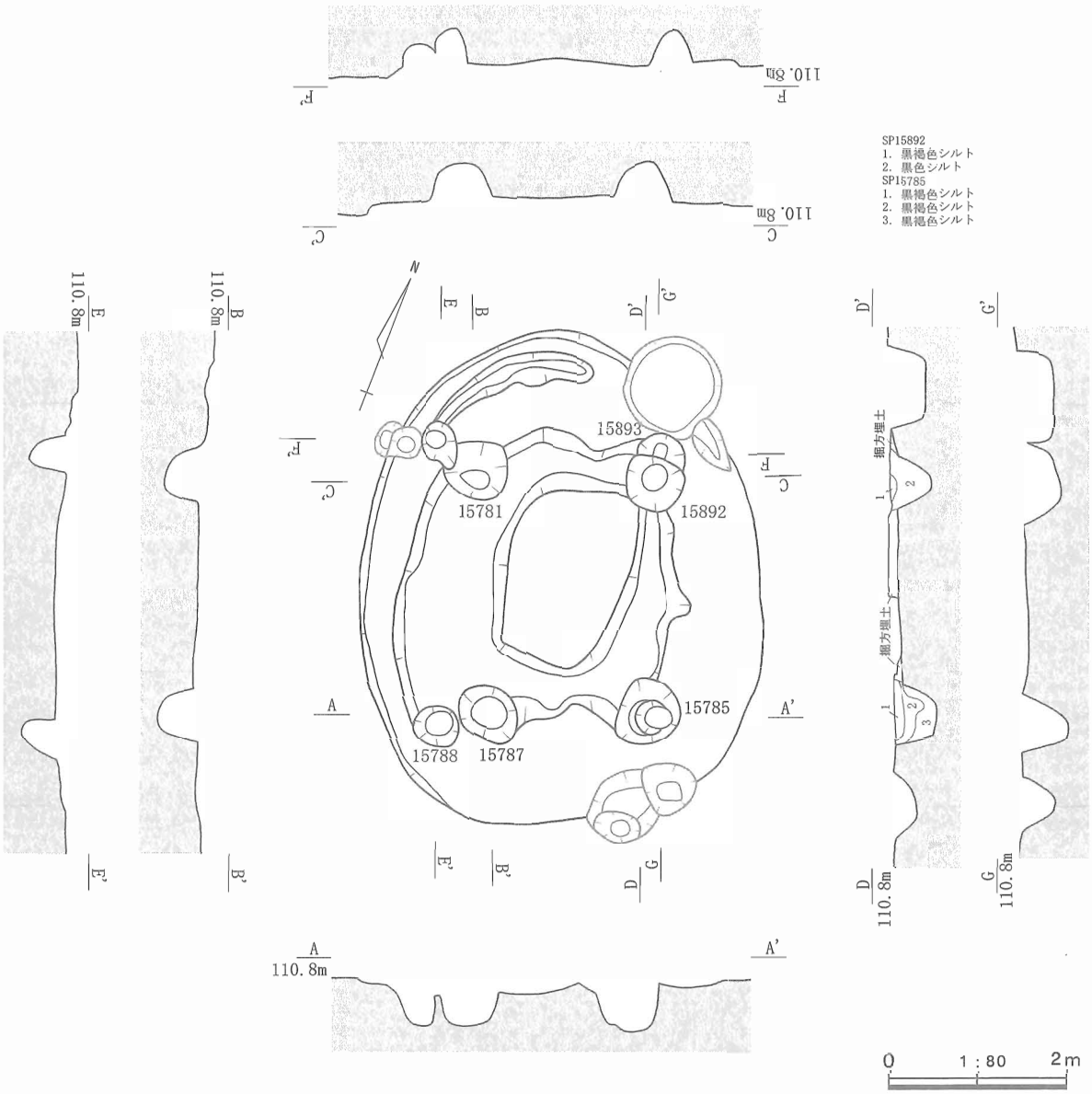
炉は中央部やや北寄りで検出された。直径50cm前後の円形を呈し、炉の上面は失われて中位以下が焼け締まった状態にあった。

壁溝は認められず、貯蔵穴も設けられていない。

住居の掘方は、底面が平らに整えられ、内側に溝が掘られる。溝は住居掘方の下端から30～95cm内側に全周するかたちで掘られており、幅は0.34～1.27mと西側が著しく広く、東側の北寄りで極端に狭くなる。深さは３～10cmで、やはり幅の広い部分がより深く掘られる傾向がある。この溝とは別に、北西側の掘方下端に沿うように幅15～40cm、深さ４～６cmの小規模な溝が設けられる。柱の位置関係から、構築段階の壁溝である可能性がある。

柱の掘方は、５か所で検出された。SP15893と15892など切り合う位置関係にあるので、当初は柱の抜き取り穴が掘られているとみたが、SP15787と15788のように切り合わないものも認められるので、それぞれはすべて柱穴であると考えた。したがって、住居は南東側にあるSP15785だけを従来の位置のまま置きながら、３か所の柱をすげ替えて北西側に若干量の拡張を伴って建て替えられたものと考えられる。当初の柱の間隔は長手方向には芯々で2.7m、短手方向で２m、建て替え後の柱の間隔は同様に３～3.2m、2.5mとなり、柱で囲まれる空間だけをみればおよそ2.5㎡広くなっている。

【遺物】床面上の覆土から土器が出土している。10は壺の頸部～口縁部片である。全体的に風化する。



第15図　SH13847平面・断面図（掘方）

外面は頸部付近では斜め方向、口縁部付近は縦方向のハケ調整によって整えられる。内面は口縁部に斜め方向のハケ調整が認められる。口縁部は折り返し口縁となり、外面をやや丸く収めている。

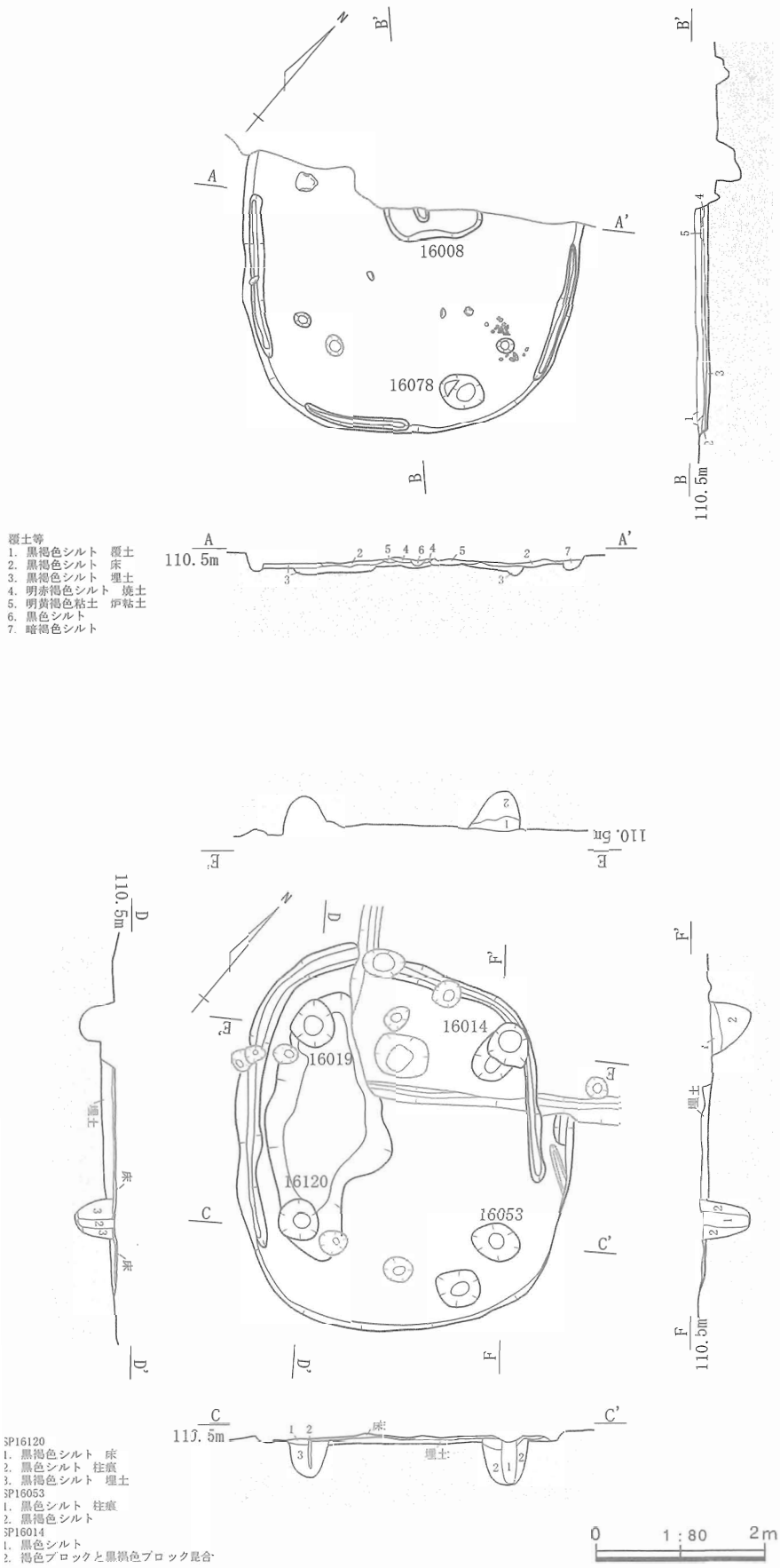
SH16008（第16図）

【遺構】Ｈ９～Ｉ10グリッドで検出された。床面では北側の1/3程をSH14550・15615により、掘方では1/4程をSH15615によって壊されている。

床面は、切り合う住居に近い部分は失われている部分が多いが、南側のほぼ全域に認められた。黒褐色シルトを材料として２～４cmの厚みで硬く敲き締められている。床面上には脆弱な覆土による直径15～18cmの円形のプランが２か所観察された。これらは柱痕跡と考えられる。

炉は検出できた範囲の北側縁に検出された。この位置は住居の中央やや奥側にあたる。床を一部切り込む形で長軸1.15mの楕円形状の掘方が穿たれ、明黄褐色粘土を内部に充填し上面を炉として使用している。この掘方は住居の規模に比べてやや大きいので、複数回の改修を施している可能性がある。

貯蔵穴は、南東側の壁近くに設けられている。直径42～53cmの楕円形をなし、東寄り部分が深さ29cm

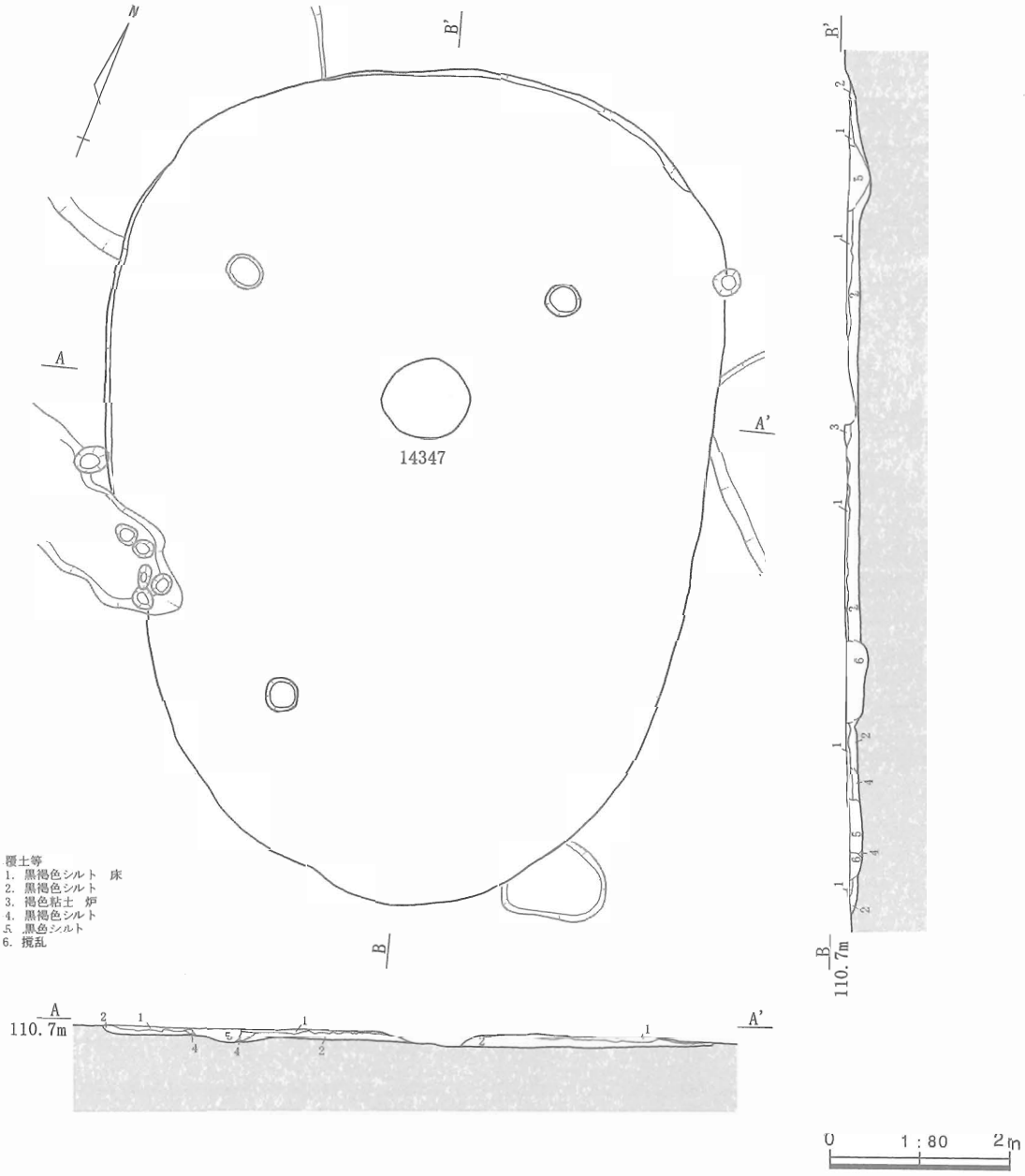


第16図　SH16008平面・断面図（床面・掘方）

と円形にひときわ深く掘られている。

壁溝は、幅10～15cm、深さ２～６cm程で、一部で途切れている。南北方向の断面でみると、掘方の立ち上がりまで床面が設けられているので、壁溝が検出できなかった部分には元来設けられていなかったものと考えられる。

住居の掘方は底面が平らに整えられ、西側に溝が掘られている。溝は幅0.75～1.5mと中央付近が内側に突出する。深さは４～７cmで、北側に行くに従って徐々に深くなっている。住居の北側には幅15～22cm、深さ３cm程度の壁溝とみられる細い溝がへの字形に掘られている。この溝は床面が残存する部分の壁溝と不整合な位置にあるので古い段階の壁溝であると考えられ、この位置から北西側の壁溝の位置まで拡張されている可能性を高く感じる。柱の掘方は４か所で検出した。柱の間隔は長手方向には芯々で2.3～2.4m、短手方向で2.3mとほぼ正方形である。柱穴SP16014に切り合う小穴は柱の抜き取り穴と考えられる。



第17図　SH14347平面・断面図（床面）

SH14347（第17～18図）

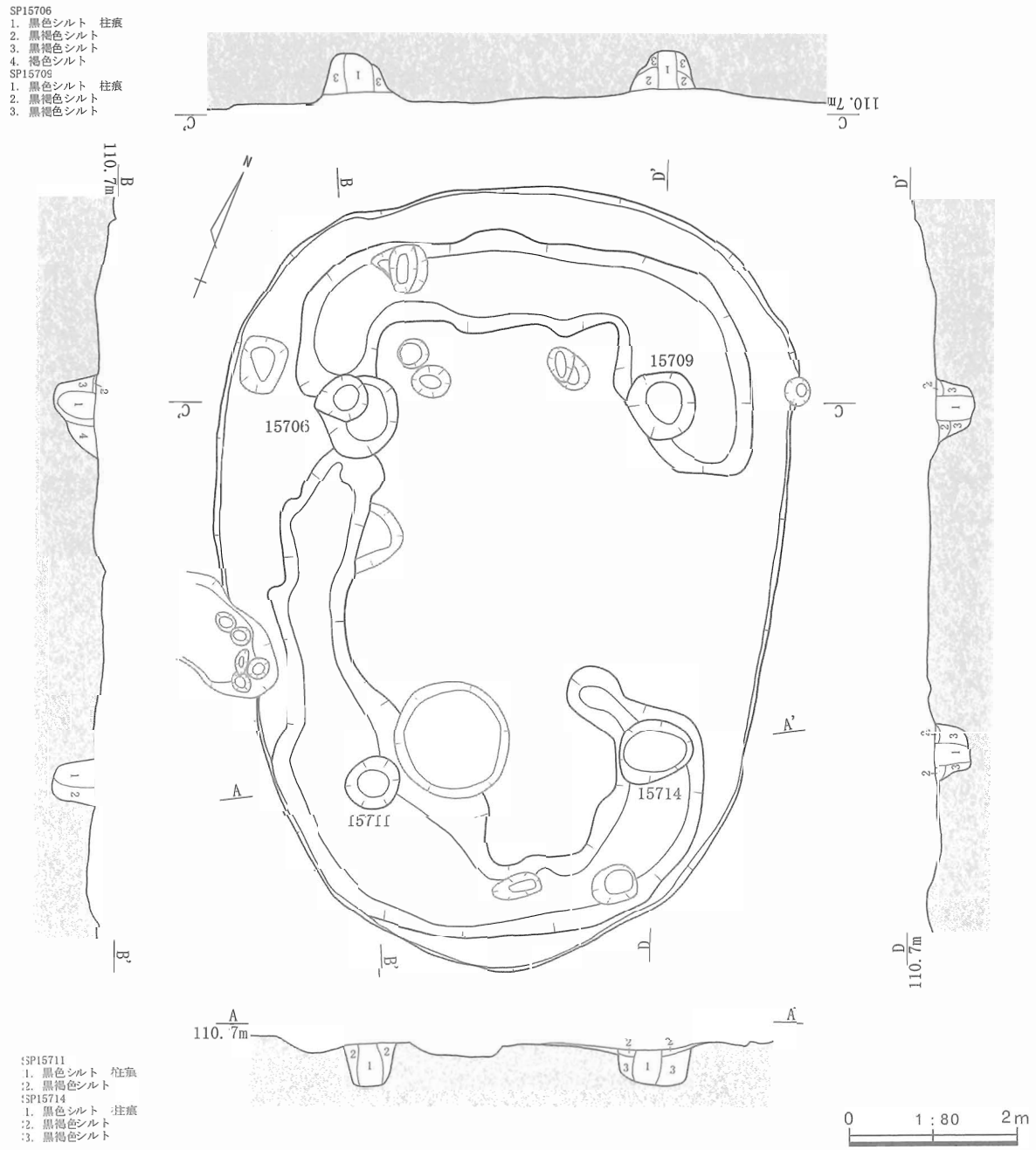
【遺構】H10～I11グリッドで検出された。楕円形を呈する住居ではもっとも大きなうちの一軒である。一部に耕作による撹乱を受ける以外は大きな破壊は被っていない。検出面は床面直上となったため、床上の覆土は把握できなかった。

床面は、住居のほぼ全域で検出された。黒褐色シルトを用いて3～5cmの厚みで硬く敲き締められている。床面上では柱痕と考えられる直径38cmの円形のプランを2か所で見出した。これらは柱穴SP15709・15711の場所にあたる。他の2か所は不明瞭で把握できなかった。

炉は住居の中央やや奥側に設けられているが、撹乱等の影響で一部が失われていた。直径90cm、深さ10cmの円形の掘方内に褐色粘土が充填されている。頂部は平坦で、赤褐色に焼け締まっていた。

壁溝は認められなかった。掘方上でも検出されなかったので備えられていなかった可能性もある。

貯蔵穴も把握できなかった。柱穴SP15714の南側の掘方上に柱穴と同等の深さをもつ四角形状の小穴



第18図　SH14347平面・断面図（掘方）

がある。これが貯蔵穴の可能性もあるが確証を得られなかったので図中では撹乱扱いとした。

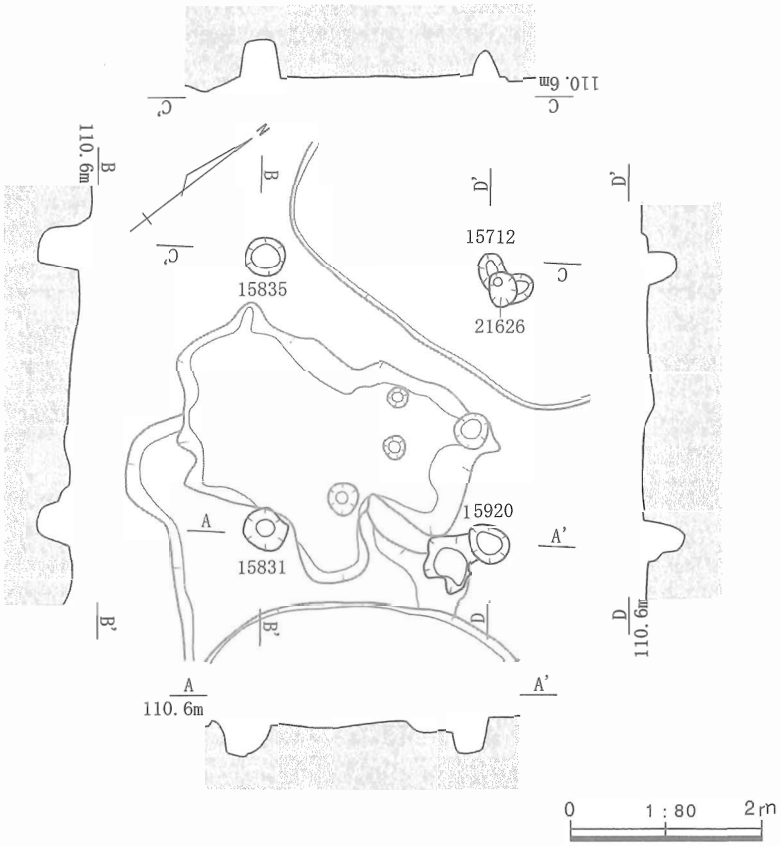
住居の掘方は底面を平らに整えて溝を備える。溝は東側に開く馬蹄形状をなす。幅0.6～2.14m、深さ１～10cmとなる。北側は概ね同じ幅に掘られるが、南側では幅の差が著しい。特に南端付近で浅く幅広となる。住居の立ち上がりに接するのは南側の一部のみで、他の部分は0.35～1.2mの幅でテラス状の平面を残している。

柱穴の掘方は４か所で検出された。直径0.62～１mと著しく広く掘られている。いずれの柱穴の断面でも柱痕が確認された。幅30cm前後と太い。このたくましい柱を据えるために柱穴は広く掘られたものと理解される。この太さは床面上で検出された柱痕の直径とも合致している。このことから、床は柱の際まで張られていたことが分かる。柱穴の間隔は長手方向に芯々で4.2～4.4m、短手方向で同様に3.4～3.6mと広い。

SH14346（第19図）

【遺構】Ｉ11グリッドで検出された。北側をSH14235、南側をSH14236、上面を耕作に伴う撹乱によって壊されている。西側の一部に住居の掘方と思われる部分を観察したが、住居の検出面を撹乱の下位に求めたため、構造の多くが失われた状況で把握された。

柱穴は４か所で検出された。SP15712はややひしゃげているが、他は直径32～42cmの円形を呈する。SP15712は都合三つの小穴が切り合っており、複数回に柱の挿げ替えが近似した位置で行われたと考えられる。他には挿げ替え・抜き取り等の痕跡を見出すことはできなかった。柱穴の間隔は長手方向で芯々に2.85～2.9m、短手方向で同様に2.3～2.6mとなる。



第19図　SH14346平面・断面図（掘方）

炉・壁溝は確認できない。貯蔵穴も住居のプランが不明瞭なので特定できない。あるいは、SP15920南側にある土坑状のくぼみが該当するのだろうか。

SH14322（第20～21図）

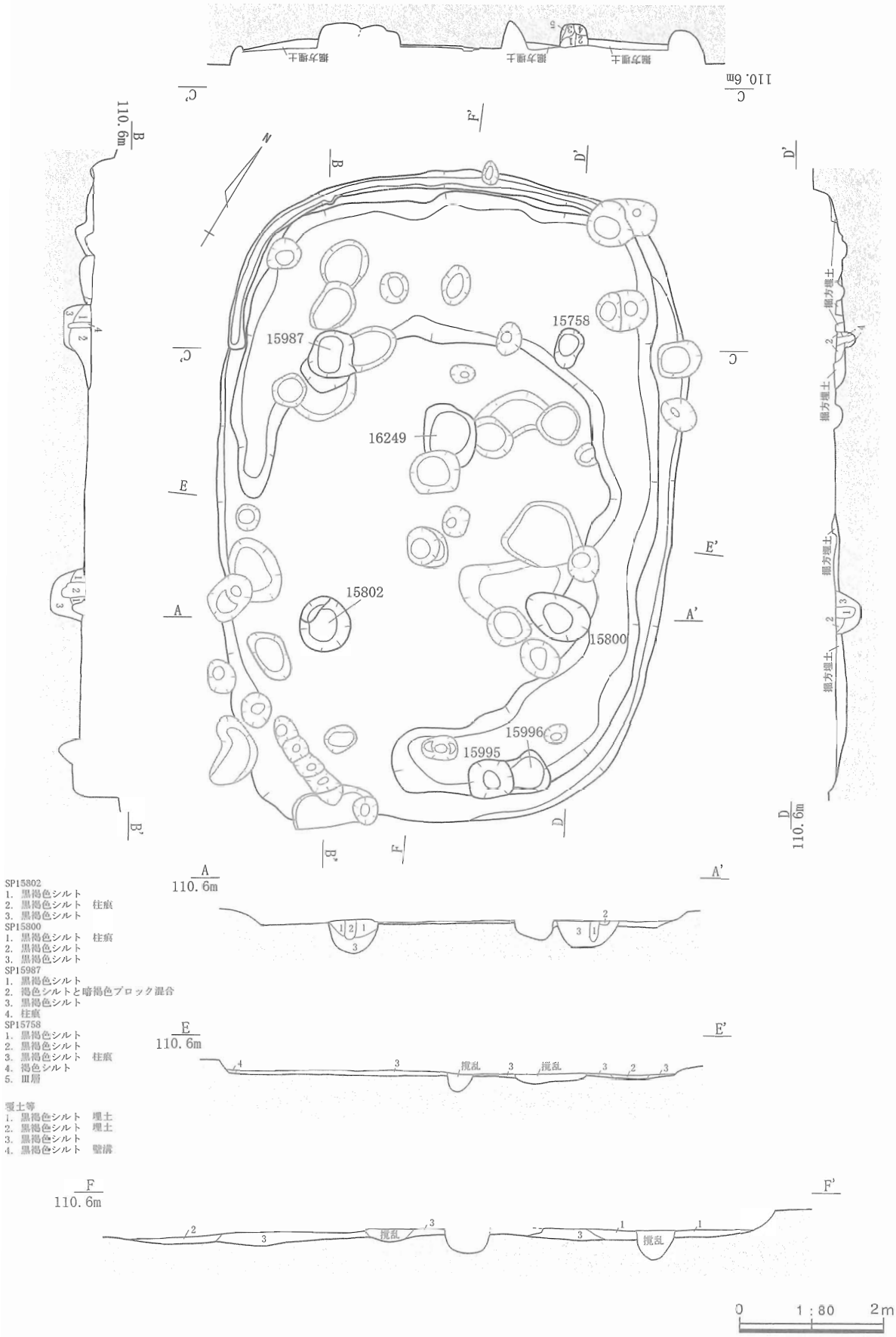
【遺構】Ｉ９～Ｊ10グリッドで検出された。南側でSH18109、東側でSH14319・15315、北側でSH14323を壊している大型の住居である。検出面が下がったために床面は失われており、住居の構造は掘方の底面でのみ把握することができた。

住居の掘方は底面を平らに整え周囲に溝を備える。溝は南側に開く馬蹄形を呈し、幅0.7～2.1m、深さ２～８cmの規模がある。北側が著しく太く、東側は１m内外で比較的整っている。掘方の内部にはⅡ層に起因すると考えられる褐色粘土粒を含む黒褐色シルトで埋められている。掘方の掘削の際に出た撹拌された残土を用いたものと考えられる。

北側縁には幅16～28cm、深さ３～５cmの壁溝が残存している。南側まで巡るかは明らかでない。

炉は住居の中央やや奥側に設けられている。一部を撹乱に切られ上面は失われる。長軸90cm、短軸72cm、深さ12cmの隅丸方形状の掘方を有し、内面に褐色粘土を充填する。上面は熱により赤化している。中央部は周囲より10cm程度円形にへこんでいる。SH15325や52984の炉のように、周囲に土手状の高まりをもつ形状であった可能性もあろう。掘方の深さの事例から、検出された炉の上面と床面は検出面から５cm内外の高さに存在した可能性が高い。

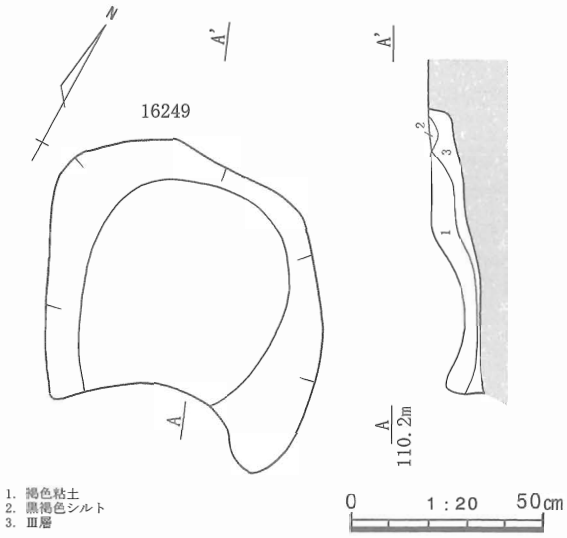
柱穴は４か所で検出された。直径56～94cmの円形ないしは楕円形を呈し、SP15758以外は大型である。住居の掘方埋土を切って設けられるので、掘方内をある程度埋めた後に間隔を測って掘削されていると考えられる。柱穴には挿げ替えによる切り合いはみられない。SP15987の東側に切り合う土坑は住居廃



第20図　SH14322平面・断面図（掘方）

絶後に建てられた掘立柱建物の柱穴である。柱穴にはいずれにも断面で柱痕が確認されている。柱穴の間隔は長手方向に芯々で3.8m、短手方向で同様に3.3mと整然としている。

貯蔵穴は南東側の縁に設けられている。貯蔵穴SK15995は長軸60cm、短軸55cmの隅丸方形状を呈し、41cmほどの深さがある。東側には同じ幅で50cmほどの長さがある深さ27cmの土坑15996が伴っている。貯蔵穴に接してより浅い土坑が設けられる例はSH328の貯蔵穴SK2302やSH1313の貯蔵穴SK3081に見受けられる。これらの事例に対してはやや深めではあるが、貯蔵穴の蓋受けのような機能を有していたのかもしれない。



第21図　炉16249平面・断面図

SH14242（第22図）

【遺構】Ｉ11～Ｊ11グリッドで検出された。南側をSH14250に、北側をSH14239に、一部を掘立柱建物SB80013によって切られている。SH14239は隅丸方形の竪穴住居であるが、掘方がSH14242よりもかなり浅いためにSH14242 の多くを壊していない。一方、南側のSH14250の掘方はSH14242よりも深く、全体の1/5程度が失われている。

床面はより上位にある黒色シルトの下で検出された。北側の立ち上がりから80cm程度は床が設けられていない。この南側から始まる床面は黒褐色シルトを用いており、床の設けられない部分から２cm程の盛り上がりをもって３～４cmの厚みで張り込まれている。南側では８cm前後と著しく厚くなる。床面上では直径16～26cmの円形のプランが２か所検出された。これらは柱痕であると考えられる。

炉は住居の中央付近に設けられている。長軸90cm、短軸50cm程の楕円形をなし、東側に一部が突出する。内部には下位に焼土の混じった黄褐色粘土を充填し、上位に均質な黄褐色粘土を貼り付ける。この掘方は床面を穿っており、さらに床面を覆う黒色シルトをも切っている。この状況から、この炉は残存する床面に伴うものではなく、黒色シルトでかさ上げされた上に床面が設けられていたことを物語っている。また、炉の覆土の下位に混じる焼土は従来存在していた炉の残材であると考えられる。この炉は従来の炉の位置に再構築されているものと推測される。

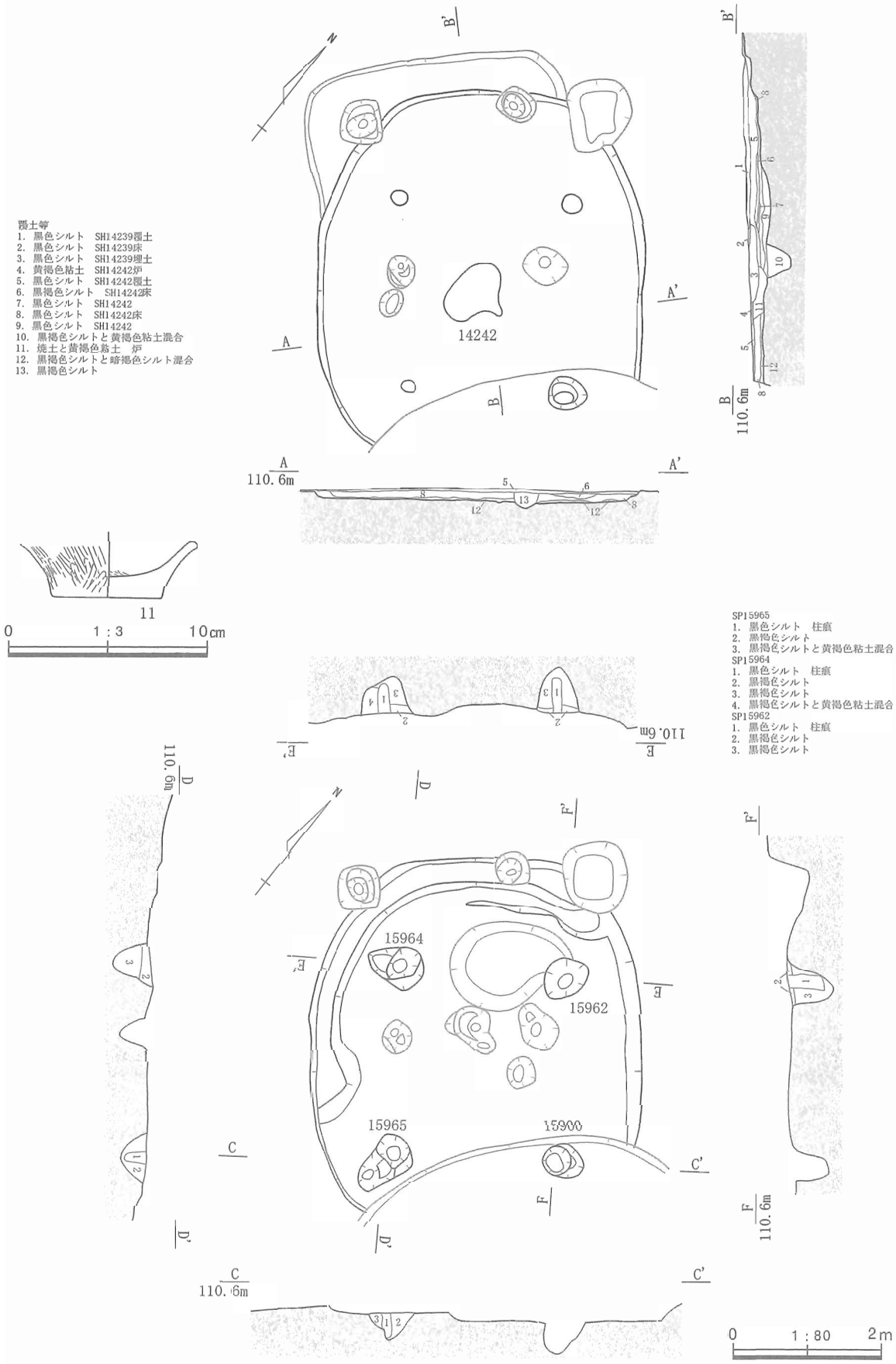
壁溝は検出されなかった。断面でも見出すことはできず、設けられていなかった可能性がある。

貯蔵穴は南側のSH14250の掘方底面でも見いだせないので、備えられていないものと考えられる。

住居の掘方は底面を平らに整え北側に小さな溝を備える。北から西側にかけては住居の立ち上がり際までは幅20cm、３～８cmの高さでテラス状に掘り取られなかった部分が巡っている。溝は幅30cm前後、深さ４cmである。この部分以外に溝の痕跡はなく、部分的な掘削にとどまっている。

柱穴は４か所で検出された。このうち東側のSP15900はSH14250の掘方底面で見出した。直径50～80cmの円形ないしは楕円形状を呈する。SP15965は南側に切り合う小穴があるが意図は明らかでない。15965より23cm浅く、15965の断面に柱痕が観察されることから外側に挿げ替えられたとも考えにくい。SP15900を除くいずれの断面からも柱痕が観察されている。柱穴の間隔は長手側に芯々で2.4～2.55m、短手側は同様に2.2～2.3mを測る。

【遺物】遺物は床上の黒色シルトから土器が出土している。11は小型の壺である。ハケ調整の後、底部付近のみ縦方向のミガキを加えて平滑に整えている。

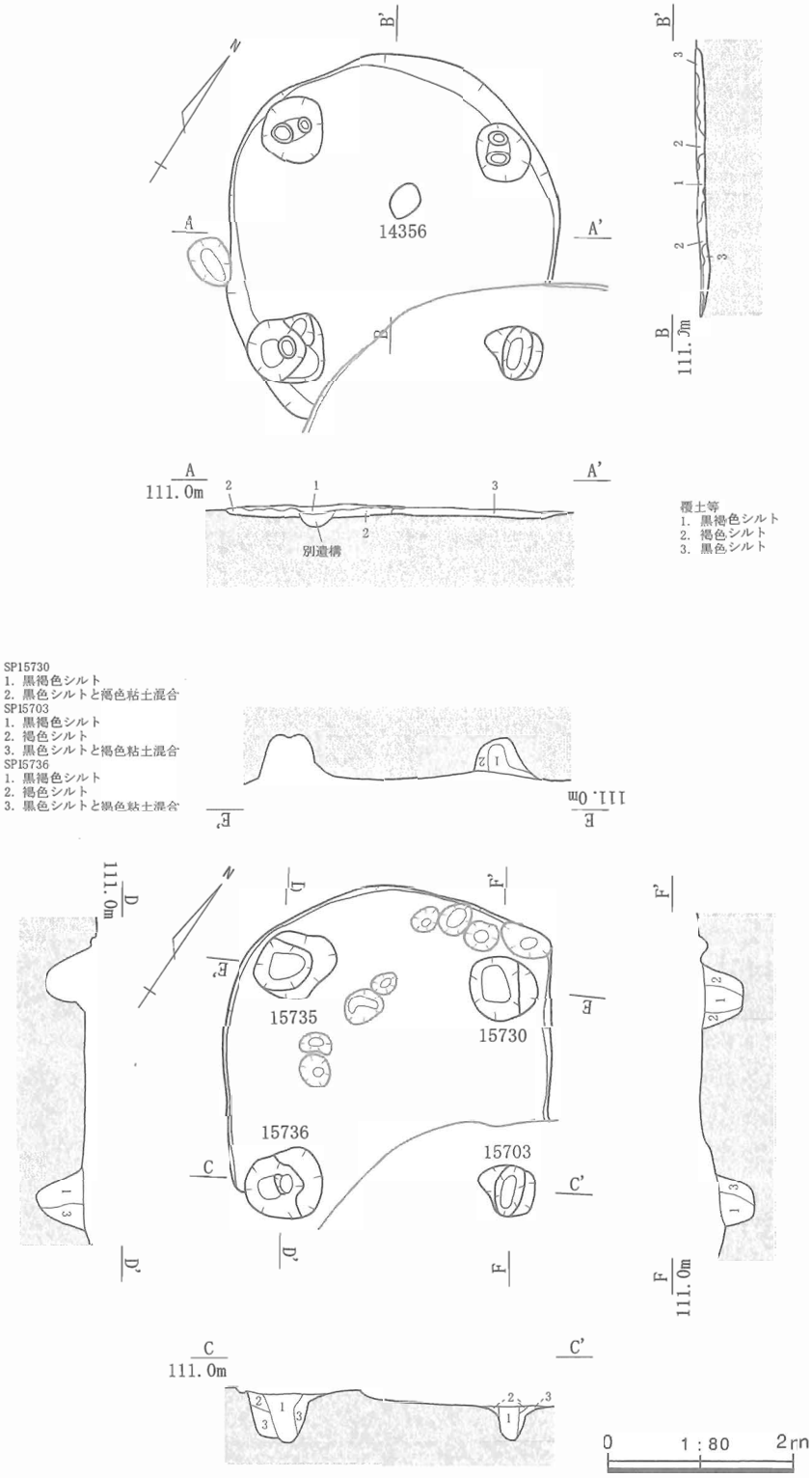


第22図　SH14242平面・断面図（床面・掘方）

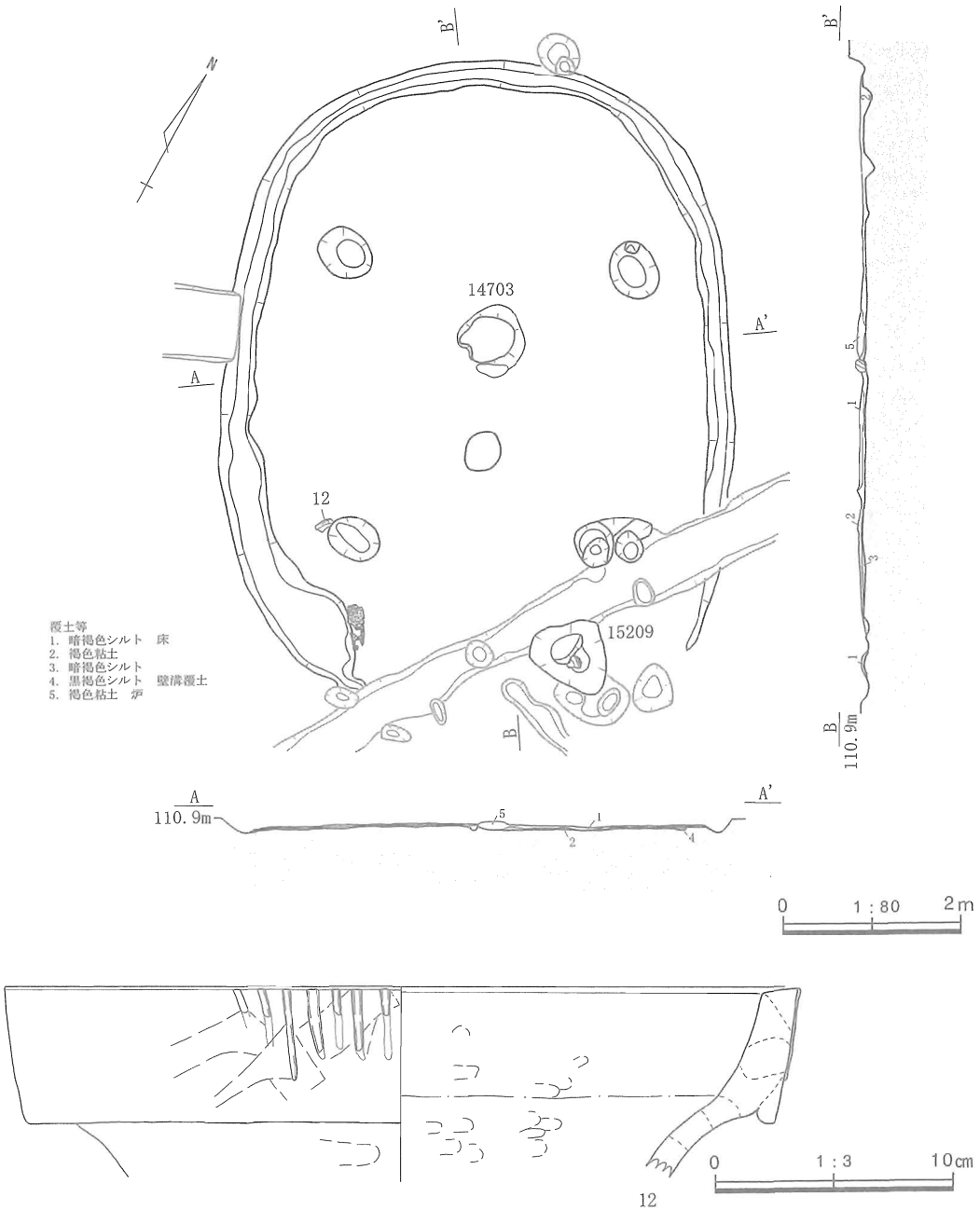
SH14356（第23図）

【遺構】H11グリッドで検出された。南東側をSH14347によって壊されている。検出面が床面以下に下がっているので、床面以上の施設はほぼ失われた状態であった。床面に設けられた施設で存在が把握できるのは炉である。住居の中央やや奥側に30～40cm程度の直径をもつ楕円形状の熱染みが観察されている。また、貯蔵穴は設けられていない。

住居の掘方はほぼ平坦で、溝は設けられていない。内部にはⅠ層とⅡ層が混合した黒色～黒褐色シルトを主体とする埋土が充填されている。柱穴の掘方は4か所が把握された。うち南側にあたるSP15703は隣接するSH14347の掘方上で検出されている。直径55～75cmの円形状を呈し、いずれも住居掘方の縁に沿う位置に掘りこまれている。南側のSP15703は一部が検出された掘方のラインよりも外側に出るので、元来はひと回り大きな住居掘方が設けられていた可能性がある。断面ではSP15735を除くいずれからも柱痕と思われる堆積を把握している。また、SP15736は複数の穴が交錯しているので、抜き取り穴によって柱が北側に倒されている可能性が高い。柱の間隔は長手方向で2.2～2.4m、短手方向で2.2～2.5mと入口方向がやや幅広となっている。



第23図　SH14356平面・断面図（床面・掘方）



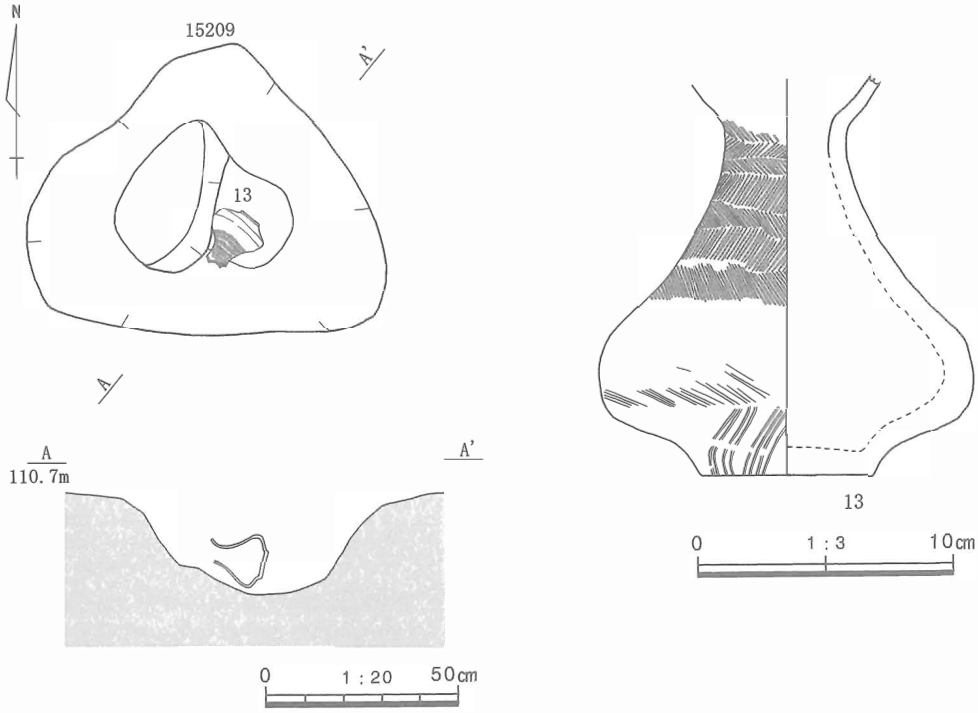
第24図　SH14703平面・断面図（床面）

SH14703（第24～27図）

【遺構】H12グリッドで検出された。一部が歴史時代の溝SD13387や確認調査トレンチT1-３に切られるが、床面以下の遺存状態は良い。検出面は床面直上であり、覆土は把握できなかった。南側の床面上からは焼けた木材が出土し、炉とは異なる位置に焼土が認められるので焼失しているものと考えられる。

床面は広い範囲で認められたが、炉の北側で検出できない部分がある。暗褐色シルトを用いて１～３cmの厚みで硬く敲き締められている。床面上では掘方の間口に近似した規模で柱穴が観察されている。全ての柱穴で断面を確認できていないので断定できないが、柱の周囲に床が設けられていなかったか柱の周囲のみを掘って柱を引き抜いているのかもしれない。

炉は住居の中央やや奥側に設けられている。直径80cm、深さ８cmの掘方内に、褐色粘土を充填する。



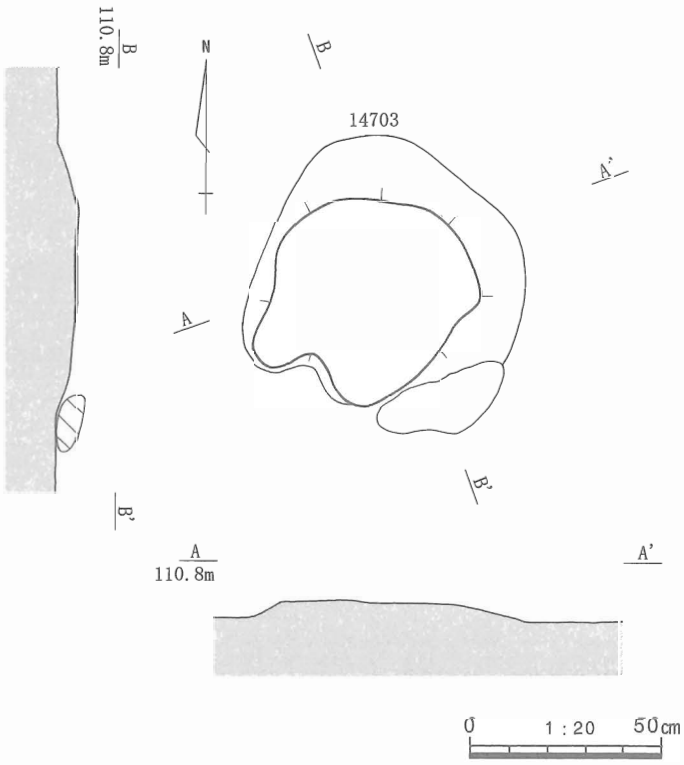
第25図　SK15209遺物出土状況・遺物実測図

頂部は床面より３cm程度盛り上がった位置にあり、赤褐色に焼け締まる。南側には長さ35cm、幅15cmの自然礫を置く。この礫は構築時から据えられていたもので掘方埋土に充填された褐色粘土に一部が食い込む。

壁溝はSD13387の北西側に検出された。幅26～60cm、深さ３～13cmで、南側が太く、深くなる。

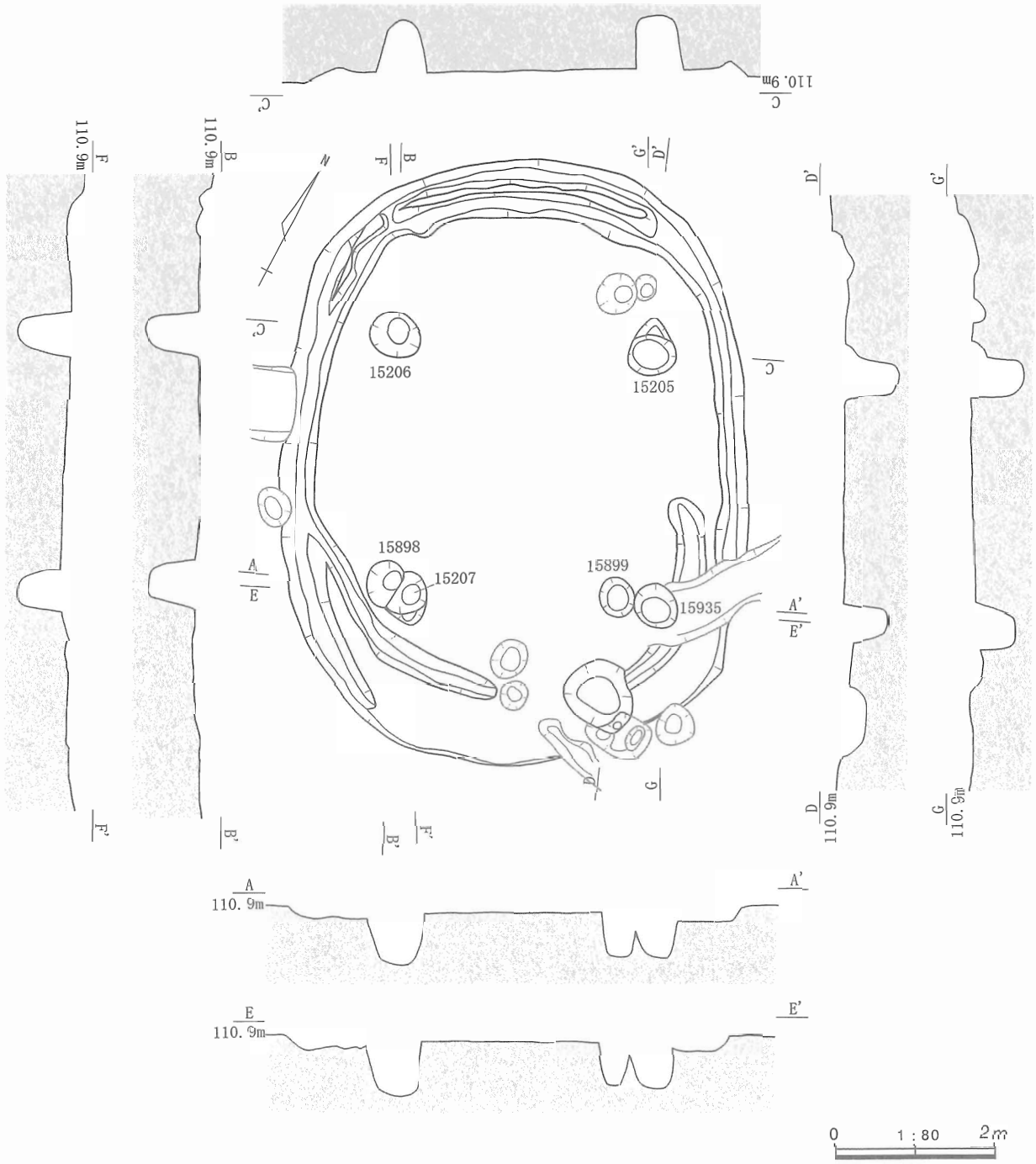
貯蔵穴SK15209は南東隅に設けられている。長軸95cm、短軸77cmの三角形状で、深さは26cm程度となる。内部から頸部以上が割り取られた壺が横たわって出土している。

住居の掘方は底面を平らに整え、溝を設けない。掘方底面の周囲には床面上で検出された壁溝の内側に別の壁溝が存在することが明らかになった。北東・南西部分は一部で重複するが北西側では40cm、南東側では80cm内側に入った位置にある。幅24～37cm、深さ３～７cmとなる。



第26図　SH14703炉平面・断面図

柱穴の掘方は４か所で検出された。直径35～64cmの円形をなし、南よりの２か所には近似した規模の柱穴同士が切り合っている。また、SP15205と15207にはより浅い三角形状の平面をした小穴が切り合っている。柱の抜き取り穴であろうか。南寄りで切り合う柱穴SP15207・15898と15935・15899は、各々

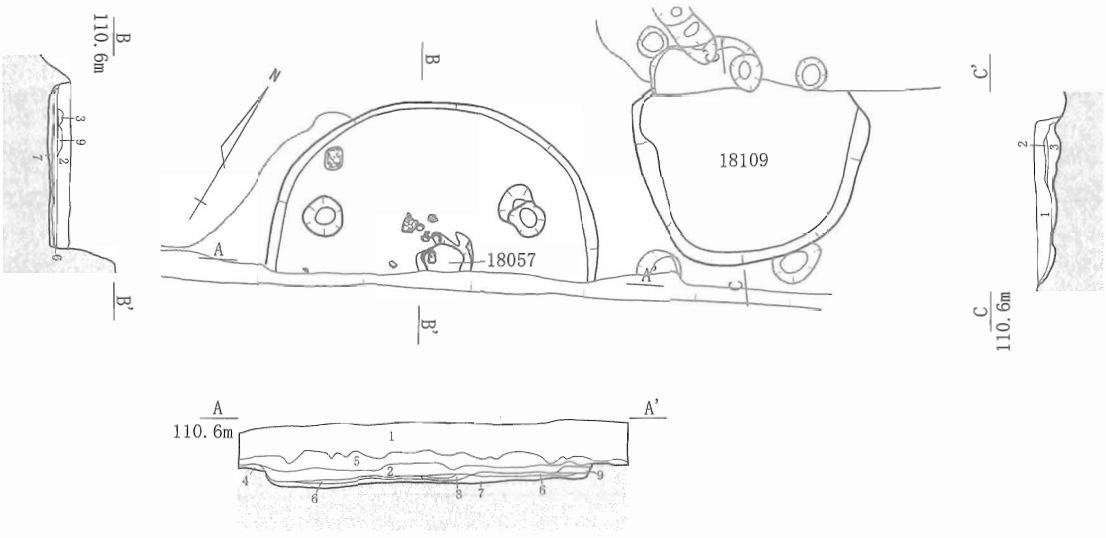


第27図　SH14703平面・断面図（掘方）

深さも極めて近似している。断面で確認できなかったので残念であるが、内側から外側へ挿げ替えられたと考えられる。これに連動して住居が拡張されたのであろう。

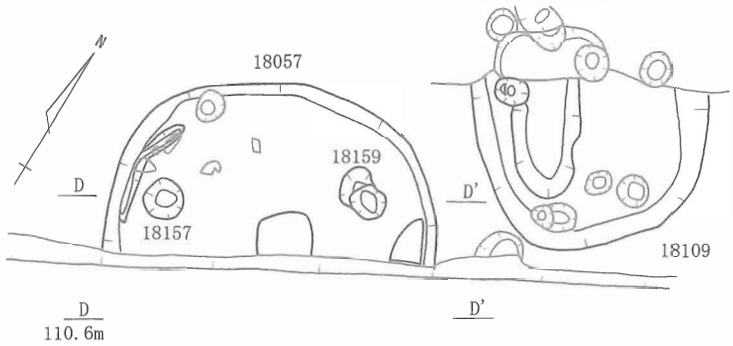
【遺物】遺物は床面上と貯蔵穴から土器が出土している。

12は複合口縁をもつ大形壺の口縁部であり、SP15207に相当する柱痕の脇の床面上から出土している。一部にミガキがみられるが風化が激しい。口縁部外面にはやや外傾する平坦面を作り、棒状の浮文を貼り付ける。口唇部は矩形に整えられる。13は貯蔵穴SK15209から出土した壺である。口縁部は割り取られて失われている。外面はハケ調整を施した後にナデ消しているが底部～腰部に調整痕が残っている。胴部上半から頸部にかけてはハケ工具による斜めの刺突を連続させて羽状の文様を作りだしている。



A-A'、B-B'
1. 黒褐色シルト　耕作土
2. 黒色シルト　覆土
3. 黒褐色シルト
4. 黒褐色シルト
5. 黒色シルト
6. 黒褐色シルト　床
7. 黒褐色シルト　埋土
8. 黄褐色粘土　炉
9. 焼土

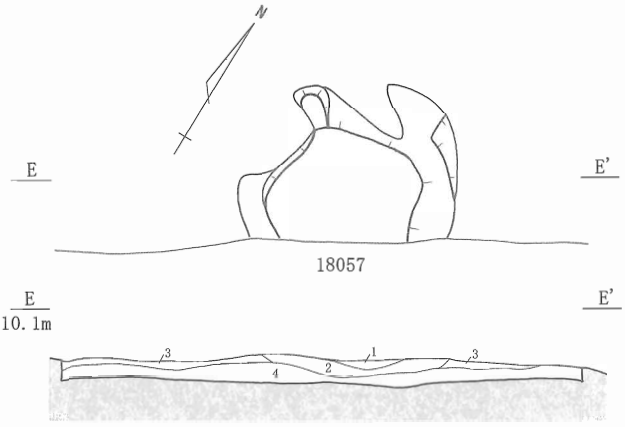
C-C'
1. 黒色シルト　覆土
2. 暗褐色シルトと黒色シルト混合　床
3. 黒褐色シルト　埋土



SP18157
1. 黒色シルト　柱痕
2. 黒色シルト

SP18159
1. 黒色シルト　柱痕
2. 黒色シルト

0　1:80　2m



1. 焼土
2. 黄褐色粘土　炉
3. 黒褐色シルト　床
4. 暗褐色シルト　埋土

0　1:20　50cm

第28図　SH18057・18109平面・断面図（床面・掘方・炉）

SH18057・18109（第28～29図）

【遺構】Ｊ10グリッドで検出された。SH18057と18109は隣り合う小型の住居であるため、ここでまとめて記述する。いずれの住居でも床上の覆土以下の状況を把握することができた。

SH18057は南側のおよそ半分が調査区外となったため、北側半分を調査したにとどまった。

床面は住居の縁辺部を除くおよそすべての部分で検出された。黒色シルトを混入する黒褐色シルトを用いて２～４cmの厚みで敲き締めて造られている。この面ですでに掘方と同等の範囲で柱穴が２か所検出されている。柱穴の範囲は床が張られていなかった可能性を感じさせる。

壁溝は、床面上では検出されなかった。ただし、掘方まで掘削した際に北西側の縁辺に壁溝とみられる幅20cm前後の細い溝を検出しているので、元来は壁溝を備えていたものと推測される。

炉は、調査区際で検出されている。直径56cm前後の不定型をなし、頂部は平坦で床面から１～２cm盛り上がっている。黄褐色粘土を素材に用い、西側の一部が床面上に乗っているので、床をある程度整えた後に一辺58cmほどの隅丸方形の小土坑を穿って炉に用いる粘土を別途張っているものと考えられる。

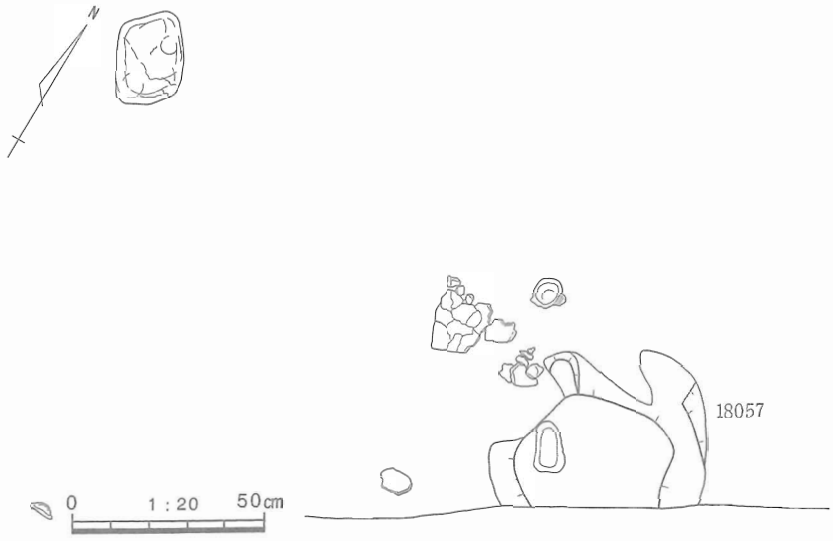
住居の掘方は、底面がほぼ平らに整えられる。内面に溝は設けられない。この上に黒褐色シルトを２～６cmの厚みで入れて均した上に床が張られる。柱の掘方は北側にあたる２か所が検出されている。断面では幅10cm程の柱の痕跡が観察された。東側のSP18159は北側にやや浅い小穴が掘られているので、柱が抜き取られて転用されているものと考えられる。柱穴間の距離は芯々で2.15mを測る。

【遺物】遺物は炉の北西側から土器、石製品が出土している。土器は１個体分の台付甕であるが、台部と体部は接合しない上、小片に割れて破損が著しいので図示できない。また、台部と体部は離れた位置にあり口縁部も出土していないことから、意図的に破壊されて一部の破片が床面に遺棄されたものと考えられる。石製品は台石で、炉から1.4m離れた壁際に置かれていた。

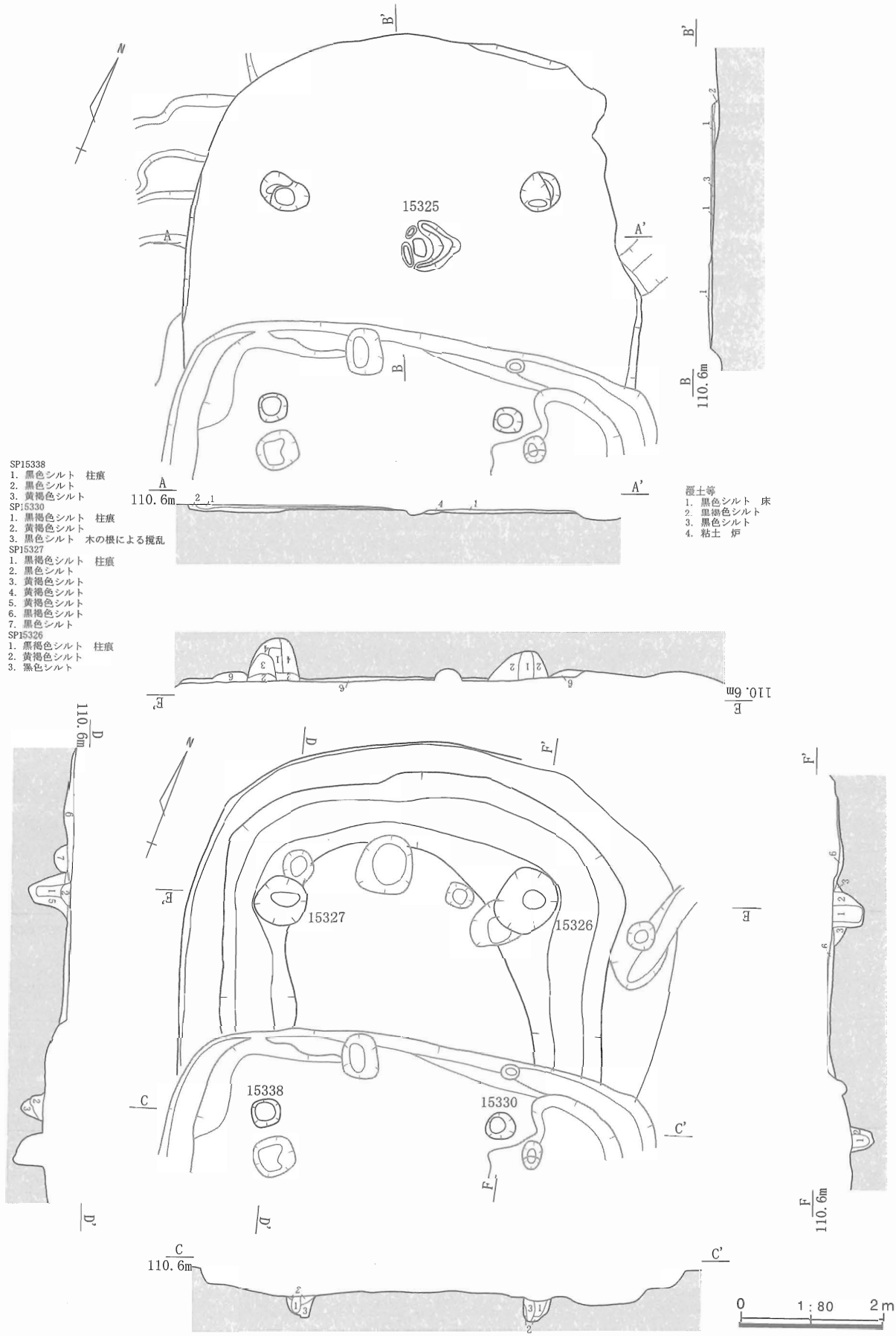
SH18109は18057の北東側に60cm程度離れた位置に検出された。北側の1/3程度はSH14322によって壊されている。北側で掘方の上端が内側にカーブしてくるので、円形を呈するものと考えられる。

床面は中央付近の一部で確認された。周囲は窪んでいるので、元来床が設けられていたのは中央部分のみであった可能性も否定できない。床面に相当する高さでは、柱の存在を確認することはできなかった。また、貯蔵穴も設けられていない。

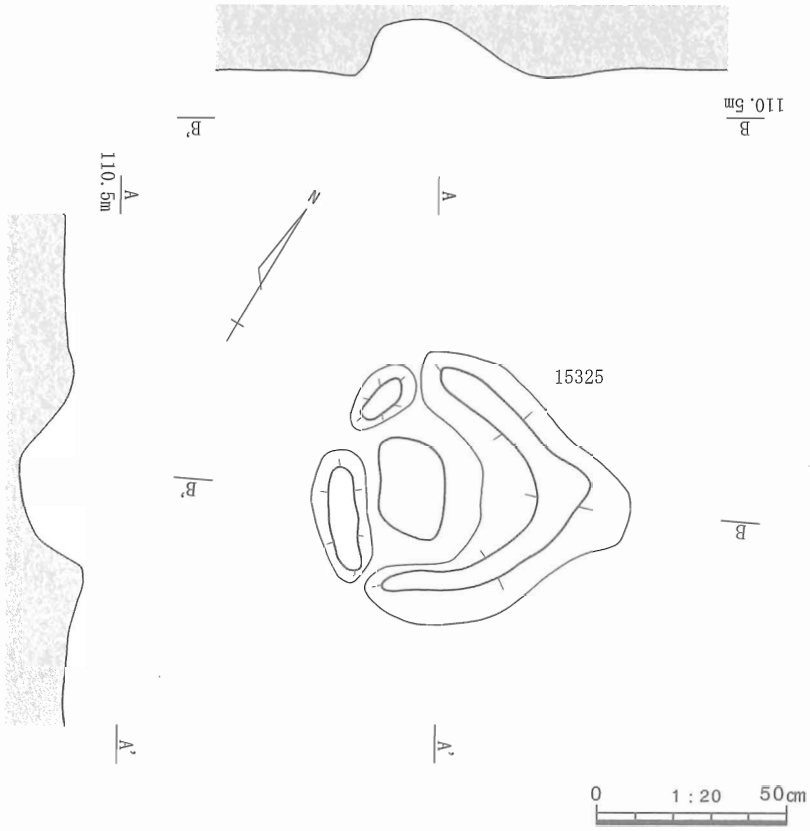
住居の掘方は、底面が平らに整えられ、西寄りに溝が設けられる。溝は住居掘方の下端から15～25cmほど内側に幅70cm前後で掘られる。深さは４cmほどと深くはない。これらの上に黒色シルトが５～10cm入れられた上位に床が設けられる。掘方埋土の頂部は、床が残存する中央部分から縁辺にかけて５cm程度下がっている。住居の掘方下面でも明らかに柱穴と断定できる遺構は検出されなかった。住居自体が直径2.5m程度とすこぶる小さいので、掘方外に埋め込んだ複数の柱を円錐形に組み合わせた構造であったのかもしれない。



第29図　SH18057遺物出土状況



第30図　SH15325平面・断面図（床面・掘方）



第31図　SH15325炉平面・断面図

SH15325（第30～31図）

【遺構】L16～L17グリッドで検出された。南側をSH13021に、北東側の一部を耕作による天地返しによって壊されて全体の3/5程度が残存している。検出面は床面直上となり、床上の覆土は把握できなかった。また、住居の壁も失われている。

床面は残存する範囲のほぼ全面で見出され、ほぼ水平に張られている。黒色シルトを素材に用い、２～５cmの厚みで硬く敲き締められている。住居の北側では柱痕が２か所で検出された。直径40～55cmの円形ないしは楕円形をなす。いずれも断面で観察された柱の太さよりも幅が広いので、柱の周囲には床が張られていなかった可能性がある。柱穴SP15327の範囲で東側に切り合う小穴は、断面に見るように柱の抜き取り穴である。床を穿って掘られており、柱を外側に倒して抜き去っているようである。

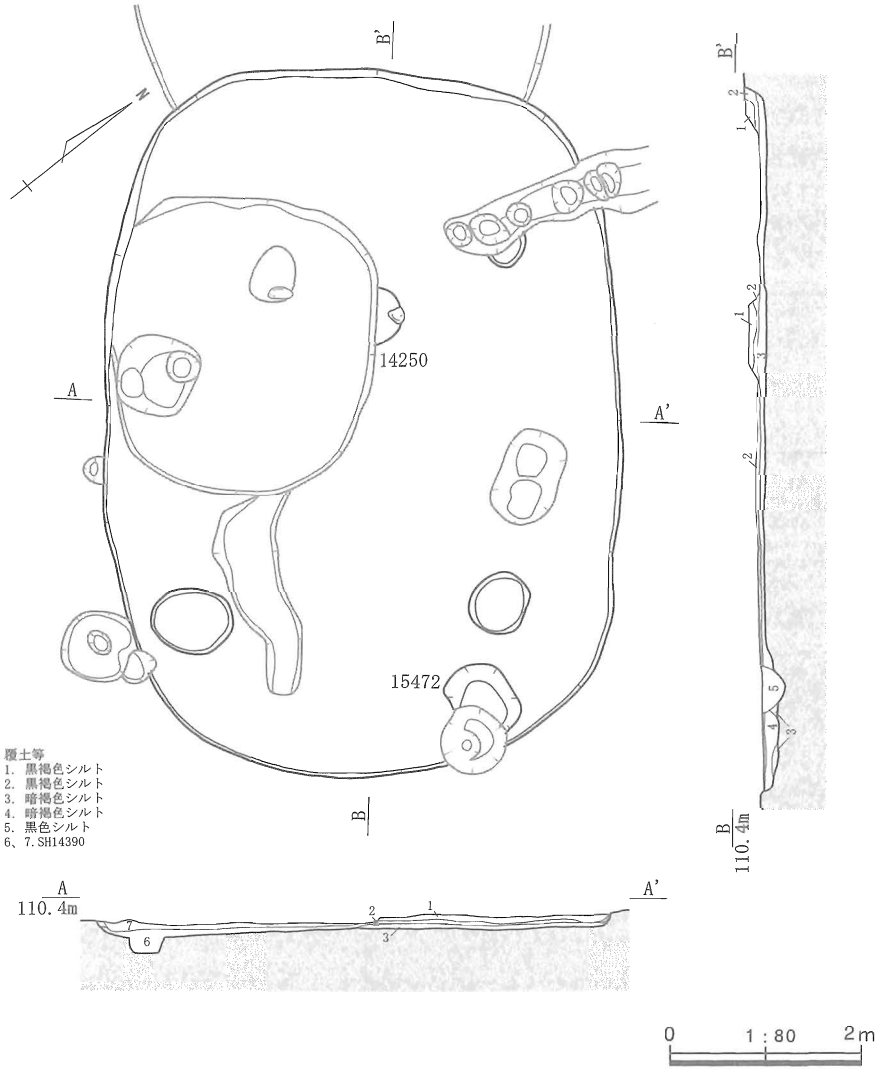
炉は住居の中央やや奥側に設けられている。床面を切るようなかたちで掘方を設け、褐色の粘土を充填している。この粘土は東側に厚く盛られ西側に開くC字形に土手状の高まりを作る。この高まりは東側に幅が広くおよそ40cmを測り、末端に行くに従って細くなる。高さは床面から最高で４cmほどとなる。西側にも土手状の高まりは作られるが小規模で、高さも２～３cmとやや低い。炉の中央は長軸40cm、短軸30cmの楕円形状で、底面は土手状の高まりの最高所から16cmほどへこませて、平らに整えられる。

壁溝は平面・断面双方で確認できない。設けられていなかった可能性も高い。

貯蔵穴も明らかでない。柱穴SP15330の南側にあたるSH13021の掘方底面にはいくつかの小穴があるので、そのいずれかが該当する可能性がある。

住居の掘方は底面を平らに整え、周囲に溝を設ける。溝は0.85～1.95m、深さ４～６cm程度となる。SH13021の掘方が更に深いので南側では明らかでない。

柱穴の掘方は４か所で検出された。北側では直径70～90cmの円形をなし、SP15326はひときわ大きい。断面で認められた柱痕も最も太いため、柱の直径に比例して大きく掘られているものと考えられる。南側の二つの柱穴はSH13021の掘方下で検出されたため本来の間口は失われている。残存部の形状から、SP15327に似た規模であったろう。いずれの断面からも13～24cmの幅で柱痕が観察された。SP15326以外は10cm台半ば程度となる。SP15327以外は抜き取りの痕跡は確認できない。柱穴の間隔は南北方向に芯々で3.1～3.25m、東西方向で同様に3.3～3.5mと、柱で囲まれる空間は東西方向がやや長い正方形状となる。



第32図　SH14250平面・断面図（床面）

SH14250（第32～33図）

【遺構】Ｊ10～Ｊ11グリッドで検出された。中央西側に小型の隅丸方形の竪穴住居SH14390が重複している。また、南側に展開する掘立柱建物SB80012の柱穴が上位から切り込んでいる。検出面が下がったため床面は失われているが、炉の一部が検出されたため床面に近接する高さであると判断してこの位置で一旦記録を取った。

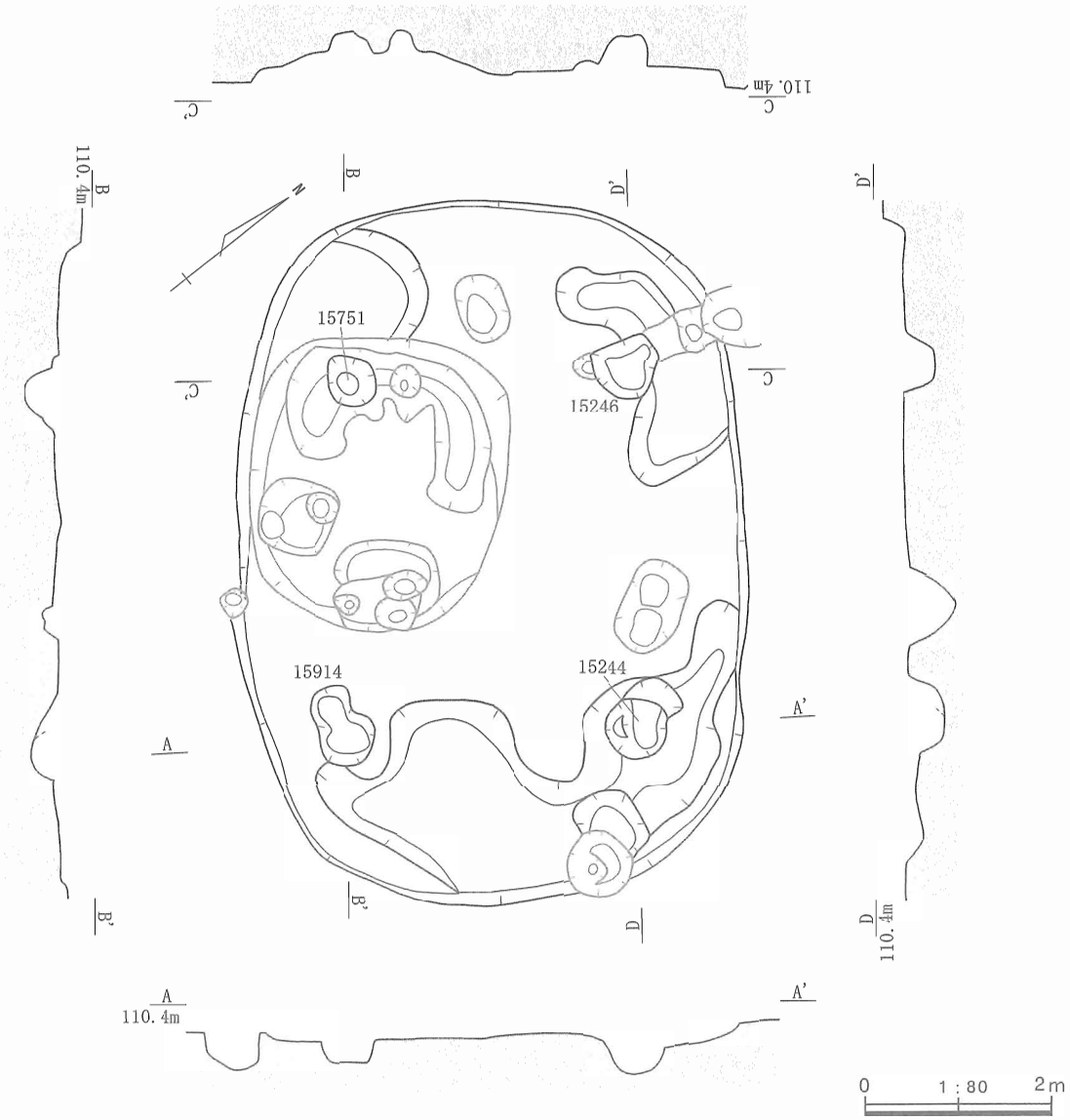
炉は住居の中央やや奥側に設けられている。薄い熱染みとして検出された。西側をSH14390により切られるが、直径60cm程度の円形を呈するものと思われる。東縁に拳大の礫が置かれていた。

貯蔵穴は西側縁にあるSK15472が該当する。長軸80cm、短軸60cm程度の隅丸方形状を呈する。深さは検出面から23cmであるが、床面上からでは45cm程あったものと推定される。南側の1/4程をSH14390の柱穴SP15917によって切られている。

壁溝は把握できなかった。A－A′断面の東端ではわずかな落ち込みが観察されたが平面的に把握できず、掘方上でも認められなかった。元来設けられていなかった可能性がある。

住居の掘方は底面を平坦に整えて、一部に溝を備えている。溝は南側と北側３か所に途切れており、いずれも不定型に掘られている。

南側の溝が最も規模が大きく長さ５ｍ、幅0.5～2.2m、深さ２～９cmを測る。内側の立ち上がりは蛇



第33図　SH14250平面・断面図（掘方）

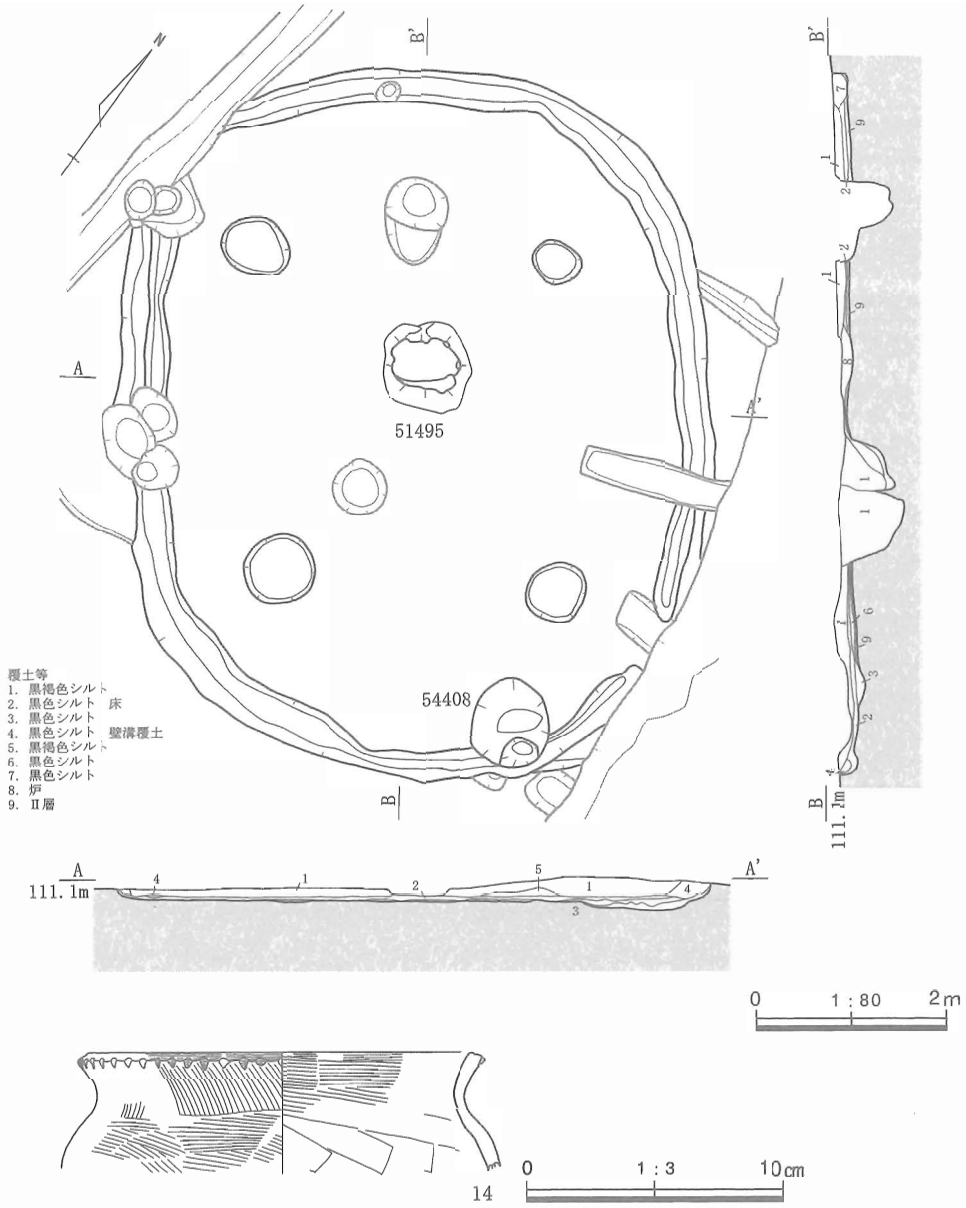
行しており、西寄りがより広く、東側では貧弱になる。多くの部分は２～３㎝と浅いが、柱穴SP15244と貯蔵穴15472の間が最も深くなる。

北縁の溝は長さ2.5m、幅0.55～1.15m、深さ２～３㎝となる。西寄りの幅が広く東に行くに従い狭くなる。立ち上がりは南側の溝と同様に蛇行している。

北西縁の溝はSH14390の影響で一部のみが検出された。幅1.3m、深さ３㎝となる。この部分の最も幅が広い一部であろう。

住居の掘方内部には黒褐色～暗褐色シルトが敷き均されている。複数の層位が水平に重層しており、中位にのみⅢ層に起因する黄褐色のブロックを含んでいる。

柱穴は４か所で確認されている。直径50～90㎝の円形が主体で、北寄りにあるSP15246・15751は単独である。南よりにあるSP15244、SP15914は近似した規模の柱穴が切り合っている。恐らく、内側から外側へ柱を挿げ替えているのだろう。プラン自体には移動が認められないので、拡張は伴わなかったものとみられる。柱穴の間隔は長手方向に芯々で、挿げ替え前が3.6m、挿げ替え後が3.9mとなり、短手方向では３～3.5mとなる。



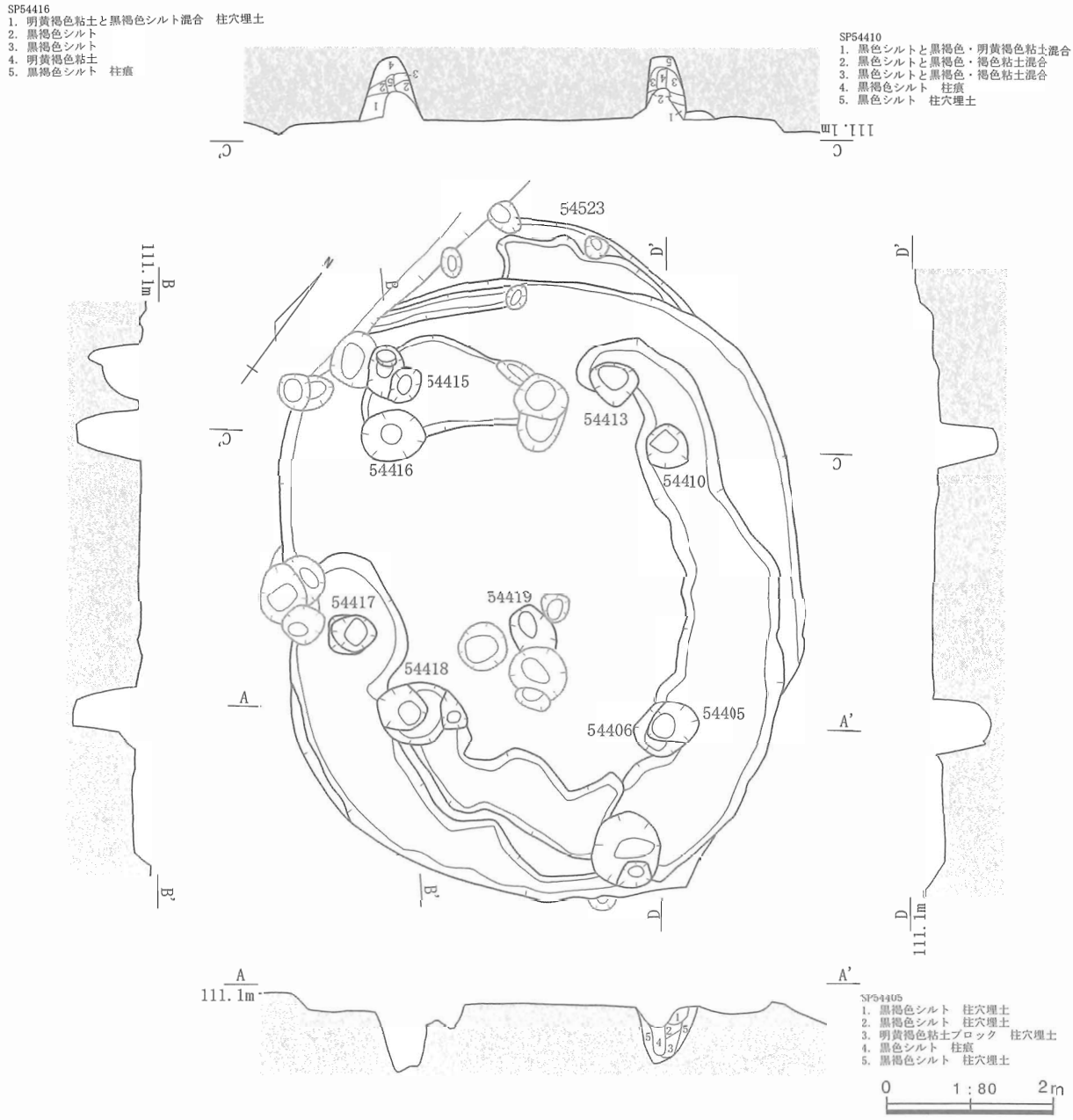
第34図　SH51495平面・断面図（床面）

SH51495・54523（第34～35図）

【遺構】Ⅰ17～Ⅰ18グリッドで検出された。東側の一部を周溝墓SZ51497に、西側の一部を歴史時代の溝SD50676に切られるが、ほぼ全体の形状を把握することができた。床面上には黒褐色シルトが10～20㎝の厚みで残存していた。

床面は住居の多くの部分に認められた。黒色シルトを用い、２～４㎝の厚みで硬く敲き締められている。床面上では直径48～75㎝の円形のプランを４か所で検出した。柱穴の掘方の間口と同等あるいは一回り小さく、SP54418 に相当する部分以外では掘方の調査で柱痕が認められたので柱の痕跡と考えられる。ただし、柱痕の太さよりも広いので、柱の周囲には床が張られていなかったものと考えられる。

炉は住居の中央やや奥側に設けられている。直径90㎝、深さ７㎝の円形状の掘方内に黄褐色粘土を充填し、南東側にわずかな土手状の盛り上がりを作る。上位は褐色に焼けている。さらに頂部に褐色粘土を２㎝程の厚みに敷いて、長軸70㎝、短軸45㎝ほどの楕円形の平坦面を整える。この面に焼けた痕跡はみられない。補修のために粘土を盛ったものの、使用しないうちに放棄したのだろうか。



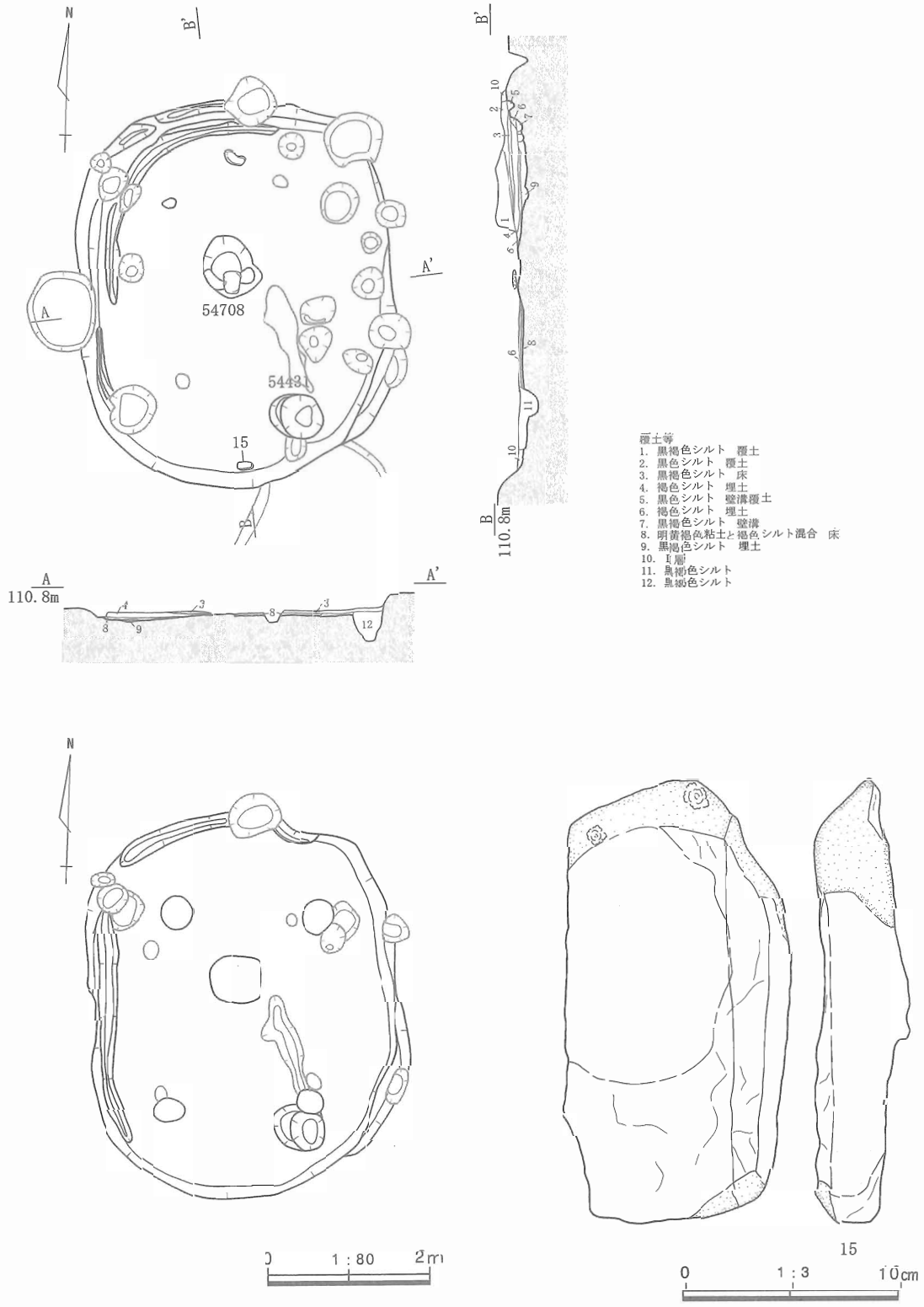
第35図　SH51495平面・断面図（掘方）

壁溝は住居の立ち上がり際を全周する。幅16～46cm、深さ２～14cmとなり、西側の一部で２本が重複する。貯蔵穴は南東側の壁際にあるSK54408が該当する。一部で壁溝を切っている。

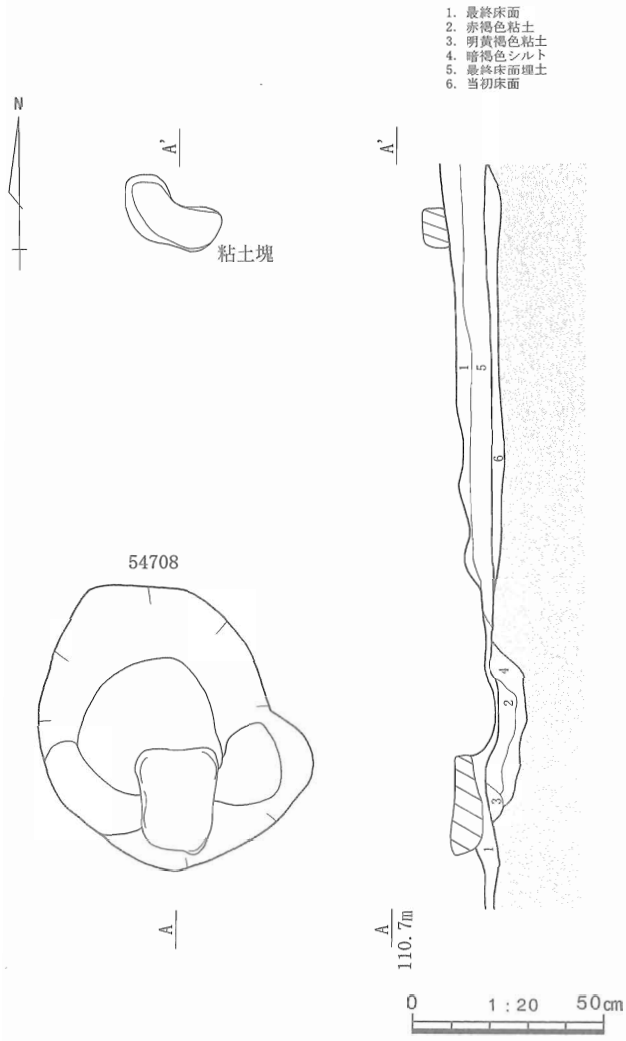
住居の掘方は底面を平らに整え、溝を設ける。溝は0.7～1.26m、深さ８～10cmとなる。西側で途切れがちとなる。柱穴の掘方は４か所で検出された。直径48～75cmの円形あるいは楕円形を呈する。SP54418、54405・54406は複数の柱穴が切り合っている。同位置で挿げ替えられている可能性がある。

SH54523は主にSH51495の掘方底面で検出している。柱穴はさらに切り合う隅丸方形の住居SH51496の柱穴を除外したSP54413・54415・54417・54419がセットになると考えられる。貯蔵穴は該当する土坑が見当たらない。この住居の掘方の一部は北西側に見え、外周に溝を備えていることが分かる。このように、SH51495は54523にほぼ重複する範囲に新たに建て替えられている。

【遺物】14はSH51495覆土から出土した台付き甕の肩部～口縁部片である。外面は横方向のハケ調整の後、口縁部を縦方向に掻き上げる。内面は板ナデの後、口縁部に横方向のハケ調整を加える。



第36図　SH52984平面・断面図（床面）遺物実測図



第37図　炉54708・粘土塊平面・断面図

SH52984（第36～38図）

【遺構】Ｌ17～Ｌ18グリッドで検出された、SH328と同様に軸をほぼ南北にとる稀有な住居である。一部を耕作による撹乱に壊されているがほぼ全容を把握されている。北側のおよそ1/5には床面上の覆土である黒色～黒褐色シルトが10cm内外の厚みで残存しているが、南側の多くは撹乱除去により検出面が下がっているので最終床面の直上での検出となった。

床面は２面あり、当初の床面の形状をSH52984その１（第36図下）、最終の床面の形状をSH52984その２（同図上）と区別した。南側～東側では当初の床面上に直接最終の床面が張り込まれるが、西～北側では黒褐色シルトを当初の床面上に６～８cm敷いた上に最終の床面が張られる。これらの床の間には、壁溝部分の床の断面でも明らかなように過渡的な利用が一時なされていたようである。その１とその２の間には若干の使用時期の差があったものと考えられる。最終の床面上には脆弱な覆土による直径14～18cm の円形のプランが１か所観察された。これらは柱痕跡と考えられる。一方、当初の床面上では掘方で検出された規模とほぼ等しい規模で柱穴が４か所検出されている。当初の床面は柱の周りに床面が張り込まれていなかったと考えられる。

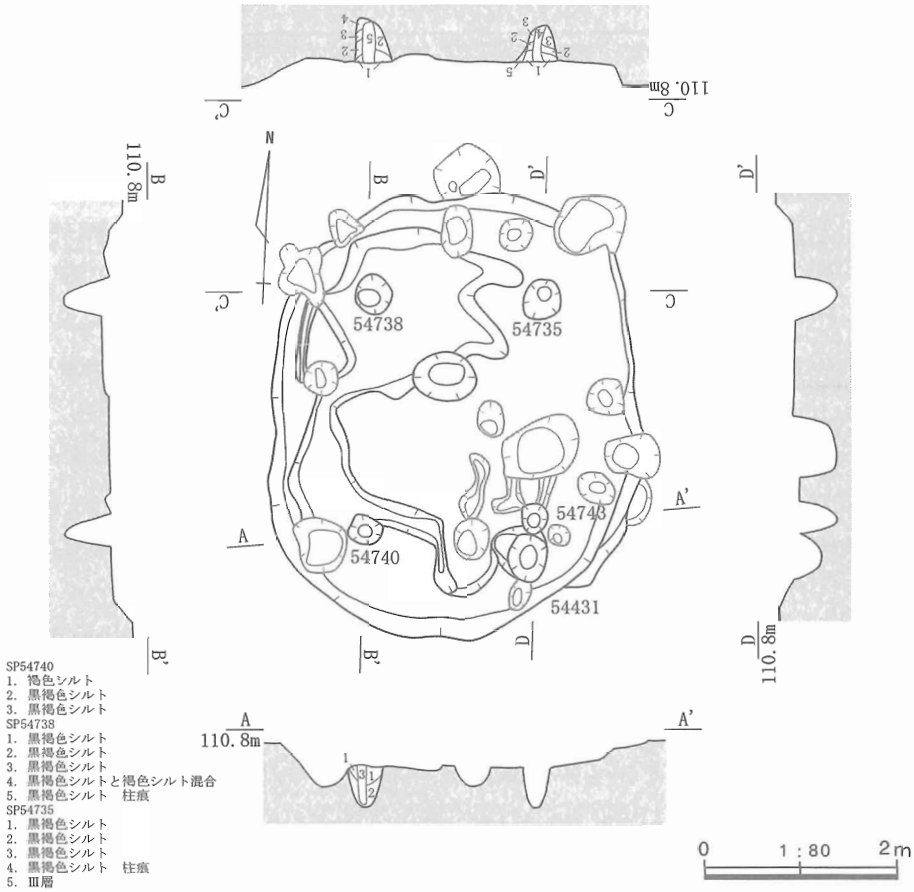
当初の床面は明黄褐色粘土と暗褐色シルトを混合して素材とし、厚さ２～４cmで張られる。最終の床面は黒褐色シルトを用いて１～４cmの厚みで張られている。いずれも硬く敲き締められる。このように厚みは近似するが、上下の床面の素材は異なったものとなっている。当初の床面を設ける際には、掘方掘削によって掘り上げられたⅡ～Ⅲ層を床面の素材として取り置いていたのだろう。一方、最終床面を設ける時点ではⅡ～Ⅲ層の掘削を伴っていないので、同質の素材を得ることはできない。このような過程で当初の床面と最終の床面の材質が異なることになったのだろう。

床の高さは、東西方向では当初床面が西に向かってやや下がっているが、黒褐色シルトを敷き均すことによって最終床面では水平に補正されている。一方、南北方向にはほぼ水平であったものの、最終床面では北側が次第に高くなっている。住居の奥側をテラス状に高くするつもりだったのだろうか。また、最終床面上には炉からおよそ１m隔てた北側の壁近くに人頭大の粘土塊が置かれていた。当初は土器製作に用いる素材かと考えていたが、化学分析の結果異なることが明らかになった。炉や床の補修材であろうか。このような粘土塊を住居内に遺していた例は、他にSH1307にある。

壁溝は北西側で二重になって検出されている。内側の壁溝が当初床面、外側が最終床面に伴うものである。断面で観察すると、東西方向には当初床面に伴う壁溝を当初床面と同じ高さで連続して張られた床面が覆っている。したがって、プランを拡張した直後は一旦従来と同一レベルで床を整えて暮らしていたことが分かる。内側の壁溝は幅４～10cm、深さ３～５cm、外側では幅８～12cm、深さ４～６cmと近

似する。壁溝は南～東側では明らかでない。一方で、東側には住居の縁辺が重複する部分がみられる。この部分は拡張によって掘方が外側へ広げられたことにより、従来の掘方の立ち上がり部分との差がテラス状に削り残されているのである。

炉は住居の中央やや奥側に設けられている。当初床面と最終床面ではほぼ同位置にある。当初床面上では、直径52～68cm、深さ10cm前後の楕円形状の掘方内に暗褐色シルトを充填して3cm程度へこませた上位を炉床としている。最終床面では炉の掘方を新たに設けるのではなく、当初床面の炉のくぼみを中心として上位に土を張り込むことによって一回り大きな炉を作り出している。南側には粘土を土手状に回しその中央付近に平坦な礫を置いている。



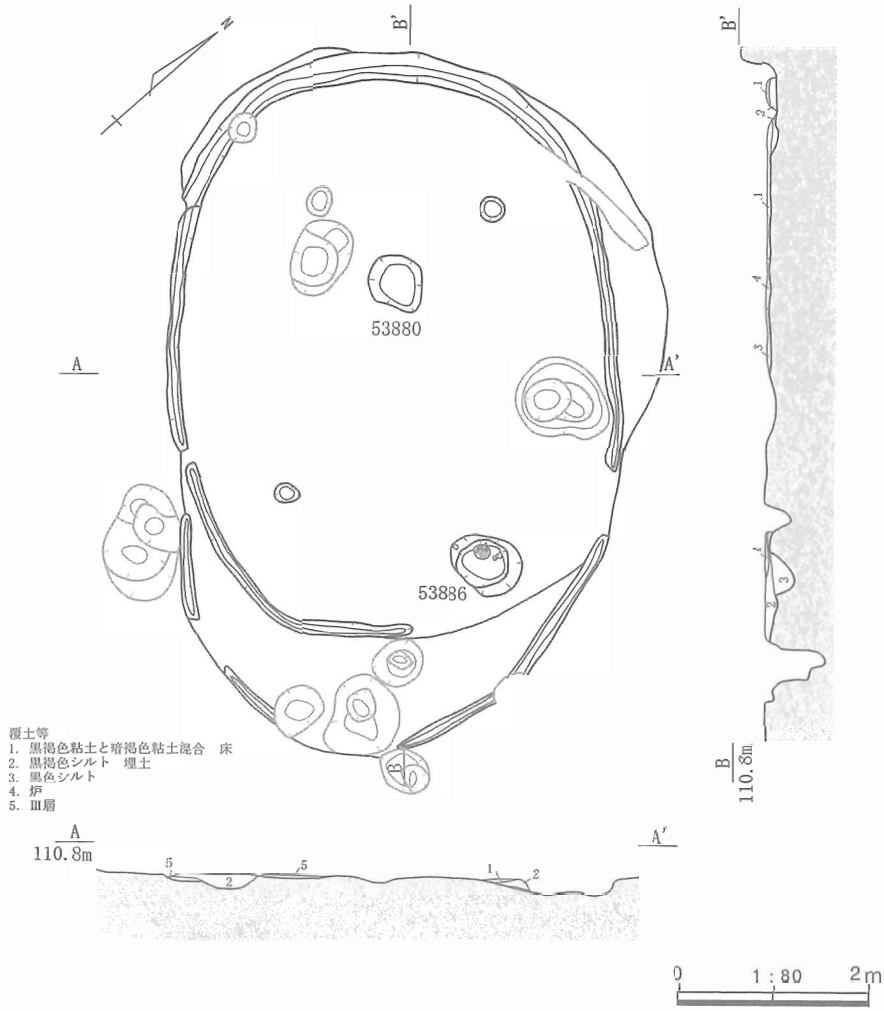
第38図　SH52984平面・断面図（掘方）

貯蔵穴は南東側の縁に設けられている。柱穴SP54743と切り合う位置にあり、柱を設置した後に貯蔵穴を形作っている。貯蔵穴SK54431は長軸55cm、短軸40cmの楕円形で、深さ29cmを測る。西側には幅15cm、深さ5cm程度の矩形の張り出しが付属している。矩形の張り出しが付く貯蔵穴はSH328・1313などに見ることができるが、この張り出しは著しく小さく同様な意義があるものかは判然としない。

住居の掘方は底面を平らに整え、溝を備える。溝は住居の西側に偏って東側に開くC字形に巡っている。幅0.1～1.7m、深さ3～10cmで、北側では先端部が二股に分かれるなど縁辺が整っていない。また、南側に行くにしたがって貧弱になる。溝の埋土は黒褐色シルトを用いている。この中には褐色シルトのブロックが多く混入しているので、Ⅰ層・Ⅱ層を掘り抜くことによって混在した土をここに戻しているのだろう。この溝が及んでいない部分は、掘方掘削によって露出したⅡ層上に直接当初面の床面を張り付けている。

柱穴の掘方は4か所で検出した。直径30～35cmの円形で深さは住居掘方底面から40～45cmとほぼ一定である。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.5～2.55m、短手方向に同様に1.9～2mとなり比較的整然としている。各々の柱穴には掘り抜き穴などは伴わず、SP54735・54738・54740の断面には太さ10～12cmの柱痕が観察された。したがって、住居の拡張は柱の位置を変更することなく、掘方の北・東・西を30～40cm外側へ広げて行なわれたことになる。

【遺物】15は台石である。住居の最終床面上南側壁際に置かれていた。炉を挟んで粘土塊と一直線上の



第39図　SH50800その１、その２平面・断面図（床面）

位置にあり、放棄された場所に何らかの意味を感じさせる。表面と側縁が磨り面として利用され、縁の一部を使って敲いている。被熱して節理に従って板状に割れている。磨り面の摩滅は割れ口の縁を滑らかにするので、割れた後も利用されていたことがわかる。裏面は節理による割れ面をそのまま残しており、特に使用されていない。

SH50800（第39～46図）

【遺構】M17～M18グリッドで検出された。一部がB･C区の調査区境にかかったが、多くの部分がC区に含まれたので床面以下はC区でまとめて調査を実施した。SH50800の下位から、50800に先立つ住居であるSH54539が検出されている。このSH54539は、50800とは軸方向や形状が著しく異なるものの、床面が上下に接して重層的に貼り替えられているので、小型の住居から大型へと建て替えられているものと考えるのが順当であろう。したがって、当初に建築されたSH54539を50800その１、ここから南側を主体に拡張したものをその２、プランが変更された大型住居をその３として整理した。その１・２の壁の立ち上がりは北北西側の一部を除いてその３の掘方によって壊されている。その３段階では、南側の一部を溝SD50838によって壊されている。

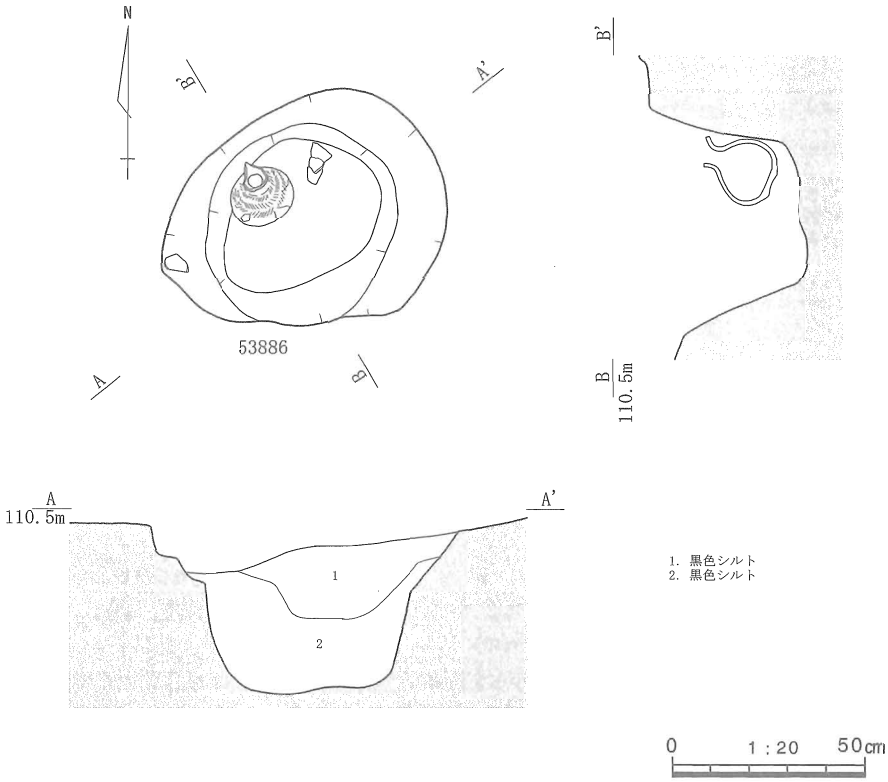
その１は長軸6.2m、短軸4.2mの楕円形の住居である。北北西側の掘方は一部がその３まで同位置で継承されている。床面はほぼ全面で検出されている。黒褐色粘土と暗褐色粘土を混合して材料として利用しており、３～６cmの厚みで硬く敲き締められている。床面上には脆弱な覆土による直径20～25cmの円形ないしは楕円形のプランが２か所観察された。これらは柱痕跡と考えられる。また、その３の柱穴が３か所、この段階の床面等を貫いて掘削されている。

炉は中央やや奥側に設けられている。直径55cm、深さ７cmの浅い土坑状を呈する矩形の掘方をもち、その中に褐色粘土を充填して上面を炉床として利用している。炉の土坑の位置には床面が設けられず、炉掘方の粘土が床面に斜めに乗るので、炉の位置は当初から計画によって明らかであったのだろう。

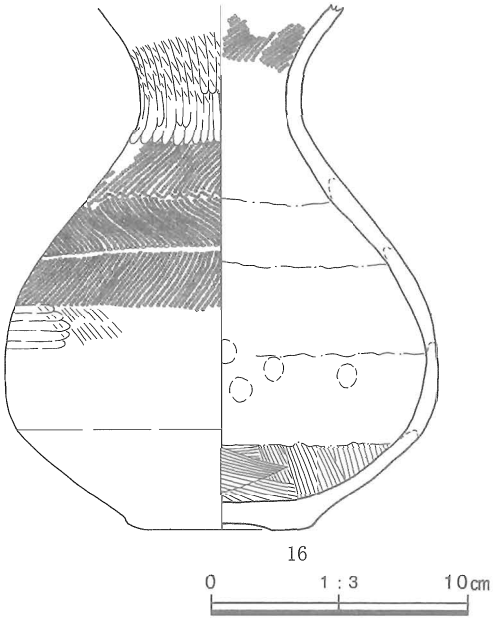
貯蔵穴は南西側の住居立ち上がり際に設けられている。貯蔵穴SK53886は、長軸75cm、短軸63cmの楕円形を呈し、35～40cmの深さがあって底面は平らに整えられている。この内部からは口縁部が欠かれた壺が壁によりかかるような位置から出土している。

壁溝は幅12～30cm、深さ１～10cmとなる。東側の一部が明らかでないが、この部分は残存するものも１～４cmと浅いので、検出面の加減で失われている可能性も否定できない。

住居の掘方は底面を平らに整え、周囲に溝を設けている。溝は全周しており、0.9～1.5mと南側にやや細くなる場所が認められる以外はほぼ均一な幅をもつ。深さは６～13cmで、西側がやや深くなっている。柱穴の掘方は主に４か所で検出されている。床面上で柱痕を確認したSP53879と東側にあるSP54482では断面でも柱痕を確認している。南側にあたるSP54483は掘方底面から35～50cmの深さがある柱穴が複数切り合っているので、その２へ拡張する際に挿げ替えられている可能性が高い。また、東側には深さ10cm程度のやや大きな土坑が切り合っており、抜き取り穴とも考えられる。同様に、西側のSP54480も近似した深さの柱穴が南北に切り合っている。ここでも挿げ替えられているのであろう。柱穴の間隔は長手方向に芯々で3.1m、短手方向に同様に2.4mとなる。



第40図　貯蔵穴SK53886遺物出土状況・遺物実測図

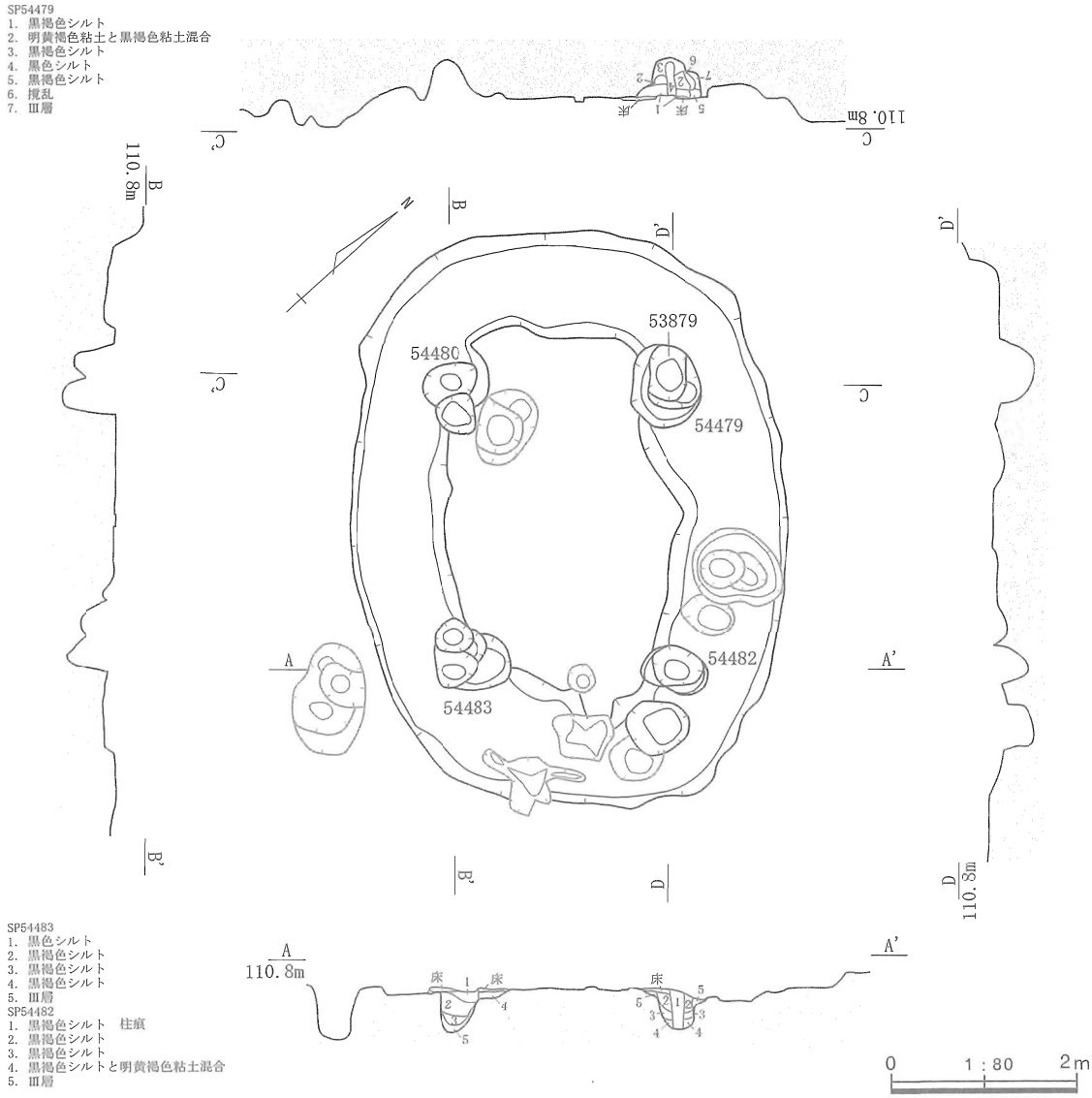


第41図　貯蔵穴SK53886遺物実測図

その２段階では、住居は南東側におよそ1.1m、北東側に0.5m拡張されている。この部分は床面下の掘方を新たに設けておらず、従来の床面と同等の高さまで平坦に掘り抜いた地山上を直接床面としている。プラン自体はややゆがんだ形となるが、前述した柱穴掘方しか特定できないので、同等な位置で挿げ替えられた柱を依然用いていたのであろう。

その３は北側の掘方の一部をわずかに共有させているが、その１・２よりも大型であるためにほぼ全てが新たに造り替えられている。柱穴の位置も異なるので、従来あった上屋はすべて解体されて、新たなものに取りかえられているといえる。

床面はほぼ全面で検出されている。黒褐色シルトを敷いた上に黄褐色粘土を乗せて２～５cmの厚みで硬く敲き締めている。床面は同じ流儀で上下２枚に分かれている。



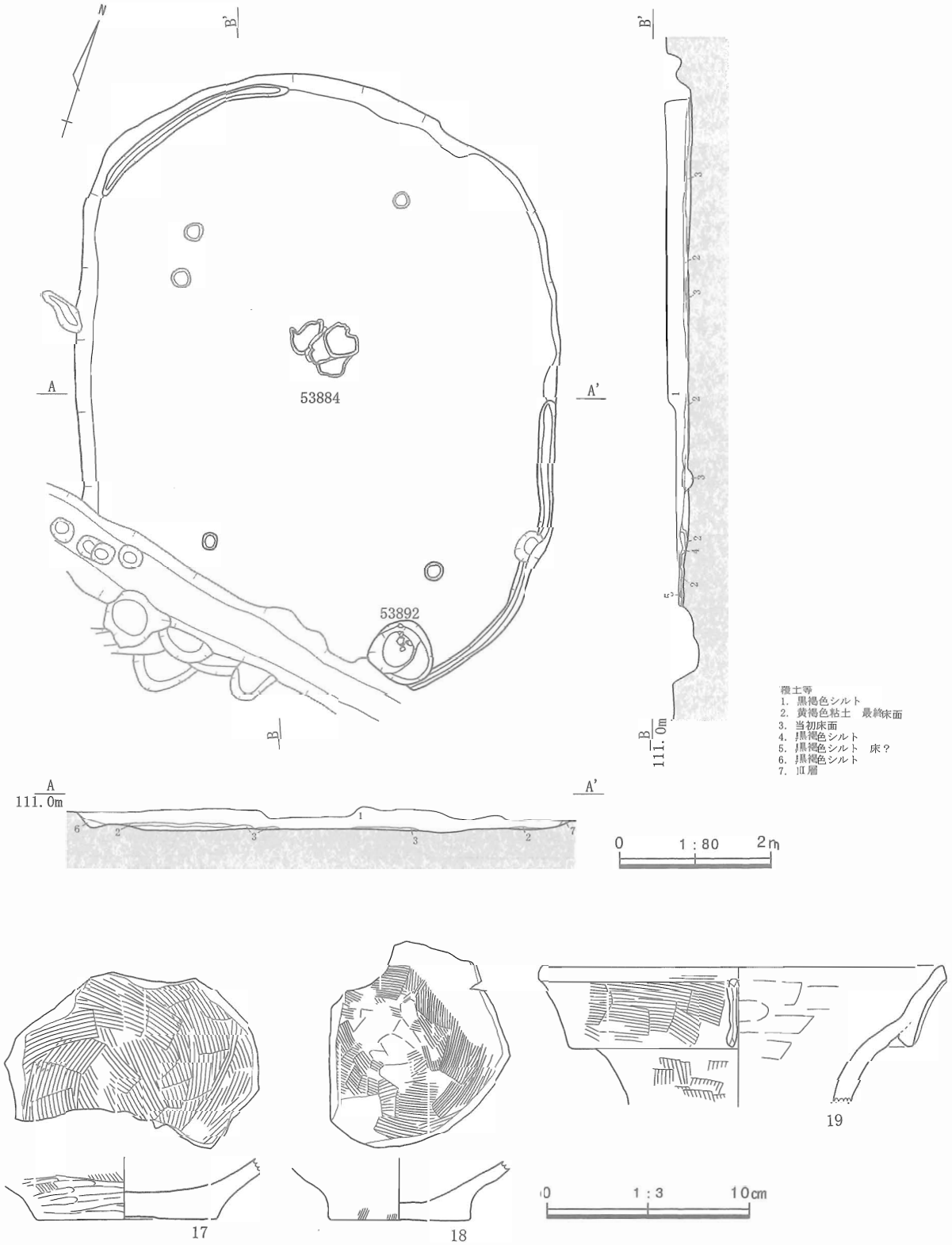
第42図　SH50800その１、その２平面・断面図（掘方）

住居掘方の調査で二重になった壁溝が検出されたことによって明らかなようにその３でも柱をそのまま用いて南側に拡張を行っているので、各々はこれに伴う床と考えられる。その３の当初段階には南側の床面に５cm程度の段差が造り出されているものとみられる。最終の床面は当初の床面に直接貼りこまれている。その際には、当初床面上の段差も解消されて、均一な高さに整えられる。床面上には脆弱な覆土による直径22～24cm程度の円形のプランが２か所観察された。これらは柱痕跡と考えられる。

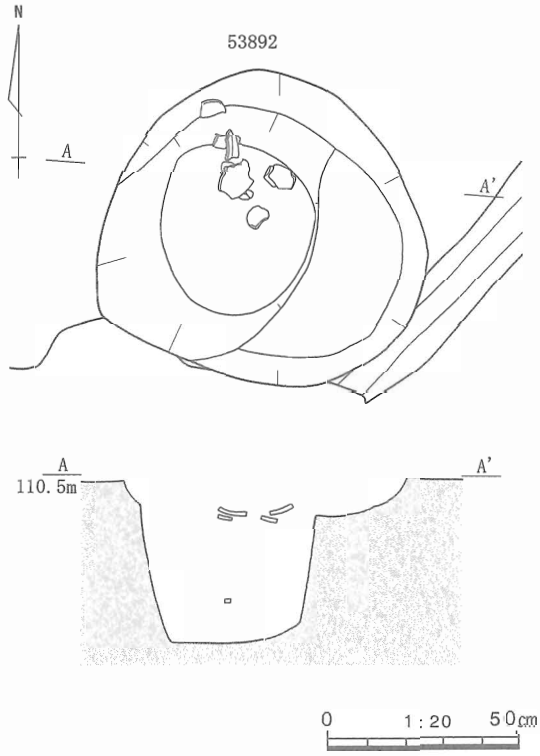
炉は住居の中央やや奥側に検出された。直径70～75cmの円形状を呈し、深さは掘方上から７cm程度となる。掘方内には暗褐色シルトを充填した上に黒褐色シルトを乗せ、最上位に黄褐色粘土を被せている。上面は被熱して明赤褐色に変色している。炉の上面は床面に比べ最大で７cmほど高まっている。

炉の上面は平坦面を備える。この平坦面は少なくとも４か所にあり、中央の二つが他よりも３～４cm高く造られている。被熱による破損や後述する拡張の影響などもあって、より上位に造り足されているようにみえる。最終面は北東にあたる部分で、直径40cm程度の不定型に造られ、西縁は中心部より１～1.5cmの土手状のわずかな高まりをもつ。

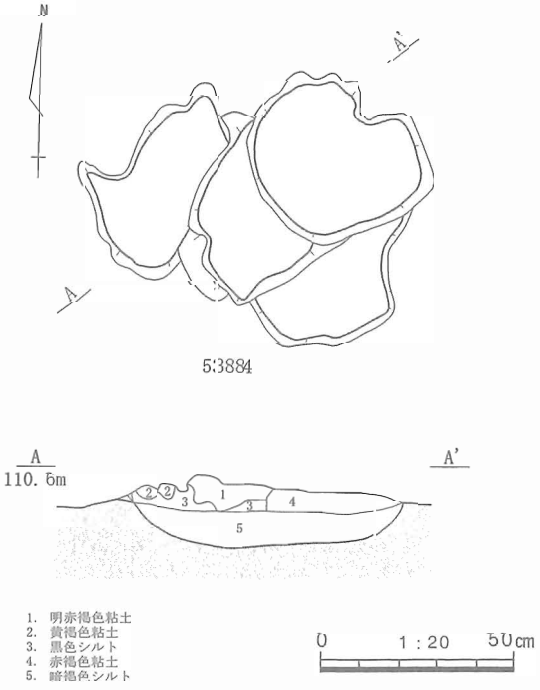
貯蔵穴は南東側の縁で、壁溝を一部で切る位置に設けられている。貯蔵穴SK53892は直径80～85cmの円形状を呈し、底面は平らに整えられて43cm程度の深さがある。東側には深さ11cmほどの半月形の浅い



第43図　SH50800その３平面・断面図（床面）



第44図　貯蔵穴SK54539遺物出土状況・遺物実測図



第45図　炉53884平面・断面図

段があり、蓋受けのような作り出しである可能性がある。内面からは土器片が出土している。掘方で検出された壁溝の位置から、この貯蔵穴はその３の最終段階に伴うものと考えられる。

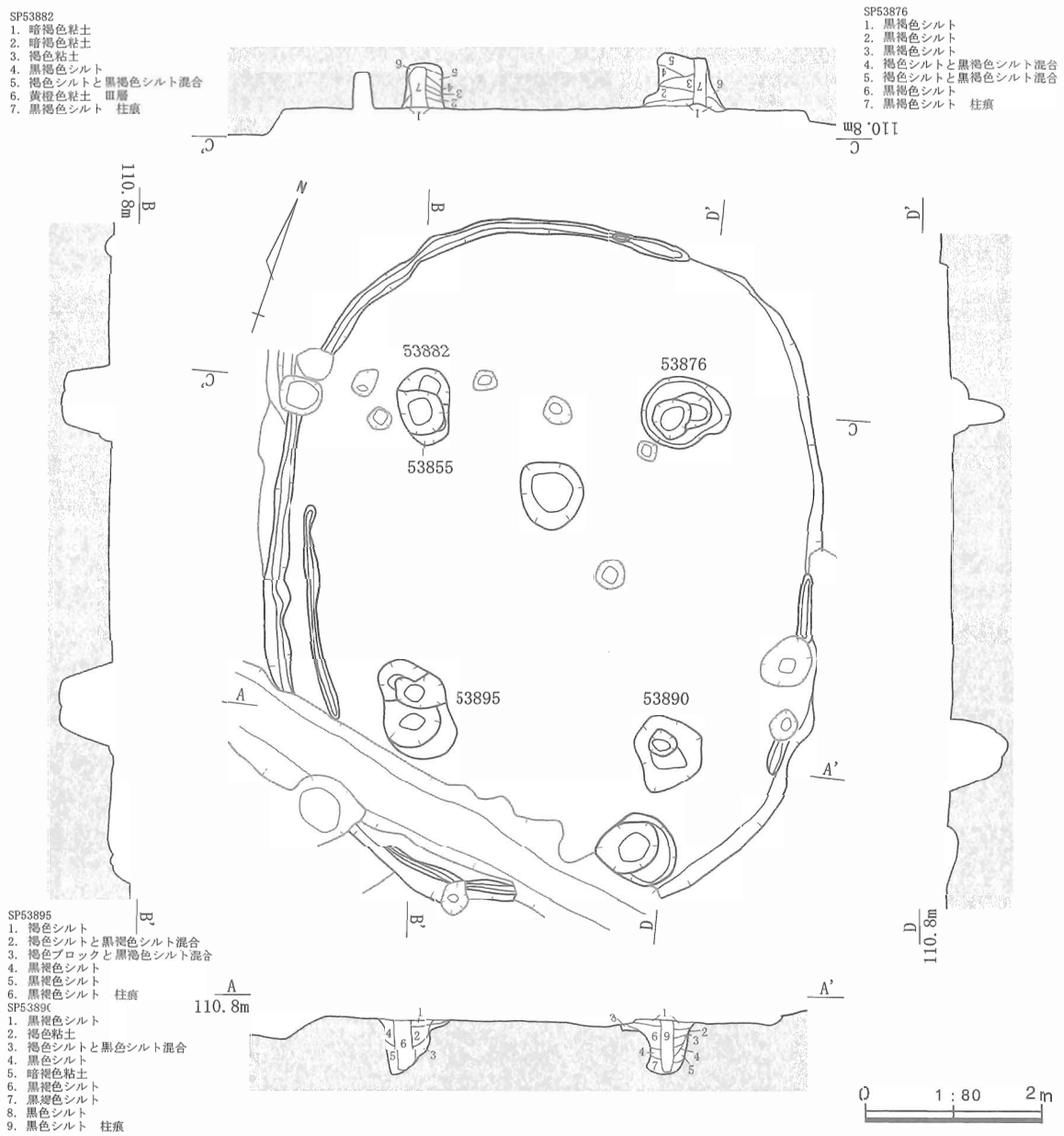
壁溝は西～南東側、北～南西側で検出されている。掘方段階で明らかになった場所もあるので、本来は全周に近い状態であったろう。幅は15～20cmで、３～10cmの深さがある。

住居の掘方は、その１から継続的に造られていることもあり、底面はその１の床面相当の高さで整えられている。新たに溝を設けることもない。西側では、立ち上がりに沿う壁溝から20cmほど内側に壁溝とみられる細い溝が掘られている。幅６～16cm、深さ２～４cmの規模がある。これはその３の当初段階に設けられた壁溝の一部であろう。一回り大きく拡張しているがために床面も上下２枚に造り分けられている。

柱穴の掘方は少なくとも４か所で検出され、それぞれはいずれもいくつかの切り合いをもっている。北西側にあるSP53882は南北に間口・深さともにほぼ同規模の柱穴二つが切り合っている。北側部分の断面で柱痕が検出されていることからも、南側から北側に挿げ替えられていると考えられる。SP53876では東側に切り合う直径42cmの柱穴の断面に柱痕が認められる。西側から東側へ挿げ替えられているのだろう。南側にあたるSP53890・53895でも同様に挿げ替えられた柱痕が認められる。これらの傾向は、当初に設けられた柱が住居の拡張に伴ってわずかに外側へ移されて、最終位置の柱は掘り抜かれることはなかったことを示している。柱穴の間隔は、当初段階には長手方向に芯々で3.2～3.8m、短手方向に同様に2.9mであったものが最終段階には長手方向に3.9～４m、短手方向に３～3.1mに変更されている。この拡張によって柱で囲まれた範囲はおよそ２㎡広くなっている。

【遺物】その１の貯蔵穴SK53886から16が、その３の床上覆土から17～19が出土している。これらの他、その３の貯蔵穴SK53892から土器片が出土している。

16は口縁部が意図的に欠き取られているほかは形状を良く残している。貯蔵穴の底面から５cm程浮いた位置で、壁面によりかかるようにあった。口縁部がすべて欠かれていたことは、壺としての機能を失わせて廃棄されたことを示しているのだろう。外面はハケ調整で整えた後に胴部上半に縄文を施す。文様の上位は結節をもつ縄による羽状縄文であり、下位には同等な原体を用いた縄文が付けられる。この後に、体部下位には横方向のミガキが施され、縄文の末端をきれいに整えている。頸部には縦方向のミ



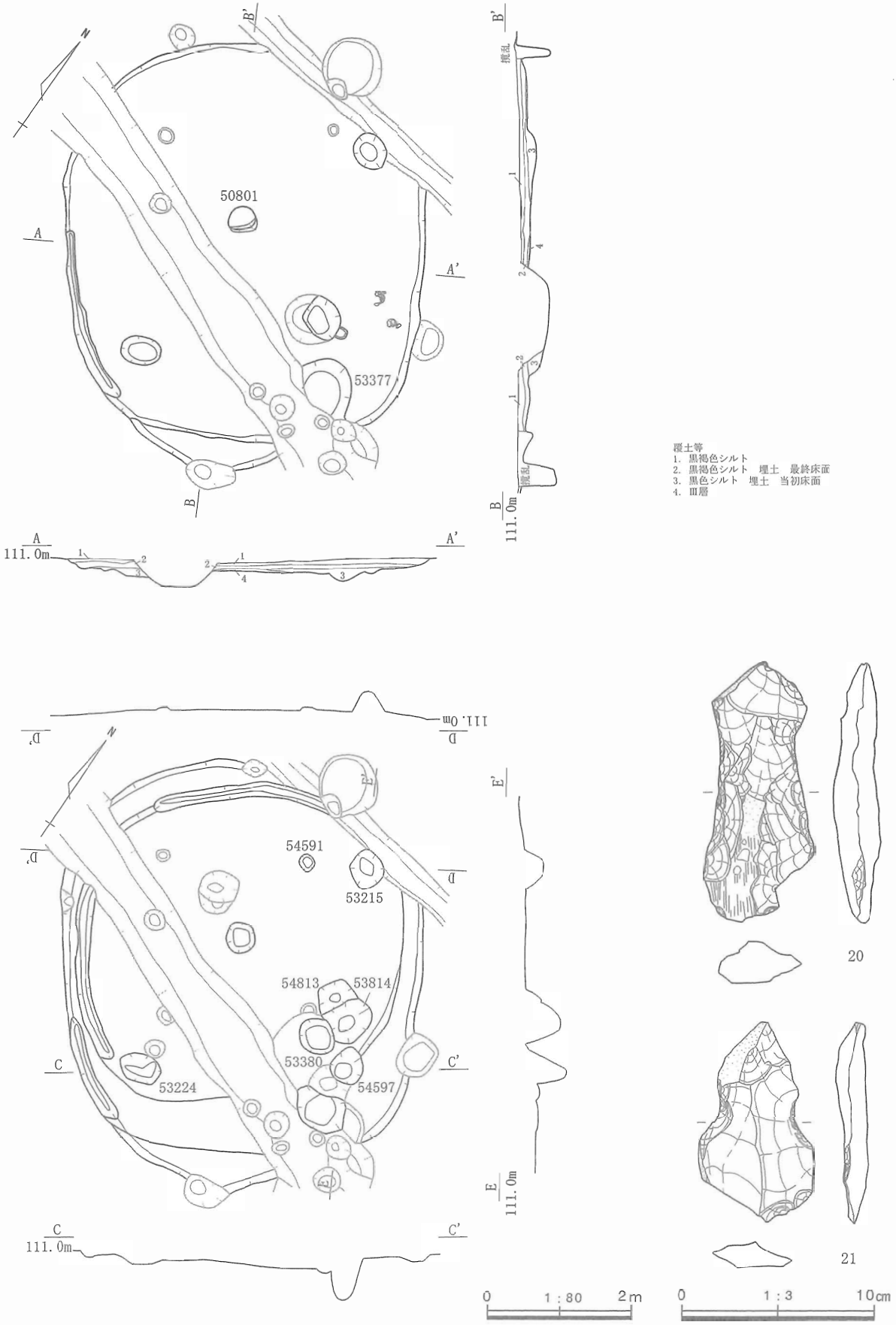
第46図　SH50800その３平面・断面図（掘方）

ガキが連続して施され、縄文の上端を整えている。このミガキによって表面はある程度平滑に整えられるが、ハケ目を消し切ることはできずに一部下地のように残っている。内面の底部には反時計回りにハケ調整を施している。体部下位から頸部にかけてはナデ調整が主体で輪積み痕が消し去られることなく残っており、一部に指頭痕が観察される。頸部内面から口縁部にかけては外面に使用されたものと同等の原体による縄文が施される。

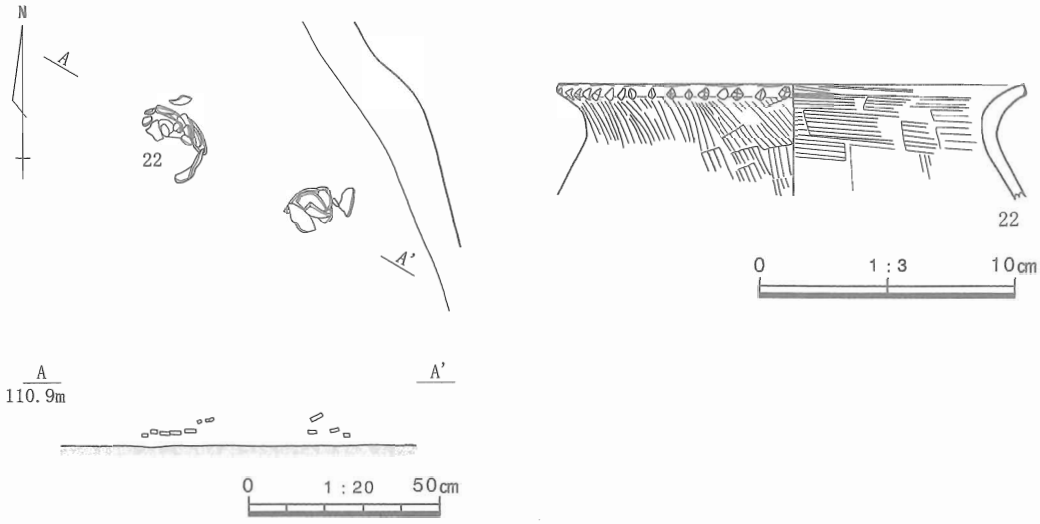
17・18は壺の底部片である。内面はいずれも反時計回りのハケ調整で整えられている。外面はハケ調整が主体であるが、17には横方向のミガキが加えられ、平坦に整えられている。

19は複合口縁をもつ壺の口縁部である。外面はハケ調整で整えられる。頸部は縦方向、口縁部外面には横方向に施された後に縦に棒状の浮文を貼り付ける。内側は横方向の板ナデで平滑に整えられる。

その３の貯蔵穴SK53892から出土した土器は、掌大以下の甕の破片が主体であり図示できなかった。多くは半月形の段の底面に近似した高さから出土している。住居が廃棄される際に投棄されたものとすれば、貯蔵穴はおおかた埋められていたことになる。



第47図　SH50801・54598平面・断面図（床面）

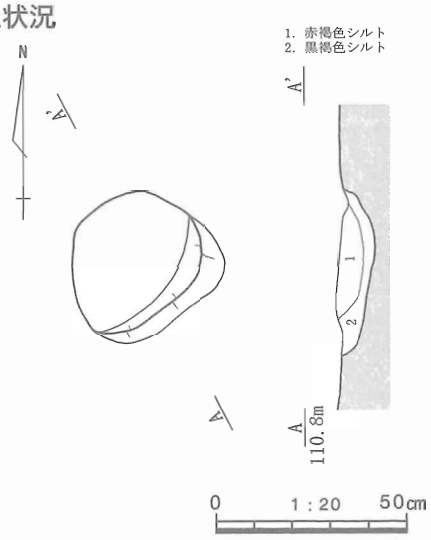


第48図　SH50801・54598遺物出土状況

SH50801・54598（第47～50図）

【遺構】M18～M19グリッドで検出された。中央南側を溝SD50838に、北側一部を耕作に伴う溝状の撹乱に壊される。2～7cmの床上覆土下に、複数回の拡張を伴う住居の構造を確認した。

最終面（第47図上）の床面は住居のほぼ全域で確認している。住居の中に2～5cmの厚みで当初面の床面上に敷き均された黒褐色シルトの上面が1cm程度の厚さで硬化するが、掘方埋土と同質のため境は漸移的である。当初面（第47図下）の床面は、Ⅲ層に起因する明黄褐色の粘土粒を多量に含んだ黒色シルトを住居の掘方内に1～16cmの厚みで敷き均した上面1cm程度に相当する。最終面の床面と同様に掘方埋土との境は漸移的である。



第49図　SH50801炉平面・断面図

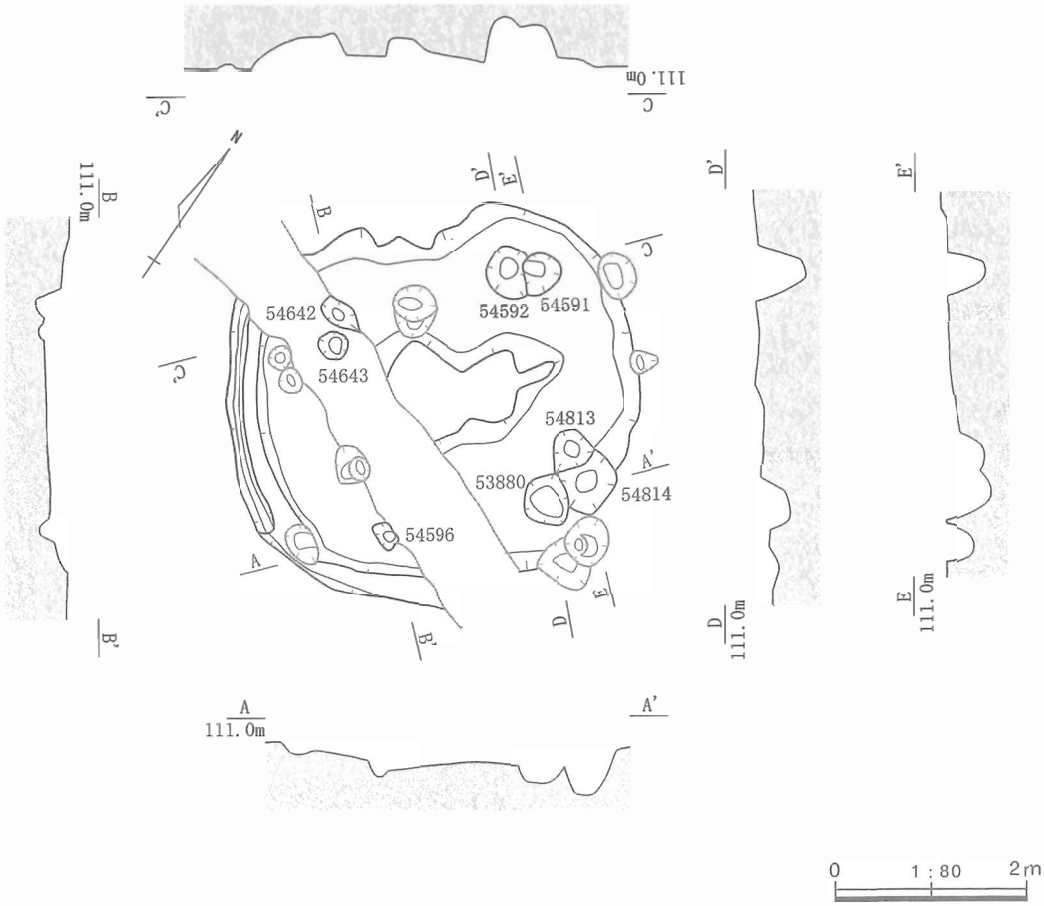
柱穴は最終面の床面上ではSP53380が該当すると考えられ、当初面ではSP54591の位置に柱痕と考えられる直径20cmの脆弱な土が入る円形のプランを見出した。その他の柱穴は掘方上で特定している。

炉は住居の中央やや奥側に検出された。直径40～45cm、深さ11cm前後の円形状の掘方内に黒褐色シルトを充填している。上面は平坦で南東側にわずかな高さの土手を備えている。炉はこの他の場所に見当たらないので、建築当初から同じ位置で使用されていたものと考えられる。

壁溝は最終面の床面に伴うものとしては南側に検出された。幅10～20cm、深さ3～4cmとなる。当初面に伴う壁溝は最終面の壁溝の内側に検出された。幅20cm前後、深さ2～6cmである。当初面の壁溝とその延長上にみられる立ち上がりの範囲から、当初面の住居は直径4.4～4.5mの円形状を呈することが把握された。これら壁溝と床、立ち上がりのプランから考えると、当初面の床をもつ円形状の住居から最終面の床をもつやや楕円形状の住居に拡張され、さらに南東側に50cm程度張り出しを作るという変更が加えられていると見てとれる。

貯蔵穴はSK53377が該当するものと考えられる。これはその位置から最終面の床面に伴うものと判断される。直径65～80cmの楕円形状であり、30cm程度の深さがある。

住居の掘方は当初の床面に伴うものである。直径4～4.35mのひしゃげた円形を呈し、中央に平坦な部分を残して周囲に溝を巡らせる。溝は幅0.9～1.6m、深さ2～7cmで、ドーナツ状に全周する。南側



第50図　SH50801・54598平面・断面図（掘方）

には住居の立ち上がりとの間に17～25cmのテラス状の平坦部を残している。

柱穴の掘方は直径45～60cmの円形をなし、多くの部分で切り合いがある。北側にあるSP54591・54592は近似した深さで、外側へ柱が挿げ替えられているものと考えられる。西側のSP54642・54643は溝に切られて形状が変わっているが、同様な切り合う柱穴であったろう。SP53380・54813・54814も深さの近似する柱穴でやはり東側への拡張に伴って掘り直されていると考えられる。SP53380は当初の床面に伴う貯蔵穴の可能性もある。柱穴の間隔は長手方向で芯々に1.95～2.3m、短手方向で同様に1.8～2.3mとなり、柱で囲まれる空間はほぼ正方形となる。

【遺物】遺物は最終床面上から土器が、掘方埋土から打製石斧が出土している。

20・21は掘方埋土から出土した打製石斧である。いずれも基部は原礫面の方向から加えられた粗い調整によって尖頭状に作り出されている。20は両側縁に細かな調整を加えてなだらかな屈曲を作る。表面の先端部から中央部にかけては原礫面を残している。先端部のおよそ半分は節理に沿って割れて失われている。残存する先端部には細かな使用痕が肉眼でも観察される。21は20と同様に、基部により近い両側縁に細かな調整を加えてくびれを作り出している。先端部は節理に沿って大きく折れて失われている。これらは縄文時代の遺物であり、住居の建築に際して混入したものと思われる。

22は台付甕の頸部～口縁部片である。床面上にまとまって出土しており、住居の廃棄に伴って壊された甕の一部が置かれている。胴部以下の接合する破片が含まれないことから、すべての破片を同じ位置にとどめ置くことを避けているようである。外面は垂直気味の斜め方向にハケ調整を施している。口唇端部にはハケ工具による連続する刺突を施す。内面は頸部以下に横方向の板ナデを施して平滑に整え、その後に口縁部内部に横方向のハケ調整を加えている。

SH50610（第51～53図）

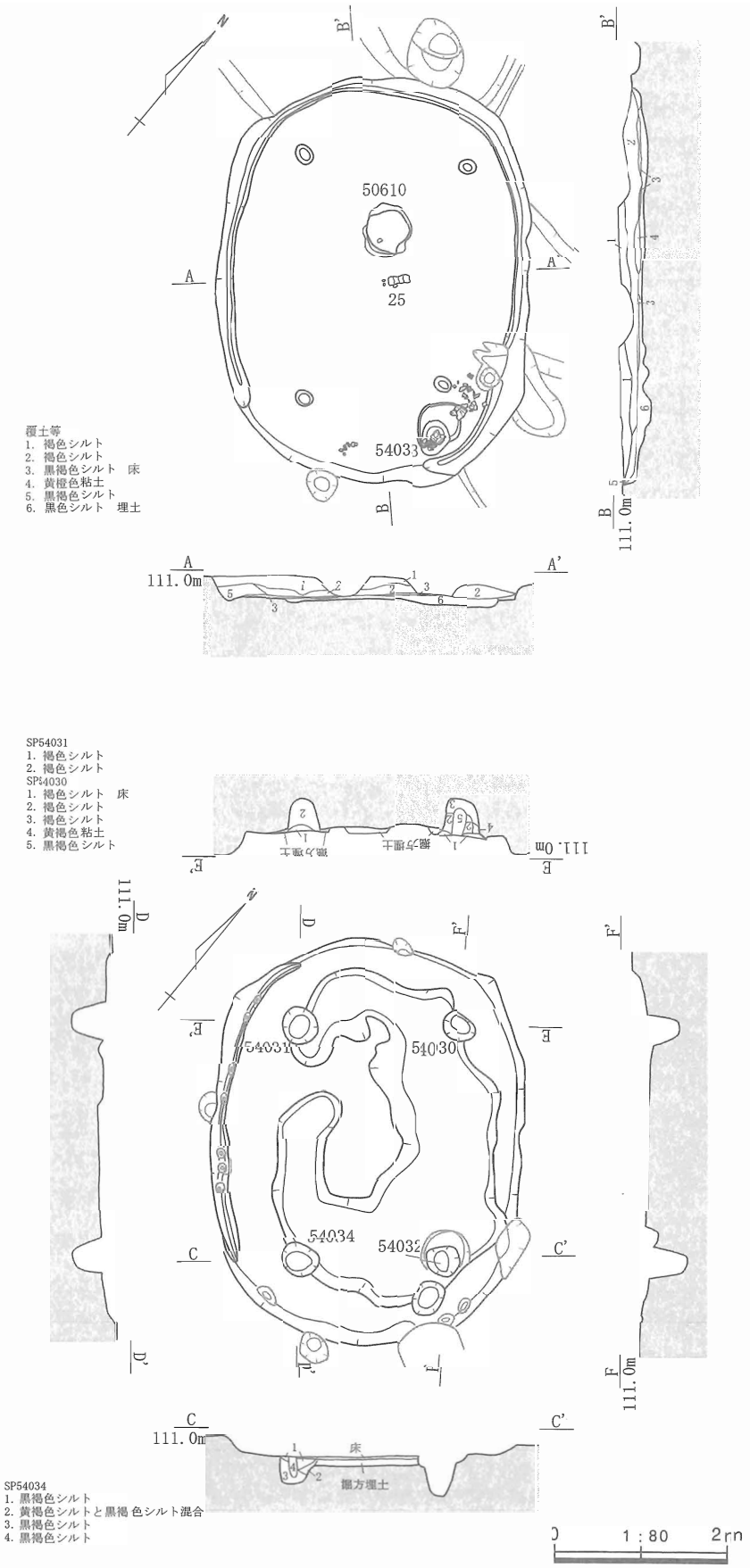
【遺構】L19～M19グリッドで検出された。覆土の一部が耕作によって撹乱されるほかは比較的良好に残存し、全体形状が把握できる住居のひとつとなっている。また、拡張もなされていない。

床面は、覆土である厚さ20cm前後の褐色シルト下で、住居のほぼ全面にわたって検出された。黒褐色シルトを材料に使用し、厚さ２～４cmに硬く敲き締められている。床面上には脆弱な覆土による直径15～20cmの円形ないしは楕円形のプランが４か所観察された。これらは柱痕跡と考えられる。

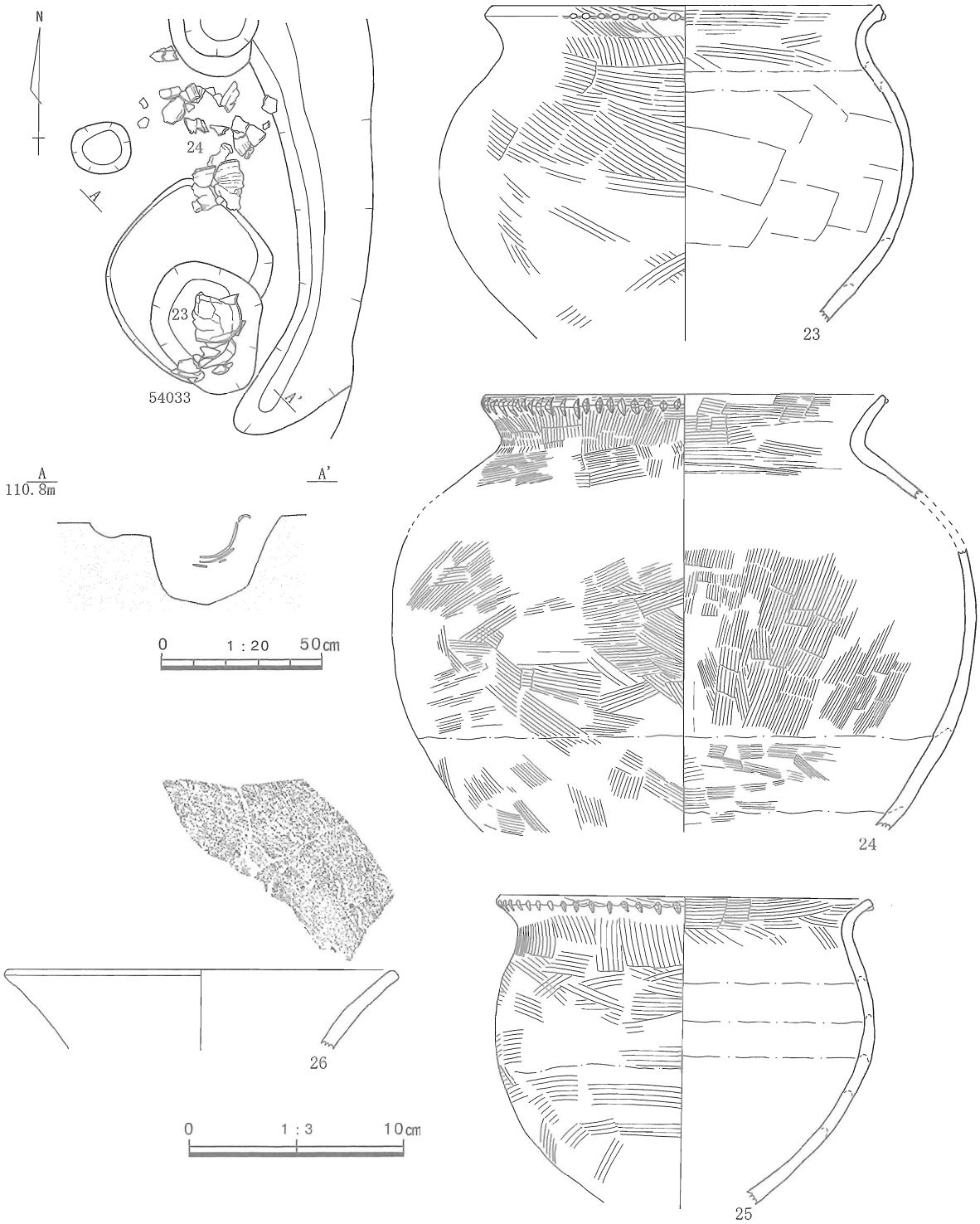
壁溝は幅15～30cmで、北側・西側・東側で太くなる部分がある。深さは３cm前後と浅い。南側から南東側の壁溝は検出されなかった。土層断面の観察でも認められないので、掘られていない可能性が高い。

炉は住居の中央やや奥側に設けられている。直径50cm前後の円形状を呈し、頂部は平坦で北寄りに高さ２cm程度の土手状の高まりをもつ。掘方は炉よりも若干小さな直径45cm前後の円形であり、内部に褐色シルトを充填している。縁辺は床面の高さよりも高い位置に盛り上がるが、床面上に張り込まれることはなく、相互が計画的に構築されていることが分かる。

貯蔵穴は、住居の西側縁に設けられている。SK54033は直径35～44cmの楕円形状で、深さはおよそ30cmである。北側に長軸



第51図　SH50610平面・断面図（床面・掘方）

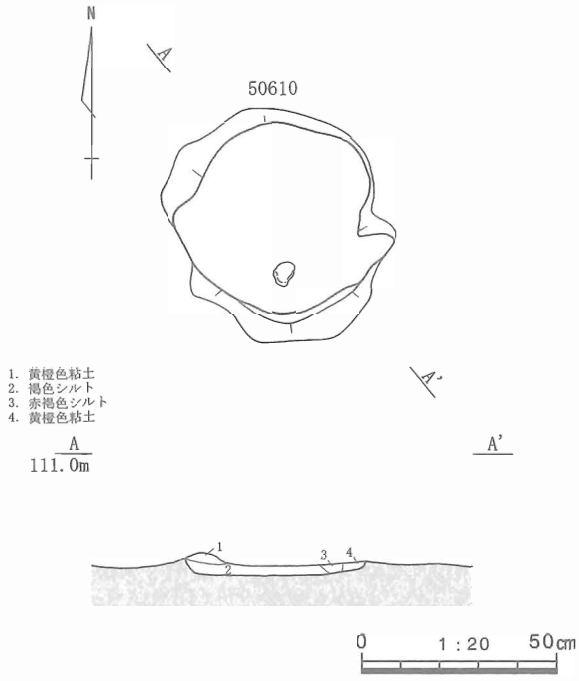


第52図　貯蔵穴SK54033遺物出土状況・遺物実測図

52cm、短軸45cm、深さ３～５cmの長方形状で浅い土坑が付属している。この土坑の一辺は貯蔵穴の中心部分に相当し、貯蔵穴にかける蓋の受け部などの用途があったのかもしれない。内部から北側にかけて土器片が散乱するように出土している。

住居の掘方は底面を平らに整え、内部に馬蹄形状の溝をもつ。内面には黒色シルトを４～32cmの厚みで入れて上面を均した上に床面を設ける。溝は住居の掘方下端から最大で0.65m離れており、やや東側に偏っている。幅は0.45～1.55mで、東側が著しく太く、上端のラインも蛇行する部分が至る所に認められる。深さは６～10cmで、ほぼ一定している。

柱穴の掘方は直径35～45cmの円形ないし楕円形で、住居掘方の溝外側に沿うように設けられている。柱の掘抜き穴は伴わず、柱穴SP54030と54034には太さ10～14cmの柱痕と考えられる堆積を断面で確認しているので、柱の抜き取りは行われていないものと考えられる。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.8m、短手方向に同じく1.8～1.9mとほぼ揃っている。



第53図　SH50610炉平面・断面図

【遺物】遺物は貯蔵穴SK54033とその北側の床面上から土器が出土している。

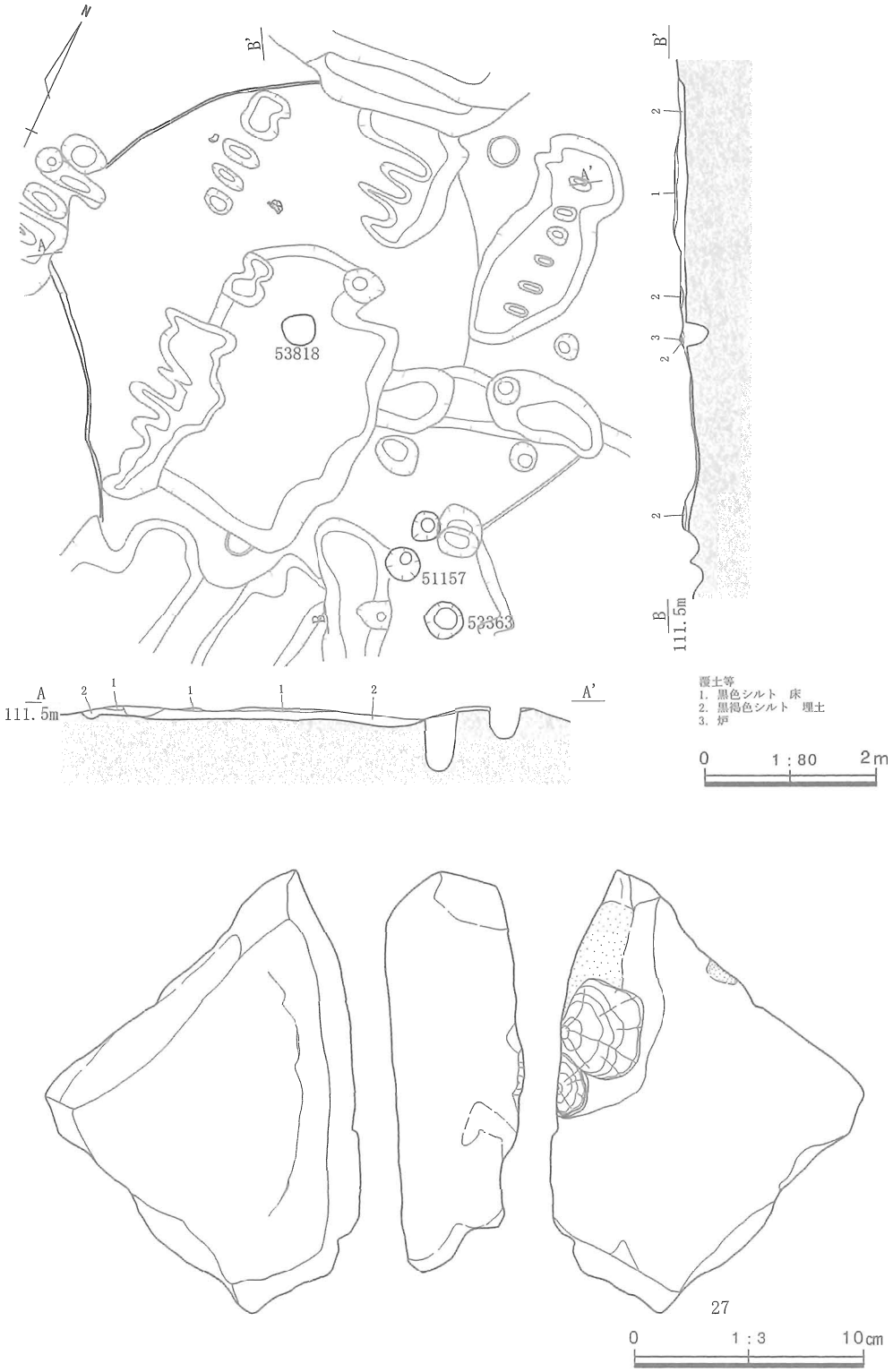
土器は大小の甕が主体である。３個体分の体部～口縁部片が混在して、貯蔵穴の内側と貯蔵穴に伴う方形土坑の北側に分かれて捨てられていた。貯蔵穴の内部には23が入れられていたが、破片の内面が上を向くように重ねられていた。24・25の多くは方形土坑の脇に散らばるようにあり、その場で潰されたようにみえる内面同士を合わせる部分もある。さらに、25の口縁部は炉の脇から打ち捨てられたように出土している。いずれの甕も台部が失われており、別の場所で破壊されたものが遺棄されているようにみえる。

23はやや小ぶりな甕である。外面はハケ調整が全面に施される。体部の中位は横方向に、下位と上位は別方向の斜めに、頸部以上は縦方向に施される。口唇部にもハケ調整で断面が矩形となる面を作り出し、縁辺にハケ工具を用いた刺突を連続して加える。この調整方法は、37などと同様な流儀で行われていることが分かる。内面は口縁部に横方向のハケ調整を加えるが、体部はおよそ横方向の板ナデで平滑に整えられる。

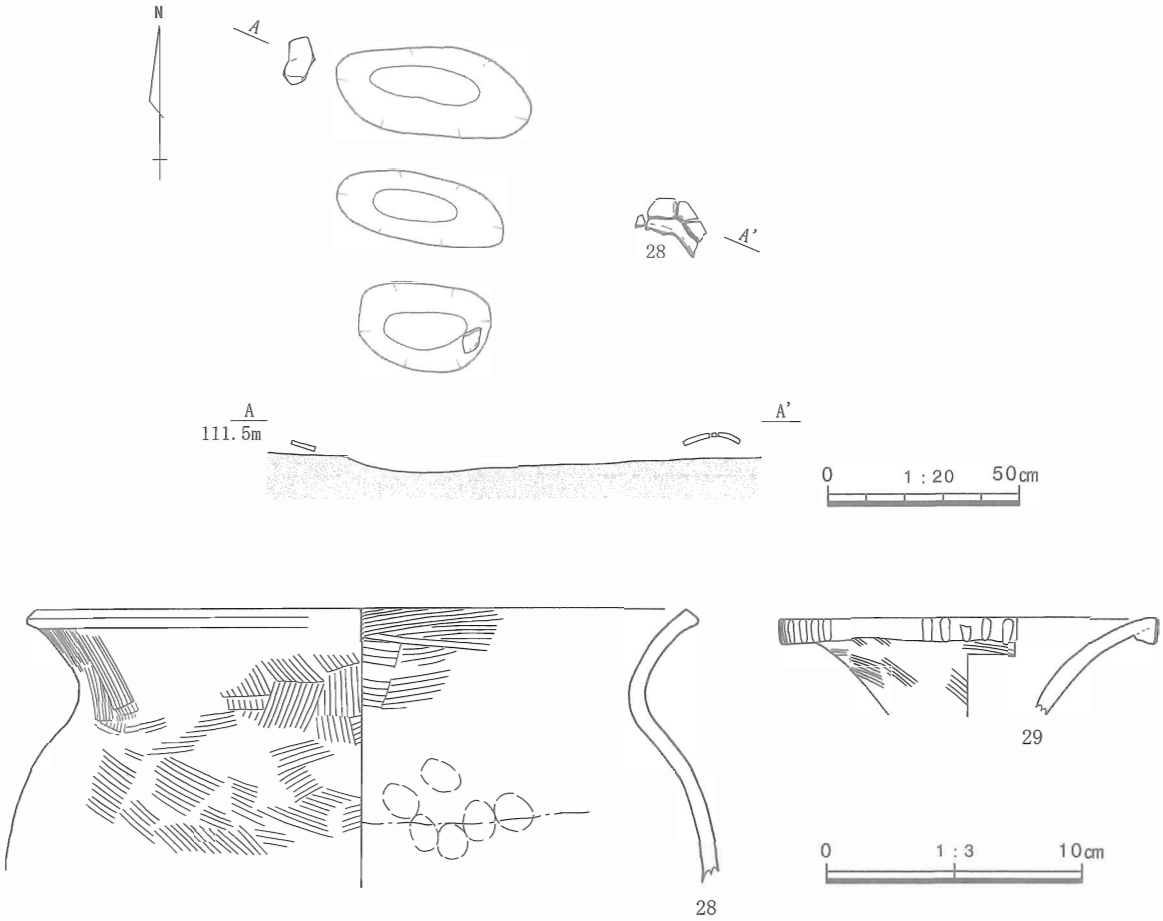
24は大形の甕であり、体部と口縁部の接合点を直角にとり、直線状に立ち上がる口縁部を設ける。体部上端は接合しないが、形状等により同一個体であると断定した。体部外面はハケ調整によって整えられる。調整の流儀は23と同一である。内面は体部下位に横方向のハケ調整を施した後、体部中位に下から上に連続するハケ調整を掻き上げるように施す。口縁部から頸部にかけて横方向のハケ調整を加えている。

25はやや小ぶりな甕である。体部の張りが23に比べて乏しくすんなり立ち上がっている。外面の調整はハケ調整により、23・24とおよそ同じである。頸部の接合面が23に比べ滑らかであるせいか、体部上端から口唇部にかけて縦方向のハケ調整を一度で行っている。内面体部にはハケ調整が目立たず、もっぱら横方向のナデで平滑に整えられている。

26は壺の口縁部片である。口唇端部を矩形に整える素縁とする。内面には結節のある縄文を施文する。外面の調整は風化のため明らかでない。



第54図　SH51147平面・断面図（床面）・遺物実測図



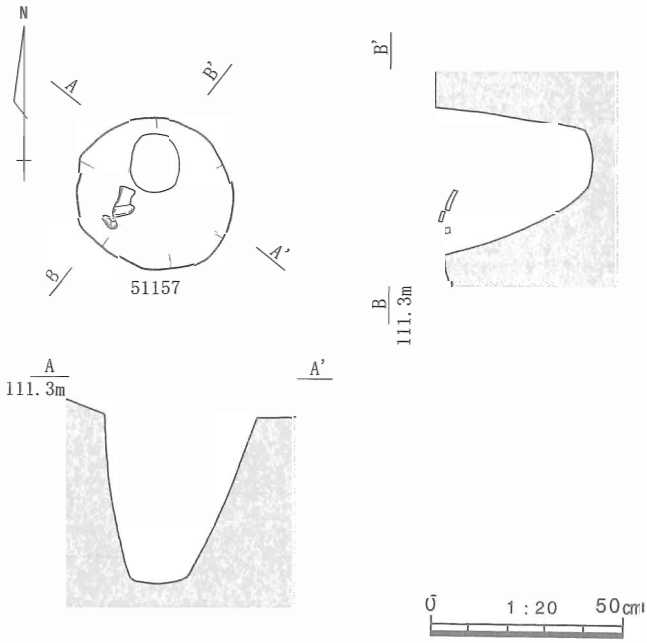
第55図　SH51147遺物出土状況

SH51147（第54～57図）

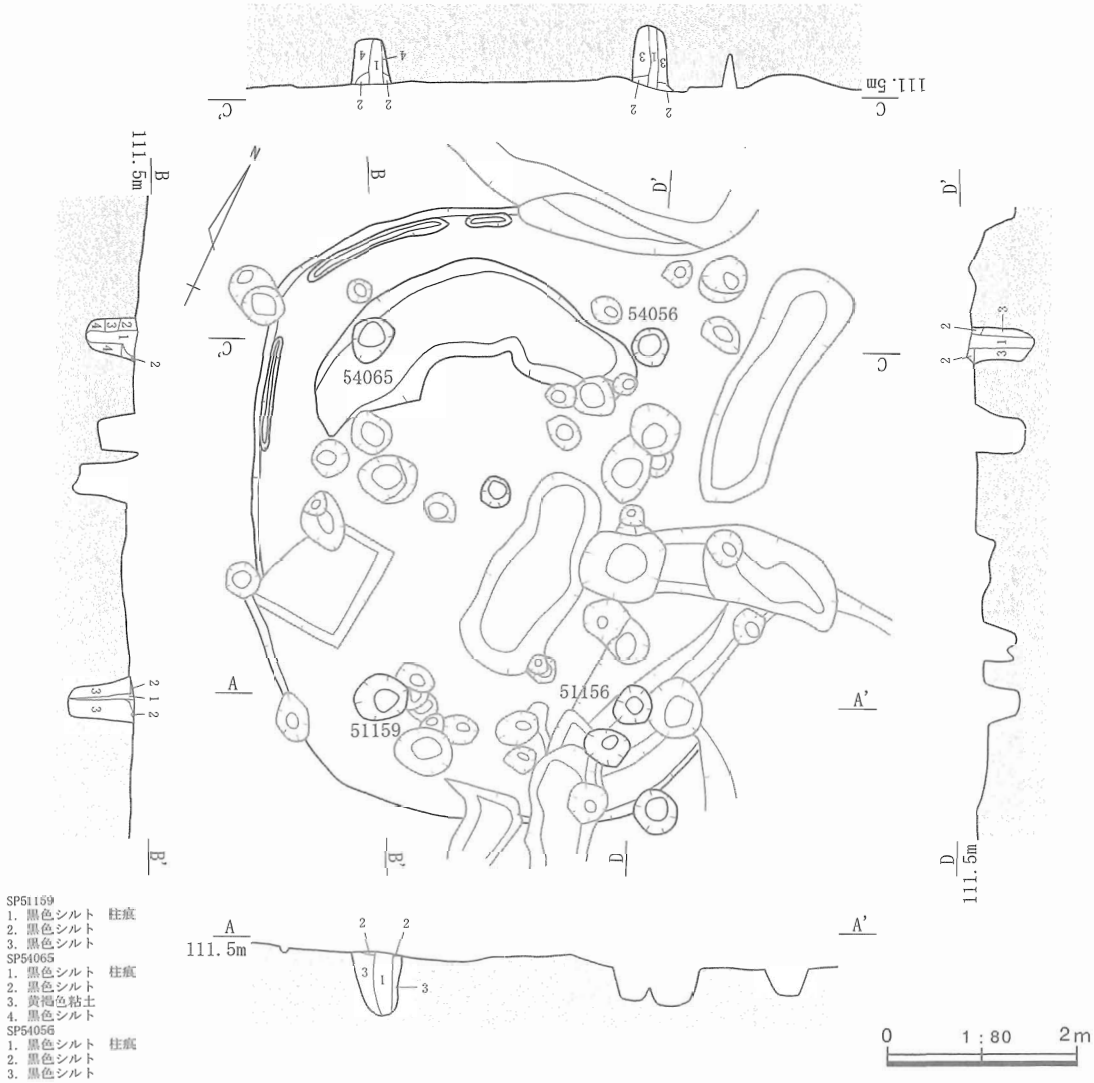
【遺構】Ｊ21～K21グリッドで検出された。南側を中心に耕作や方形周溝墓の溝によって壊されている。検出面が床直上であったので、床上の覆土や住居の立ち上がりは失われる。

床面は北側に検出された。黒色シルトを材料に、２～４cmの厚さで硬く敲き締められる。床面上で柱痕は検出できなかった。

炉は住居の中央やや奥側に設けられる。耕作の撹乱に壊され、炉床は失われている。掘方は直径35～38cmの円形状で、深さは30cmと比較的深い。内面には黒褐色シルトを充填し上面が熱染みで赤化していた。壁溝は掘方内で存在を把握している。



第56図　小穴SP51157遺物出土状況



第57図　SH51147平面・断面図（掘方）

住居の掘方は底面を平らに整えて、北側に溝を設けている。溝は幅0.8～1.1mで、深さは最大２cmとごく浅い。壁溝は住居の北～西側の縁に沿って設けられている。幅10～14cm、深さ１～４cmとなる。

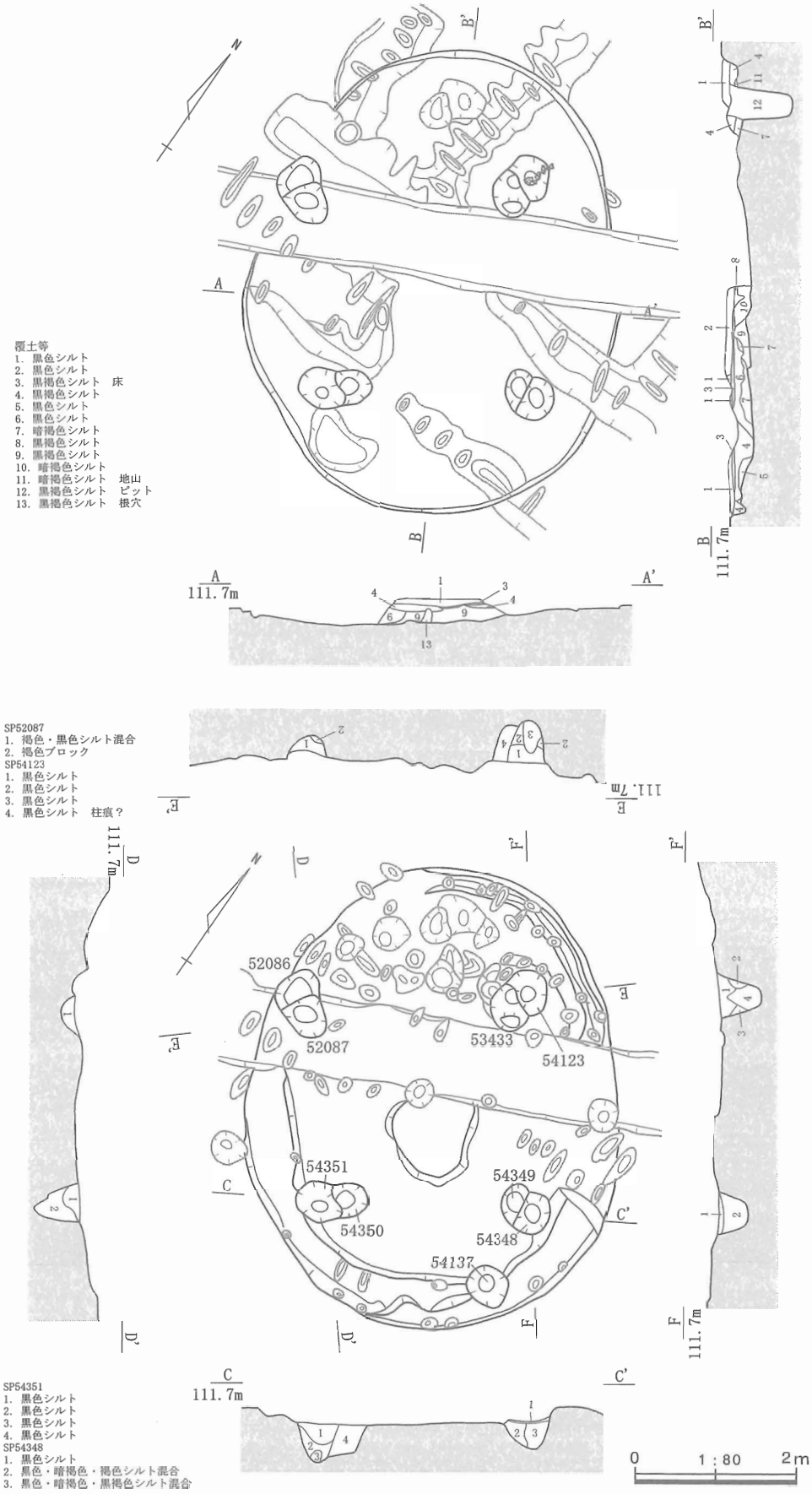
住居の南側縁沿いにある土坑SK51157は位置関係から貯蔵穴である可能性が高い。直径39～43cmの円形状を呈し、40cmとやや深く掘られている。掘方の上位から土器が出土している。

柱穴の掘方は４か所で検出された。直径40～57cmの円形状で、撹乱内から検出されたため一緒に掘り上げてしまったSP51156以外の断面にはいずれにも柱痕が観察される。柱穴の間隔は長手側には芯々で3.8m、短手側には 同様に2.6～2.9mとなる。

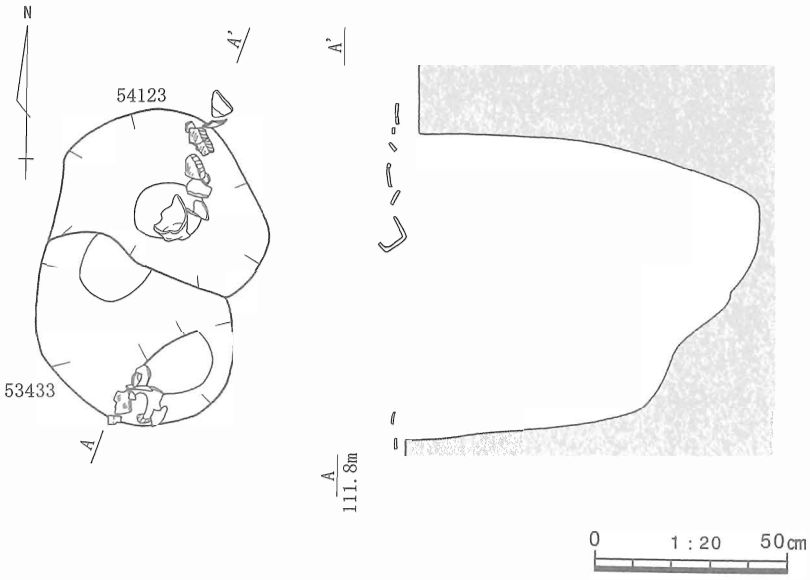
【遺物】遺物は床面上と貯蔵穴と考えられる土坑SK51157内から土器と石製品が出土している。

28・29は床面上から出土した。28は台付き甕の胴部～口縁部片である。外面は全面をハケ調整で整え、胴部は斜め方向に、頸部から口唇部にかけては縦方向に施される。口唇端部の刻みはわずかな窪みとして捉えられる。内面は口縁部に横方向のハケ調整が加えられる。体部はナデにより平滑に整えられるが輪積み痕が残り、その周囲に指頭痕が密に付く。29は壺の口縁部である。外面はハケ構成で整えられる。口縁部は折り返し口縁を備え、外側に直立する面に５本で１対の縦長の浮文を等間隔に貼り付ける。

土坑SK51157内からは甕の破片が出土している。底面からかなり浮いた位置にあるので、破片が捨てられた時点では土坑が埋められている可能性がある。27は土坑SK53363内から出土した台石である。



第58図　SH50001平面・断面図（床面・掘方）



第59図　柱穴SP54123付近遺物出土状況

SH50001（第58～59図）

【遺構】M25～L25グリッドで検出された。ほぼ中央を確認調査トレンチTI－4によって壊されるほか、茶畑の天地返しによって特に北側が大きく撹乱されている。そのため、主に確認調査トレンチ以北は掘方を検出するに留まった。

床面は確認調査トレンチ以南で部分的に検出された。黒褐色シルトを利用し、厚さ１～２㎝に硬く敲き締められている。南側の柱穴二つは床面上で検出されているが掘方上で確認された規模と同等なので、柱の再調整によって柱穴自体が再掘削されている可能性を感じさせる。

炉は検出されていない。ちょうど炉があるべき位置に確認調査トレンチが掘削された影響で把握されていないものと思われる。壁溝・貯蔵穴は撹乱等の影響もあり床面上で把握することができなかった。これらの存在は掘方の掘削の際に明らかになっている。

住居の掘方は中央部分の一部を平らに残し、周囲に幅広の溝を備えている。溝の存在は確認調査トレンチの南側で明らかである。北側ではSP54123付近に一部が残存しているのみで、溝は確認調査トレンチ付近で途切れて全周していなかった可能性もある。幅1.4m、深さ１～６㎝となり、住居の立ち上がりとの間に0.4～0.6mほどのテラス状の平坦面を残している。住居の掘方内には黒色～黒褐色シルトを25㎝程度と比較的厚く入れて上面を平らに均した上に床が張られている。

柱穴はこの溝の外側の立ち上がりに沿う位置に掘削されている。いずれも直径50㎝前後の円形を呈し、４か所のいずれにも近似した規模の小穴が切り合っている。北側に位置する柱穴SP54123は南側にある似た深さの柱穴SP53433を切っており、北側にずらして柱が挿げ替えられたものと考えられる。南側のSP54350・54351、SP54348・54349も同様の関係が見受けられる。北西側のSP52087 と切り合う小穴SP52086は浅いので、抜き取り穴であろう。いずれの柱穴の断面にも柱痕は確認できなかった。抜き取りの際に柱穴自体も一旦掘り抜かれている可能性を感じさせる。柱穴の間隔は長手側で芯々に2.4～2.75m、短手側で同様に2.2～2.8mと囲まれる空間は正方形に近いものとなる。

壁溝は掘方の北側に底面が検出された。幅17～20㎝、深さ５㎝前後となる。住居の南側では明らかでなく存在していたか判然としない。

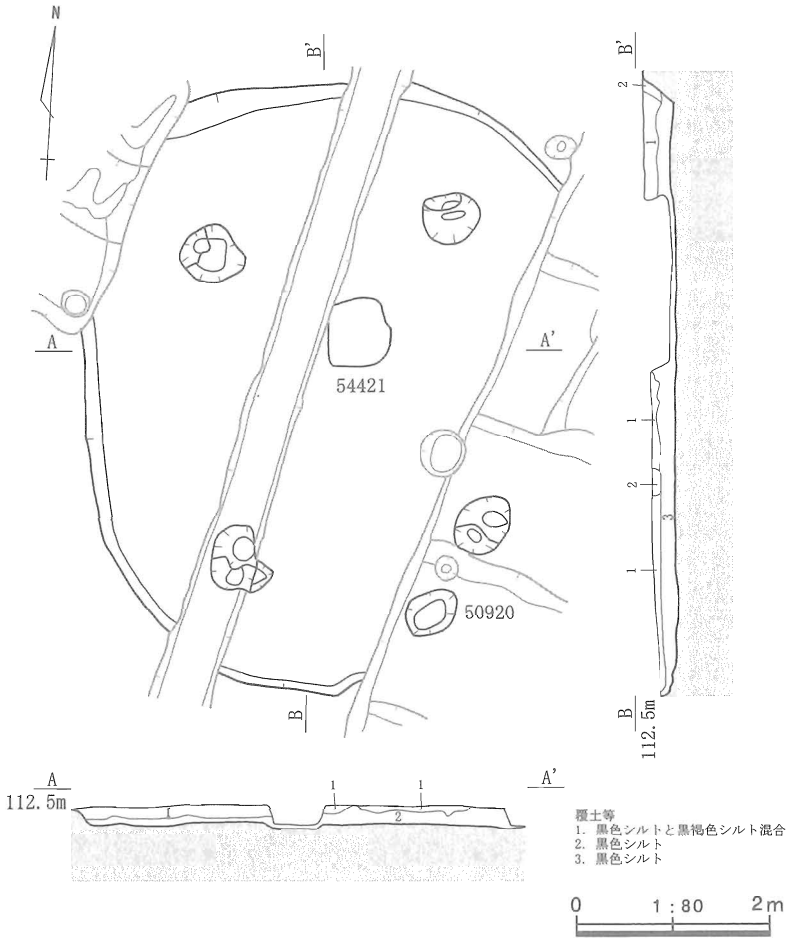
貯蔵穴SK54137は南東側の隅に設けられている。丁度天地返しによる撹乱と重複していたので床面ではうまく見いだせなかった。掘方上では直径50～55㎝の円形状で13㎝の深さがある。床面の高さとの差を見込むと35㎝ほどの深さがあったものと考えられる。

【遺物】遺物は壺と甕の破片が柱穴SP54123、53433付近から出土している。いずれも底面からかなり浮いた住居の掘方底面に近い位置にある。特にSP54123では柱穴の中心付近という柱の存在に抵触しそうな位置にある。柱を抜き取る際にできた空間に土器を捨て込んでいるものと考えられる。これらは接合しなかったため図化することは叶わなかった。

SH50919（第60～62図）

【遺構】Ｊ25～Ｋ26グリッドで検出された。ほぼ中央を農道に伴う埋設物により、東側の1/6程度を農地の天地返しによって壊されている。検出面で床面の一部が露出する状況であった。

床面は、耕作等によって失われた部分が広いが、把握された住居のプランの全面にわたって点々と残っているので、本来はほぼ全面に張られていたものと思われる。黒色シルトを用い１cm内外の厚みで硬く敲き締められている。床面に相当する高さで柱穴を２か所検出している。これらの間口は掘方で検出したものとほぼ同等で、断面でも柱痕が観察できなかった。柱を抜き取られた後のかたちを示している。



第60図　SH50919平面・断面図（床面）

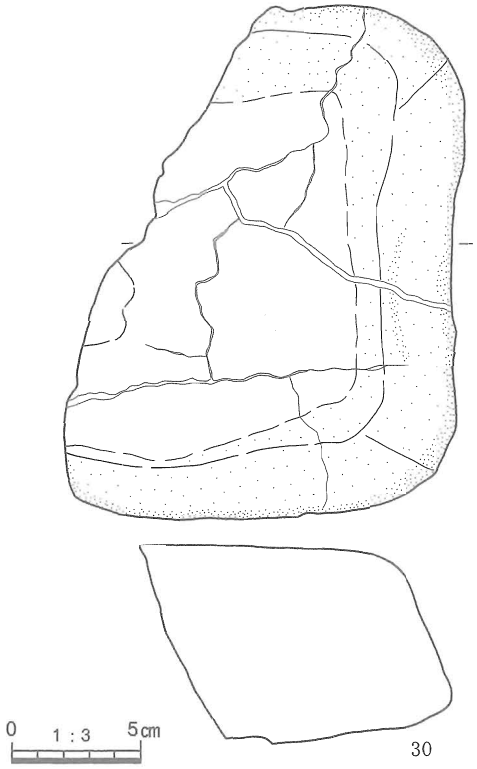
炉は住居の中央やや奥側に設けられている。長軸71cm、短軸63cm、深さ５～15cmの方形の土坑を掘方とし、内部に黒褐色シルトを充填する。中央付近が直径40cm前後の円形状にへこんでいる。このへこみの周囲は焼けて赤褐色に変色している。

壁溝は掘方上で存在を確認していたが、床面に相当する高さで検出することができなかった。

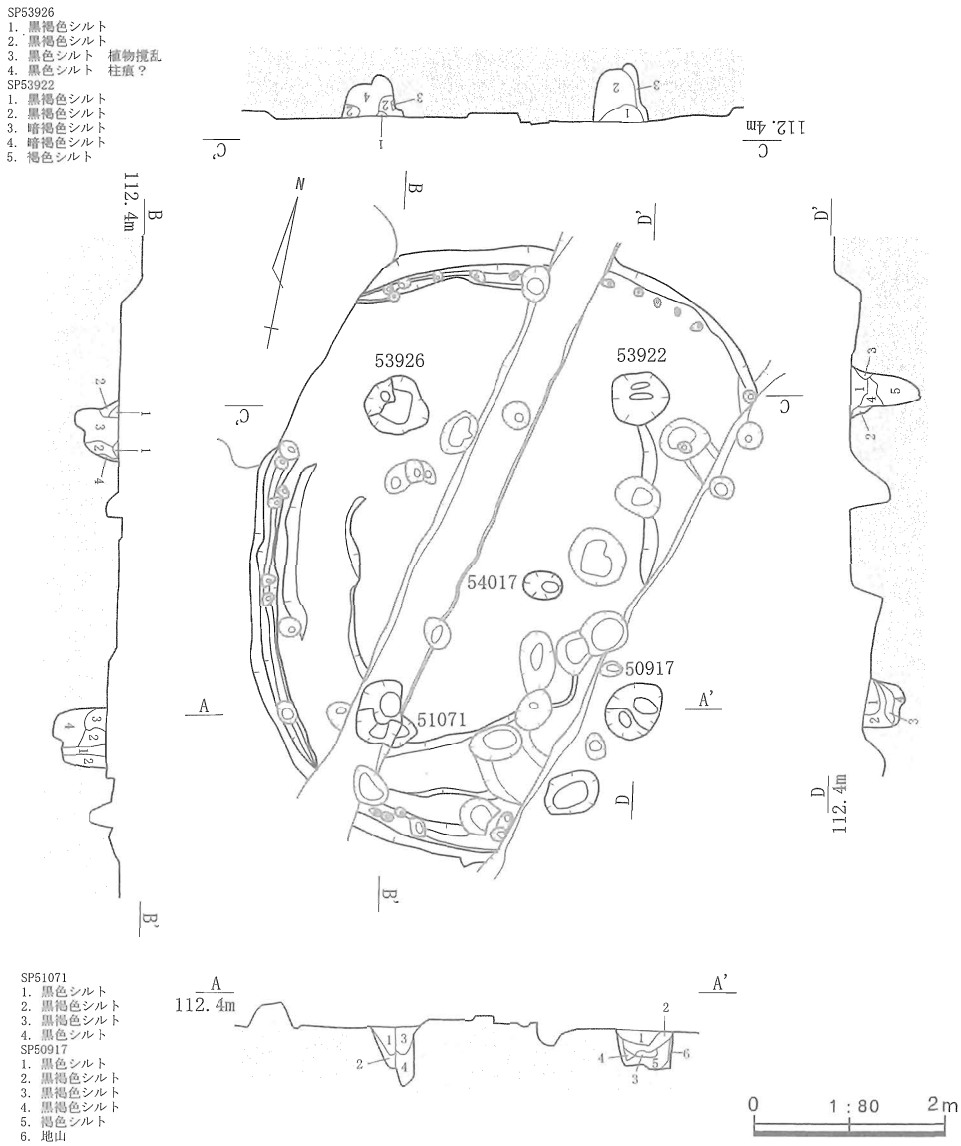
貯蔵穴は南東側の縁に設けられている。貯蔵穴SK50920は天地返しの撹乱の内側で検出されている。長軸60cm、短軸45cm、深さ21cmの楕円形を呈する。貯蔵穴の縁が残存する床面と同等の高さであったならば、深さは45cm程度に見込まれる。

住居の掘方は底面を平らに整え、周囲に溝を備える。溝は幅0.5～1.3m、深さ１～３cmとごく浅い。北側では次第に浅くなって不確かになるが、末端が終息するように内側に入り込まないので、あるいは全周していたのかもしれない。

柱穴の掘方は４か所で検出された。北側のSP53922以外は切り合いがある。切り合う柱穴の底面は比較的近似した深さにあるので、挿げ替えが行われているとみられ



第61図　小土坑SK54017遺物実測図

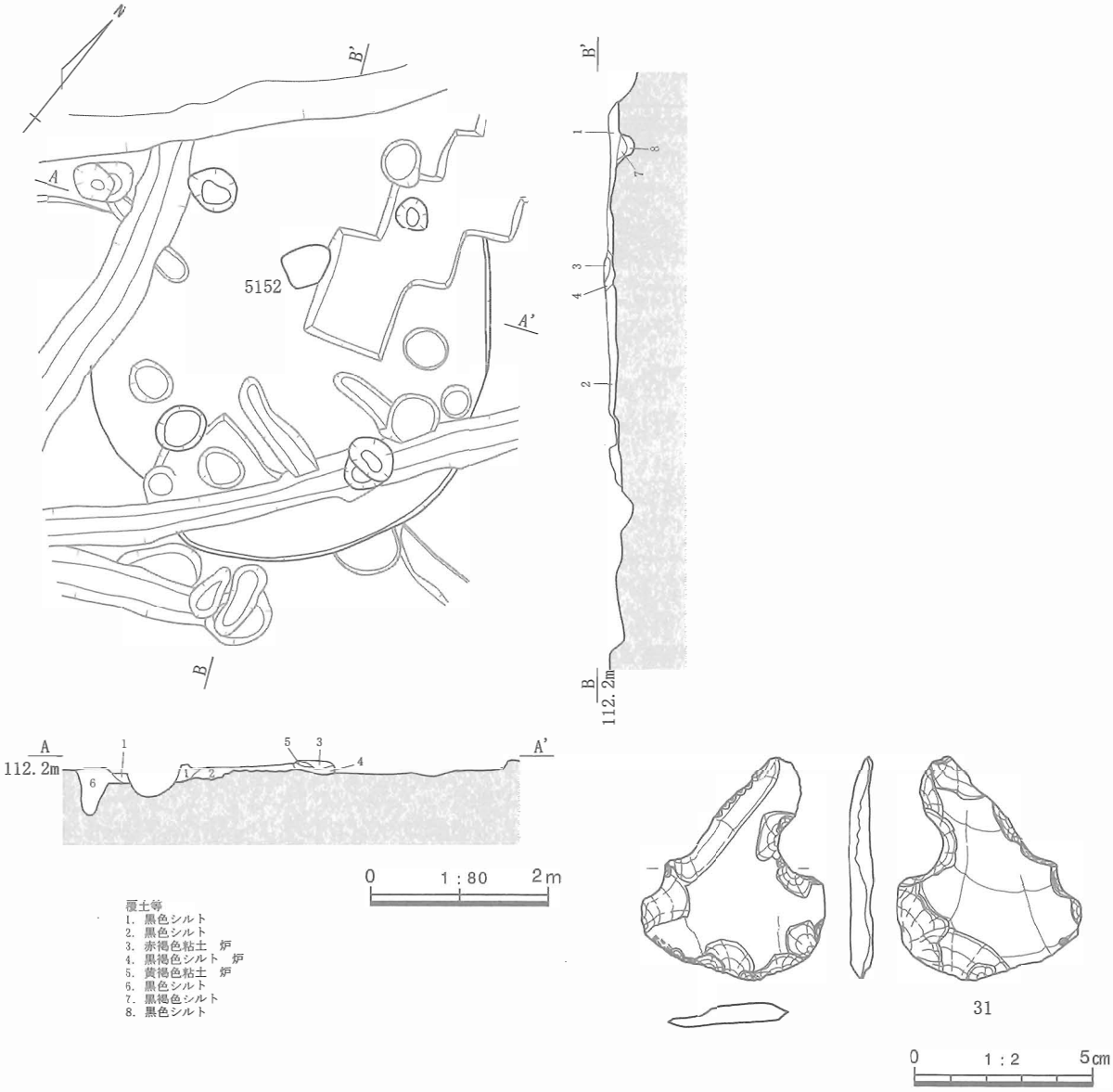


第62図　SH50919平面・断面図（掘方）

る。住居の掘方に改変がくわえられた形跡がないので、柱の腐食などによって上屋の修繕が行われたのであろう。SP51071の断面では南側に柱痕が確認されており、柱の位置を南に動かしていることが分かる。他では柱痕が明らかでない。柱穴内を撹拌して柱を抜き取っているのだろうか。柱穴の間隔は、長手方向に芯々で3.3～3.4m、短手方向で同様に2.5～2.8mとなる。

壁溝は南～西、北西側の住居の掘方に沿う位置に確認された。幅15～25cm、深さ１～４cmとなる。壁溝の内部には直径８～15cm、深さ２～５cmのごく小さな穴が連続して検出された。この手の穴は壁溝を検出できなかった北側の一部にもあり、元来壁溝は広い範囲で巡っていたことを推測させる。また、この穴は壁材を押えるための杭跡であった可能性も否定できない。他の住居ではSH54436等に類例があるものの、多くにみられるわけではなく、確証が得られなかったので図中では一旦撹乱扱いとした。

【遺物】30は住居のほぼ中央に穿たれた小土坑SK54017から出土した台石である。砂岩製でおよそ2/5が被熱による割れによって失われている。残存する部分も被熱によるヒビが著しい。使用による平滑面は片面に広くみられる。割れ際も摩耗するので、割れた後も盛んに使用されていたことが分かる。SK54017の住居への関わりは分からないが便宜的にここに掲載した。



第63図　SH5390平面・断面図（床面）・遺物実測図

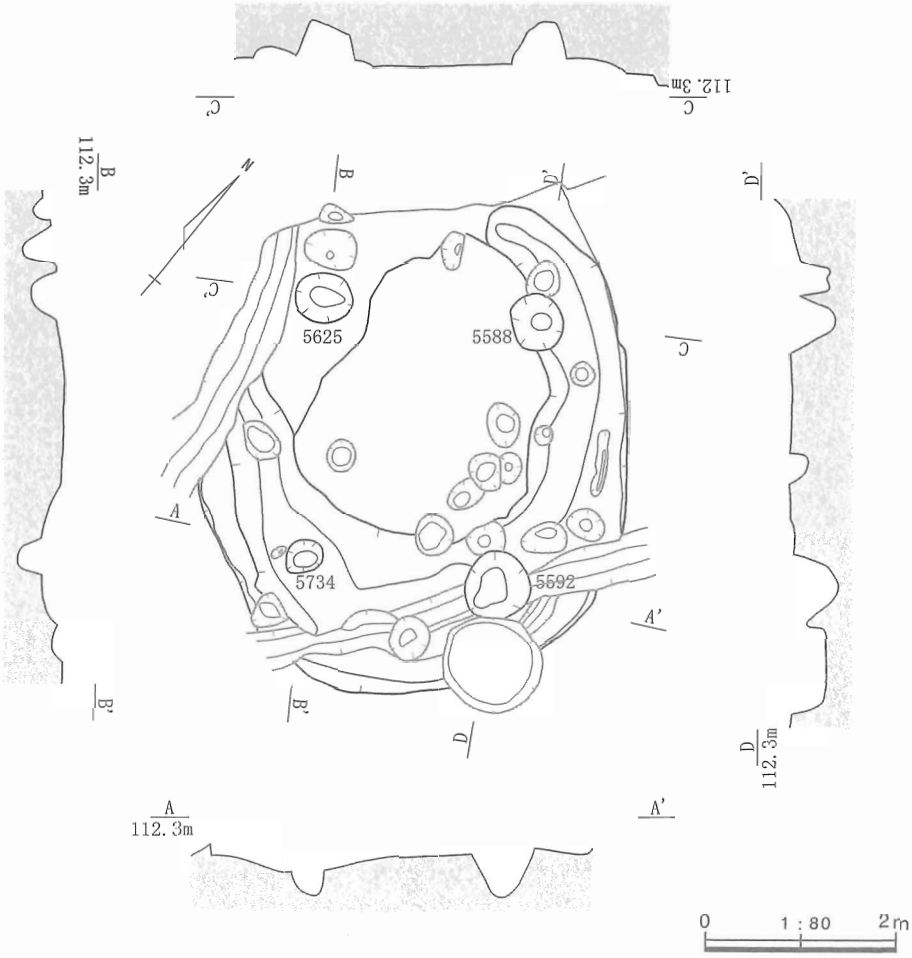
SH5390（第63～64図）

【遺構】K28～K29グリッドで検出された。北側を方形周溝墓5009に、南側が住居を囲む溝SD302によって切られるほか、部分的に耕作による撹乱に壊されている。床面は把握できなかったが、炉が残存していたため、検出面が床面にほど近い位置にあるものと考えこの高さで一旦記録を残した。

炉は住居の中央やや奥側に設けられる。直径45～57cm、深さ14cmの隅丸三角形状の掘方内に黒褐色シルトを充填し、さらに黄褐色粘土を9cm程度の厚みで貼り付ける。この上位は赤褐色に焼ける。貯蔵穴は把握できなかった。壁溝は断面で一部を把握したが、平面で捉えることはできなかった。

住居の掘方は底面を平らに整え、周囲に溝を備える。内部には黒色シルトが14cm以上の厚みで敷き均される。溝は幅0.5～1.2m、深さは6～18cmで南側がより広く、深くなる。柱穴の掘方は4か所で検出された。抜き取りや挿げ替えはみられない。直径35～70cmの円形を呈し、南側のSP5592のみ著しく大きくなる。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.75～2.85m、短手方向に同様に2.05～2.25mとなる。

【遺物】31は珪質岩製の分銅型を呈する打製石斧で、床下の埋土から出土している。基部が大きく欠けるが再調整を施して利用を試みている。



第64図　SH5390平面・断面図（掘方）

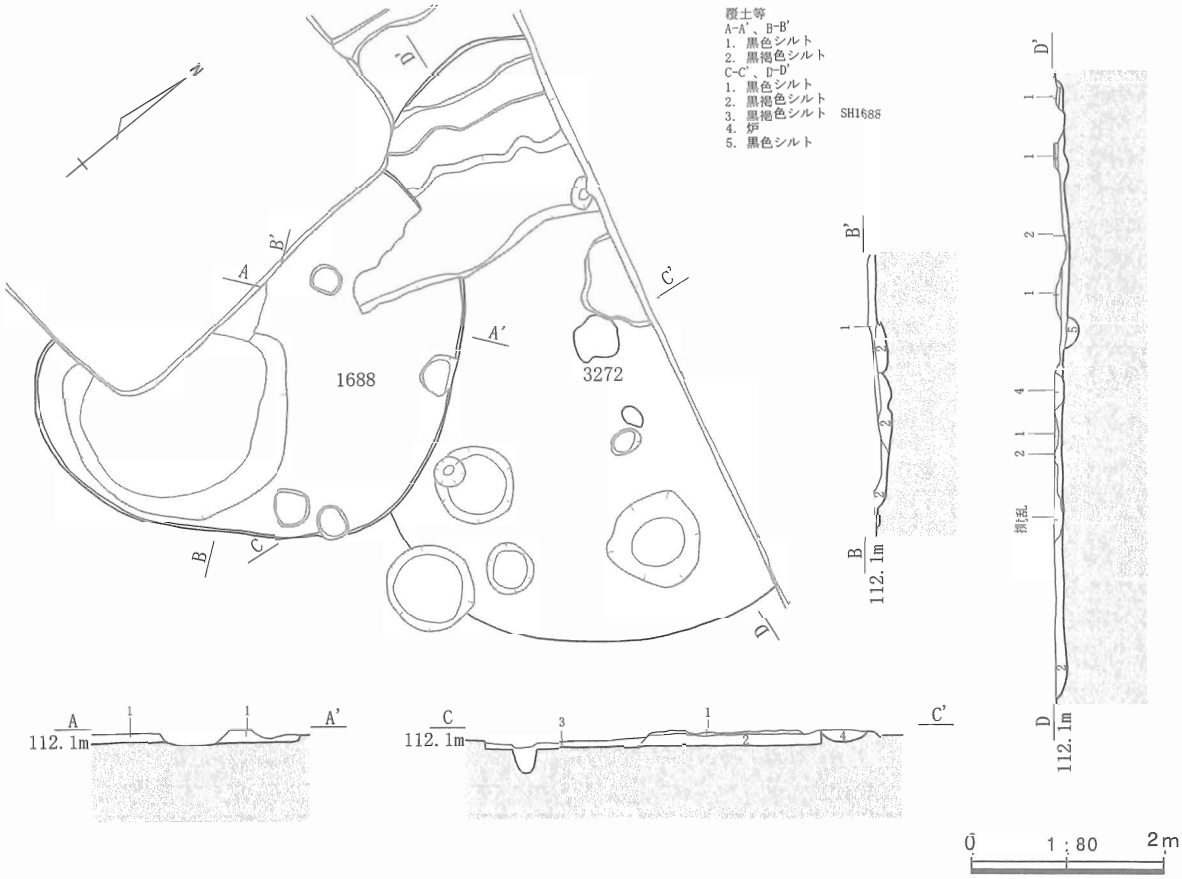
SH1688・3272（第65～67図）

【遺構】 L28～M29グリッドで検出された切り合う住居である。SH3272は当初調査を分割して実施したD区南北の調査境にあったので、北側2/5のプランが検出できなかった。また、SH1688はSH3271・3324により1/2が失われている。

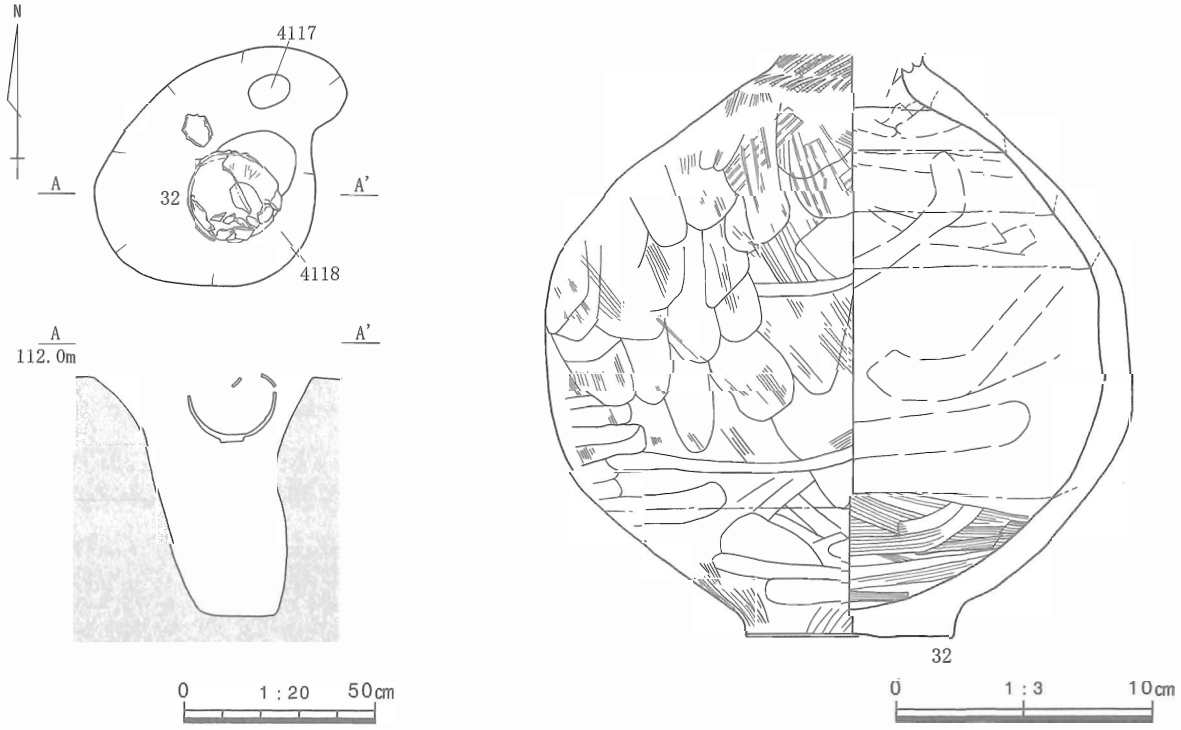
SH1688は住居のプランのみで、掘方下位においても構造を明確にすることはできなかった。

SH3272は検出面が下がった関係で床面は失われていたが、検出面において２か所の炉を検出した。住居の掘方において二組の柱穴が検出されているので、東側が当初の炉、西側が拡張された後の炉であると考えられる。柱穴は住居掘方上で検出した。当初の建物はSP5543・4087・4092・4107で建ち上がるもので、柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.1～2.2m、短手方向に同じく1.8～1.9mとなる。拡張後の柱穴は、SP4087を同位置で用いSP4102・4112・5414を新たに掘削して、長手方向に3.3～3.4m、短手方向に2.65～2.95mと著しく広くなる。SH1688・3272ともに壁溝・貯蔵穴は明らかでない。

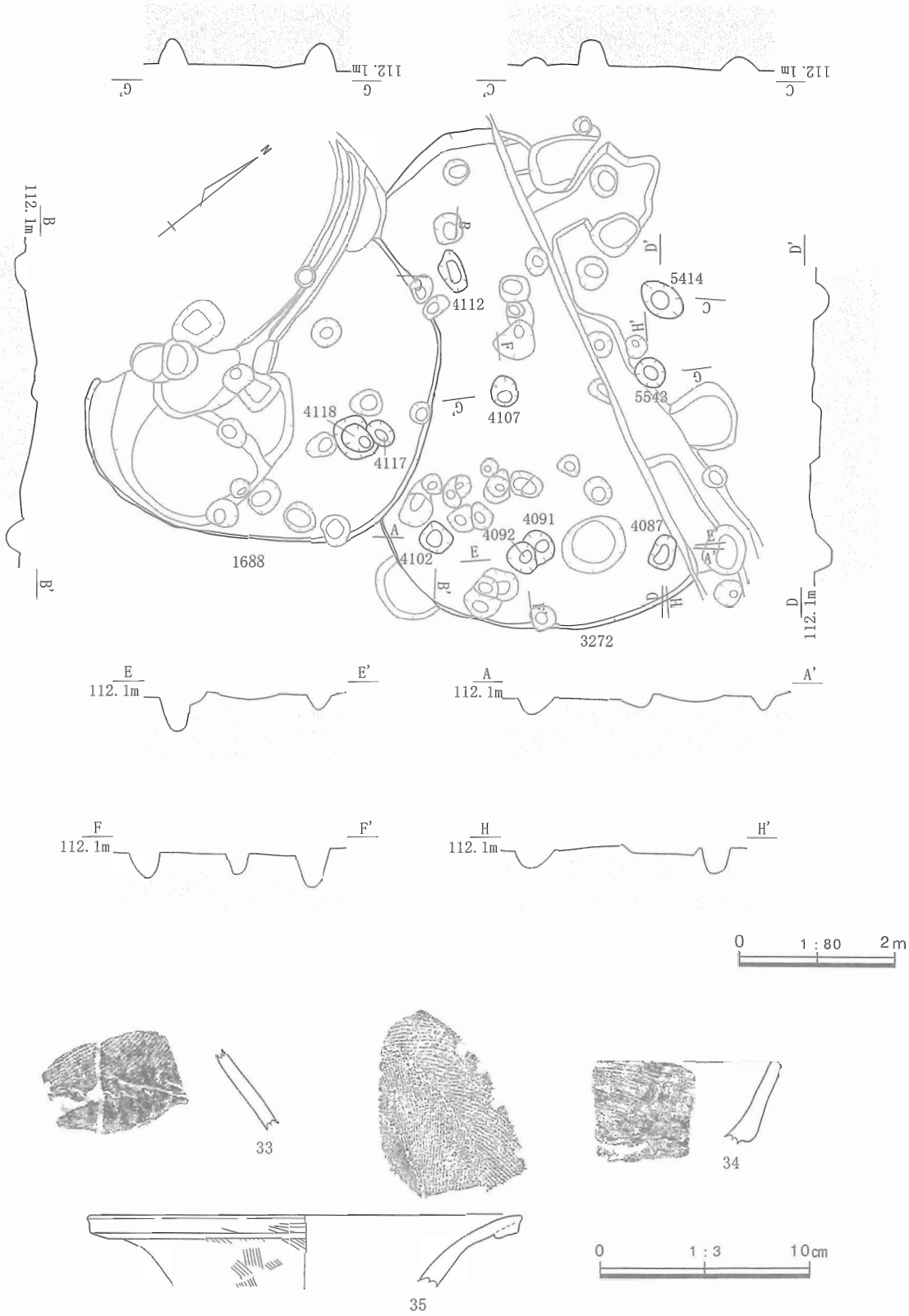
【遺物】 32はSH1688に切り込む土坑SK4117・4118から出土した壺である。外面はハケ調整を施した後、全体にヘラ削りを施して平滑に整える。ヘラ削りの浅い部分にハケ目が残る。また、頸部にはハケ工具の連続する刺突で文様を施す。内面は、下位に横方向のハケ目を施すほか、横方向のナデで調整される。33～35はSH3272の掘方上で検出された小穴から出土している。33は壺の肩部片で、外面に縄文を施す。34は複合口縁の壺の口縁部で、ハケ調整で整えられる。35は折り返し口縁の壺口縁部で、内面に結節のある縄文を施す。これら出土遺物は住居との関わりが明らかでないが便宜的にここに掲載した。



第65図　SH1688・3272平面・断面図（床面）



第66図　SK4117・4118遺物出土状況・遺物実測図



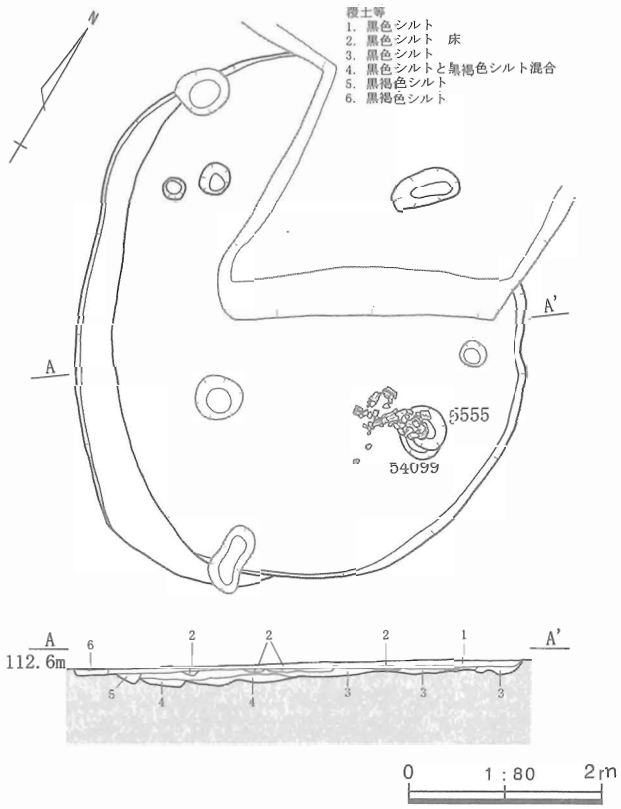
第67図　SH1688・3272平面・断面図（掘方）

SH5194（第68～70図）

【遺構】Ｉ26～Ｊ26グリッドで検出された。北側のおよそ1/3を耕作による撹乱によって壊されている。検出段階では、南南西側がやや膨らむ形状を把握していた。床上の覆土である黒色シルトを除去し、床面をあらわにしていく過程で、この膨らみ部分はベースであるⅡ層中をテラス状に削り出していることが判明した。テラス状の部分は北西側で住居の外周に整合し、南側で最大55cm外側へ膨らむ。そして、南側で急激に終息する。

床面は主に住居の中央部に検出されている。黒色シルトを素材とし、２～４cmの厚みに硬く敲き締められている。床面上には脆弱な覆土による直径25～30cmの円形のプランが２か所観察された。これらは柱痕跡と考えられる。この他、遺物を含む小土坑SK5555が穿たれている。

壁溝は平面的に検出することができなかった。断面では縁辺に落ち込みが認められるので、本来はプランの縁辺に巡っていたものと考えられる。



第68図　SH5194平面・断面図（床面）

炉は認められない。炉は、耕作による撹乱によって失われているのだろう。

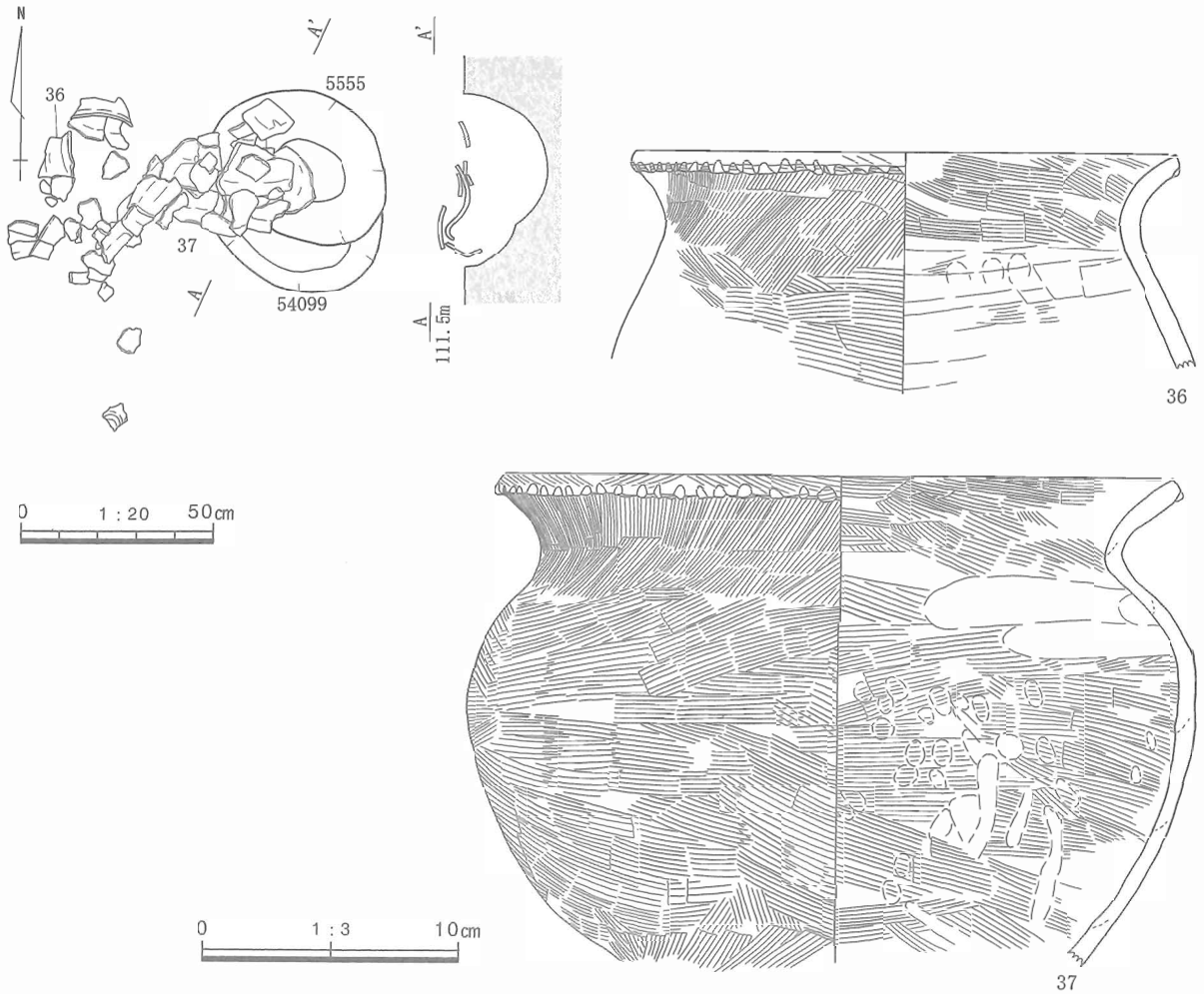
貯蔵穴は掘方上で確認されたSK54104が、位置関係から該当すると考えられる。長軸70cm、短軸55cmの楕円形を呈し、深さは35cmである。東側で直径35cm程度の三角形状の小穴によってさらに下端が５cm程度深くなる。この貯蔵穴は、後述する南側への拡張後に設けられたと考えられる。最終形態に伴う貯蔵穴は把握できないが、これが継続して使用された可能性も否定できない。

住居の掘方は中央部分に直径4.3m前後、深さ10cm前後の円形状の窪みをもつ。この内部底面は平坦に整えられている。先のテラス状の部分はこの西側を主体に造り出されており、30～70cmの間隔をもって外側にほぼ平行している。南側にはこれとは別に70cm程度の半月状のテラスを設けている。

柱穴の掘方は６か所で検出されている。西側にあたるSP5689と5557は似通った深さで隣接し、SP5687と5688は切り合うもののほぼ同規模となる。したがって、はじめにすべての柱は従来の位置に置いたまま、掘方のみを南側に広げ、次いで東側の柱はそのままに西側の柱を西方向にすげ替えるという２回の拡張を経て最終的な形状に至ったものと考えられる。そして、床面に相当する高さまで掘方を追加した部分が検出段階でテラス状に見出せたのであろう。東側の柱穴SP54099も西側で小土坑SK5555と切り合っている。これは柱穴よりもかなり浅いため、柱の掘り抜き穴と考えられる。柱穴の間隔は、長手方向が芯々で2.4～2.6m、短手方向が同様に当初は2.25～2.7mである。拡張後、短手方向のみが2.7～2.95mとなる。柱で囲まれる内側は、拡張後およそ0.9㎡面積が広がっている。

【遺物】遺物は柱穴SP54099に重複する小土坑SK5555とその周辺からまとまって出土している。２個体の甕を主体とするが、いずれの台部も失われている。住居内では台部が明らかでないので、住居外で割られた破片を持ち込んでいるのだろう。また、破片は土坑内から床面に相当する高さに水平に分布するので、柱の抜き取り後に空いたSK5555とその周囲に土器片を乱雑に廃棄したようにみえる。

36は甕の体部上半から口縁部にかけての破片である。37に比べると体部上半は直線状に立ち上がり口



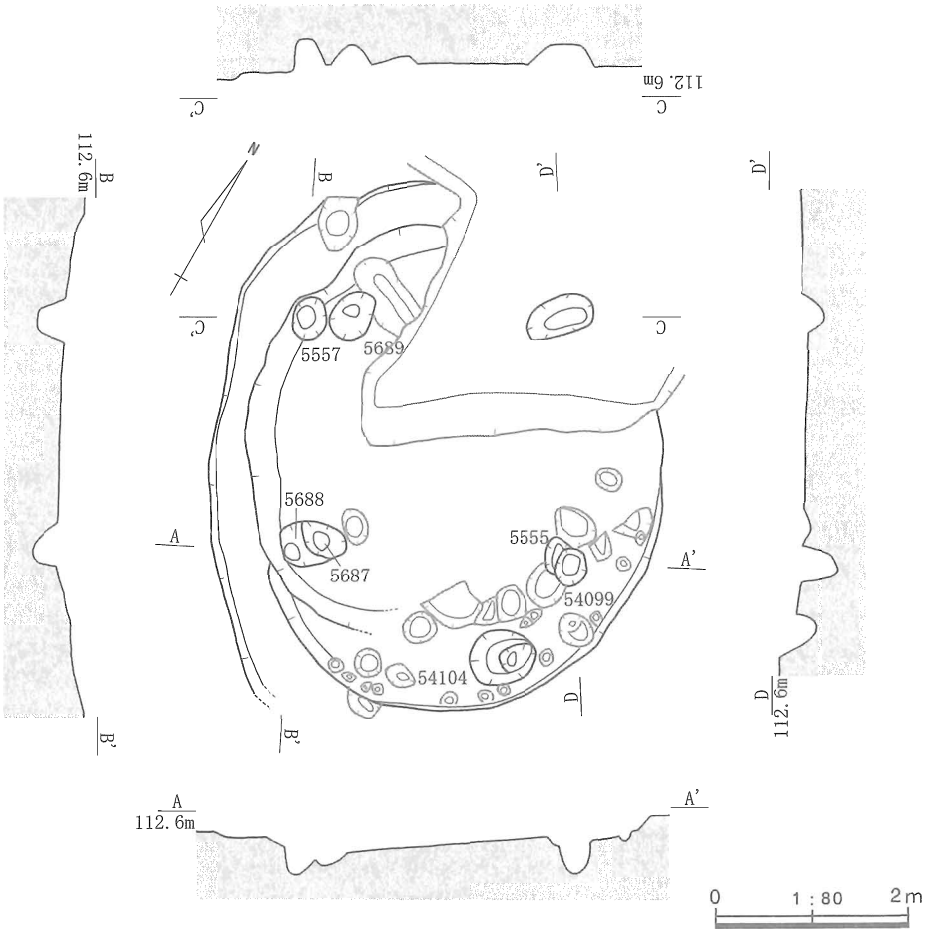
第69図　小土坑SK5555付近遺物出土状況・遺物実測図

縁部とのくびれも小さい。外面は全面ハケ調整で整えられる。体部上半には横方向に施し、その後口縁部との接合面から口唇部外面にかけて右上がりの縦方向に施される。口唇部外面にも斜め方向のハケ調整が施されて、外側の縁にバリ状に粘土が押し出される。口唇部に施すハケ工具による刻みはこの押し出された粘土上に連続して施される。

口縁内側の調整は主に横方向のハケで行われる。口唇部内側には粘土の押し出しがみられないので、この部分のハケ調整はより後の工程で施されているのだろう。内面の体部以下にはハケ調整の後に横方向の板ナデが施されて平滑に整えられる。

37は36よりもやや大形の甕である。内外面ともにハケ調整が目立つ。調整痕の切り合いから、体部の調整を先に手掛けているようである。体部のハケ調整は、下位から上位に順に施されている。下位では左上がりの斜め方向に掻き上げて、中位は水平に施される。ここまでは上から見ると時計回りに施している。上位に至ると下位とは反対方向の右上がりの斜め方向への掻き上げが主体となる。ここに至って反時計回りに調整を加える順番を変えている。この作業の後、口縁部と台部との接合面に下から上に引き上げる縦方向の調整を加えている。口縁部の調整は、36と同様である。

内部の調整は、接合面を中心に指先による押さえとナデが施された後、横方向のハケ調整を加えている。体部半ばにはハケ調整の下に指頭痕が多く観察される。体部上端にはハケ調整の後に横方向のナデが加えられる。



第70図　SH5194平面・断面図（掘方）

SH2157（第71～73図）

【遺構】N27～O28グリッドで検出された。中央北側を斜めに確認調査トレンチT1－5によって切られるほか、耕作の影響と思われる円形・不定形の土坑状となる撹乱が多く切り合う。

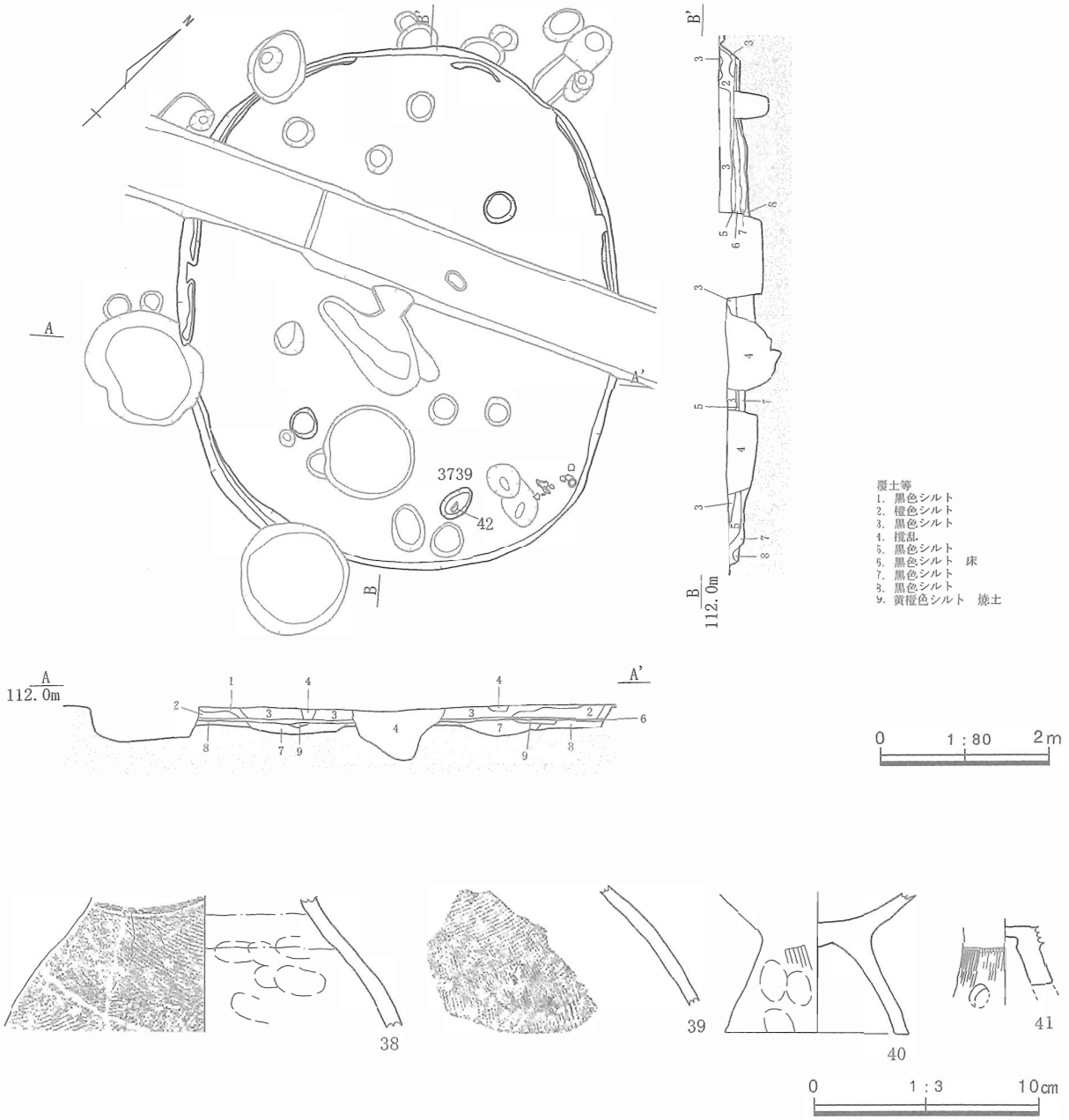
床面は主に北側に2～5㎝程度の厚さで残存が確認された。黒色のシルトを用いて硬く敲き締めてあるが、南側に行くに従って不明瞭になる。床面上には脆弱な覆土による直径25～35㎝の円形のプランが2か所観察された。これらは柱痕跡と考えられる。

壁溝は西側から南西側にかけ15～25㎝の幅で認められた。北側では途切れがちに、南東側では存在が明らかでなかったが、本来は全周していたものと考えたい。

貯蔵穴は認められなかった。ただし、南東隅に土器が集中して出土する場所があり、この場所が住居内の什器を片付けておく場所であった可能性を感じさせる。

炉は、あるべき場所に確認調査トレンチT1－5が掘削された影響で検出できなかったのであろう。

住居掘方の底面は平坦で、立ち上がりから0.7～1m内側に幅0.6～1.25mでわずかに窪む溝を全周させる。掘方内には5～15㎝程の厚みで黒色シルトが敷き均されて、この上に床が張られる。柱の掘方は溝の外側に沿う位置に4か所が検出された。直径35～45㎝の円形あるいは楕円形を呈し、断面に柱痕跡を確認することができた。このうち北東側にあたる柱穴SP4198には南側により浅い小穴SP3728が切り合っている。これは柱を転用するために掘削した抜き取り穴の可能性がある。柱穴は南北方向に芯々で3.1m、東西方向に2.5m程度の間隔があり、配置は平行四辺形状にややくびれている。



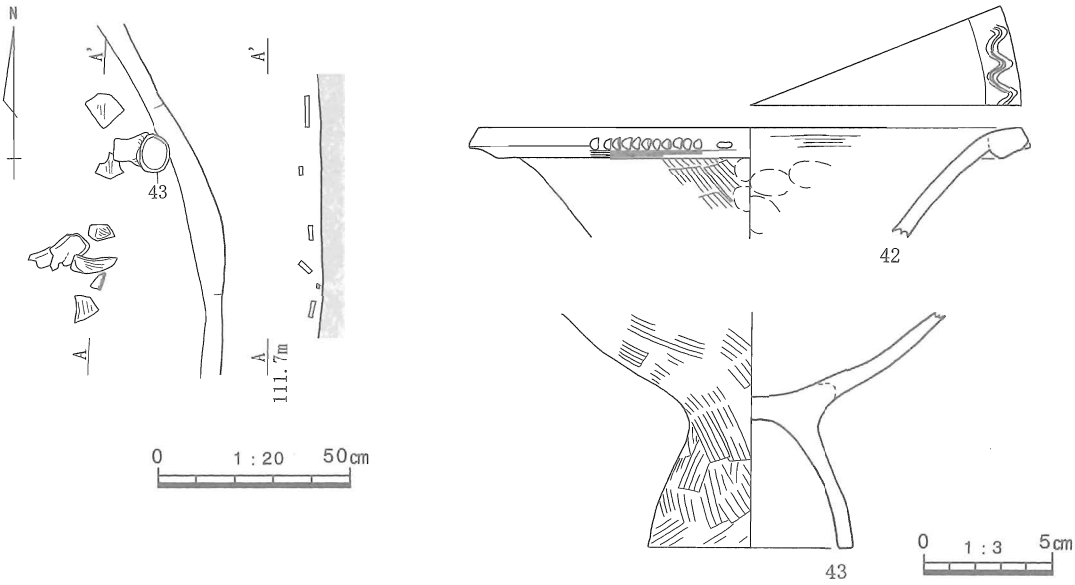
第71図　SH2157平面・断面図（床面）遺物実測図

【遺物】遺物は覆土中と床面上から土器が出土している。

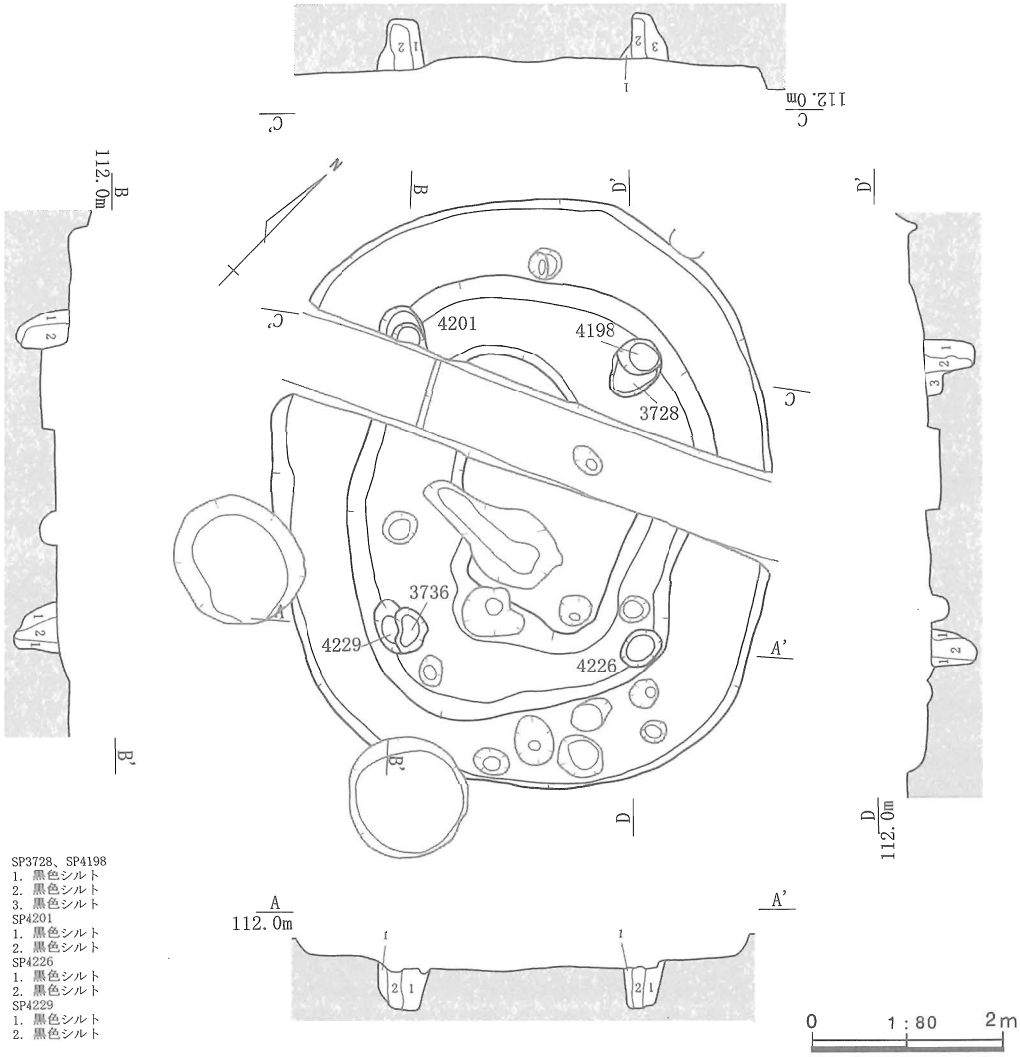
38～41は覆土中から出土した遺物である。38・39は壺の体部上半の破片で38は上下二段の羽状になる縄文を施している。39はハケ調整の後に縄文を施す。こちらは羽状になるか明らかでない。

40は甕の台部である。端部は矩形に仕上げられている。外面には指頭痕の他縦方向のハケ調整が認められる。41は高坏あるいは器台の脚部でハケ調整の後、三方向に円形の透かしを入れる。

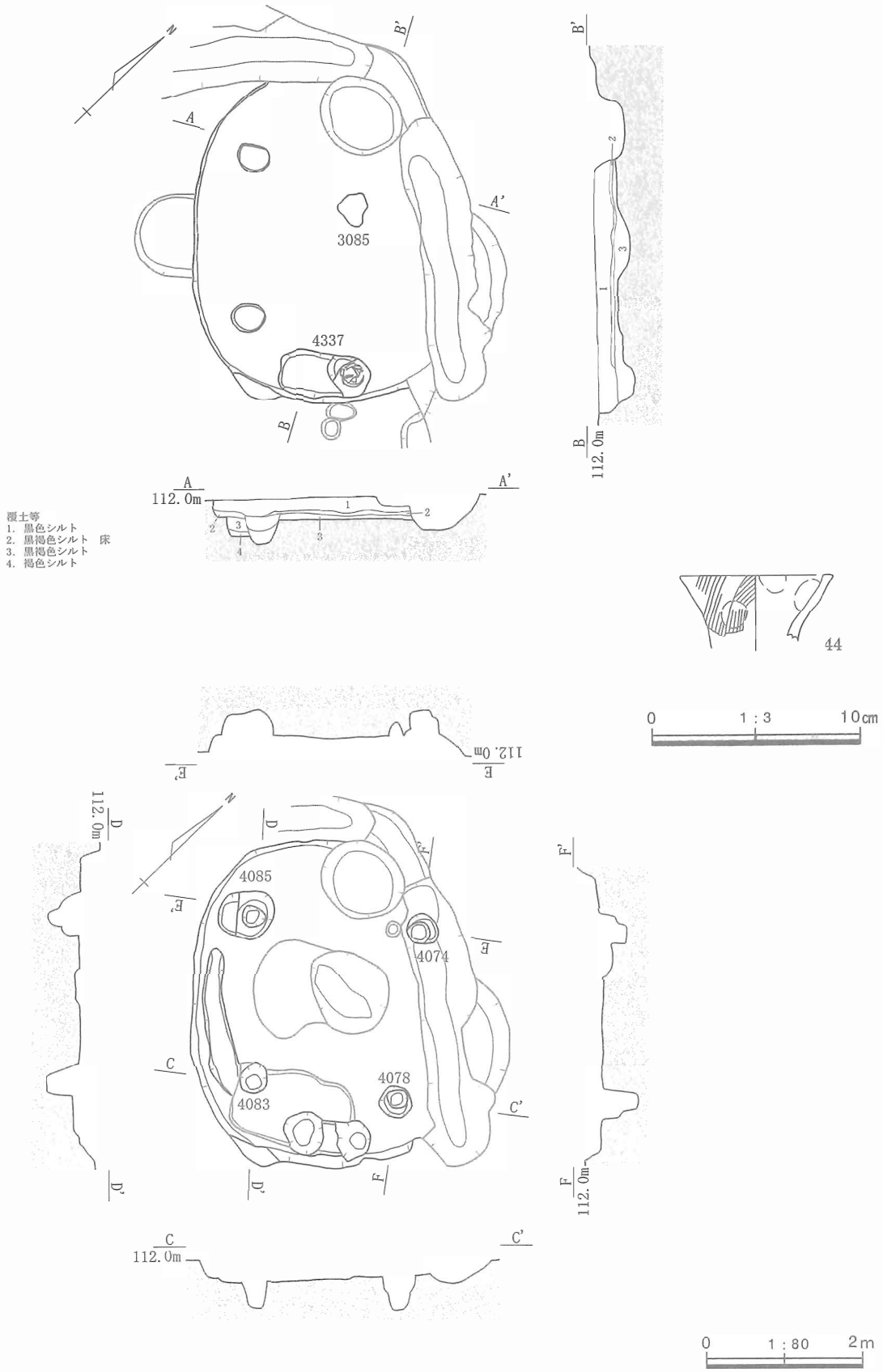
南東隅の床面からは土器が集中して出土しているが、全体形が分かる個体はない。42は壺の口縁部である。直線状に斜めに開き、口唇部をやや外側へ折り曲げる。外面にはハケ調整が認められるほか、口縁部内側は横方向のナデで仕上げられる。口縁部は折り返し口縁で、外面の稜にハケ工具の刺突を連続して施す。口縁部内側の平坦面にはクシ工具の波状文が付けられる。43は甕の体部～台部である。40と同様に矩形の端部をもち、外面は全体にハケ調整で仕上げられている。



第72図　SH2157遺物出土状況・遺物実測図



第73図　SH2157平面・断面図（掘方）



第74図　SH3085平面・断面図（床面・掘方）遺物実測図

SH3085（第74～75図）

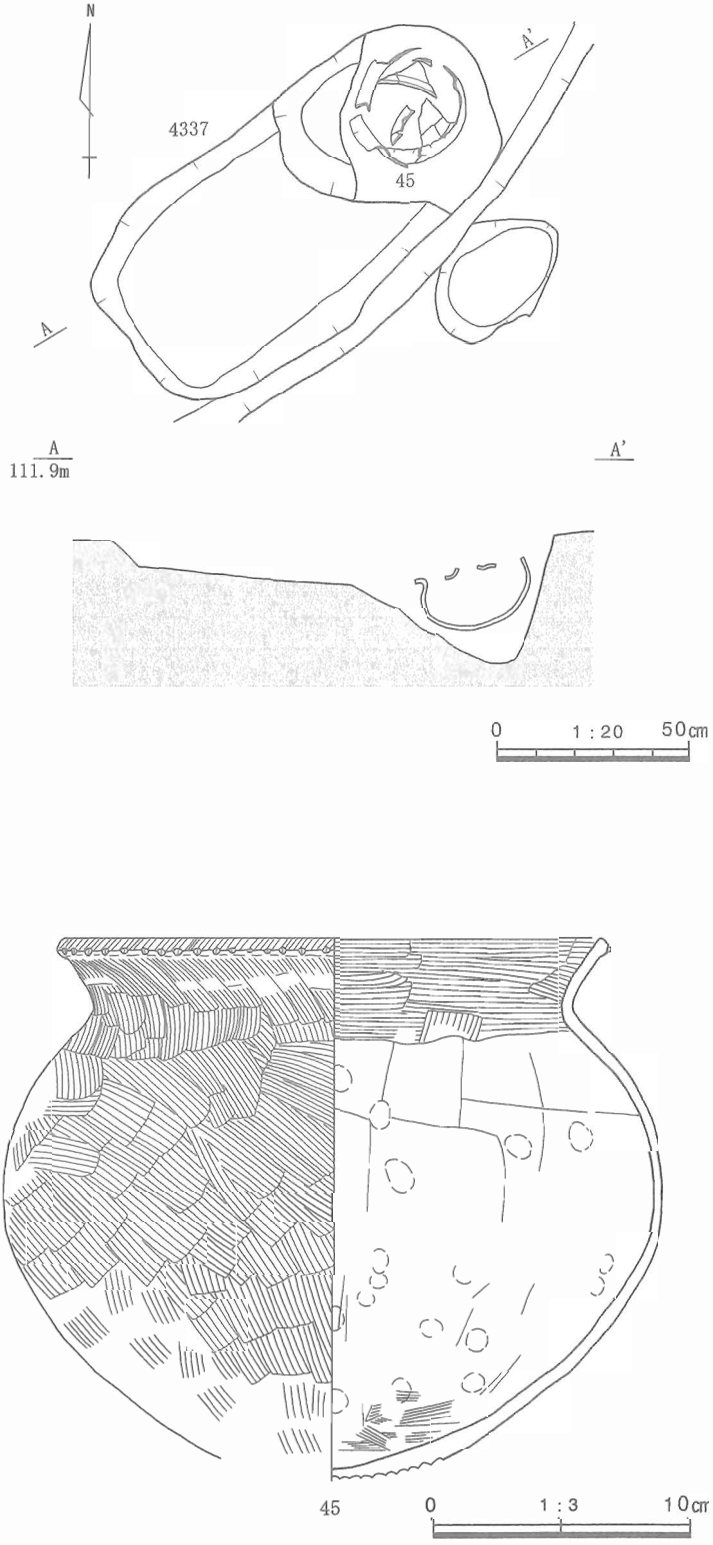
【遺構】M28グリッドで検出された。北東側を方形周溝墓2002や耕作によって1/4程が壊されている。

床は広い範囲で検出されている。主に黒褐色シルトを材料として、5㎝前後の厚みで硬く敲き締められている。床面上では柱痕と考えられる脆弱な覆土をもつ直径35㎝前後の円形のプランが2か所検出されている。北側のSP4085は、柱穴の掘方より小さく、柱の周囲には床が張られていなかった可能性も感じられる。壁溝は検出されていない。掘方上でも把握できなかった。

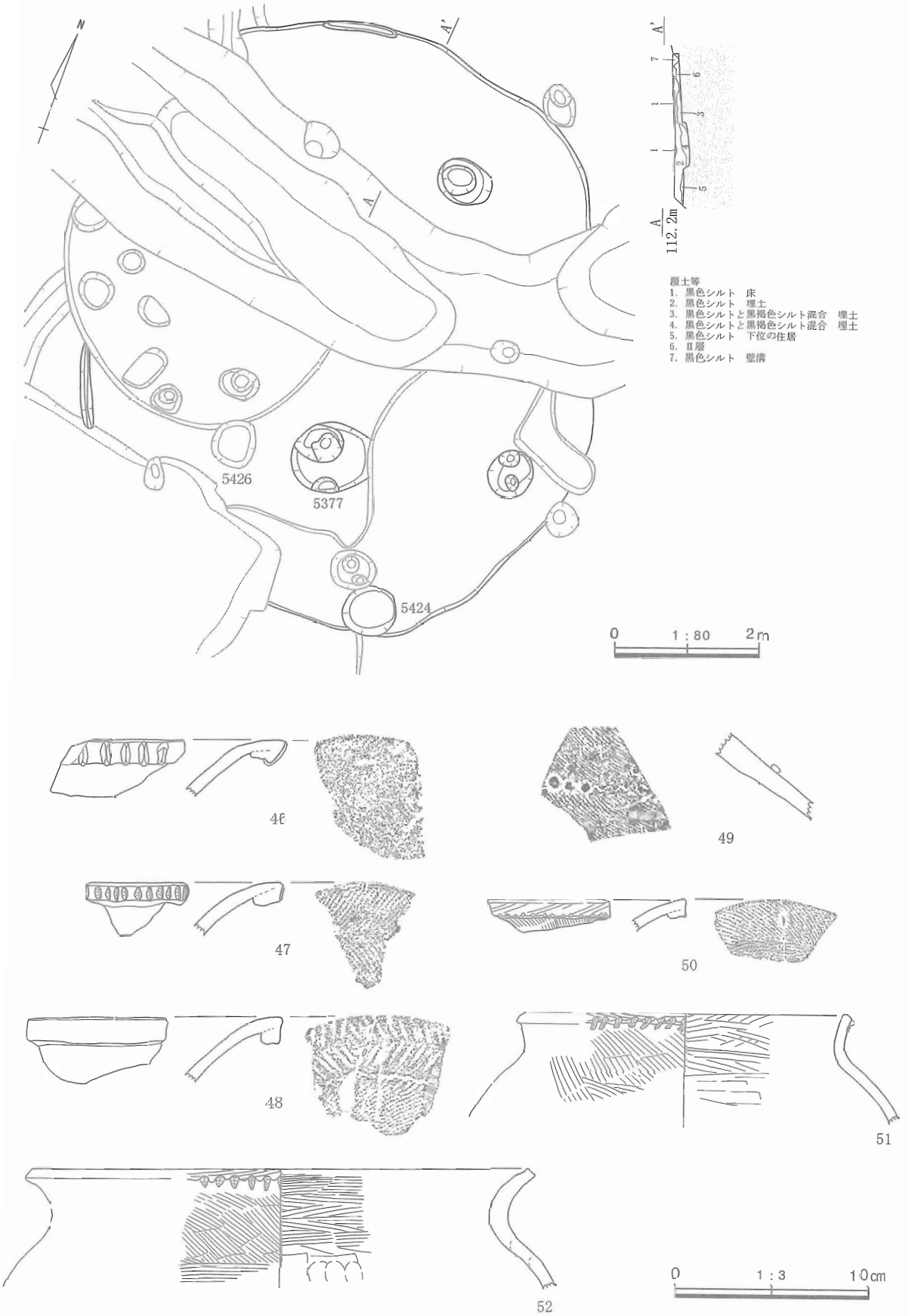
炉は住居の中央奥側に設けられている。直径30～45㎝の不定形で床面上に張り込まれており、頂部は平坦で床面よりもやや高い位置に造られている。貯蔵穴は南東側の隅に設けられている。直径55㎝、深さ最大35㎝の円形状で、長さ85㎝、幅58㎝、深さ8～14㎝の長方形の土坑が伴っている。

住居の掘方は底面を平坦に整え、西側に溝をもつ。溝は幅20～40㎝、深さ6㎝程度となる。柱の掘方は4か所で検出されている。SP4085は直径60～70㎝と大型である。他は直径35～40㎝の円形状を呈する。内部に段があるSP4074・4078は柱が掘り抜かれている可能性を感じさせる。

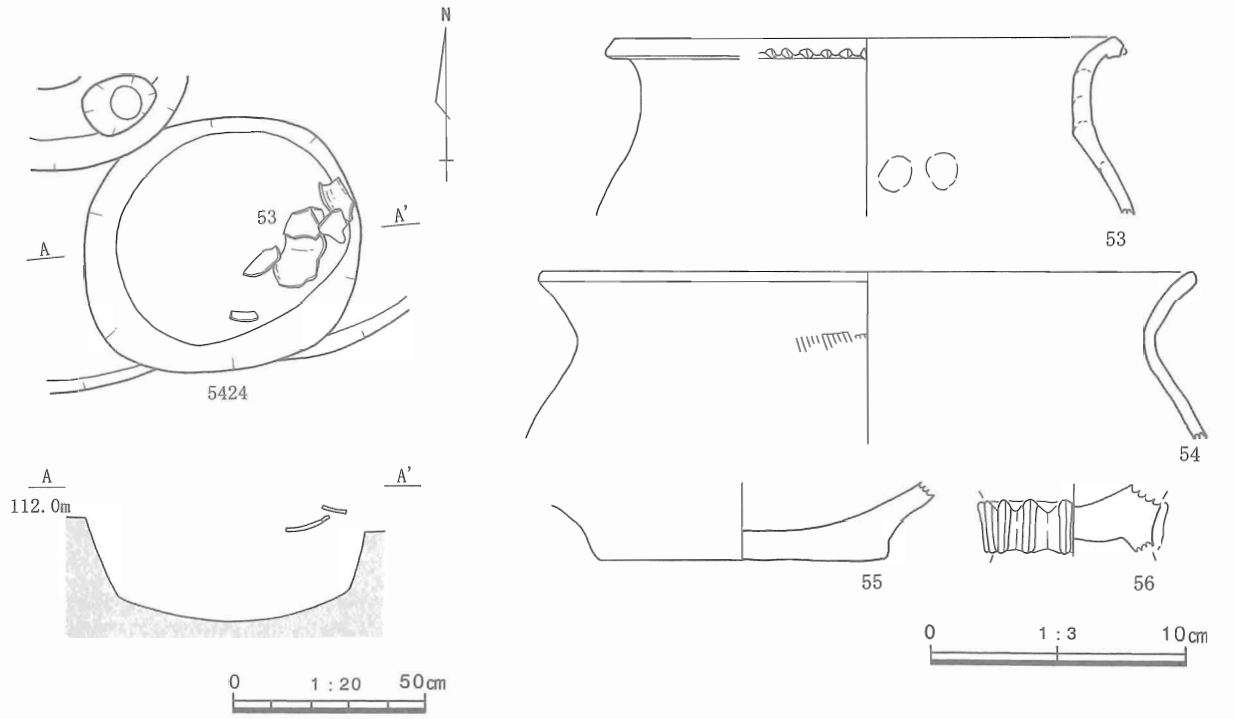
【遺物】壺の口縁部である44は床上覆土からの出土である。45は台部を割り取った上、体部以上の破片を貯蔵穴SK4337に投げ込んでいるようにみえる。外面はハケ調整で整えられる。頸部までを斜め方向に掻き上げ、その後、口縁部までを垂直気味に調整する。内面は底部に横方向のハケ調整を施した後、頸部までを横方向の板ナデで平滑にする。口縁部内側は横方向のハケ調整で整えられる。



第75図　貯蔵穴SK4337遺物出土状況・遺物実測図



第76図　SH5119平面・断面図（床面）、遺物実測図



第77図　貯蔵穴SK5424遺物出土状況・遺物実測図

SH5119（第76～78図）

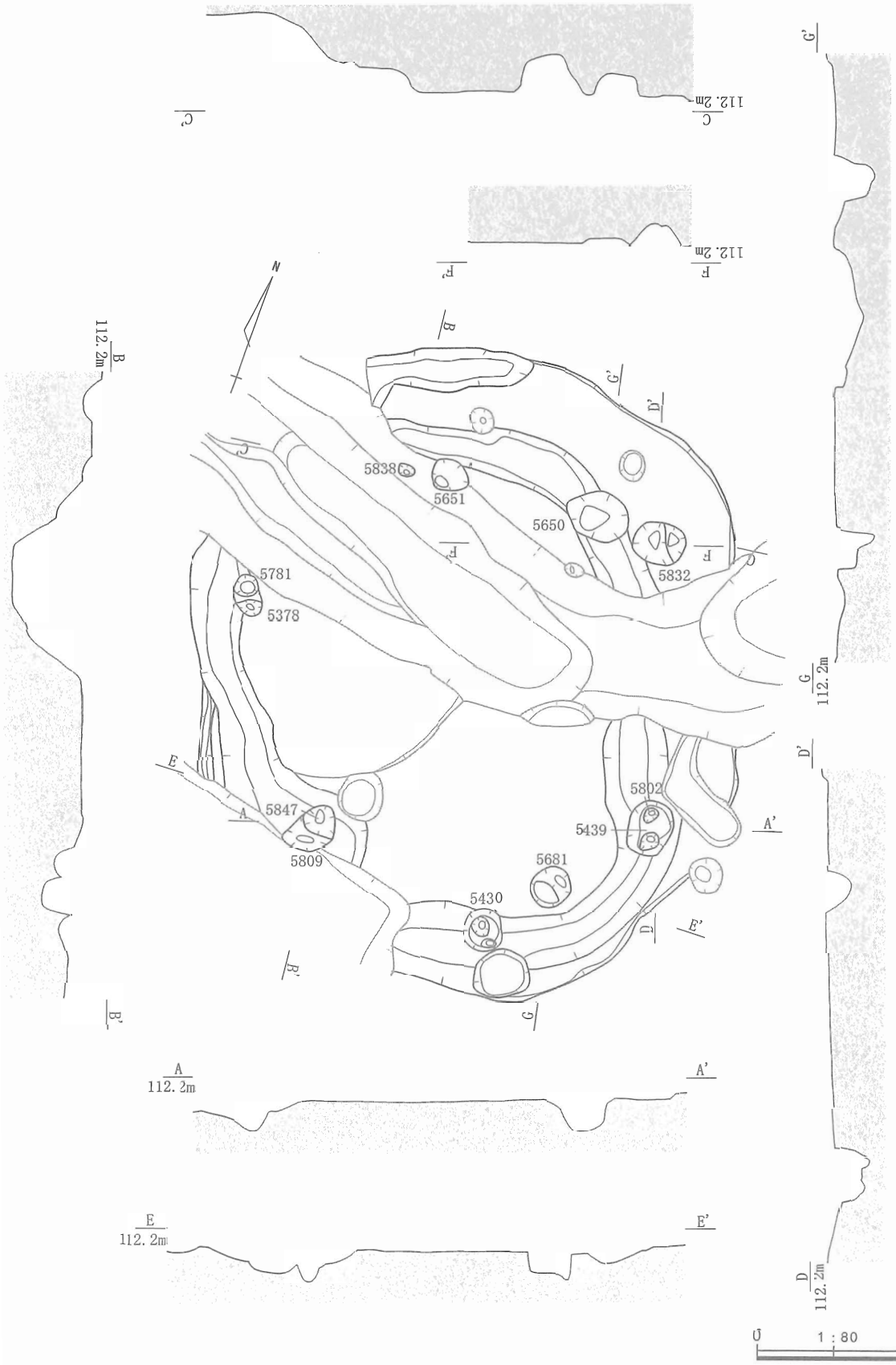
【遺構】K29～K30グリッドで検出された。ほぼ中央を方形周溝墓5009に、南側の一部を耕作の撹乱により破壊されている。この他、竪穴式住居SH5435が東側に重複するなど、他時期の遺構の重複が多い。

床面は、方形周溝墓の溝以北に部分的に検出されている。黒色シルトを用いて、厚さは1～2cmとなる。

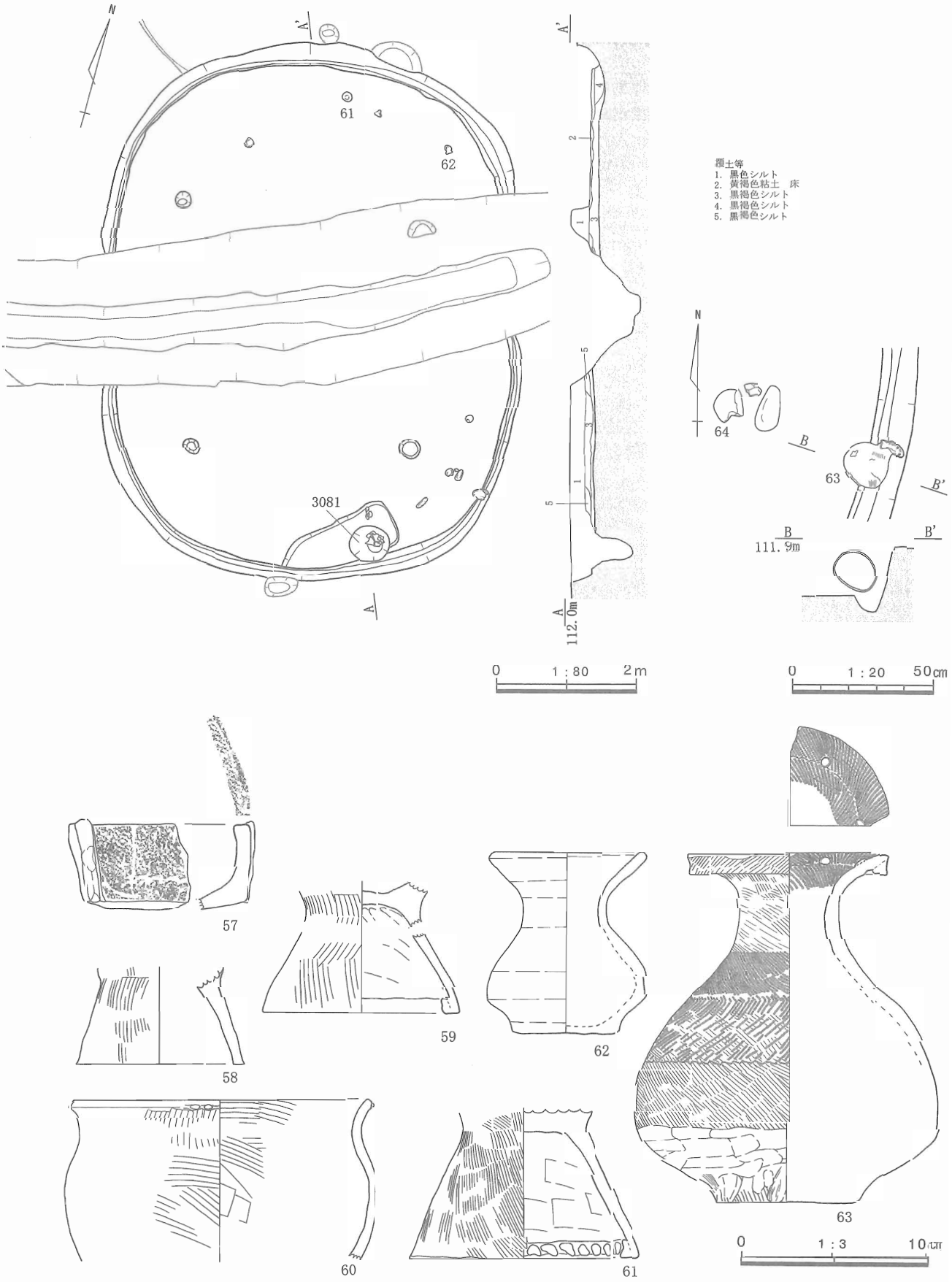
貯蔵穴は南西側縁に検出されたSK5424が該当し、最終形状に伴う。直径70～75cmの円形を呈し、深さは30cm程度である。炉は方形周溝墓5009によって壊された個所に設けられていたと考えたい。

住居の掘方は底面がほぼ水平で、西側に偏った位置に溝が設けられている。溝は幅0.55～1.1mで、南側がより広い。深さは3～15cmで、西側が比較的浅くなる。溝と最終形状の不整合から、溝を有する部分が当初に築かれ、後に軸を北寄りにひねりながら北東側に住居を拡張されたとみられる。柱穴の掘方は8か所で検出されている。一部を周溝墓に壊されるSP5651とSP5781・5378、5430、5439が当初段階の柱穴で、SP5847・5809、5681、5650、5838あるいは5847・5809、5632あたりが拡張された後の柱穴の組み合わせに該当するものと思われる。

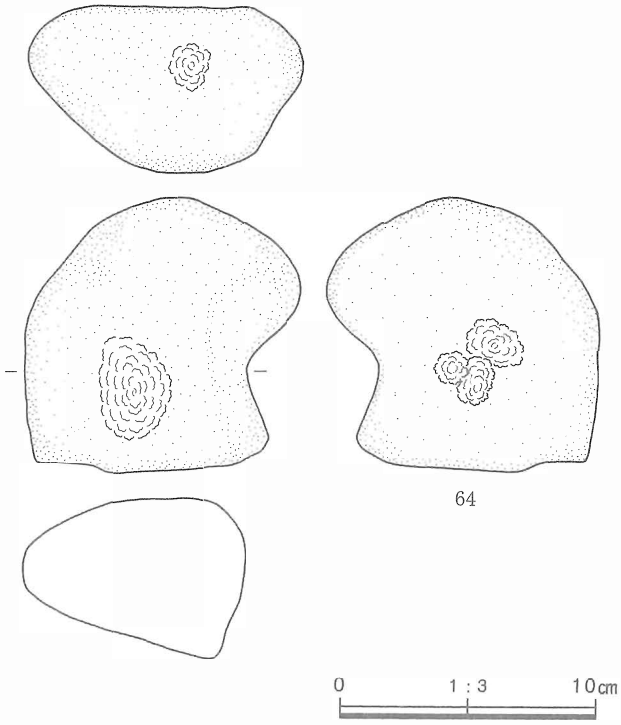
【遺物】遺物は住居の埋土内と貯蔵穴SK5424などから出土している。46は折り返し口縁をもつ壺の口縁部片で、住居に切り込むSP5426から出土しているが、関連付けてここに掲載した。47・48・50は折り返し口縁をもつ壺の口縁部片である。外面は主にハケ調整で整えられる。口唇部外面にはハケ工具の連続する刺突が施される例（47）がある。48はハケ工具による羽状の文様の内面に縄文が施される。49は壺の肩部片である。縄文を施した後に円形浮文を複数個一対として貼り付ける。51・52は甕の体部～口縁部片である。いずれもハケ調整を施す。口唇部外側にハケ工具の連続する刺突を加える。52の体部内面はハケ調整の後に横方向の板ナデを施し、ナデを加えて仕上げる。53～56は貯蔵穴の中に遺棄された破片が出土している。53・54・56は甕である。54は風化が激しいが、51・52と同様の調整であろう。53は頸部が直立し、口縁部を外側へ小さく折り、口唇部を折り返す。外面に向かう端部にはハケ工具の連続した刺突を施す。56は体部と台部が接する部分の破片である。外面に縦方向の粘土紐を連続して貼り付ける。55は壺の底部片であるが、風化が激しく調整痕は定かでない。



第78図　SH5119平面・断面図（掘方）



第79図　SH1313平面・断面図（床面）、遺物実測図



第80図　SH1313遺物実測図

SH1313（第79～82図）

【遺構】M30～N30グリッドで検出された。ほぼ中央部を真横に方形周溝墓SZ2575によって切られている。床面の遺存状態は良く、プランの検出面からおよそ20cm下に、ほぼ全面にわたって検出した。床面は黄褐色の粘土を用いて敲き締めて張られており、北側でより厚く５cm程度、南側に行くに従ってしだいに薄くなる。床面上には脆弱な覆土による直径20～25cmの円形のプランが３か所観察された。これらは柱痕跡と考えられる。方形周溝墓の立ち上がり面で検出された小穴を当初は柱穴の一つと考えたが、掘方内で別個所に柱穴が検出されたため、これは住居に伴うものでないことが明らかになった。

南側縁には貯蔵穴が設けられている。壁溝を一部切るかたちで掘られた貯蔵穴SK3081は直径50～59cmの円形で、およそ60cmと深く掘られている。貯蔵穴の中位からは少なくとも２個体の甕の口縁部～胴部が、子供の掌大の破片に割られて捨てられていた。内面同士が重なるので、かたちを留めた胴部以上の破片を埋めかけた貯蔵穴の中に投げ込んで割っている可能性がある。貯蔵穴の周囲には深さ10cm程度の段が付き、貯蔵穴にかぶせる蓋受けの用途を一部が担っていたのかもしれない。

壁溝は幅15～35cmで全周している。北～北東側でやや幅が広くなっている。

炉は検出されていない。方形周溝墓SZ2575が破壊した位置に設けられていたものと推測される。

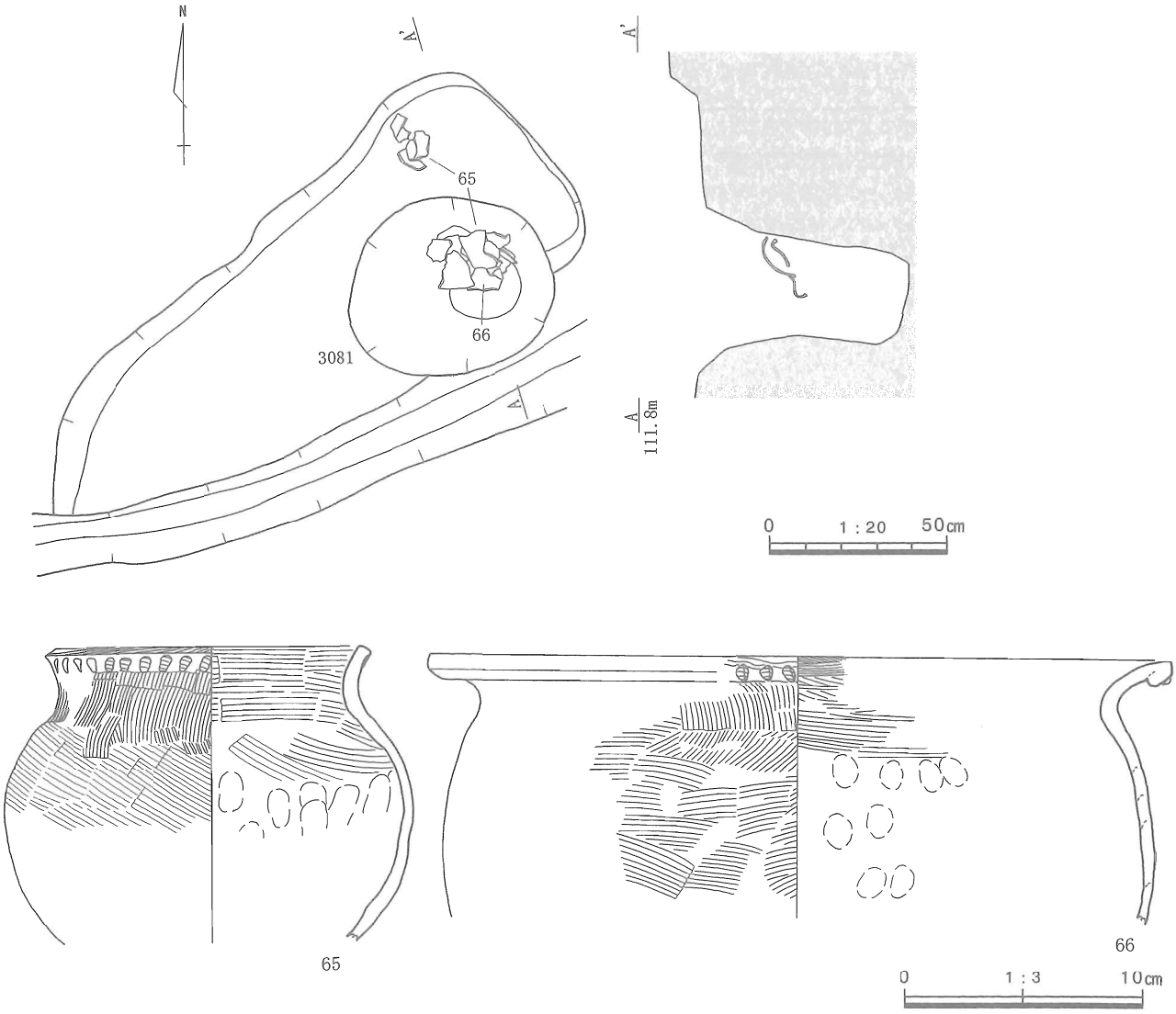
住居の掘方底面は平坦で、立ち上がり直下から40cm程度の間隔をおいて周囲に、幅45～70cmでわずかに窪む程度の溝を南側に開く馬蹄形に掘っている。南～南西側に溝は掘られない。掘方内には10～15cmの厚さに土が入れられた上に床が張られる。柱穴の掘方は70～75cmほどの円形で、住居の掘方底面からさらに40～70cm深くなる。いずれも複数の柱穴が切り合っているようにみえる。これらの存在は床面上では把握できなかったので柱を掘り取って転用するための穴ではない。同位置に複数回柱をすげ替えている可能性を感じさせる。柱穴は、住居掘方の溝の内径に沿うように掘られており、南北方向に芯々で3.7～８m、東西方向に3.5m程度の間隔がある。

掘方底面からは４か所の小穴が検出されている。この住居より遡る時期の遺構であろう。

なお、この住居の周囲には溝が巡っている。溝の形状等については後述する。

【遺物】遺物は、土器と石製品が床面上と貯蔵穴の内部から出土している。

57は複合口縁の壺の口縁部である。口縁部外面に縄文を施した後に縦方向の粘土紐を貼り付けて装飾する。この粘土紐は剥がれた痕跡から１条以上の組み合わせであったことが分かる。58～61は甕で、台部には、端部を矩形に仕上げるもの（58）と、内側に折り返して肥厚させるもの（59・61）がある。61は内面を指で等間隔に抑えることで窪みを生みだしている。外面の調整はいずれも下から上にハケ工具を掻き上げて行われ、特に胴部との接合部分には強く施される。内面は横方向に板状工具でナデられ、頂部は59のようにナデのみの場合がある。60は胴部～口縁部片で、外面は胴部下位には斜め方向の、上

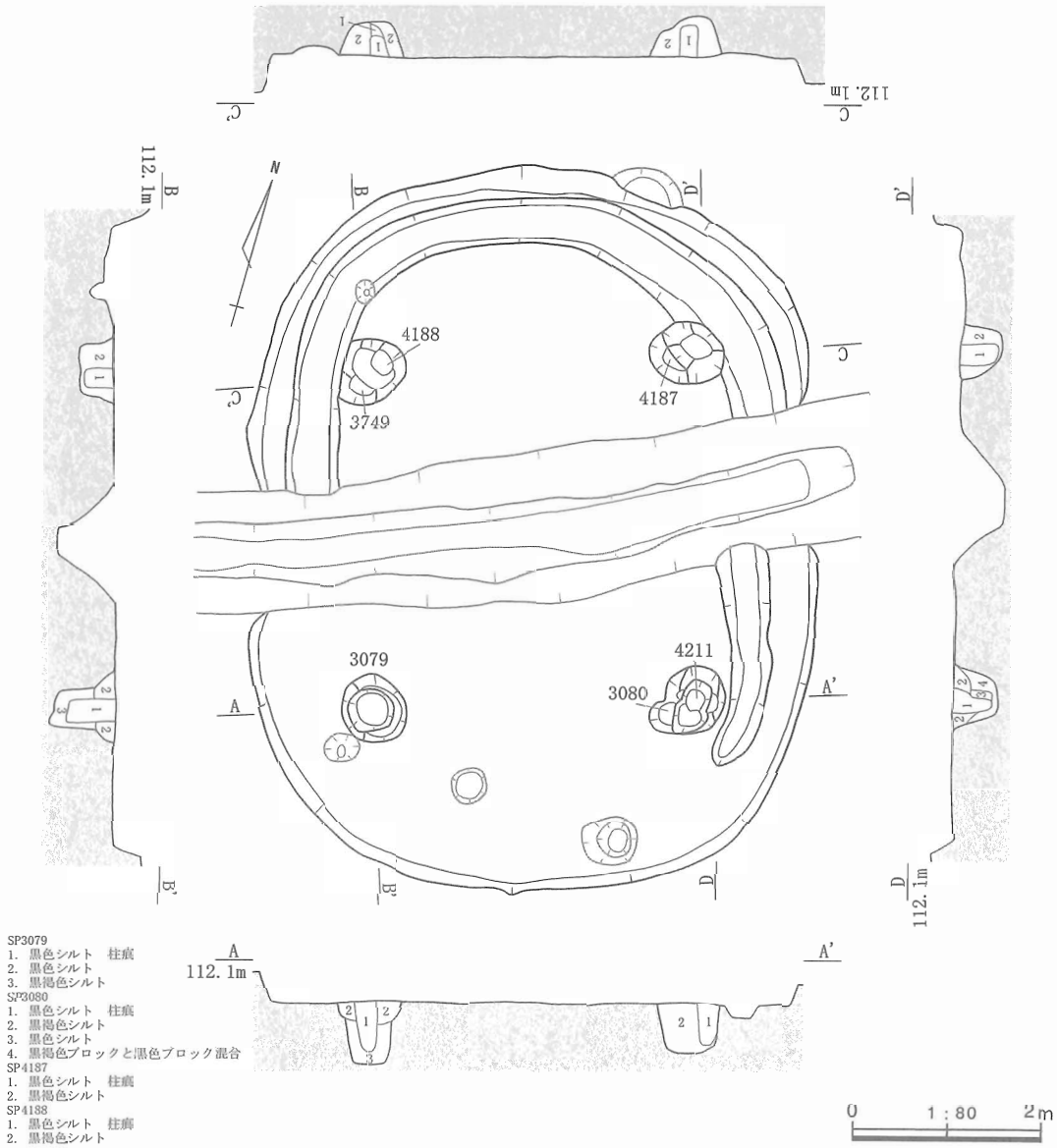


第81図　貯蔵穴SK3081遺物出土状況・遺物実測図

位には横方向のハケが下方向から次第に上へと施される。口縁部から口縁部・体部の接合部にかけては縦方向にハケ調整が施される。口唇部は矩形に整えられ、端部にハケ工具の刺突による刻みが付けられる。口縁内部は横方向のハケで整えられる。内面はハケ調整の後に横方向の板ナデが加えられている。

62・63は壺である。大きさの差はあるが頸部以下の形状は極めて近似する。62は小型で、全体形を知られるものとしては希である。輪積みの後に全面をナデにより調整する。63も高さ19cm余りと、やや小ぶりである。外面は、最初に底部付近を垂直に掻き上げ、体部～頸部を斜め方向のハケ調整で整える。その後、底部付近から体部下位には横方向のミガキを施して平滑に整えている。体部半ばから上端にかけては羽状の縄文を施す。下位は上位に比べ幅広いが、施文が粗く下地にハケ工具の調整痕が残り、下端には工具の末端の結節部が鎖状に記される。一方上位の縄文は密で、ハケによる調整痕をすっかり覆っている。口縁部は折り返し口縁で、下面と外面に平坦な面をもつ。この面には体部に施されるものと逆方向のハケ調整が施される。口縁部の内面にも、横方向のハケ調整の後、外面体部上位に類した細かな縄文が2回にわたって施される。結節部が半ばに残ることから、内面に近い方を先に、その後に口縁よりを施していることが分かる。縄文を施した後、半ば付近に円形の浮文が間隔を置いて付けられる。

64は敲石である。砂岩の自然礫を用いており、三方向に敲打痕を残している。一方向は割れて失われ

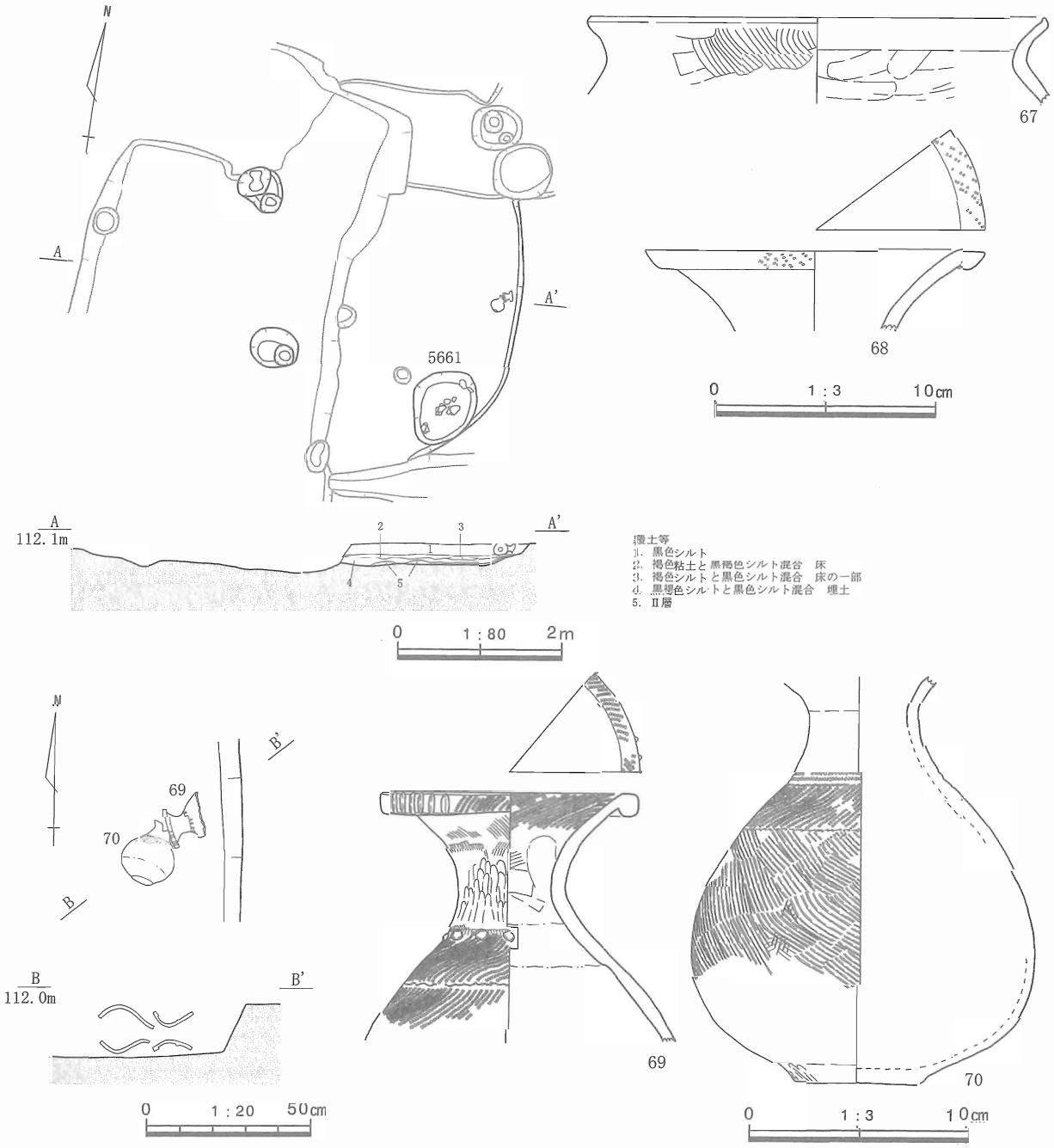


第82図　SH1313平面・断面図（掘方）

ているが、使用による割れであるかは判然としない。この敲石は、63にほど近い場所の床面上に、他の礫とあたかも集められたかのように残されていた。

貯蔵穴内からは甕と鉢が１個体ずつ出土している。いずれも外面はハケ調整で整えられる。体部の下位から斜め方向に掻き上げた後、頸部から口縁部にかけて縦方向に掻き上げている。口縁部内側には口縁に沿った横方向のハケ調整が施される。内面は主にナデ調整で仕上げられたようで、複数の指頭痕が連続して残されている。65は小型の甕で60とほぼ同じ大きさである。口縁部はハケ調整によって矩形に仕上げられ、外面にハケ工具による刺突が連続して施される。一方大型である66は、口縁部を大きく外側に引き出した上外側に折り返すので平底の鉢と考えられる。

床面上の遺物は、住居の中軸線より東側に多く検出されている。特に、大小の壺がほぼ完形で出土していることは興味深い。62は北東隅の壁溝から35cmほどの位置に転がるようにあり、63は南東隅の壁面によりかかるように残されていた。甕の台部は少なくとも３個体分がある。接合しなかったが、この中に貯蔵穴に捨てられた個体の台が含まれる可能性は高い。61は北端に台部だけが正位に置かれるように出土している。57・60は床面上の覆土からの出土なので、この住居に直接伴わない可能性もある。



第83図　SH5425平面・断面図（床面）、遺物実測図

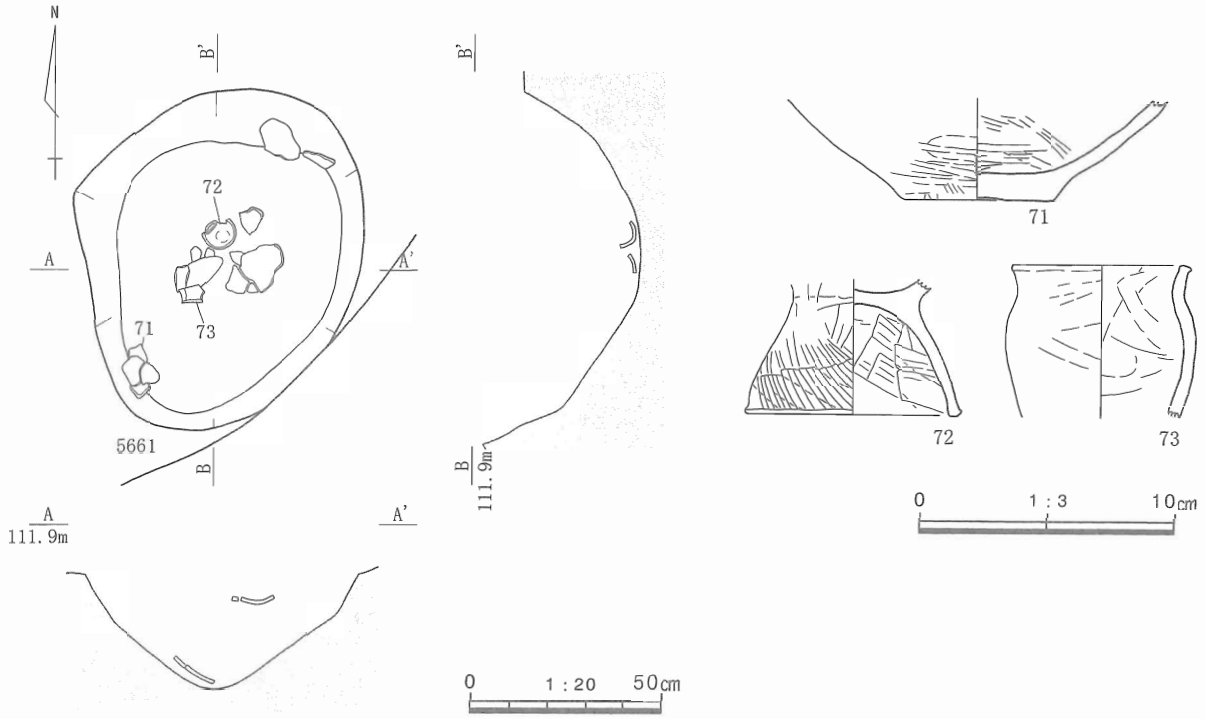
SH5425（第83～86図）

【遺構】L29グリッドで検出された。西側を茶畑の天地返しによる撹乱で大きく削られ、北側・南側の一部をSH5119とそれを囲む溝SD5389によって切られることで床面のおよそ2/3が失われている。残存する部分については覆土である黒色シルトを12cm程の厚みで確認した。

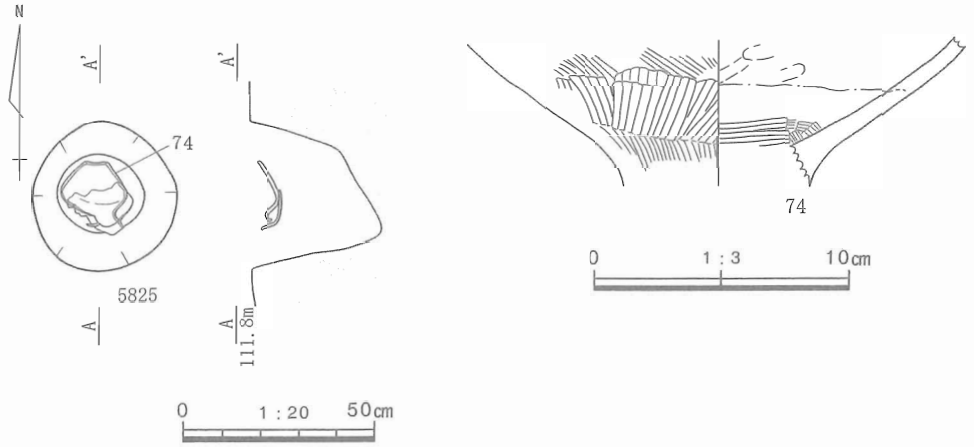
床面は残存部分のほぼ全域で確認された。褐色粘土と黒褐色シルトを用い、硬く敲き締められる。3～8cmの厚みがあり住居の縁近くがより薄くなる。床面上では柱痕を確認することはできなかった。

炉と壁溝は把握できなかった。炉は本来あるべき位置に撹乱が入っているので、破壊されているものと思われる。壁溝は断面、掘方上いずれでも明らかでなく、設けられていない可能性もある。

貯蔵穴SK5661は南東側の縁に設けられている。直径73～93cmの円形状で30cm程の深さがある。



第84図　貯蔵穴SK5661遺物出土状況・遺物実測図

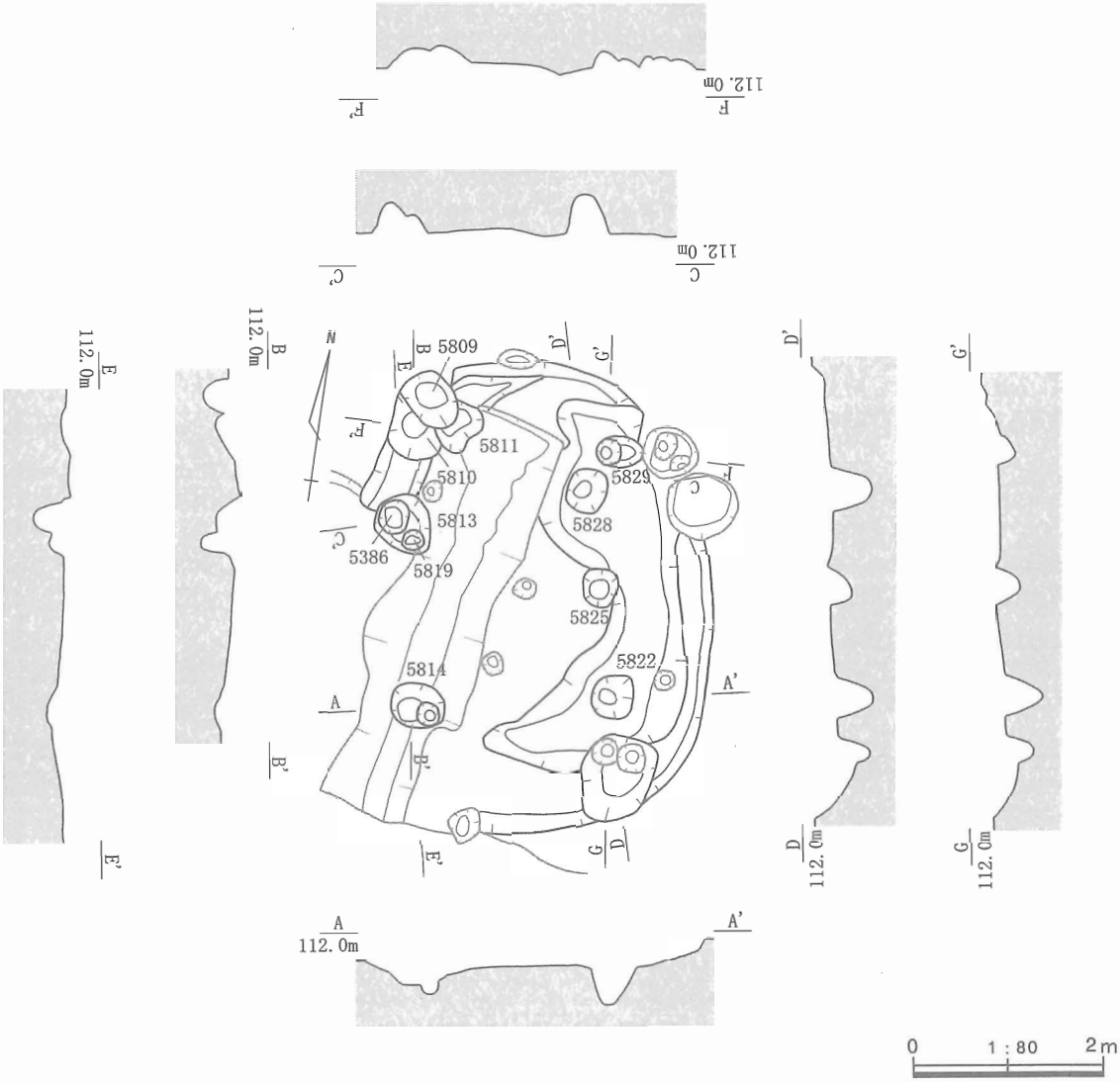


第85図　小穴SP5825遺物出土状況・遺物実測図

住居の掘方は底面を平らに整え、東側と北西側の立ち上がりに沿った位置に溝を設ける。東側の溝は幅0.75～1.25m、深さ１～11cmで、南北で途切れる。北西側の溝は幅40～55cm、深さ２cm前後となる。北端が尖るので、本来はわずかに東側の溝とつながっていたのかもしれない。

柱穴の掘方は主に６か所で検出された。北側には対になる柱穴が二組あり、北側に拡張されたものと思われる。当初の柱穴はSP5813・5814・5822・5828である。直径50cm前後の円形をなし、明らかな掘抜き穴は認められない。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.1～2.3m、短手方向で同様に1.9～２mとなる。

拡張は南側の柱をそのままにして北側だけを挿げ替えることによって行われている。SP5810・5829が挿げ替えられた柱穴に相当する。SP5810はやや浅いが5829と近似した深さなので柱穴と判断した。これと同等あるいは深い小穴SP5809・5811が切り合うので、この柱だけが複数回挿げ替えられた可能性もあるだろう。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.65～3.4m、短手方向で同様に1.8～2.2mとなり、柱

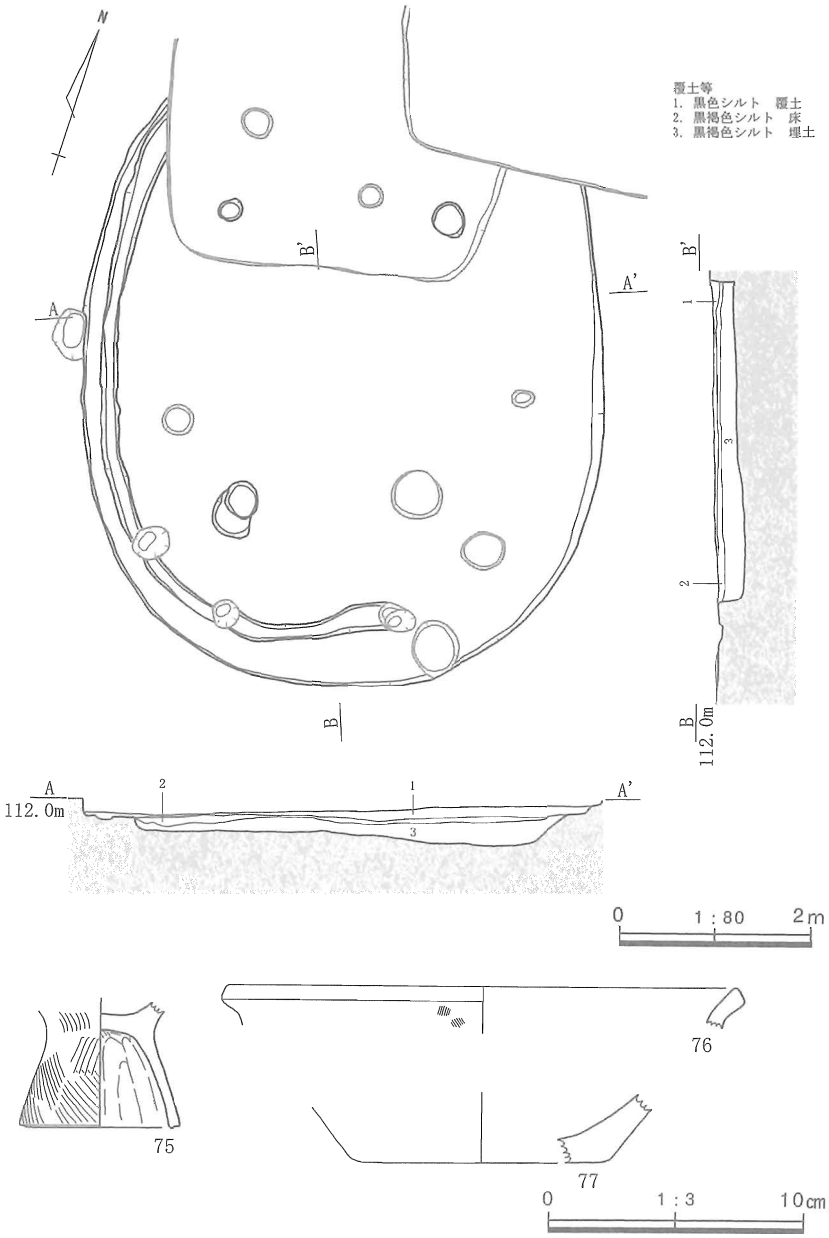


第86図　SH5425平面・断面図（掘方）

で囲まれる空間は拡張によりおよそ1.8㎡広くなっている。

【遺物】遺物は床上の覆土、床面上、貯蔵穴内、掘方上で検出された小土坑SK5825内から土器が出土している。67は台付甕の頸部～口縁部片である。外面は縦気味の斜め方向にハケ調整が施される。内面口縁部の調整は風化して失われているが、頸部には横方向のナデ調整が観察できる。68は折り返し口縁をもつ壺の口縁部片である。全体的に風化が進むが口縁部の上面と外面に縄文がわずかに観察できる。

69・70は床面上から出土した壺である。69は体部の半ば以下が欠損し、70は口縁部を打ち欠かれている。69はその口縁部を70に被せるように横たわっていた。それぞれは若干離れているので、立てられていたものが転倒したのかもしれない。69は外面をハケ調整した後に頸部に縄文を施し、上端には等間隔に円形の浮文を貼り付ける。縄文の上端部分は縦方向のミガキで平滑に整える。口縁部は外面に縄文を施した上、6本1組の棒状浮文を縦に貼り付ける。内面は頸部以上をハケ・ナデで整えた後、口縁部に縄文を施す。70は外面全体をハケ調整で整えた後、体部過半に細かなミガキを施す。肩部には縄文を施し、その上端にハケ工具による連続した刺突を加える。71～73は貯蔵穴から出土している。73は広口の小型壺で、ナデにより整えられる。74は小土坑SK5825から出土した台付甕片である。底部から浮いた位置に折重ねられていた。住居との関わりは確かでないが、便宜的にここに掲載した。



第87図　SH1678平面・断面図（床面）、遺物実測図

SH1678（第87～88図）

【遺構】M29グリッドで検出された。床面は北側のおよそ1/4をSH1685・3271によって壊されている。掘方はSH1685の床面下に遺存していた。

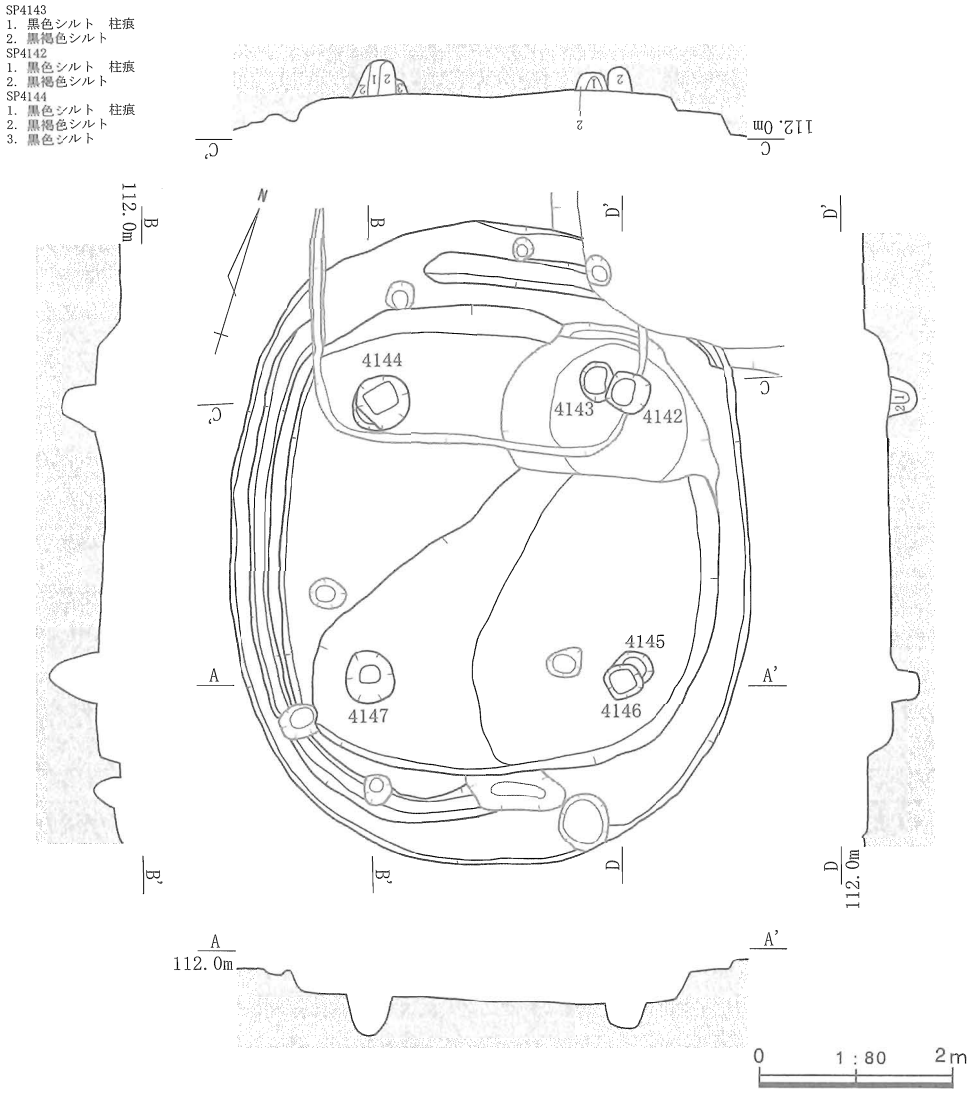
床面は、１～10cmの厚さで残存していた黒色シルトによる覆土を除去した住居のほぼ全域で認められた。黒褐色シルトを素材に用いて、４～８cmの厚さで硬く敲き締められている。断面を観察すると、後述する掘方内側のくぼみの内側にのみ設けられていることが分かる。床面上には脆弱な覆土による直径35cmの円形のプランが１か所観察された。これは柱痕跡と考えられ、南側に切り合う小穴は抜き取り穴の可能性がある。また、同様の円形プランはSH1685の床面下からも２か所が検出されている。

貯蔵穴は設けられていない。南東側縁に直径50cm内外の円形の小穴が存在するが、深さが15cmと浅いのでこれに該当しないものと考えた。

炉も検出されなかった。掘方の下位や熱染みも認められなかったので、元来設けられていなかったものと考えられる。

壁溝は西側から南側にかけて検出された。幅15～25cmで、深さは10cm程度となる。西側では掘方の縁に接する部分もあるがおよそ20cmの間隔をもつ。南側ではおもむろに住居内側方向に屈曲して、最大で55cm内側に入り込んでいる。

住居の掘方は、中央部分が直径4.5～５mの円形状に窪み、更に内側は中央部分が斜めに高まっている。この周囲は掘方の立ち上がりまでの間がテラス状に平らとなりその中間付近に壁溝の下位部分が掘りこまれている。北側の壁溝は掘方段階で明らかとなり、北北東付近で住居の掘方の沿うものの、他の部分は掘方よりも35cm程度内側にある。この状況から、最初に住居は掘方内部の円形状のプランで建てられ、後に壁溝の位置から当初検出されたプランの位置まで複数回にわたって拡張されたのではないかと考えられる。断面で認められた床面との関係から、この拡張は床面下の掘方や床面の追加を伴うものではなく、掘方の底面を床面と同じ高さに止めてその位置に壁溝等の施設を新たに設ける手法で行われている。



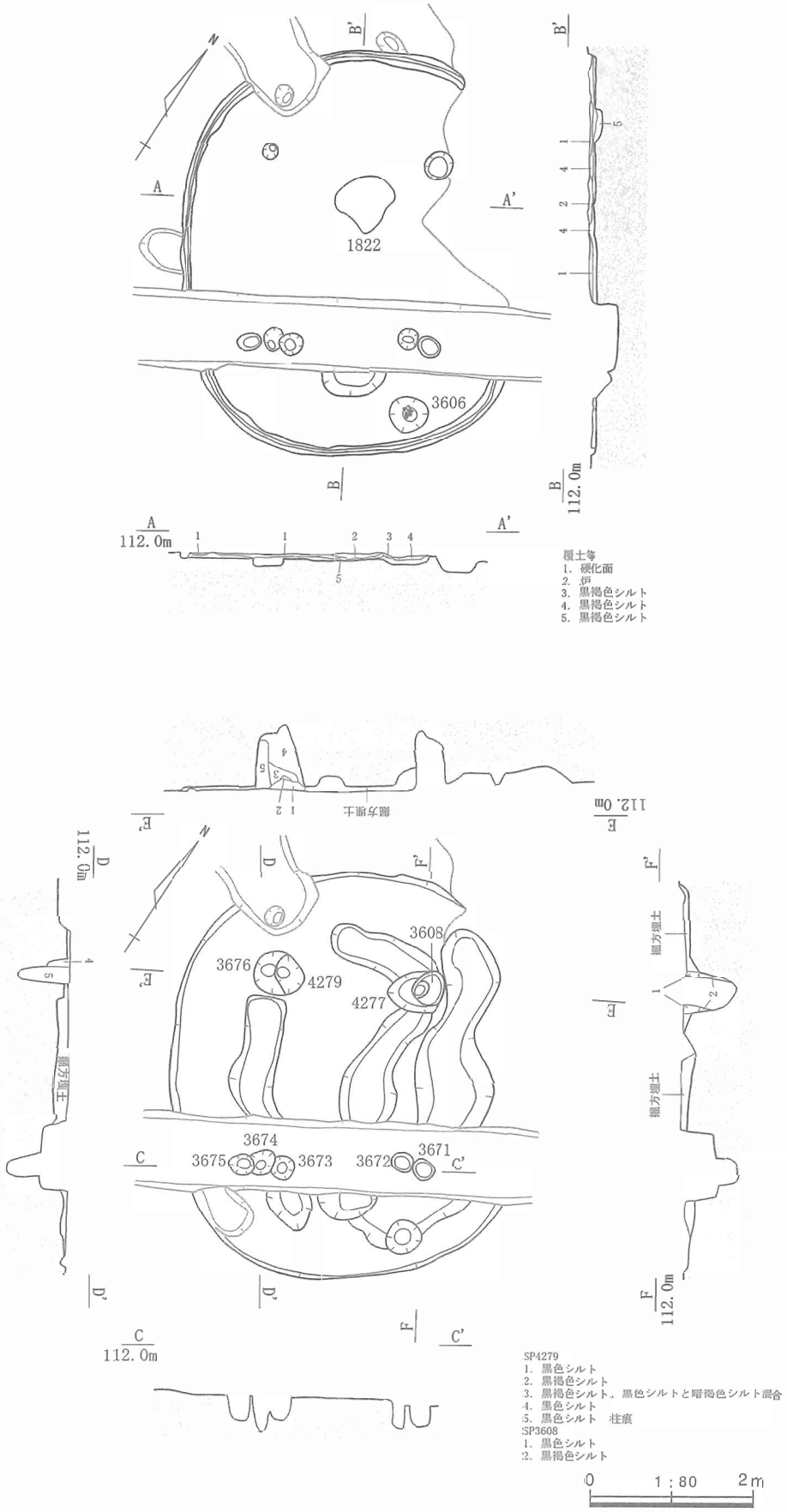
第88図　SH1678平面・断面図（掘方）

そのために最終形態には伴わない壁溝を同一の高さで検出しえたのである。

柱穴の掘方は5か所で検出された。柱穴SP4146は切り合う浅い小穴を伴っているので、床面上で小穴を伴っていたSP4147とともに柱は抜き取られて転用されたものと考えられる。柱穴SP4144の断面では直径10cm程の柱痕が観察された。

また、SP4142・4143でも柱痕とも思われる部分が断面に見られる。SP4143では底より間口が広がっているので、抉って抜かれているのかもしれない。いずれもSP4144の場合と異なり底面まで及んでいない。このSP4142・4143は一部が切り合い外側のSP4142が新しい。拡張に伴って外側に挿げ替えられたものと考えられる。柱の間隔は、長手方向に芯々で3～3.2m、短手方向に2.2～2.65mとなる。

【遺物】遺物は土器が床面上などから出土している。75は床面上から出土した小型の甕の台部である。外面はハケ調整で整えられる。主に下から斜め上方向に施されるが、体部との接合部は屈曲に合わせて縦方向に施されている。内面は縦方向のハケ調整の後に、同じく縦方向のナデを施して平滑に整える。端部は矩形に成形される。76は床上覆土から出土した甕の口縁部片である。縦方向のハケ調整が外面の一部に観察される。77は壺の底部である。76と同様に風化が激しく調整痕は観察できない。



第89図　SH1822平面・断面図（床面・掘方）

SH1822（第89～90図）

【遺構】Ｐ28～Ｐ29グリッドで検出された。南側を確認調査トレンチT19に、北東側を耕作の撹乱によって壊されている。

床面は確認調査トレンチよりも北側に広く残っていた。黒褐色シルトを素材とし、2～4cmの厚さで硬く敲き締められている。床面が残存する範囲からは直径15～35cmの円形のプランを2か所で検出した。より小さな西側はSP3676の柱痕と考えられる。

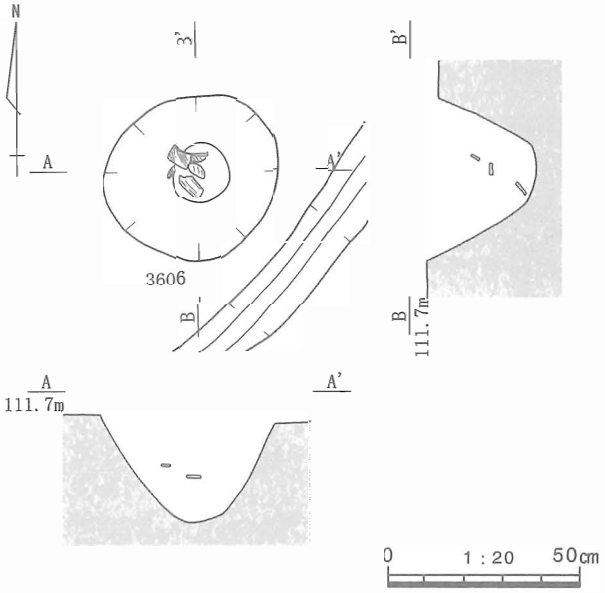
炉は住居の中央やや奥側に設けられている。床面を一部切り込む形で直径60cm程度の円形状の掘方を設け、内部にシルトないし粘土を充填するが、熱により変色するので元来の色調は定かでない。周囲が2cm程度環状に盛り上がっている。壁溝は幅10～16cm、深さ5cm前後で、撹乱が及ぶ部分以外には巡っている。本来は全周していたものと推測される。

貯蔵穴は南東側の縁に設けられている。貯蔵穴SK3606は直径45cm前後の円形をなし、深さは30cmで、擂鉢状に掘られている。内部

の中央付近からは土器が出土しているが、貯蔵穴の中位に比較的多くみられるので、貯蔵穴を埋める際に投棄している可能性を感じさせる。

住居の掘方は底面を平らに整え、内部に３条の溝を設けている。西側の溝は住居の立ち上がりに沿うようにやや弧を描いている。幅は45～60cmで、５～11cmの深さがある。中央部の溝は西側の溝に似た規模をもつが、北側で住居の立ち上がりに沿う以外はL字形に曲がって内側に入り込んでいる。東側の溝は幅0.4～１m、深さ１～６cmと最も幅が広く、外側は住居の立ち上がりに沿っている。

柱穴の掘方は７か所で検出されている。SP3676は4279と切り合っており、後者が５cm程深い。SP3676の断面で柱痕が検出されているので、西側に挿げ替えられたことが分かる。南側のトレンチ内では直径25cm前後の柱穴が対になって検出されている。深さも近似するのでSP3673～3675では２回、3671・3672では１回の挿げ替えが行われたのであろう。掘方内の溝が複数錯綜することからも、柱の挿げ替えは住居の拡張を伴っていたものと考えられる。柱穴の間隔は、長手方向に芯々で2.2～2.4m、短手方向には同様に1.9～2.2mとなる。



第90図　貯蔵穴SK3606遺物出土状況

【遺物】貯蔵穴SK3606から土器が出土している。甕の破片が主体であるが、接合しない小破片のため図化は割愛した。

SH1335（第91図）

【遺構】M30グリッドで検出された。北側はSH1313を囲む溝SD2937に、南側をSH1313に壊されている。

床面は５～８cmの厚さで遺存していた黒色シルトを主体とする覆土の下で、ほぼ全域にわたって検出されている。掘方埋土に近似した黒褐色シルトを素材とし、厚さ１cm内外と薄い。床面上には脆弱な覆土による直径16～25cmの円形のプランが２か所観察された。これは柱痕跡と考えられる。

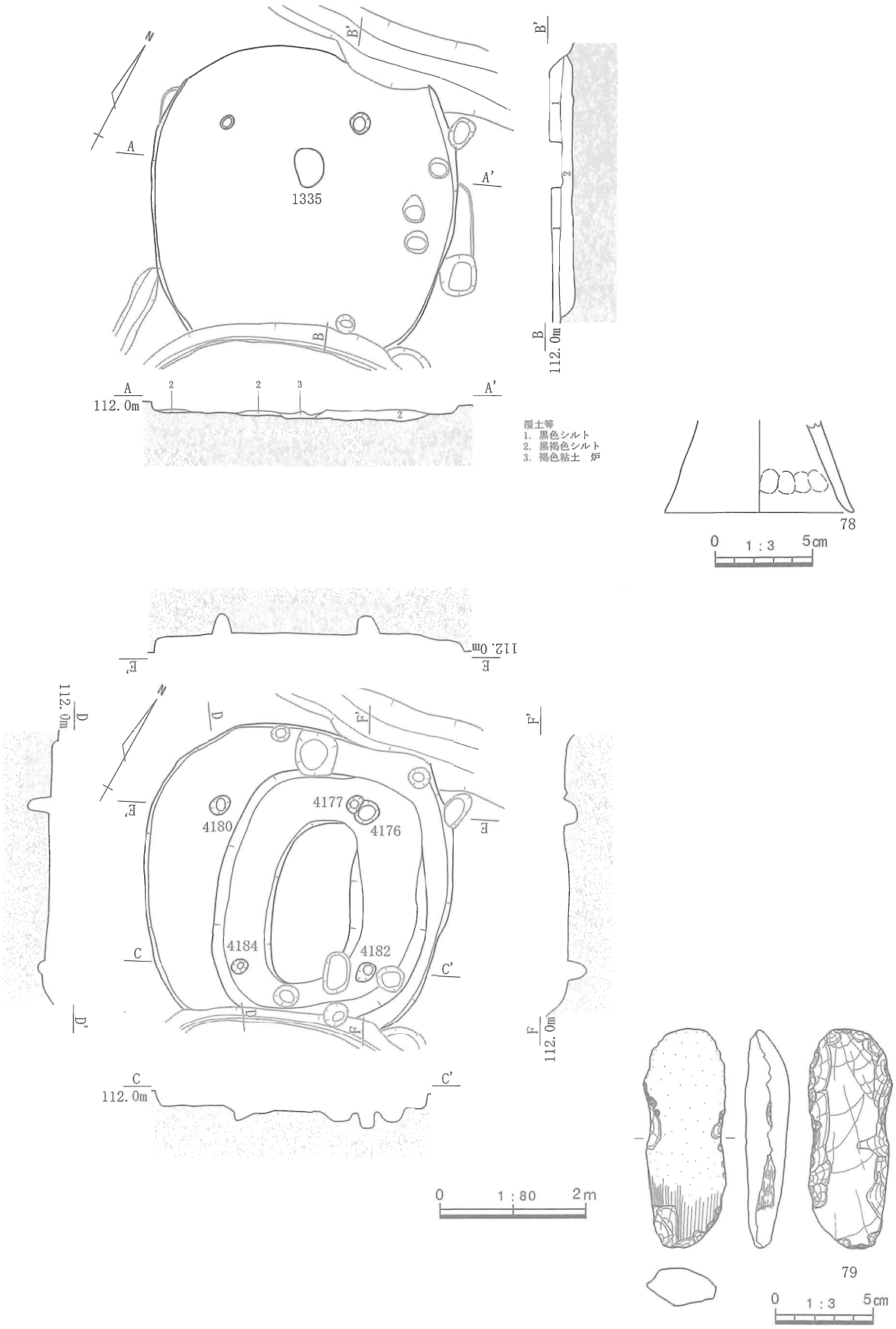
炉は住居の中央やや奥側に設けられている。直径40～50cmの楕円形状で上位は失われて熱染みとして認められた。壁溝と貯蔵穴は認められなかった。

住居の掘方は底面を平坦に整え、内部に溝を備える。溝は楕円形に全周するもので、東側に偏っている。幅0.7～１m、深さ３～８cmとなり、比較的東側の幅が広くとられている。柱穴の掘方は５か所で検出された。直径20～35cmとやや小型の円形を呈する。北東側のSP4176のみが西側でSP4177と切り合っている。住居の掘方が北側にややいびつであることからも、１本だけ柱を挿げ替えて拡張している可能性を感じさせる。柱穴の間隔は長手側で芯々に2.2～2.3m、短手側で同様に1.8～2.1mとなる。

【遺物】遺物は床面上と掘方埋土から土器・石器が出土している。

78は床面上から出土した台付甕の台部である。末端はやや尖り気味に調整され、内側には連続する指頭痕が観察される。表面は風化が激しい。

79は短冊形を呈する打製石斧である。表面には原礫面を、裏面にも素材の面を広く残しながら側縁を調整して形作る。側縁の中央付近には、緊縛のためか緩やかな抉り込みが作られる。先端部には使用痕と思われる細かな擦痕が平行して観察される。

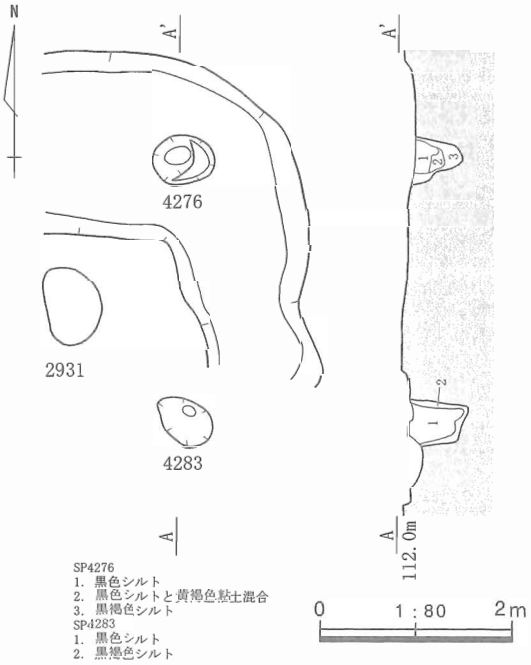


第91図　SH1335平面・断面図（床面・掘方）、遺物実測図

SH2931（第92図）

【遺構】N31～O31グリッドで検出された。周辺をSH1303・2913・803や耕作による撹乱によって壊されているため掘方の一部を検出したにとどまった。床面に設けられた施設で存在が把握できるのは炉である。住居の中央と思われる位置に58～82cm程度の直径をもつ楕円形状の熱染みが観察されている。貯蔵穴は特定することができなかった。

住居の掘方は壁の立ち上がりが失われ、内部に位置する溝の一部のみが把握された。幅1.08～1.95m、深さは掘方底面から10cm程度とやや浅い。柱穴は2か所を特定した。直径45～65cmの楕円形状で深さは50～60cmと近似している。柱穴の芯々の間隔は2.7mとなる。SP4276では柱痕の一部とも考えられる直径、深さともに30cmの黒色シルトと黄褐色粘土からなる堆積を断面に見出すことができた。一方SP4283では黒色シルトと黄褐色粘土が広い範囲で入っており定かではない。



第92図　SH2931平面・断面図（掘方）

SH2218（第93図）

【遺構】L27～M28グリッドで検出された周囲を溝で囲まれる住居である。耕作に伴う円形の大形土坑により部分的に破壊されている。

床面は検出面とほぼ同等の高さにある。東側は検出面がやや下がった影響で検出されていないが、おそらくほぼ全面に張られていたものと思われる。褐色シルトを材料に用い、硬く敲き締められている。北西側のSP3716に相当する部分に直径15～25cmの脆弱な覆土による楕円形のプランを検出した。これは柱の痕跡と考えられる。

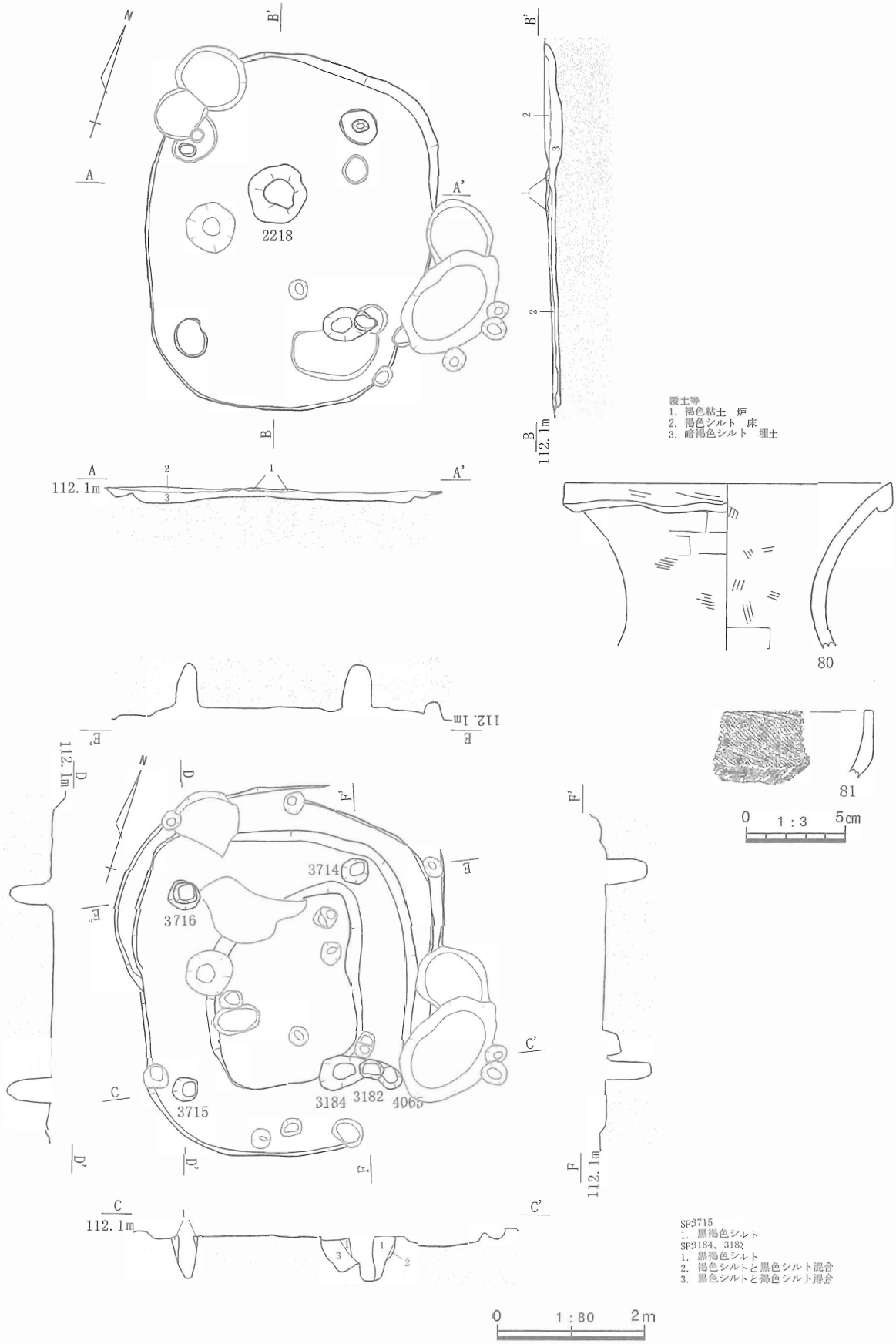
炉は、中央やや奥側に検出された。床面に一部が乗る直径75cm前後、深さ2～6cmの円形状の掘方内に褐色粘土を充填する。頂部は床面から4cm程度盛り上がっており、直径33～42cmの円形状の平坦部を作り出す。貯蔵穴は元来設けられていない。壁溝も検出できなかった。

住居の掘方は底面を平坦に揃え、溝を設ける。溝は住居の南～南西側では掘方の立ち上がりに沿うが、東～北北西側では最大で40cm程度の間隔をもつ。住居掘方の立ち上がりは西から北を回って東に至る個所では複数の段として捉えられる。おそらく、建築当初から2回の拡張が加えられているのだろう。柱穴の掘方は少なくとも4か所である。SP3714・3715・3716は直径30～40cmで、49～56cmの深さをもつ。いずれも抜き取り穴は伴わない。SP3182は長軸30cm、短軸25cmの楕円形を呈し、深さも56cmと他と近似する。これにはより浅い小穴SP3184・4065が切り合っている。東側のSP4065は39cmの深さがあり床面上での精査段階では確認できなかったもので、当初段階の柱穴であろう。一方SP3184は3182とともに検出されており、46cmとやや深く柱穴にしては他よりも大きい。

【遺物】遺物は床面上とSP3184内から土器が出土している。

80は折り返し口縁をもつ壺の頸部～口縁部片で、SP3184から出土した。外面、内面ともに風化するが、ハケ調整を施した後に横方向の板ナデを追加して表面を平滑に整える。口縁部外面は横方向のハケ調整によって直立する平面を作りだしている。

81は床面上から出土した壺の口縁部である。複合口縁の一部分であり、直立する外面には縄文を施している。

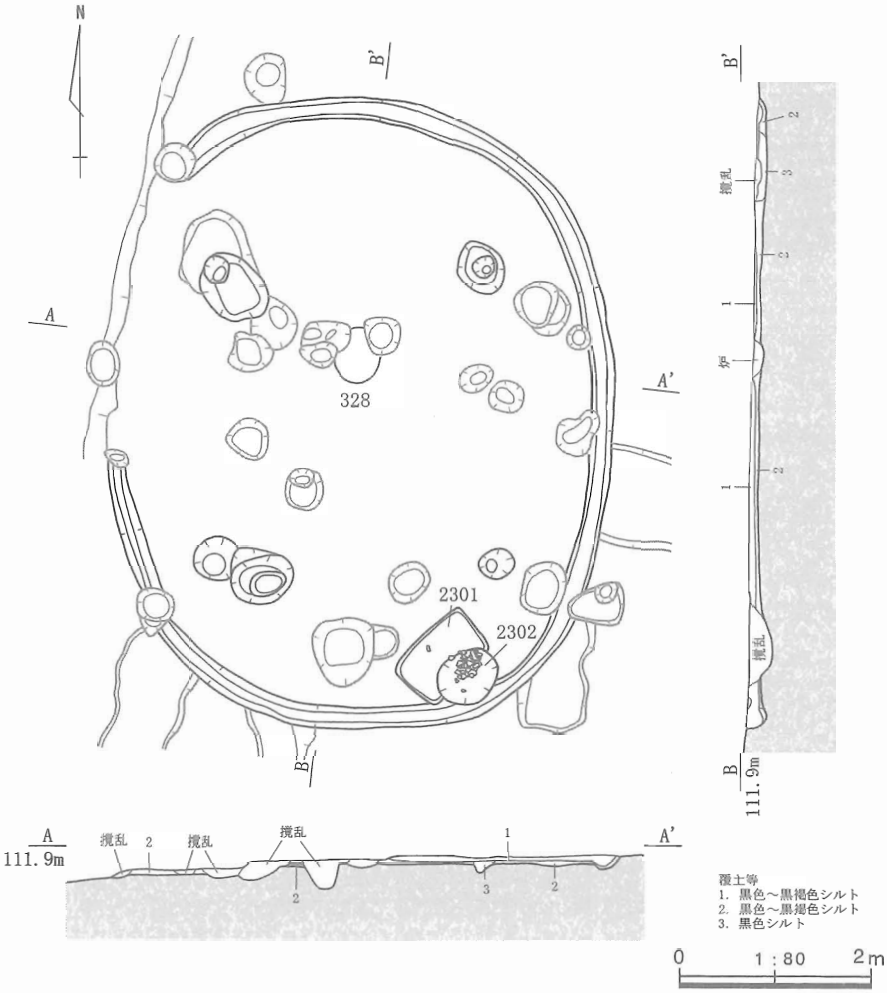


第93図　SH2218平面・断面図（床面・掘方）、遺物実測図

SH328（第94～96図）

【遺構】M32～N32グリッドで検出された、牛尾山山上の平坦面の西縁に位置する住居のひとつである。今回検出された竪穴式住居のほぼ全てが北西－南東方向に軸をもつ中で、この住居は斜面際という立地のせいであろうか、南北方向に軸をとる稀有な例である。西端の一部を耕作による撹乱によって切られている以外は整った形状を概ね把握することができた。

床面は、住居の全域にわたって検出され、壁溝際まで隙間なく張られていた。掘方埋土と同質の黒色～黒褐色シルトを素材として1層上に厚さ1.5～2㎝程度の厚みで硬く敲き締められている。断面図上ではこの厚みを表現できないので、割愛してある。床面の設けられた高さは標高111.7m付近であるが、西～南方向に多少下っている。特に炉の周囲で一旦下がる傾向がある。床面上には黒色シルトが覆土として堆積しており、最大で5㎝の厚みが残存していた。床面上には脆弱な覆土による直径30～75㎝の円形ないしは楕円形プランが4か所観察された。これらのうち南東側にあるひとつはSP2298の柱痕跡と考えられる。



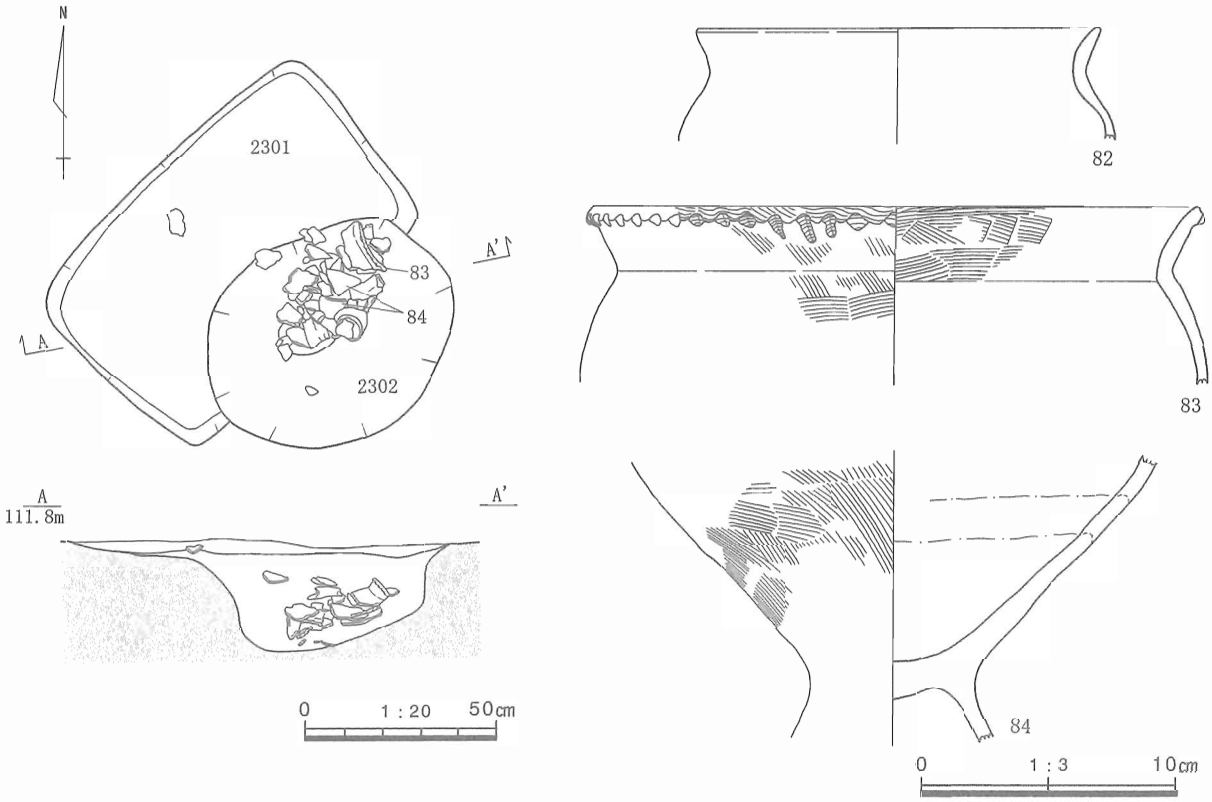
第94図　SH328平面・断面図（床面）

貯蔵穴は南側の縁辺東寄りに設けられており、南東側の一部が壁溝と重複している。直径55～65㎝の楕円形を呈し、深さはおよそ30㎝である。この北西側には長辺95㎝、短辺60㎝の長方形に、床面から4㎝程度掘り窪めてある。南東側の一辺に貯蔵穴のほぼ中心があたることから、それぞれは関連したものであると考えられる。貯蔵穴の蓋受けのような機能を有していたのかもしれない。

壁溝は、北西側の撹乱付近以外では全周している。壁溝が定かでない部分は、検出面がやや下がっている関係で失われている可能性が高い。幅18～32㎝で北西側がやや幅広となるものの、およそ25㎝前後で一定している。深さは床面から10㎝内外である。

炉は中央やや北側寄りに設けられている。周囲を小穴状の撹乱によって壊されているが、直径50～55㎝の円形であったものと思われる。深さ10㎝程の小土坑を穿った後に、粘土を充填して造られている。粘土の外縁は小土坑の外側15㎝ほどまで及んでおり、上面は平に整えられる。床面と炉の頂部は高低差があり、床面から最大で4㎝程度盛り上がっている。

住居の掘方底面はほぼ水平で、溝は設けられていない。掘方上には厚さ2～3㎝の黒色～黒褐色シル



第95図　貯蔵穴SK2301・2302遺物出土状況・遺物実測図

トを敷きならして埋土としている。

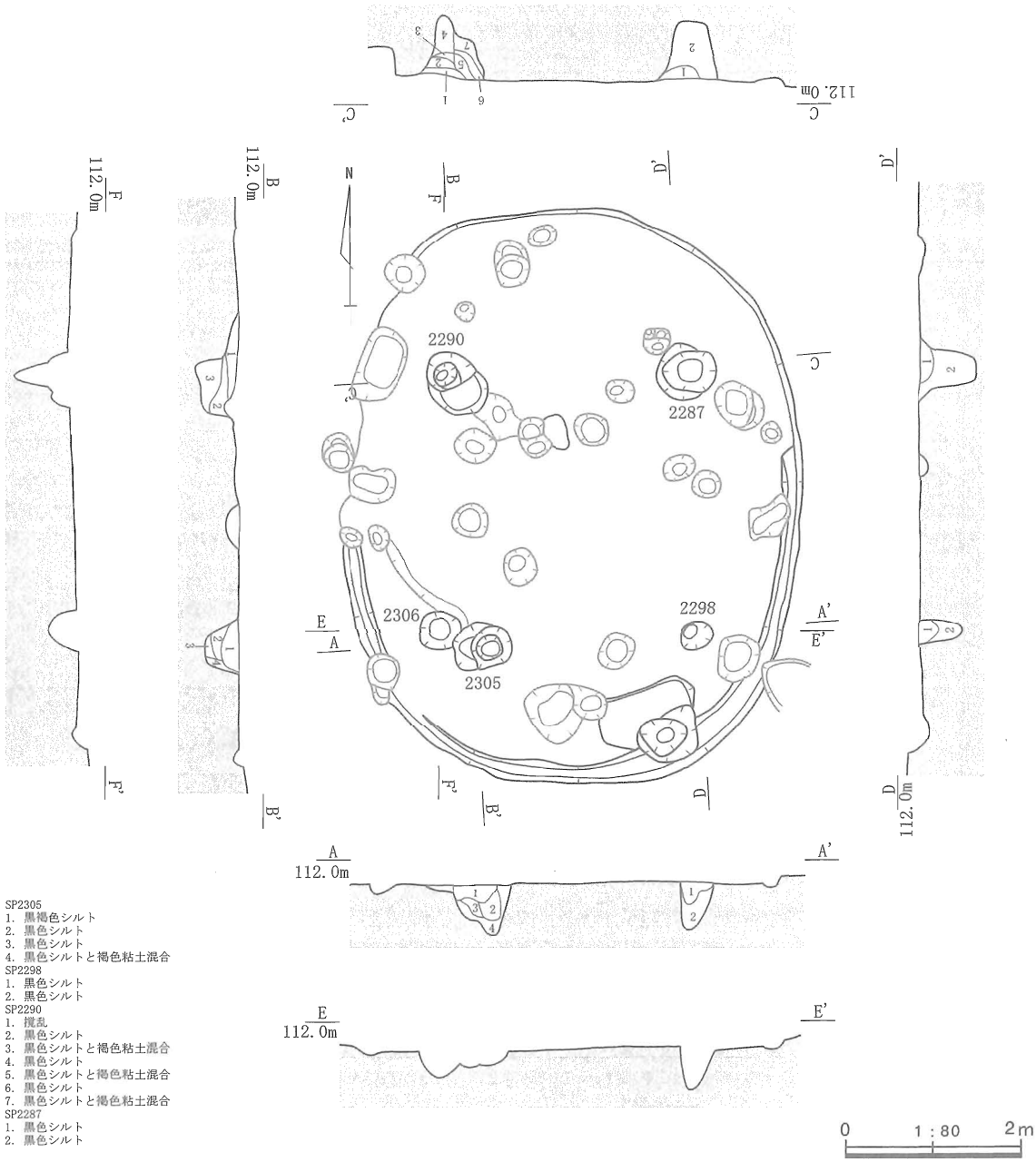
柱穴の掘方は直径30～60cmの円形状で、南東側のSP2298が最も小さい。いずれも住居掘方の立ち上がりから90cmほど内側に掘られており、整ったバランスを感じさせる。南西側の小穴SP2306は隣接するSP2305に比べれば15cm程度浅いが、北側の柱穴2290とほぼ同じ深さなので、柱穴の一つと考えられる。柱根の腐食などによってこの部分だけが外側へ新たに挿げ替えられたのであろう。また、柱穴SP2290は著しく深い。軟弱な個所に延びた木根の可能性がある。

SP2298以外には複数の小穴が切り合っており、断面の土層にも柱痕とみられる堆積は定かでない。いずれも柱穴よりも浅く床面上からもすでに把握されていたものがあるので、柱は抜き取り穴を掘って取り去られるか、その場で抉って抜き取られているものと考えられる。柱穴間の間隔は、長手方向が芯々で３～3.2m、短手方向が同様に2.3～2.9mとなる。

【遺物】貯蔵穴SK2302内から土器がまとまって出土している。土器は甕のみである。貯蔵穴の中央部から住居の内側方向にかけておよそ２個体の破片が無造作に放り込まれているようにみえる。82は体部上半以下を復元することはできない。また、83・84は同一個体の可能性が高いが破片の接点はなく、更に84の台部の端部も接合することができなかった。この状態は、完形の甕が貯蔵穴内に捨てられることによって割れたのではなく、他の個所でばらばらに割った破片をまとめて廃棄したことを示している。同一個体の破片が床面上に残されていないことからも、この場所は屋外であったとも考えられる。

82は甕の体部上半～口縁部片である。体部と口縁部の接合部で厚みを著しく増して、体部に比べて厚い口縁部を備えている。表面の調整は風化により定かでない。

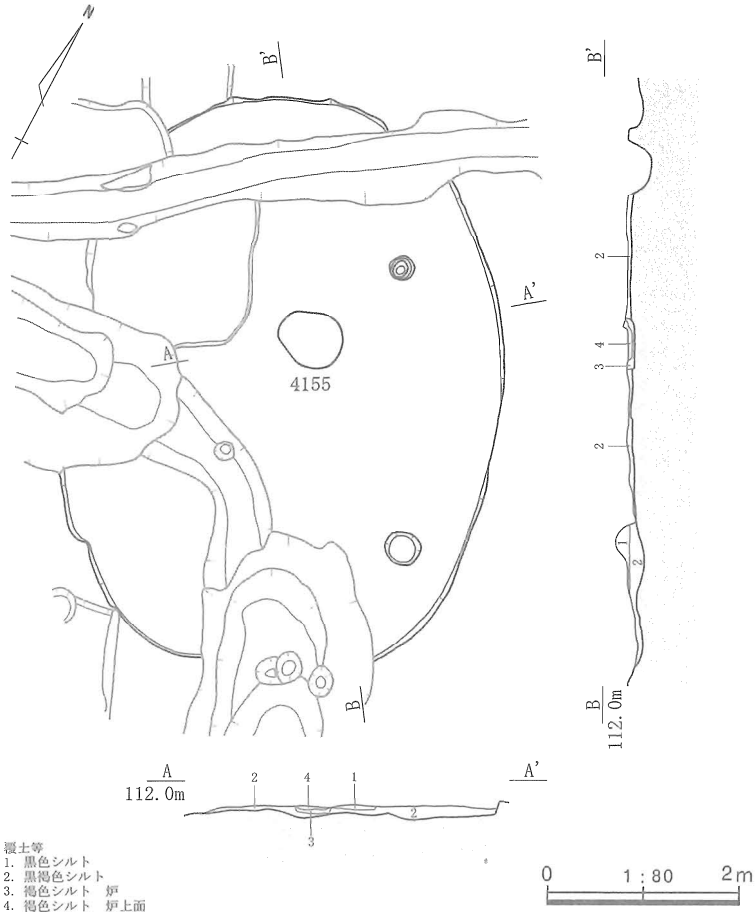
83はやや大形の甕の体部上半～口縁部片である。口縁部は体部との境に明確な境をもち、口唇部にかけて直線状に立ち上がる。内外面ともにハケ調整によって整えられている。外面は口縁部と体部の接合個所付近から上を縦方向にハケ調整する。体部上半のハケはこのハケを切って横方向に施されている。



第96図　SH328平面・断面図（掘方）

調整の最終段階に施されたものであろう。口唇部は角ばり、端部は横あるいは斜め方向にハケ調整されている。口唇部外縁にはこの際に押された粘土が下方向に垂れ込んでおり、この角にハケ工具を縦に刺突して連続する刻みを付けている。内面は口縁部に横方向のハケ調整が観察できる。口唇部の内側縁辺にはハケ調整によって押し出された粘土が残らないので口縁部内面のハケ調整は外面・口唇部の調整が終了した後に施されていることが分かる。

84は甕の台部～体部片である。台部の内側は滑らかに調整され、底部内面の屈曲に沿うかたちで中心が下方に突出している。台部と体部の接合面も滑らかで、ハケ調整によって整えられたのだろうが調整痕は風化によって明らかでない。体部外面には下から斜め上方に引き上げられるハケ調整が観察できる。内面はナデ調整が主体で、体部半ばに相当する部分には高さ15cm程の輪積み痕が観察できる。



第97図　SH2949平面・断面図（床面）

SH2949（第97～98図）

【遺構】L30～M30グリッドで検出された。南側を方形周溝墓SZ2575に、北側を溝SD302や耕作による撹乱によって壊されている。検出面は床面前後になったため、住居の立ち上がりは把握できなかった。また、床面上には覆土である黒褐色シルトが一部に６～14cmの厚みで認められた。

床面は覆土の残る南側のごく一部などで確認されたにすぎない。掘方埋土である黒褐色シルトの上面を敲き締めているようであるが全容は明らかにできなかった。この面では直径25～30cmの脆弱な覆土による円形のプランを２か所で検出した。これらは柱痕であると考えられる。西側の二つの柱穴は、撹乱等の影響でこの位置では把握できなかった。

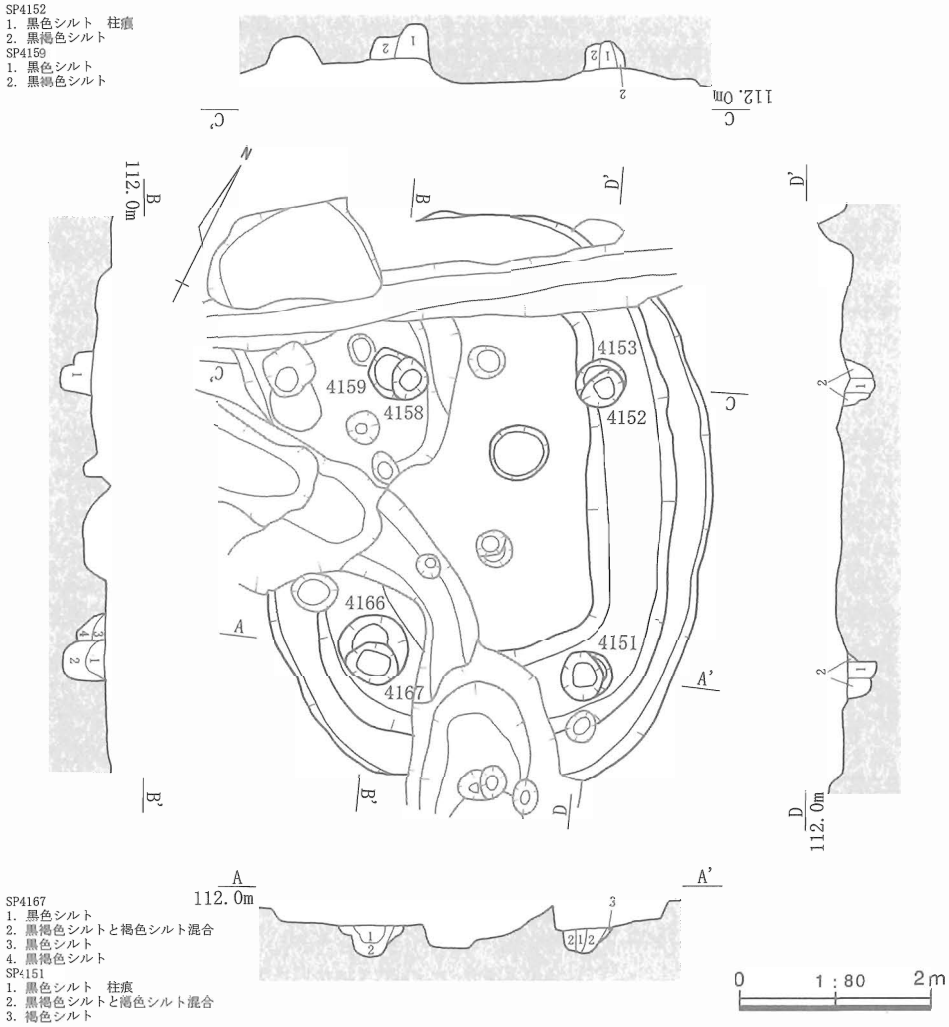
炉は住居中央やや奥側に設けられている。長軸68cm、短軸58cm、深さ８cmの掘方に褐色シルトを充填する。上面は平に整え、北縁に２cm程度のわずかなふくらみを土手状に設けている。

壁溝は見いだせなかった。住居の掘方底面でも検出できなかったので、設けられていなかった可能性を感じさせる。

貯蔵穴も明らかでない。方形周溝墓SZ2575が貯蔵穴のあってよい場所に掘られているので、これにより破壊されている可能性がある。

住居の掘方は、底面を平らに整えて周囲に溝を設ける。溝は住居の立ち上がりのラインに平行して幅0.75～0.95m、深さ２～７cmとほぼ均一な幅で掘られている。北東側は撹乱によって把握できないが、SD302の北側では溝があってよいはずの位置に検出できなかった。北から西側にかけて掘られずにJ字形になる可能性もあろう。住居掘方の下端から15～30cm間隔をあけ、この間がテラス状に残っている。なお、掘方内には５～10cmの厚みで黒褐色シルトを敷き均している。

柱穴の掘方は４か所で検出した。直径40～50cmの円形をなし、西側のSP4158、4167は切り合いがある。SP4158は西側に10cm程度浅いSP4159がある。SP4159は4152、4151などと近似した深さがあるので柱穴の一つと考えられる。いずれの断面にも柱痕は把握されず、柱穴の内部をさらって柱を抜き取っているものと考えられる。南側にあるSP4167は直径72cmとひときわ大きなSP4166と切り合う。柱の抜き取り穴としては大きいため柱穴の一つと考えたい。いずれの断面にも柱痕は認められず、柱の抜き取りのために内部が掘り返されている可能性がある。東側の柱穴4152・4153、4151では幅15cmの柱痕が断面に認められた。柱穴の間隔は、長手方向に芯々で2.8～3.1m、短手方向で同様に２～2.25mとなる。このように、住居は同じ掘方を利用して東側の柱をそのまま残し、西側の柱を挿げ替えることで上屋を改修しているものと考えられる。



第98図　SH2949平面・断面図（掘方）

SH1440（第99図）

【遺構】R29～R30グリッドで検出された。西側のおよそ2/5を天地返しに伴う撹乱によって壊される。残存部には床面上の覆土となる黒褐色シルトが10～16cmの厚みで検出された。

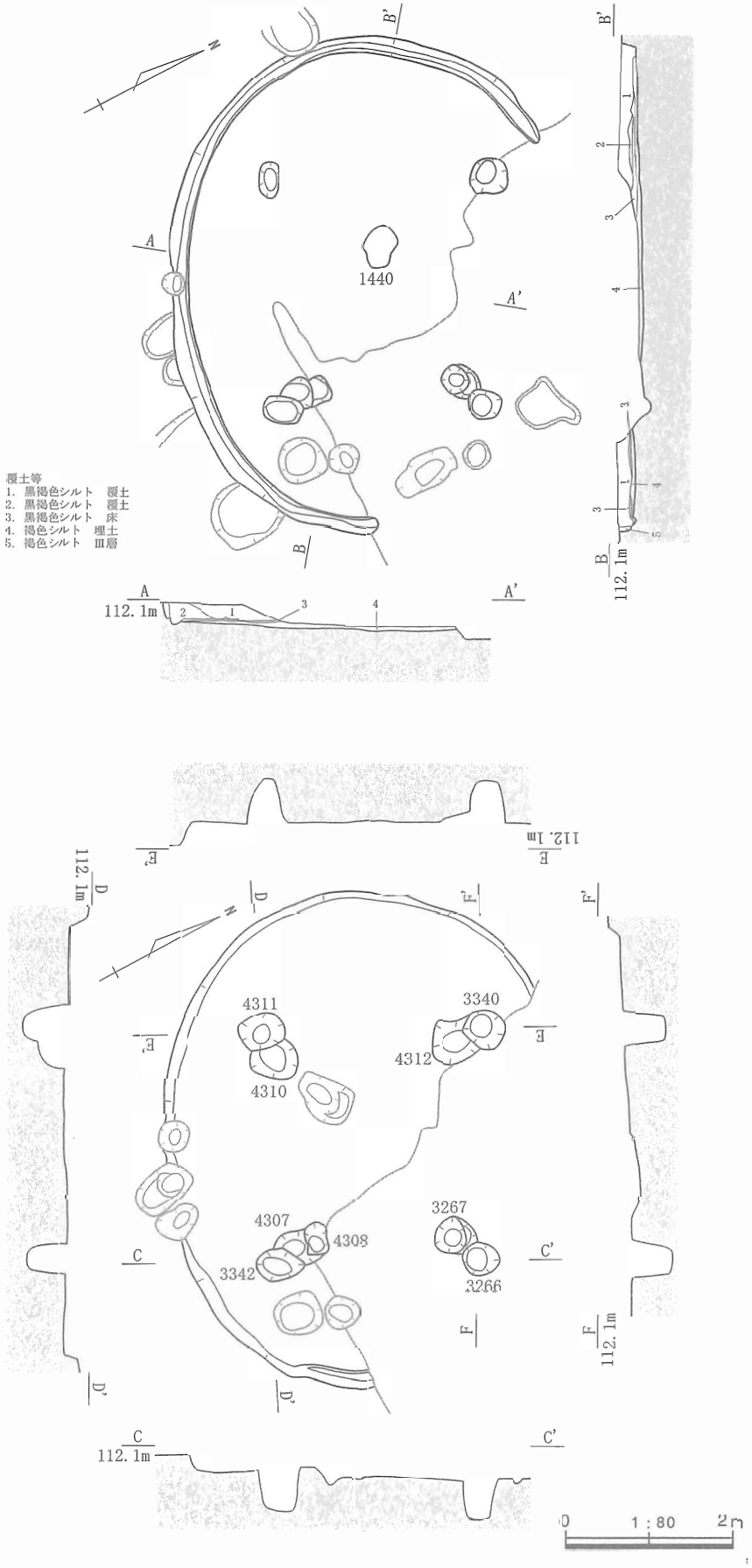
床面は、残存部の多くで認められた。褐色粘土粒の混じる黒褐色シルトを２～６cmの厚みで硬く敲き締めている。中央部に行くに従い厚くなる傾向がある。床面上では２か所に柱穴を確認することができた。西側にあるSP4311に相当する位置には長軸40cm、短軸25cmの楕円形のプランがあり、柱痕の一部と考えられる。SP3342・4307・4308は連続して切り合う柱穴である。もっとも新しいと考えられる3342は抜き取られている可能性が考えられるが隣接する4307上には床が設けられていなかった。掘方上で検出された柱穴がいずれも床に覆われていたので、このありかたは特異的である。

炉は住居の中央やや奥側に設けられている。撹乱の影響で熱染みの下位が長軸50cm、短軸40cmの楕円形状に検出されている。掘方は残存していなかった。

壁溝は撹乱を被る個所以外に認められた。途切れる気配はなく、本来は全周していた可能性を感じさせる。幅18～28cm、深さ７cm前後となる。

貯蔵穴は西側のプラン際と推測される位置にある２基の小穴いずれかが該当するかもしれない。確証が得られなかったので図中では撹乱扱いとしている。

住居の掘方は底面を平らに整えるのみで、溝が伴っていない。



第99図　SH1440平面・断面図（床面・掘方）

柱穴は４か所で検出されているが、いずれでも複数が切り合う。西側の柱穴SP3340は直径45cmの円形で、南側に4312と切り合っている。4312の下端は3340より20cm程度浅くなるが、床面上では認められなかったので古い柱穴が埋め戻されてその上に床が復旧されているものと考えられる。この南側にあるSP4310・4311についても同様の傾向が観察される。撹乱中で検出された柱穴SP3266は、本来は西側の柱穴と同規模であったろう。SP3267と切り合い、3267が15cmほど浅い。西側の柱穴いずれでも内側の柱穴が浅くなっていることから、これも新旧の柱穴と考えられる。SP3342・4307・4308でもSP4307は3342より６cm、SP4308は4307より12cmそれぞれ浅くなり、他の柱穴と同様な傾向にある。

このように、いずれの柱穴でも内側から外側へ柱を挿げ替えて、同一プランを利用しながら上屋を造り替えているものと考えられる。柱穴の間隔は、当初が長手に芯々で2.25～2.35m、短手で同様に1.65～2.2m、挿げ替え後は長手に芯々で2.8m、短手で同様に2.4～2.65mとなり、柱で囲まれる面積は2.6㎡程度広くなっている。

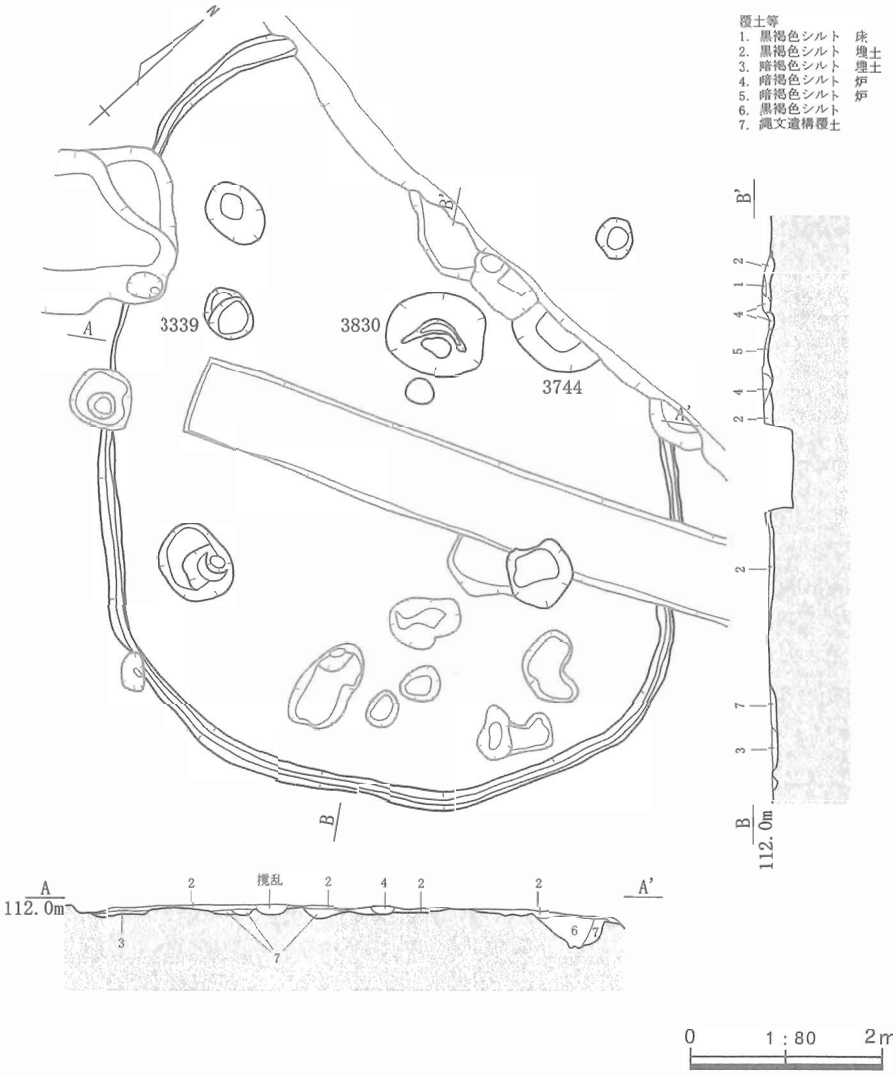
SH1426（第100～103図）

【遺構】R28～R30グリッドで検出された。ほぼ中央を真横に確認調査トレンチT21によって切られ、西側の1/5程度が茶畑の改植に伴う撹乱によって破壊されている。検出面が床面とほぼ同等のレベルであったため、床面以上の立ち上がりは失われている。

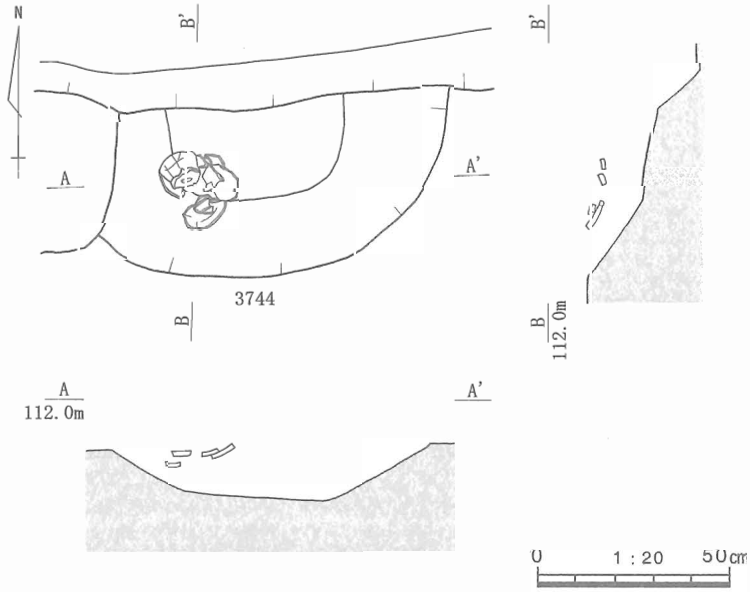
床面は炉の周囲に一部が認められた。黒褐色のシルトを用いており硬く敲き締められている。床は検出面が下がっているためにほとんどの部分で失われていたが、残存部の状況から標高111.9m付近に水平に張られていたものと思われる。

この床面相等面上では、柱穴が3か所で確認されている。これらは掘方の埋土上から穿たれているので、柱穴は掘方の埋土を平らに均した上から掘られ、その後に床が張られていることが分かる。西側の1か所は改植による撹乱の下面で把握された。

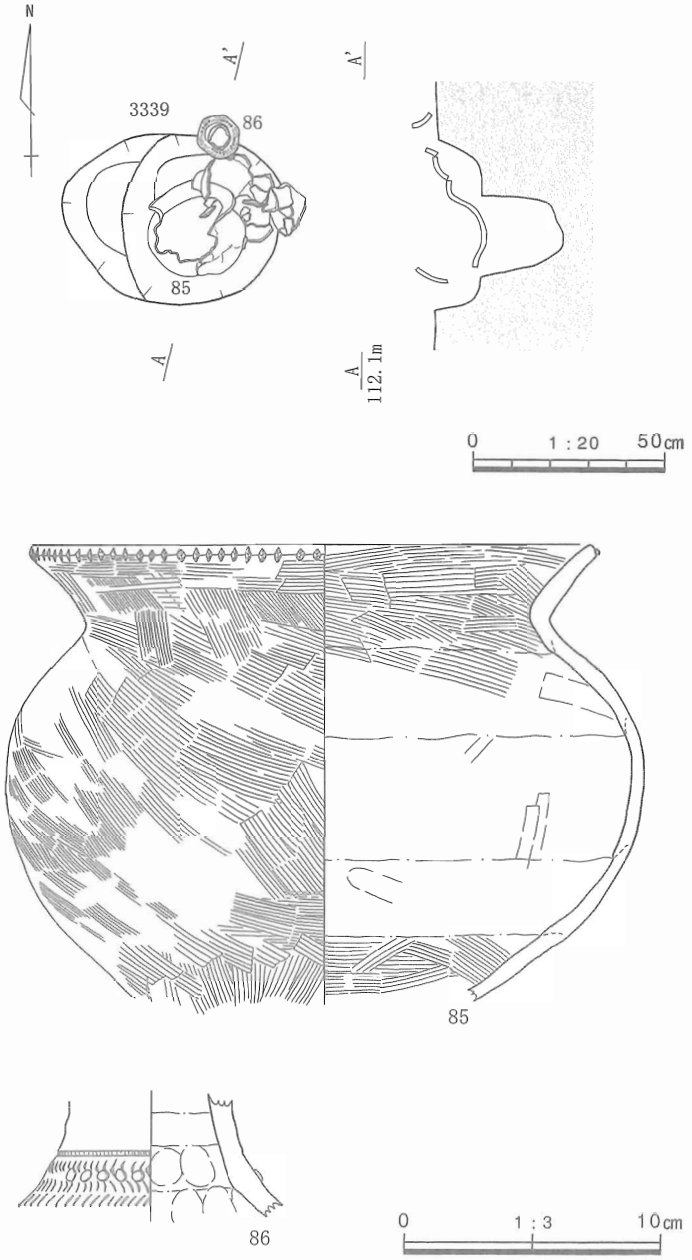
貯蔵穴は設けられていない。ただし、柱穴SP3395と1435を結んだ線上北東寄りに土坑SK3339が掘られている。直径50cm前後の2段に掘られた楕円形状を呈し、深さは35cmほどである。この中から周辺にかけて遺物が集中して出土している。特に壺の頸部は床面に相当する高さに据え置かれたよ



第100図　SH1426平面・断面図（床面）



第101図　土坑SK3744遺物出土状況



第102図　小穴SP3339遺物出土状況・遺物実測図

うに出土していることからも、これらは住居に伴うものと理解してよいだろう。また、甕は２個体分であるが、台部は出土しなかったので、土坑内に遺棄される以前に割り取られているものと考えられる。胴部から口縁部にかけては比較的原形をとどめるので、破損した部分の破片とともに土坑内に丁寧に埋め込まれたように感じられる。この土坑は、通常貯蔵穴が掘られる位置とは全く異なっているが、内部に土器が遺棄されるなど他の貯蔵穴と共通する傾向もあるので、同様な意図で設けられたものなのかもしれない。

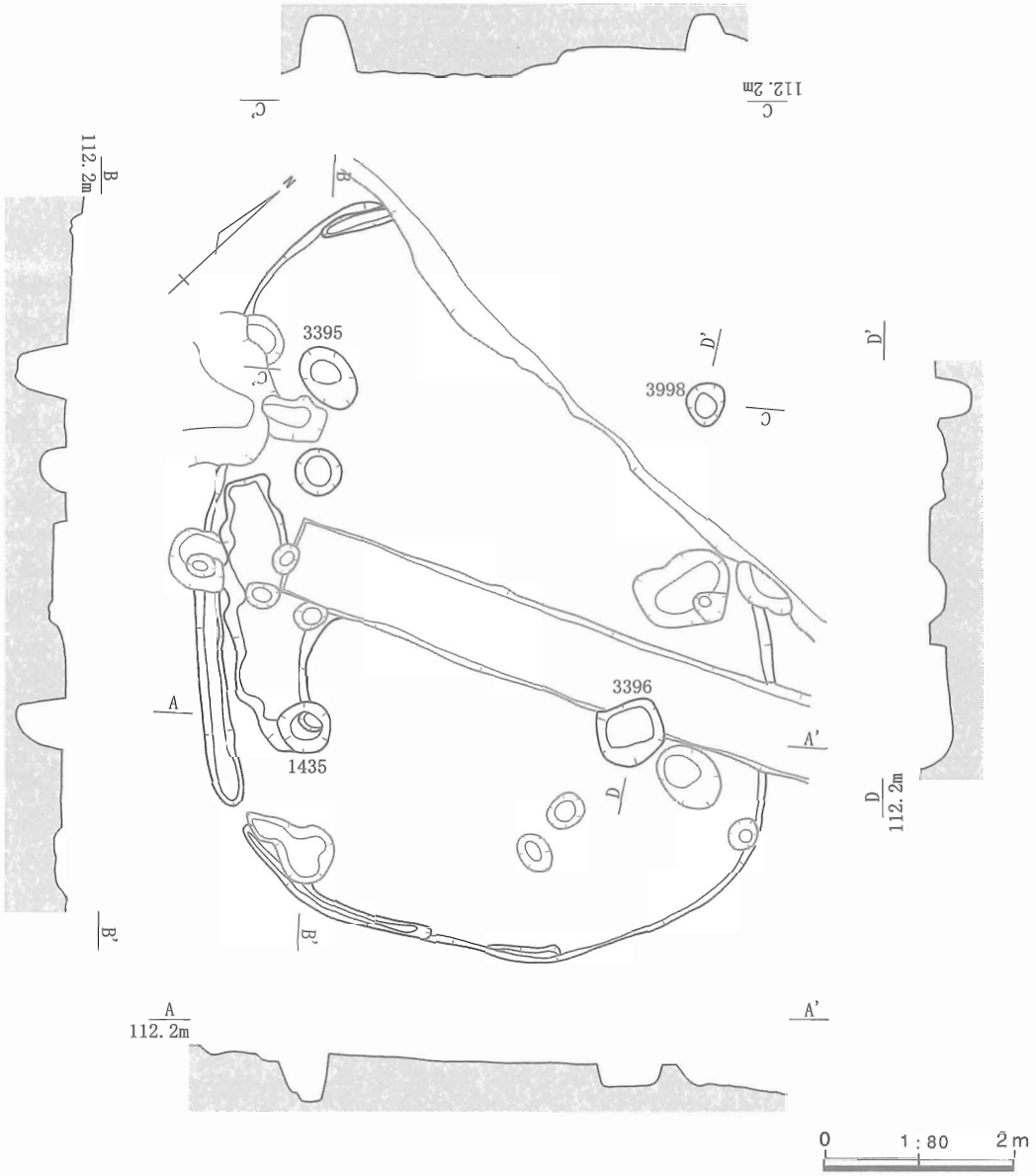
炉はプランの北東側、すなわち住居のやや奥側に相当する位置に設けられている。床面を掘り抜いて設けられた直径0.85～１ｍの楕円形を呈する土坑内に、床面よりもやや明るい暗褐色シルトを貼りこんでいる。また、これより20cm程度南西側に直径28cmほどの円形を呈する焼土が混じる小土坑状の施設がある。この位置から北東側に炉を造り替えている可能性もある。

壁溝は幅15cm程度であり北側の一部で不明瞭となる。先述のように検出面が多くの部分で床面以下となっている影響で失われているのであろう。

炉の南西側には一部が茶畑の撹乱によって壊される土坑SK3744がある。残存部で長さ90cm、幅45cmを測り、元来は円形状であったものと思われる。内面の底面よりやや浮いた位置からは甕の破片が一個体分集まって出土している。位置関係から住居に伴う土坑とは考えにくいが、住居の時期に近似するものとしてここに取り上げた。

住居の掘方底面は平坦で、内面に溝は設けられていない。南西側には５cm程度の落ち込みが断面で観察されているが、平面では把握できなかった。掘方内には埋土として黒褐色～暗褐色シルトが３～５cm程度の厚みで充填されている。柱穴の掘方は直径50～70cm程度の楕円形あるいは矩形をなす。住居の掘方底面から50cm程度の深さがあるが、南側の柱穴SP3396のみ25cmほどとやや浅い。柱穴間の間隔は長手方向が芯々で3.5～3.8m、短手側が3.5～４ｍとややひしゃげている。なお、いずれにも柱の抜き取り穴は認められなかった。

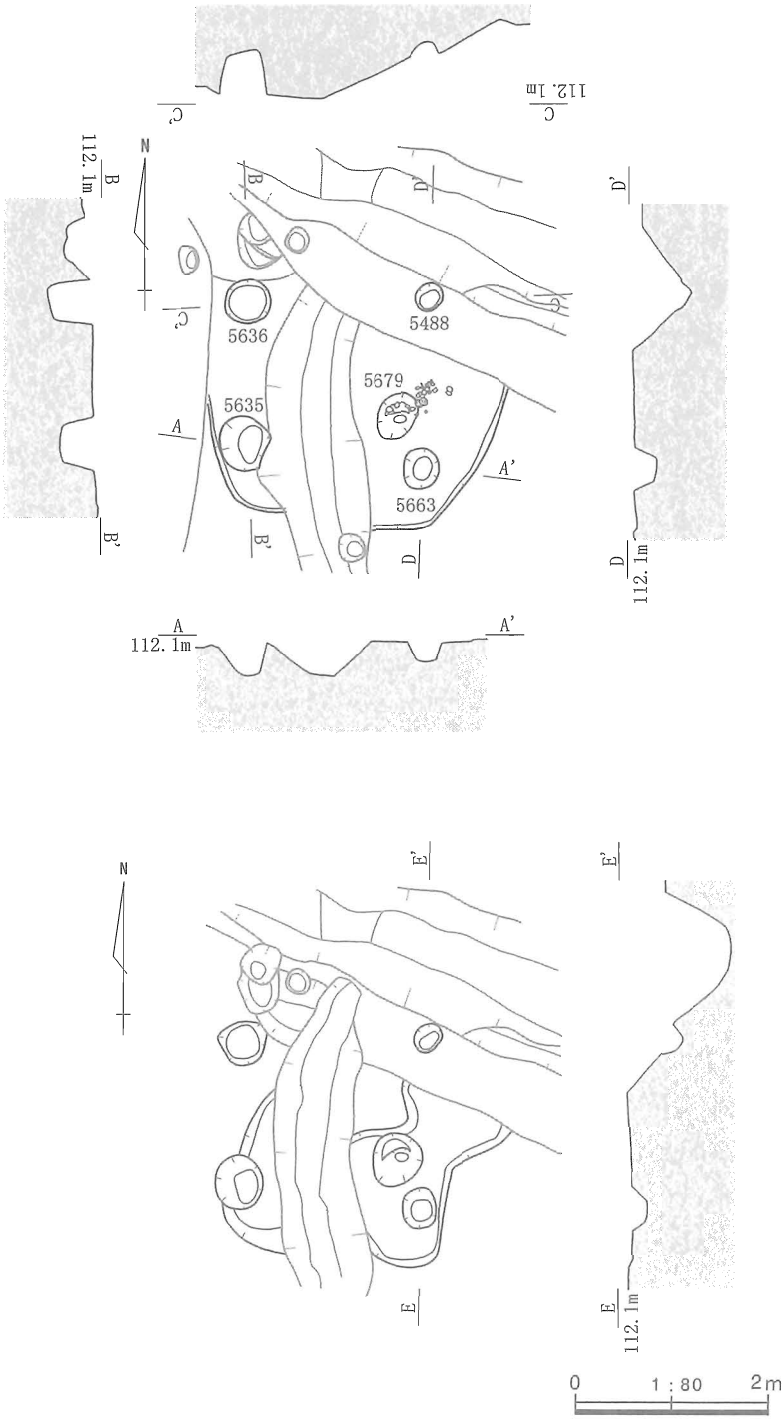
【遺物】遺物は、土坑SK3744内部と土坑SK3339内部から一部床面に相当する位置から土器が出土している。85は台付甕の体部～口縁部である。外面は下位から順番にハケ調整が施されている。台部に近い



第103図　SH1426平面・断面図（掘方）

位置は縦方向に、体部では斜め方向、体部上端から口縁部にかけては縦方向の後横方向に施される。上下方向のハケは、いずれの個所でも下から上に施される。内面は、底部付近と口縁部を中心に横方向のハケ調整が施される。体部半ばにはハケ調整が目立たない。ハケ調整後、板状工具や指によってナデが施されて平滑に整えられている。SK3339から出土した甕は、85の他図版４右上がある。

86は壺の頸部片である。内面には指頭痕が残されるが、外面はナデによって平滑に整えられる。外面には文様が施される。上位にはハケ工具を用いた強い刺突を連結させることによって内側に凹凸をもった沈線を引いている。この下位にはクシ工具によるものとみられる連続するS字状の浅い沈線を施した上、直径５㎜前後の円形の浮文を７㎜前後の間隔で連続して貼り付けている。最下位には、先のクシ工具と同じ工具を用いて連続する短い沈線を斜めに施している。この破片は残存する上端・下端ともに輪積みの位置で横方向に割れている。故意に割り取られているようにも見える。



第104図　SH5678平面・断面図（床面・掘方）

SH5678（第104～105図）

【遺構】K30グリッドで検出された。方形周溝墓SZ2579・5009、SH5119を囲む溝SD5389により大きく壊されているので全体の形状を把握するのは困難である。溝SD5437・5633によって囲まれる住居と考えられ、調査段階ではSZ5009北側まで住居のプランが広がるものと考えたが、明らかとなった柱穴ではむしろごく小さな住居しか特定し得なかった。

床面は撹乱等によって明らかでない。柱穴SP5663の北側で土器がまとまって出土したので、この付近に床面があったものと仮定してこの高さで一旦形状を記録した。

炉・壁溝・貯蔵穴は明らかでない。炉は住居の中心付近を通るSD5389によって壊されている可能性が高い。壁溝・貯蔵穴は掘方の掘削の際にも見いだせなかったので、設けられていなかったとみられる。

住居の掘方は底面を平らに整えて、南側に溝を設ける。溝は幅0.7～1.2m、深さ４～18㎝となる。東側の溝の肩が内側に入ってくるので、西側に開く馬蹄形を呈していた可能性がある。

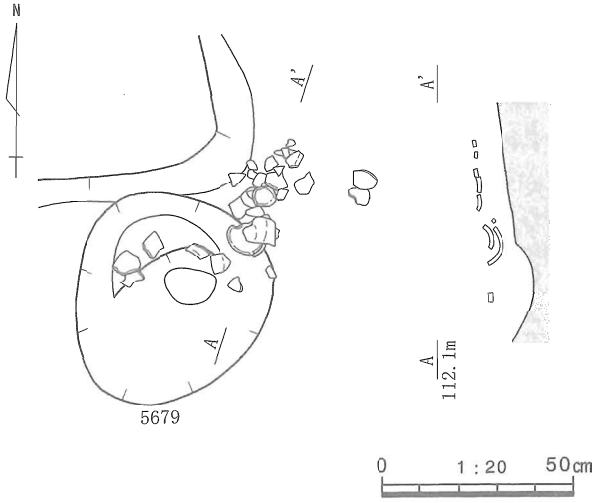
柱穴の掘方は４か所で検出された。直径40～50㎝の円形を呈する。柱穴の間隔は、南北方向に芯々で1.5～1.8m、東西方向で同様に1.9mと、柱で囲まれる空間は正方形に近い。

【遺物】土坑SK5679の上位から北東側にかけて土器が出土している。同一個体とみられる台付き甕の台部～体部片が主体となるが、ほとんど接合せず図化は割愛した。上記のように床面が把握できなかったが、土器の多くは近似した高さに面的に分布しており、床面上に遺棄された遺物であった可能性が高い。破片がほとんど接合しなかったことは、他の場所で割られた破片が持ち込まれたか、この場で割って破片の一部を他に持ち出しているからであろう。

SH1203（第106～108図）

【遺構】Q30～R31グリッドで検出された。一部を確認調査トレンチT23・24によって切られているが全体の状況は比較的良好に把握することができた。

床は南側の一部で検出された。褐色粘土と黄褐色粘土を混合した素材を用いており、硬く敲き締められている。床上の覆土にあたる褐色シルトは厚さ８㎝前後で残存していたが、広い範囲で床下埋土上まで下がった位置から堆積し、この中に床の素材がブロック状に砕けて混入する状況であった。覆土が堆積する以前に、床が剥がされた可能性も否定できない。床面上には掘方とほぼ同じ間口で柱穴が４か所で検出されている。



第105図　小穴SP5679付近遺物出土状況

炉は中央やや奥側に設けられている。直径65㎝の隅丸台形状で床面に相当する高さから５㎝程度盛り上がり、上位の直径50㎝前後分を平らに整える。掘方は炉の範囲とほぼ同等な円形状を呈し、黒褐色～褐色シルトで充填している。貯蔵穴は南東縁に設けられている。貯蔵穴SK3057は、最大径68～70㎝の隅丸台形状で、深さは32㎝となる。内部には土器が遺棄されていた。

壁溝は幅10～25㎝、深さ５～８㎝で、住居の立ち上がり際に全周する。

住居の掘方は底面を平坦に整え、内部に馬蹄形と直線状の溝を備える。馬蹄形の溝は幅0.4～1.9ｍと南側が細く、北北西側が著しく広くなる。深さは３～８㎝であるが、幅と比例するわけではない。一方、直線状の溝は馬蹄形の溝の南側にあり、幅65㎝前後でわずかに窪む。

柱穴の掘方は６か所を検出した。直径40～60㎝の円形あるいは隅丸方形を呈する。住居の奥側に位置するSP3053は南側に柱の抜き取り穴と考えられるより浅いSP4289を伴っている。西側のSP3052も南側に不定形の張り出しをもつ。抜き取り穴の一部なのかもしれない。南側の柱穴はSP3077・4323とSP3055・3056がセットになる。この部分は、直線状の溝とともに南側に拡張されたものと考えられる。SP3056の西側に切り合う土坑は、あるいはSP3077・4323に伴う貯蔵穴の一部であった可能性がある。

【遺物】床上の覆土と貯蔵穴SK3057内、床面上から土器が出土している。

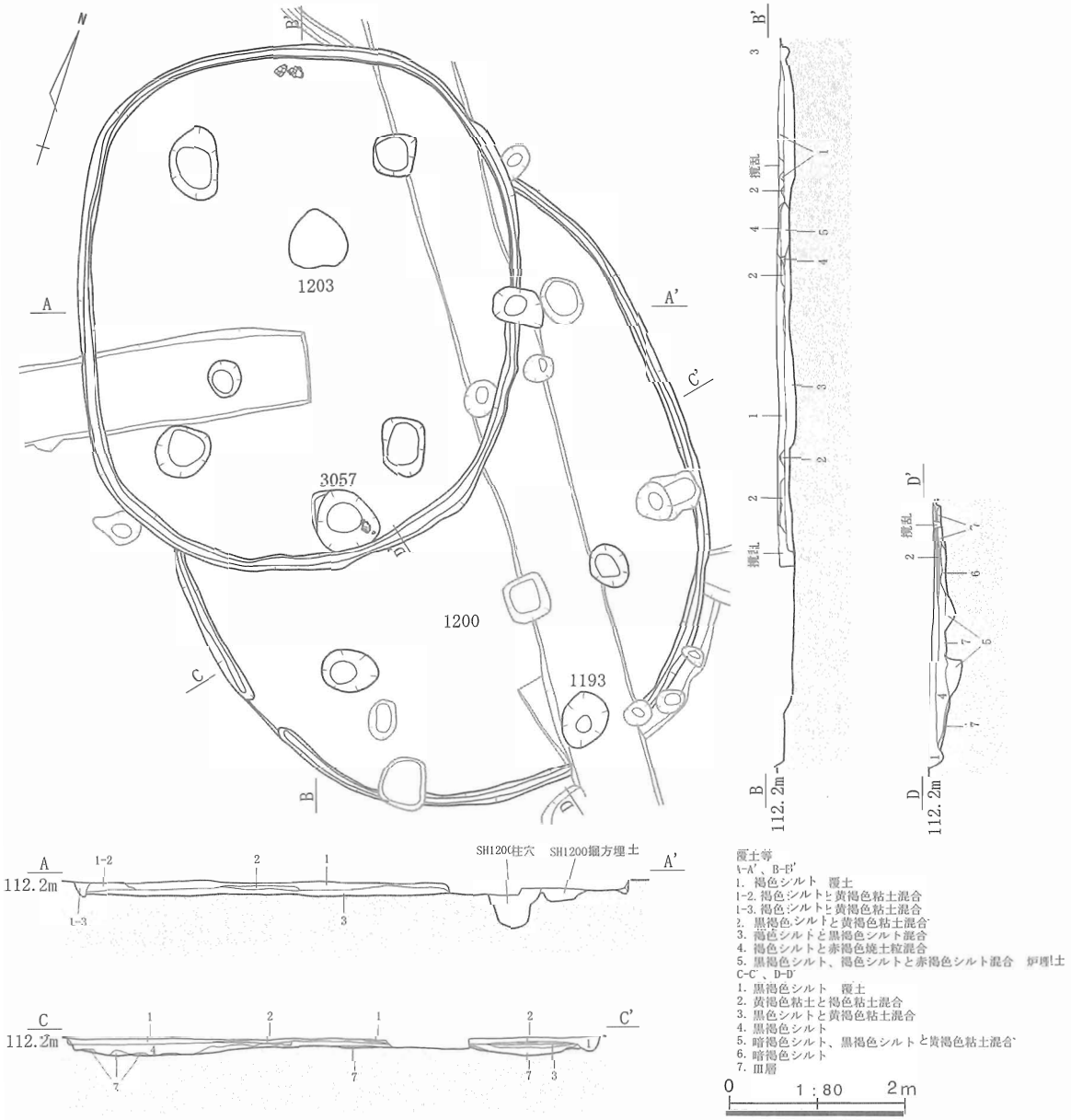
88・89は覆土からの出土である。88は甕の体部～口縁部片である。外面は中位を横方向のハケ調整、上位を縦方向のハケ調整で整えられる。口唇部にはハケ工具の刺突により文様を付ける。内面は縦方向のハケ調整が確認される。また、縦方向のナデ調整も体部上端に施される。89は複合口縁をもつ壺の口縁部である。外面の一部にハケ調整が認められるが、全体にわたって風化が進んでいる。

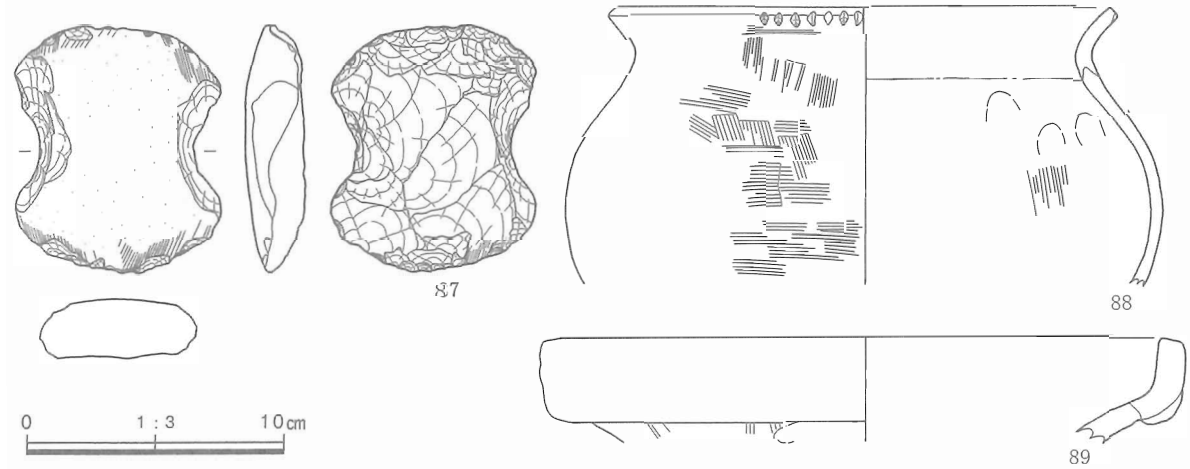
90・91は床面の北端付近から出土した甕の体部～口縁部片である。それぞれが寄り添うように、潰れていた。外面上位には縦方向のハケ調整を施し、口縁部内面にも横方向のハケ調整を施す。内面には指頭痕が頻繁にみられる。90は口唇部にハケ工具による刻みを付け、91にも同様な痕跡がある。92は貯蔵穴3057内から出土した甕の体部～口縁部片である。外面はハケ調整で整えられるが、横方向のハケ調整と頸部の縦方向のハケ調整の間には斜め方向のそれが入らない。内面の調整は91に類似している。

これらの甕はいずれも台部が伴わない。他の場所で打ち割られて各所に廃棄されているようにみえる。

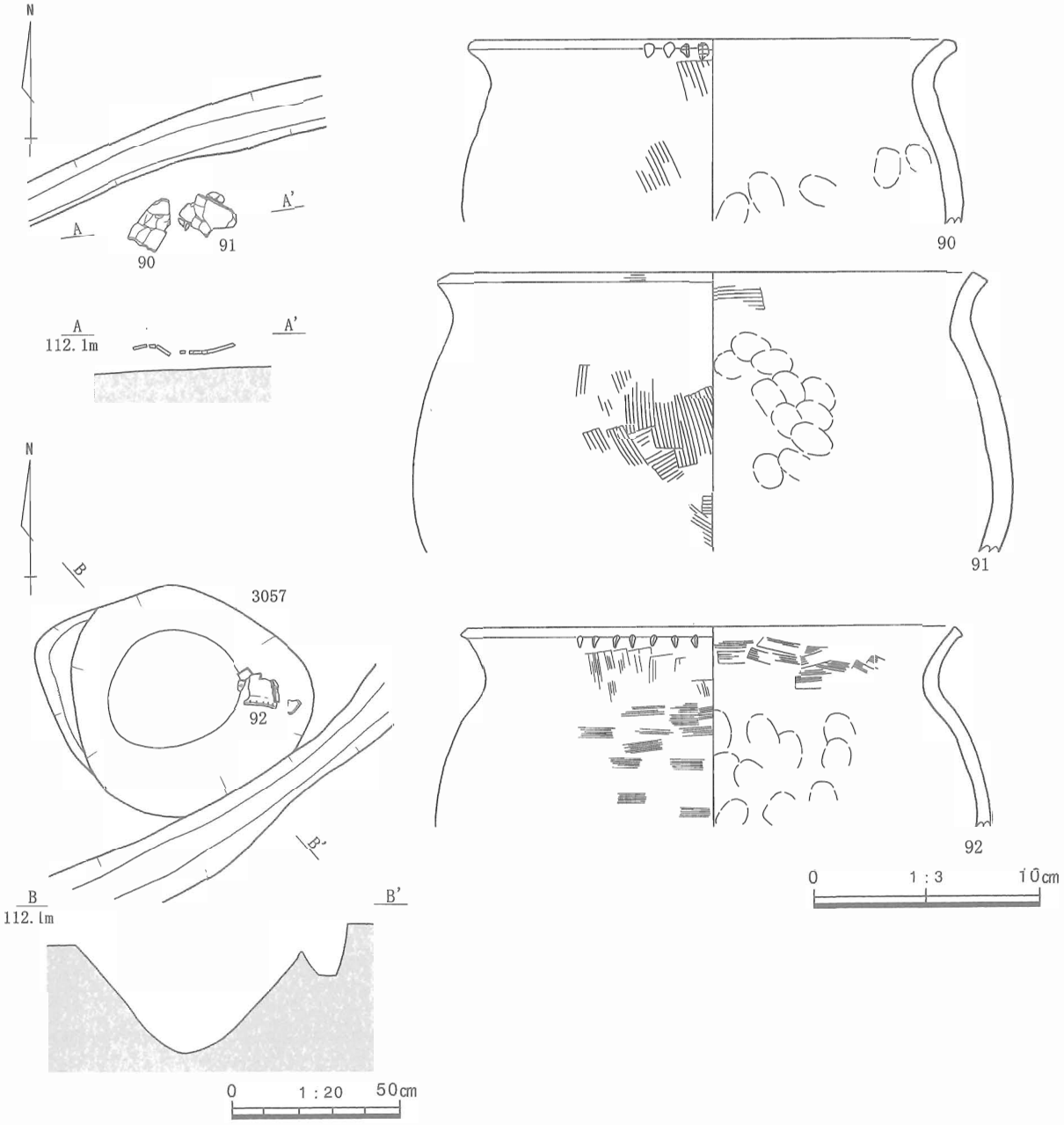
SH1200（第106・108図）

【遺構】Q30～R31グリッドで検出された。床面では北西側を大きくSH1203によって壊される。また、南北方向に確認調査トレンチT23が入っている。





第106図　SH1203・1200平面・断面図（床面）、遺物実測図



第107図　SH1203、貯蔵穴SK3057遺物出土状況・遺物実測図

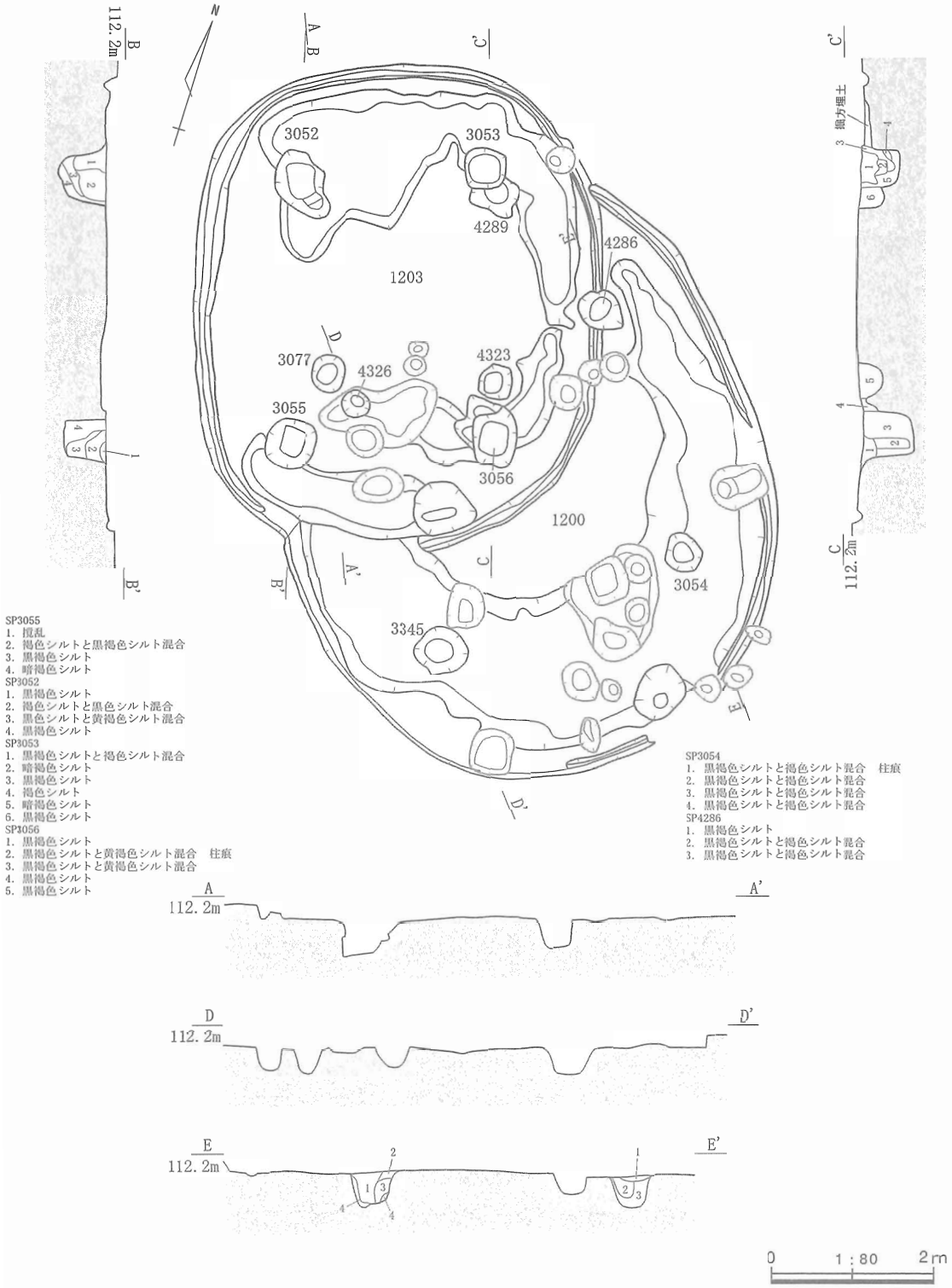
床面は住居中心部の比較的広い範囲で検出されている。黄褐色粘土と褐色粘土の混合土が材料として用いられており、厚さ1～2cmで硬く敲き締められている。床面上で1か所、確認調査トレンチの内部で2か所柱穴を確認している。床面上の柱穴は掘方上とほぼ同規模で把握されている。SP4286については図上ではSH1203の壁溝を切って表現しているが、当初は柱穴と認識できず先行して掘削してしまったせいである。本来はSH1203の壁溝の方が新しい。

炉は把握できなかった。SH1203によって壊されているのだろう。貯蔵穴は、T23内部で検出されたSK1193が該当する。長軸67cm、短軸55cmの楕円形を呈し、深さは36cmとなる。

壁溝はSH1203と同等の規模で、検出範囲のほぼ全てに巡る。

住居の掘方は、北端で途切れるので、北西に開く馬蹄形状であったと考えられる。幅は0.35～1.9mと南側が広くとられ、深さは3～10cmとなる。

【遺物】87は覆土から出土した分銅型を呈する砂岩製の打製石斧である。縄文時代の混入品である。

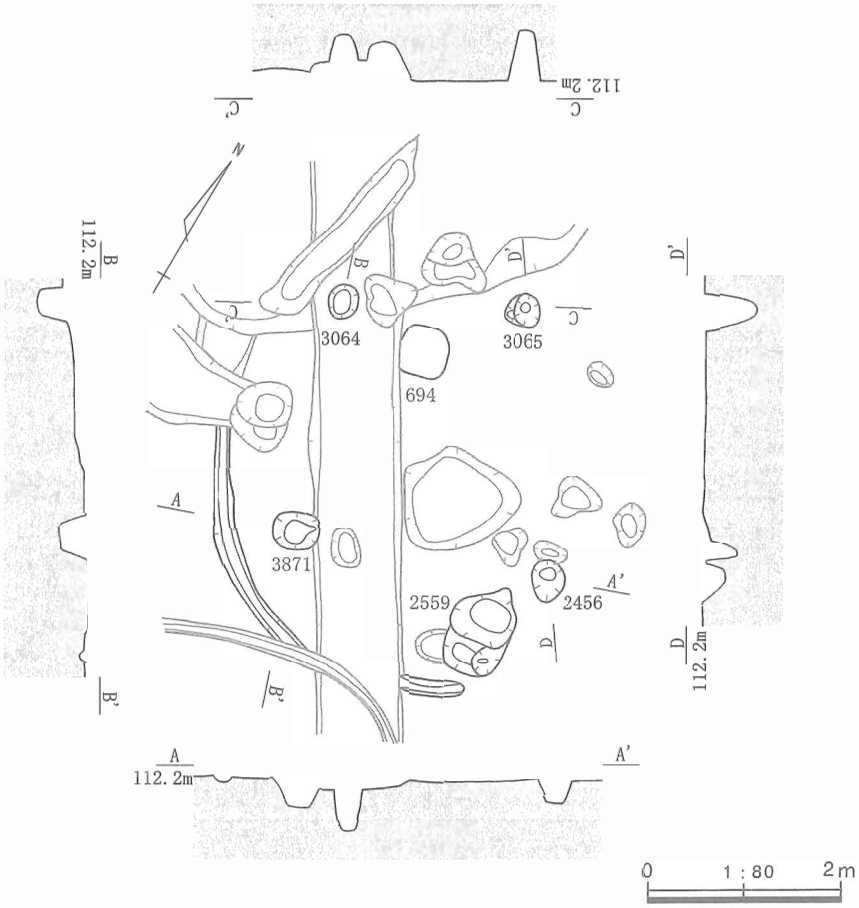


第108図　SH1203・1200平面・断面図（掘方）

SH1234（第109図）

【遺構】Q30～Q31グリッドで検出された。北側をSH2492に、南側をSH1203に、中央やや東を確認調査トレンチT23に切られる。検出面が下がったため炉・柱穴・貯蔵穴・壁溝を検出するに留まった。

炉は住居の奥側に直径50cm前後の熱染みとして捉えられた。柱穴は直径35～50cmの円形ないしは楕円形で、抜き取り穴は伴わない。柱穴の間隔は、長手方向に芯々で2.5～2.8m、短手方向で同様に1.95～2.7mとなる。貯蔵穴は南東隅に設けられた直径50～70cm、深さ35cm程のSK2559が該当する。



第109図　SH1234平面・断面図（掘方）

SH4522（第110図）

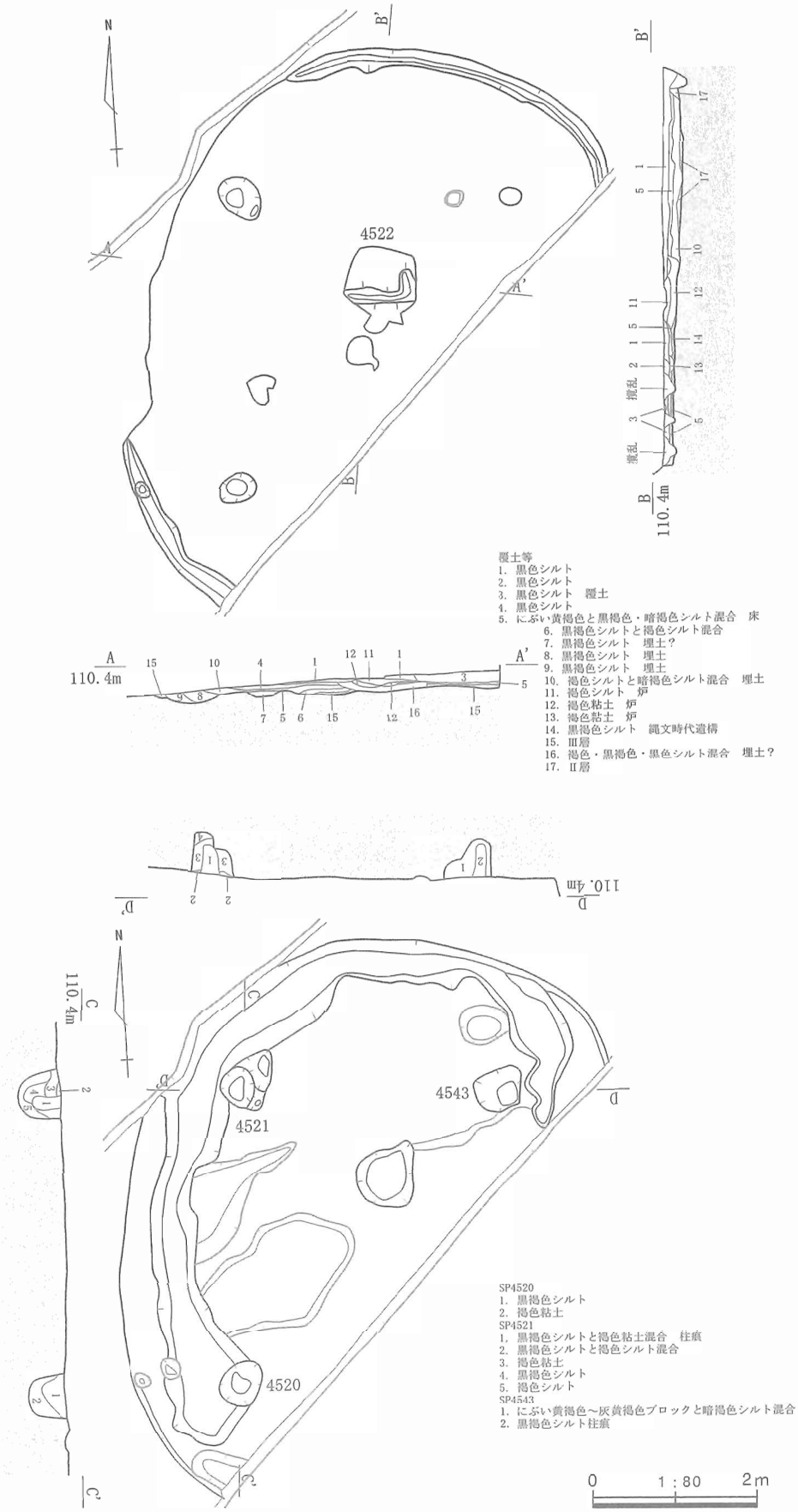
【遺構】V33～V34グリッドで検出された。今回の調査で検出された住居の最も西側にあたる。楕円形の住居は軸が西へ偏るのが通例であるが、軸がやや東側に偏る唯一の例である。ほぼ南北方向を示すSH328とともに、台地の縁辺という立地が影響しているのだろうか。南西側のおよそ1/5は調査区外となり検出していない。

床面にほぼ全面で検出されている。主に黒褐色シルトを用い、3～6cmの厚さで硬く敲き締められている。床面上の北東側には脆弱な覆土による直径20cmの円形のプランが1か所観察され、柱痕跡と考えられる。

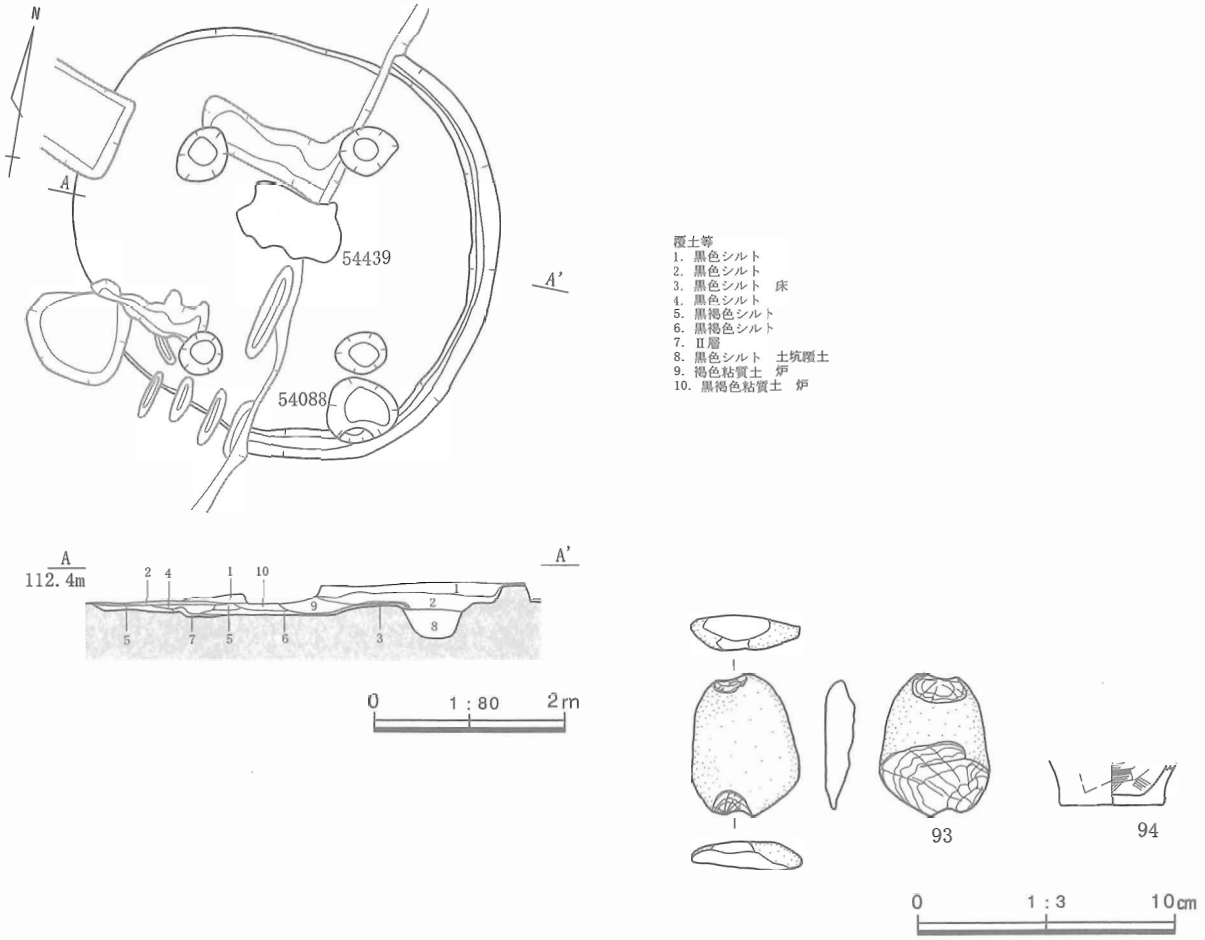
炉は住居の中央やや奥側に設けられている。直径70cm前後の不定形の掘方に褐色粘土を充填する。上面には4cm程度の高さをもつ土手状の構造が北側に開くL字形に設けられている。この部分より北側が良く焼けて赤褐色に変色している。

壁溝はプランの縁が失われている西側を除く部分に認められた。幅20～30cm、深さ2～8cmで、北側がやや深くなる。貯蔵穴は該当する個所が調査区外となるので存在を把握していない。

住居の掘方は底面を平らに整え、周囲に溝を設ける。幅0.2～1.15m、深さ4～28cmで北側が深くなる。柱穴の掘方は、この溝の内法に沿う位置に3か所が掘られている。残り1か所は調査区外となる。柱穴SP4521は三つの小穴が切り合うが、西側のひとつの断面に柱痕を確認したので複数回にわたって挿げ替えられていることが分かる。SP4543でも断面に柱痕を見出すことができた。南側のSP4520では柱痕が確認できず、柱穴内をさらって抜き取っている可能性を感じさせる。柱穴の間隔は長手方向で芯々に3.5～3.9m、短手方向で同様に3～3.35mを測る。



第110図　SH4522平面・断面図（床面・掘方）



第111図　SH54436平面・断面図（床面）、遺物実測図

SH54436（第111～112図）

【遺構】Ｊ26～Ｋ26グリッドで検出された。Ｃ区とＤ区の調査区境にあり二つの遺構番号（SH54436・51079）が付いていたが、SH54436に統合した。部分的に耕作による撹乱によって壊されている。形態的にはわずかに楕円形であるが、視覚的にはほぼ円形に見える。

床面は部分的に残存している。黒色シルトを素材とし、２cm前後の厚みで硬く敲き締められている。

炉は住居の中央やや奥側に設けられている。長軸1.15m、短軸0.7m、深さ８cm程の不定形の掘方に褐色～黒褐色シルトを充填する。この覆土は東側に切り合って、複数回にわたり作り変えられる。

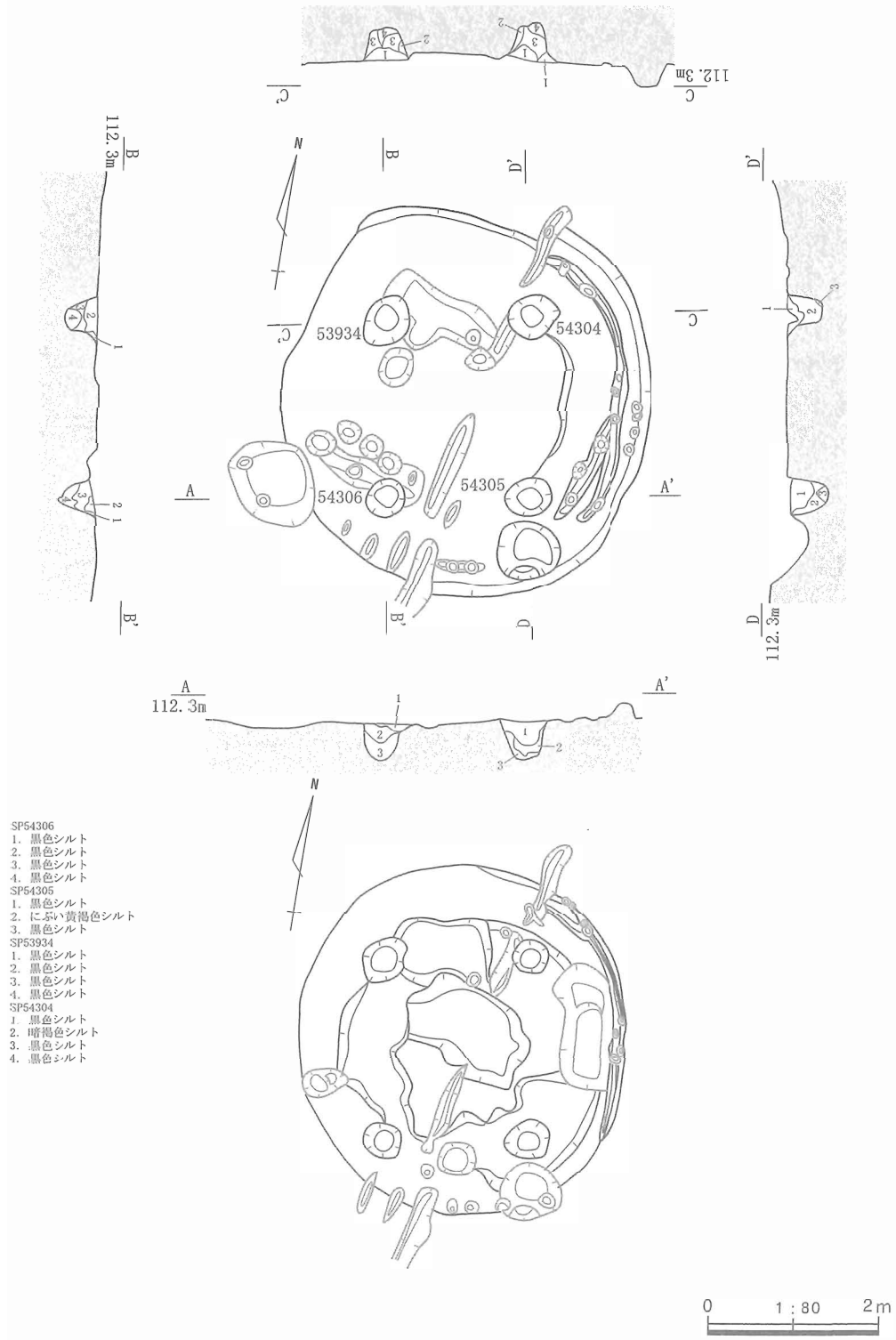
柱穴は４か所で検出された。床面に相当する高さで掘方上とほぼ同等の規模が把握されている。

貯蔵穴は南東側の隅に設けられている。貯蔵穴SK54088は直径70～75cm、深さ27cmの規模がある。掘方上で検出されているため、本来の深さは38cm程であったと考えられる。この貯蔵穴は次に述べる下位で検出された壁溝と重複する位置関係にある。したがって、最終形態に伴うものと考えられる。

壁溝は東側で検出された。西側は検出面が下がった影響で失われているとみられる。幅28～30cm、床面から２～７cmの深さがある。床面を剥がした段階で幅15～20cm、深さ４～５cmの壁溝とみられる小規模な溝をさらに内側に検出した。30cm程度外側に拡張されていることが把握された。

住居の掘方は中心を土坑状に掘り下げ、周囲に溝を備えている。中央の土坑は長軸1.6m、短軸１m程度、深さ８cmの不定形をなす。溝は幅0.35～１m、深さ１～６cmで、南側で細くなりながらも全周していたのだろう。柱穴の間隔は長手方向で芯々に2.2～2.3m、短手方向で1.85mとなる。

【遺物】石錘（93）、ミニチュアの壺（94）が覆土から出土している。



第112図　SH54436平面・断面図（床面・掘方）

SH4486（第113～114図）

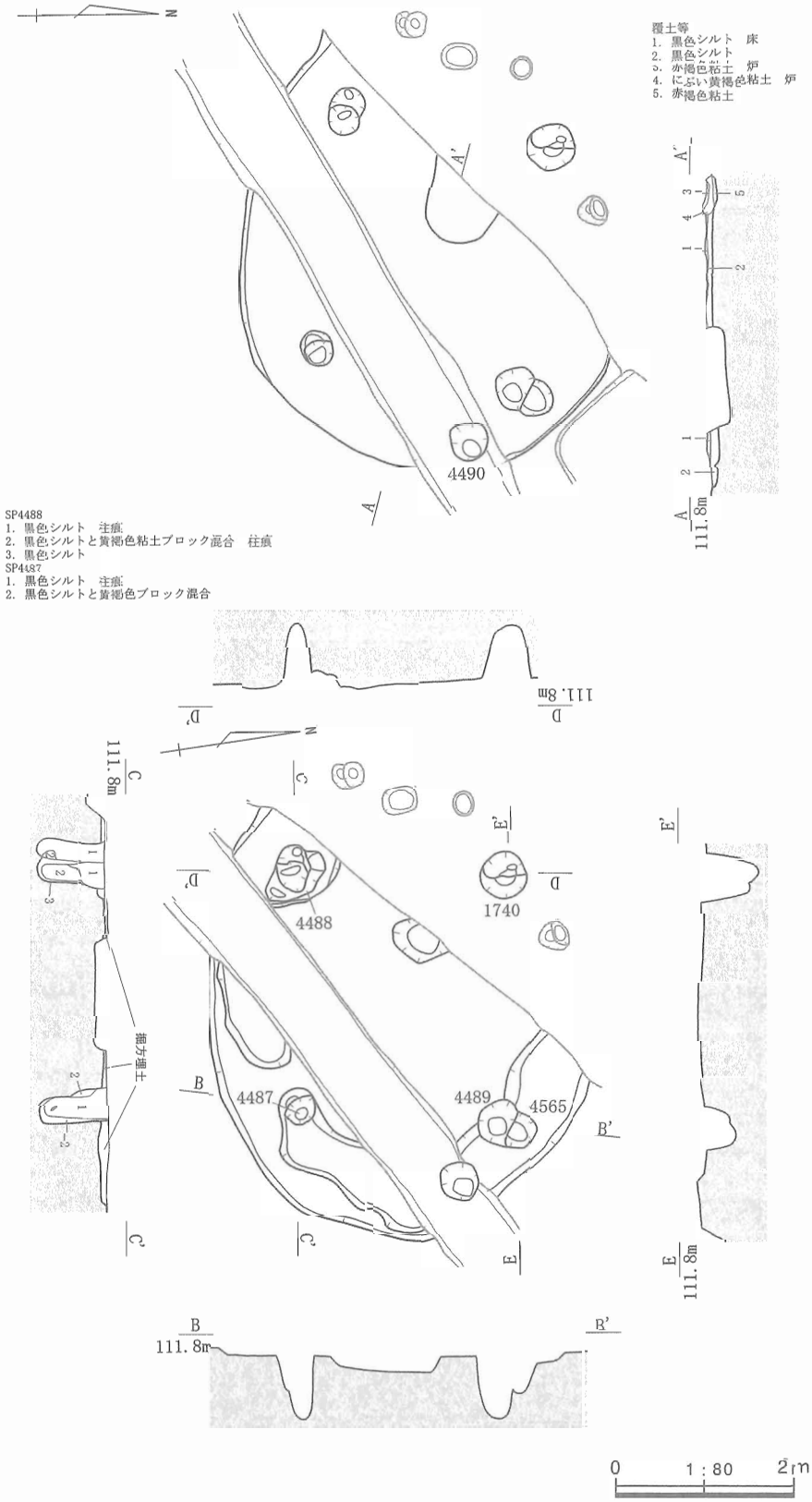
【遺構】R27～R28グリッドで検出された。南側の一部を確認調査トレンチT22により、北側のおよそ1/4を耕作により壊されている。検出面は床面直上である。

床面はプランが残存する範囲のおよそすべてに張られている。黒色シルトを素材とし2～4cmの厚さで硬く敲き締められている。柱穴は床面と撹乱中で検出された。床面上の柱穴は、掘方で把握した規模とほぼ同等であるので、柱穴の周囲のみ床が設けられていなかった可能性がある。

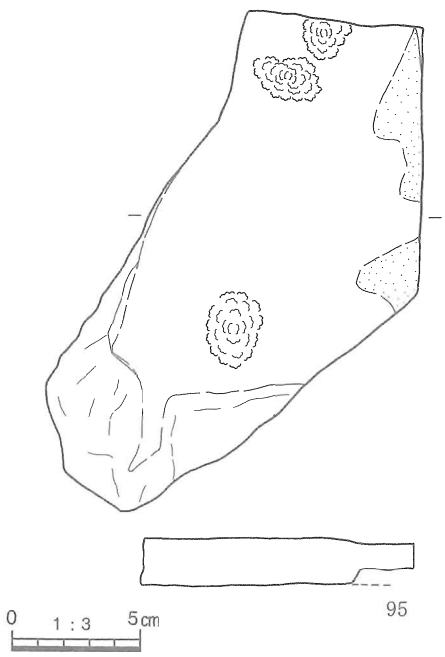
炉は中央やや奥側にある。直径50cm、深さ8cmの掘方ににぶい黄褐色粘土を充填する。被熱する範囲は更に広く幅0.85m、長さ1m以上に及ぶ。当初の炉から数回にわたって作り替えられ、熱染みが広範囲に及んだものと考えられる。

壁溝は認められない。断面や掘方上でも検出されなかったので、設けられていなかった可能性が高い。

貯蔵穴は西側縁にあたるSK4490が該当する。直径40cm前後の円形状を呈し、深さは56cmとなる。T22によって上端が失われているので、本来はさらに20cm程度深かったものと考えられる。



第113図　SH4486平面・断面図（床面・掘方）



第114図　SH4486遺物実測図

住居の掘方は底面を平らに整え、周囲に馬蹄形状に巡る溝を設ける。溝は幅0.55～0.9m、深さ４～８㎝となり南側で途切れている。内面には黒色シルトを敷き均す。

柱穴の掘方は４か所で確認された。直径32～50㎝の円形を呈し、南西側のSP4488、北東側のSP4489・4565で切り合いがある。SP4488は同規模の柱穴がとなり合っており挿げ替えが行われたことを窺わせる。東側の柱穴の下部には幅18㎝の柱痕と思われる個所が断面で観察されており、更に長軸80㎝、短軸40㎝の楕円形状の土坑が上位に切り合うので、掘り抜き穴を掘って柱を引き抜いていると考えられる。柱穴SP4489と切り合う4565はさらに浅いので抜き取り穴であると考えられる。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.7～2.9m、短手方向で同様に2.3～2.5mとなる。

【遺物】95は砂岩製の台石で、炉の上面から出土した。被熱して部分的に節理に従って剥落する。片面のみを使用するが、敲打痕が欠損部にかかり、割れ口の縁が滑らかになるので割れた個体を再利用していることが分かる。

（２）楕円形～隅丸方形を呈する竪穴式住居

SH70007（第115～116図）

【遺構】Ｆ４～Ｆ５グリッドで検出された。検出面は掘方埋土となったので掘方底面まで掘削し住居に伴う構造を検出した。掘方の埋土は上位が黒色シルト、下位が黒褐色シルトであった。

掘方底面まで掘り下げたところ、南西側に寄った位置により小型の住居の掘方がほぼ平行する軸線状に存在することが判明した。ここでは便宜的に小規模な住居をその１、大規模な住居をその２と呼ぶ。埋土の切り合いを観察することができなかったのは残念であるが、西側の縁が揃うことなどから、その１からその２に拡張されたものと考えたい。

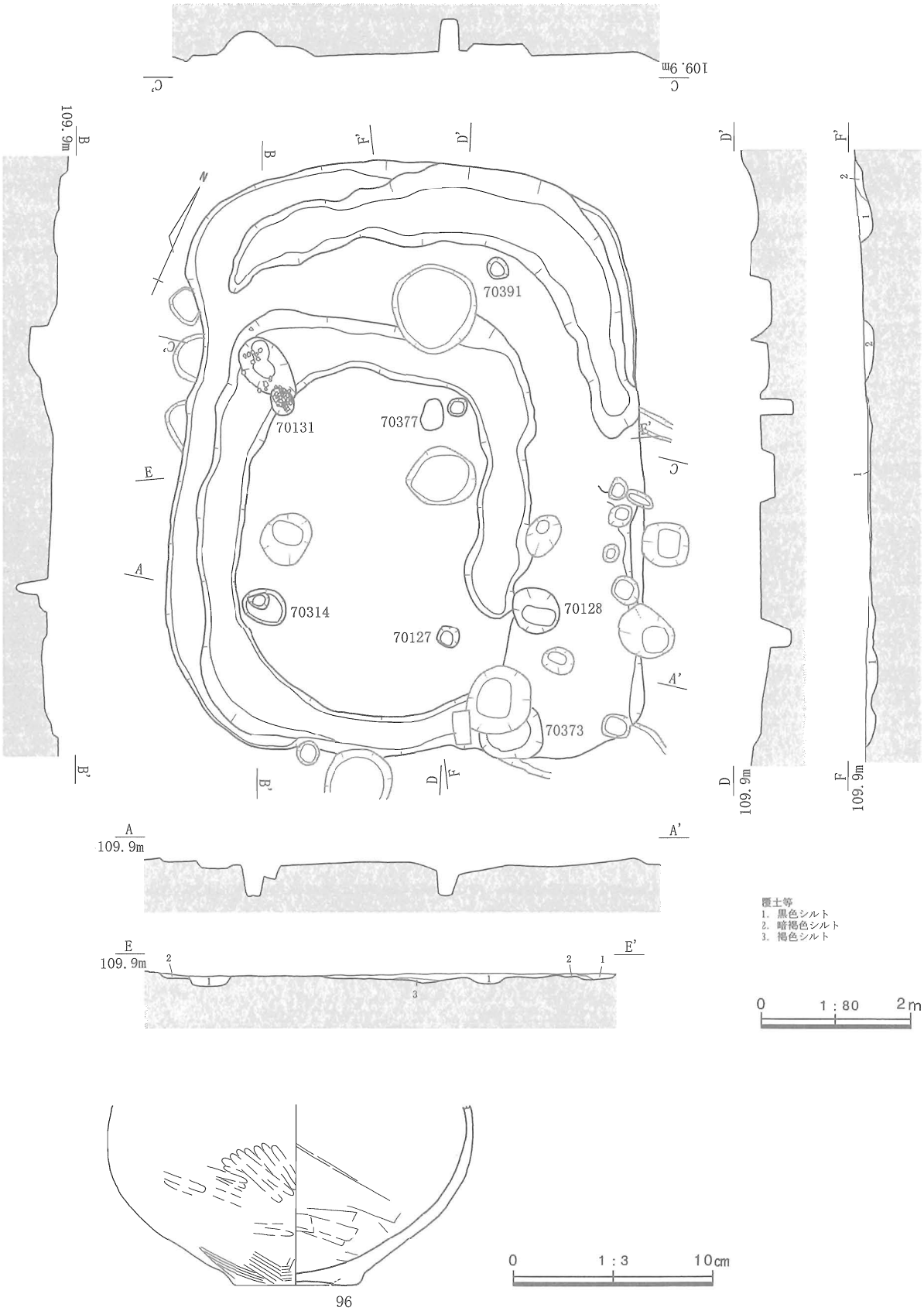
その１の住居掘方は底面を平坦に整え、周囲に溝を設ける。溝は幅0.56～1.05m、深さ６～20㎝で南東側隅に開く。炉・壁溝の存在は明らかでない。貯蔵穴は該当する土坑が南側には見当たらない。北西側隅に掘られたSK70131西側を貯蔵穴と考えると、この建物は西側の長手方向に入口を設けていた可能性が生ずる。SK70131西側は長軸１m、短軸0.57mの楕円形状を呈し、検出面からの深さは26㎝となる。

柱穴は４か所で把握されている。直径22～30㎝の円形を呈し、SP70314に切り合いがある。SP70314は内側にある柱穴を直径48～58㎝の楕円形を呈する小土坑が切っている。深さは小土坑が27㎝程度浅いので、柱の抜き取りに伴う掘り抜き穴と考えられる。一方、北西側のSP70131は50㎝ほどの深さがあるが、その上位からは土器片が出土している。柱が掘り取られた後の窪みにまとめて捨てたのであろうか。柱穴の間隔は、長手方向に芯々で2.8～3.15m、短手方向で同様に2.4～2.6mである。

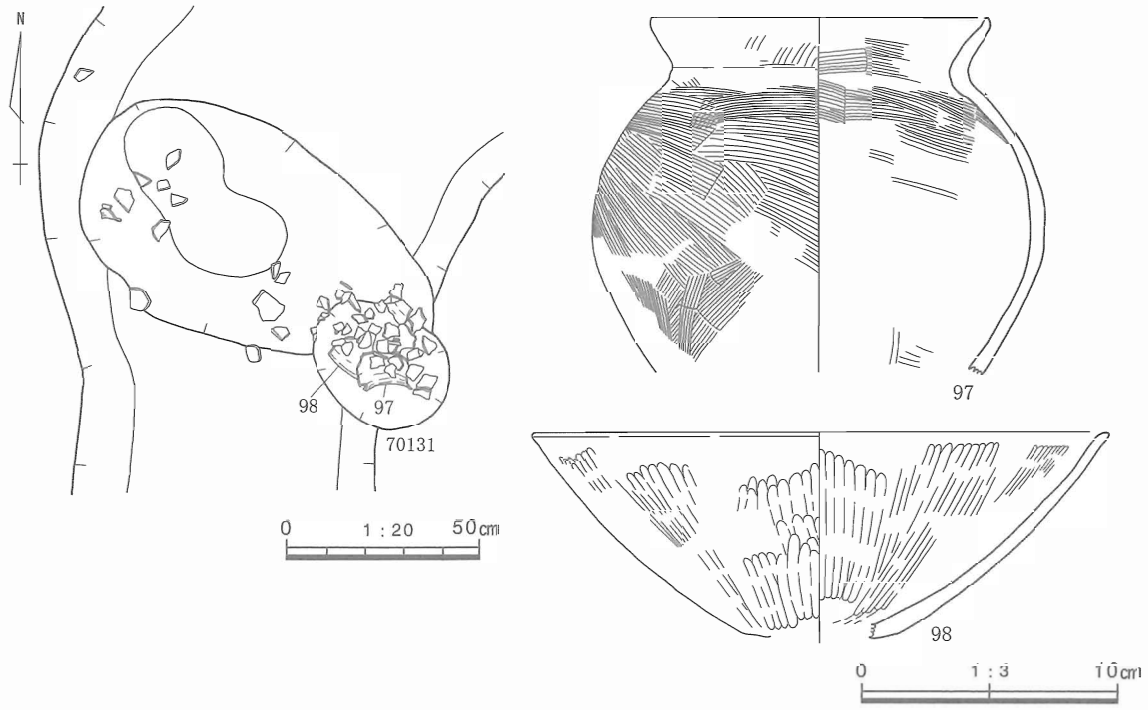
その２の住居掘方は北側の縁のみに溝を設ける。その１の掘方と切り合わないことは、やはりその１の存在を意識して壊さないように掘られていると考えられ、拡張されたとの見方を補完するものだろう。

溝は幅0.5～1.1m、深さ１～11㎝となる。炉70377は住居の中央やや北側に長軸40㎝、短軸28㎝の楕円形状に熱染みとして残存していた。貯蔵穴は南側の縁にあるSK70373が該当すると考えられる。この土坑はほぼ同規模の二つが切り合うが、西側の土坑は掘立柱建物SB80004の柱穴である。SK70373は直径0.86m、深さ25㎝の円形状を呈するとみられる。

柱穴の掘方は位置関係からSP70128・70391が該当すると考えられる。SP70128は直径60㎝、深さ30㎝



第115図　SH70007平面・断面図（掘方）



第116図　SH70007遺物出土状況・遺物実測図

の円形をなし、70391は直径25cm、深さ17cmと小規模である。なお、住居の立ち上がりとの距離が近似するので、この段階でもそのＩのSP70314は柱穴のひとつとして依然利用されていたものと考えられる。柱穴の間隔は、長手側が芯々で4.7m、短手側が同様に3.8mとなる。この拡張で、床面積はその１のおよそ27㎡からその２の51㎡へ２倍近く広がっている。

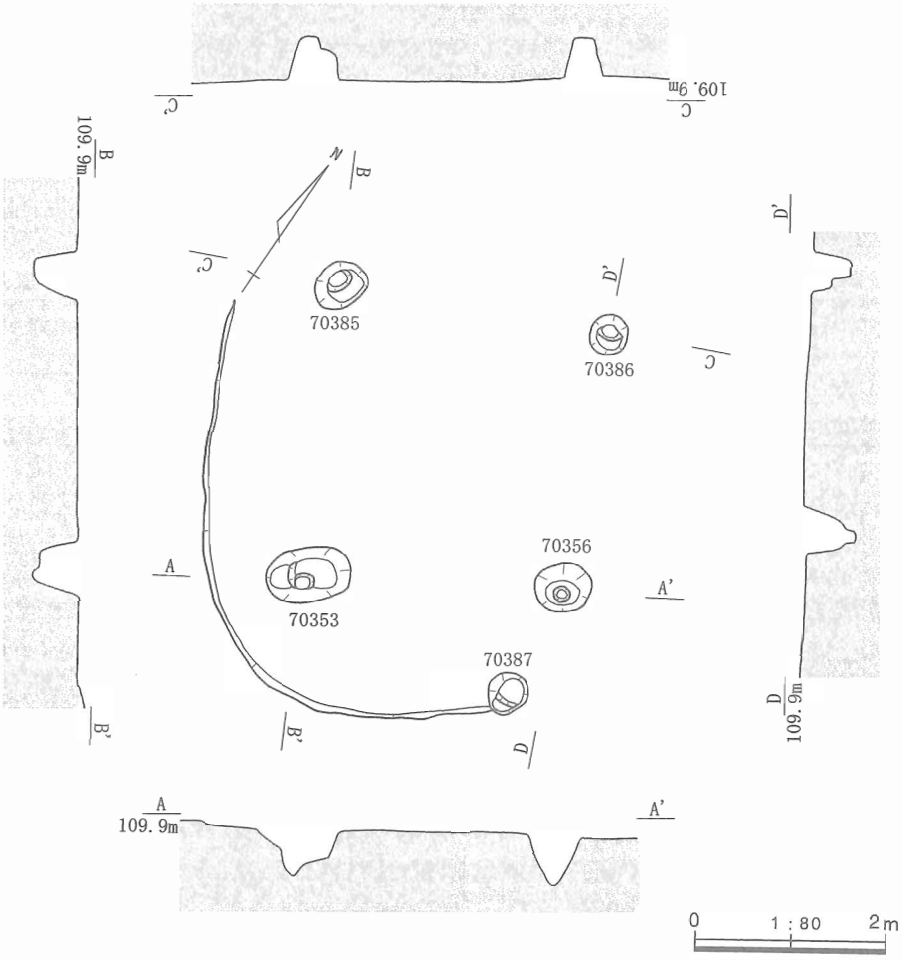
【遺物】遺物は掘方埋土中と柱穴SP70131から土器が出土している。

96は掘方埋土から出土した壺である。体部は比較的丸く立ち上がる。外面は全体的にハケ調整を施した後、横～斜め方向のミガキを施して滑らかに整える。内面にはハケ調整は目立たず、底部付近を中心に横～斜め方向のヘラナデを施している。

97・98はSP70131から出土している。それぞれを穴に投棄して割ったのであれば同程度の破片に割れるものと思われるが、掌大程度の大破片が横たわる上に小破片が混じって散在する。他の場所で割ったものを持ち込んで意図的にこのような配置を行ったようにみえる。97は体部過半から台部、98は脚部が失われており、該当する破片も見当たらない。失われた部分は事前に割り取られて他に捨てられたように感じられる。この傾向は直前の時期である楕円形の住居に廃棄される遺物の傾向に近似している。

97は台付甕の体部～口縁部である。外面はハケ調整で整えられる。当初には下位に正面から見て右上がりのハケを施し、その後に体部半ばで左上がりのハケに転換する。肩部では体部と口縁部の接合点に平行する横方向に移り変わる。口縁部は体部に直角気味に取り付いており、接合部分が内側に肥厚している。この外面には縦方向のハケを下から上に掻き上げるように施した後、横ナデを加える。内面は主にハケ調整で整えられる。頸部から口縁部にかけては横方向のハケを施し、口縁部には外面と同様に横方向のナデを加える。口唇部は素縁でハケ工具による刺突は持たず、上方にわずかに挽き上げられる。98は大型の高坏の坏部である。口縁部にのみ横方向のナデを加え、他の部分は内外面ともに縦方向のミガキを丁寧に施して平滑に整えている。このミガキは、外面では口縁部近くにまず横方向に連続して施され、その後体部過半に同様に施される。

このようなミガキを伴う大型の高坏と甕が一括して出土した例はSH14235にもある。



第117図　SH70008平面・断面図（掘方）

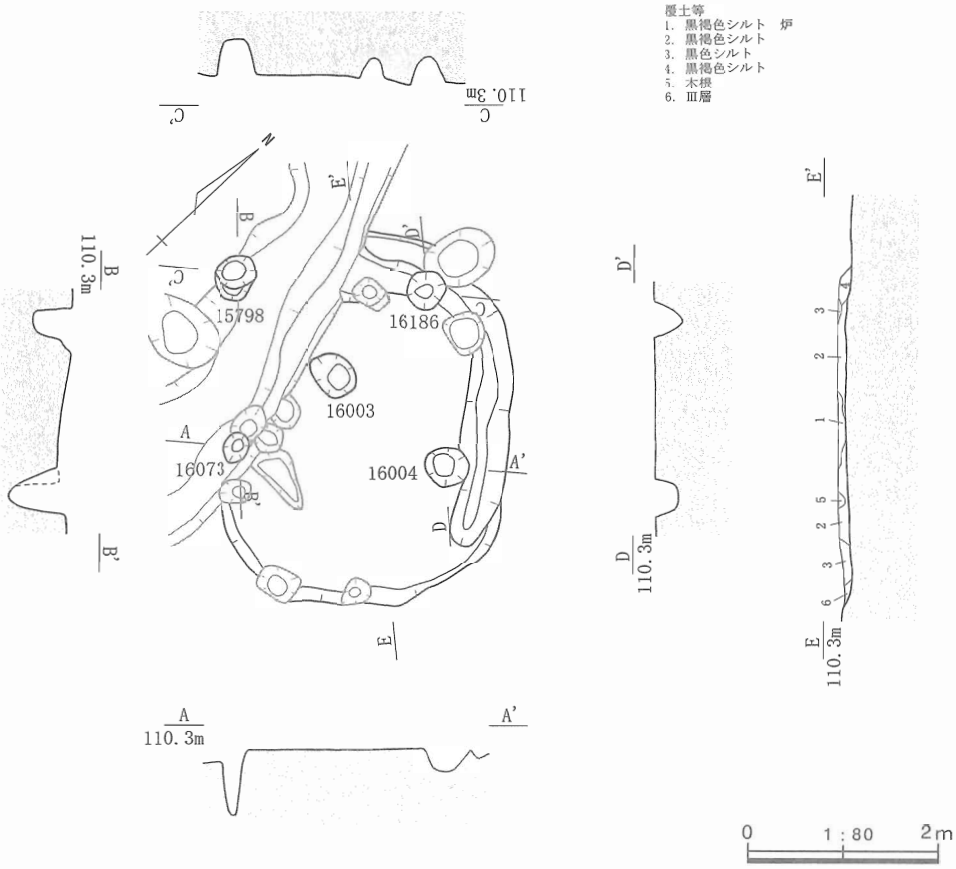
SH70008（第117図）

【遺構】Ｄ５グリッドで検出された。耕作土除去後にあらわになったⅢ層直上で検出を行っている。この部分のⅢ層は北側へ次第に下る地形を呈しているので、元来水平に整えられていたと考えられる掘方の下位は北に行くに従って次第に薄くなり住居のおよそ1/2ではすっかり失われてしまっている。検出段階ですでに掘方埋土が南側に薄く残る程度であったので、掘方下面まで掘削し住居に伴う遺構を明らかにすることとした。

住居の掘方は底面を平坦に整えるのみで、周囲には溝を設けない。

柱穴は４か所で検出されている。南側にあるSP70353と北側のSP70385・70386には切り合いがみられる。北側二つについては、柱穴の掘方のおよそ1/2～3/5程度の深さの小穴が柱穴を切っている。これらは柱の掘り抜き穴であろう。一方南側のSP70353は南西側に深い部分があり東側がやや浅くなる二つの柱穴の切り合いであると考えられる。おそらく外側に柱が挿げ替えられているのであろう。柱穴の深さは北東側のSP70385が40cm程度とやや浅いが、他は50cm前後となり比較的揃っている。SP70353や70356は尖底状となり、柱根が座っていたと考えられる位置がひときわ凹んでいる。柱の長さを合わせるために掘り足されたとも考えられる。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.8～3.1m、短手方向で同様に2.6～2.9mとなる。

貯蔵穴は南東側縁に検出されたSK70387が該当する。直径42～45cmの南側にやや膨らむ円形状を呈し、７cmの深さがある。他の住居の例から類推すれば、本来の深さは30cm前後であったろう。



第118図　SH14319平面・断面図（床面・掘方）

SH14319（第118図）

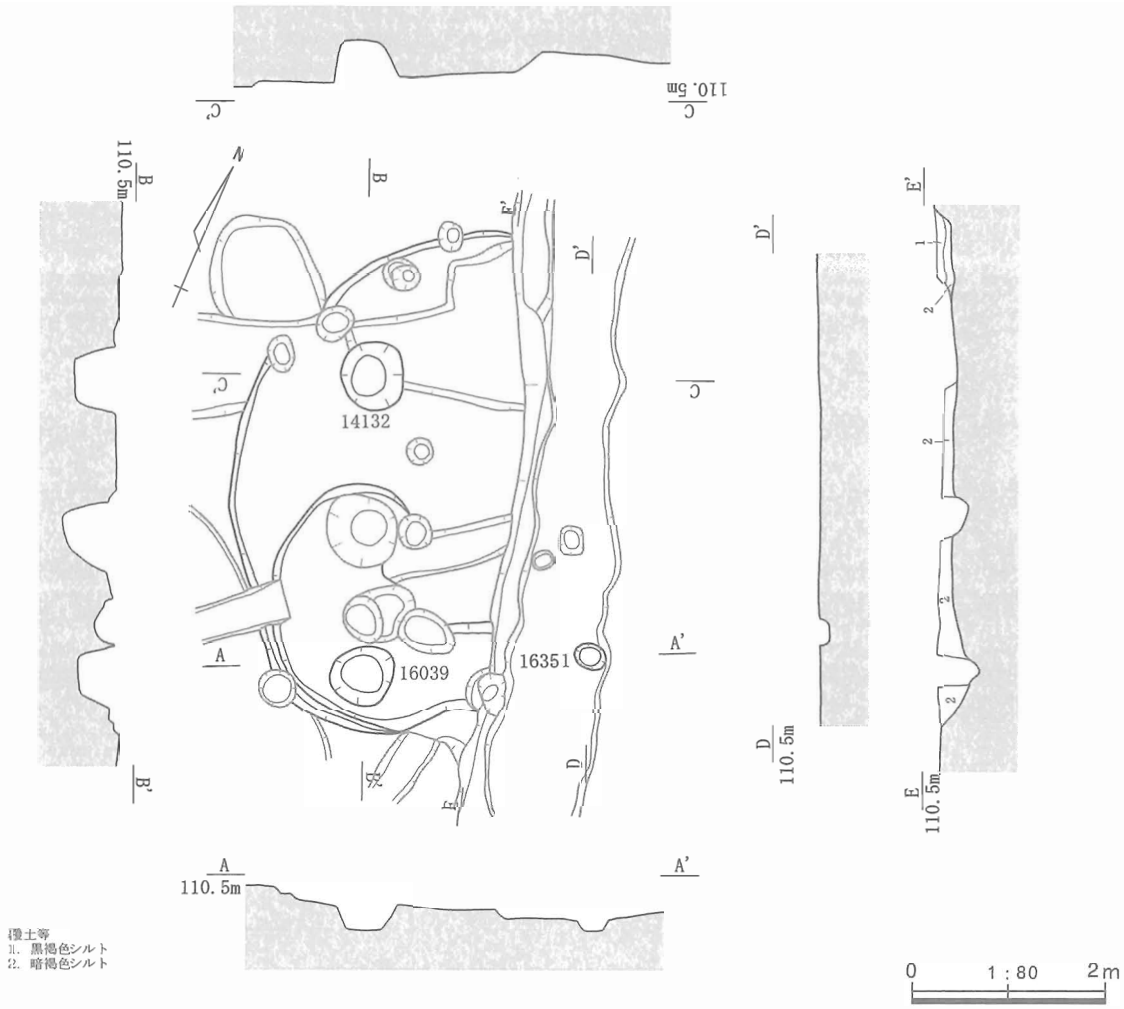
【遺構】Ｉ９～Ｉ10グリッドで検出された。SH14322に西側が切られる小型の住居である。検出時にはすでに床面が失われて掘方埋土が露出した状況であった。したがって、掘方下面まで掘削し、住居に伴う遺構を明らかにすることとした。

住居の掘方は楕円形に近く、底面を平らに整え、周囲に溝を設ける。溝は北側から東側に掘られており、幅30～50cm、深さ６～13cmとなる。東側の溝は掘方の縁に沿うが、北側ではやや内側に入り縁との間に22cm程の平坦部を残している。この溝は南側には掘られていない場所があるのでL字あるいはC字形に巡るものと考えられる。

炉は住居の中央やや奥側に設けられている。直径40～50cm、深さ７cmの楕円形の掘方内に黒褐色シルトを充填している。この覆土内からは自然礫が出土している。炉床は失われていたので炉床に据えられた礫ではなく、意図的に埋め込まれたものと考えられる。

柱穴は４か所で検出されている。SH15798にのみ切り合いがある。南側に浅い小穴がみられ、柱の掘り抜き穴の可能性がある。柱穴の深さは検出面から25～40cmであるが、SP16073のみがおよそ60cmと著しく深くなる。柱穴の間隔は南北方向に1.85～1.9m、東西方向に２～2.2mとなる。また、柱穴の位置が住居掘方の北西側にずれているようにもみえる。南側に柱穴が確認できなかったので拡張に伴うものではなさそうである。何らかの障害があったものと考えたい。

壁溝・貯蔵穴は見当たらない。壁溝は断面でも確認することができず、貯蔵穴は該当する土坑がない。いずれも設けられていなかった可能性が高い。掘方の埋土は黒褐色シルトとやや明るいⅡ層に起因すると考えられる黒褐色シルトが混入していた。地山を掘削した残土を充てているのであろう。



第119図　SH14131平面・断面図（掘方）

SH14131（第119図）

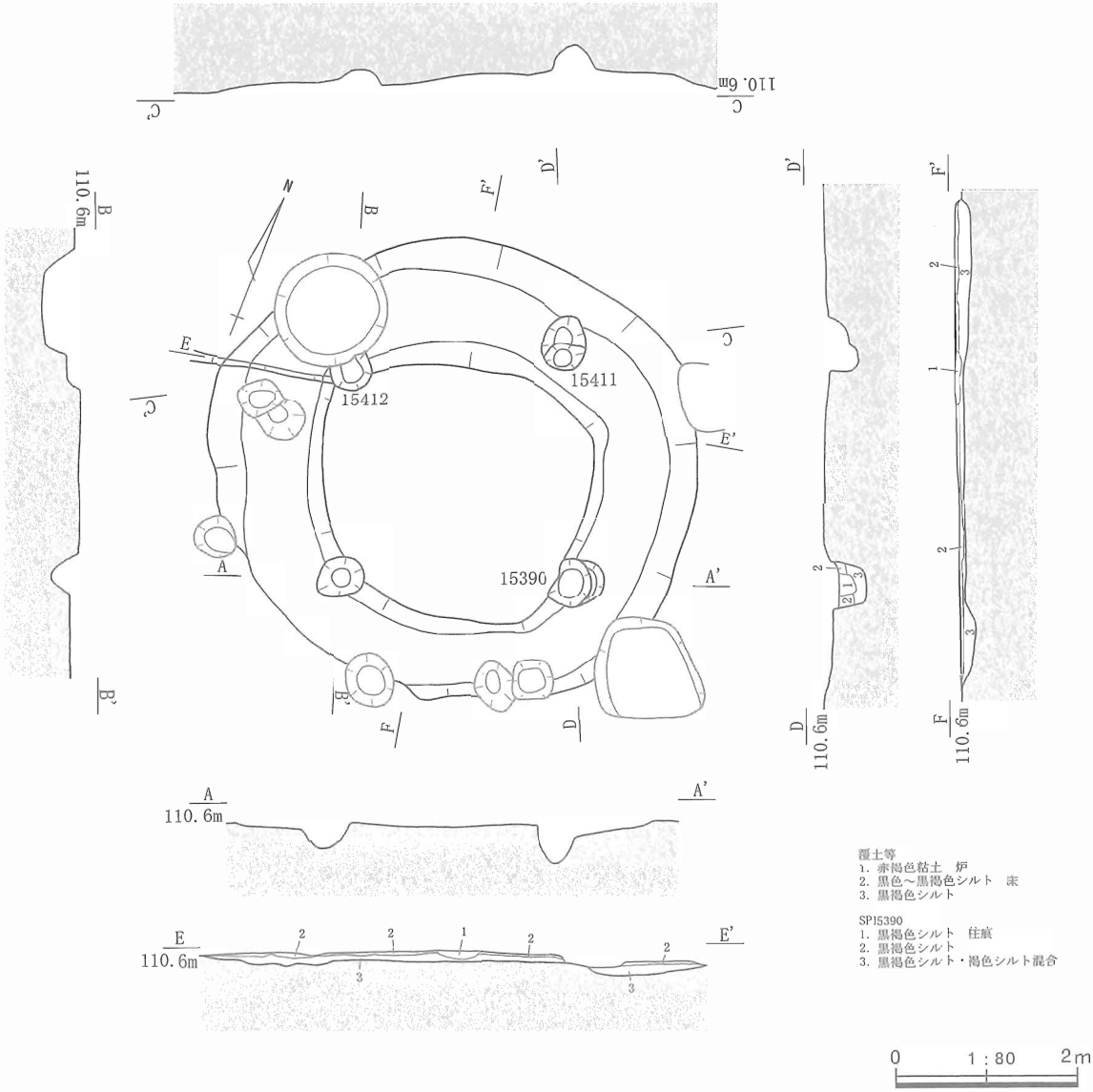
【遺構】Ｆ８グリッドで検出された。東側と上面に耕作による撹乱を受けて大きく壊されている。検出段階で既に掘方埋土となっていたので、掘方の底面で住居に伴う遺構を検出することとした。

住居の掘方は円形状をなし、底面を平らに整える。南側の一部に住居掘方の縁に沿う溝が残存している。溝は幅0.9～1.3m、深さ３～７cmとなる。北側には継続しないので北側に開くU字状になるのであろうか。掘方の埋土は黒褐色～暗褐色シルトである。Ⅲ層に起因する黄褐色粘土ブロックを含むので掘削した残土を均しているものと見える。

炉・壁溝は検出されなかった。炉は床面とともに失われていると考えられ、壁溝は断面でも見出せなかったので存在したか明らかでない。

柱穴は３か所で検出した。北東側にあるべき一つは撹乱によって失われていると考えられる。南側のSP16039・16351は14132に比べ住居掘方の縁にやや寄った位置に設けられている。比較的上位で検出できたSP14132・16039は直径60～70cmの円形を呈し、深さは40～45cmで断面形状は逆台形状をなす。南東側ではSP16351が柱穴にあたると考えられるが、直径28cmの円形状と撹乱で壊されているとはいえ先の２つよりも小規模となる。柱穴の間隔は長手方向に芯々で3.2m、短手方向には同様に2.4mとなる。

貯蔵穴は該当する土坑が見当たらない。設けられていなかったか、SP16351が含まれる撹乱によって壊されて失われている可能性がある。



第120図　SH14083平面・断面図（掘方）

SH14083（第120図）

【遺構】Ｆ８～Ｆ９グリッドで検出された。SH14131の北西側にあり、円形の掘方を有する。断面で黒色～黒褐色シルトの床を検出したが平面では失われていたので、掘方底面で住居に伴う遺構を把握した。

掘方の底面は平らに整えられ、縁辺にドーナツ状に全周する溝を設けている。溝は幅0.9～1.4m、深さ３～７cmで、南側がやや深くなる。上端は全体的に滑らかな曲線をもって掘られている。

炉は住居の中央やや奥側に設けられており、断面でのみ確認した。直径0.5～0.6mの円形状の掘方をもっていたと考えられ、内部は黄褐色粘土が充填されているが全体的に赤褐色に変色していた。

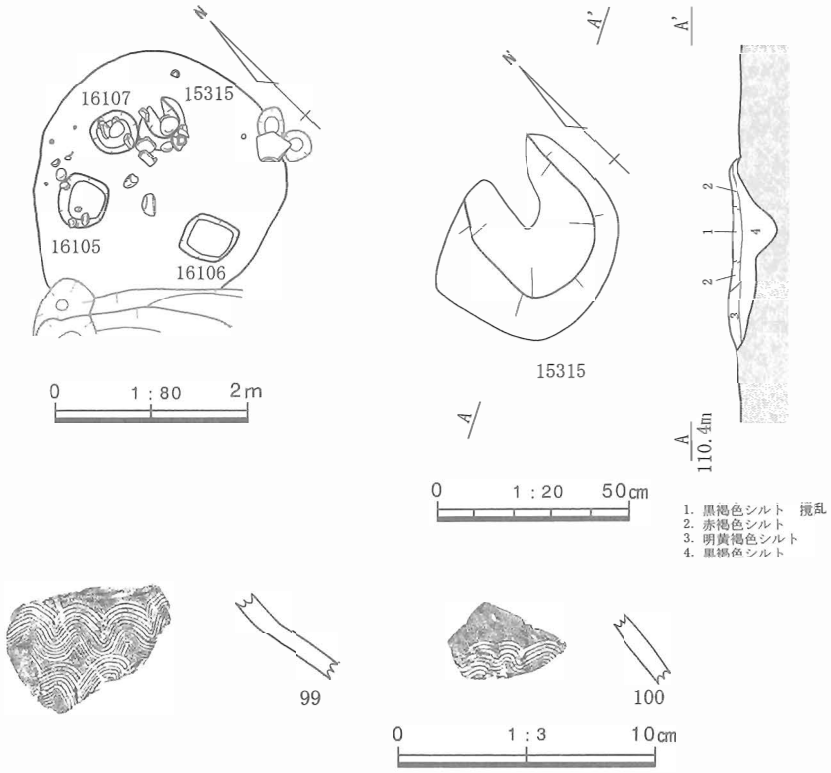
柱穴は４か所で検出されている。直径45～55cmの円形～楕円形をなし、東の並びのSP15390・15411は柱の掘り抜き穴とみられる小穴と重複する。SP15390では断面に幅20cmほどの柱痕が確認されており、この小穴によって東側に倒して抜かれた可能性を感じさせる。SP15411は北側に倒して抜かれたのだろう。柱穴の間隔は南北方向に芯々で2.3～2.5m、東西方向で同様に2.3～2.55mとほぼ均等となる。

貯蔵穴は明らかでない。SP15390の南側にある一辺45cmの隅丸方形状の小土坑が位置的には良いが、検出面からの深さが12cmとやや浅い。確証が持てなかったので図中では撹乱扱いとしてある。

SH15315（第121～122図）

【遺構】Ｉ10グリッドで検出された小型で円形状の住居である。西側でSH14322と切り合っている。検出面ですでに炉や遺物が露出した状態であった。黒色シルトの覆土を除去し、遺物や炉をあらわにしたが明確な床面は存在しなかった。したがって遺物の底面に相当する炉の裾部の高さを生活面と捉え、この上で遺物と炉の記録を採った。

住居の掘方底面は生活面とほぼ同レベルにあり、掘方底面をそのまま用いていたと考えられる。特に溝は設けず、平らに均している。



第121図　SH15315平面・断面図（生活面・炉）、遺物実測図

炉は住居の中央奥側に設けられる。直径50cmの円形状の掘方内に炉の残材と思われる赤褐色シルト粒を含む黒褐色シルトを充填するので、同位置で炉を造り替えている可能性がある。さらに上位にはⅢ層から採取した明黄褐色シルトを３cm内外の厚みで貼り込んでいる。この粘土の縁辺は炉床から１～３cm盛り上がった土手状となり、北側に開くU字状に盛り付けられる。土手の内側にあたる炉の中央付近から北側にかけてが炉床として利用され、一帯は赤褐色に焼けている。

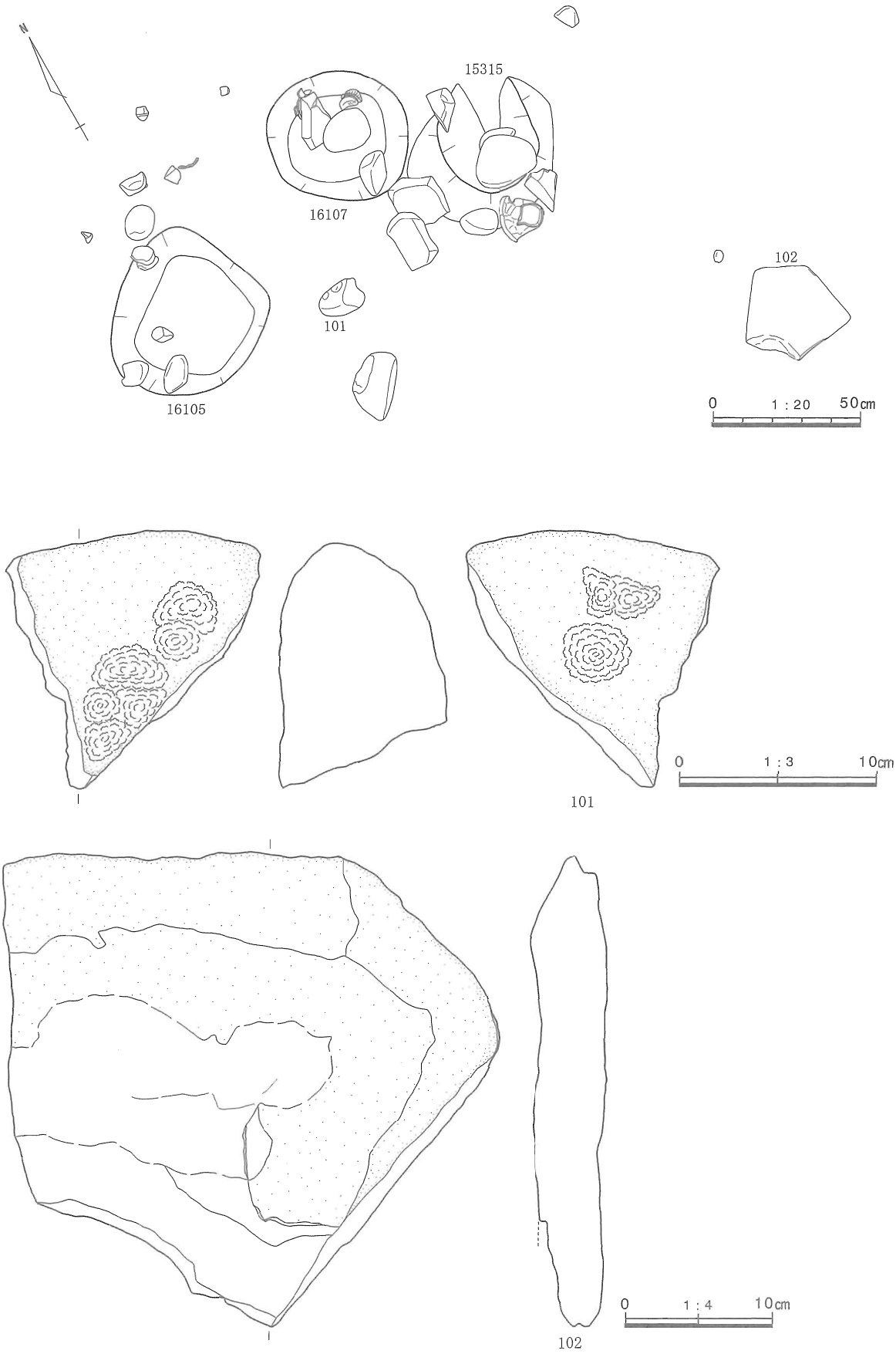
柱穴は判然としない。住居の範囲で検出されたSK16105～16107は直径45～55cmの円形あるいは隅丸方形状を呈する小土坑であるが、深さが４～５cmと浅いので柱穴ではないと判断した。壁溝や貯蔵穴も存在が明らかでない。特に貯蔵穴は該当する土坑がなく、設けられていなかったものと思われる。

【遺物】遺物は覆土と生活面直上から土器と石製品が出土し、特に住居の北側に集中する傾向がある。炉からSK16107周辺には拳大から小児頭大の自然礫が集中している。これらの礫は炉の上面に据えられたようにみえるものもあるが、台石片（101）や壺の口縁部片を含んで多くは無造作に散らばっている。このような礫をまとめて生活面上に捨てる状況は他の住居には見当たらず、廃棄の際の特異性を感じざるを得ない。台石102は東側の縁辺にあり正位におかれている。これは住居の片隅に片付けられた状況にあるのかもしれない。

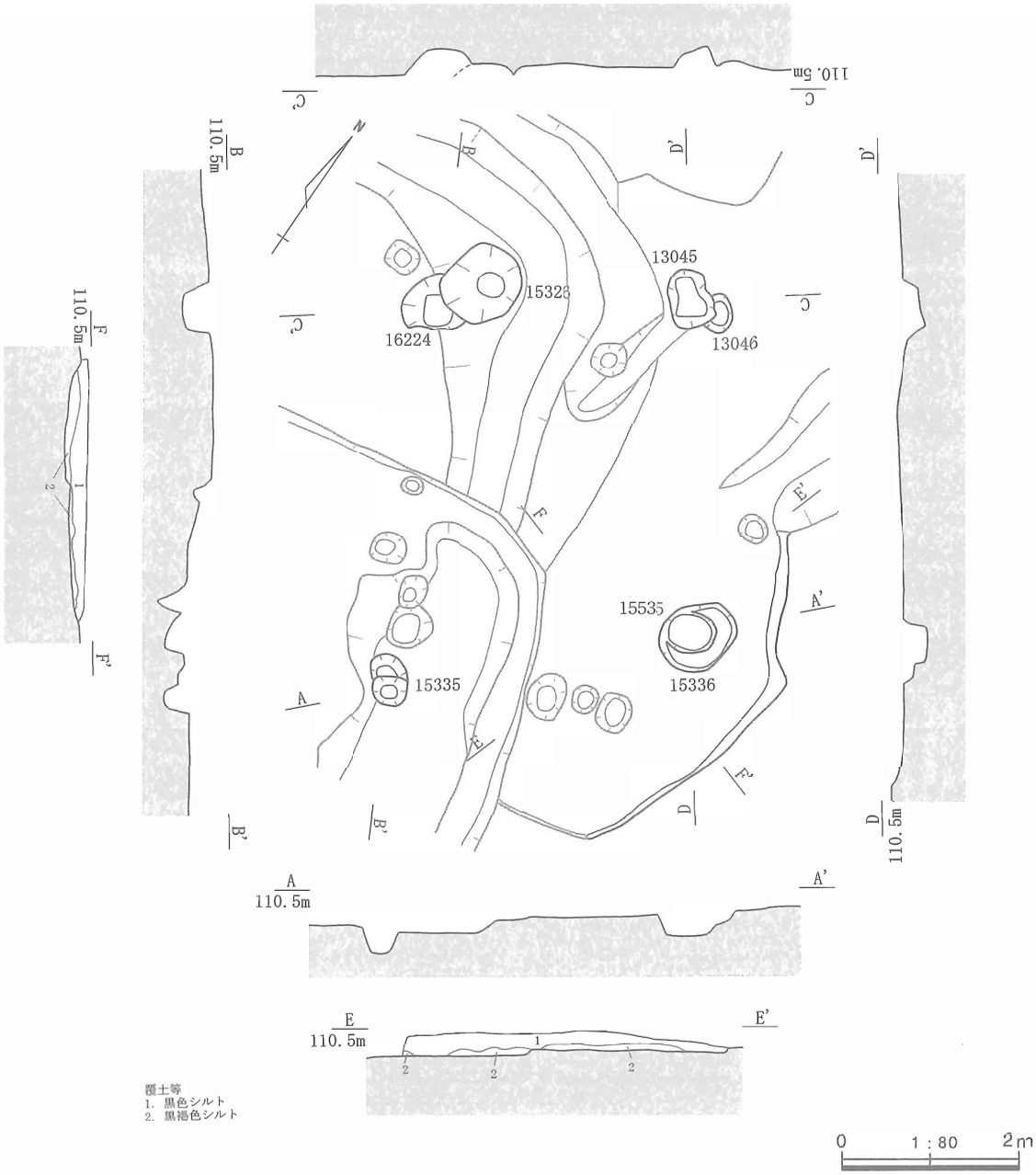
99・100は覆土内から出土した壺の肩部片である。器面を平滑に整えた後にクシ工具を用いて波状文を描いている。この２片は工具の運びが違うので異なる個体のものであろう。

101は生活面上から出土した台石片である。表裏に使用痕が残り、焼けた上、割れている。

102は薄い砂岩製の台石である。片面を平滑になるまで使いこんでいる。これも焼けて、節理に沿って所々が薄く剥がれている。なお、炉の南側から出土した壺の口縁部片は出土時には原形を保っていたものの風化が著しく、整理作業中で接合・復原することは叶わなかった。



第122図　SH15315遺物出土状況・遺物実測図



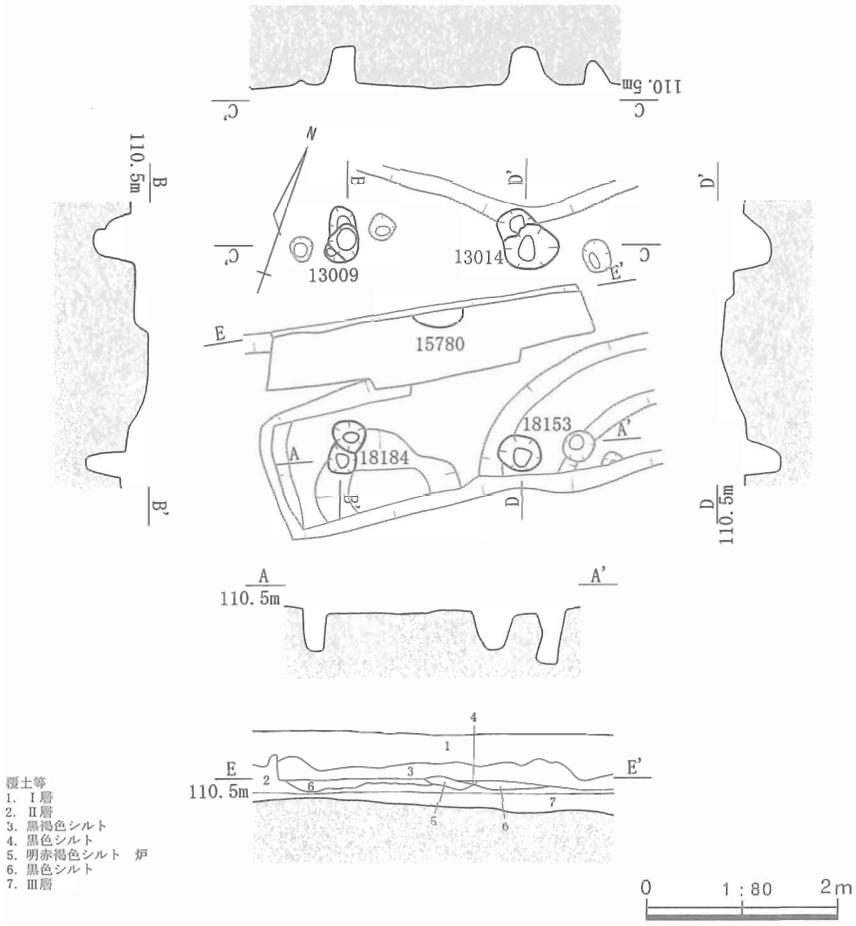
第123図　SH13043平面・断面図（掘方）

SH13043（第123図）

【遺構】L16グリッドで検出された。西側をSH13021・15325に、北側を天地返しの撹乱で大きく壊される。検出面が掘方埋土となったので、掘方底面で住居の伴う遺構を確認した。なお、掘方の埋土は黒色～黒褐色シルトで、下位の黒褐色シルトは掘方の掘削によって生じたⅠ層とⅡ層の混合土である。

住居の掘方底面は平に整えられ、残存する部分には溝は見当たらない。柱穴は4か所で検出されている。直径40～92cmと規模に差があり、いずれも切り合いをもつ。SP15536は浅く15535の柱の掘り抜き穴の可能性があるが、これ以外は近似した深さにあるので、柱が挿げ替えられているものと考えられる。柱穴の間隔は長手方向に芯々で3.8～4.8m、短手方向で同様に3.2～3.5mとなる。

炉は検出できなかったが、撹乱によって壊されているものと考えたい。壁溝・貯蔵穴も検出できなかった。壁溝は断面でも確認できず、貯蔵穴は該当する土坑が見当たらない。



第124図　SH15780（18129）平面・断面図（床面・掘方）

SH15780（第124図）

【遺構】M17グリッドで検出された。北側でSH13025、南側でSH18127に重複し上面を撹乱等で荒らされている。検出段階ですでに床面が失われている状況であったが、撹乱の中に島状に残った部分に炉が残存していた。なお、掘方の埋土は黒色シルトである。

炉は住居の中央やや奥側に設けられる。直径50cm、深さ８cmの円形の掘方内にⅢ層から掘り取った黄橙色粘土を充填する。断面では西側に２cm程度の盛り上がりが観察できるので、本来は土手状の盛り上がりを周囲に備えていたのかもしれない。焼け締まり、明赤褐色に変色する。

住居の掘方は底面を平らに整える。住居のプランとの位置関係が明らかでないので図上では撹乱扱いとしているSP18184の南東側にある深さ12cm前後の窪みが、住居の掘方に伴う溝である可能性もある。

柱穴は掘方底面で４か所を検出した。直径29～52cmの円形状を呈し、南東側のSP18153以外はいずれも切り合いをもつ。切り合ういずれもが近似した深さをもつので、複数回にわたり柱が挿げ替えられているものと考えられる。柱穴の間隔は長手方向に芯々で２～2.5m、短手方向で同様に1.8～２mとなる。

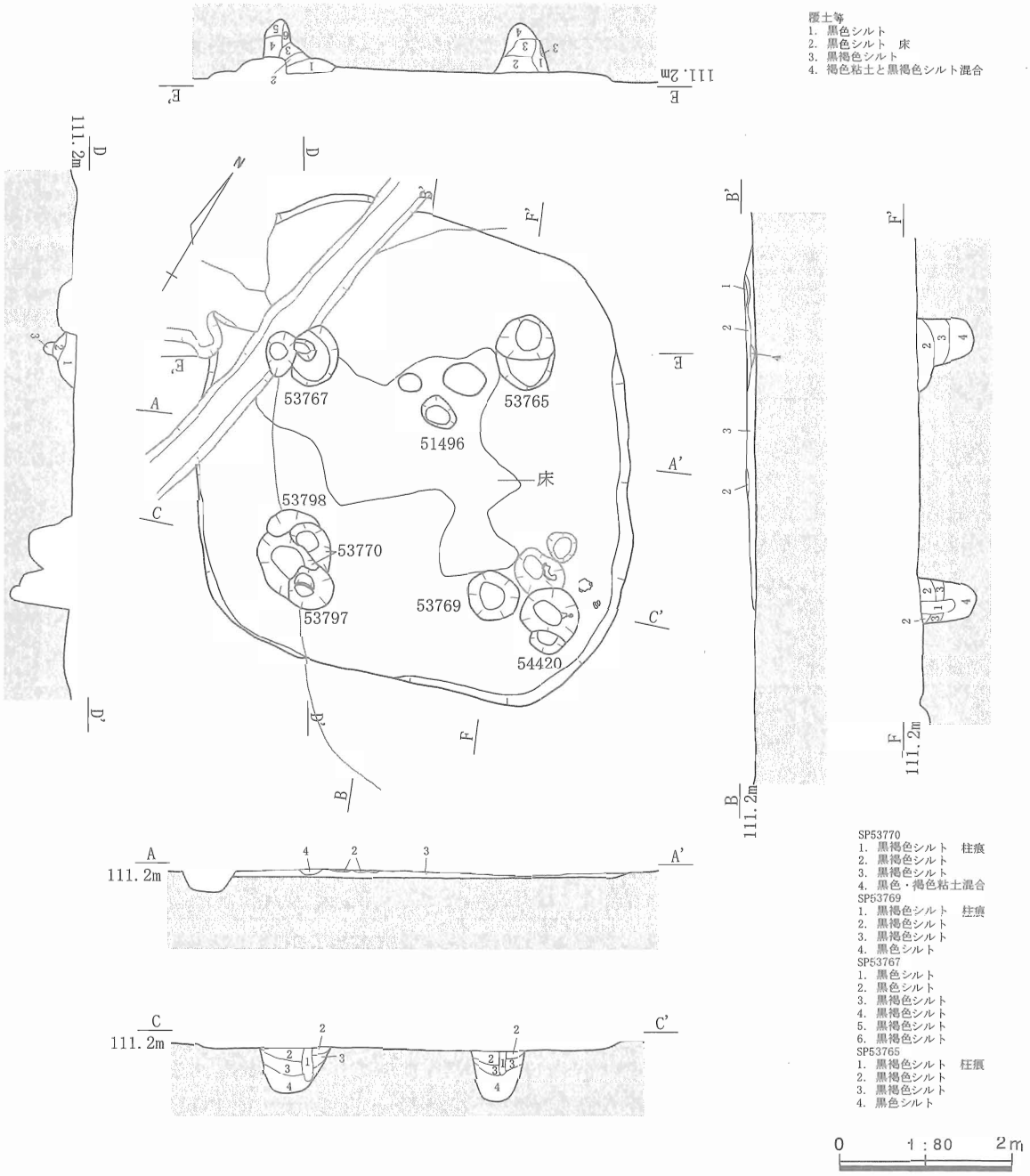
壁溝は断面でも観察できず、存在が明らかでない。貯蔵穴も検出した範囲では該当する土坑がなく、住居の南縁が調査区外になるため有無は断定できない。

SH51496（第125～126図）

【遺構】Ⅰ18グリッドで検出された。住居の７割程度がSH51485の上面に切り込んでいる。また、西側の一部を溝SD50760に切られている。検出面は床面直上となったので、床上の覆土は観察できなかった。

床面は主に住居中央部分で不定形に残存していたが、断面では縁辺部にも観察できたのでより広い範囲に張られていたものと考えられる。黒色シルトを素材とし、２～４cmの厚みで硬く敲き締められている。

炉は住居の中央奥側に３か所で検出された。後述する柱穴にみるように上屋は何回かの改修が施されているものと考えられるので、その都度作り替えられたものと考えられる。もっとも南側にある炉が最後に使用されていたもので、上面には細長く直径５cm程の焼けていない自然礫が置かれていた（図版編図版153-1・154-3）。掘方は直径33～43cm、深さ12cmの楕円形状を呈し、全体的に暗赤褐色～赤褐色に焼け締まっている。他の炉は直径25～50cmの円形あるいは楕円形を呈する。前後関係は判然としない。



第125図　SH51496平面・断面図（床面・掘方）

壁溝の存在は明らかでない。断面でも確認できなかったので、設けられていないことも考慮される。

貯蔵穴は柱穴SP53769に接するSK54420が該当する。直径60～68cm、検出面からの深さ50cmの円形状を呈する。この貯蔵穴はSH51495の調査の際に存在を把握しているので、床面からの深さは60cm程だったと考えられる。

柱穴は４か所で検出されている。直径50～60cm台の円形あるいは楕円形を呈し、SP53769以外は切り合いがある。北側のSP53765・53767は切り合う土坑が浅く断面でも柱痕が観察できないので、柱は掘り抜き穴で抜き取られているものと考えられる。もっとも切り合いが多いのはSP53770付近で、４基の柱穴が重複している。このうち53770（南側）の断面で幅13～18cmの柱痕が観察できたので、ここが最終の柱穴と考えられる。単独であるSP53769でも幅７～15cmの柱痕が観察されている。柱穴の間隔は長

手方向に芯々で2.3～3m、短手方向で同様に2.2～2.9mとなる。

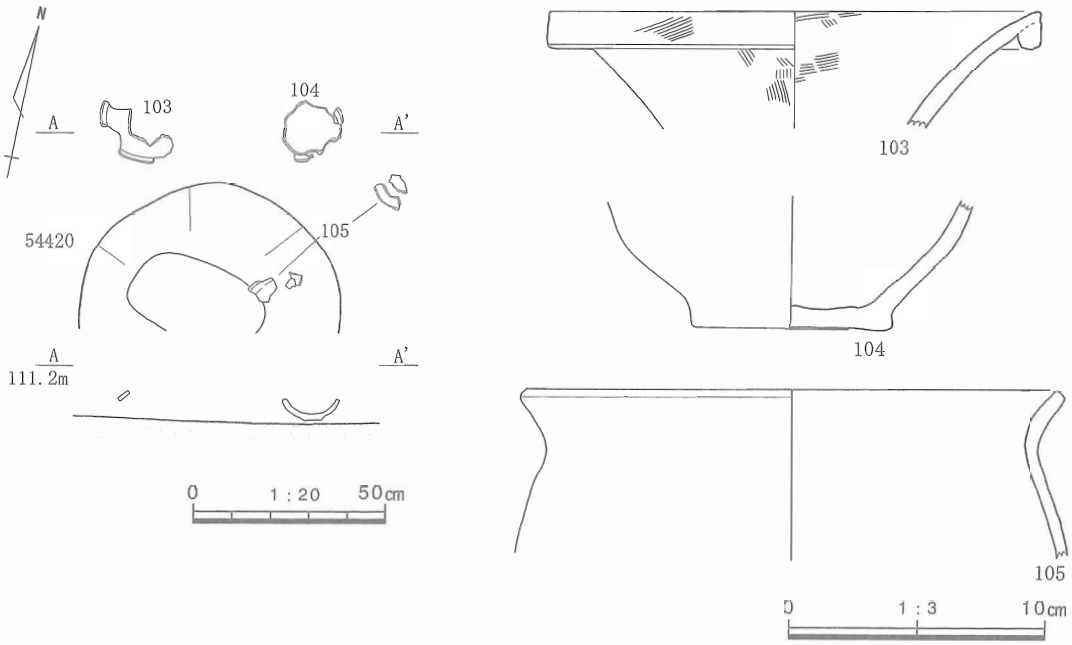
住居の掘方は底面を平らに整え、溝を備える（図版編図版153-2）。溝は幅0.5～0.6m、深さ6～8cmで、北側と南東側にのみ掘られている。

【遺物】遺物はSK54420脇の床面上から54420内にかけて土器が出土している。大破片である103・104は割り取られて床面上におかれているように見える。いずれも風化が激しく調整痕を観察できたのは103に限られた。

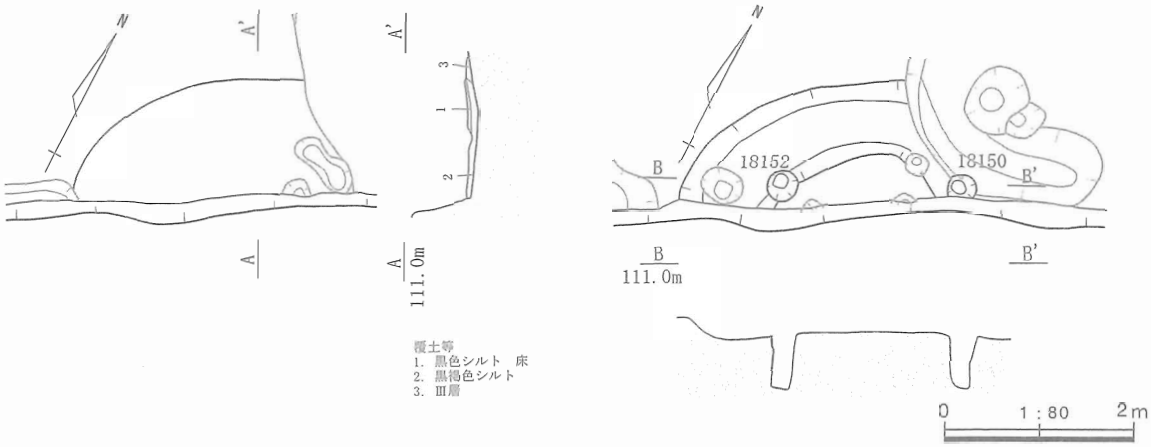
103は折り返し口縁をもつ壺の口縁部片である。およそ半分が逆位で出土した。口縁内面と口唇部外面に横方向のハケ調整を、口縁部外面から頸部にかけて縦方向のハケ調整を施している。

104は103よりも小型の壺の体部過半～底部片である。正位で検出されている。

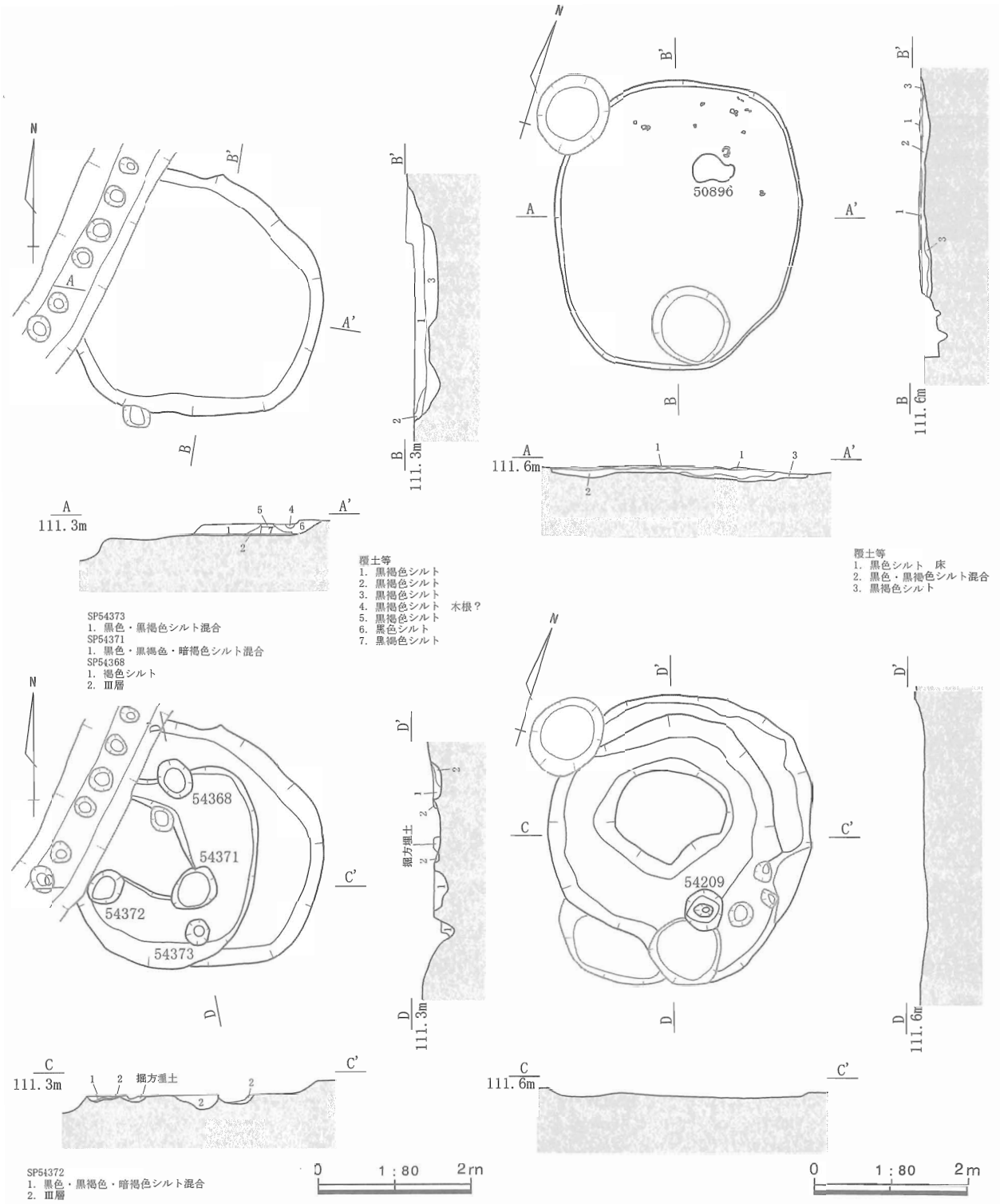
105は台付甕の口縁～体部上半の破片である。一部が貯蔵穴の覆土に混入していた。貯蔵穴が埋まる過程で流れ込んだ可能性がある。口唇部にはハケ工具の刻みが施されていたものと推測されるが、現状では観察できない。



第126図　SH51496遺物出土状況・遺物実測図



第127図　SH18127平面・断面図（床面・掘方）



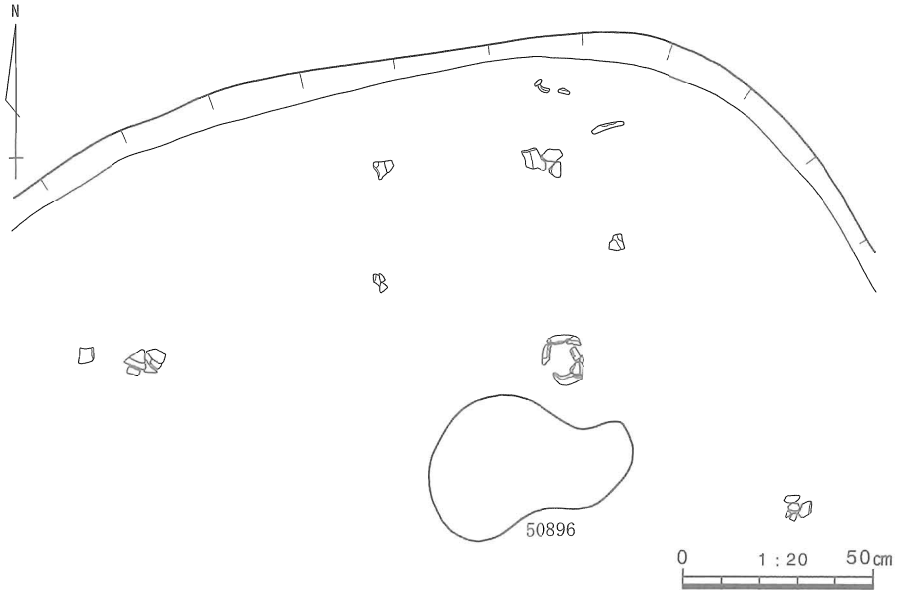
第128図　SH53085平面・断面図（生活面・掘方）　第129図　SH50896平面・断面図（床面・掘方）

SH18127（第127図）

【遺構】M16～M17グリッドで検出された。東側でSH13018と重複し、南側は調査区外となる。検出面は床面直上である。

床面は黒色シルトを用い、3㎝内外の厚みで硬く敲き締められている。住居の際まで張られるので、広い範囲に設けられている可能性がある。撹乱等の影響で柱痕を床面上で把握することはできなかった。

炉と貯蔵穴は調査区外の位置となるため存在を把握できない。壁溝は断面でも確認できないので、設



第130図　SH50896遺物出土状況

けられていなかったことも考慮される。

住居の掘方は底面を平らに整え、周囲に溝を設ける。溝は住居掘方の縁に沿って掘られ、幅0.75～0.98m、深さ８cm程となる。内面には黒褐色シルトが充填される。

柱穴は北寄りの２か所を把握した。直径30～35cmの円形で深さは50cm台と間口に比べて深く掘られる。柱穴の間隔は芯々で1.9mとなる。

SH53085（第128図）

【遺構】H18～Ｉ18グリッドで検出された円形状を呈する小型の住居である。西側を溝SD50838に切られ、南側でSH51923と重複する。床面は検出できなかったが、掘方埋土が厚く敷かれるので埋土中に生活面が存在する可能性があると考えた。したがって埋土中で一旦記録を採り、掘方底面まで掘り下げた。

生活面では炉を検出することはできなかった。また、壁溝・貯蔵穴も見出すことができなかった。

住居の掘方は二つの掘り込みからなる。より内側には直径2.5～2.8mの範囲に、幅0.3～1.1m、深さ７～９cmの溝が掘られる。北側で急激に絞れるので、西側で途切れる可能性が高い。この範囲には直径40～65cmの小土坑SK54368・54371・54372が検出されたが、８～15cmと浅いので柱穴と考えるのは難しいだろう。主柱穴を伴わない上屋構造であったと考えられる。

外側には北から南東にかけて20cm程度の深さの掘り込みが設けられる。これには溝は伴わない。

この二つの掘り込みはややずれており南側の縁で整合しないので、同一のプランに伴うものとは考えにくい。ささやかであるが、内側の掘方から北東側へ拡張していると考えてよいだろう。

SH50896（第129～130図）

【遺構】H19～Ｉ20グリッドで検出された。小型の住居で一部に後世の撹乱の影響を受ける。また、方形周溝墓SZ52284の内側に位置するため、この構築の際に撹乱を被っている可能性もあろう。検出面は床面直上となったので、覆土の様子は把握できなかった。

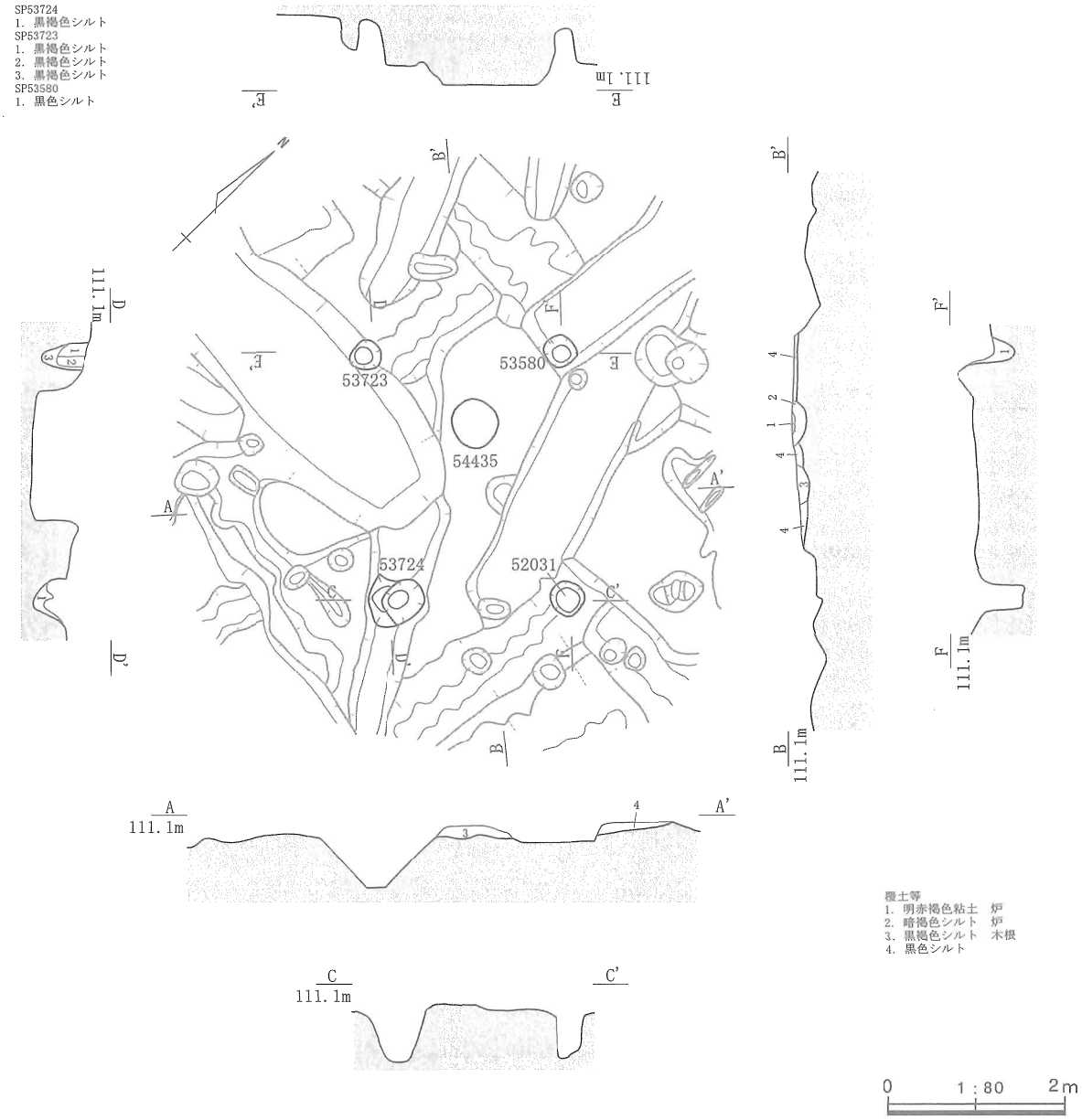
床面はほぼ全面で検出された。黒色シルトを２～６cmの厚みで硬く敲き締める。床面上では柱痕を認めることはできなかった。また、掘方上でも柱穴を見いだせなかったので、掘方内に柱を要しない上屋構造であったと考えられる。

炉は住居の中央やや奥側にあり、中軸線より東に若干ずれている。直径60cm、深さ６cm程の楕円形状の掘方内に黒褐色シルトが混じった黒褐色粘土を充填し、上面を平らに均して炉床とする。

壁溝・貯蔵穴は検出できなかった。いずれも設けられていなかった可能性がある。

住居の掘方は底面を平らに整えたうえ、溝を設ける。溝は幅0.6～1.6cm、深さ１～６cmの規模があり全周する。北側では幅が狭くなるので、住居の立ち上がりとの間に幅16～34cmのテラス状に掘残される。

【遺物】炉の北側床面から土器片が遺棄されたかたちで出土している。接合する例が少ないので、一個体が床上で割られてそのまま捨て置かれたわけではないようだ。



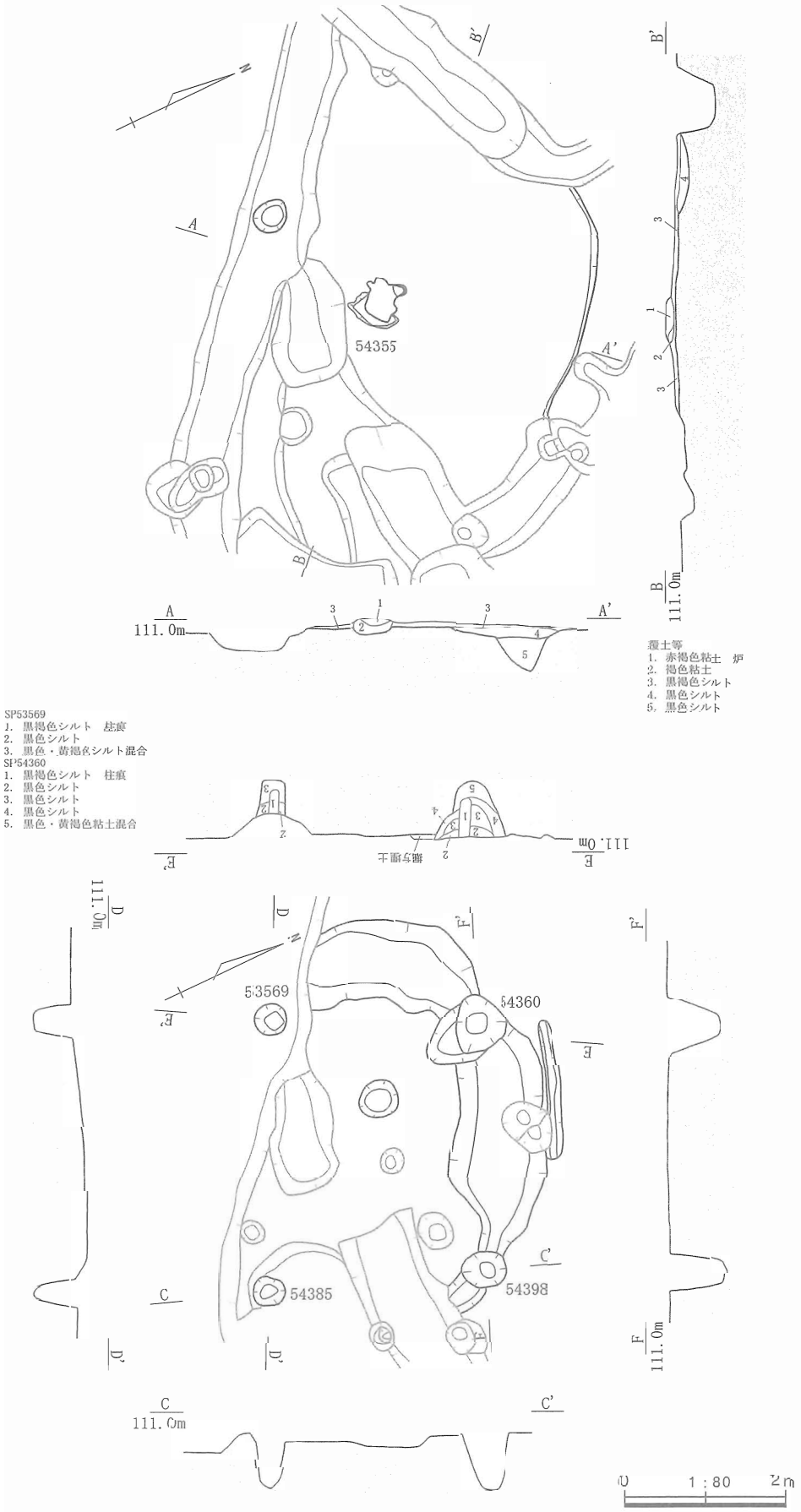
第131図　SH54374平面・断面図（床面・掘方）

SH54374（第131図）

【遺構】Ｊ19グリッドで検出された。至るところに方形周溝墓や耕作による天地返しによる撹乱を被っており、平面形状すら定かではない。炉と柱穴によって住居の存在を見出した。床面はすべて失われており、掘方の充填された黒色～黒褐色シルトが10cm前後の厚みで残存していた。

炉は掘方と熱染みを検出した。住居の中央やや奥側に設けられていたものと考えられる。掘方は直径55cm、深さ15cmで、内部には暗褐色シルトが充填されている。上位は明赤褐色に焼けているが、炉床は失われている。この部分は粘土が用いられているので、炉の上位は別途粘土で張られていたとみられる。

柱穴の掘方は直径30～50cmの円形で深さは概ね揃っている。SP53724だけに切り合いが認められ、およそ同じ深さなのでほぼ同位置で柱を挿げ替えた痕跡と考えられる。SP53723の断面には柱痕とみられる幅10cmほどの痕跡が認められた。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.9m、短手方向で同様に２～2.2mとなる。貯蔵穴は特定できないが、SP52031の南側にある小穴のひとつが該当する可能性がある。



第132図　SH50795平面・断面図（床面・掘方）

SH50795（第132～133図）

【遺構】K18グリッドで検出された。多くの部分に方形周溝墓や耕作による撹乱を被っている。床面は失われていたが、炉が残存したためにこの高さに近似する位置に床面があったものと考えて一旦記録を取った。掘方埋土は黒色～黒褐色シルトで、5～10cmの厚みで残存していた。

床面に近似する高さでは撹乱等の影響で柱痕を明らかにすることができなかった。柱穴の存在は掘方上で明確にしている。

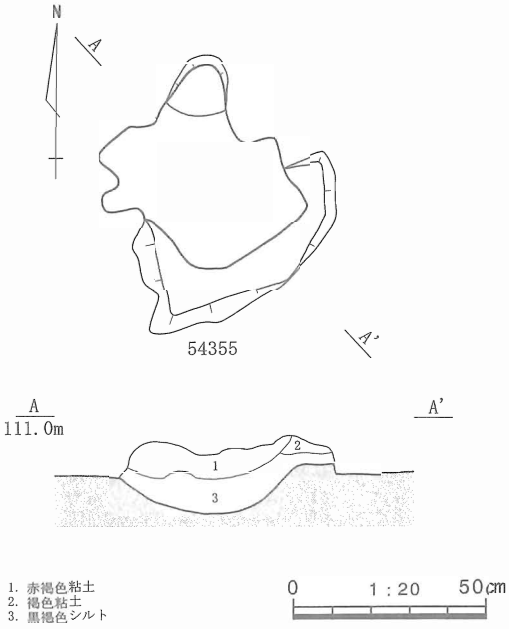
炉54355は住居の中央やや奥側に設けられている。直径90cm、深さ30cm程度の掘方内に黒褐色シルトを充填し、その上位に20cm前後の厚みでより耐火性に富む褐色粘土を貼り込んでいる。炉床の周囲には部分的に2～5cmの土手が残存し、中央部分は直径25cm前後の窪みとなる。この土手は周囲を巡っていた可能性がある。床面が残存していないので高低差は明らかでないが、炉の土手の頂部は床面以上の高さにあったものと考えられる。南側では褐色粘土のなだらかなカーブで床面に擦りつくのだろう。

掘方埋土上では壁溝は把握できず、住居掘方上でその残欠を確認している。貯蔵穴も明らかでない。柱穴SP54398の外側に小穴が存在するのであるいはこれが貯蔵穴なのかもしれない。今回は確証がないので図上では撹乱扱いとしている。

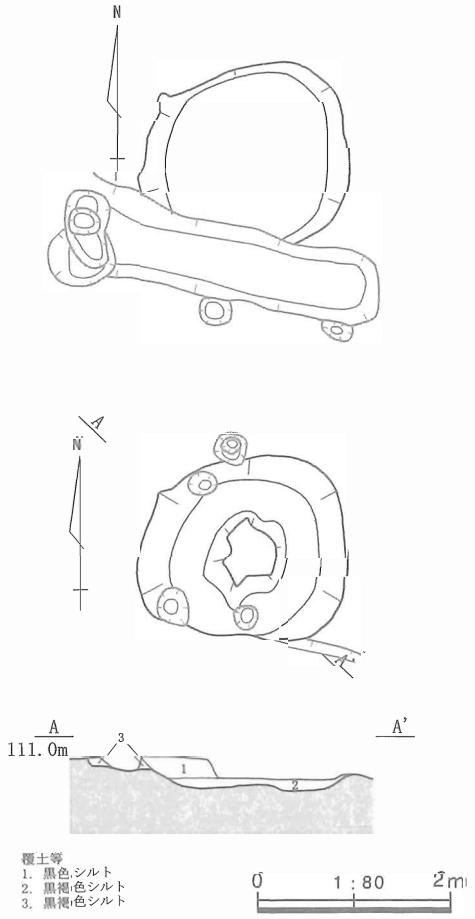
住居の掘方は底面を平らに整え、周囲に溝を設ける。溝は幅0.3～1.2m、深さ3～8cmとなる。南東側の幅が著しく狭くなるので、途切れている可能性がある。内部には上位に黒褐色シルト、下位に黒色シルトを充填する。取り置いた土で別々に埋めているものと考えられる。

壁溝の残穴は東縁に相当する場所に認められた。長さおよそ1.8m、幅16cm前後、深さ2cm程である。

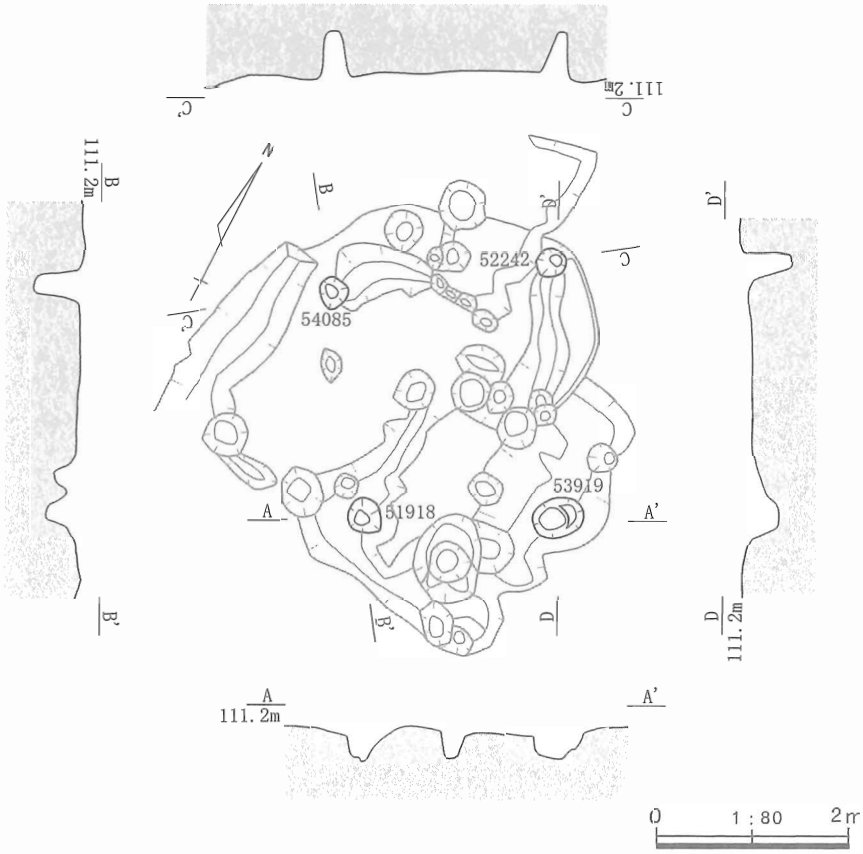
柱穴の掘方は4か所で検出された。直径40～70cmの円形ないしは三角形状をなし、深さは概ね揃っているがSP54360の規模だけが大きくなる。いずれにも挿げ替えの柱穴や柱の掘抜き穴は伴っていない。もっとも間口の大きいSP54360は南側に長さ40cm、幅70cmほどの土坑状の突出を南側に伴っている。覆土は柱穴と一体であったので、柱穴の掘削の際にともに掘られたものと考えられる。SP53569・54360の断面からは幅13cm程度の柱痕が観察できた。柱穴の間隔は長手方向に芯々で3.1～3.4m、短手方向で同様に2.5～2.8mとなる。



第133図　炉54355平面・断面図



第134図　SH53254平面・断面図（床面・掘方）



第135図　SH52243平面・断面図（掘方）

SH53254（第134図）

【遺構】K18グリッドで検出されたごく小型の住居である。一部をより新しい遺構や耕作によって壊されている。床上の覆土として黒色シルトを20cm程度の厚みで部分的に把握することができた。

床面は掘方の埋土である黒褐色シルトの上面1cm程度を敲き締めて作り出す。同質のため相互の分離は困難であった。炉や壁溝、貯蔵穴は設けられていない。住居の掘方は底面を平らに整え、幅0.6～0.9m、深さ3～6cmの溝を全周させる。柱穴はないので主柱穴をもたない上屋構造であったとみられる。

SH52243（第135図）

【遺構】K20～L21グリッドで検出された。北側をSH51143等によって切られる位置にある。また、天地返しによる撹乱が著しく、柱穴の掘方を除いて遺構は失われている。調査時には柱穴SP52242・54085の北側に住居の掘方と思われる弧状のプランを検出した。しかしこれはSP52242と53919間で住居の内側に回り込むのでこの住居の掘方ではないと判断した。このようにプランの形状も定かでないが、便宜的にこの場所に掲載した。

柱穴は4か所を検出した。直径30～50cmの円形ないしは楕円形を呈し、SP53919に切り合いが認められる。SP53919は外側にあたる部分がより浅いものの10cm程度の差しかなく、挿げ替えられた柱穴が切り合っているものと考えられる。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.4～2.7m、短手方向で同様に2.1～2.3mとなる。なお、貯蔵穴は該当する位置に土坑が認められない。

SH51173（第136図）

【遺構】K20～K21グリッドで検出された。茶畑の改植が全体に及んでおり部分的な破壊を被っている。検出面は床面直上から掘方埋土上位が主となるので、床上の覆土は把握できていない。

床面は比較的端にも検出されているので、広い範囲で張られていたものと考えられる。黒褐色シルトを用い2～4cmの厚みで硬く敲き締められている。撹乱によって床面上で柱痕は確認できなかった。

炉は住居の中央やや奥側に設けられている。炉床は平らで、床面よりも2～3cm盛り上がっている。目立った掘方は伴っていない。炉の北側部分が薄くなった床面上に張られているので、床を貼り込んだ上位に別途炉のための褐色粘土を盛り付けているようである。

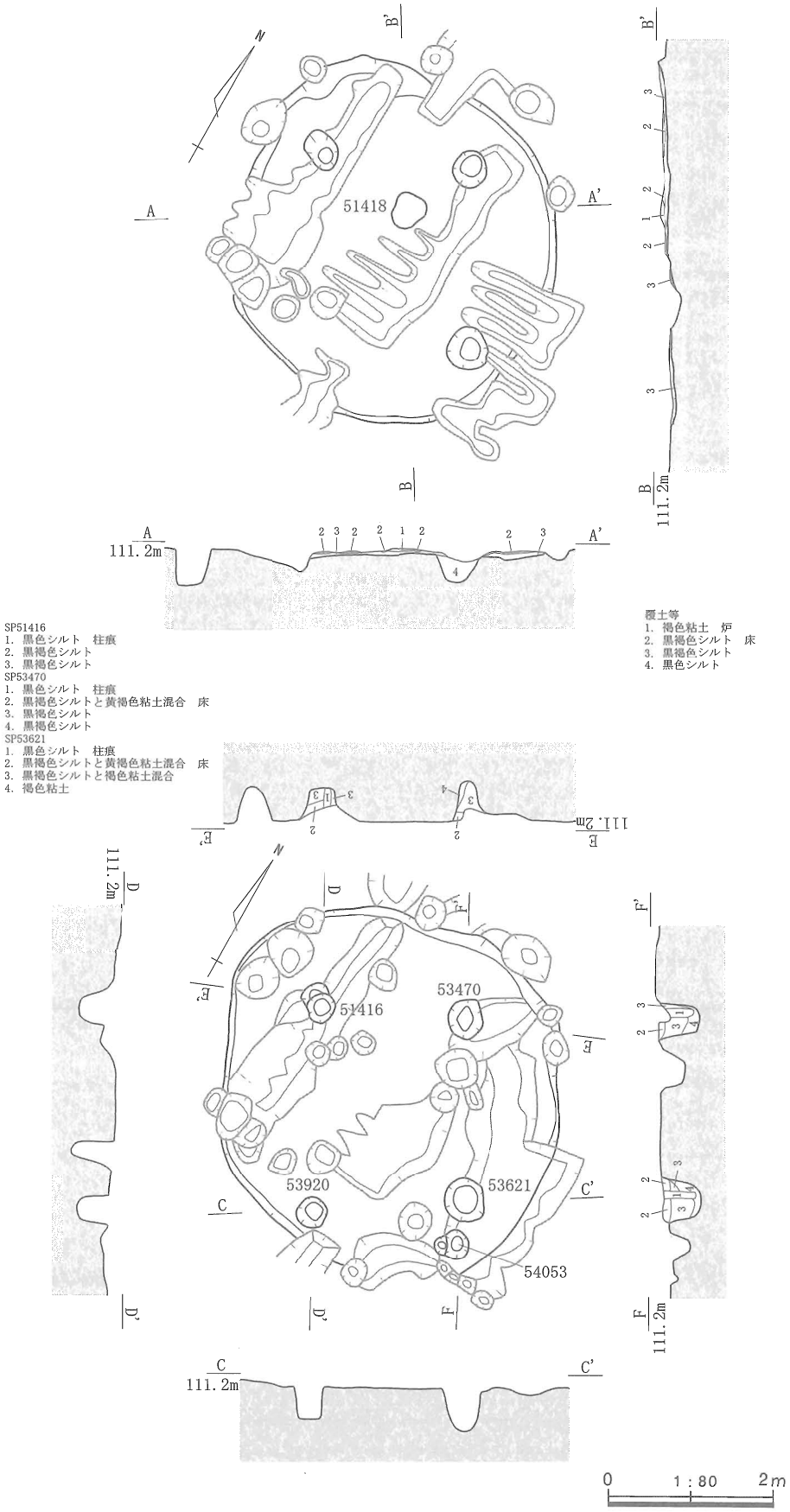
壁溝は検出されていない。掘方上でも把握できなかったので、設けられていない可能性がある。

床面上では貯蔵穴は把握できなかった。掘方上では柱穴SP53621の南東側に小土坑SK54053がある。これが貯蔵穴であったものと考えられる。

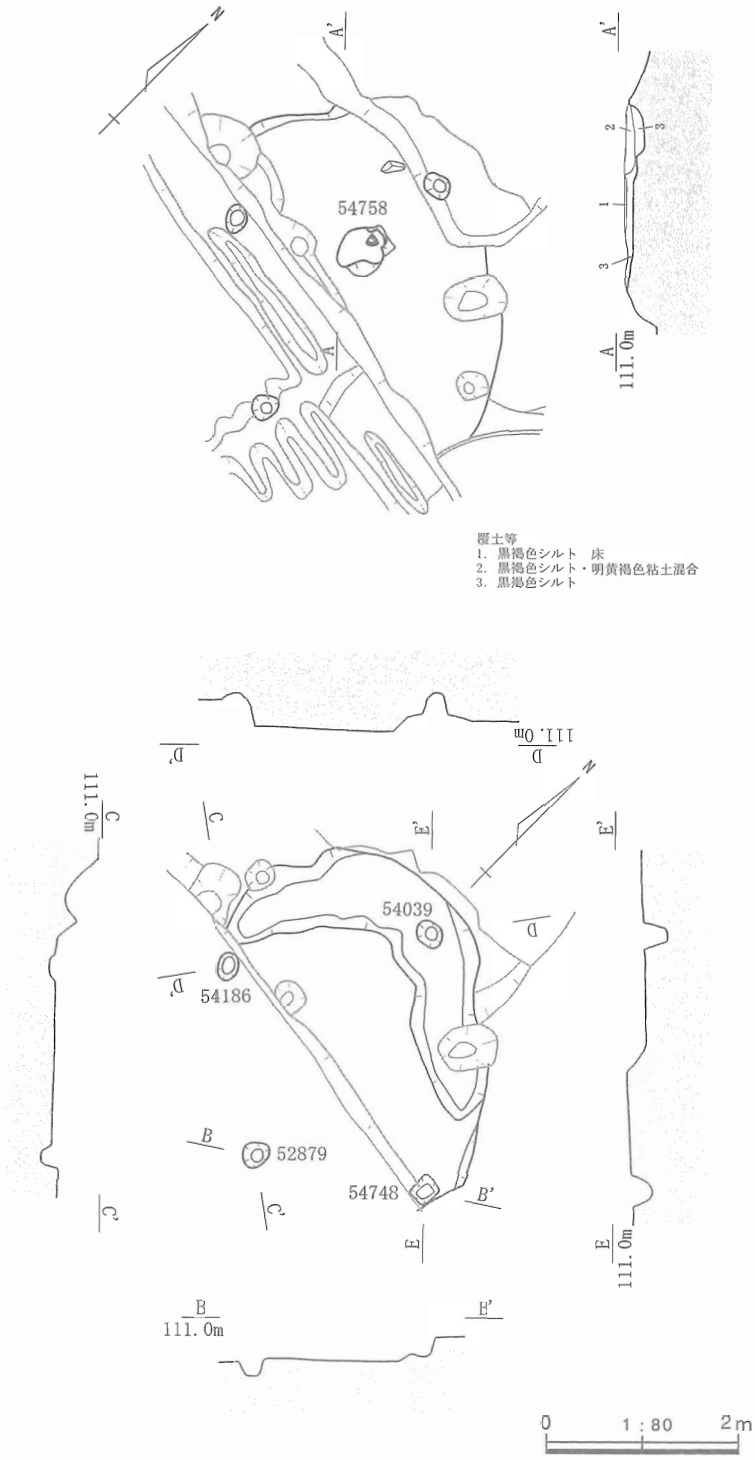
住居の掘方は南側がややゆがむが、底面は平らに整えられる。溝は改植の撹乱に切られるそれらしいカーブがみられるので、小規模なものが掘られていた可能性がある。

柱穴は4か所で検出されている。いずれも直径30～52cmの円形を呈する。北西側にあるSP51416はほぼ同規模の二つの柱穴が切り合うが、他には切り合いはみられない。断面では東側のひとつに柱痕が認められたので、西からより内側の東側に柱が挿げ替えられたものと考えられる。SP53470・53621の断面でも幅16～20cmと同程度の柱痕が観察されている。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.2～2.6m、短手方向には同様に1.8～1.9mとなる。

貯蔵穴と考えられるSK54053は直径35cm前後の円形で、西側に直径25cmほどの小穴と切り合っている。深さは27cmであるが、床面の高さを考慮すると元来は45cmほどであったと考えられる。



第136図　SH51173平面・断面図（床面・掘方）



第137図　SH50837平面・断面図（床面・掘方）

SH50837（第137図）

【遺構】M20グリッドで検出された。南側のおよそ1/2を改植による撹乱によって失っている。検出面は一部で残存していた床面と掘方の上位であり、床上の覆土は把握できていない。

床は黒褐色シルトを用い、２cm程度の厚みで硬く敲き締められる。北側では床に相当する高さで掘方埋土が露出しているので、床は中央部にのみ設けられていたか周辺部が中央に比べ高まっていたかのいずれかであろう。柱痕は床が残存する部分からは外れている。

炉は住居の中心からやや奥側に設けられている。直径50cm、深さ７cmの円形状の掘方内に黒褐色シルトと黄褐色粘土の混合土を充填する。この中には赤褐色に焼けた粘土ブロックを含んでいるので、この場所に従来あった炉を壊して作り直しているのかもしれない。さらに上位には黒褐色シルトを貼り込んでいる。炉床は床面から４cm程度盛り上がった位置となる。壁溝・貯蔵穴は明らかでない。

住居の掘方は底面を平らに整えて周囲に溝を設ける。溝は幅0.6～0.8mで、深さは13～20cmとなる。埋土には２種の土を用い、別々に埋めたことを示唆する。

柱穴は４か所で検出された。直径25cm前後の円形で、SP54748のみが方形状となる。

SH54721（第138図）

【遺構】M20グリッドで検出された。天地返しによる撹乱や溝SD50838によって壊されるほか、SH50837に切られて床面が失われている。検出面は床面直上であり、床上の覆土は確認されていない。

床は黒褐色シルトと褐色シルトを混合した土を素材とし、１～３cmの厚みで硬く敲き締められる。より床の残存する南北方向にはほぼ全てにわたって張られているので、全面に近い範囲に設けられていた可能性が高い。柱穴は床面上では２か所が確認された。南側のSP54675は撹乱によってやや下がっ

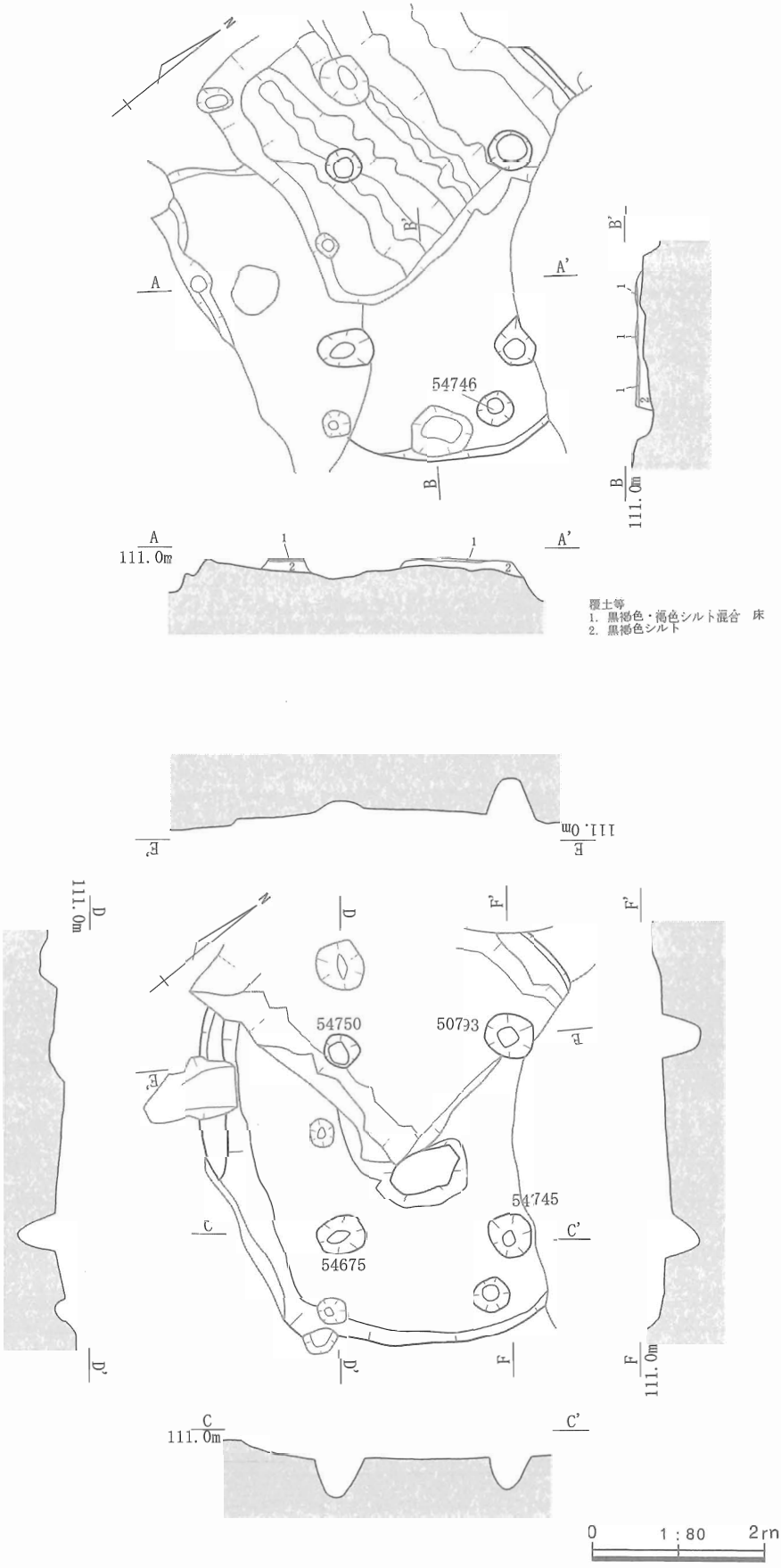
た位置に見出されたためSH50837の調査に合わせて掘削したもので、後に柱穴の照合の際にSH54721に属するものと判明したものである。図上では齟齬が生じているがご了承願いたい。SP54745の位置では掘方の間口よりも規模が狭いので、柱の周囲には床が設けられていなかった可能性がある。

炉は検出できなかった。天地返しによる攪乱で破壊されているのだろう。壁溝も検出されていない。

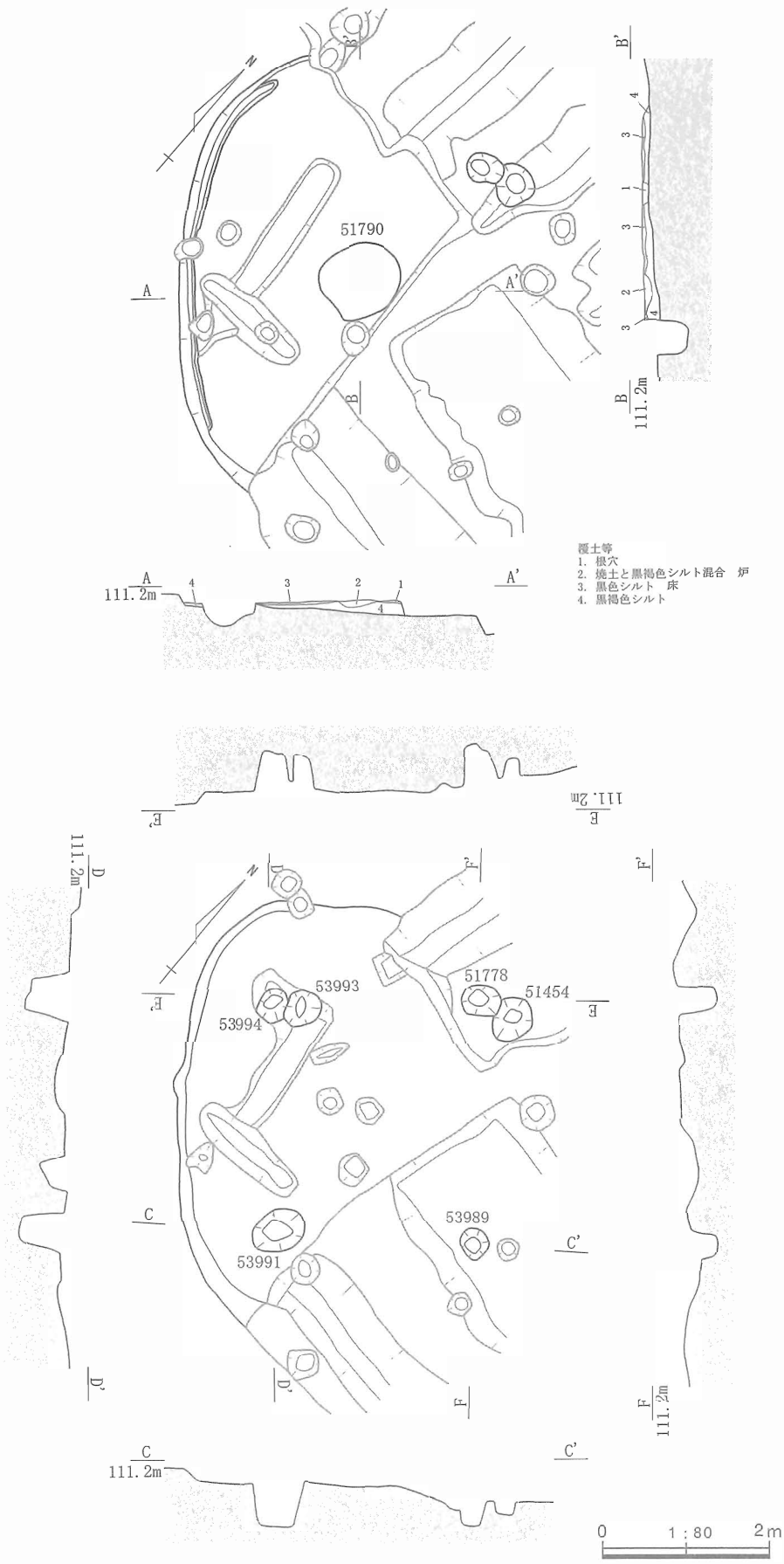
貯蔵穴は東側縁の小土坑SK54746が該当する。直径40cmの円形を呈し、深さは22cmとなる。検出面が周囲よりも下がっているので、元来の床面の高さを考慮すれば37cmほどの深さであったろう。

住居の掘方は平坦な部分を中央に残し、周囲を一様に掘り窪めている。平坦な部分はわずかで不定形な島状をなす。掘窪められた部分は幅1.8m、深さ5～24cmとなり東側で深くなる。

柱穴は4か所で検出されている。SP54750は攪乱により検出面が下がっているので小ぶりにみえるが他は直径50cm前後の円形をなす。柱穴の間隔は長手側に芯々で2.2～2.4m、短手側で同様に2mとなる。



第138図　SH54721平面・断面図（床面・掘方）



第139図　SH51790平面・断面図（床面・掘方）

SH51790（第139図）

【遺構】M21グリッドで検出された。北側から東側にかけて天地返しの撹乱により大きく壊されている。検出面は床面直上となったため、床上の覆土は把握できなかった。

床面は検出された範囲のほぼ全面にわたっている。黒色シルトを素材とし、１～３㎝の厚みで硬く敲き締められている。床面上では撹乱の影響等で柱痕は確認されていない。

炉は住居のほぼ中央に設けられている。直径45～50㎝の円形の掘方内に直径３～５㎝に砕けた焼土塊が混じる黒褐色シルトを充填するので、従来あった炉を壊して作り替えている可能性が高い。また、熱染みが及んでいる範囲は直径１ｍ前後と掘方よりもかなり広い円形をなす。炉の複数回にわたる作り替えや貼り直しによってその都度熱染みが拡大していったのであろう。

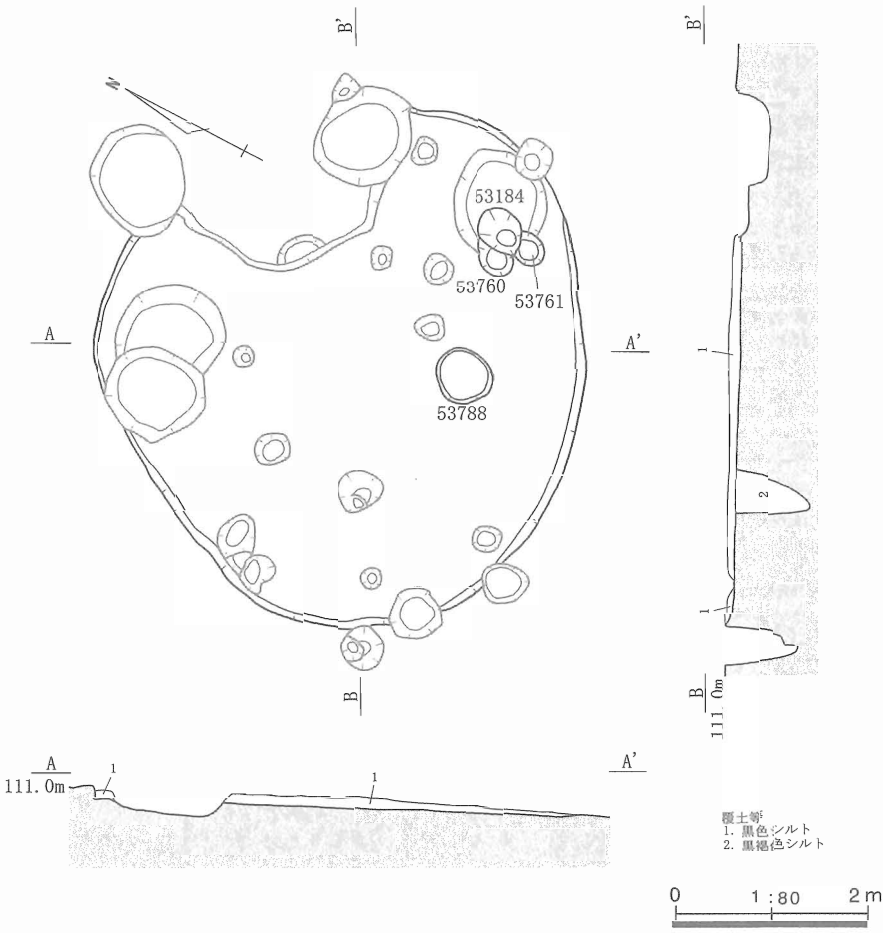
壁溝は西側の縁に検出された。幅は20㎝前後、深さ１～２㎝程度とわずかな窪みとなる。全周しているのか明らかでないが、浅いので失われている個所もあ

ると考えたい。

貯蔵穴は柱穴SP53989南側の小穴が該当するのであろうか。確証がないので図中では撹乱としてある。

住居の掘方は底面を平らに整え、溝をもたない。内部には黒褐色シルトが敷き均されている。

柱穴は4か所で検出され、北寄りの2か所では近似した規模の柱穴が切り合っている。柱を隣に挿げ替えているものと考えられる。柱穴の間隔は長手側に芯々で2.8～3m、短手側では同様に北側では内側のSP53993・51778間が2.15m、外側のSP53994・51454間が2.9mに広がる。南側のSP53991・53989間は2.35mとなりSP53993・51778間と近似する。



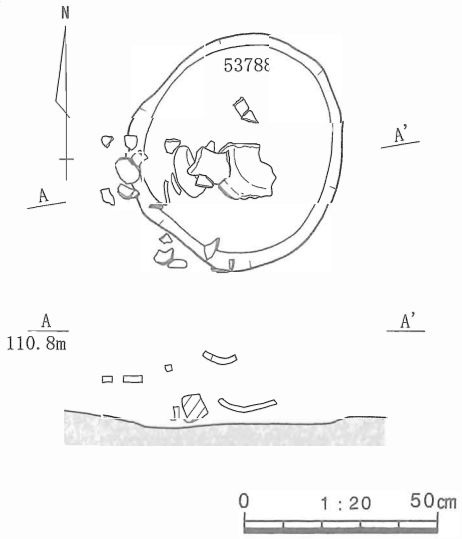
第140図　SH50507平面・断面図（掘方）

SH50507（第140～141図）

【遺構】O23～O24グリッドで検出された。一部を耕作による撹乱等によって壊されている。床面は失われており、住居の掘方上まで掘削し柱穴等の検出を試みた。

住居の掘方は底面が平らで溝をもたない。3基が切り合うSP53184等を柱穴と想定したが対になるものが見当たらない。炉・壁溝・貯蔵穴も存在を把握することができなかった。

【遺物】住居の東側に穿たれた土坑SK53788から土器が出土しているが、接合せず図示できない。壺の掌大以下の破片で礫とともに投棄されている。住居との関係は定かでないが便宜的にここに載せた。

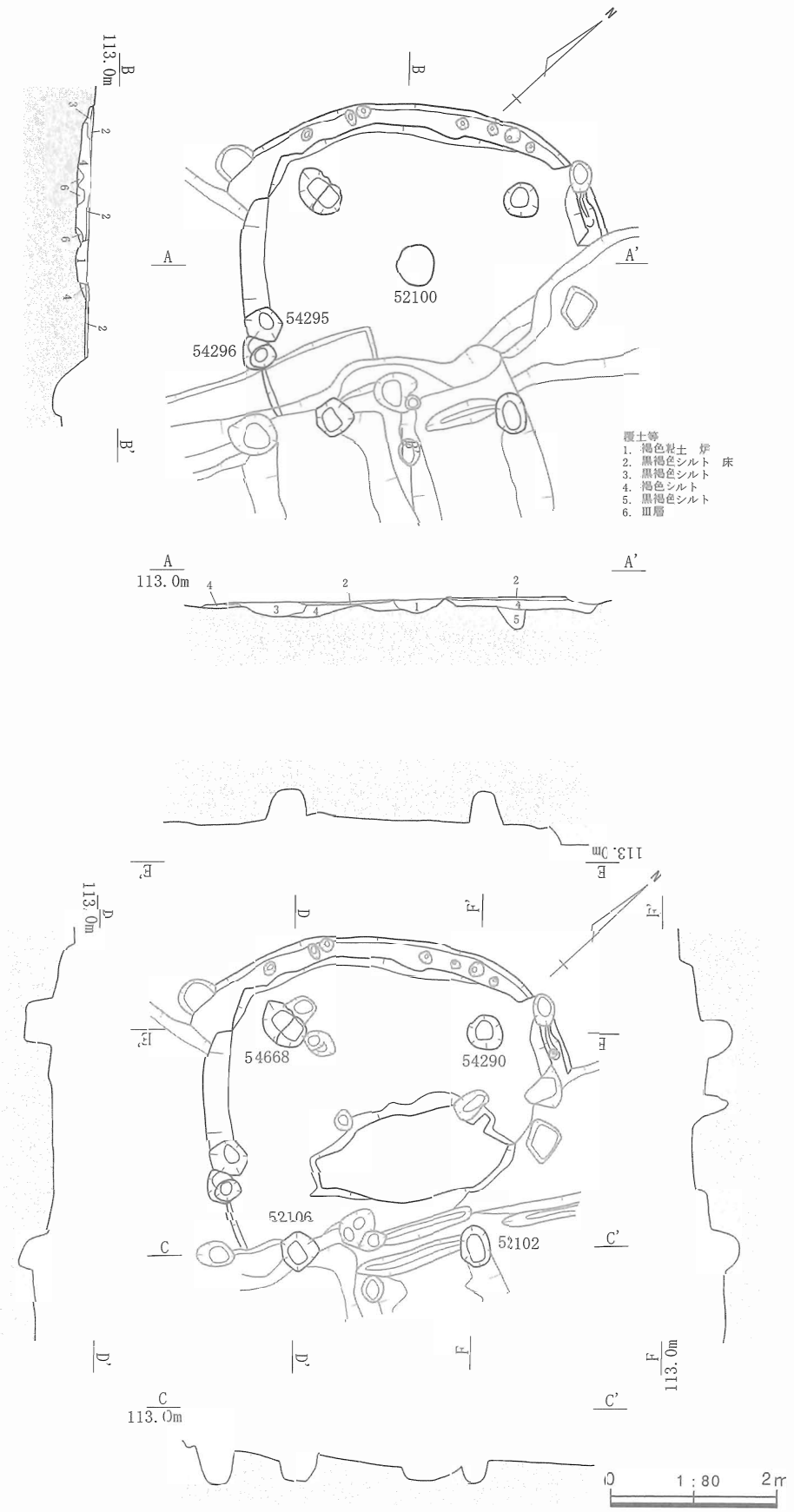


第141図　土坑SK53788遺物出土状況

SH52100（第142図）

【遺構】I24～I25グリッドで検出された。東側を改植による撹乱によって壊され、南側でSH52101と切り合っている。検出面は床面直上で、住居の覆土は把握されていない。

床面は壁溝際まで張られているので、住居全体に及んでいたのであろう。黒褐色シルトを用いI～3cmの厚みで硬く敲き締められ、北～西側の縁にはわずかな段が付く。床面上で



第142図　SH52100平面・断面図（床面・掘方）

は２ヵ所の柱穴を把握したが、掘方と同規模なため柱の周囲は床が設けられなかったものと考えられる。SP54668は切り合う同規模の２基の柱穴からなり、柱の挿げ替えを示している。柱が抜き取られた柱穴と新たに設けられた柱穴が同様に検出されたことは、抜き取られて埋められた範囲にも床の補修が施されなかったことを示唆している。

炉は住居のほぼ中央に設けられる。直径50～60cm、深さ15～18cmの円形をなす掘方に褐色粘土を床面よりやや低い位置まで充填し、上面を炉床とする。

壁溝は確認できなかった。貯蔵穴は該当する土坑が見当たらないので、設けられていないものと考えられる。

住居の掘方は中央部分を島状に残し、周囲を３～６cm程掘り窪める。SH54721と近似する方法で掘られている。

柱穴は４か所で検出された。直径42～50cmの円形状を呈し、SP54668以外は単独となる。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.6～2.8m、短手方向で同様に2.2～2.5mとなる。

SH52101（第143～144図）

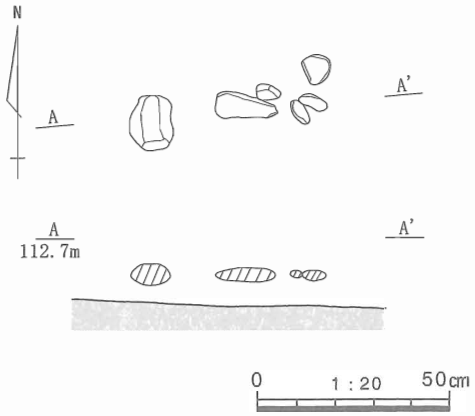
【遺構】Ｉ24～Ｊ25グリッドで検出された。南側を改植による撹乱に、北東側をSH52100によって切られている。検出面が下がったため床は失われており、掘方上で住居に伴う遺構を検出した。

炉は住居の断面で掘方の一部を検出した。直径45cm前後の円形を呈していたと思われ、内部には暗褐色シルトが充填されている。炉床はさらに上位にあったと考えられ、熱染みは認められなかった。

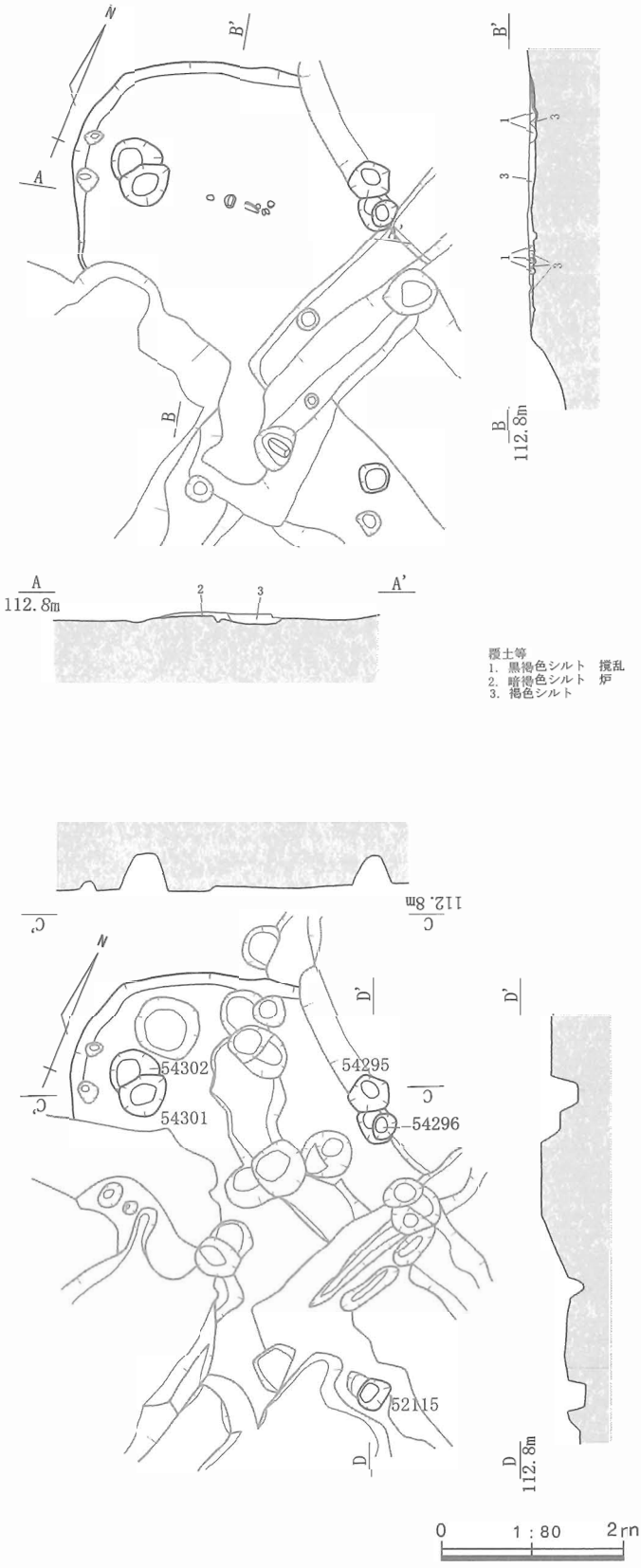
住居の掘方は底面を平らに整える。溝は底面が検出できた範囲では認められず、外では撹乱されて明らかでない。掘方上には溝状の遺構があるが住居のプランと整合せず他時期のものと判断した。

柱穴は３か所で検出し、残り１か所は撹乱により失われている。直径30～45cmの円形ないしは楕円形を呈する。北側の２か所にはいずれも切り合いがある。西側のSP54301・54302は近似した深さなので、柱を挿げ替えているものと考えられる。東側のSP54295と54296は54296が18cmほど浅く、柱の抜き取り穴の可能性がある。柱穴の間隔は長手方向に芯々で3.4m、短手方向で同様に2.5～2.7mとなる。

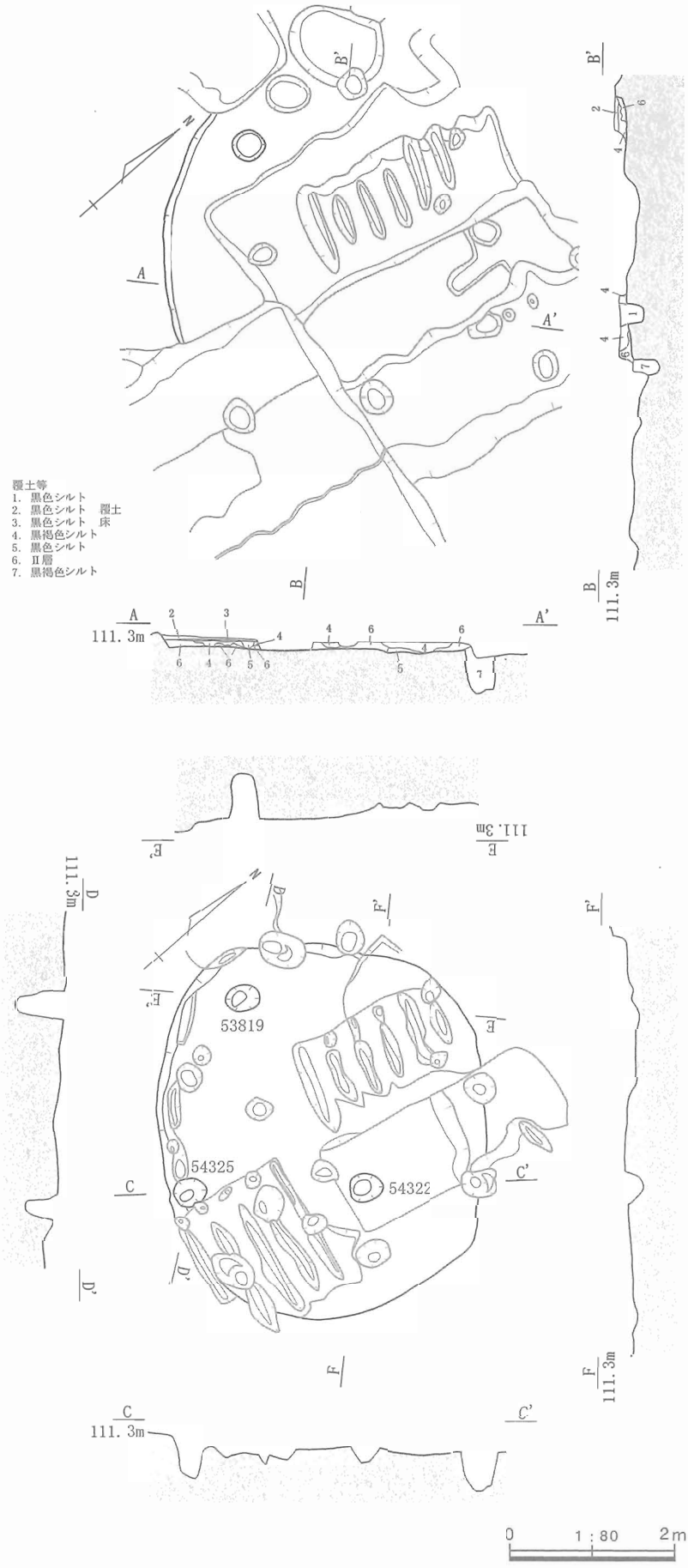
【遺物】炉の周辺から握り拳大以下の扁平な面をもつ礫が集まって出土している。性格は判然としない。



第144図　SH52101遺物出土状況



第143図　SH52101平面・断面図（埋土上・掘方）



第145図　SH53142平面・断面図（床面・掘方）

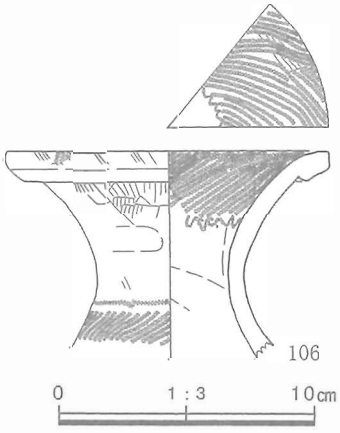
SH53142（第145～146図）

【遺構】N24～O24グリッドで検出された。西側の一部に黒色シルトの床上覆土と床面を検出している。

床面は黒色シルトを用い、1～2㎝の厚みで敲き締められる。壁溝の際まで張られているので、本来は住居の広い範囲に設けられていたのだろう。壁溝は断面と掘方上で把握されている。炉や貯蔵穴は把握できていない。炉の位置には撹乱が入っているので破壊されているものと考えられる。

住居の掘方は底面を平らに整え、黒褐色シルトで充填される。柱穴は3か所で検出したが、SP54322は浅く内側に入るので確実ではない。SP53819・54325は直径30～40㎝の円形で、間隔は2.5mとなる。

【遺物】106は覆土から出土した壺の肩～口縁部片である。外面はハケ調整の後、ナデで平滑にし肩部に縄文を施す。縄文の上端と口縁部外側にはハケ工具の刺突による文様を付ける。内面には口縁部にハケ調整の後、縄文を施している。



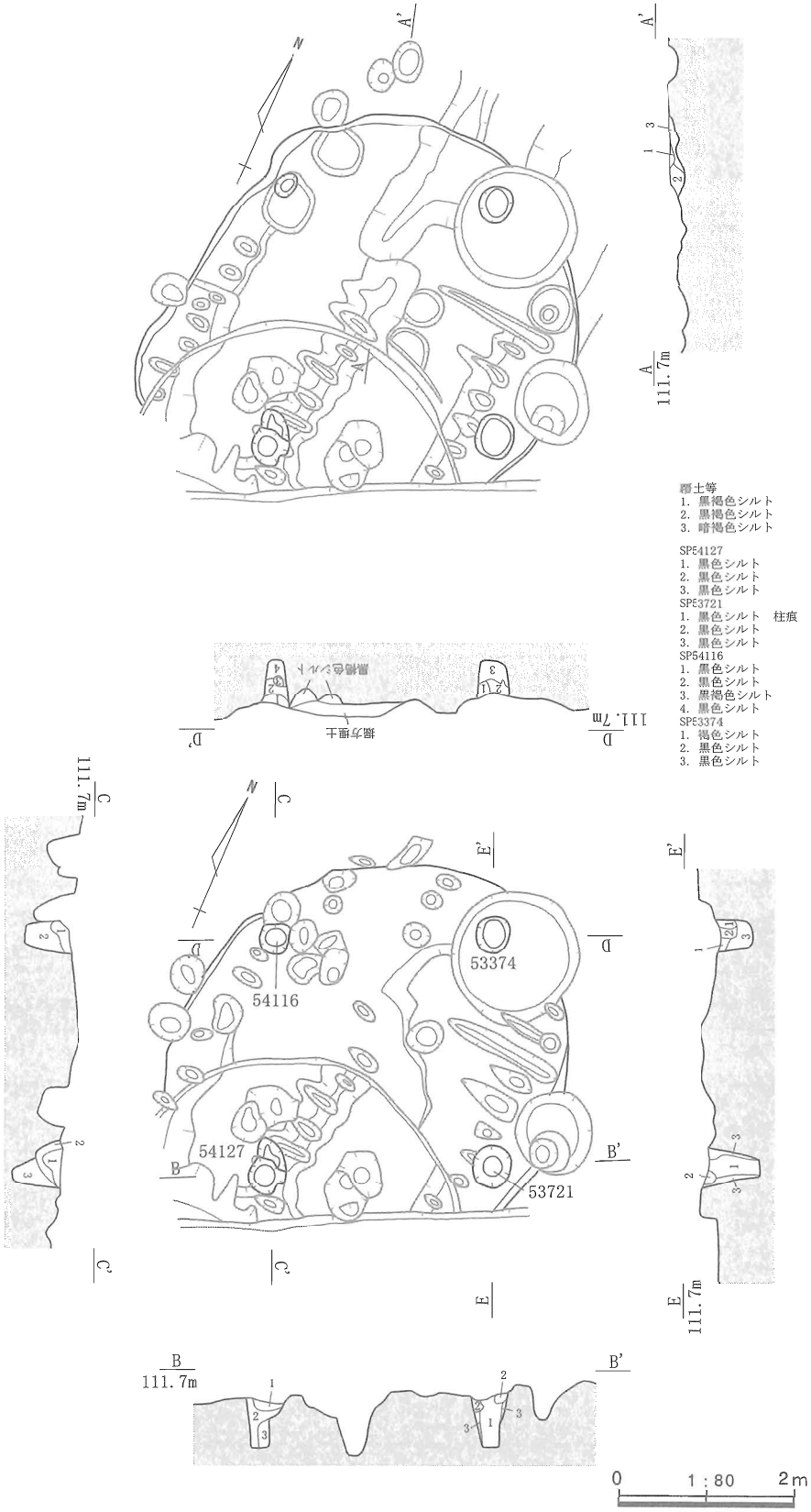
第146図　SH53142遺物実測図

SH52090（第147図）

【遺構】M25グリッドで検出された。南側でSH50001と切り合うが掘方が浅く検出面が下がったために直接的に新旧関係を把握することはできなかった。また、上面には一様に改植による撹乱が及んでおり床面も失われている状態であったが検出面で一旦記録を採ることとした。床下の埋土は黒褐色シルトを用いている。

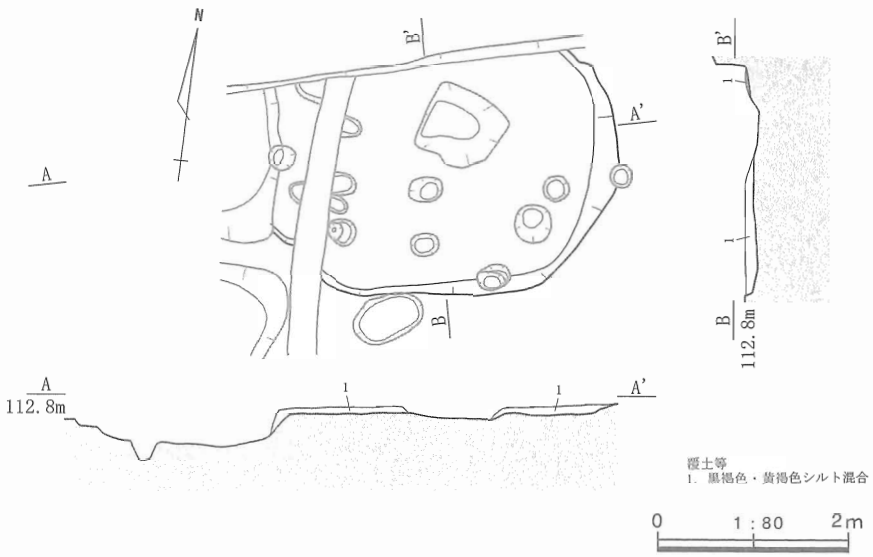
住居の掘方は底面を平らに整えるのみで、溝を設けていなかったようである。西～南西側のプランは張り出しており、撹乱の影響を誤認している可能性がある。内部には複数の色調のシルトが観察されるので、場所によって土を選んで埋めている可能性もある。壁溝・貯蔵穴は掘方上でも確認できなかった。特に貯蔵穴は該当する土坑が見当たらないので設けられていなかった可能性もある。炉も撹乱の影響で明らかでない。

柱穴は４か所で検出された。直径35～48cmの円形をなし、南西側のSP54127は切り合いをもつ。SP54127と53721の断面では柱痕が確認されている。SP54127ではB－B′断面では痕跡が確認されているがC－C′断面では明らかでない。上面にかぶる浅く切り合う小穴によって掘り取られているものと判断される。



第147図　SH52090平面・断面図（検出面・掘方）

SP53721の柱痕は幅22cm前後と柱穴に比べて太い。他の２か所については柱痕が観察されなかった。柱の掘り抜き穴も見当たらないので、柱穴内を直接掘り込んで抜き去られたのであろうか。



第148図　SH5447平面・断面図（掘方）

SH5447（第148図）

【遺構】Ｉ25～Ｉ26グリッドで検出された小型の住居である。北側は調査区外となる。床面は把握できず、床が設けられていたかも明らかでない。住居の施設は掘方の下面で検出することとした。なお、掘方の埋土は黒褐色シルトとⅢ層に起因する黄褐色粘土の混合土であった。

住居の掘方底面は平らに整えられて溝は設けられていない。南東側に円形の小穴を見出したので当初は柱穴のひとつと考えたが対が見当たらない。また、貯蔵穴も該当する土坑がない。

SH2933・2934（第149～151図）

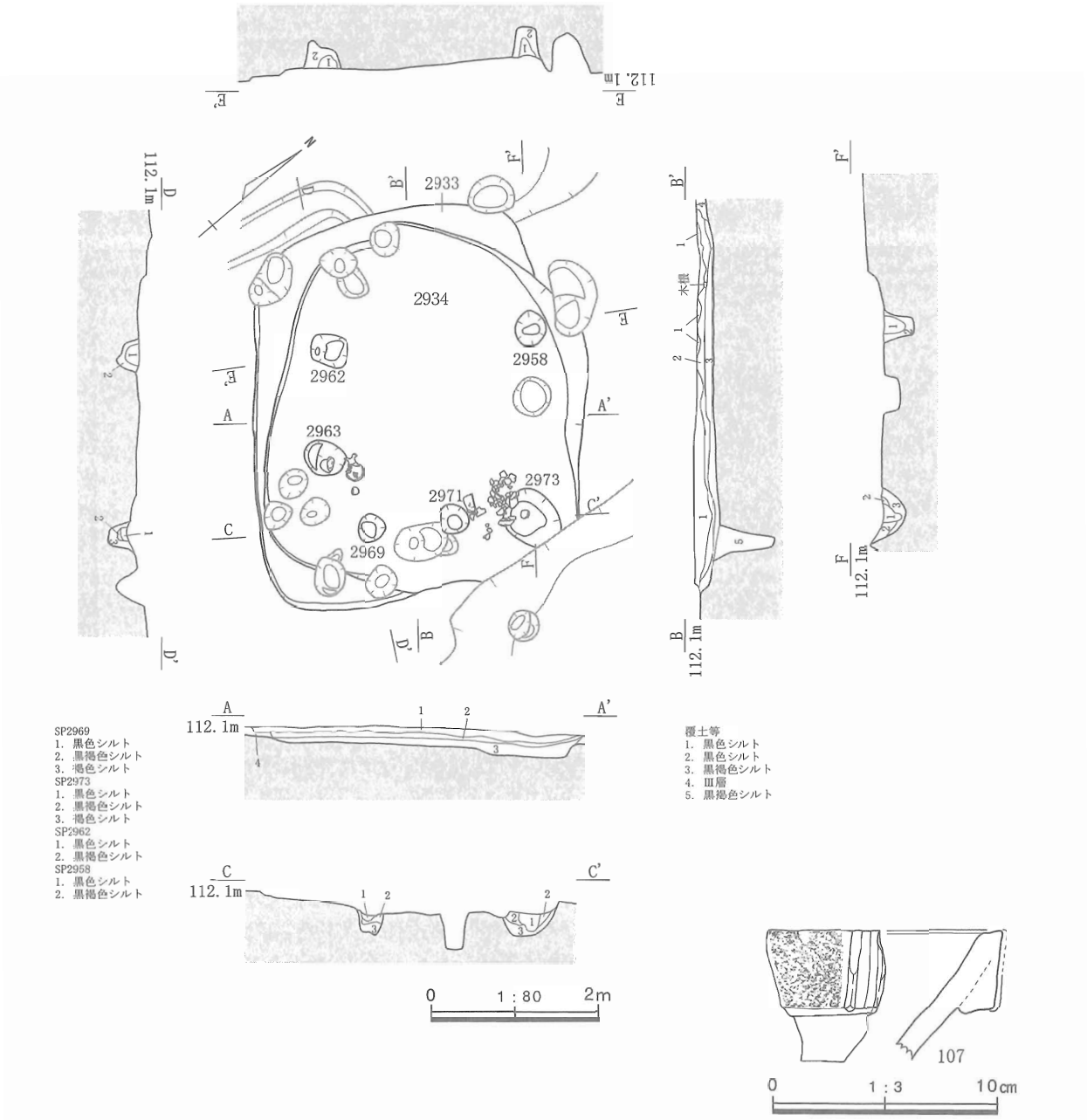
【遺構】Ｐ30グリッドで検出された。東側の一部を方形周溝墓SZ1900によって切られている。また、南東側のSH2936を壊している。床面は明らかではないが、SP2973と2963の周辺に検出面から３～５cm浮いた位置に遺物が水平に分布する個所がある。これらは床面上に打ち捨てられたものと考えられるので、検出面からさほど隔たっていない部分に床が設けられていた可能性がある。検出は掘方埋土である黒色シルト上で行い、遺物の取り上げが終了した後に掘方上で住居の施設を検出した。なお、遺物の出土位置は住居の掘方平面図中に合成している。

炉は検出されなかった。熱染みも把握できなかったが、住居の規模から炉自体が設けられていなかったとは考えにくく、炉床が床面から盛り上がるなど、掘方埋土に熱染みを及ぼさない高さにあったものと考えたい。壁溝・貯蔵穴も把握できなかった。

住居の掘方は底面を平らに整え、溝をもたない。輪郭は北東側と南側が突出した不釣り合いな形状をなす。また、北西側から南側にかけて外側に隅丸方形の掘方が巡っている。内側の住居をSH2934、外側の住居をSH2933とし分離を試みたがSH2933には該当する柱穴を見出すことができなかった。同一の柱を用いて上屋が建ち上がるものか検討を要する。

柱穴は４か所で検出した。うち３か所は直径33～45cmの円形ないしは楕円形状を呈する。東側のSP2973は短軸58cm、長軸80cm程度の土坑状をなし、他に比べても著しく大きいが断面で柱痕が確認されているので柱穴と判断した。いずれの柱穴の断面でも幅15～20cmの柱痕が把握されている。柱穴の間隔はＡ－Ａ′断面方向に1.9～2.4m、Ｂ－Ｂ′断面方向に2.1～2.3mとなる。

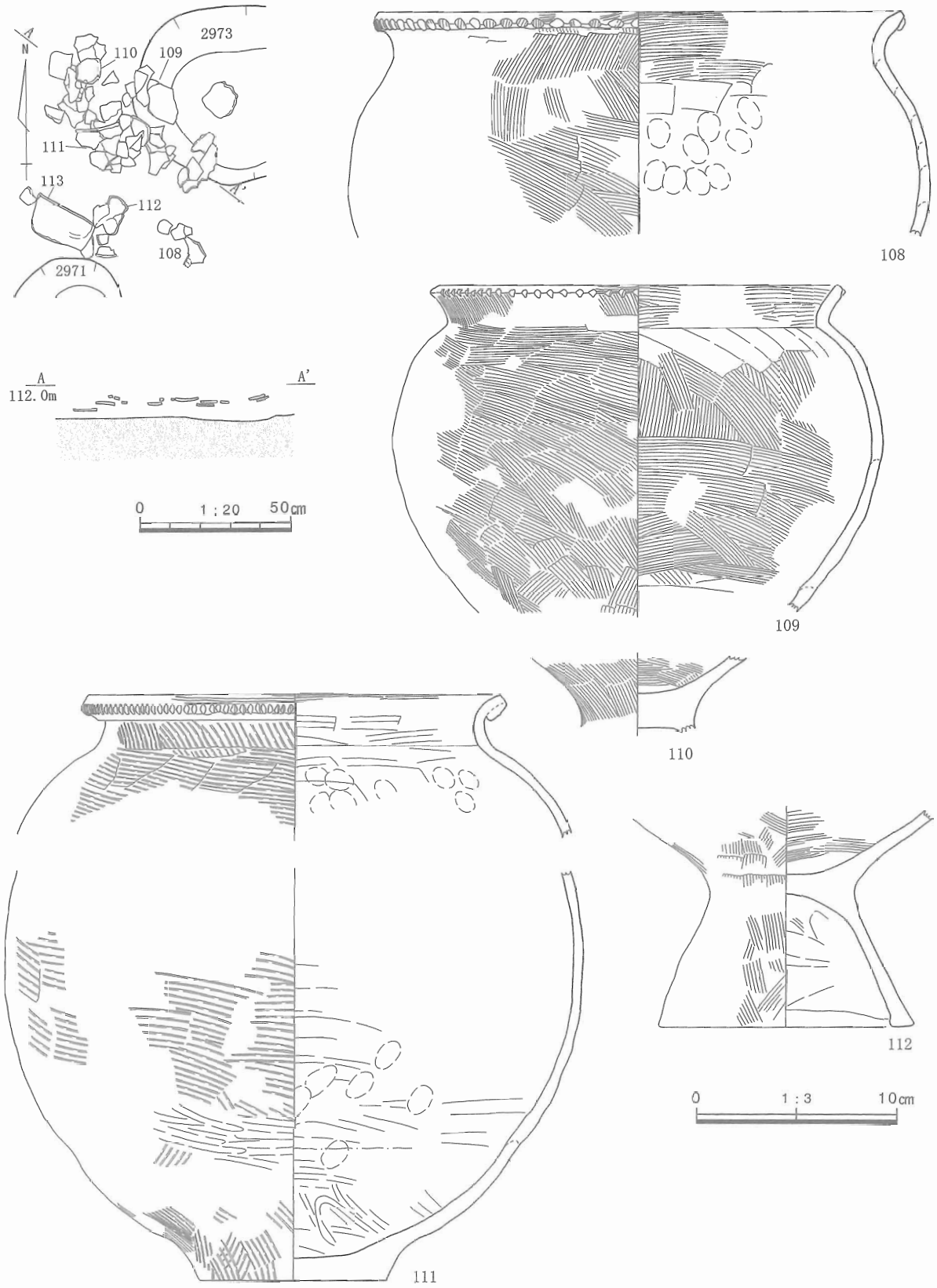
【遺物】遺物は覆土と床面に相当する位置から土器が出土している。107は覆土に相当する位置から出土した複合口縁をもつ壺の口縁部である。口縁外面に直立する面を設け、縄文を施した後に複数本で一



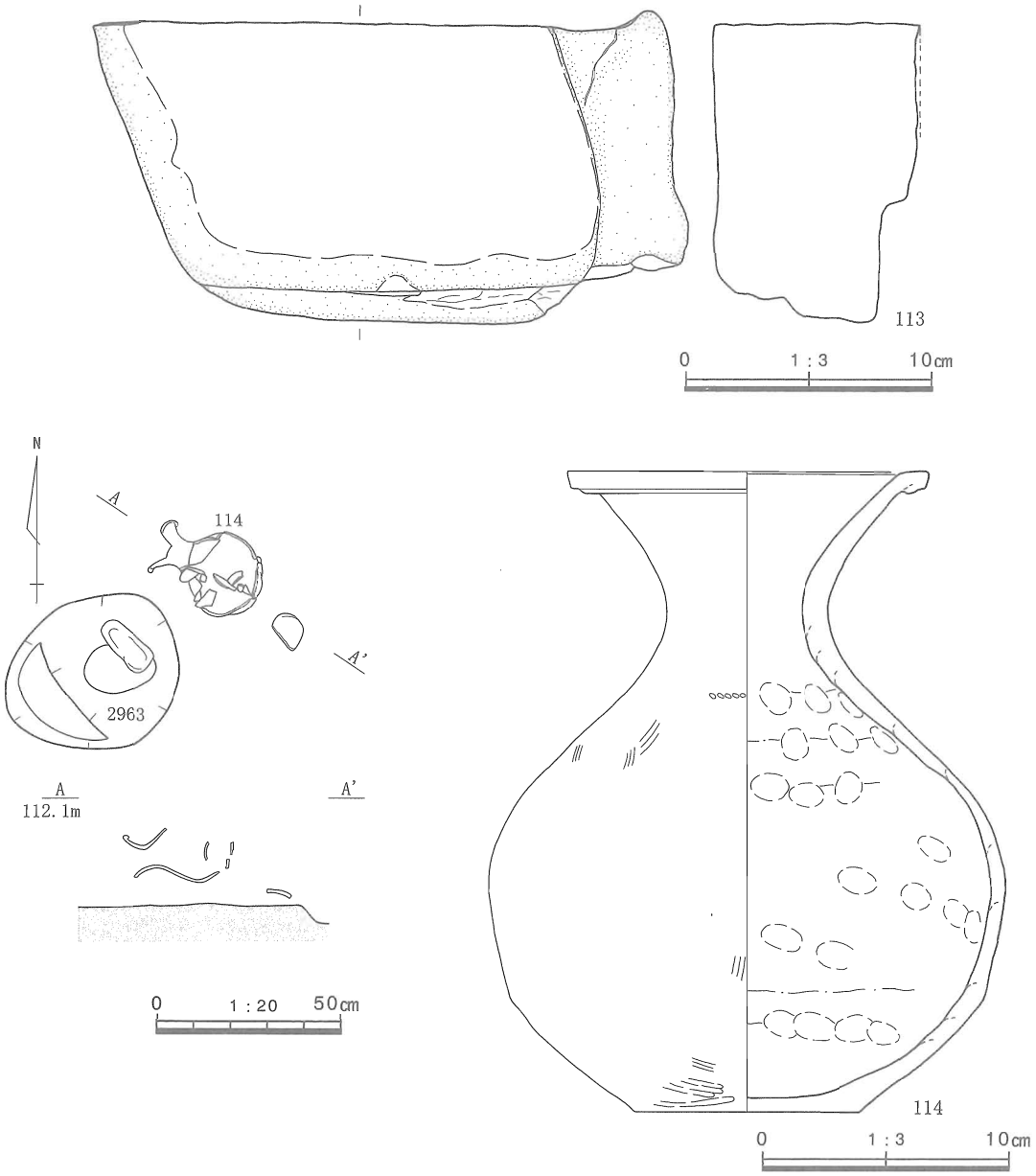
第149図　SH2934・2933平面・断面図（床面・掘方）、遺物実測図

対になる棒状の浮文を貼り付けている。全体的に風化が進んで調整痕は明らかでない。

108～112はSP2973付近から出土した甕である。SP2973の肩にかかる位置の破片も他の破片と同レベルにあり、2973が埋められて以降の同時期の遺物であることは間違いない。４個体が掌大以下に粉々に割られている。108～110・112は台付甕で、他の楕円形～隅丸方形の住居から出土する例と同様、一部が失われ完形になることはない。外面はいずれもハケ調整によって整えられる。108・109は体部半ば以下のハケ方向は共通しているが、体部上半以上は108が縦方向に変化し、109は依然として横方向に施している。この方法は、口縁部までを滑らかなカーブでつなげる108と、体部に対して口縁部が直角に取り付く109の形態差に即している。口唇端部にはいずれにもハケ工具による刻みを連続して施す。内面は、口縁部には横方向のハケ調整を施しているが、体部は108が指頭によるナデと上位にヘラナデに対して109は108が指頭によるナデを施す部分にハケ調整を加えている。底部である110は、接点はないが



第150図　SH2934・2933遺物出土状況・遺物実測図１



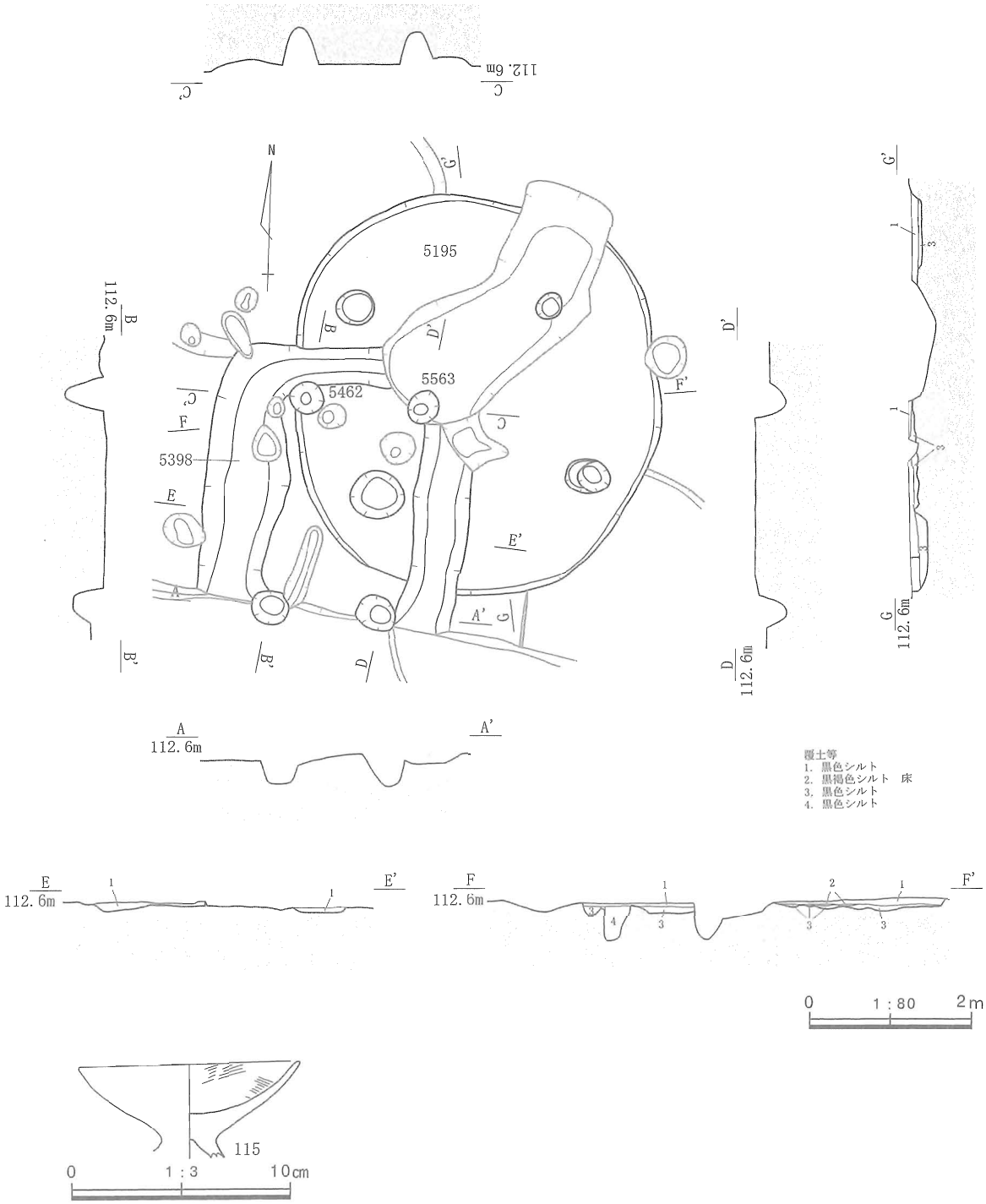
第151図　SH2934・2933遺物出土状況・遺物実測図 2

109と同一個体の可能性が高い。112は台部～底部片である。全体にハケ調整を施し、台の内面だけはナデを加えてきれいに均している。端部は内側にやや潰れている。

111は無台の鉢である。台付甕に比べ褐色にやや硬く焼けている。外面の一部に黒班が残される。外面は台付甕よりも粗いハケ工具を用いて調整し、体部過半の一部に横方向のミガキを施している。口縁部は外側に折り返し、端部に細かな刻みを連続させる。内面は口縁部と底部にハケ調整が残るが、他の部分はナデと横方向の板ナデで整えている。

113は砂岩製の台石である。108～112に近接して出土している。片面が良く使い込まれて平滑になる。使用面の端部は割れ口を巻き込んで滑らかになるので、破損後も使用されていたことが分かる。

114はSP2963の脇に横たわって出土した折り返し口縁をもつ壺である。口縁部と体部の一部が欠かれて失われている。全体的に風化が進んでいるが、外面はハケ調整の後底部を中心にミガキが施されていたようである。内面はナデ調整で整えられ、粘土紐の接合個所を中心に指頭痕が密に残される。



第152図　SH5195・5398平面・断面図（床面・掘方）

SH5195・5398（第152～153図）

【遺構】Ｉ26～Ｊ27グリッドで検出された。SH5195は楕円形状の住居で、南側に方形の小型住居SH5398が切り込むほか、耕作による撹乱を部分的に受けている。SH5195の検出面は住居の覆土である黒色シルト中となった。一方5398では床が失われて検出段階で掘方底面の一部が露出した状況であった。SH5398の掘方を掘削し記録を採った後、SH5195の調査に移行した。

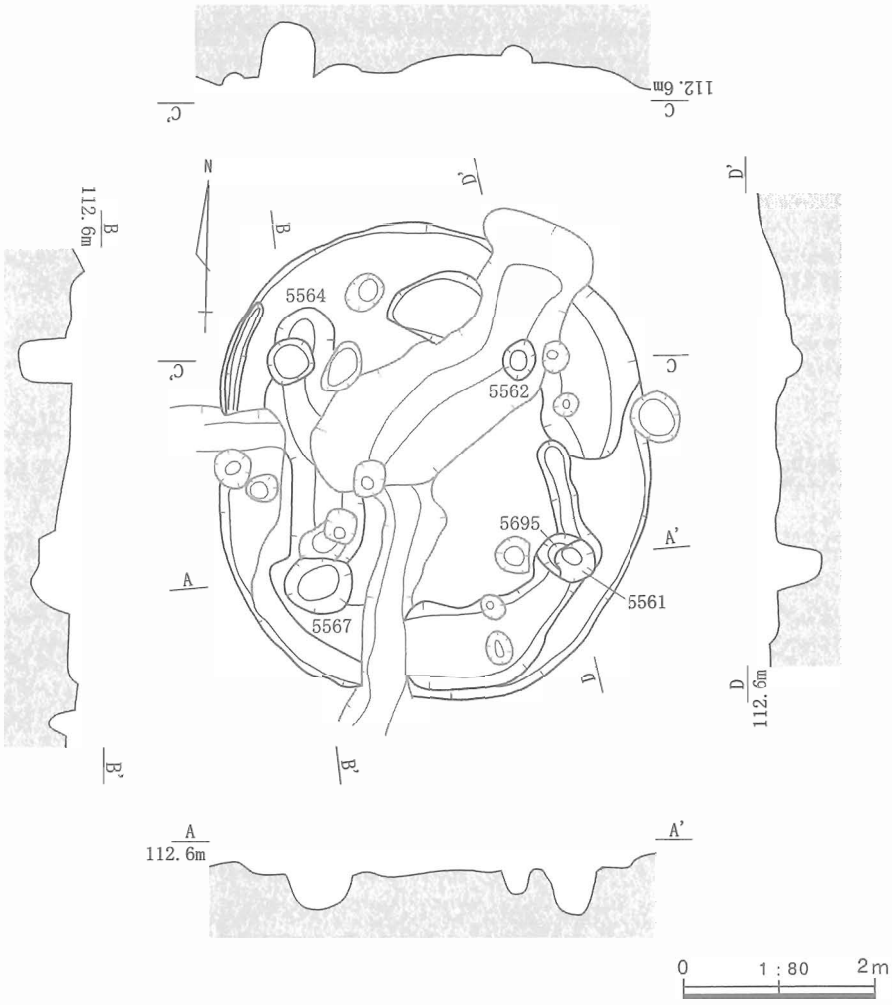
SH5195では、床面は住居の東よりの狭小な部分に検出されている。床上の覆土に撹乱を被っていない範囲にも床面が検出できなかったので、元来一部にしか設けられていなかったと考えられる。黒褐色

シルトを素材とし、1～3㎝の厚みで硬く敲き締められている。床面と同一レベルの掘方上面で柱穴を確認しているが、いずれも掘方底部で検出したものと同一程度の間口が認められているので、掘方埋土を平らに均した後に掘りこまれていることが分かる。

炉は検出できなかった。炉の想定される位置に入る撹乱によって壊されているものと考えられる。

壁溝も認められない。断面でも明らかでないので設けられていなかったことも考慮される。

貯蔵穴は設けられていない。住居の掘方上でも該当する土坑は見当たらない。



第153図　SH5195平面・断面図（掘方）

住居の掘方は底面を平らに整え、溝を備える。溝は南側に寄って北側で開くU字状のものと、北東縁に位置する半月状の二つがある。前者は0.26～0.94m、深さ3～5㎝で、南側で太く、東側で急激に狭くなる。後者は0.74～1.1m、深さ4㎝前後となる。住居の掘方内には黒色シルトが3～10㎝の厚みで充填されている。

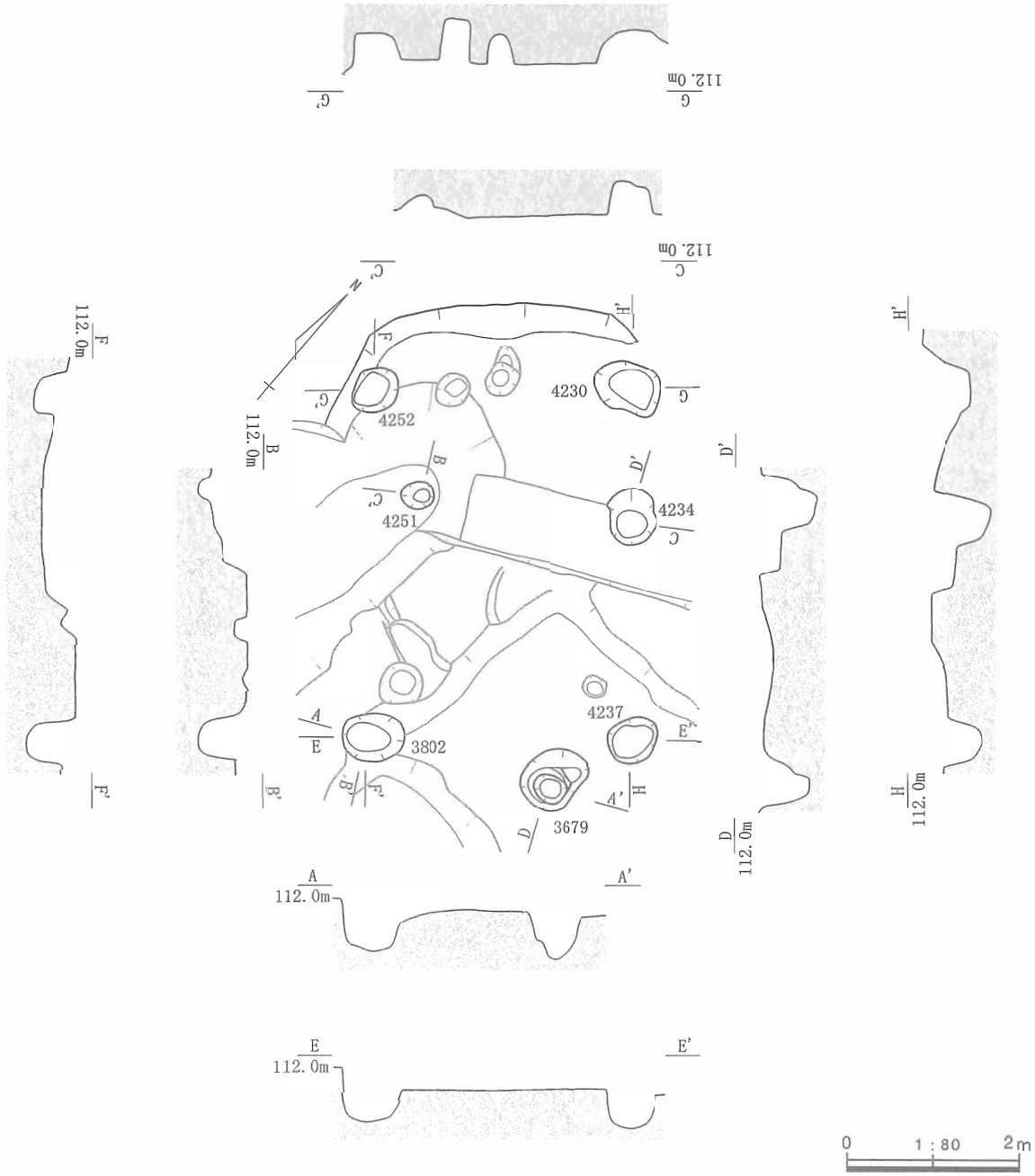
柱穴は4か所で検出された。直径48～60㎝の円形を呈し、南東にあたるSP5561のみが切り合いをもつ。SP5561は柱の掘り抜き穴と思われる小穴SP5695を西側に伴っている。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.2～2.3m、短手方向で同様に2.4～2.7mとなる。

SH5398の住居掘方は底面を平らに整えて周囲に溝を巡らせる。南側は天地返しの撹乱によって壊されているが南西隅が内側にカーブしてくるので、南面にも溝が存在したものと考えられる。溝は0.45～0.95m、深さ2～6㎝で、比較的きれいに掘られている。

柱穴は4か所で検出されている。いずれも住居掘方の溝の内法に沿う位置にあり、直径40㎝台の円形と規模も似通っている。いずれにも柱の挿げ替えや掘り抜きによる切り合いはみられない。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.6m、短手方向で同様に1.35～1.45mと揃えられている。

炉・壁溝・貯蔵穴は撹乱の影響を受けて存在を確認できない。

【遺物】SH5398の掘方埋土中から土器が出土している。115は小型の高坏の坏部である。風化が進んでいるが、内面の一部にハケ調整が観察できる。



第154図　SH1514平面・断面図（掘方）

SH1514（第154図）

【遺構】O29グリッドで検出された。北側の一部が方形周溝墓SZ1900に切られるほか、確認調査トレンチT1－5や天地返しに伴う撹乱によって多くの部分が破壊されている。住居の断面はT1－5南壁で確認しているが狭小で、調査の主体は住居の掘方上で行うこととした。住居の覆土は黒色シルトである。

床面には黒色シルトが用いられている。２cm内外の厚みで硬く敲き締められる。T1－5南壁では2.8m程の間に床の存在が認められたので、本来は広い範囲で設けられていたと推測される。

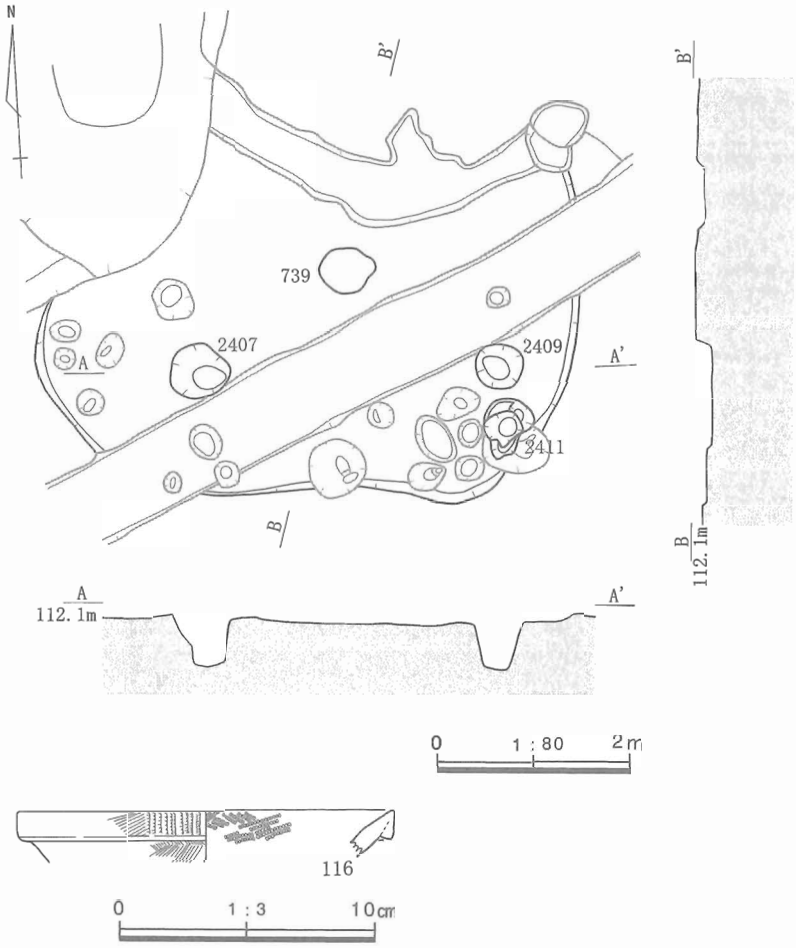
炉は平面では明らかでない。T1－5南壁では幅48cm、深さ５cmの炉の掘方とみられる落ち込みが確認されているので、住居の中央やや奥側に設けられていた可能性が高い。

壁溝は平面・断面でも検出できず明らかでない。貯蔵穴も該当する土坑が見当たらない。

住居の掘方は底面を平らに整えるのみで溝は伴っていない。

柱穴の掘方は7か所で検出した。SP3802を共有して建て替えられているものと考えられる。

当初の柱穴は直径52～70cmの楕円形をなす。SP3802・3679・4234・4251で構成される。SP4251はSZ1900の周溝内で検出されたので上端が失われているが、本来は他と同様な規模であったろう。これらの底面はおよそ同様な位置にある。SP3679は北側にやや膨らんでおり、柱の掘り抜き穴が切り合っている可能性がある。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.9～3.3m、短手方向で同様に2.2～2.5mとなる。



第155図　SH739平面・断面図（掘方）、遺物実測図

建て替え後の柱穴はSP3802・4237・4230・4252で構成される。柱穴の間口と形状は当初のものと同等で深さも近似している。それぞれに柱の抜き取り穴等の切り合いはみられない。柱穴の間隔は長手方向に芯々で4.1～4.15m、短手方向で同様に3mときれいに揃っている。建て替えの前後では、柱で囲まれる空間はおよそ1.7倍に増加したことになる。

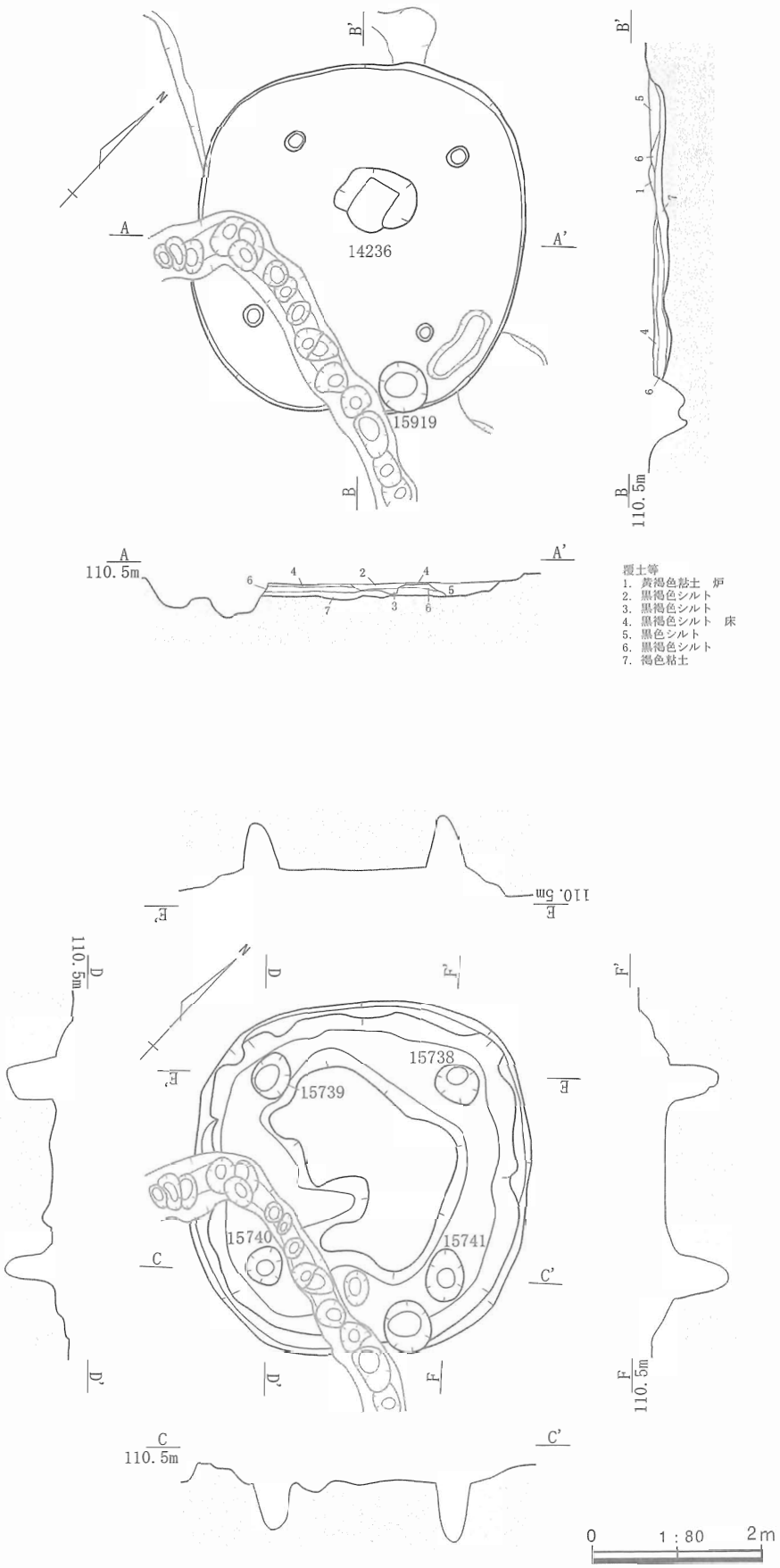
SH739（第155図）

【遺構】P30～P31グリッドで検出された。北側でSH2932と重複し、西側を方形周溝墓SZ228の周溝に切られている。また、南側の一部を確認調査トレンチT1－5に切られている。検出段階ですでに床面は全面で失われていたので、住居の掘方底面で住居に伴う遺構を検出することとした。

住居の掘方は底面を平らに整えるのみで溝は伴っていない。柱穴の位置と比べると南西側が外側へ張り出している。この部分の掘方のラインは更にSZ288の手前で内側へ入り込んでおり不自然である。切り合う遺構等と誤認している可能性も否定できない。炉は住居の中央付近に、直径48～58cmの楕円形状の熱染みとして把握することができた。住居の南東縁にあるSK2411が貯蔵穴の可能性がある。直径50cmと37cmの二つの小土坑が切り合っており、内側が42cmとより深い。

柱穴は2か所で検出した。直径49～61cmの円形状で同等の深さをもつ。柱穴の間隔は芯々で3.1mとなる。住居の北西側に想定される柱穴はSZ228の周溝により消滅しているのだろう。残り1か所はSH2932の掘方底面でも検出を試みたが特定できなかった。

【遺物】土坑SK2411から土器が出土しているが大破片ではないので、土坑が埋没する際に混入した可能性がある。116は折り返し口縁をもつ壺の口縁である。全体的にハケ調整で器面を整えた後、口唇部外面にはハケ工具による刺突を連続して施す。口縁部内面には縄文を施している。



第156図　SH14236平面・断面図（床面・掘方）

（３）隅丸方形を呈する竪穴式住居

SH14236（第156～157図）

【遺構】Ｉ10～Ｊ11グリッドで検出された。一部をL字型に曲がる撹乱によって切られているが、全体の形状を捉えることができた。検出面は床面直上であったので床上の覆土は把握できていない。

床面は黒褐色シルトを用い、５㎝内外の厚みで硬く敲き締められている。北側～東側で住居の掘方があらわになっている部分があるので、縁辺部には床が張られていなかった可能性がある。また、床面上では柱痕と考えられる直径20～28㎝の円形のプランを４か所検出した。南北方向の断面をみると、北寄りに掘方埋土の上面が南側の床面よりも６㎝程度高まっている部分がある。この部分の床は検出できなかったが、あるいは南側の床よりも一段高く作られているのかもしれない。

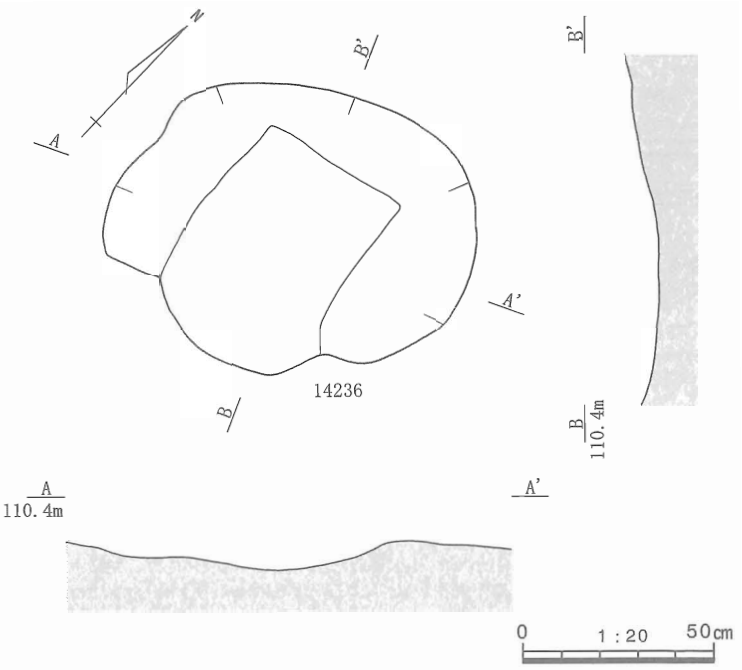
壁溝は認められない。掘方上でも把握できなかったので、設けられていなかった可能性もあろう。

炉は住居の中央奥側に設けられている。直

径70cm前後、深さ６cmの円形状の掘方内に黄褐色の粘土を貼り込み上面を炉床とする。炉床には長軸60cm、短軸42cmの長方形状の平坦面が設けられる。床面より５cm程度低く、周囲が若干盛り上がっている。住居の大きさに比べて炉は大きく、やや不釣り合いにもみえる。なお、炉の外縁に小さな穴が複数切り込むが、これは根跡である（図版編図版116-１）。

貯蔵穴SK15919は東の隅に設けられる。直径55～60cmの円形状で、床面からは40cmほどの深さがある。

住居の掘方は底面を平坦に整え、周囲に溝を備える。溝は0.6～1.9m、深さ１～７cmの規模があり、全周する。南側が最も幅広となり、一部が内側にこぶ状に突出する。外縁は住居の立ち上がりから離れており、この間に５～10cmのテラス状の段が残っている。掘方の底面には厚さ10cm内外で黒褐色シルトを敷いている。溝部分がこれを切って立ち上がるので、一旦掘方内を平らに均した後に改めて溝を掘削しているものと考えられる。



第157図　炉14236平面・断面図

柱穴の掘方は４か所で検出された。直径45～60cmの円形ないしは楕円形を呈し、いずれにも柱穴や柱の掘抜き穴による切り合いはみられない。床面上の柱痕の存在からも、柱は抜かれずに床面相当の高さで切り取られているのかもしれない。柱穴の底面は近似した深さにあって、尖底状に掘られている。柱穴の間隔は、長手方向に芯々で2.3～2.4m、短手側で同様に2.2mとなる。

SH15589（第158図）

【遺構】H10グリッドで検出された一辺３m内外のごく小さな住居である。南東側のおよそ1/2がSH14550と切り合っている。検出面が床面下まで下がった上、南に向かって下る地形なのでSH14550と重複する部分は掘方も検出できない状況であった。

掘方埋土は黒褐色シルトでⅡ層に起因する暗褐色粘土粒を含んでいた。したがって掘方の掘削土をそのまま利用していると考えられる。柱穴は定かでない。調査時には北側隅に検出した小穴を柱穴と考えたが、対になるものがない。主柱穴をもたない構造であったと考えられる。

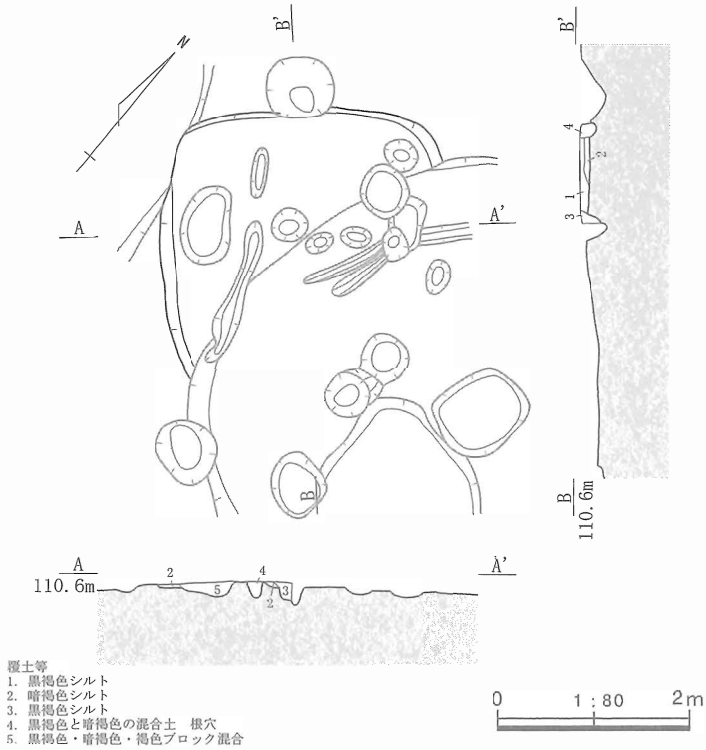
炉・壁溝も定かでなく、貯蔵穴も設けられていない。

SH13641（第159図）

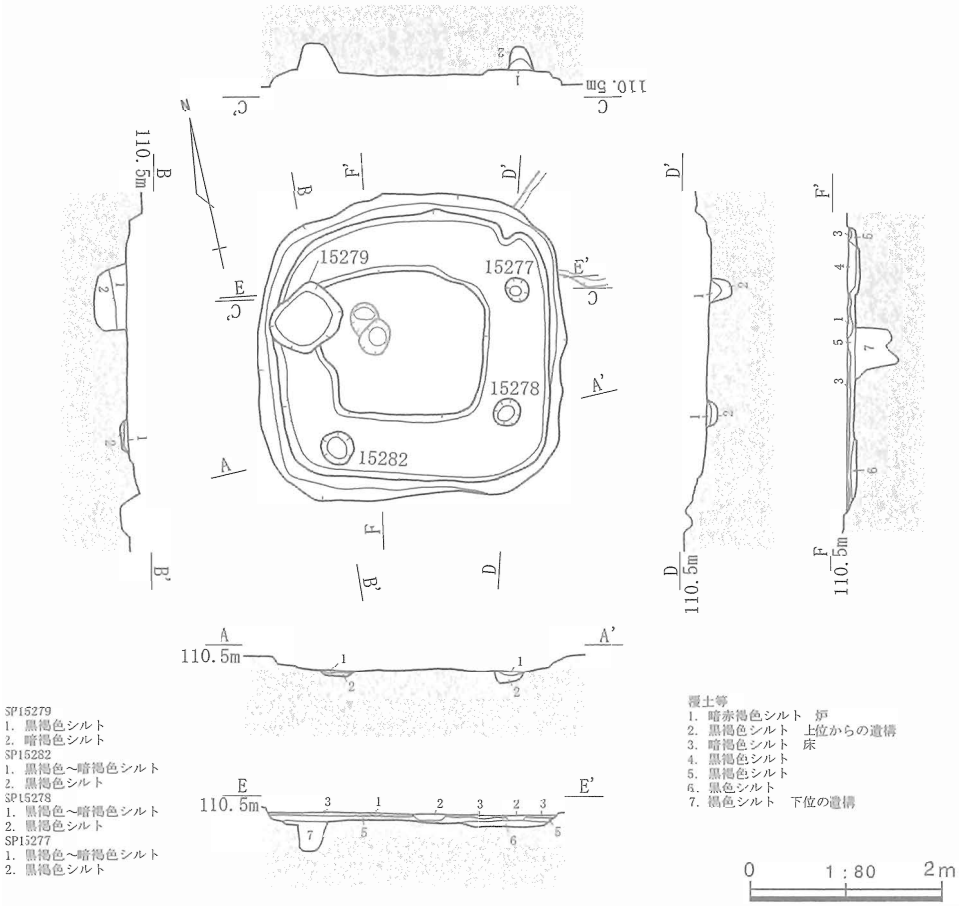
【遺構】Ｅ８～Ｆ９グリッドで検出されたSH15589と近似した規模の住居である。断面では確認したものの平面的に床面を検出することができなかったので、掘方底面まで掘削し構造を確認した。

住居の掘方は底面を平らに整え周囲に溝を設ける。溝は幅0.6～0.8m、深さ４cm内外となる。内部には暗褐色シルトを充填する。

柱穴は３か所で検出された。１か所はやや下る時期の建物の柱穴SP15279によって壊されている。直径22～34cmの円形を呈し、深さも一律ではない。その上SP15282は他の二つよりずれた位置にある。柱穴の間隔は南北方向に芯々で1.3m、東西方向に1.8m以上となる。



第158図　SH15589平面・断面図（掘方）



第159図　SH13641平面・断面図（掘方）

SH14306（第160図）

【遺構】G11～H11グリッドで検出された。検出面が床面直上となり、床上覆土は確認できなかった。

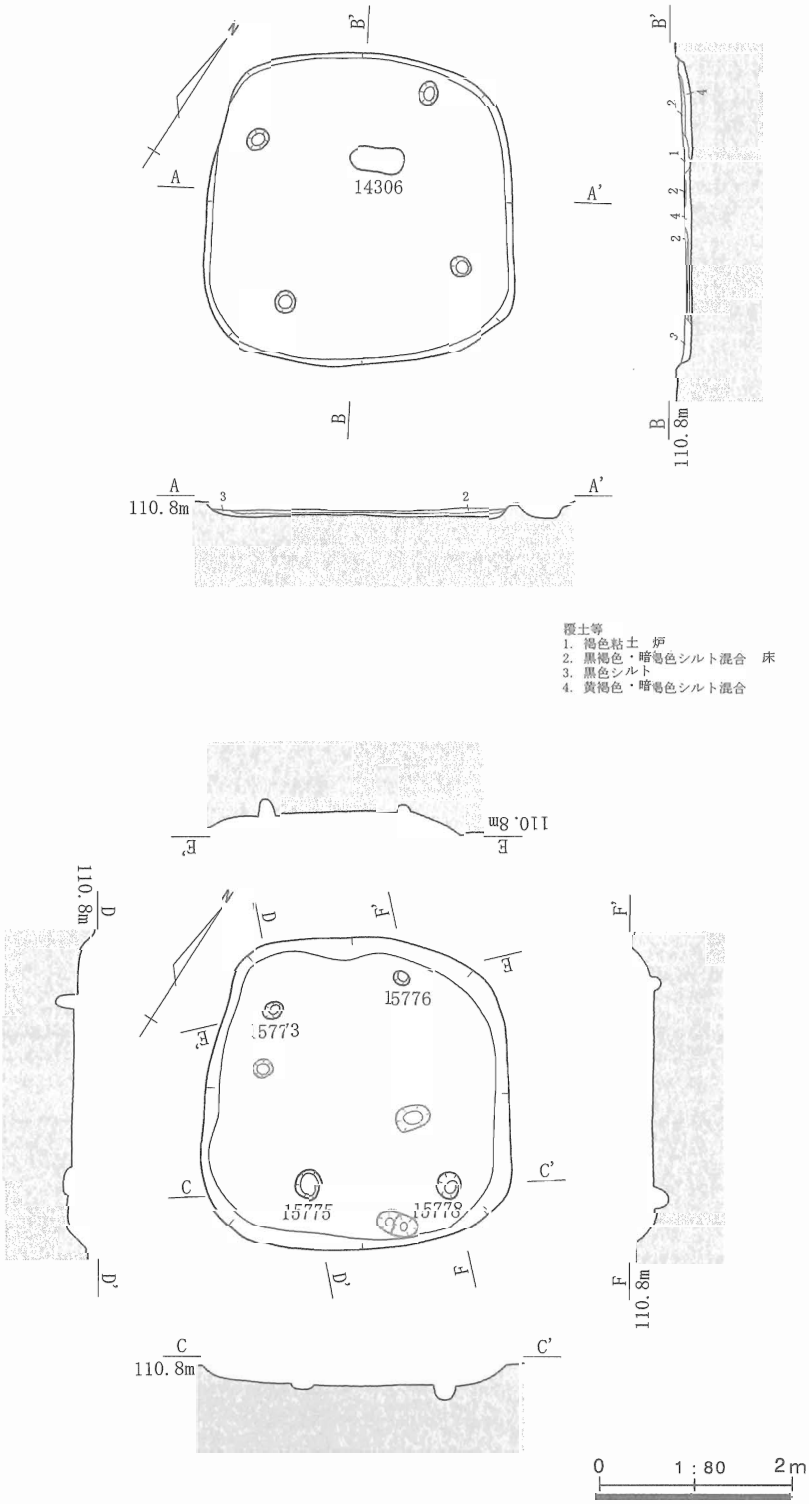
床面は黒褐色～暗褐色シルトを用い、２～４cmの厚みで硬く敲き締められている。北～南西縁は立ち上がりから15～20cmの間隔で床が設けられていない個所が帯状にある。床面上からは柱痕と考えられる直径16～20cmの円形のプランを４か所検出した。柱穴の掘方の間口と近似するので、柱の周辺は床が設けられていなかったと考えられる。

炉は住居の中央やや奥側に設けられている。直径40～60cm、深さ５～７cmの楕円形の掘方内に褐色粘土を充填する。上面は直径20～58cmの長楕円形に焼けており、掘方の一部だけを利用しているようである。

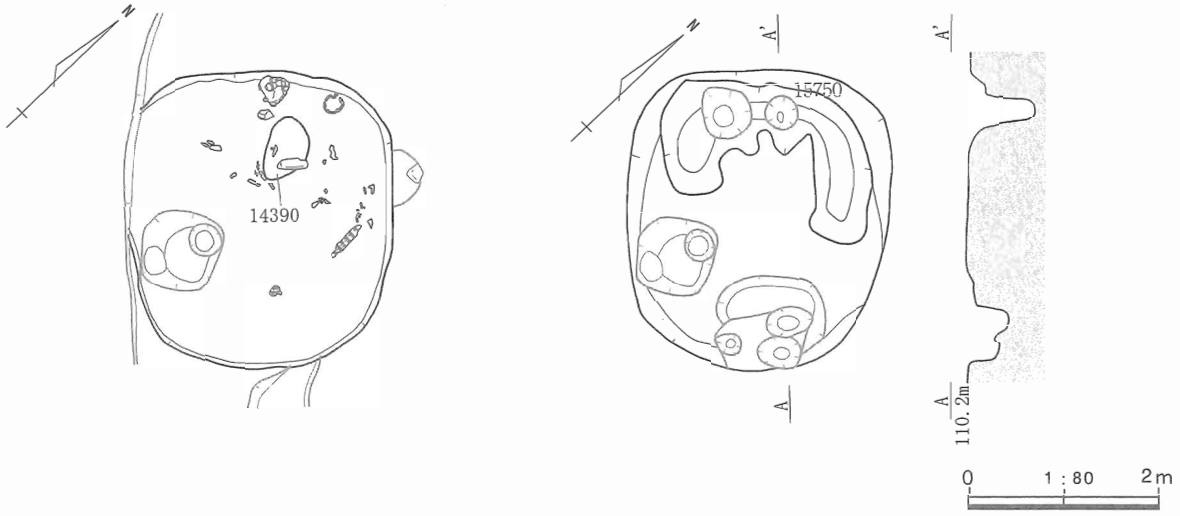
壁溝・貯蔵穴は掘方上でも検出できなかったので設けられていなかったといえる。

住居の掘方は底面を平らに整え、溝は設けられていない。

柱穴の掘方は４か所で検出されたが、住居のプランとは中軸線が平行しない位置にある。いずれにも挿げ替え痕や柱の抜き取り穴は確認されない。直径14～30cmとごく小さく、華奢な柱であったことが想像される。柱穴の間隔は、長手方向に芯々で1.9～2.3m、短手方向で同様に1.4～1.5mとなる。



第160図　SH14306平面・断面図（床面・掘方）



第161図　SH14390平面・断面図（床面・掘方）

SH14390（第161～162図）

【遺構】Ｊ11グリッドで検出された。SH14250の範囲西側にはまり込むように造られている。このため、調査段階ではSH14250とうまく分離することができず、住居の断面をとることが叶わなかった。床面直上には上屋の構造物であったと考えられる炭化材が散乱しており、消失しているものと考えられる。また、床面直上では柱痕を見出すことはできなかった。なお、南西側に掘立柱建物SB80012の柱穴SP15749が床面の一部を穿っている。

床面は炉が残存することから北側の一部に張られていた可能性がある。

炉はおよそ住居の中軸線状にあるが、北側の壁面まで45cmとかなり偏った位置にある。粘土を貼り込んで炉床を作るが、同時に長さ30cm、幅10cmの自然礫が平坦面を上にして埋め込まれている。炉床は平坦で、焼け締まっている。

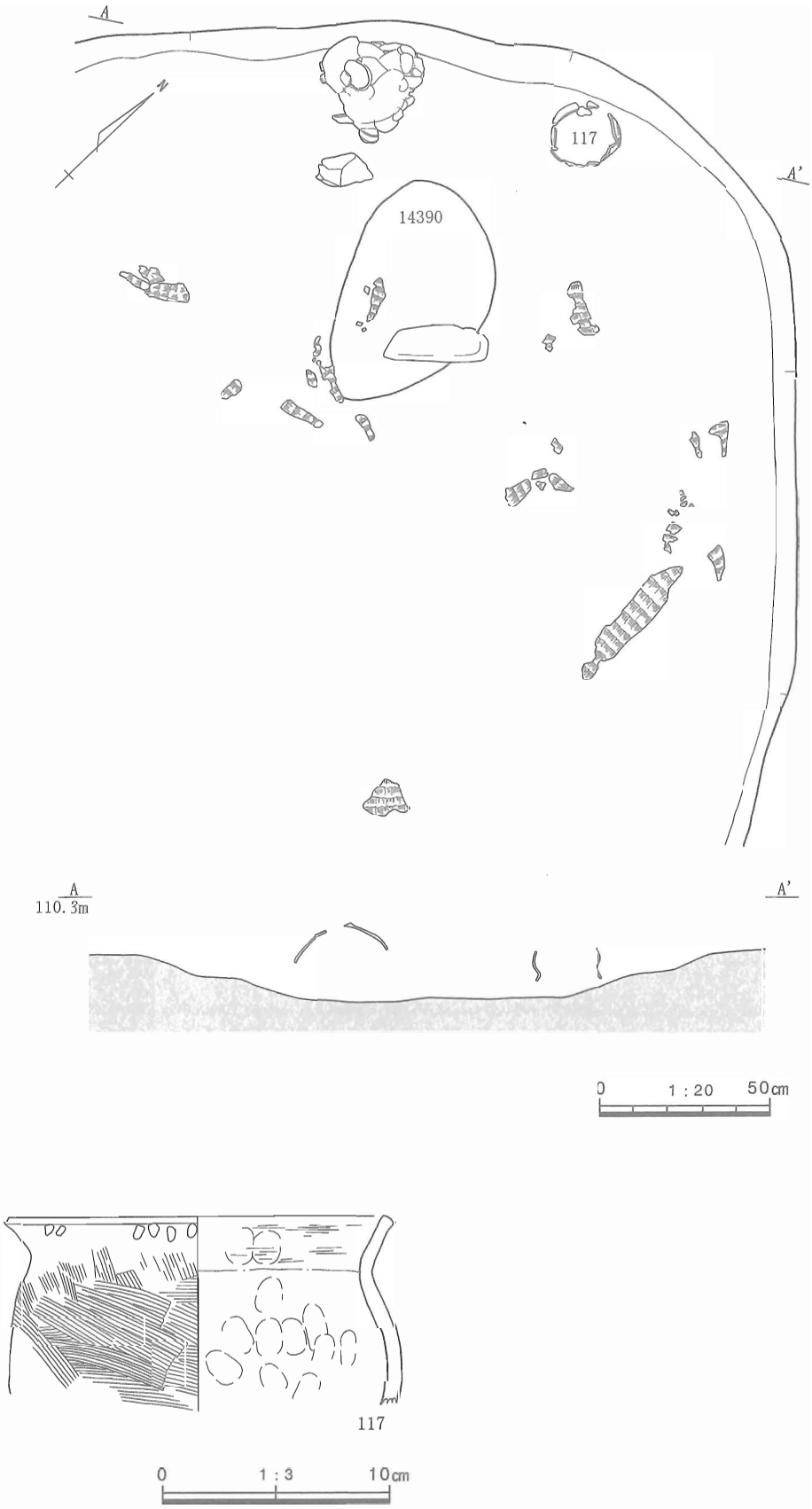
壁溝・貯蔵穴は設けられていない。小型の住居に相応したシンプルな作りである。

住居の掘方は底面を平らに整え、北西側に溝を設ける。南北の高低差はおよそ２cmで、水平に掘ろうとした意図がうかがえる。溝は幅0.6～0.7m、深さ１～10cmで、南東側に開くU字型となる。溝の外側は住居の立ち上がりに接しておらず、10～30cmの幅でテラス状に残されている。

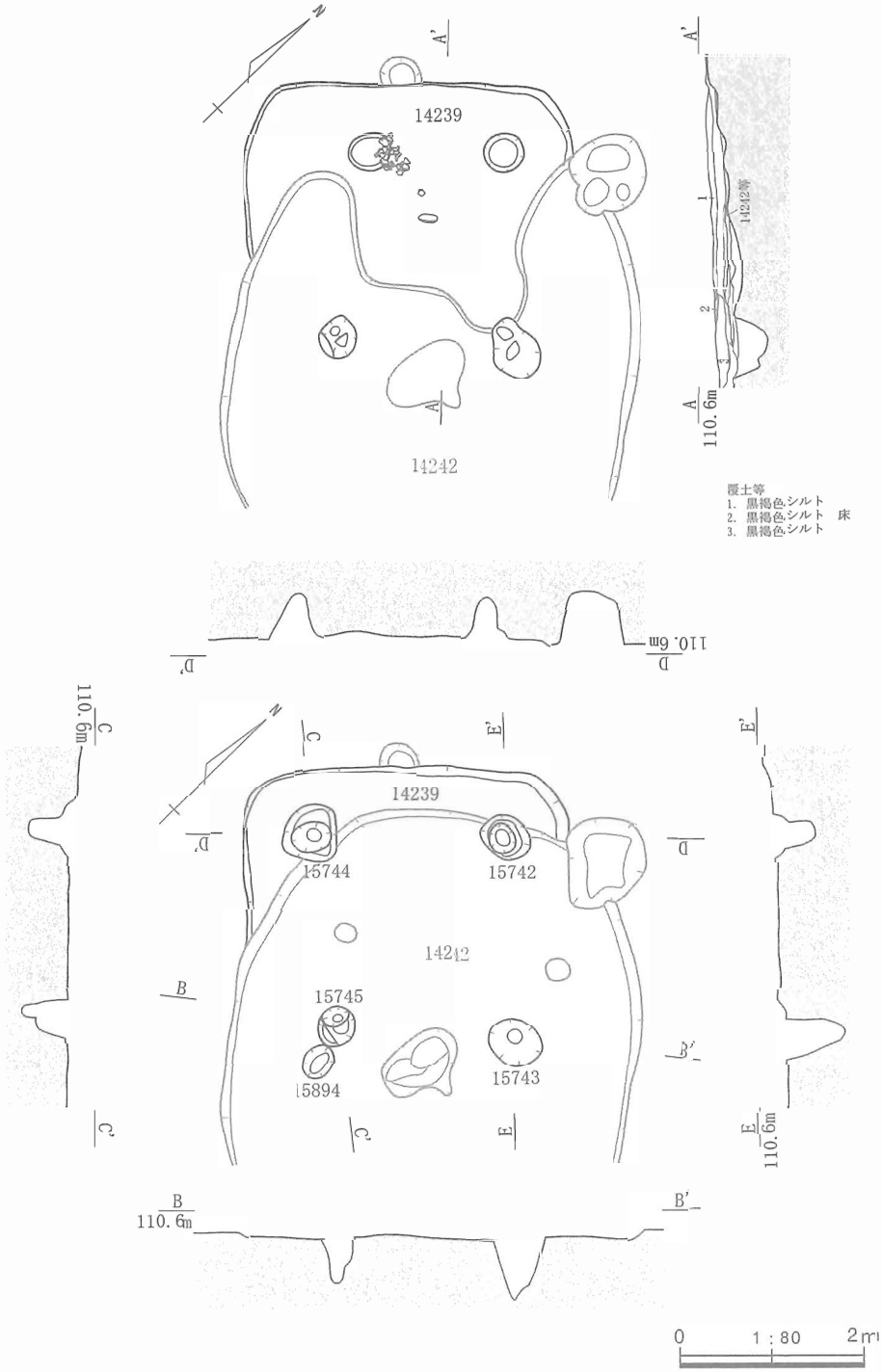
柱穴の掘方は判然としない。柱穴の可能性のあるSP15750は直径35cmで60cmほどの深さがある。南東側の小穴群と対になって２本の主柱穴で上屋を保持しているのかもしれないが、南西側の小穴群は検出面が明確でないので今回は便宜的に撹乱扱いに図示している。あるいは床面に柱を設けない構造の上屋であったのかもしれない。

【遺物】炉の北側の床面上から土器が出土している。図示した117と西側に隣接してもう１個体がいずれも逆位で置かれていた。これらは当初同一個体とも考えたが、直径が整合しないので別個体と判断した。西側の個体は口縁部～体部上半と台部が失われている。壁際に片付けられていたのであれば口縁部を伴うはずなので、住居を放棄する際に意図的に割り取られて置かれているものと考えられる。体部過半以下が失われる117も同意義であろう。

117は台付甕の口縁部～体部片である。外面は体部を斜め方向のハケ調整で整えている。口縁部下位のハケ調整は縦方向であるが体部のハケが切っており、口縁部の調整後再び体部の調整を行っていることが分かる。口唇部にはハケ工具を用いた刺突を連続して施している。内面は体部をナデ調整で平滑に整えた後、口縁部に横方向のハケ調整を加える。体部～口縁部には指頭痕が多く観察される。



第162図　SH14390遺物・炭化物出土状況、遺物実測図



第163図　SH14239平面・断面図（床面・掘方）

SH14239（第163～164図）

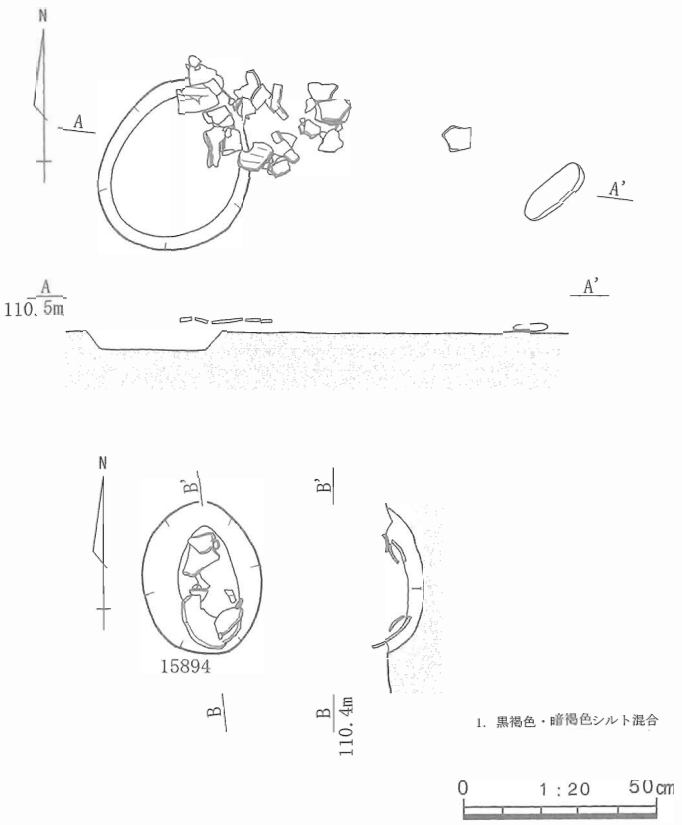
【遺構】Ｉ11～Ｊ11グリッドで検出された。南西側でSH14242と切り合っている。形態的にはSH14242が古く、断面でもSH14242の炉半ば付近に南東側の立ち上がりが来ることは明らかであったが、平面的にうまくプランを押えることができなかった。したがって、掘方埋土が確実に把握できた範囲のみを一旦図化し、失われた部分はSH14242の掘方上でともに検出することとした。

末面は明確に張られていない。一部に硬化した層位（断面図中２層）を把握したが、平面的な広がりは確認できなかった。床上の覆土と考えられる黒褐色シルトは６cm程度の厚みで残存しており、この層

位を除去した下位からは土器片が集中して出土していることからすれば、２層の延長上が床として利用されていたと考えることができる。柱穴は遺物が出土したと同レベルでSP15742の上面を把握している。

壁溝や炉は認められなかった。掘方上でも把握することができず、設けられていなかったと思われる。

貯蔵穴は柱穴SP15745に接する位置の小土坑SK15894が該当すると考えられる。長軸40cm、短軸30cmの楕円形をなし、10cmの深さがある。内部には掌大の土器片が複数残されていた。SH14242の掘方上で検出したため、本来の深さは更に15cm程度深かったものと考えられる。当遺跡の例では貯蔵穴は通常入口の右手に設けられているので、この住居の入口は南西側に面していたものと推測される。



第164図　小土坑SK15894等遺物出土状況

住居の掘方は、底面をSH14242の覆土と峻別することが困難であったため多くの部分で未確認となった。断面では掘方埋土にあたる層位が確認できていないので、おそらく溝を設けない平らな底面であったろう。柱穴の掘方は４か所で検出された。長軸60cm、短軸40cmの円形ないしは隅丸方形状を呈する。SP15742と15744はより間口の広い土坑の中央部をさらに掘窪めているようにみえる。また、SP15745は中央部分のみが15cm程深くなる。柱根が当たる部分のみをさらに掘窪めたのであろうか。柱穴の間隔は長手方向が芯々で２～2.2m、短手方向が同様に２～2.1mとなる。

【遺物】遺物は床面に相当する位置とSK15894の内部から土器が出土している。いずれも密に出土しているがほとんど接合せず、図化することができなかった。

床面に相当する位置から出土した土器は同一個体の台付甕である。体部片のみで一辺10cm以下に粉々に割れた状態であった。破片が密集するのでこの場で割られたものと考えたいが、口縁部・台部片を割り取った破片を改めてこの場で割っているのであろうか。

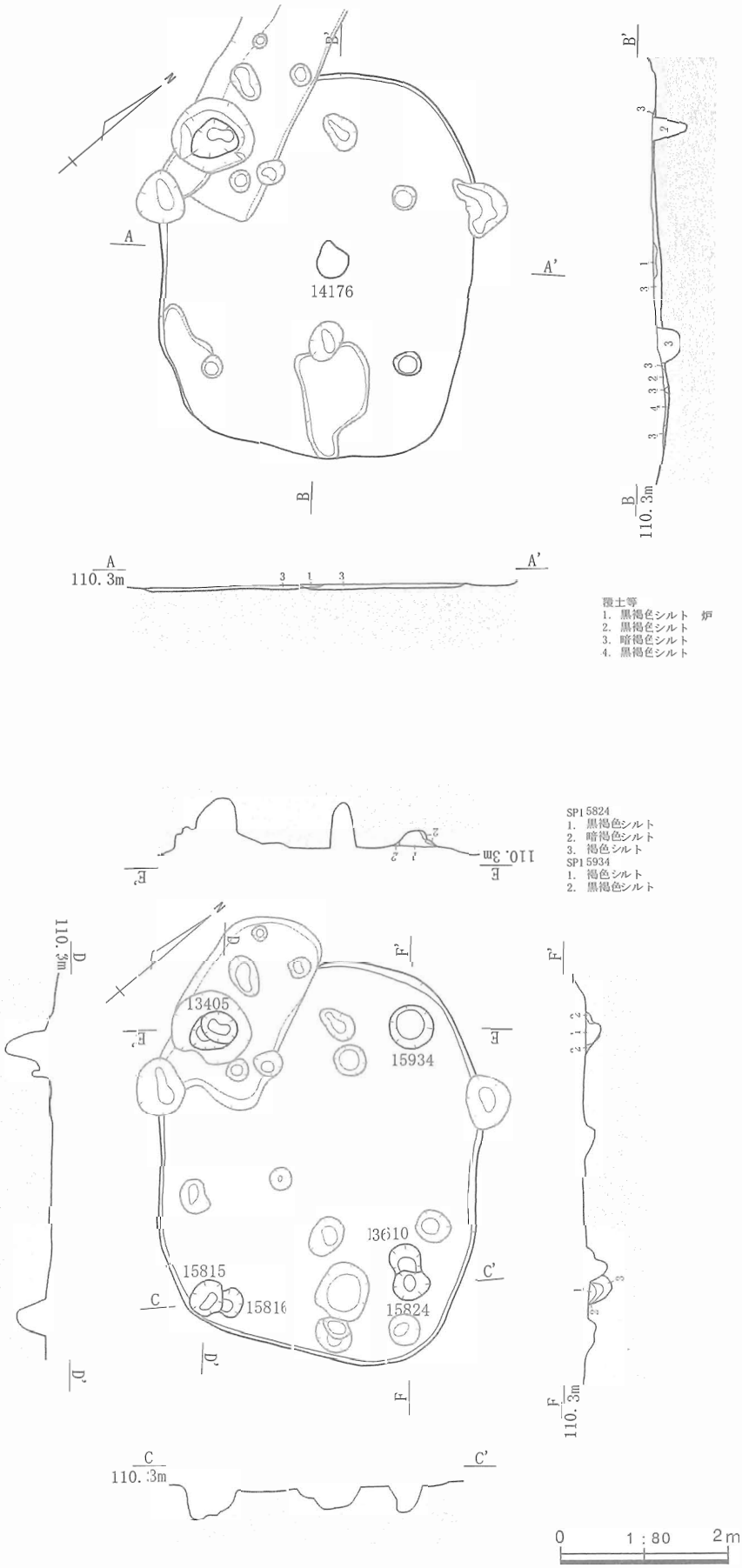
SK15894から出土した土器は一個体の壺の体部～口縁部片である。この場合も破片が十分でないので、小土坑内に置いて割られたものとは考えにくい。一部のみを土坑内に投棄したのだろう。

SH14176（第165図）

【遺構】Ｊ11～Ｋ11グリッドで検出された。北西側の一部を確認調査トレンチＴ７によって壊されているほか、耕作による撹乱が部分的に及んでいる。検出面が下がったため床面は失われているが炉の一部が残存していたため掘方埋土が残存している状態で一旦図化して記録を採った。

炉は住居のほぼ中心で検出された。掘方は長軸48cm、短軸34cmの楕円形状をなし、深さは4cm前後が確認された。内部には黒褐色シルトを充填し、上位には直径38cm前後の円形で熱染みが及んでいる。

壁溝は見いだせなかった。掘方上でも把握できなかったので設けられていなかったものと考えられる。貯蔵穴は埋土上では検出できなかった。掘方上では柱穴SP15824の南東側に把握された小穴が、直径38cm、深さ15cmと貯蔵穴になるのかもしれない。今回は確証が持てなかったので図上では撹乱扱いとして



第165図　SH14176平面・断面図（床面・掘方）

いる。

住居の掘方は底面を平らに整えるのみで溝を設けない。東側が若干突出し、ややいびつになる。掘方内には黒褐色～暗褐色シルトを充填する。

柱穴の掘方は４か所で検出した。直径30～50cmの円形をなし、北側に位置するSP15934以外はいずれも小ぶりである。一方で、F－F′列の柱穴は浅く、D－D′列ではより深く掘られている。

SP15934以外は切り合いをもつ。SP13405は双方の底面に25cmの差があるため、外側の小穴は柱の掘抜き穴の可能性がある。近似した深さをもつSP15824・13610とSP15815・15816では柱穴の中心が20cmしか離れていないので、およそ柱１本分を外側に挿げ替えたと考えられる。また、断面で柱痕を検出できないSP15934では、柱穴内が再掘削されて抜き取られているのだろう。SP 15824でも同様な要因で柱痕が残らなかったのだろう。

柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.85～3.3m、短手方向には同様に2.2～2.4mとなる。当初の柱穴では柱に囲まれた空間がひしゃげた形になり、挿げ替えられた後は長方形に近似する。

SH14272（第166～167図）

【遺構】J11～K11グリッドで検出された。東側の一部をSH18050によって壊されるほか、南側のおよそ半分が調査区外となっている。検出面は床面直上である。なお、調査区南壁でⅠ層が覆土となり床面上に8～16cmの厚みで遺存していることが把握されている。

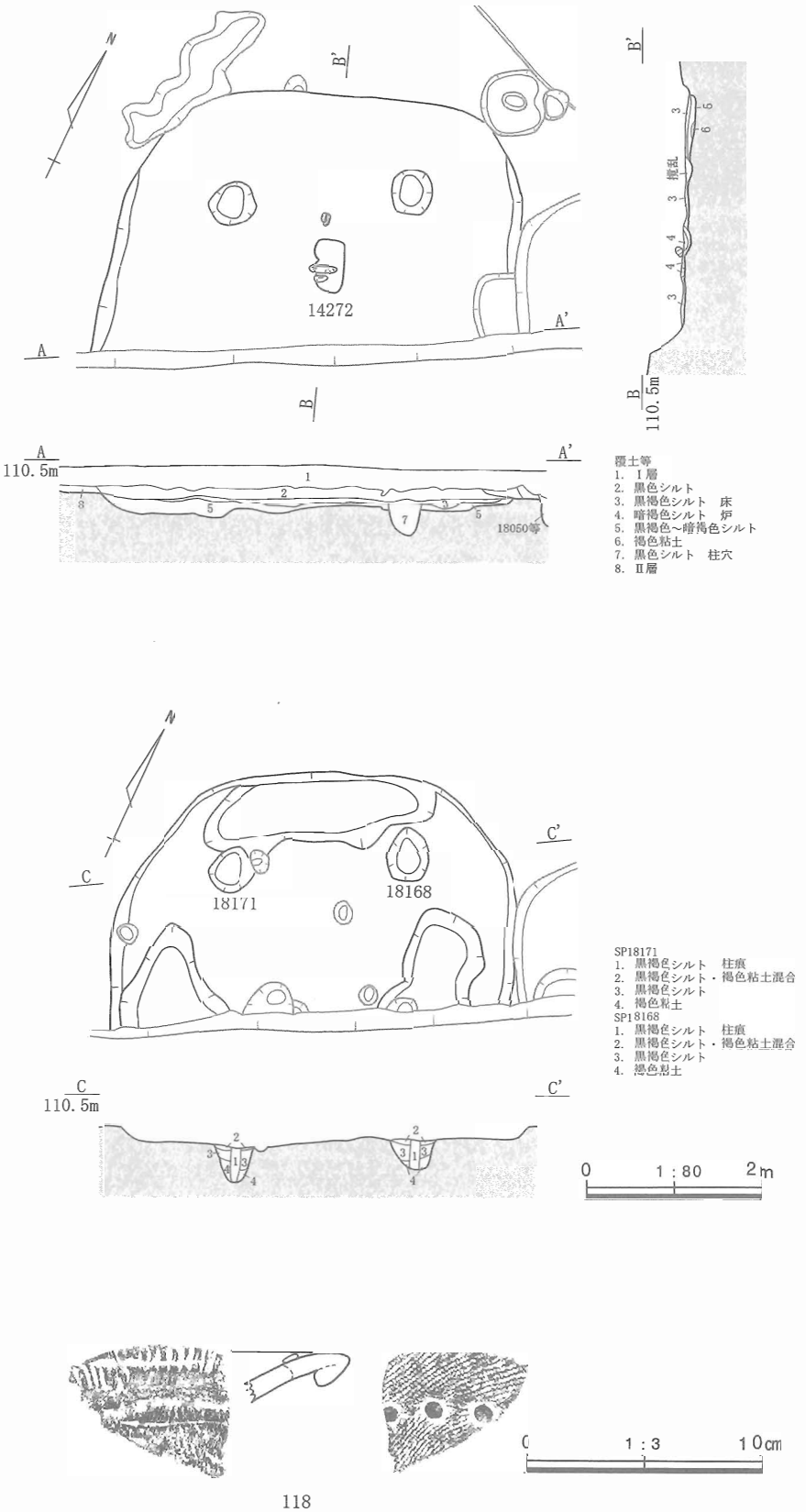
床面は黒褐色シルトを利用し、1～4cmの厚みで硬く敲き締められている。この床は掘方の溝を除く底面近くに張り込まれている。

柱穴は床面上で掘方と同等の間口が把握されていることから、柱の周囲には床が設けられていなかったと考えられる。

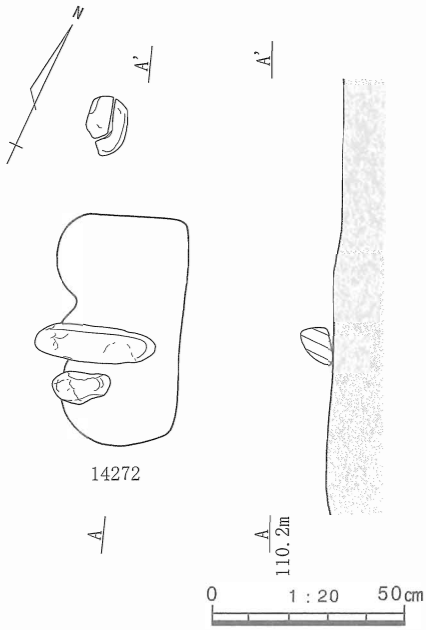
炉は住居の中央やや奥側に設けられている。掘方は長軸58cm、深さ7cmの楕円形を呈していたものと思われ、内部に暗褐色シルトを充填し上位を平坦に整えて炉床とする。炉床は長さ60cm、幅32cmの長方形状を呈し、南半分が1cm程度高まる。この変換点付近には二つの長細く焼けていない礫が平行して置かれている。さらに南端にごく低い土手状の盛り上がりが作られている。

壁溝は検出できなかった。断面でも観察できなかったので設けられていなかった可能性がある。

貯蔵穴は調査を行った範



第166図　SH14272平面・断面図（床面・掘方）、遺物実測図



第167図　炉14272平面・断面図

囲には該当する土坑がない。調査区外に存在するのだろう。

住居の掘方は、底面を平らに整えて周囲に溝を設ける。溝は北側と南側に分かれている。北側は0.59～0.80m、深さ２～８cmとなり、住居の縁に沿って掘られている。南側は一部が調査区外となり左右に分かれて検出されている。内法が内側に入り込んでくるのでそれぞれは連続するものと想定される。幅0.76～1.05m、深さ２～８cmとなる。掘方埋土は溝の部分を主体に黒褐色～暗褐色シルト・褐色粘土が充填される。

柱穴の掘方は２か所で検出した。直径46～60cmの円形～楕円形をなし、柱の抜き取り穴等の切り合いは認められない。柱穴の間隔は芯々で2.1mとなる。

【遺物】掘方の埋土から壺の口縁部片が出土している。118は外面をハケ工具で整え、口唇部外面に先の尖った棒状工具による刻みを付ける。内面は縄文を施した後、等間隔に円形浮文を貼り付けている。

SH53038（第168図）

【遺構】Ｉ17～Ｊ17グリッドで検出された。上面に耕作による撹乱が入る以外は切り合いがほとんど見られない。検出面は床面直上である。

床面は暗褐色シルト粒がやや入る黒褐色シルトを素材としている。１～５cmの厚みで硬く敲き締められている。B－B′断面ではほぼ全ての範囲に床が張られ、A－A′断面でも東側の1.4mほどに床が把握できないのみなので、本来はほぼ全面に床が設けられていたものと考えられる。床面上では３か所に直径20～30cmの円形のプランを見出した。それぞれはSP54518・54333・54808にあたる位置にあり、柱痕と考えられる。また、円形のプランは柱穴掘方の間口よりも小さく収まるので、柱の際まで床が設けられていたことを示している。

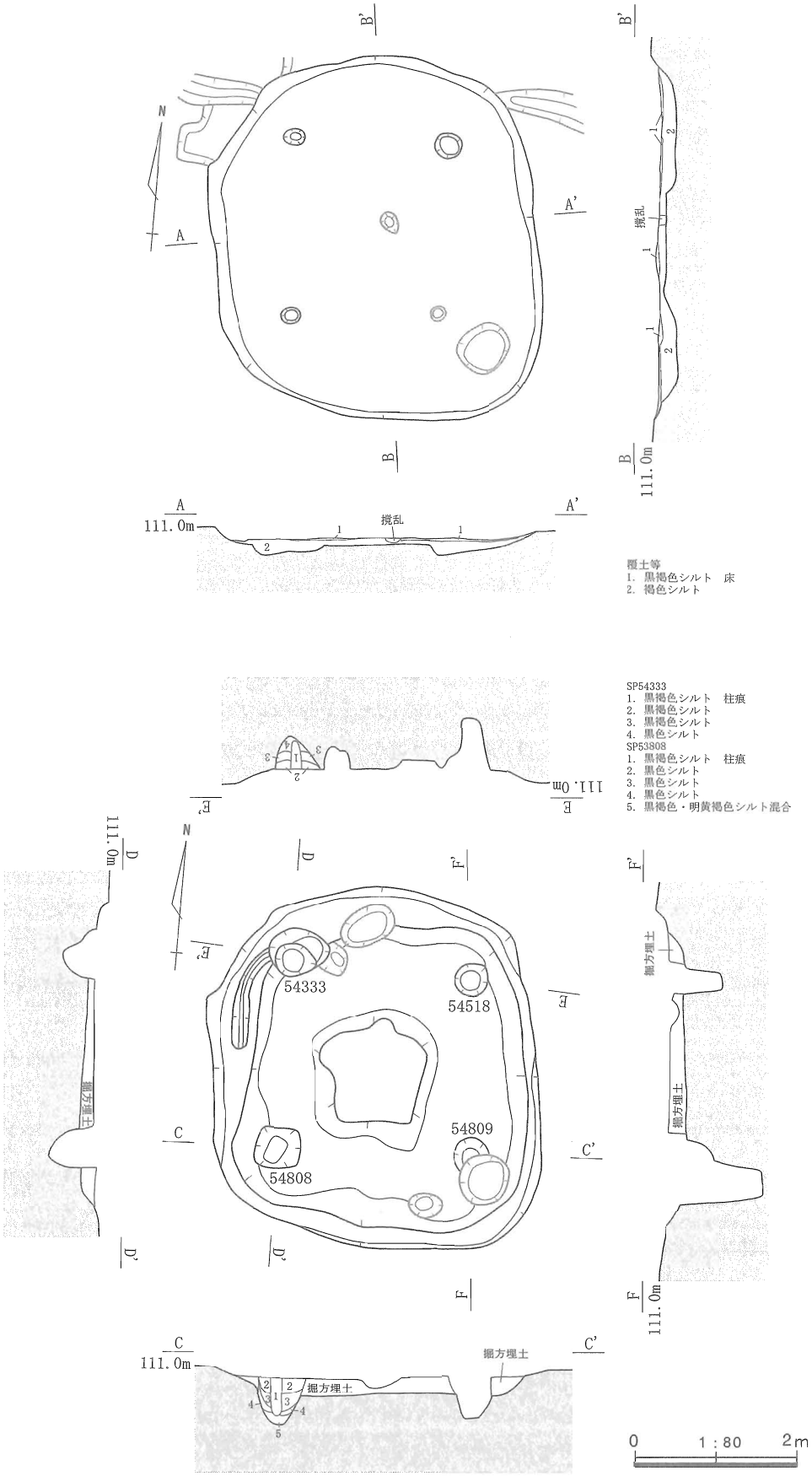
炉は検出されていない。掘方や熱染みも認められなかった。壁溝も平面・断面で見出すことができなかった。掘方底面では北西に幅13～20cm、深さ４～６cmの細い溝が検出されたが、立ち上がりよりも離れており北端で内側に曲がってくるので壁溝ではないと考えた。

貯蔵穴についても該当する土坑が見当たらない。元来設けられていなかったと考えられる。

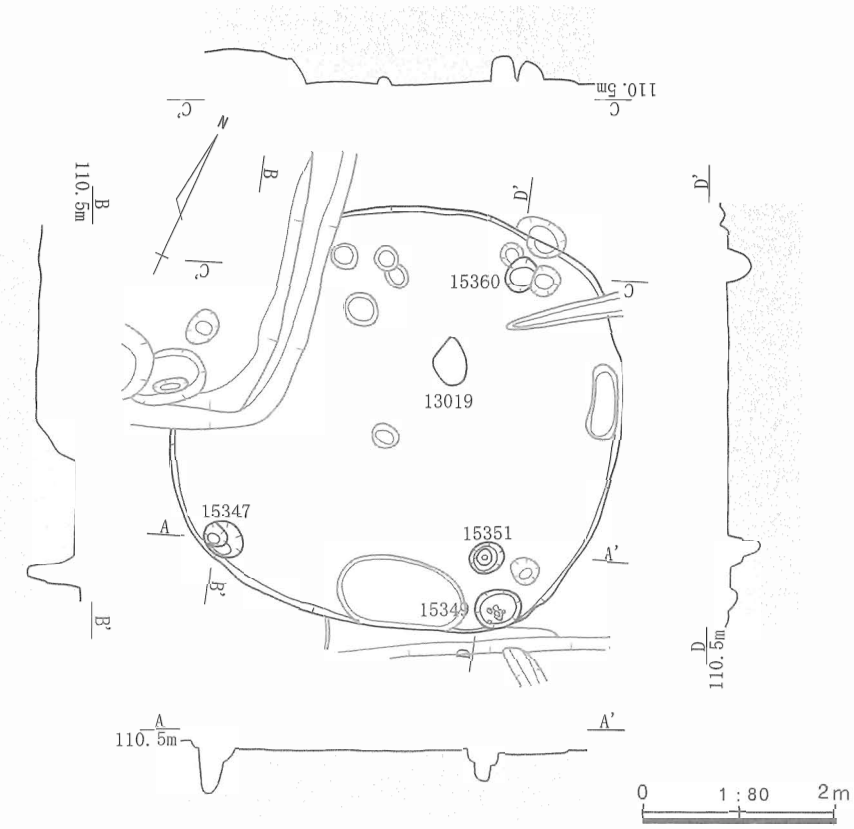
住居の掘方は底面を平らに整えた後、周囲に全周する溝を設ける。溝は0.8～1.47m、深さ12～19cmとなる。住居の掘方に比べ溝が大規模なので、当初の底面が島状に掘り残されているように見える。また、溝の外辺部には掘方立ち上がりとの間に幅16～50cmのテラス状の掘り残しがある。掘方の埋土は褐色シルトを用いている。

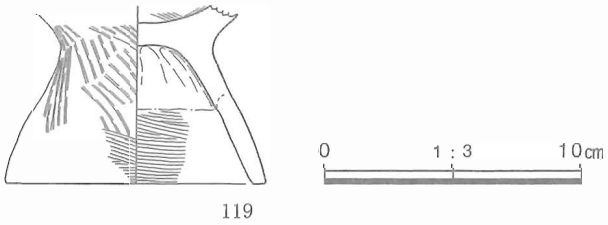
柱穴の掘方は４か所で検出されている。直径40～50cmの円形あるいは隅丸方形状で、北西隅のSP54333にのみ切り合いがある。切り合う土坑は柱穴よりも間口の大きい直径60～75cmの楕円形を呈するが、柱穴底面より20cm程度浅く、柱の掘り抜き穴とみられる。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.2～2.4m、短手方向で同様に2.3～2.4mとなり、比較的揃っている。

【遺物】住居の床面上北東隅に２か所、北西隅に１か所の計３か所にわたって土器片が集中する部分が検出されている（図版編図版120－1）。これらは住居が廃棄される際に放棄された破片と考えられるが、接合せず図示することが叶わなかった。接合しないことは他で割り取られた破片をこの場所に持ち込んでいることを示すものだろう。

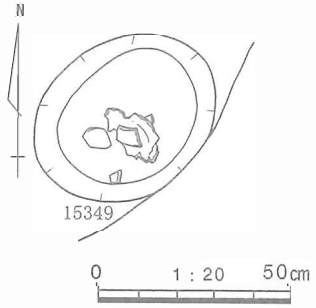


第168図　SH53038平面・断面図（床面・掘方）





第169図　SH13019平面・断面図（掘方）、遺物実測図



第170図　貯蔵穴SK15349遺物出土状況

SH13019（第169～170図）

【遺構】M16グリッドで検出された。西側をSH13021に壊され、南西側でSH13018を壊している。また、上面に耕作による撹乱が部分的に及んでいる。検出面は住居の掘方底面の直上となった。

住居の掘方は底面を平らに整えるのみで、溝を設けない。

炉は住居の中央やや奥側の、若干東に寄った位置から直径35～50cmの楕円形を呈する熱染みとして所在を認識できた。炉床は熱の伝わり易い比較的検出面に近接した位置にあったのだろう。

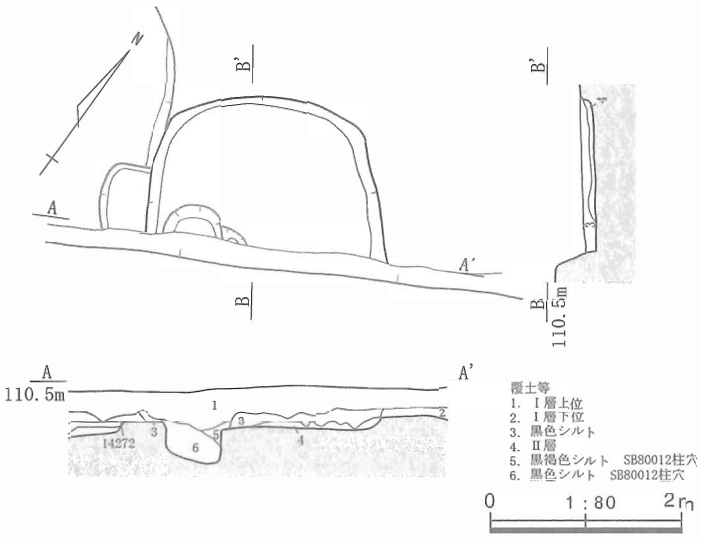
貯蔵穴は南東縁に設けられたSK15349が該当する。長軸50cm、短軸40cm、深さ20cm程度の楕円形を呈し、住居の掘方縁辺に沿っている。内部からは台付甕片が出土している（図版編図版122-1）。体部以外の破片は含まれないので、割り取った一部をここに捨てているように見える。

柱穴は３か所で確認した。残り１か所はSH13021により消失しているものと考えられる。いずれも住居掘方の縁に近い位置にあり、直径30cm台の円形を呈する。南側に位置するSP15347は直径40cmの小穴と切り合う。この小穴は柱穴の1/3程度の深さしかなく、柱の掘り抜き穴と考えられる。SP15351は断面形状をみると２段に掘りこまれているように見える。あるいはこの上段も抜き取り穴なのかもしれない。柱穴の間隔は南北方向に３m、東西方向に2.85mと近似している。

【遺物】119は台付甕の台部～底部片で、覆土から出土している。表面には149に類する粗いハケを用いた調整がみられる。内面は奥から手前にナデによって滑らかに整えられる。最後に台部下位と内面をより細かなハケ工具を用いて横方向に調整する。

SH18050（第171図）

【遺構】Ｊ10～Ｋ11グリッドで検出された小型の住居である。西側でSH14272を壊している。また、検出範囲の南西側では掘立柱建物SB80012の柱穴のひとつが上位から穿たれている。検出面は黒色シルト上である。調査時では床面が検出できなかったためこの土層を掘方埋土と認識した。しかし、住居の規模に比べ厚みがあるので本来は掘方底面を生活面として利用し、黒色シルトは住居の覆土であったのかもしれない。炉・壁溝・柱穴は検出されていない。主柱穴を用いない上屋構造であったと考えられる。



第171図　SH18050平面・断面図（掘方）

SH50799（第172～174図）

【遺構】Ｌ18～M18グリッドで検出された消失住居である。上面の一部に耕作に伴う撹乱を被るものの全般的に状況を把握できた。検出面は床上覆土であり17～23cmの厚みで黒褐色シルトが堆積していた。

床面は黒褐色シルトを用い、１cm程度の厚みで硬く敲き締められている。床面の下位は掘方の埋土との境が漸移的であるので改めて敷かれたものではなく、掘方埋土の上面から形成されたものと考えられる。この床面は住居の中心部分にみられ、縁辺部およそ１m内外には設けられていない。

床面上には炭化材と焼土が複数個所に検出された。

炭化物は住居の中央付近により密に検出された。炭化材の直径は10cm以下で、棒状のものが多く垂木等の住居の部材であると考えられる。これらの出土位置は屋根の組み方を反映して、主に住居のプランに直交・平行する方向にある。また、直径８mm前後の細いストロー状の炭化物がまとまって検出された個所もある。これらは葦などの屋根材と考えられる（図版編図版124-4）。

複数個所で検出された焼土はいずれも炭化物の上面に乗っている。元来は厚さ５～12cmの黒褐色シルトであり、下位に行くに従って熱による変色が強くなる状況であった。

これらの状況から、焼土となって検出された黒褐色シルトは屋根材の上に盛り付けられていたものと考えられる。上屋の有機物が燃える際に炎にあぶられて変色し、垂木や屋根材との位置関係を保ったまま床面上に崩れ落ちているものと理解される。

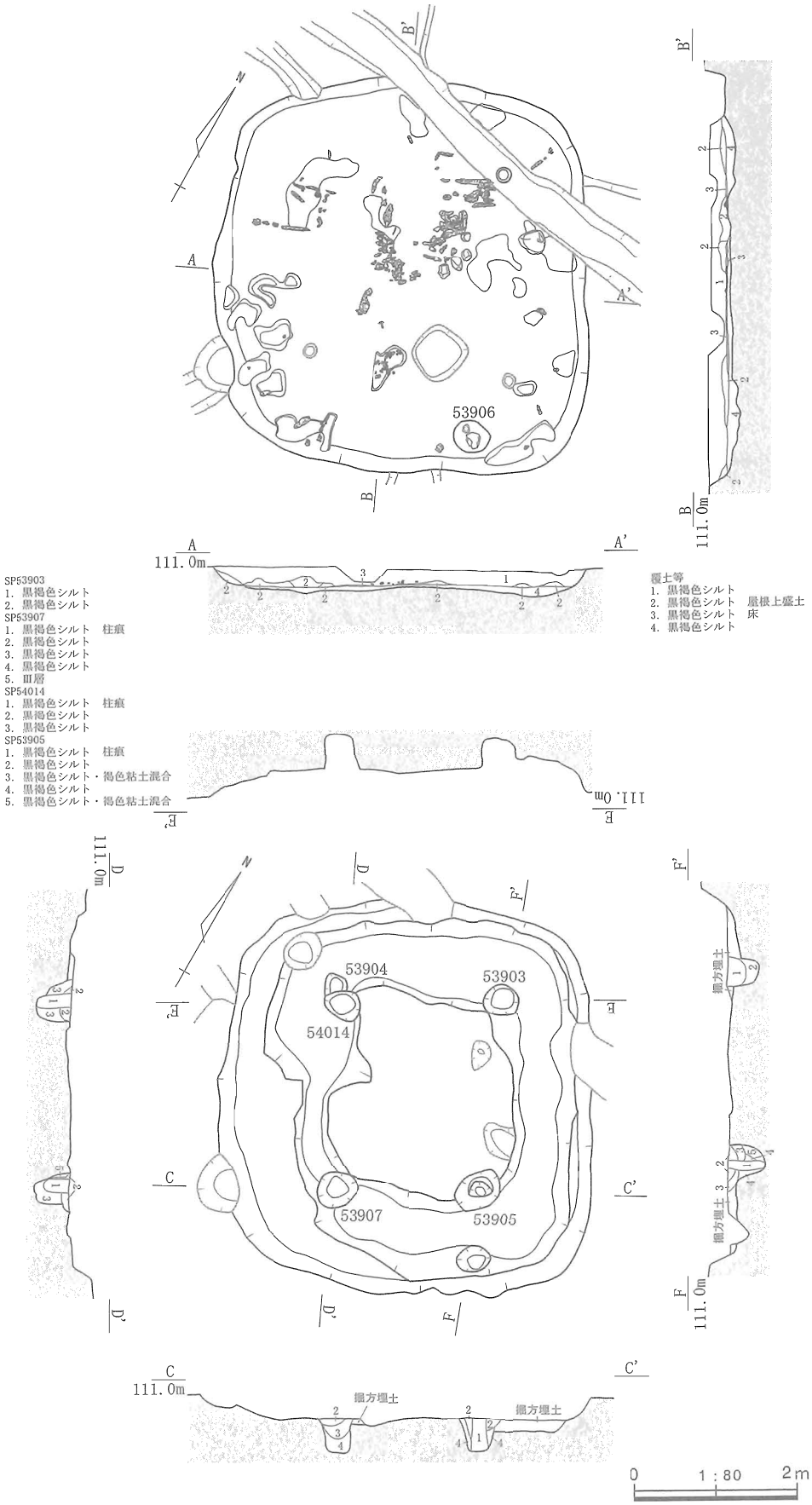
炉は住居の中央奥側に存在を想定した。しかし、遺物を取り上げた後に床面を精査したが検出できなかった。これにより炉は設けられていなかったものと考えられる。したがって、住居が焼失した原因は住居内での生活に伴う失火ではない可能性が高い。

壁溝は平面・断面いずれからも検出されなかった。設けられていなかったことも考慮される。

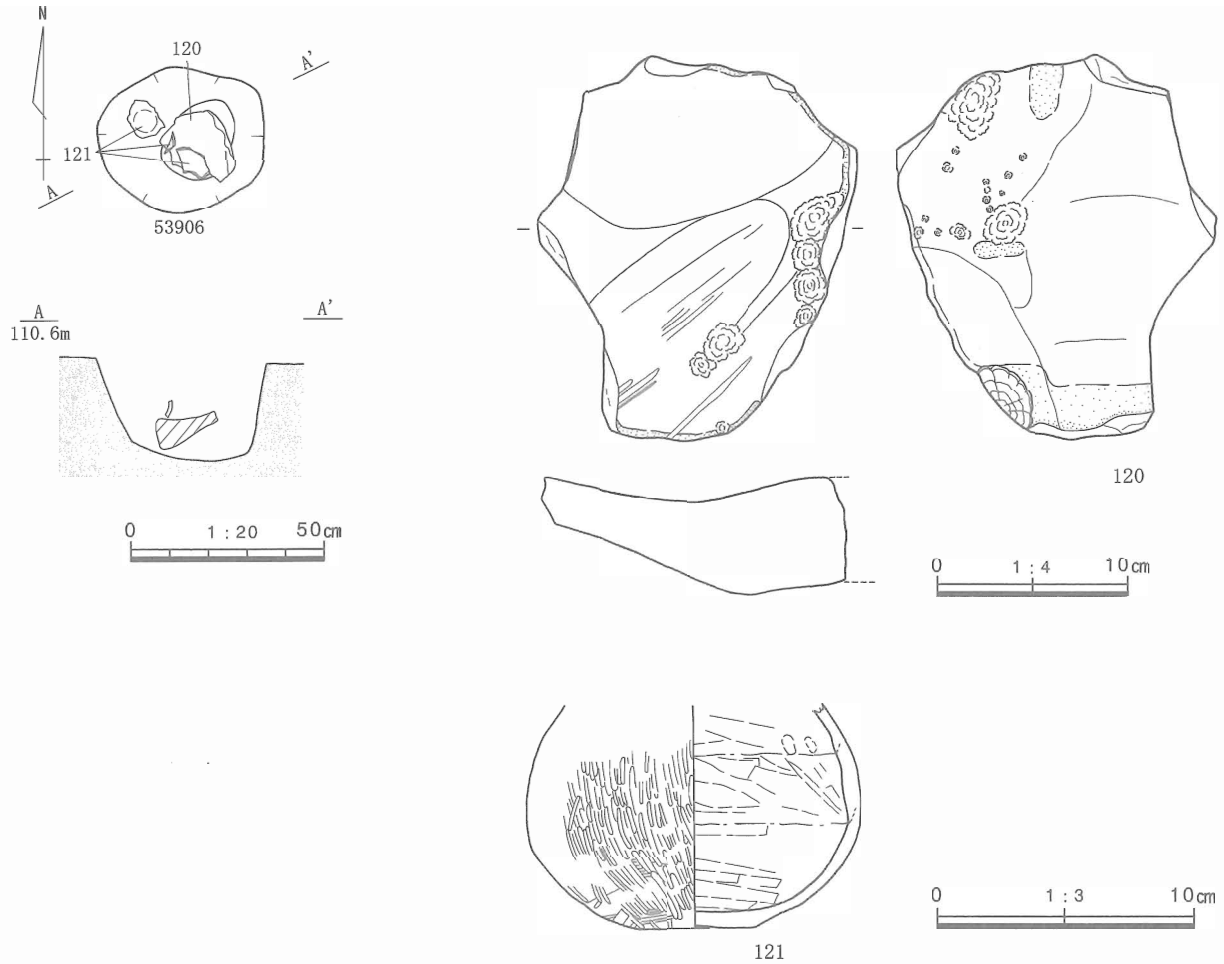
貯蔵穴は東縁に設けられたSK53906が該当する。長軸45cm、短軸37cm、深さ28cmの円形状を呈し、内部から台石と土器が出土している。

住居の掘方は底面を平らに整え、周囲に溝を巡らせる。溝は0.3～1.1m、深さ２～９cmとなり、南西側で著しく幅を狭めている。東側に寄った位置に設けられるので、西側の掘方立ち上がりとの間に0.18～0.80mのテラス状の平坦面を掘り残している。

柱穴は４か所が確認されている。直径30～55cmの円形あるいは楕円形状を呈し、１か所に切り合いがみられる。SP54014は北西側にSP53904を伴う。54014の断面に柱痕が観察されることからも柱の抜き取



第172図　SH50799平面・断面図（床面・掘方）



第173図　貯蔵穴SK53906遺物出土状況・遺物実測図

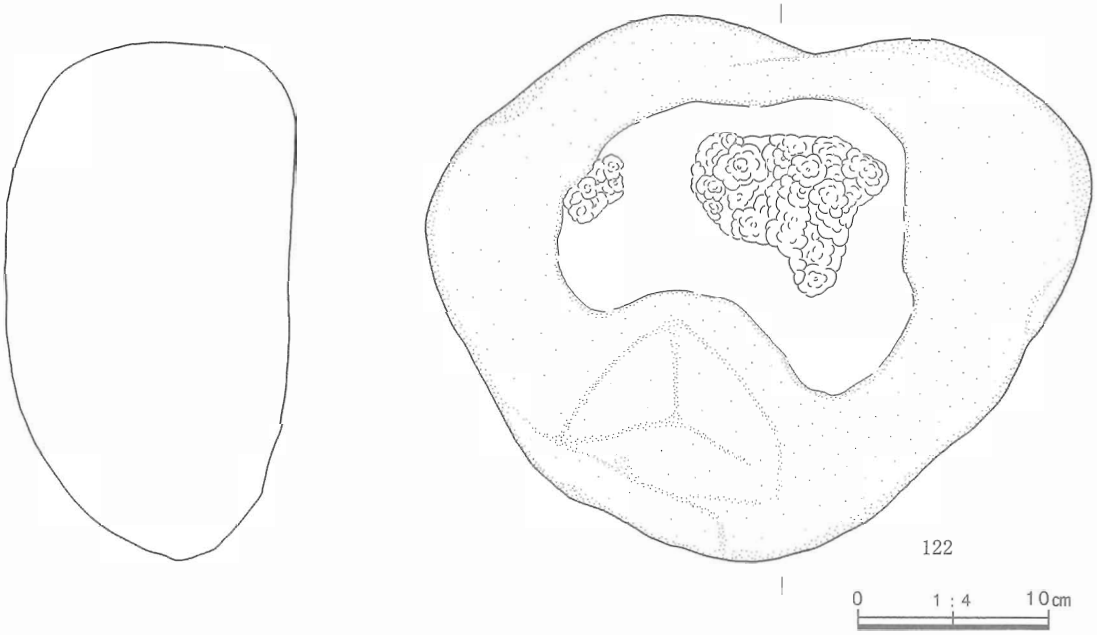
り穴とも考えられない。54014より20cm程度浅いが、住居建築当初の柱穴であろうか。SP53905と53907の断面にも柱痕が観察される。これら柱痕は幅16cm内外となる。SP53903の断面には柱痕が確認されていないが、断面図の採取位置が東にややずれたことが原因であり、本来は中心部分に残されていたものと考えたい。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.3～2.5m、短手方向で同様に1.8～２mとなる。

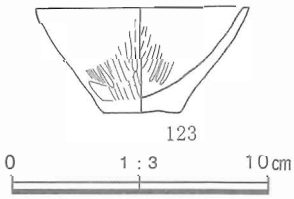
【遺物】遺物は床面上と貯蔵穴内から土器と石製品が出土している。

120・121は貯蔵穴SK53906から出土した遺物である。120は一部が底面に接し、片側が土坑の斜面に寄りかかっている。121は120の上面から北側に複数の破片となっていた。120は台石で、両面ともによく使い込まれて複数の場所で滑らかなへこみを作りだしている。部分的に敲打痕が見え、表面には砥石として利用されたことを示唆する平行する細かな擦痕が残されている。121は壺の底部～胴部である。表面はハケ調整の後縦方向の細かなミガキが施され滑らかに仕上げられる。内面には横方向の板ナデが施されるが、接合痕が消されずに残っている。

122・123は床面上から出土した遺物である。122は砂岩製の自然礫を利用した台石である。より平坦な面を利用しており、敲打痕と滑らかになった擦り面が観察される。なお、122は焼土の端に乗っているので住居の廃絶以降にこの位置にもたらされたものと考えられる。123は覆土内から出土している。全体的にハケ調整により仕上げられる。端部が潰れていないので坏状の製品と理解した。

このように、住居内には当時の家財道具がそのまま残されている状況にはなく、貯蔵穴内にも使用不能の状態となった破片が遺棄されている。出火時には、住居はすでに放棄されているように感じられる。



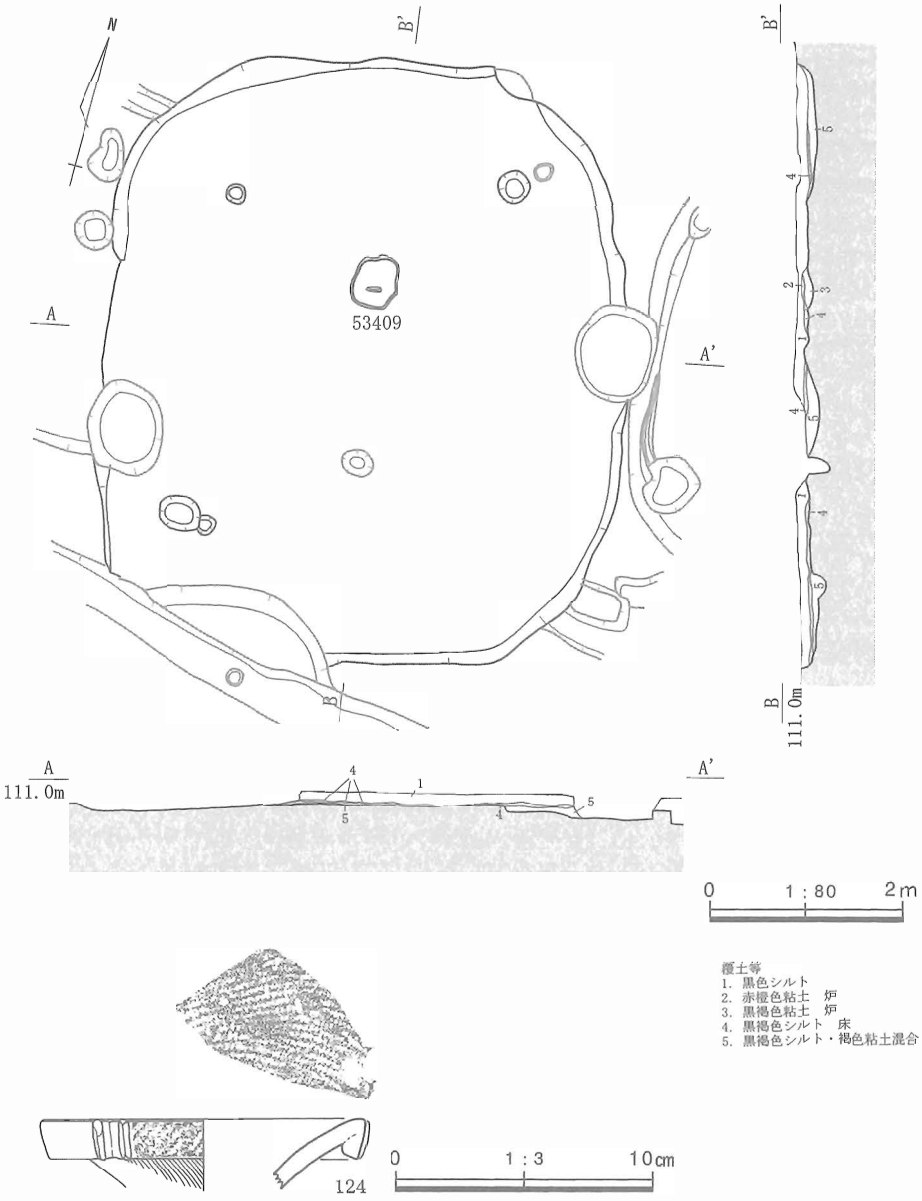


第174図　SH50799遺物・炭化物出土状況、遺物実測図

SH53409（第175～177図）

【遺構】 L18グリッドで検出された。南側をSH50799に切られ、上面に掘立柱建物80028の柱穴が穿たれる。検出面は床上の覆土上で、黒色シルトが10cm内外の厚みで遺存していた。

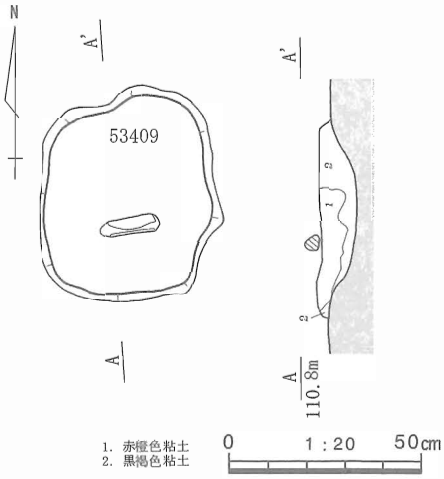
床面は黒褐色シルトを用いて1～4cmの厚みで硬く敲き締められている。南側では住居の立ち上がり際にまで設けられるなど、床は広い範囲で張られている。また、床面上では直径18～44cmの円形あるいは楕円形のプランが4か所で検出されている。これらは柱痕と考えられ、柱の根元にまで床が張り込まれていたことを示している、また、南側のSP54391・53539の位置にも並んで柱痕が認められる。挿げ替え痕と考えられるが、この場所では古い柱の位置に床を改めて張り込まなかったようである。



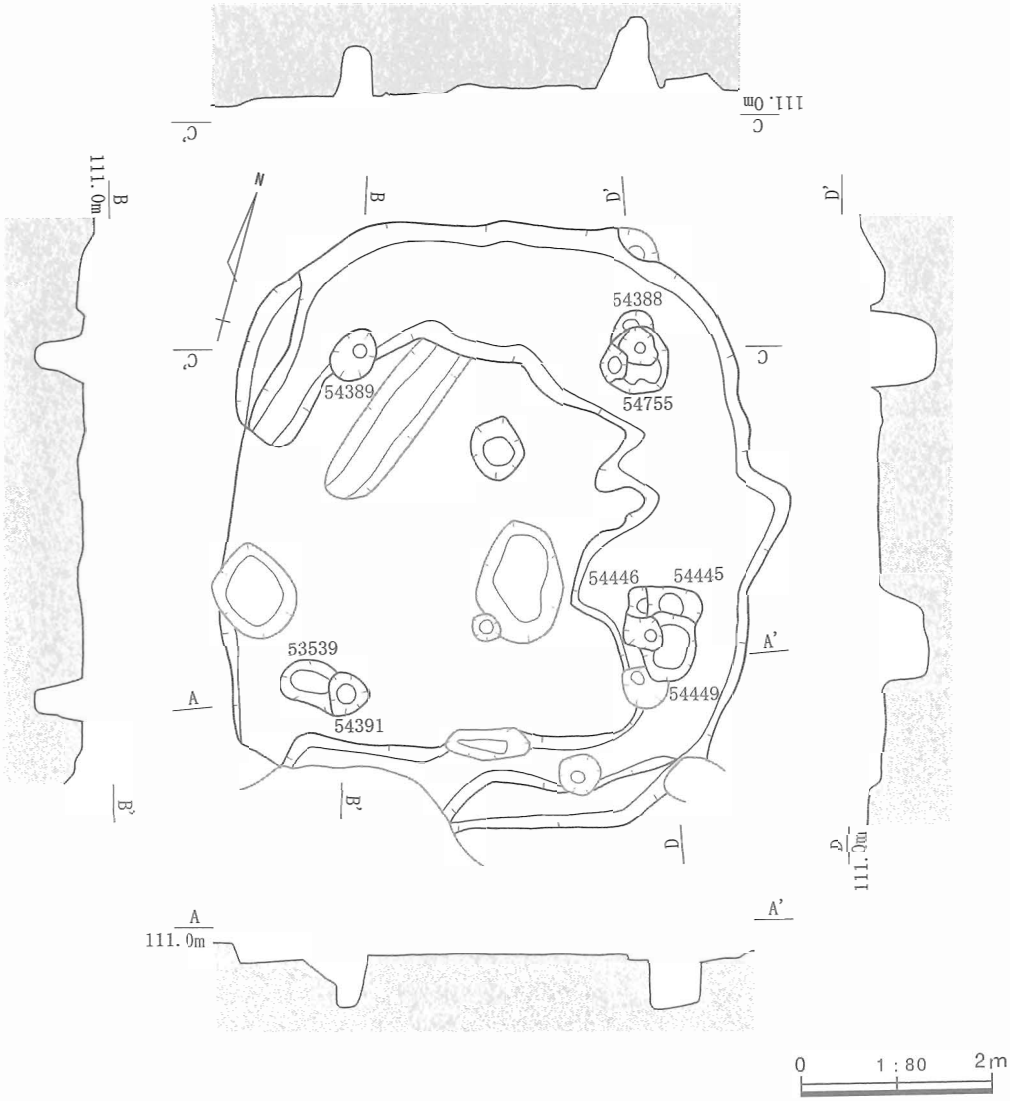
第175図　SH53409平面・断面図（床面）、遺物実測図

炉は住居の中央やや奥側に設けられている。直径55～65cm、深さ10cmの掘方内に黒褐色粘土を充填している。炉床は床面よりも2cm程度盛り上がった位置にあり、主に使用された南側が赤褐色に焼け締まっている。炉床上には長さ15cm、直径4cmほどの長細い自然礫が乗せられていた。この礫は焼けていない。なお、埋土の黒褐色粘土は赤褐色の焼土粒を多く含んでいた。作り替えられた炉の一部が混入しているのであろうか。

壁溝は平面・断面いずれでも検出できなかった。床が住居の立ち上がりにまで張られていることからも、壁溝は設けられていなかった可能性が高い。



第176図　炉53409平面・断面図



第177図　SH53409平面・断面図（掘方）

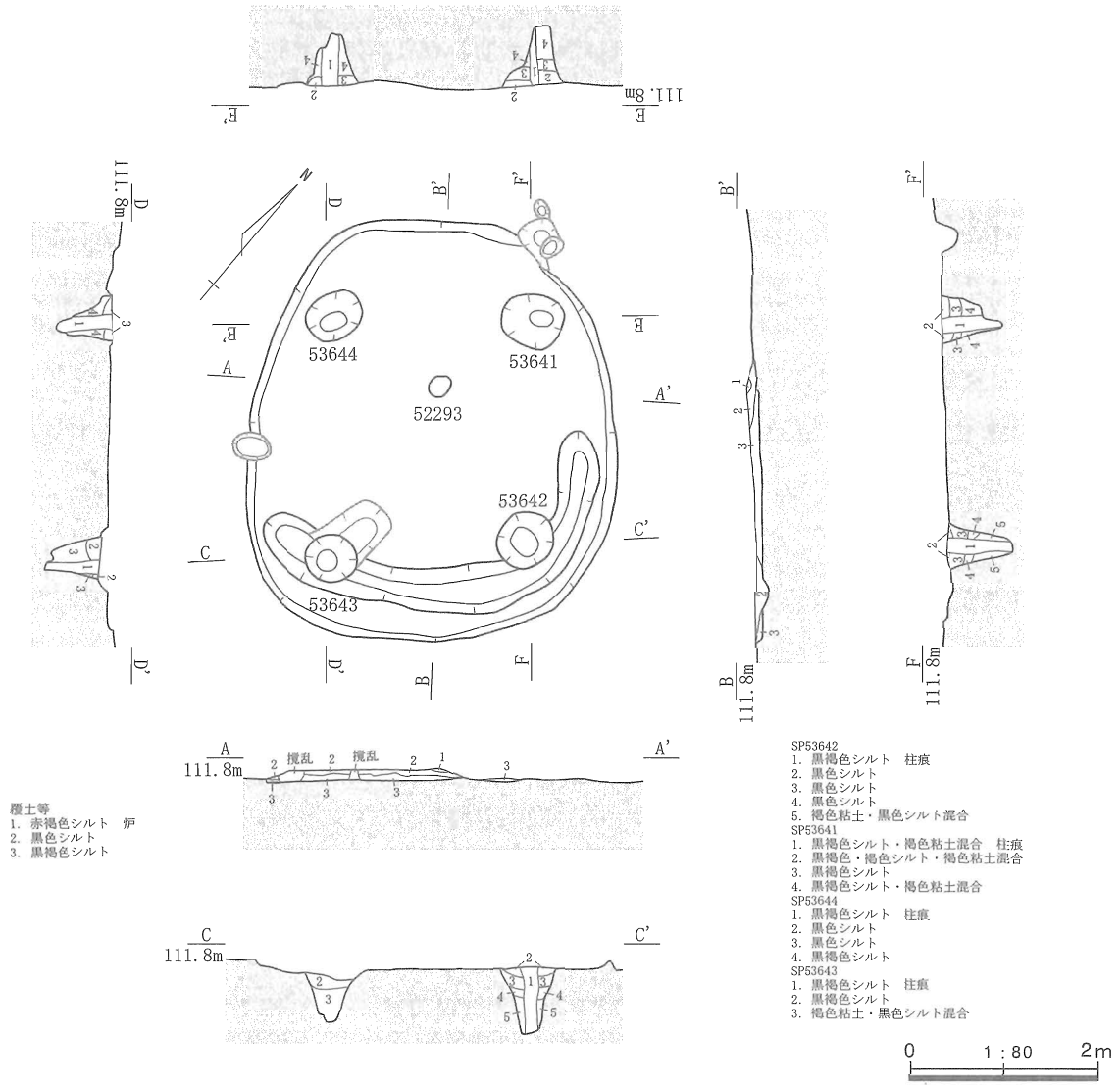
貯蔵穴は床面上では明らかでない。住居の掘方底面では南縁に直径42cm、深さ33cmの小土坑を検出している。これに貯蔵穴の可能性を感じるが、確証が得られなかったので図上では撹乱扱いとしている。

住居の掘方は底面を平らに整えて、縁辺に溝を備える。溝は幅0.5～1.9m、深さ２～７cmで、内法が蛇行するとともに南側で著しく狭くなって南西側で途切れている。

柱穴の掘方は４か所で検出した。このうち北西側にあるSP54389以外はいずれも切り合いがある。特にD－D′ ラインの二つの柱穴の切り合いが激しい。いずれも同位置で近似した規模の柱穴を複数回掘り直しているものと思われる。SP54388では床面上で柱痕が確認できた位置は最も北側の掘方に重複するので、ここでは南側からより北側へ挿げ替えられていったものと考えられる。

南側のSP54391・53539はいずれも床面上で掘方よりも小さな間口の柱痕を観察しているので、それぞれは挿げ替えられて切り合う柱穴と判断した。しかし、D－D′ ラインの柱穴は、SP54388にみるように古い柱穴は新たな床に覆われている。床面を復旧する流儀がSP54391・53539の場合と異なっているようにみえる。柱穴の間隔は長手方向に芯々で3.4～3.6m、短手で同様に３～3.4mとなる。

【遺物】124は覆土から出土した折り返し口縁をもつ壺の頸部～口縁部片である。頸部には縦方向のハケ調整を施し、口縁部内外面には縄文を施す。その上で口縁部外面には棒状浮文を付ける。



第178図　SH52293平面・断面図（床面・掘方）

SH52293（第178図）

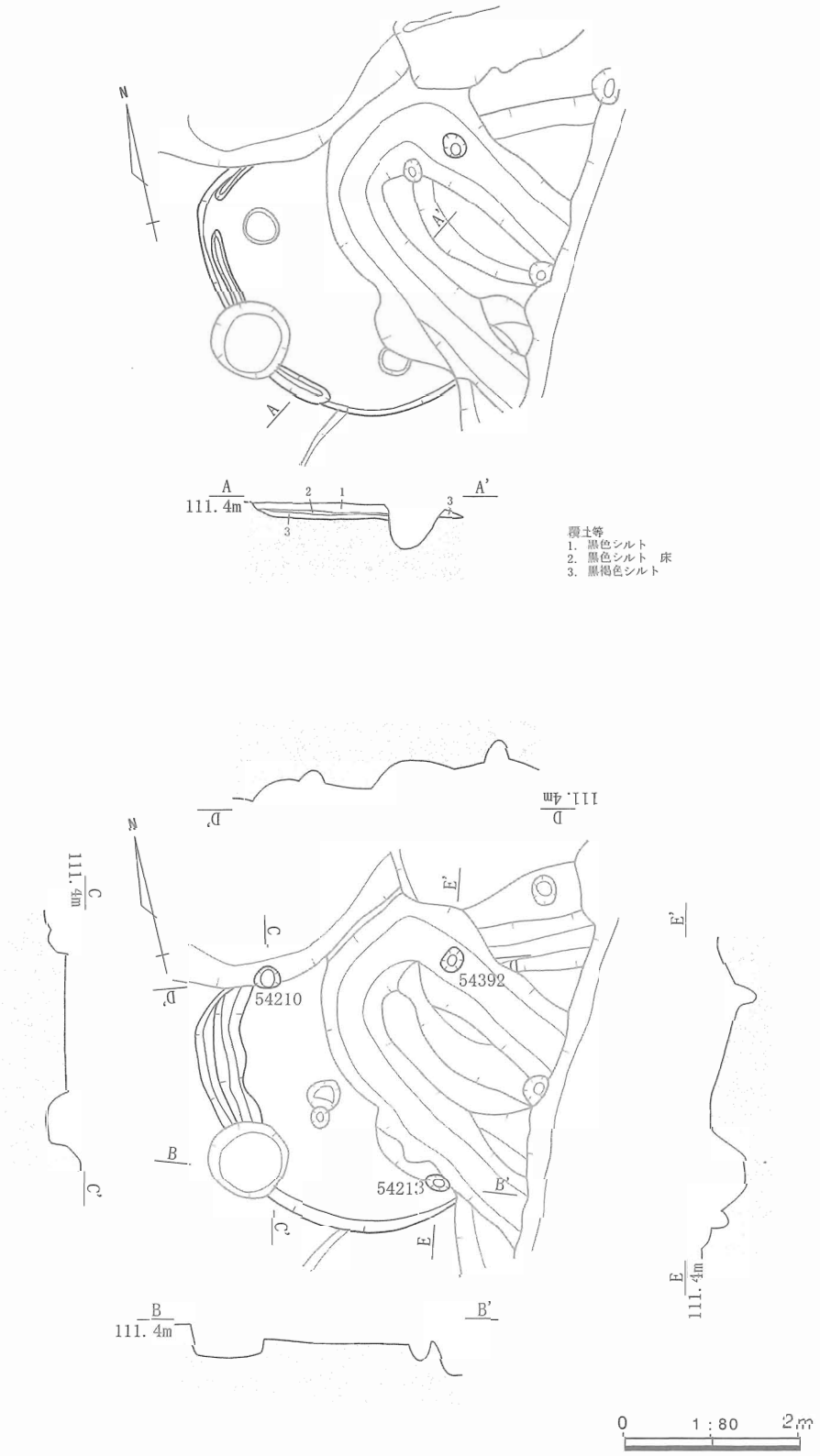
【遺構】H20グリッドで検出された。特に切り合う遺構は検出されなかったが、面的に耕作の影響を受けているので検出面は北側では掘方埋土中、南側では掘方底面となった。

炉は掘方埋土中に掘方の一部が残存していた。掘方は直径18cmの円形で、深さ３cmが残存していた。埋土は元来黒色～黒褐色シルトであったと推測されるが赤褐色に焼けているので、炉床とはさほど隔たっていないものと思われる。

住居の掘方は底面を平らに整えて南東側に溝を備えている。溝は掘方の立ち上がりから10～30cm内側に寄った位置にあり、ほぼ住居のプランに沿って内法も蛇行することなくきれいに掘られている。幅32cm～54cm、深さ４～７cmとなる。

柱穴の掘方は４か所で検出された。いずれにも柱の挿げ替えや抜き取り穴はなく、断面に幅８～15cmの柱痕が観察された。SP53641と53643では柱痕の末端が細いので、末端が尖り気味の部材を用いたことが想像される。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.4～2.6m、短手方向で同様に2.15～2.3mとなる。

壁溝は平面・断面いずれも検出されなかった。貯蔵穴は該当する土坑が認められない。いずれも設けられていなかったことが考慮される。



第179図　SH50898平面・断面図（床面・掘方）

SH50898（第179図）

【遺構】Ｉ19～Ｊ20グリッドで検出された。東側を方形周溝墓SZ54807、北側をSZ52284に壊されて、住居のおよそ半分が失われている。残存部分の検出面は床上覆土である。

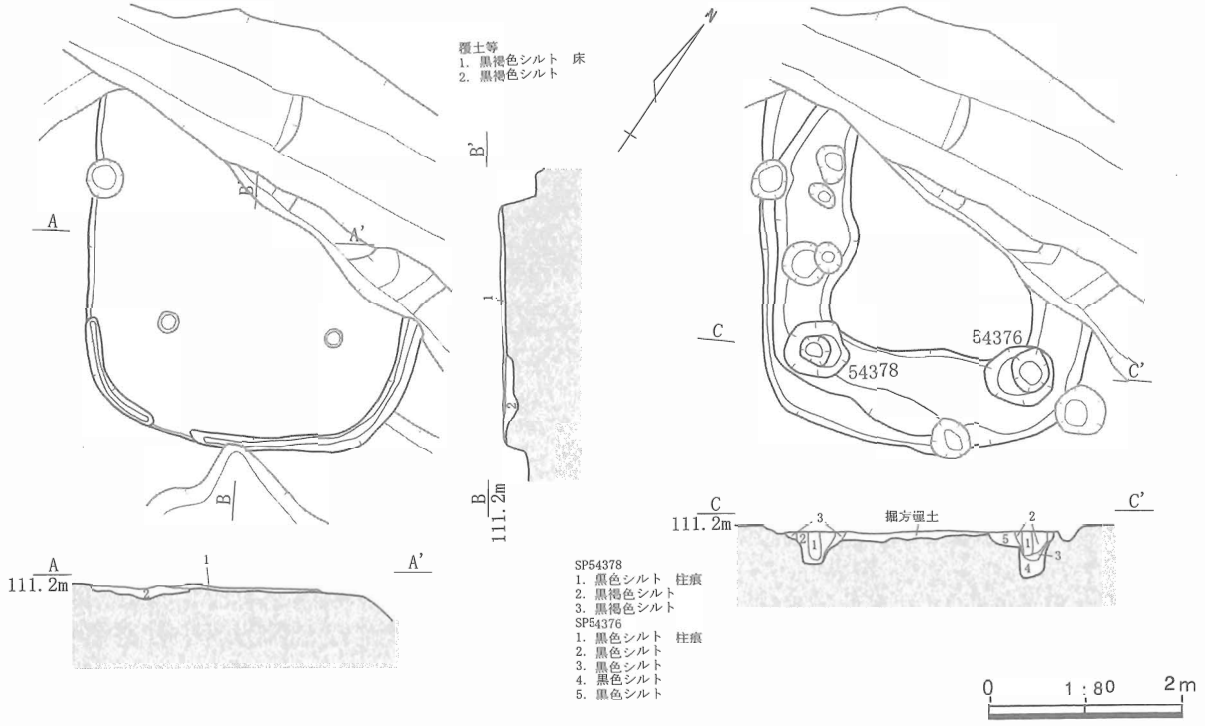
床面は褐色シルトブロックを含む黒色シルトが用いられ、１～４cmの厚みで硬く敲き締められている。住居の立ち上がり付近にまで張られているので、喪失部分にも広く設けられていた可能性がある。

壁溝は西側から北西側にかけて部分的に検出されている。幅12～20cm、深さ３～４cmとなり南側がやや太い。

炉は検出されていない。住居の中央部にあるSZ54807によって失われているものと考えられる。貯蔵穴も同様な理由で把握できない。

住居の掘方は底面を平らに整える。内部には黒褐色シルトを充填する。西側の立ち上がり沿いに幅25～30cm、深さ２cm前後の溝が検出されている。住居の掘方に伴う溝にしては狭く感じる。

柱穴の掘方は３か所で検出した。直径20～25cmの円形を呈し、北東側のSP54392は底面の深さが



第180図　SH53256平面・断面図（床面・掘方）

異なりやや離れているので、他の住居の柱穴である可能性もある。また、他の一つは南西側の円形の撹乱によって失われていると考えたい。

SH53256（第180図）

【遺構】K19～K20グリッドで検出された。北側を方形周溝墓SZ50880によって壊されている。検出面は床面直上となったので床上の覆土は把握できていない。

床面は掘方埋土と同質の黒褐色シルトを用いている。2～4㎝の厚さで、南側0.8m程は検出できなかった。東西方向には住居の立ち上がりに近い部分まで張られているので、未検出の部分にも設けられていた可能性が高い。床面上で柱痕を見出そうと努力したが判明しなかった。

炉は残存していなかった。住居の奥側にあったがためにSZ50880によって失われたものと考えられる。

壁溝は住居の縁辺南～西側に設けられている。幅12～20㎝、深さ4㎝前後となる。

貯蔵穴は設けられていない。掘方上でも該当する土坑が見当たらなかった。

住居の掘方は底面を平らに整えて周囲に溝を備える。溝は幅0.57～0.9m、深さ4～13㎝で、東側では住居掘方の縁辺に沿うが南～西側では12～30㎝のテラス状の間隔を置いている。さらに西側の末端は内側に入り込んでいるので、住居の北縁に至る手前で丸く巡っている可能性がある。

柱穴は南寄りの2か所で把握できた。いずれも周囲にやや浅い部分をもつ2段状に掘削されている。断面では幅10～12㎝の柱痕が観察できた。柱穴の間隔は芯々で2.3mとなる。北寄りの柱穴はSZ50880により失われているので、この住居の平面プランは長方形状の隅丸方形になるものと考えられる。

SH50802（第181～183図）

【遺構】L20グリッドで検出された。北側の一部を方形周溝墓SZ50880に壊され、西側で溝SD50838に接する。検出面は床上の覆土中で、黒色シルトが最大で24㎝把握された。

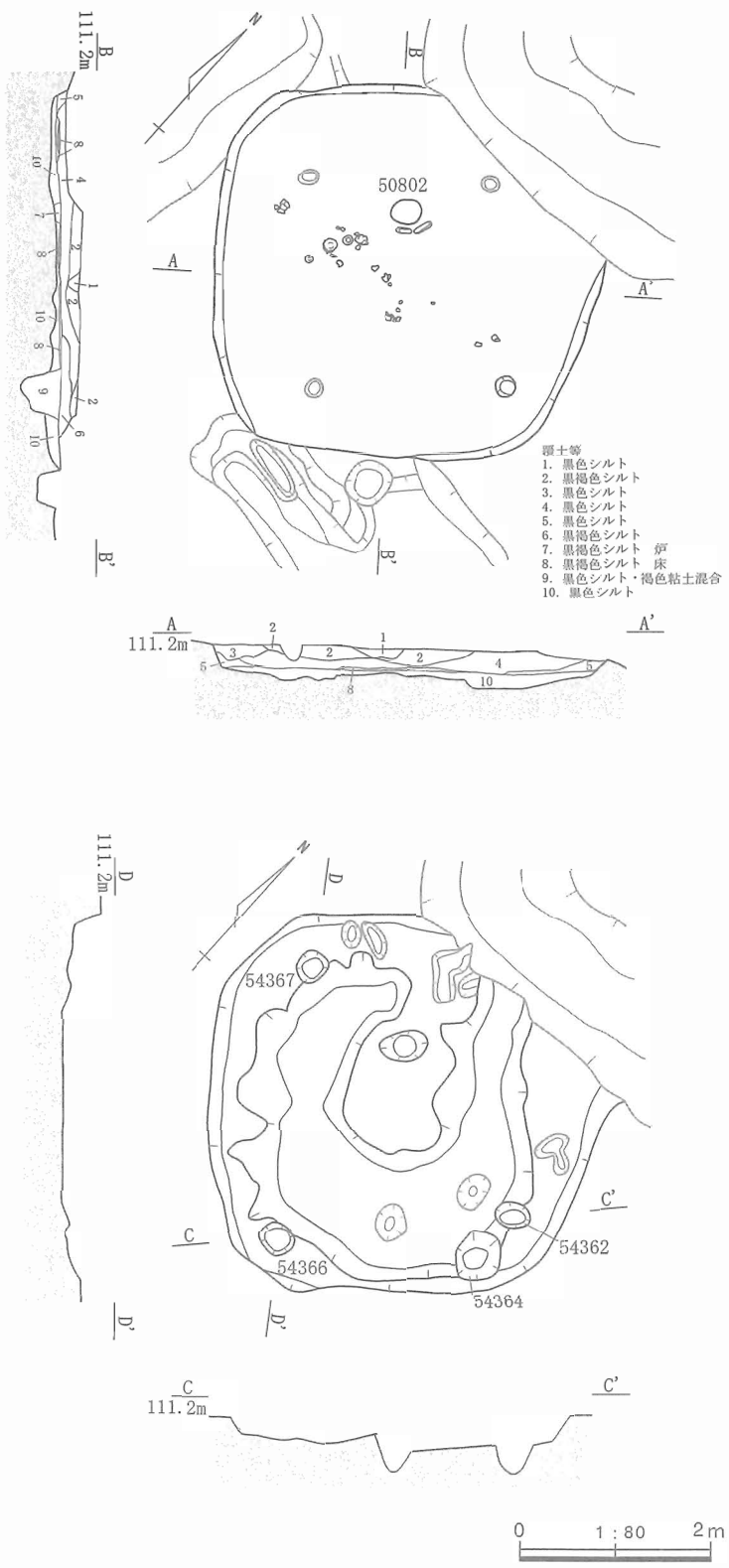
床面は住居の中央付近を中心に、北側では一部炉の奥側まで設けられている。黒褐色シルトを用い、1～3㎝の厚さで硬く敲き締められている。床面上では1か所柱痕を見出すことができた。したがって、柱の際まで床が張られていたことが分かる。

炉は住居の中央やや奥側に設けられている。直径27cm、深さ８cmの円形状の掘方内に黒褐色シルトを充填し、上面を炉床とする。炉床は直径25～34cmの楕円形をなし、炉から外れた西側に幅６cm、長さ17～21cmの長細い焼けていない自然礫を二つ直線状に並べて置いている。

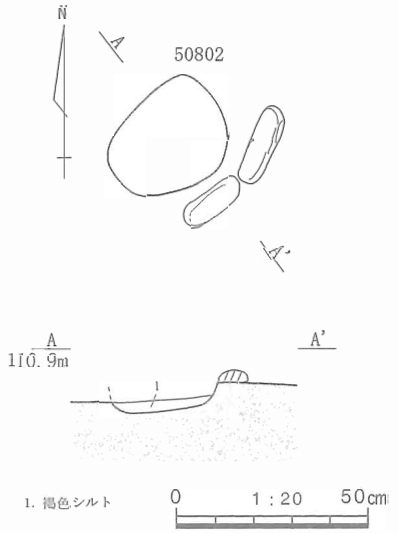
貯蔵穴は床面上では検出できなかった。掘方上の南西縁に明らかになった土坑SK54364が該当するものと考えられる。直径47～50cm、深さ24cmを測る円形を呈する。床面の高さを勘案すれば、本来は30cm程度の深さであったろう。

壁溝は見いだせなかった。平面・断面ともに把握できず、設けられていなかったことも考慮される。

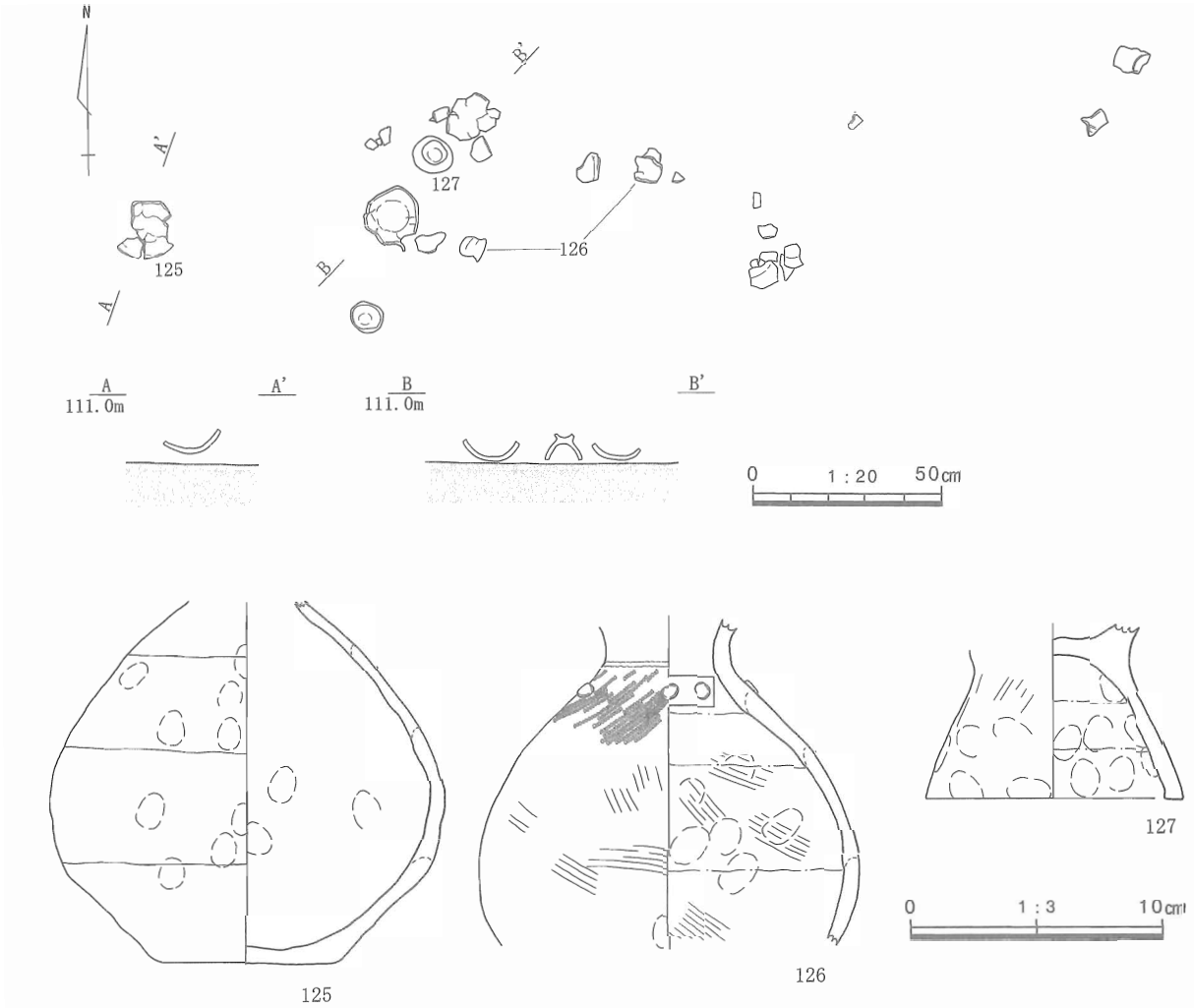
住居の掘方は底面を平らに整え、溝を備える。内部には黒色シルトを充填する。溝は北西側に開く馬蹄形をなし、幅0.63～1.4m、深さ８～15cmとなり、外側の上端が西側で蛇行する。東側では住居のプランとの間が著しく開く。柱穴と溝の位置関係は自然なので、切り合う他の遺構等を誤認している可能性がある。



第181図　SH50802平面・断面図（床面・掘方）



第182図　炉50802平面・断面図



第183図　SH50802遺物出土状況・遺物実測図

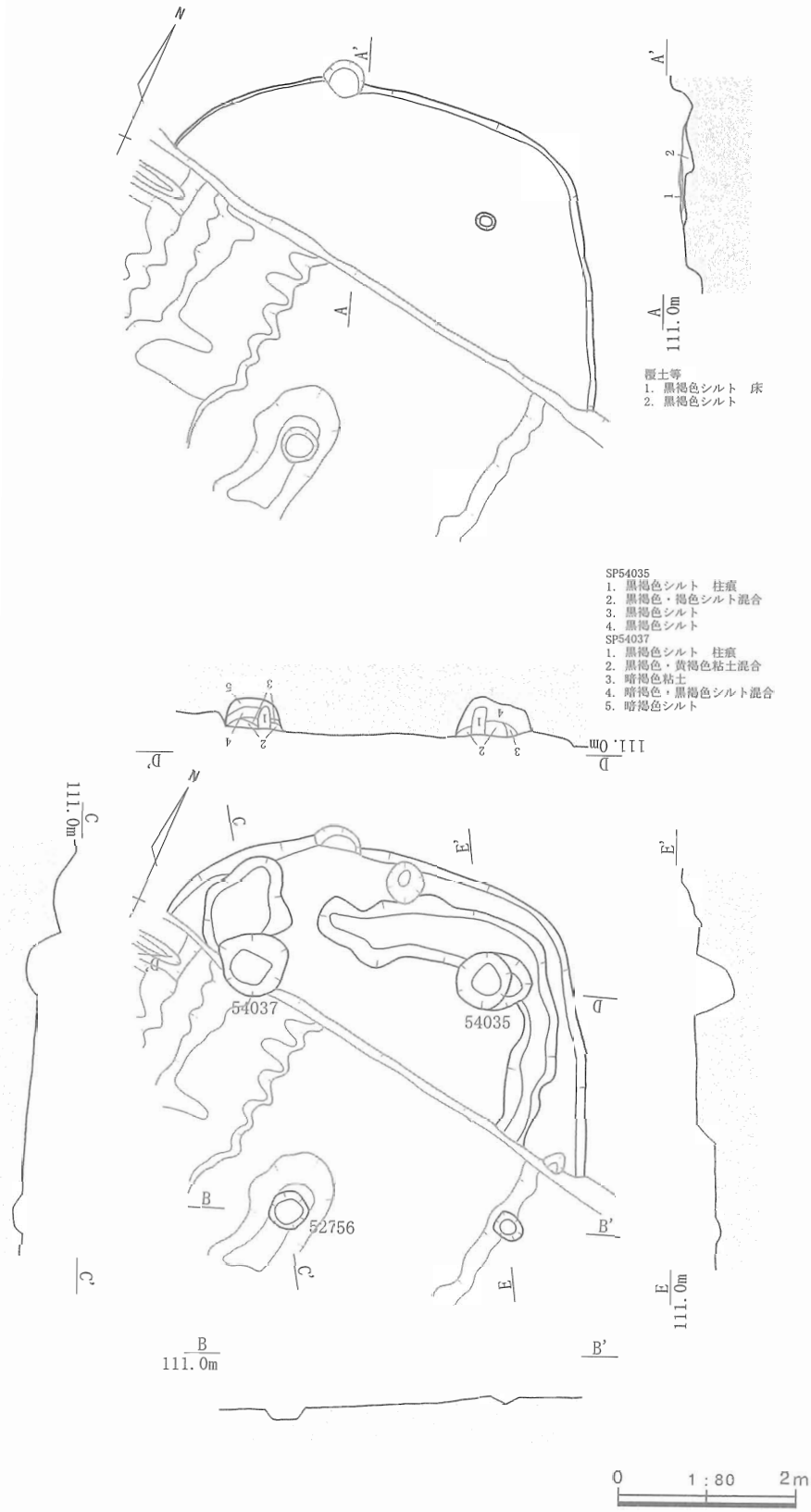
柱穴の掘方は3か所で検出された。北側の1か所はSZ50880により壊されたものと考えられる。直径28～35cmの円形状あるいは隅丸方形状を呈し、切り合いは認められない。SP54362以外は掘方底面と同等程度とかなり浅く華奢である。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.9m、短手方向で同様に2.5mとなる。

【遺物】遺物は床面上から土器が出土している。2個体分の壺と1個体分の台付甕が破片となって住居中央付近に東西方向に散らばっていた。壺の底部と台付甕の台部が床面上に正位で据えられ、大破片が台付甕の台部を挟んで一直線上にある。破壊された後に意図的に置かれているのであろう。また、他の楕円形～隅丸方形の住居と同様に、それぞれの個体はいずれかの部分が失われているので、この場で壊されてそのまま放置されたのではない。

125は壺の底部～肩部である。風化が進んで調整方法はよく把握できない。成形時についたとみられる指頭痕が全体的に観察される。

126は壺の腰部～頸部である。外面はハケ調整の後に肩部に縄文を施して2個1対の円形浮文を貼り付ける。この文様帯の上端にはハケ工具を用いた沈線が横方向に付けられている。内面はナデ調整の後にハケ調整を加える。接合痕を中心に成形時の指頭痕が観察される。

127は台付甕の台部である。これも風化が進んで調整痕が失われている部分がある。ナデ調整の後にハケ調整を加えていることが外面で判明する。また、成形時の指頭痕が頻繁に観察される。



第184図　SH53243平面・断面図（床面・掘方）

SH53243（第184図）

【遺構】M19～M20グリッドで検出された。天地返しの撹乱によって破壊され、北側のおよそ2/5が残存するのみであった。残存個所の一部には黒褐色シルトの床上覆土が10cmの厚さで確認された。

床面は黒褐色シルトが用いられ、住居の北側に１cm内外の厚みで検出された。ここ以外にも床面は広がっていたものと考えられるが、検出面が床面よりも下がって失われている。床面上では東側のSP54035の位置に直径18～25cmの楕円形の柱痕が観察されたので、床は柱際まで張られていたことが分かる。

炉は検出されていない。断面図でもわかるように撹乱の影響を受けて南側では検出面が下がっている。この影響で炉は破壊されているものと考えられる。壁溝・貯蔵穴も明らかでない。壁溝は平面・断面でも観察できず、貯蔵穴は該当する土坑が見当たらない。元来設けられていなかったことも考慮される。

住居の掘方は底面を平らに整え、溝を設ける。掘方は北側に認め

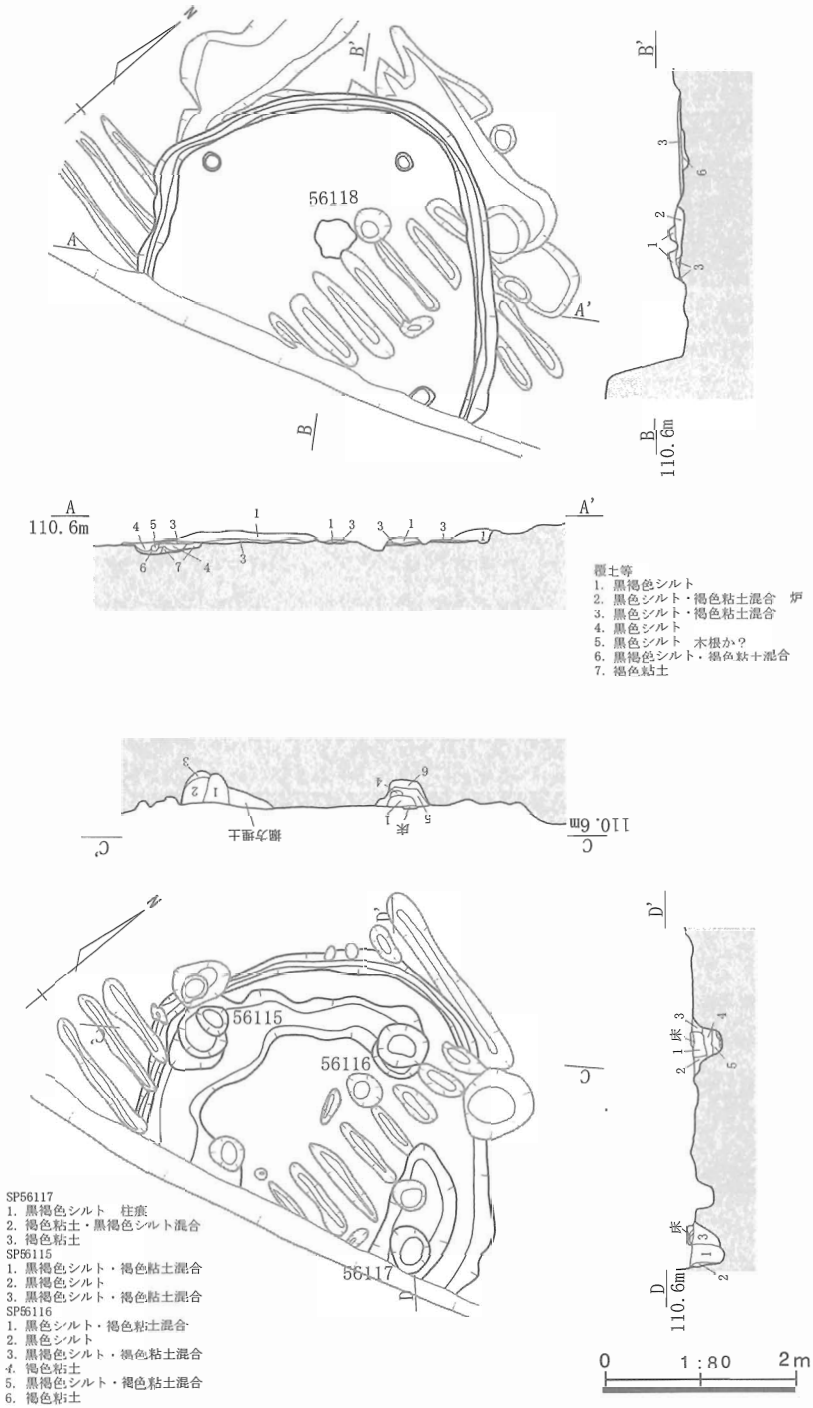
られ、南側は撹乱によって失われている。溝は北側に開くC字状を呈するが、西側が狭くなるため南北で途切れる２本の溝で構成されるのかもしれない。幅0.37～１m、深さ３～11cmとなる。

柱穴の掘方は４か所で確認されている。直径60～75cmの円形状を呈し、南側の撹乱中で検出された二つも同様な規模であったと推測される。SP54035・54037の断面では幅13～15cmの柱痕が観察される。SP54035では同規模の柱穴が切り合っているように見え、東側から柱痕の残る西側に従来の柱穴の内部をさらった上、挿げ替えたと考えられる。柱穴の間隔は長手方向に芯々で3.8～3.9m、短手方向で同様に2.5～2.65mとなる。

SH52069（第185図）

【遺構】N20～O21グリッドで検出された。南側は調査区外となり検出されていない。上面は天地返しによる撹乱が床面まで及んでいる。検出面では部分的に床上覆土である黒褐色シルトが最大10cmの厚みで残存していた。

床面は褐色粘土混じりの黒色シルトが用いられ、３～５cmの厚みで硬く敲き締められている。床面上では直径16～20cmの柱痕と考えられる円形のプランを３か所で検出している。これらはSP56115～56117の柱痕であると考えられる。

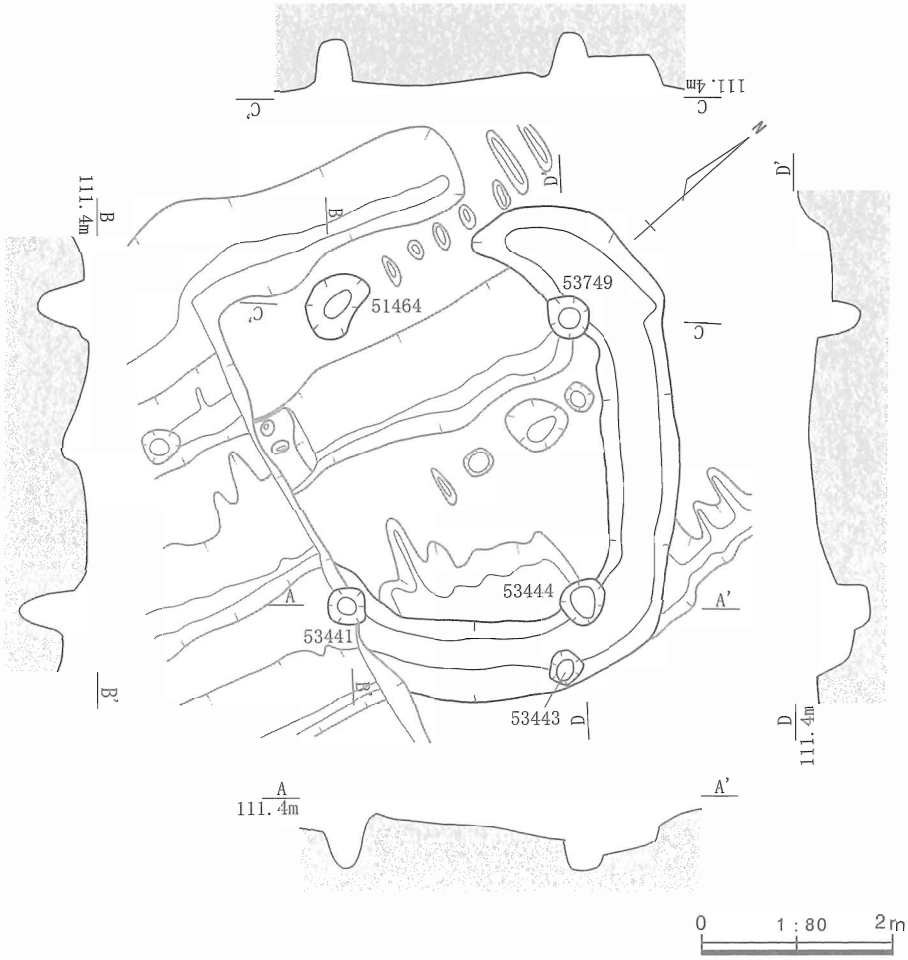


第185図　SH52069平面・断面図（床面・掘方）

炉は住居の中央やや奥側に設けられている。直径53cm、深さ７cmの円形状の掘方内に黒色・褐色粘土を充填し上面を炉床とする。炉床は直径30～40cmの楕円形状となり、２cmほどの深さが明赤褐色に焼け締まっている。南側縁辺は土手状に２cm程度盛り上がっている。

壁溝はプランが検出された範囲の縁辺全てに巡っている。幅12～24cm、深さ２～８cmとなり、西側により深くなる一部がある。また、貯蔵穴は調査区外となり検出されなかった。

住居の掘方は底面を平らに整えて周囲に溝を巡らせる。溝は北側で途切れ、南西側の内法が内側に屈曲しているので東側の溝と調査区外でつながったC字形を呈するものと考えられる。幅0.32～0.85m、



第186図　SH51224平面・断面図（掘方）

深さ１～７㎝となる。南西側では掘方の立ち上がりに沿っているが、その他の部分ではやや内側に入り、17～30㎝のテラス状の掘り残しが外縁部に生じている。

柱穴の掘方は３か所で検出されており、他の１か所は調査区外となる。SP56116・56117は住居の掘方から50㎝程度の間隔を置いているが、SP56115はごく近接している。SP56117の断面に幅20㎝の柱痕を検出した。他の二つについても床面で柱痕が観察されているので残存している筈であるが、柱穴の中心から外れていたと見え、柱穴の中央を通した断面では把握できなかった。また、SP56115では三つの柱穴が切り合っているものと考えられる。SP56116は柱穴の南側に浅い掘り込みを伴っている。柱穴の間隔は２～2.2mとほぼ等間隔となる。

SH51224（第186図）

【遺構】Ｌ21～Ｌ22グリッドで検出された。天地返しの撹乱により掘方の溝が露出した状態であった。

掘方に伴う溝は西側で開くＣ字状をなし、幅0.62～１m、深さ14～28㎝となる。

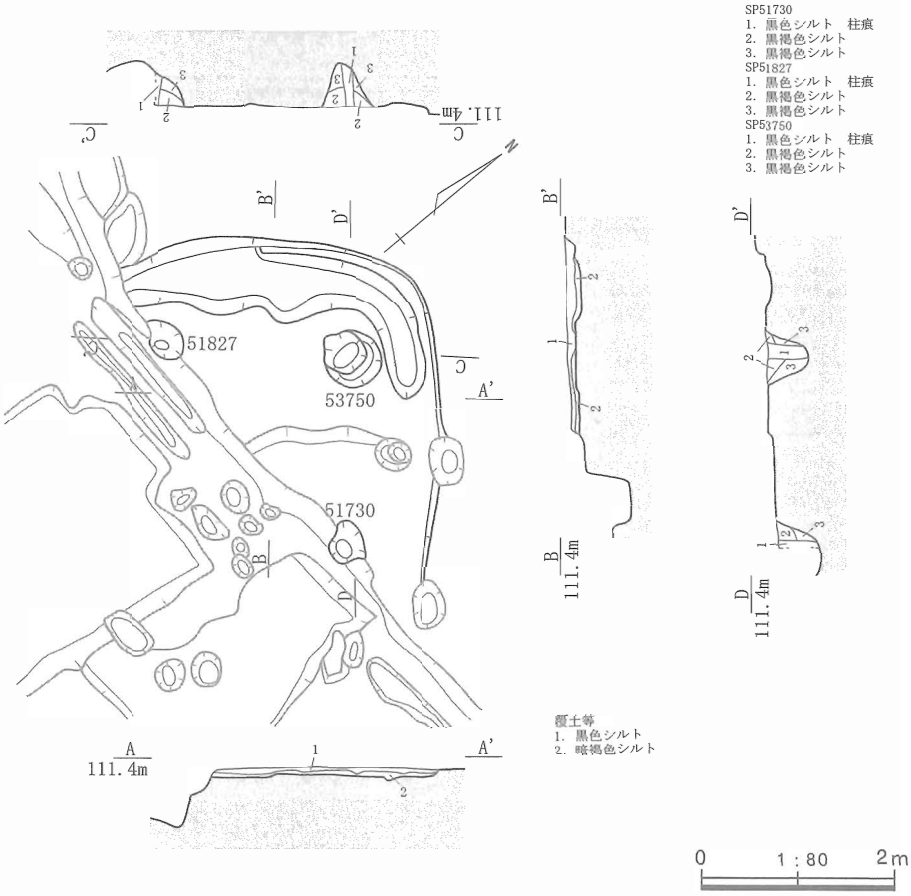
炉、壁溝は撹乱によって失われている。痕跡も見当たらず特定できない。

貯蔵穴は南東側の縁辺にある直径38㎝、深さ16㎝の円形状を呈する土坑SK53443が該当するものと思われる。掘方底面とSK53443の底との差は53㎝前後となるので、床面の高さを考慮すれば60㎝程度の深さがあったものと考えられる。柱穴は４か所で検出された。切り合いをもつものはなく、柱穴の間隔は長手方向に芯々で３～3.2m、短手方向で同様に2.5mとなる。

SH51731（第187図）

【遺構】M21～M22グリッドで検出された。南側のおよそ1/2を天地返しの撹乱によって失っている。住居の掘方自体が浅かったせいか、検出面は掘方埋土中となった。したがって、掘方底面で住居に伴う遺構を検出することとした。掘方埋土には上位に黒色シルト、下位にⅠ層とⅡ層が混合してできた黒褐色シルトが用いられている。充填する土を選別している可能性を感じさせる。

掘方の底面は平らに整えられ、溝を設ける。溝は北西側の縁辺に残存しているのみで他にはみられない。幅0.4～0.8m、深さ3～5cmとなり、南西側でより幅が広くなる。



第187図　SH51731平面・断面図（床面・掘方）

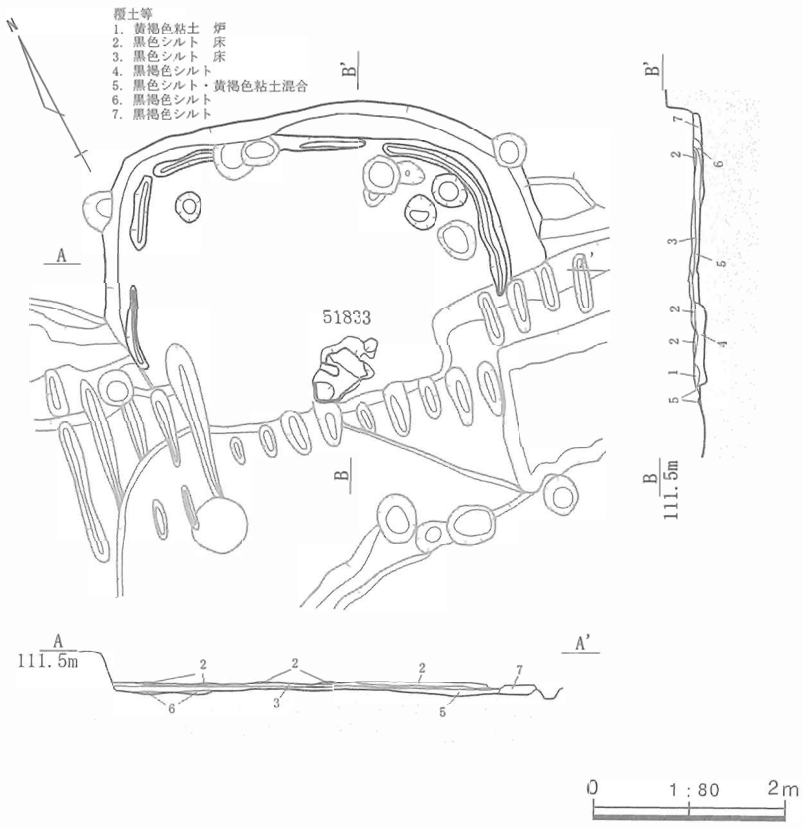
炉、壁溝、貯蔵穴は把握できなかった。炉は熱染みも検出できなかったので、検出面よりある程度高い位置に設けられていたものが、床面とともに失われたと推測される。壁溝は断面でも確認できていないので設けられていなかったことも考慮される。貯蔵穴は天地返しの撹乱で失われているのであろう。

柱穴は3か所で検出されている。他1か所は撹乱によって失われている。直径45～60cmの円形状をなし、柱穴の切り合いや抜き取り穴は伴わない。柱穴の断面にはいずれにも柱痕が観察された。SP51730・51827は撹乱で半ばから失われるが、53750では14cmの幅で把握された。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2m、短手方向で同様に1.95mとほぼ等間隔となる。

SH51749・54624（第188～189図）

【遺構】M22グリッドで検出された。南側のおよそ2/5が天地返しによる撹乱で壊されるほか、SH51844と一部が切り合っている。SH51844と切り合う部分は撹乱によって明確に新旧関係を把握できなくなっているが、形態的には51844が古くなるものと思われる。検出面は黒色シルトを主体とした床上覆土中で、掘方底面まで掘削する過程で3時期の住居が重複していることが判明している。調査時には上位の2時期をSH51749、最下位をSH54624として区別していた。ここでは連続性を考慮して構築された順番に上位をその3、中位をその2、下位をその1として説明する。

その3は隅丸方形の住居である。床面は黄褐色粘土のブロックを含む黒色シルトを用い1～4cmの厚さで硬く敲き締められている。この床面は、広く住居の縁辺部にまで及んでいる。床面上では柱痕を3か所で検出している。SP54188にあたる部分では柱穴の掘方よりも一回り小さな間口を保つため、柱際まで床が設けられていた可能性が高い。一方、SP54192・54193の部分では柱穴の掘方と同規模の間口



第188図　SH51749・54624平面・断面図（床面）

が検出されている。抜き取って再設置する際には床面の補修が伴っていなかったものと考えられる。

炉は住居の中ほどに設けられている。基本的にはその２に伴う炉の位置を継承している。その２に伴う炉の掘方上位にその３の床面が張られるので、実際はその３の平面中に図化してある炉の南側の一部が使用されていたにすぎない。

壁溝は残存する部分のほぼ全てを巡っている。幅10cm内外、深さ２cm程度で、北側の一部が途切れている。なお、断面図は壁溝がごく浅くなる部分にあたったのでうまく図化されていない。

貯蔵穴は該当する土坑が特定できなかった。

その２はその３の床面を剥がした段階で検出している。床面は２面にわたって設けられていたようでいずれも黒色シルトと黄褐色粘土の混合土を用いている。上位の床面は住居の縁辺から0.8～1.3mの範囲には設けられていない。この部分には下位の床面が露出していたと考えられ、上位の床面の厚みにあたる３cm程度の段差が生じていたようである。下位の床面は２～５cmあり上面が硬く敲き締められるが、縁辺部に行くに従って漸移的に硬化面がみられなくなる。改めて床の材料を敷いているのではなく、掘方上に敷き均した土の上面を工作しているようにみえる。

炉は住居の中央やや東寄りに設けられている。長さ１m、幅0.7m、深さ３～８cmの楕円形状の掘方内に黒褐色シルトを充填する。掘方内には焼土ブロックが混入し炉床の平面形状も不定型となるので、床面の張り替えの際に造り替え・造り増しがなされていることが分かる。

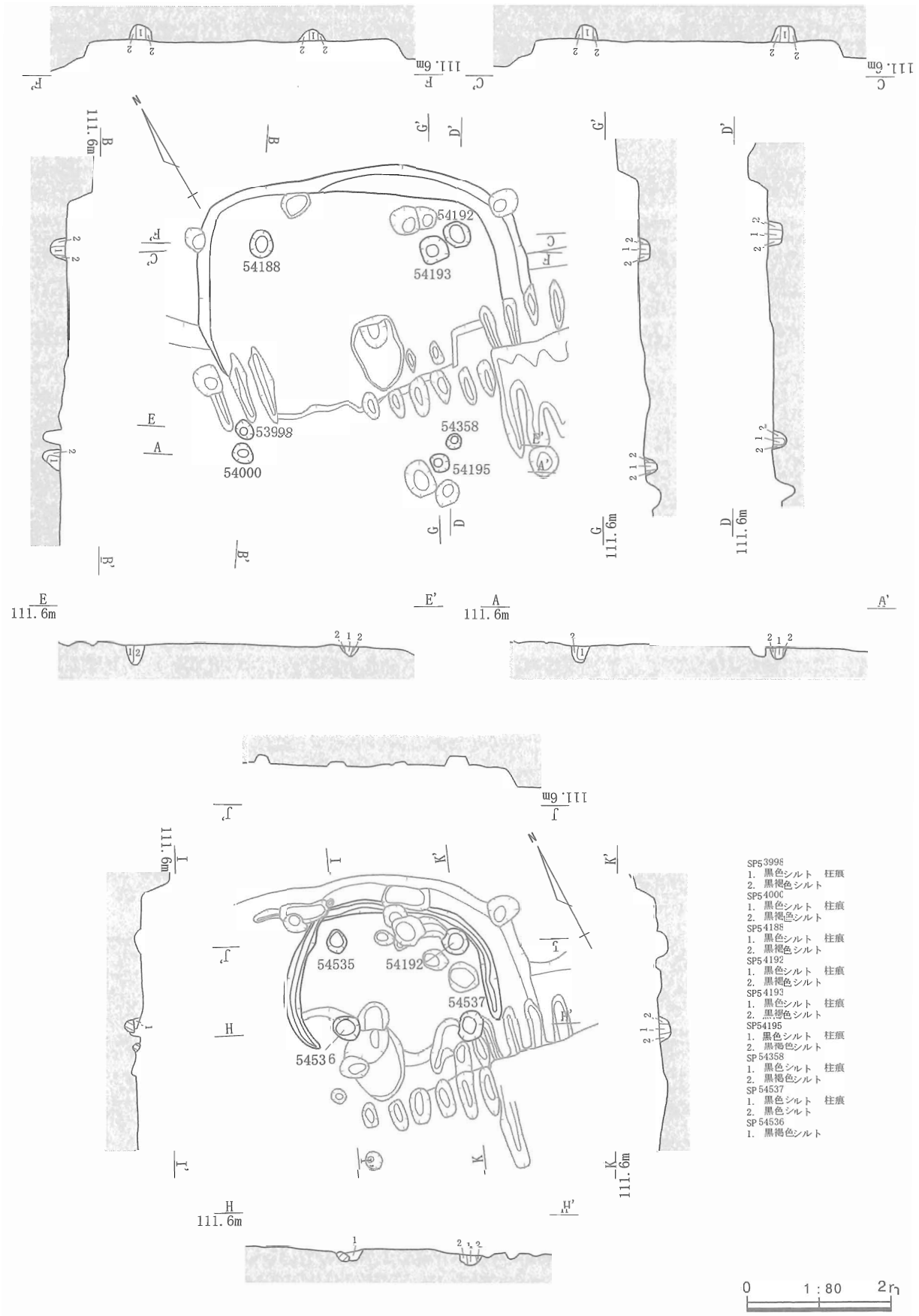
柱穴の掘方は７か所で検出されている。北側の３か所は直径30～40cmの円形あるいは隅丸方形状を呈する。南側の撹乱内で検出した柱穴も本来は同様な規模であったろう。北側のSP54188以外は二つの柱穴が対になっており、いずれでも内側から外側へ挿げ替えが行われている。SP53998以外には幅10cm前後の柱痕が認められた。掘方が比較的浅いので古い柱はその場で抉て抜かれたのであろうか。

その１はその２・３の東側に重複している小型の住居である。その２・３の北東側プランに見えるわずかな膨らみはその１の上端の形状を反映しているのかもしれない。特に床面は把握できなかったので、掘方の底面をそのまま用いている可能性がある。

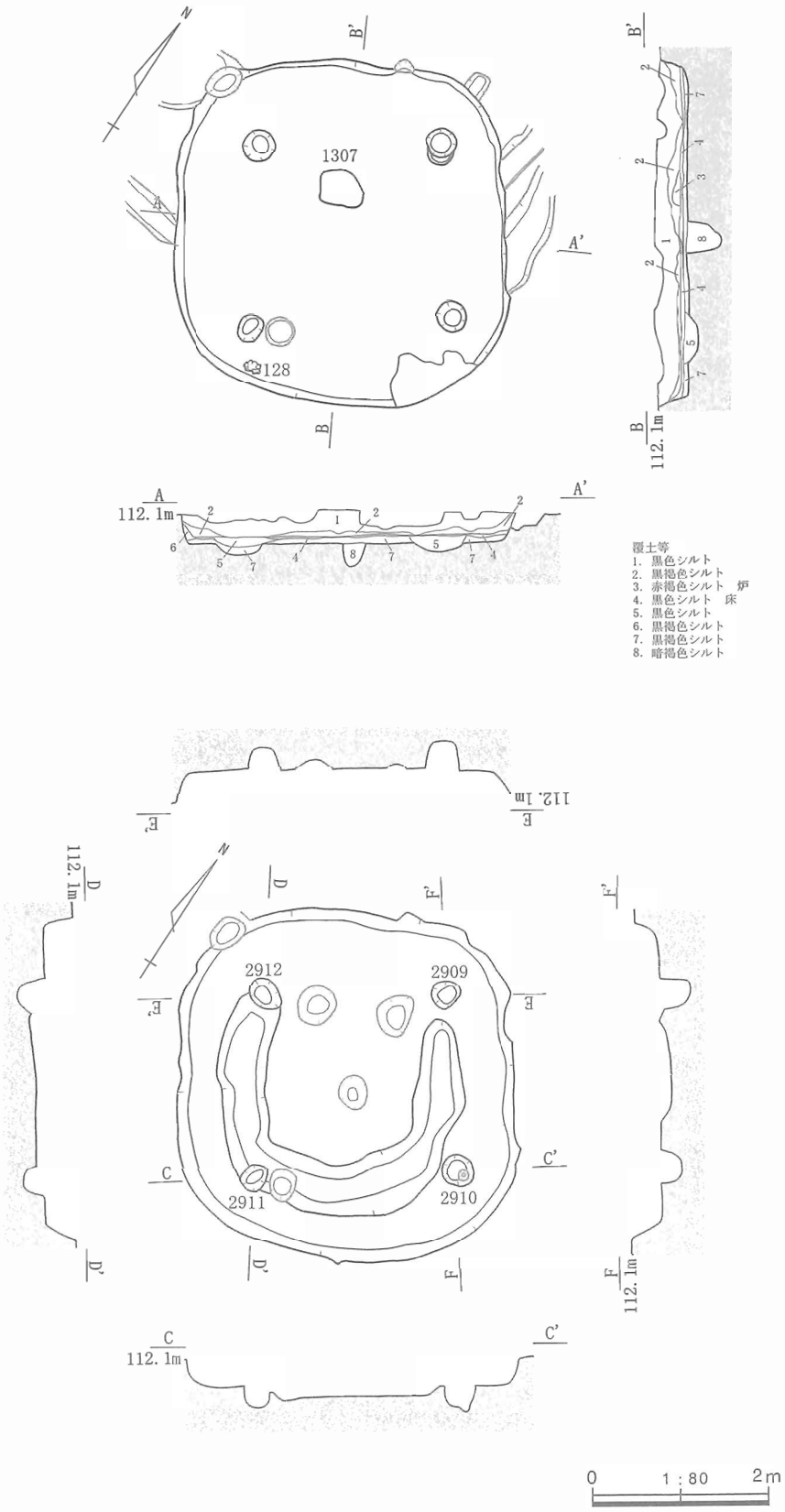
壁溝は北側を巡っている。幅10～20cm、深さ１～４cmとなる。南西側で急に内側に折れるので、南東側が出入り口となる長軸３m、短軸2.3mほどの楕円形の住居であったことが分かる。

柱穴の掘方は４か所で検出された。直径28～35cmの円形あるいは楕円形を呈し、SP54537の断面からは柱痕が検出されている。柱穴の間隔は長手方向に芯々で1.7m、短手方向で同様に1.2mとなる。

このように、楕円形から隅丸方形へ変化する過程を把握できたことは貴重な発見であった。



第189図　SH51749・54624平面・断面図（床面・掘方）



第190図　SH1307平面・断面図（床面・掘方）

SH1307（第190～191図）

【遺構】N30～O30グリッドで検出された。SH1313の周囲を巡る溝を切っているため1313より新しく設けられたものと判断される。検出面は黒色シルトを主体とする床上覆土中で上面に耕作による撹乱を一部で被るものの、床面まで25cmと住居の掘方が意外と深く構造を良く残していた。

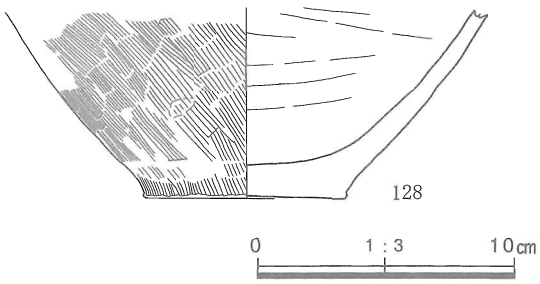
床面は黒色シルトを用い、２～３cmの厚さで硬く敲き締められている。掘方の埋土と近似した質なので、掘方内を整えた後に連続して張り込まれたものと考えられる。縁辺部では掘方の立ち上がりに一部を盛りつけるように張り込んでいる。

床面上で柱穴の掘方が４か所とも検出されている。柱の周囲には床が設けられていなかったものと考えられる。また、SP2909の南側には小穴が切り合っている。この部分のみが抜き取り穴によって柱が抜き去られている可能性がある。

炉は住居の中央やや奥側に設けられている。炉は掘方を伴わない。床面上に直接直径42～50cm、５～８cmの高さにシルトを盛り付け、上面に北西側にやや傾く炉床を設ける。熱のために変色して

いるが、元来は黒褐色シルトを用いていたと考えられる。

壁溝は床面が住居の掘方立ち上がりまで張られているので、備えられる余裕がない。貯蔵穴も該当する土坑が見当たらないので、設けられていなかったものと考えられる。



第191図　SH1307遺物実測図

住居の掘方は底面を平らに整えて溝を設ける。溝は北側で開くU字形に住居の立ち上がりと平行して掘られ、幅0.42～0.7m、深さ10～13cmとなる。住居の立ち上がりと溝の外法は0.4～0.6m隔たっており、この間にテラス状の平坦部を残す。掘方の埋土は黒色シルトで、溝部分にのみやや明るい色調のシルト～粘土ブロックが混入している。一旦掘方内を黒色シルトで平らに整えた後に溝を掘削したため、混じり気のより強い土で再充填されたのであろう。

柱穴の掘方は4か所で検出した。柱の挿げ替え、抜き取りに伴う切り合いは見られない。SP2909の床面上でみられた抜き取り穴も掘方を大きく掘削するものではない。直径27～39cmの円形を呈し、SP2909はやや深いがほぼ同じ深さで整えられる。柱穴の間隔は芯々で2～2.1mとほぼ均等で、C－C′断面のみが2.3mとやや広くなっている。

【遺物】床面上の南側縁から土器が出土している。128は111と同様の折り返し口縁をもつ鉢の底部と思われる。底部～胴部過半のみが割り取られて床面上に据え付けられるように置かれていた。外面はやや粗いハケ工具を用い、下から上に掻き上げるように調整を施している。内面には横方向に板ナデを加えて平滑に整える。

SH51780（第192図）

【遺構】L24～M24グリッドで検出された小型の住居である。南側の一部を確認調査トレンチT1－4によって切られている。検出面は床面上であり、床上の覆土は把握できていない。小型の住居には珍しく床面・炉を備えている。

床面は黒色シルトを用い、2～3cmの厚みで硬く敲き締められている。東西断面では途切れがちではあるが縁辺部にまで設けられていることが把握できる。

炉は住居の掘方埋土上に直接設けられる。掘方埋土から4～7cmの厚みで褐色粘土を盛り上げ、上面を平らに整えて炉床とする。炉床の中央部は被熱して褐色に変色する。この盛り土は下位に行くに従って広くなっているので、埋土を掘削して充填しているわけではない。また、炉床は南側に残存する床面と同等の高さにあるので、炉を設けた後に際まで床面を張っていた可能性を感じさせる。

住居の掘方は底面を平らに整える長方形状を呈する。深く掘削される範囲は北側に偏っており南側はごく浅くなる。

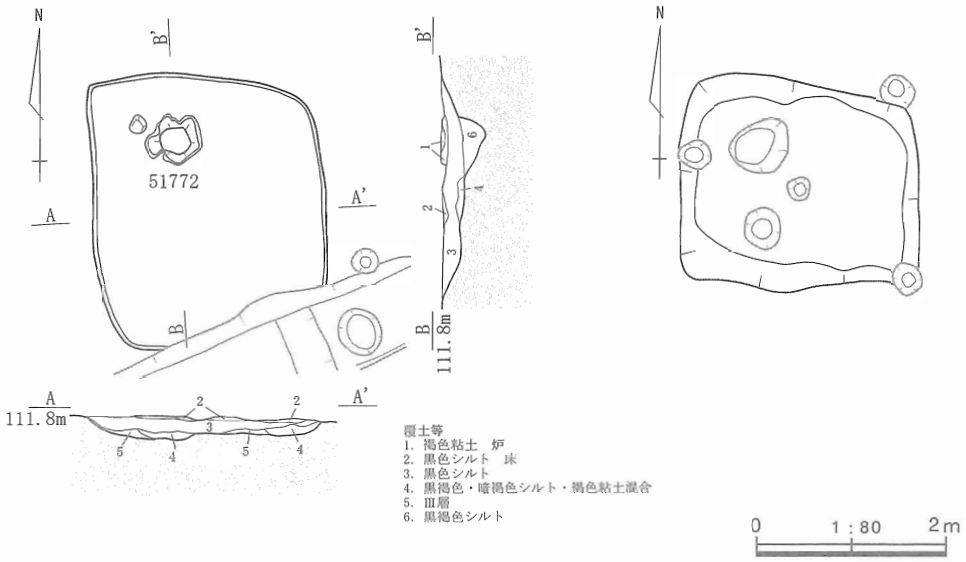
柱穴は特定されていない。住居内に主柱穴をもたない上屋構造であったと想像される。

SH1685（第193図）

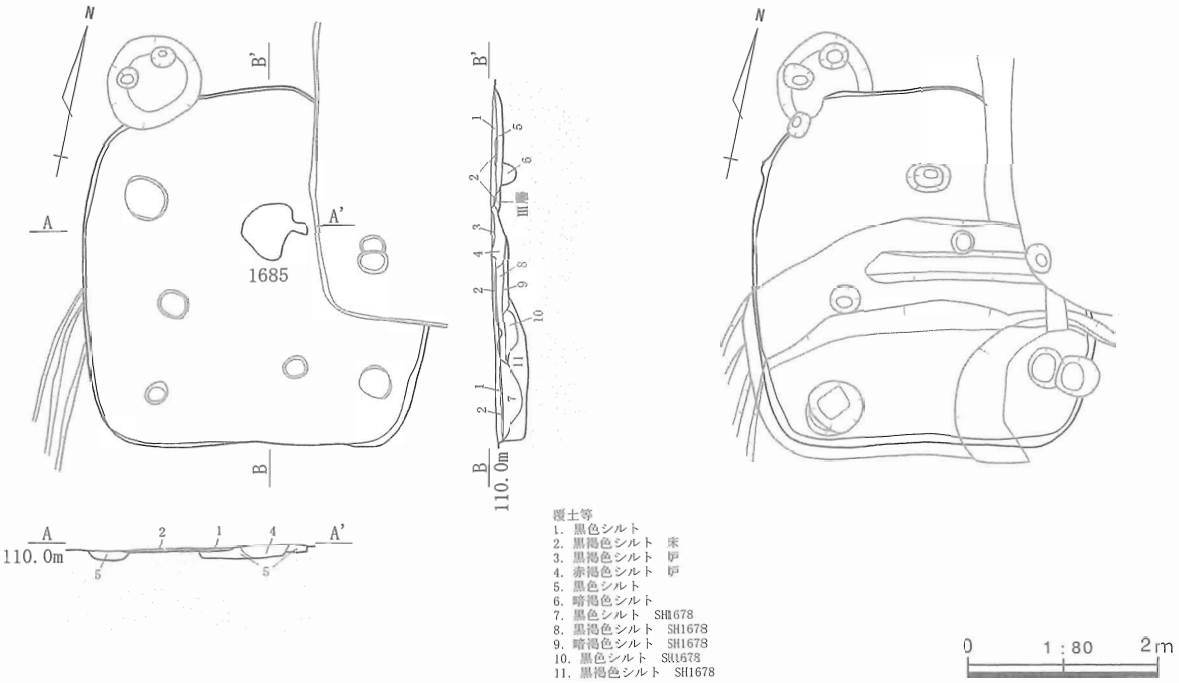
【遺構】L29～M29グリッドで検出された。西側を方形の住居SH3271に切られ、南側で楕円形の住居SH1678を壊している。検出面は床上覆土である黒色シルトであり、5～9cmの厚みで残存していた。また、検出面では炉の一部が露出した状態であり、床面直上であるとことが察せられた。

床面は黒褐色シルトを用い、3cm前後の厚みで硬く敲き締められている。西側・北側では住居の立ち上がりから0.5～1mの範囲で床面が明らかでない部分があり、住居の中央付近に重点的に設けられていた可能性が高い。床面上では柱痕を見出すことはできなかった。

炉は住居の中央やや奥側に設けられている。直径50～65cmの楕円形状の掘方内に黒褐色シルトを充填



第192図　SH51780平面・断面図（床面・掘方）



第193図　SH1685平面・断面図（床面・掘方）

して、さらに上位を床面から４cm程度盛り上げている。炉床は直径50～56cmの円形状をなし、東側に10cm程の突出部を作る。上面の周囲は中央部よりも１cm程度とわずかな盛り上がりを土手状に巡らせている。なお、炉床は被熱により赤褐色に変色している。

壁溝は検出されなかった。断面にも見出せなかったので、備えられていなかったのであろう。

貯蔵穴も該当する土坑がなく、設けられていなかったものと考えられる。

住居の掘方は底面を平らに整えるのみで、溝は伴わない。内部は黒色シルトで充填されている。

柱穴も掘方底面を十分精査したが明らかにすることができなかった。調査段階では南東側の小穴を柱穴と考えたが、同様な位置に小穴を見出すことはできなかった。一辺が3.7mを越える住居であるが、主柱穴を持たない上屋構造を備えていたのであろうか。

SH2913（第194図）

【遺構】N30～O31グリッドで検出された。北側でSH1303に切られ、南側でSH2800を壊している。検出時には掘方埋土中に炉が残存していたので、床面に近似した位置と考え一旦記録を採ることとした。

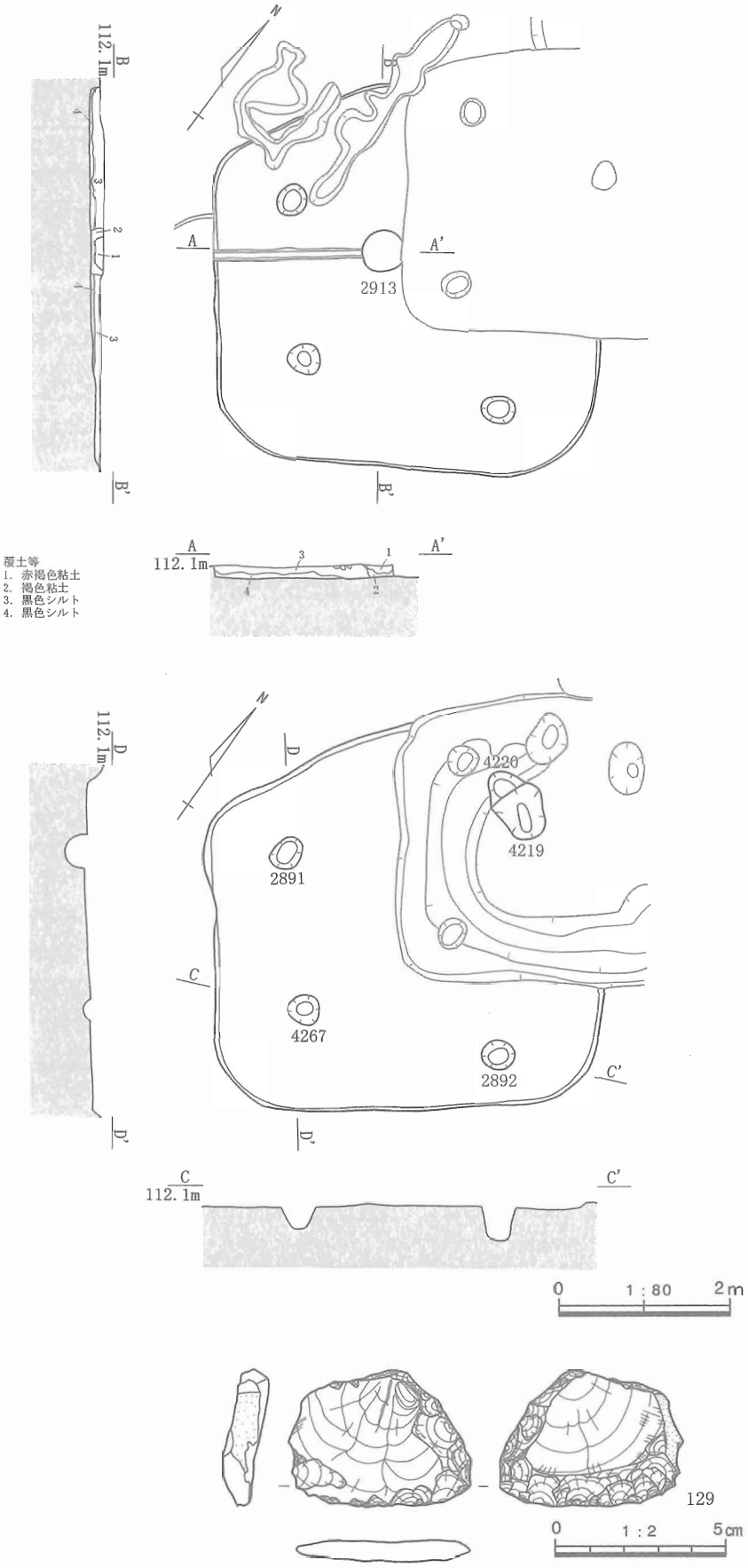
炉は住居の中央やや奥側に設けられている。直径57cm、深さ12cmの円形の掘方内に褐色粘土を充填し、上面を炉床としている。炉床は失われていたが、中央部に赤褐色に熱染みが深くまで及んでいる。

壁溝、貯蔵穴は確認されていない。特に貯蔵穴は該当する土坑が見当たらない。

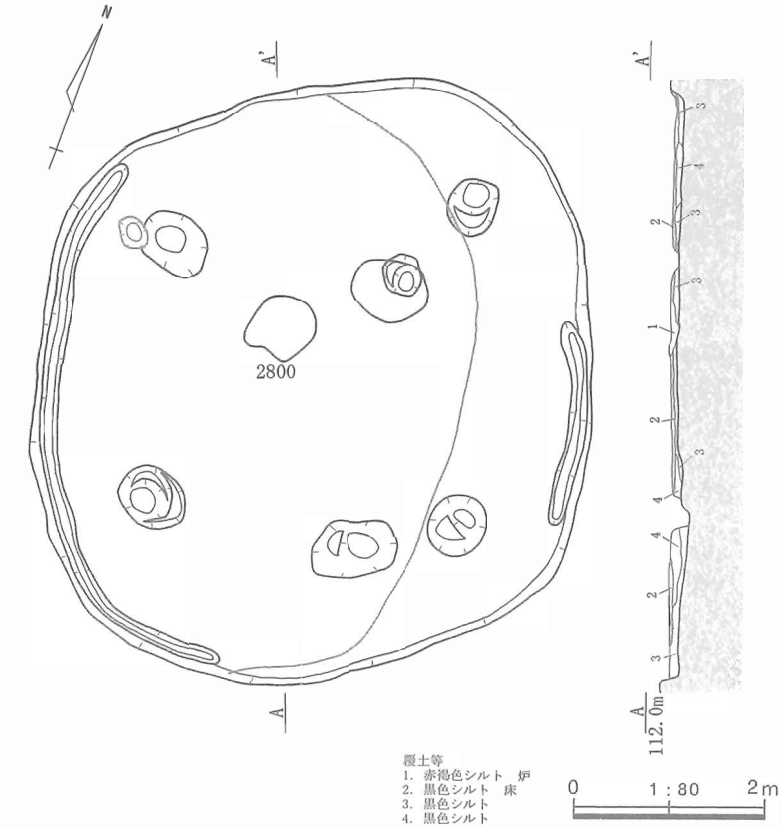
住居の掘方は底面を平らに整えるのみである。北側で大きく張り出し、平面形状が台形状となる。内部には黒色シルトが2層に及び充填されている。

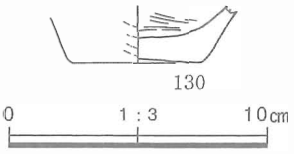
柱穴の掘方は4か所で特定している。南側の3か所は直径35～38cmの円形を呈するが、SH1303で壊される範囲で検出された柱穴は、北側の張り出し部と整合するより大型のSP4219・4220しか該当するものがない。一見不自然な住居のプランは何らかの要因で意図的に作り出されているものと考えられる。

【遺物】129は掘方埋土に混入していた縄文時代のスクレイパーである。片端に節理面をもつ珪質岩の剥片を素材とし2側縁に丁寧に剥離を施して刃部を作りだしている。



第194図　SH2913平面・断面図（床面相当・掘方）、遺物実測図





第195図　SH2800平面・断面図（床面）、遺物実測図

SH2800（第195～196図）

【遺構】O30～O31グリッドで検出された。北側をSH2913に切られ、南側でSH1284を壊している。平面・断面で検討したところ少なくとも３時期の住居が重複しているものと考えた。

当初の住居（その１）は柱穴SP4257・3860・4260・4269で構成される。東側に建て替えられた住居（その２）は柱穴SP4272・4266・4259・4263で構成され、床面・炉を伴っている。最後の住居（その３）はその２から東側に拡張し、SP4272・4263を使いながら再びSP4257・3860の位置に柱穴を穿っている。なお、第195図はその２の床面とその３の掘方の立ち上がりに、その３の炉を合成したものである。

その３は床面直上で検出された。床面は１～５cmの厚みで黒褐色シルトが張られている。炉は中央やや奥側の東よりに設けられている。直径58～70cm、深さ10cmの円形状の掘方に褐色粘土を充填し、炉床は床面よりおよそ４cm高まった位置に設ける。壁溝は東側の縁に認められた。幅16～20cm、深さ４cm前後となる。また、貯蔵穴は該当する土坑がなく、設けられていなかったものと考えられる。

柱穴は長手方向に芯々で2.8～3.4m、短手方向で同様に3.2mと正方形に近い。

床下にはその２の床面との間に黒色シルトが８～12cmの厚みで敷かれて嵩上げされている。

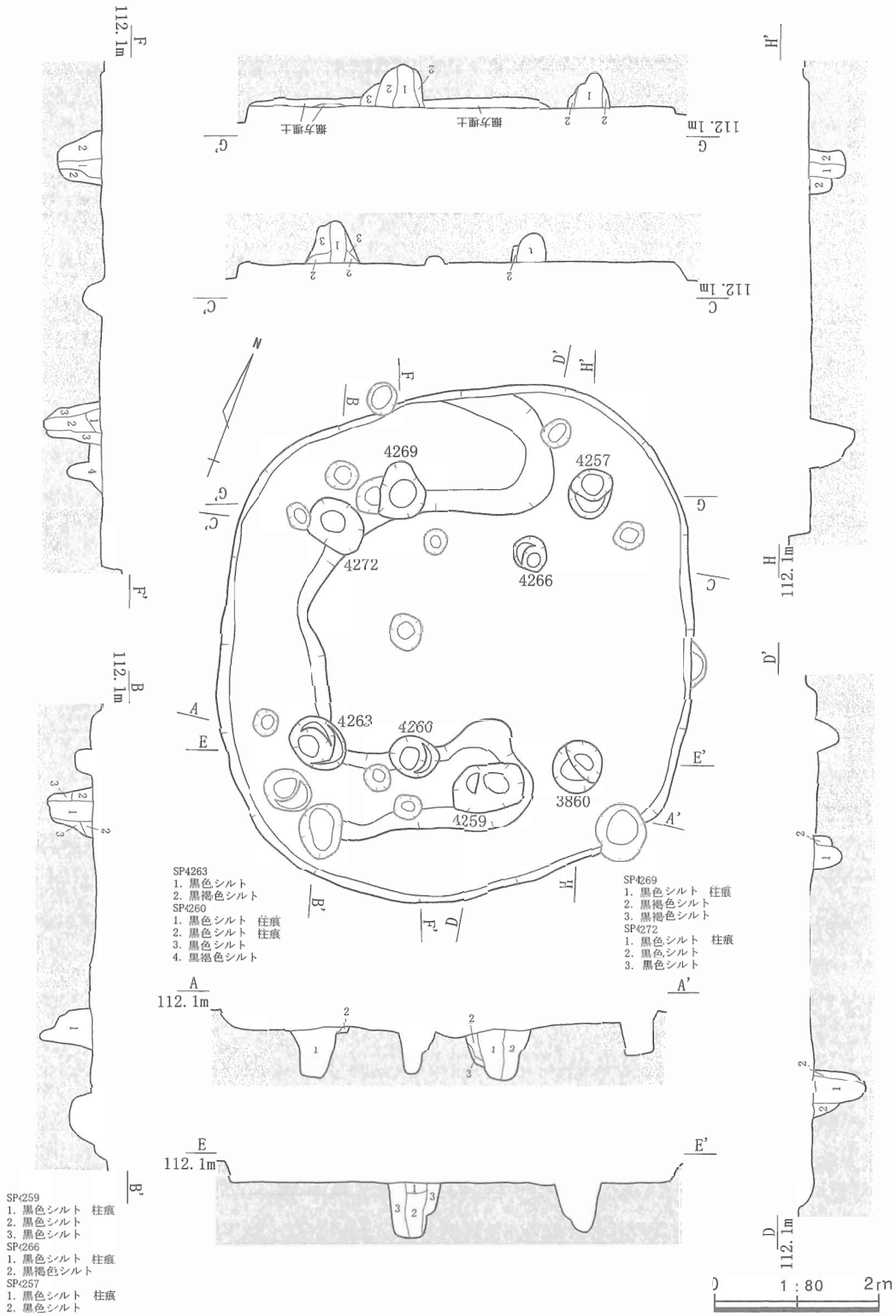
その２はその３の掘方埋土下で検出されているので、西側の立ち上がりは失われている。第195図中に記載した東側のプランは床面の残存線であり、上端は30cm程度より東側に存在していた可能性がある。

床面は黒色シルトを用い、２cm前後の厚みで張られている。炉は中央やや奥側に設けられる。掘方は直径60～75cm、深さ７cm前後の楕円形を呈し、内部に黒色シルトを充填する。炉床は床面とほぼ同じ高さにあり、赤褐色に焼け締まっている。南側には幅15cm、高さ２cmの土手状の高まりを巡らせる。

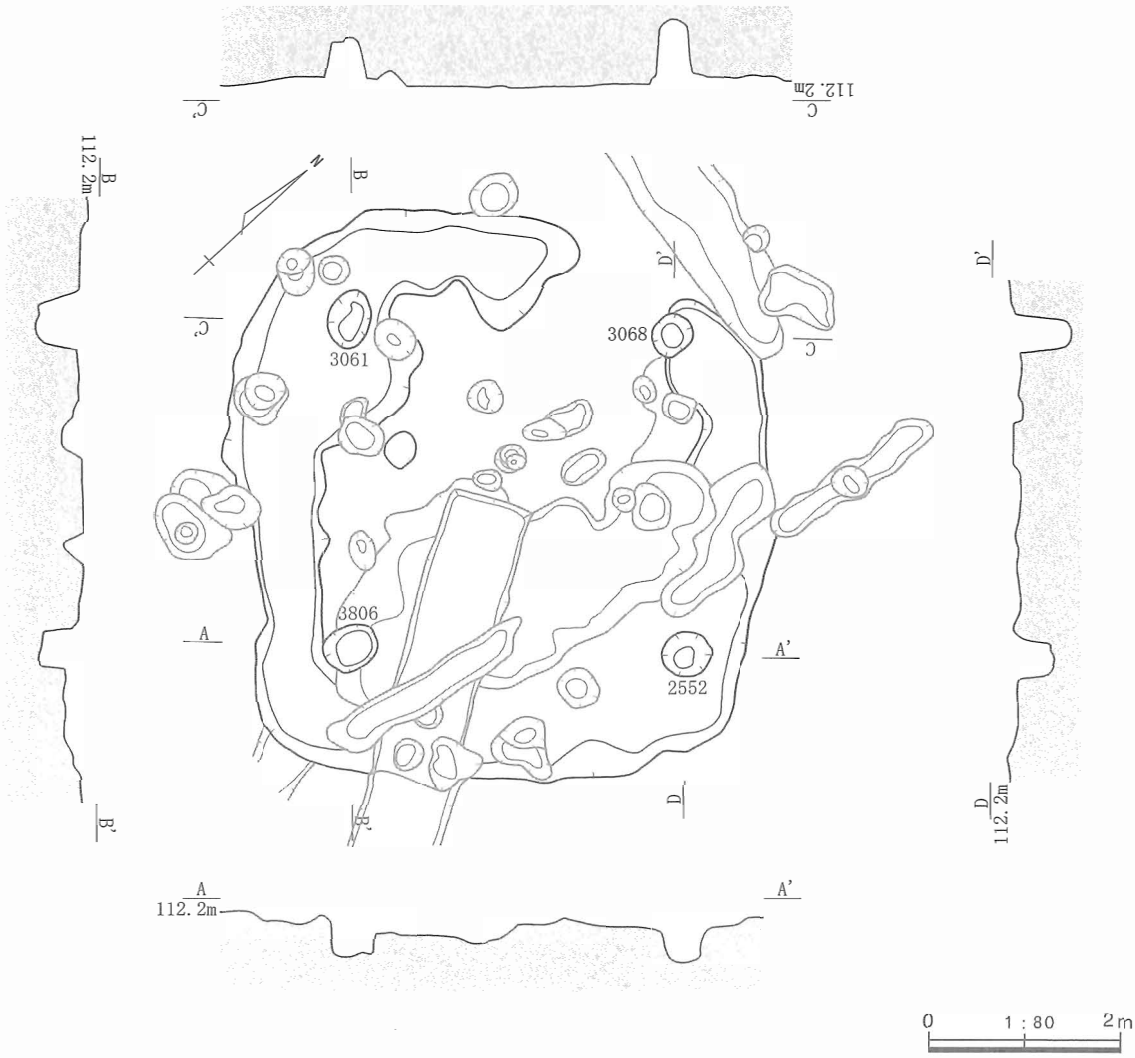
柱穴は長手方向に芯々で2.7～2.9m、短手方向で同様に2.4～2.5mとなる。掘方上で検出された東側に開く馬蹄形の溝はこの住居の範囲に丁度重複するので、その２に伴って設けられたものと考えられる。

その１はその２・３によって住居の一部が把握されたのみである。柱穴の間隔は長手方向に芯々で3.3～3.4m、短手方向で同様に2.1～2.3mとなる。

【遺物】130は掘方埋土から出土した壺の底部片である。ハケ調整を施した後外面のみミガキを加える。



第196図　SH2800平面・断面図（掘方）



第197図　SH2492平面・断面図（掘方）

SH2492（第197図）

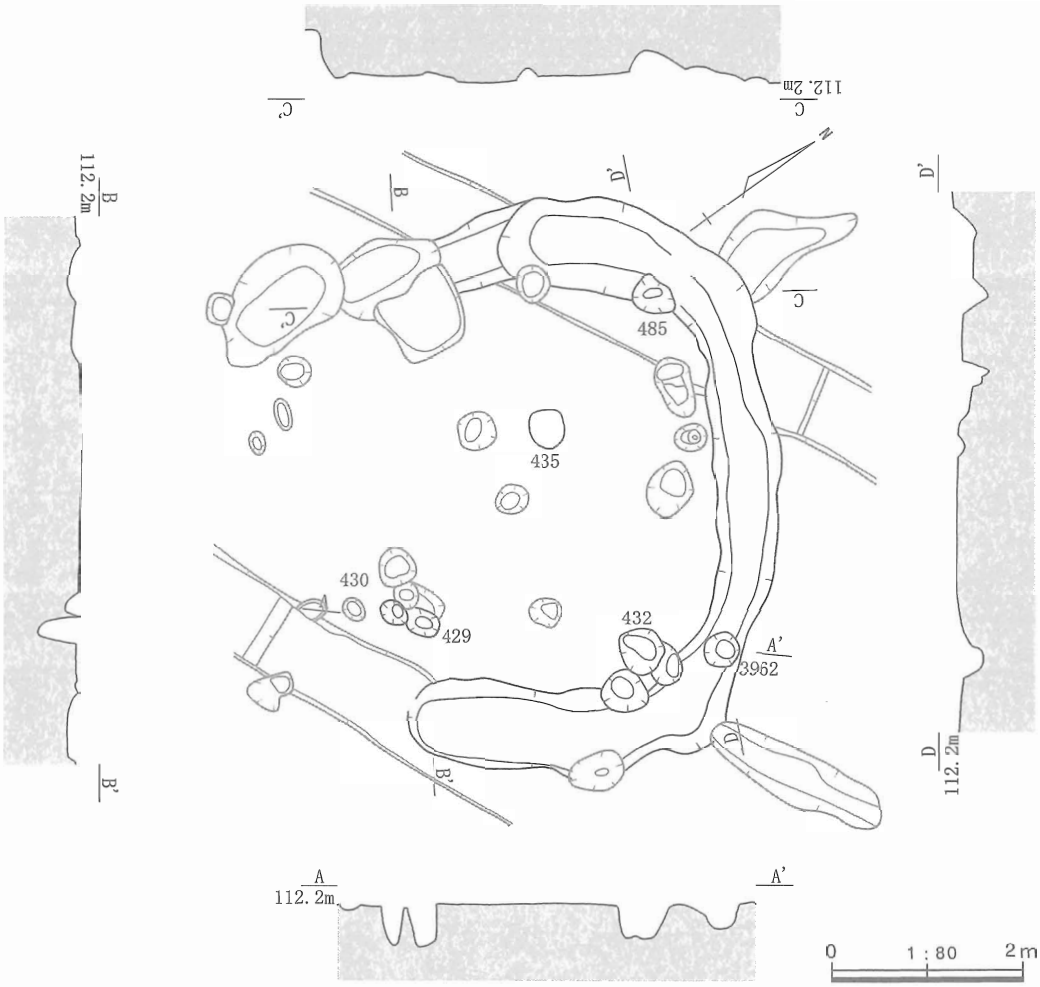
【遺構】Q30～Q31グリッドで検出された。一部を確認調査トレンチT23や天地返しによる撹乱によって壊されている。検出時には床面と掘方埋土の多くは失われ掘方底面の一部しか残存していなかったので、底面で住居に伴う遺構を検出することとした。

住居の掘方は底面を平らに整えて、周囲に溝を巡らせる。溝は北側に開くC字形を呈し、幅0.58～1.84m、深さ４～12cmとなる。外法は比較的直線状に整えられるので、住居の立ち上がりに接していた可能性がある。内法は蛇行する部分があり、特に西側に著しい。

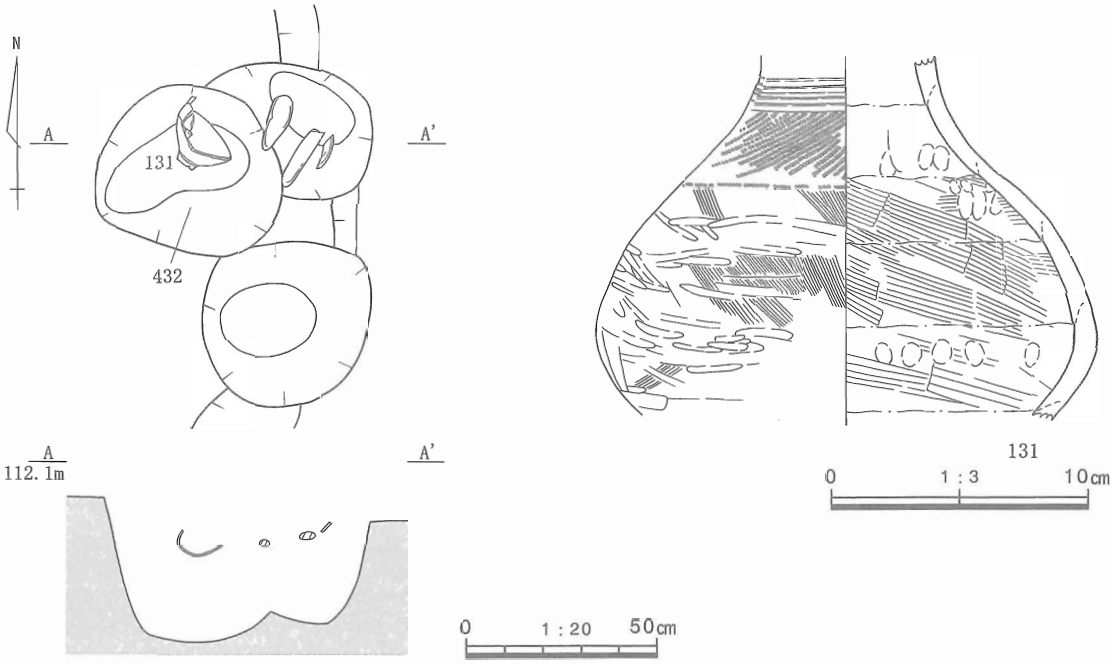
柱穴の掘方は４か所で検出された。直径42～60cmの円形ないしは楕円形を呈し、北側のSP3068は検出面から55cmとやや深いものの、他は40cm程度と深さが揃えられている。また、底面は平らに整えられる。いずれにも柱の挿げ替えや抜き取りに伴う切り合いは認められない。柱穴の間隔は芯々で3.4～3.5mとほぼ揃っている。

壁溝、貯蔵穴は明らかでない。壁溝は床面の喪失によって失われていると考えたい。貯蔵穴は該当する土坑がなく、設けられていなかったものと考えられる。

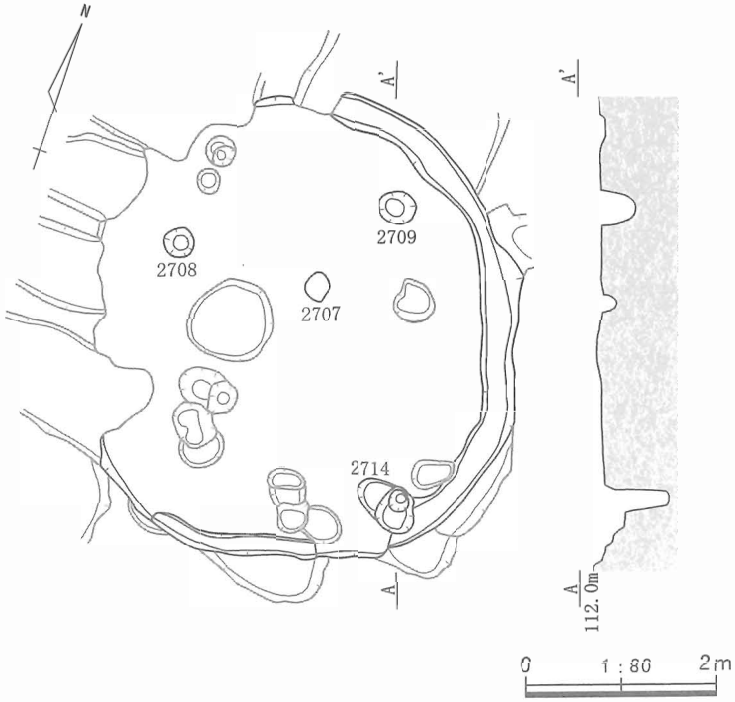
炉は住居の範囲の西側に寄った位置に熱染みとして検出されている。この住居の炉としては著しく偏った位置にあるので、把握できていない別の住居に伴うものなのかもしれない。



第198図　SH492平面・断面図（掘方）



第199図　貯蔵穴SK432遺物出土状況・遺物実測図



第200図　SH2707平面・断面図（掘方）

SH492（第198～199図）

【遺構】R31～S31グリッドで検出された。北側と南側の一部を確認調査トレンチT25・26に切られている。検出面は住居の掘方底面近くであったので、掘方を完掘して住居に伴う遺構を検出した。

住居の床面が失われているので、床面に伴う壁溝や炉の上位部分は失われている。炉の下位部分は熱染みとして住居の中央やや奥側に検出された。直径40cmの円形を呈し、特に掘方を伴わない。住居の掘方底面に熱が伝導する程度の短い間隔に炉床が設けられていたことが分かる。

住居の掘方は底面を平らに整え、周囲に溝を備える。溝は幅0.45～1m、深さ４～９cmで、南西側に開くC字形を呈する。

柱穴は４か所で検出した。直径30～50cmの円形状を呈する。南西側のSP429付近はいくつかの小穴の切り合いが認められるが、南西側の小穴SP430以外は底面が20cmほど浅く、柱穴か否か確証が持てなかったので図中では撹乱扱いとしている。北西側の柱穴は撹乱の影響で検出されなかった。柱穴の間隔は長手方向に芯々で3.8m、短手方向で同様に3.15mとなる。

貯蔵穴は、SP3962の南西側にある小土坑SK432が該当すると考えられる。直径45～49cm、深さ37cmの円形を呈し、床面からの深さを考慮すれば40cm以上の深さがあったものと推測される。内部からは土器などの遺物が出土している。131は頸部と底部が割り取られて、底面から浮いた位置に頸部を斜め下に向けて出土している。住居が放棄される際にわざわざ不完全な個体を、貯蔵穴を埋めている可能性が感じられる。

壁溝は把握できなかった。溝以外の掘方埋土が失われていたために断面でも確認されなかった。

【遺物】貯蔵穴SK432から棒状の自然礫２点と土器が出土している。

131は壺の胴部～頸部片である。外面は斜め～縦方向のハケ調整の後、横方向のミガキを施している。ミガキは全体的にまばらで、ハケの調整痕を消し去っていない。頸部下位には縄文を施し、上位をクシ工具によるものと思われる５本の平行する沈線で区切っている。内面は、輪積みで成形した後にナデて平滑に整え、更に斜め方向のハケ調整を施す。ハケ調整は胴部半ばに密集する部分があるがその上下はまばらで、成形時の指頭痕が合間に観察される。

SH2707（第200図）

【遺構】M31グリッドで検出された。東側で方形周溝墓SZ2575と接し、西側と上面を天地返しや耕作による撹乱で一部が壊されている。検出面は掘方上となった。

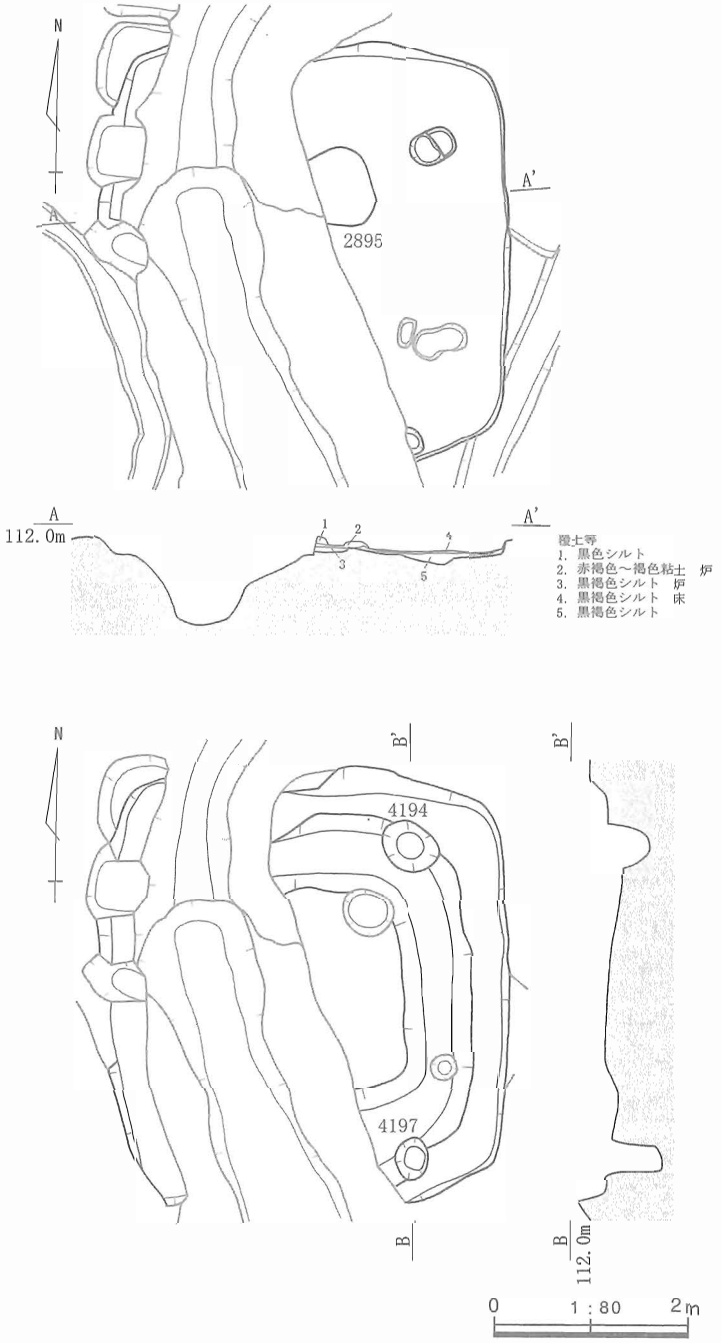
住居の掘方は底面を平らに整えるのみである。炉は住居の中央やや奥側に熱染みとなって検出されている。直径25～30cmの楕円形を呈し、炉の掘方は認めることができなかった。熱が伝導する検出面からさほど隔たっていない位置に炉床が設けられていたものと考えられる。

柱穴の掘方は３か所で特定している。SP2708・2709は直径35～40cmの円形で、切り合いを伴わない。

南側のSP2714は３基の小穴が切り合う。中央部分が直径23cmと小ぶりであるが深さは65cmと一段と深く、他は浅くなるので柱の抜き取り穴である可能性がある。柱穴の間隔は芯々で3.05mとなる。対になる残り１基の柱穴は検出されなかった。撹乱等で失われているものと考えたい。

壁溝は住居の東側半分で検出されている。幅22～32cmとやや幅広で、深さ５～８cmとなる。西側の状況は撹乱で定かでない。

貯蔵穴は該当する土坑が見当たらないので、設けられていなかったものと考えられる。



第201図　SH2895平面・断面図（床面・掘方）

SH2895（第201図）

【遺構】M31グリッドで検出された。西側に方形周溝墓SZ2895の撹乱を受け2/5程が失われている。検出面は床面直上となり、一部に覆土の黒色シルトが６cm程度の厚みで残存していた。

床面は黒褐色シルトを用い、３cm程度の厚みで硬く敲き締められている。床は住居の立ち上がりから８cm程度まで張られており、元来は全面的に設けられていた可能性が高い。床面上では柱痕と考えられるプランを２か所で検出した。いずれも柱穴の掘方より間口がやや狭いので、柱の際近くまで床が設けられていたものと考えられる。対になる残り２か所は、方形周溝墓により検出できていない。

炉は住居の中央やや奥側で検出された。直径1.05mほど、深さ10cmの円形になると考えられる掘方内に黒褐色シルトを充填し、更にその上位に床面から盛り上がる位置まで褐色粘土を敷き詰めている。炉床は直径30cm程度の範囲が平坦となり、周囲に３～５cmの凸部を土手状に作り出している。炉床を中心に焼け締まって赤褐色に変色している。

壁溝は平面・断面でも検出できなかった。元来設けられていなかった可能性が高い。

貯蔵穴も該当する土坑が見当たらない。方形周溝墓の溝によって失われている可能性も否定できない。

住居の掘方は底面を平らに整えて溝を備える。溝は幅0.7～0.8m、深さ13cm前後で、住居の立ち上がりから18～40cm内側に掘られている。東側は周溝墓によって定かでないが、終息する気配が読み取れないので、全周していたものとも考えられる。埋土には黒褐色シルトが用いられる。

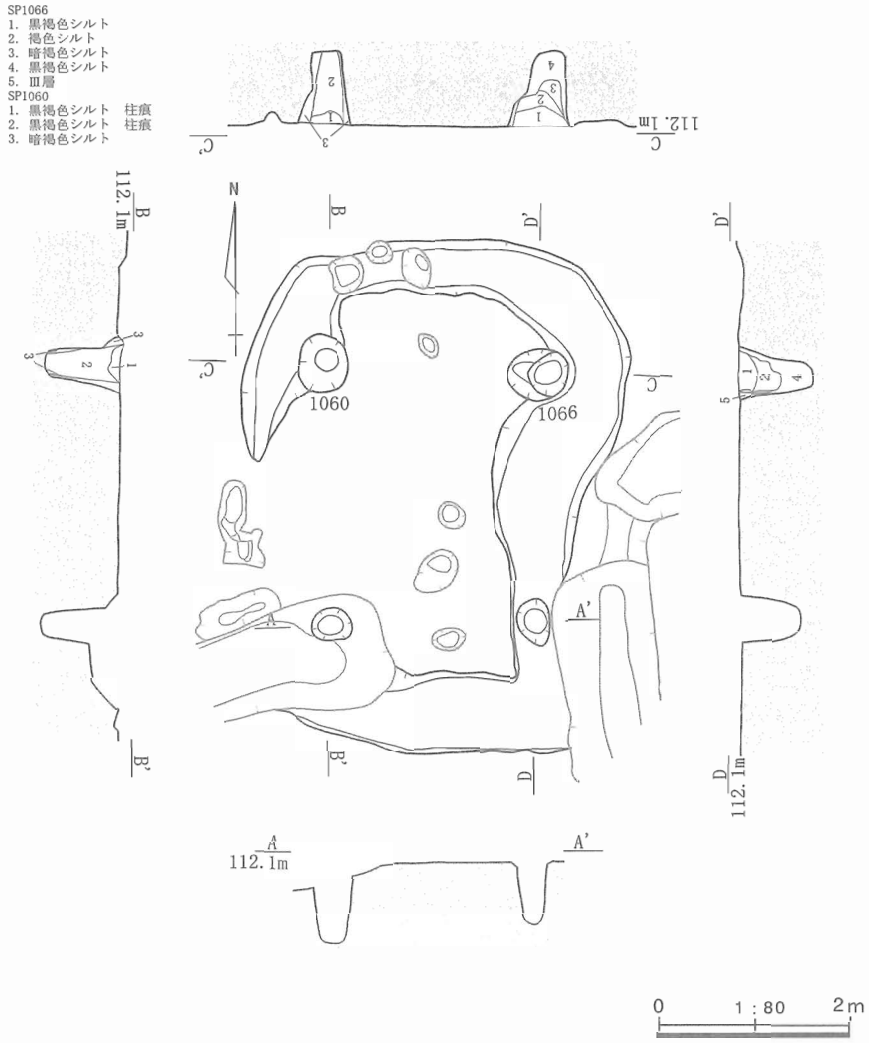
柱穴の掘方は２か所で検出している。直径32～63cmの楕円形を呈し掘方の溝の外法に沿って設けられ

る。柱穴の間隔は芯々で3.3ｍとなる。なお、対になる西側の２基は方形周溝墓により失われる。

SH1059（第202図）

【遺構】Ｓ30～Ｔ30グリッドで検出されたほぼ南を向く住居である。南側の一部を方形周溝墓SZ4424・4389に壊されている。

住居の掘方は底面を平らに整えて周囲に溝を設ける。溝は幅0.6～1.15m、深さ３～７㎝で、南西側で切れるＣ字形を呈する。柱穴の掘方は４か所で検出した。いずれにも柱の挿げ替えや抜き取りに伴う切り合いは認められない。南側の２基は小規模となるが、元来は北側と同様に直径40～60㎝の円形を呈するものと考えられる。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.6～2.8m、短手方向で同様に2.2～2.3mとなる。



第202図　SH1059平面・断面図（掘方）

（３）方形を呈する竪穴式住居

SH70005・70006（第203～205図）

【遺構】Ｅ１～Ｆ２グリッドで検出された。いずれも南側が調査区外となる。特にSH70006は北側隅の一部が検出されたのみで全容は把握できなかったが、隅が直角になるので住居の一部と考えた。

SH70005は、検出時には床が失われて掘方埋土があらわになっていた。しかし、住居の縁辺には壁溝が残存していたので、床面に近似した位置にあると考え一旦記録に残した。

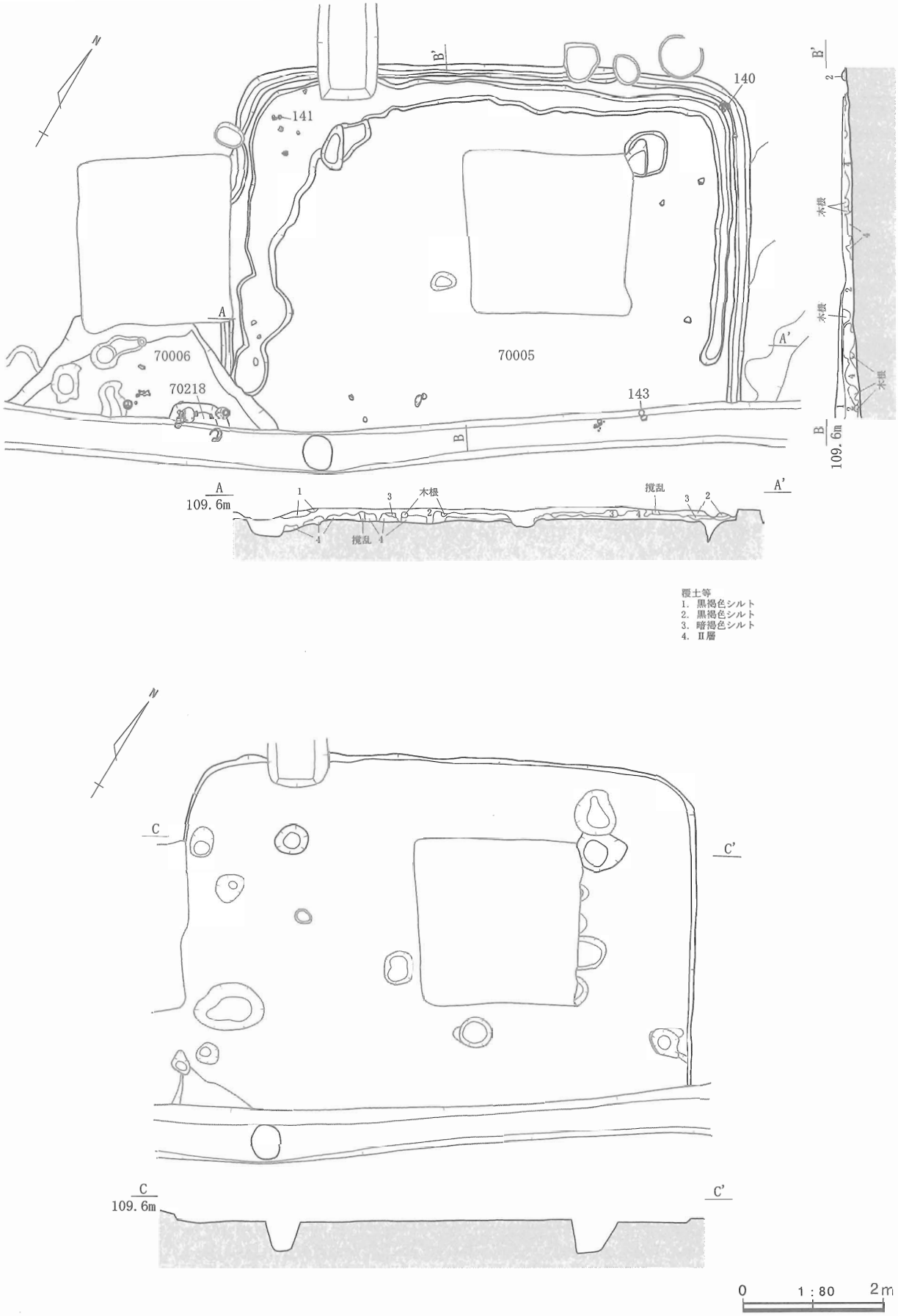
壁溝は二重に巡っている。内側の壁溝は東辺では幅15㎝前後、深さ５㎝内外であるが、北辺西側で次第に幅が増し北西隅では幅1.1m、深さ５～８㎝程となる。この部分では内法が蛇行する部分もあるので、誤って掘方の一部を掘削している可能性も否定できない。外側の壁溝は幅15～22㎝、深さ２～８㎝となり、ほぼ均等に３辺を巡っている。これら二本の壁溝は交わることなく平行している。30㎝前後とわずかではあるが、内側から外側へ住居を拡張しているのであろうか。

炉は検出できなかった。後述する正方形の撹乱によって失われているものと考えられる。

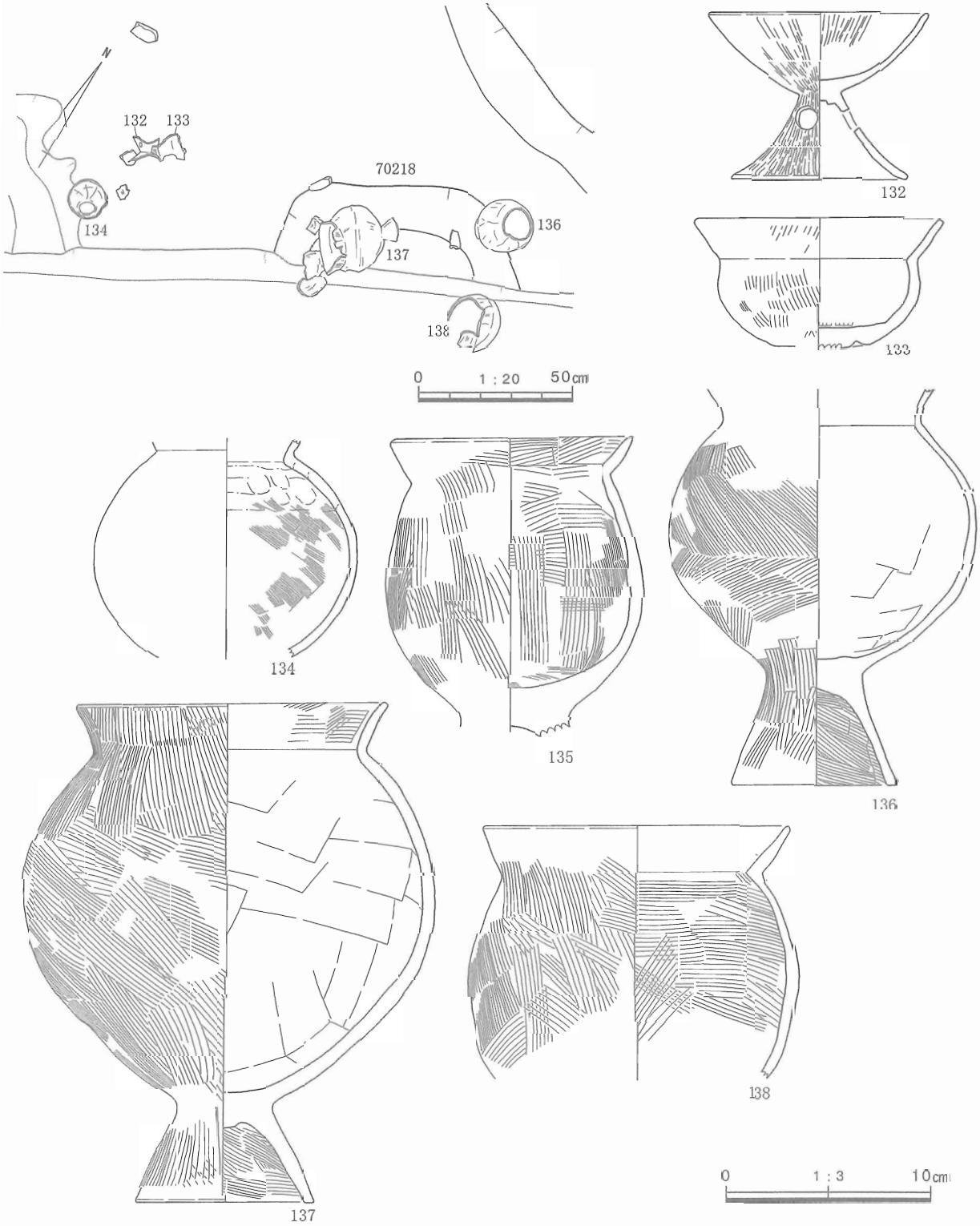
貯蔵穴もこの範囲には認められない。調査区外となる南東隅付近にあるのだろうか。

住居の掘方は底面を平らに整える。明らかな溝は認められなかったが、北東側が下がっているのでわずかな深さの溝が備えられていたことも想像される。

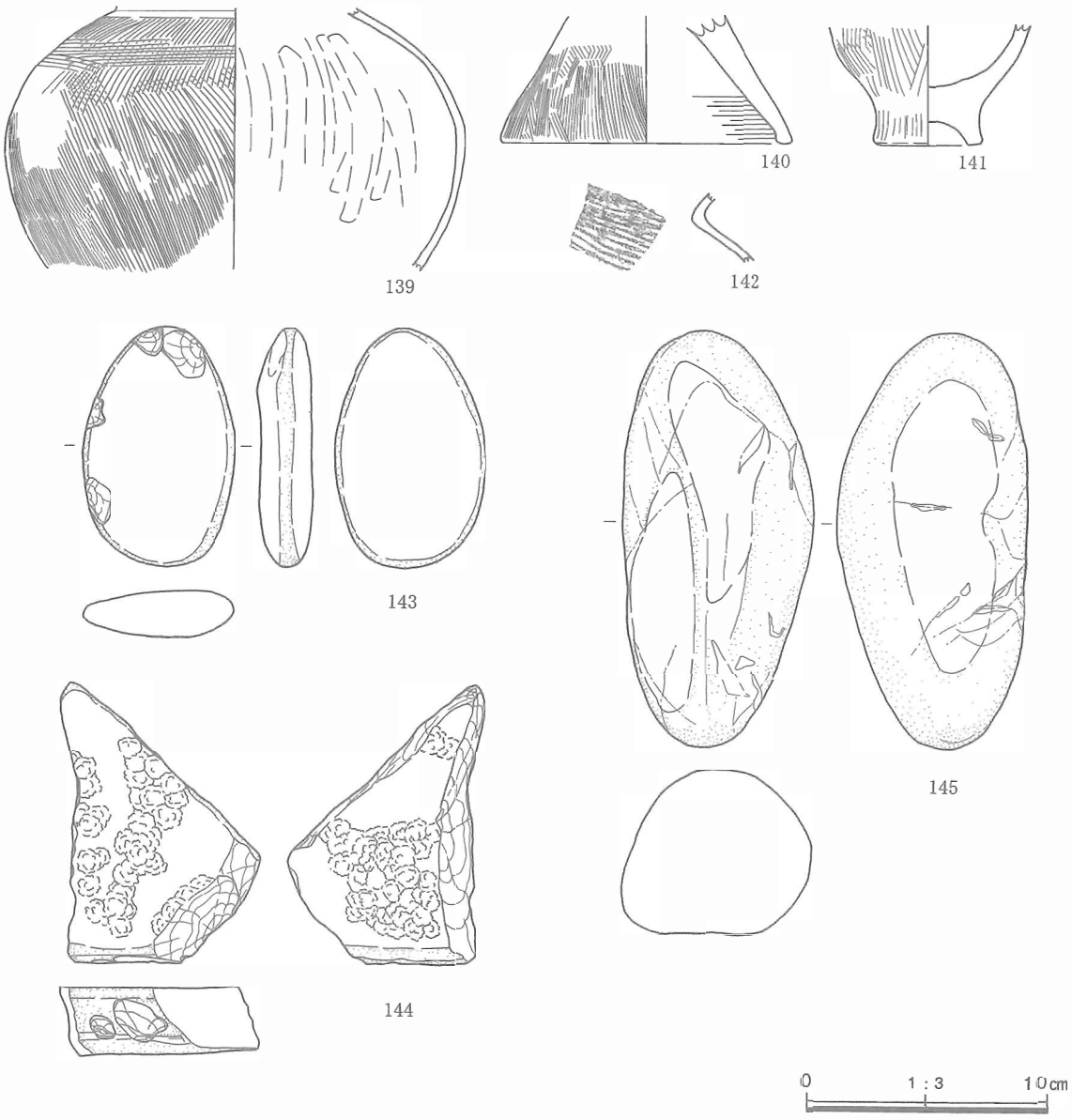
柱穴は北側で２か所を検出した。直径45～70㎝の円形状で規模はやや異なるが、深さは住居の掘方底



第203図　SH70005・70006平面・断面図（床面・掘方）



第204図　SH70006遺物出土状況・遺物実測図



第205図　SH70005遺物実測図

面から45～46cmとほぼ揃っている。南側の対のうち1か所はわずかな下端の窪みを調査区際に掘削した排水溝内に検出した。対になる他の1か所は調査区外となり検出できなかった。柱穴の間隔は東西方向に芯々で4.4m、南北方向でも4.4mと均等に配置されている。

SH70006は北東隅を検出した。北辺がSH70005の西辺を切っていることからも分かるようにSH70005とは軸方向が異なるが、やや離れたSH70010に近似した方位性をもつものと考えられる。検出した範囲が極めて狭かったので立体的な位置を明確にすることが困難であった。したがって、掘方上面で住居に伴う遺構を検出することとした。

掘削に伴って、遺物が2か所から集中して出土している。一つは掘方底面から25cm程度高い標高109.5m付近に高坏（132）、鉢（133）、壺（134）が密集している。住居の床面は明らかにできなかったが遺物の底面がほぼ同じ高さにあることから、この付近に床面があったものと推測される。もう一つは土坑SK70218内に遺棄されていた台付甕4個体である（135～138）。137は横たわって出土したが、最も低い位置が土坑の底面よりも12cmほど上で、土坑内部に据えられた甕が埋まる際に横倒しになったもの

と考えられる。逆位に近い138の例からも埋め戻す土坑内に意図的に放棄されたものとみることもできよう。このように形状を保つ遺物は楕円形や隅丸方形の住居に伴う遺物には見られなかったもので、土器を住居内に廃棄する際の意識や流儀が何らかの要因で変化していることは確かである。このような傾向はSH70004や70010にも共通することから、大型の方形住居に居住した人々共通の認識であったのだろう。

さて、住居の範囲には一辺2.4m前後の正方形の撹乱が入る。同規模の撹乱はこの北側とで都合４か所あり、送電用の鉄塔の基礎であることが分かるが、調査開始時には撤去され茶畑となって存在を事前に知ることはできなかった。基礎には骨材に直径２～３㎝の礫を多く含むコンクリートが用いられている。このコンクリートの雰囲気は海軍大井航空隊跡（牧之原市・菊川市）に残された施設に類似しているので、牛尾山の東麓から地下に設けられた理化学研究所の疎開工場に関する施設の可能性がある。

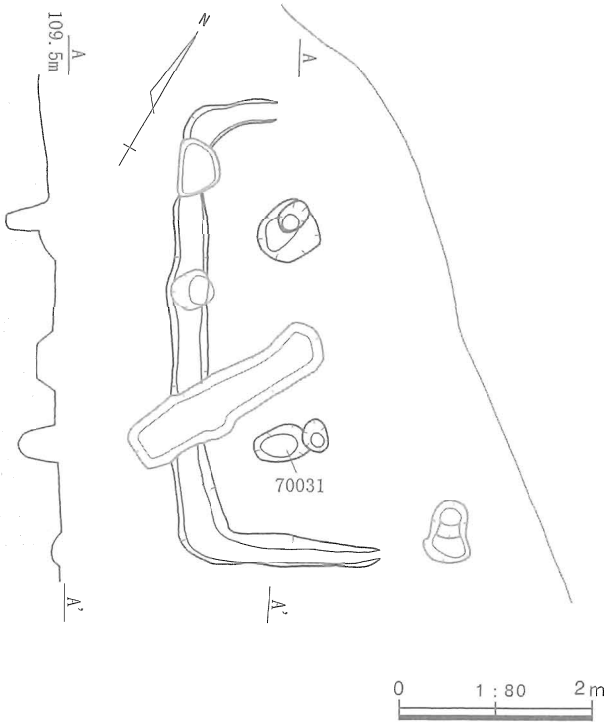
【遺物】SH70005の掘方埋土内からは古式土師器や石製品が出土している（139～145）。土器にはＳ字甕や叩き甕など外来の器種が含まれることが特徴である。

139はＳ字甕で薄く、精緻に仕上げられる。外面は細かなハケ工具を用いて縦方向に調整した後、肩部には横方向のハケを加える。内面は縦方向のナデで平滑に整えられる。140・141は在地の台付甕でいずれもハケ調整で整えられる。脚部の短い141は164を縮小したような形状を呈するのであろう。142は叩き甕の肩部～頸部片である。細かな叩きにより薄く仕上げられている。

143は磨石と敲石の兼用品、145は磨石、144は台石である。当該期のものかは判然としない。

SH70006からは土器が出土している。132は小型の高坏で縦方向のミガキを密に施して丁寧に仕上げられる。最初に脚部、次いで坏部にミガキを加えたようで、両者の接点あたりにミガキの切り合いを見出すことができる。脚部には穴が三方向に空けられている。133は広口の鉢で、本来は底部に台を伴っていたようであるが接合面で剥がれて失われている。全体的にハケ調整で仕上げられる。134は小型の球形の胴部をもつ壺である。外面は判然としないが、内面はナデの後に細かなハケ調整が加えられる。

135～138の台付甕はいずれも肩部から直角に立ち上がる口縁部を備え、口唇部は素縁となる。これらの調整法は２種がある。内外面を全体的にハケ調整で整える135・138では、外面に縦方向のハケを加え、内面には体部下位に縦、上位から口縁部にかけて横方向のハケ調整を施している。一方、136・137は外面では台部から体部下位を縦方向、体部中央部を斜め方向、上部から口縁部を縦方向のハケで調整する。体部の内面は横方向の板ナデを施す。



第206図　SH70003平面・断面図（掘方）

SH70003（第206図）

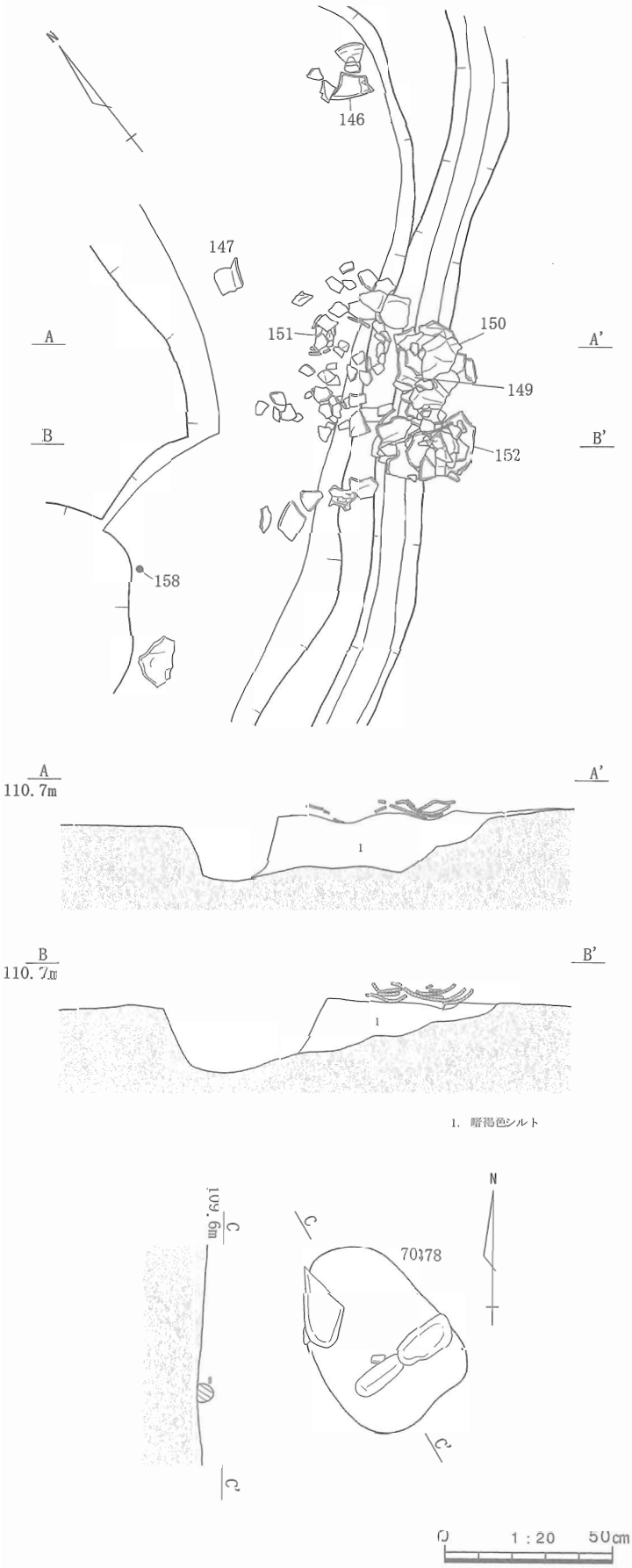
【遺構】調査区の東縁、Ｄ２グリッドで検出された。検出面は掘方上となったが、東側に下る地形のため西側の一部のみが残存していた。本来はプランのすべてが存在していたと考えると、現況の地形は住居の営まれた古墳時代前期以降に形成されたものと考えられる。壁溝は幅28～50㎝、深さ５～10㎝で、西縁と東西縁の一部が検出された。柱穴は２か所で特定でき、直径27～55㎝の楕円形で相互の間隔は芯々で2.4mとなる。

SH70004（第207～210図）

【遺構】Ｅ２～Ｅ３グリッドで検出された。東側の一部を確認調査トレンチT-2によって壊され、上面に耕作による撹乱を被る。検出面は炉が検出された床面相当の位置である。なお、床面の平面図には掘削が及んでしまった掘方の一部も併せて掲載してある。床面は部分的に途切れ途切れに見出されたのみなので、面的な把握はできていない。断面をみると炉の底部が6層上にあるので、この位置に床が設けられていた可能性がある。また、複数の炉や住居掘方の形状からも住居が拡張されていると考えられ、炉70378を覆う1層から連続する3層上も生活面として利用されていたと想定される。

炉は3か所で検出されている。切り合い等がなく直接前後関係を知ることはできないが、複数回の改修に伴って場所を移動させながら新設されたものと考えられる。もっとも新しいと考えられる炉は三つのうちの中間に位置するもので、炭化物が長軸50cm、短軸41cmの三角形状に分布している。熱による著しい変色は認められなかったので、さほど使われていないものと推測される。炉の範囲の南側には長さ10～19cm、太さ6～7cmの長細く焼けていない

第207図　SH70004平面・断面図（床面・掘方）



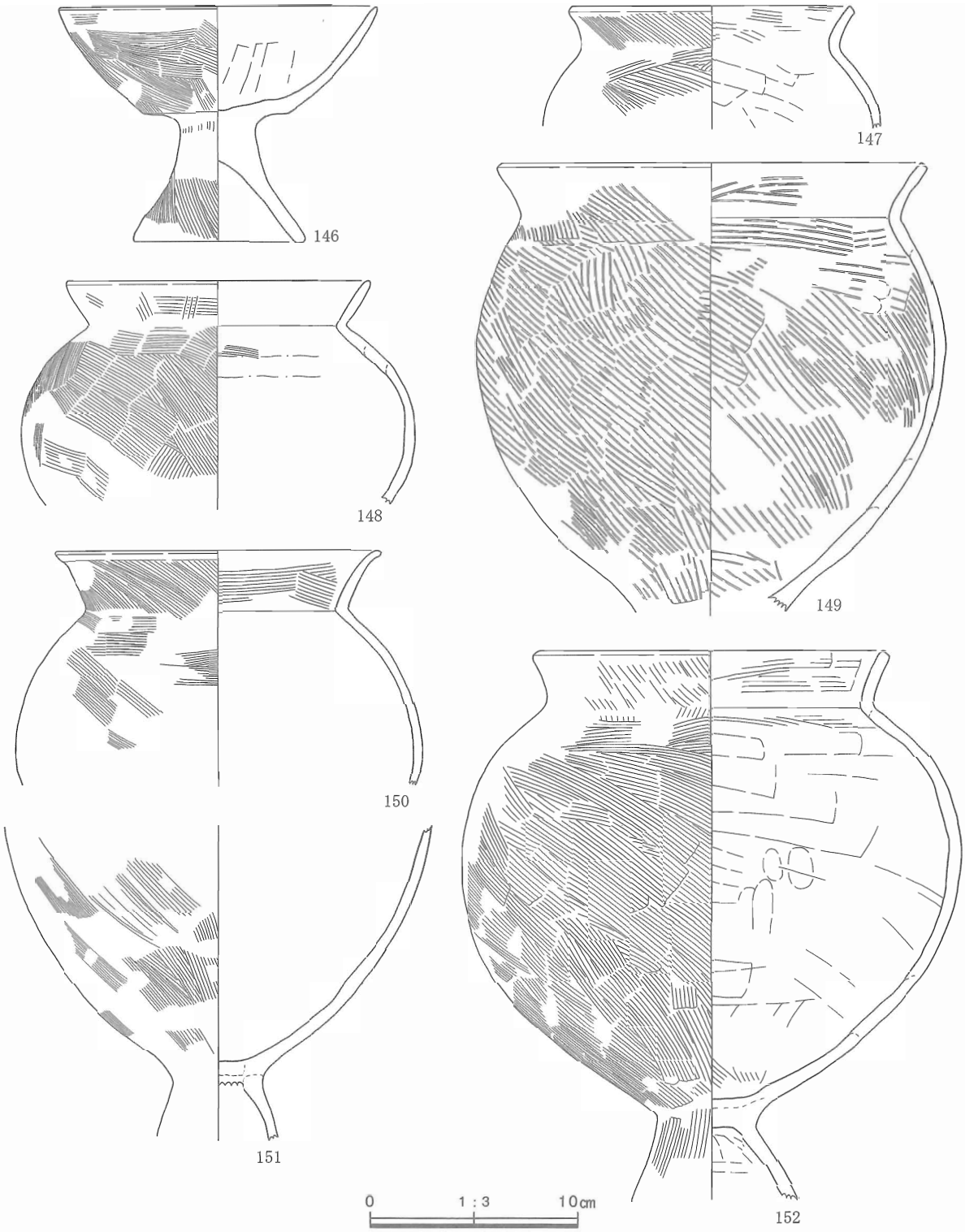
第208図　SH70004遺物出土状況・炉平面・断面図

自然礫が３個置かれていた。中位にあたる炉は70378である。６層上から長軸55cm、短軸40cmの矩形の範囲に粘土を８cm程度の高さに積み上げている。この炉は床面よりも上位に突出していた可能性が高い。炉床は被熱して赤褐色となり、変色域は張られた粘土下位まで及んでいる。炉床には中央南寄りに長さ16～18cm、太さ６～９cmの長細い礫が２個、並べて置かれている。北側には長さ23cm、幅12cmの半分程度に割り取られた礫が置かれる。いずれも焼けていない。西側の炉が最も古いと推測され、赤褐色の熱染みとして把握できた。

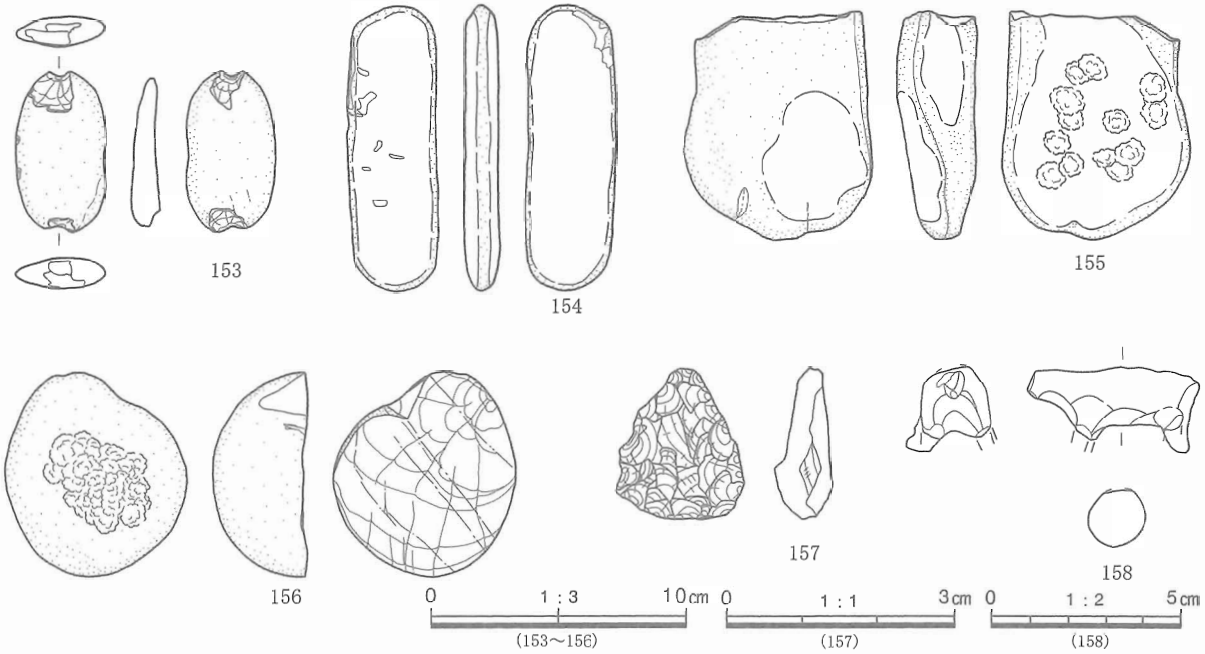
柱穴は４か所で検出された。直径30～50cm、深さ37～64cmの円形状を呈し、西側のSP70086にのみ床面上で小穴の切り合いがみられる。同一の掘方内に収まる規模のため挿げ替えではなく、柱の抜き取り穴と考えたい。柱穴の間隔は東西方向に芯々で3.3～3.6m、南北方向で同様に2.4～2.7mとなる。

壁溝は北西隅と南西側には見当たらないが、他の部分は幅12～22cm、深さ2～13cmの規模で巡る。

住居の掘方は形状により２時期が存在することが判明した。当初段階には周囲に溝を巡らせた4.2～4.6m四方の正方形状の掘方がある。溝は幅0.43～1.4m、深さ８cm前後で全周するが、内法が著しく蛇行して特に南側で狭くなる。この掘方に伴う柱穴は明らかにならなかった。溝の掘方内に含まれる比較的浅いものだったのだろうか。後続する段階では３・６層直上のレベルでプランを西側と南側に広げて、新たに溝を掘っている。この溝は床面の調査に伴って掘削した部分で、南側にしか設けられない。幅0.5～0.9m、深さ10cm前後で、南側は住居のプランに沿



第209図　SH70004遺物実測図 1



第210図　SH70004遺物実測図２

うが北側では蛇行する部分がある。

【遺物】出土品には土器、土製品、石器、石製品がある。土器は南東側の壁溝付近に台付甕が集中する。完形に近いものが含まれるが、内面同士が接するのは第208図A-A′断面の一部にみえるのみで、他は外面を下にして重なっているので、破片のカーブに沿って積み重ねられたものと考えられる。

146は高坏である。台付甕とはやや離れた住居の南東隅から出土している。外面はハケ調整で整えられ、ミガキは施されない。坏部の内面は底部から口縁部方向に板ナデを加え平滑に仕上げている。

147～152は台付甕である。150・151は接合しなかったが特徴から同一個体と考えられる。甕の口縁部の取り付け方には二つの流儀がある。ひとつは肩部へ鈍角に取り付き、両者の境がなだらかなものである(147・149・152)。もうひとつは肩部に直角に取り付き、両者の境に明らかな角が付くものである(148・150)。前者は口唇部の断面形状が矩形となり、後者は丸くなり150などはなだらかに外反する。

外面はハケ調整で整えられる。やや細かなハケ工具を利用するのが一般的であるが、149はより粗い工具を用いる。147・149・152は胴部下位から口唇部にかけて斜め方向のハケを下から上に掻き上げている。一方、150は肩部に、148は肩部と口縁部に横方向のハケを加える。内面は外面に用いたものと同種のハケ調整が主体となるが、体部にハケ調整後に板ナデを加えるもの（147・152）がある。

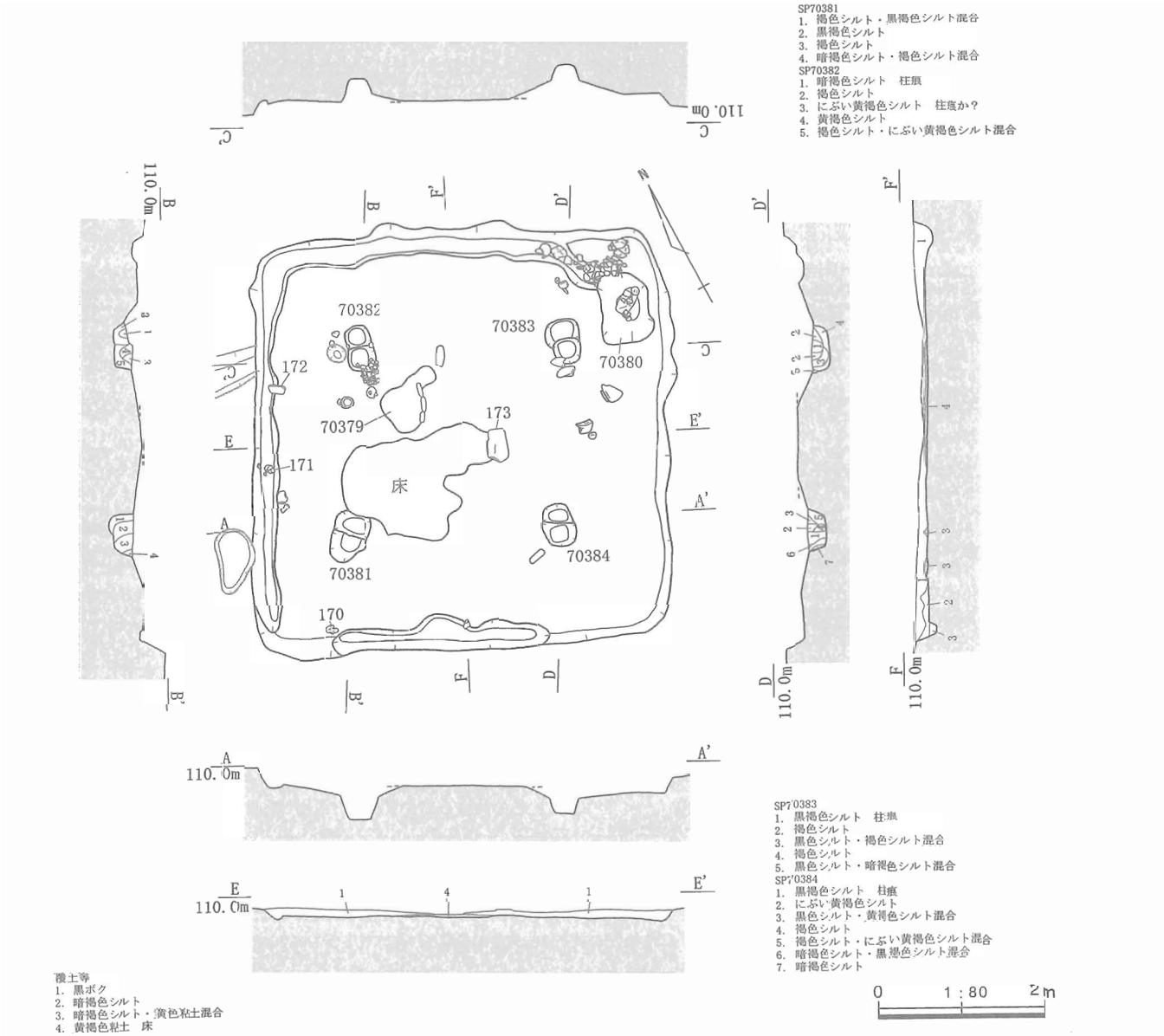
土製品は158の土馬が後の段階の掘方溝内から出土している。足のうち３本と顔面付近が欠損している。全体的にナデで整えられている。

石器・石製品は153～157が出土している。石錘（153)、敲石（156）は床面に近い位置にあり、住居に伴うものと考えられる。154は磨石、155は磨石・敲石の兼用品である。特に155は使用による潰れが片面に集中し、著しい。157は黒曜石製の石鏃である。三角形状をなし、丁寧な調整で形作られる。これらは掘方埋土等に混入した縄文時代遺物であろう。

SH70010（第211～214図）

【遺構】Ｆ６～Ｇ６グリッドで検出された。切り合う遺構はほとんどなく、検出面は住居の覆土中である。

住居の掘方は底面を平らに整え、溝をもたない。掘方内に埋土を充填する作業は行われず、Ⅲ層中に位置する掘方底面に直接床面を張り込んでいる。Ⅲ層は均質で硬いので、主要な部分にのみ床を張ることで事足りたのだろう。床面は住居の中央付近の、炉と台石（173)、柱に囲まれる範囲にのみ設けられ



第211図　SH70010平面・断面図（床面）

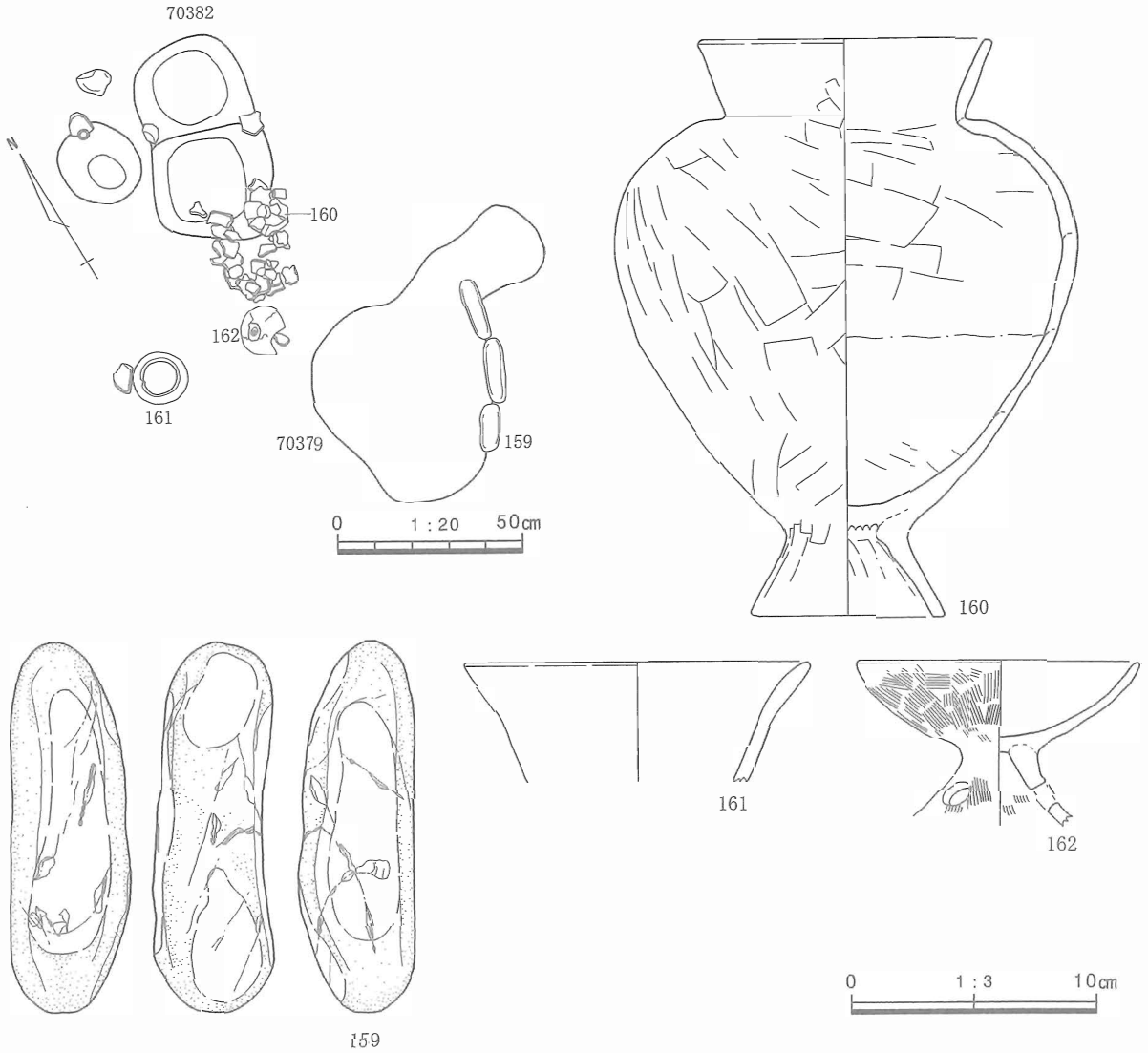
ている。Ⅲ層から掘り取った黄褐色粘土を用いて、3 cm前後の厚みで硬く敲き締められている。

炉は住居の中央やや奥側に設けられている。特に掘方を伴わず、耐火性に富むⅢ層上をそのまま使用している。炎による熟染みは長軸60cm、短軸50cmの楕円形状に広がり、一部が東側に突出する。近接する複数個所で火を焚いたがために範囲が広く形がいびつになったのだろう。炉の東側には長さ13～18cm、太さ5 cm内外の長細く焼けていない自然礫が3個、直線状に並べて置かれている。

壁溝は住居の南東辺以外の3方に設けられている。幅27～34cm、深さ3～5 cmとなり、東隅では立ち上がり際から離れて貯蔵穴に連結している。貯蔵穴SK70380は東隅に設けられている。長さ86cm、幅56cm、深さ34cmの長方形状を呈する。内部からは土器と石製品が投げ込まれるように出土している。

柱穴の掘方は4か所で検出された。直径34～45cmの円形状を呈し、いずれにも切り合いが認められる。切り合う小穴の規模は近似し、SP70382の断面では柱痕が双方で確認されるので柱が挿げ替えられたものと考えられる。柱穴の間隔は芯々で内側同士が2 m、外側で2.4～2.5mとなり均等に配されている。

【遺物】遺物は床面上と、貯蔵穴SK70380、貯蔵穴の北側から出土している。特に貯蔵穴の北側ではS



第212図　炉70379付近遺物出土状況・遺物実測図

字甕と在地の甕が供伴して出土し注目される。床面上から出土した遺物は159～162・170～173である。

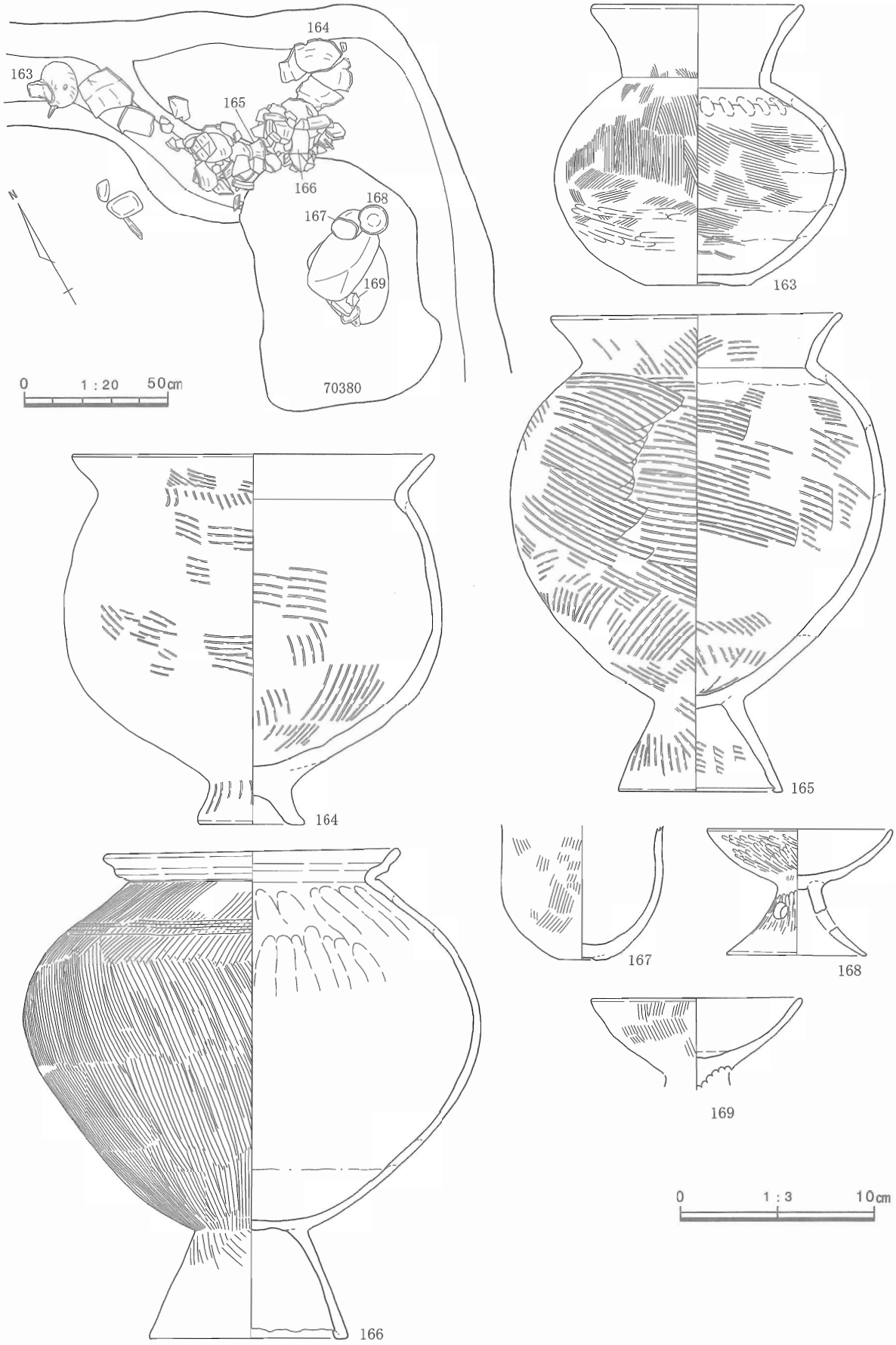
159は3面を使用する磨石である。炉の際に置かれた礫のひとつに転用されていた。

160は土師器の台付甕で、埋められた柱穴SP70382の上面にかけて粉々に割れた状態で出土している。体部は上半の張りが著しく強く、口縁部が直角に取り付く。内外面ともにヘラナデで平滑に整えられる。

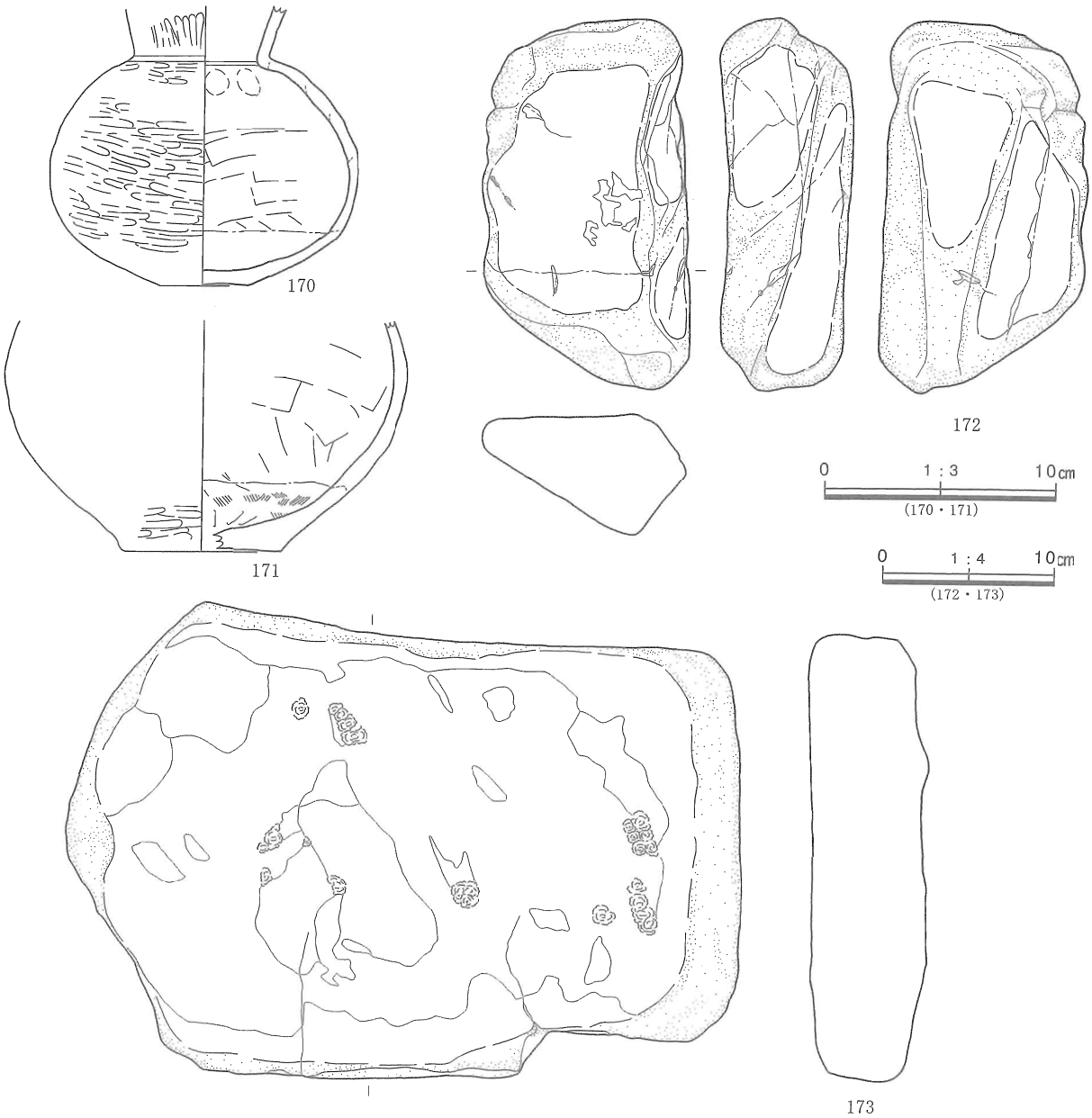
161は壺の口縁部でやや外反する。163のような丸い体部に取り付くもので、床面上に逆位で据えられていた。162は高坏で、全体的に細かなハケ調整で整えられる。脚部には透かしが3方向に空けられる。

170～172は壁溝際～壁溝内から出土している。170は小型の壺で外面はミガキが加えられる。内面は横方向のヘラナデで平滑に整えられる。171は大型の壺で基本的な調整方法は170に通じる。内面底部にはハケ調整が認められる。172は磨石で173とセットだった可能性がある。3面を使用している。173は台石で住居の中央やや手前側に据えられていた。砂岩製で被熱し一部が節理に沿って剥落している。

貯蔵穴とその周辺で出土した遺物は163～169である。164は体部片のカーブを合わせているので、割った後に積み重ねたのであろう。165・166は横倒しになるが、破片が細かいので意図的に割られたように感じられる。163は小型の壺で、ハケ調整で整えた後に外面体部過半に横方向のミガキを加える。164・165は在地の台付甕で、164の台はひときわ低くなる。内外面ともに粗いハケで調整される。166はS字



第213図　貯蔵穴SK70380遺物出土状況・遺物実測図



第214図　SH70010遺物実測図

甕Ｃ類で精緻に調整される。167～169は貯蔵穴内から出土した。169は人頭台の礫の下敷きとなり、他はその上に乗せられるように出土している。167は小型の壺であろうか。ハケ調整で仕上げられる。168・169は高坏で168がやや小さい。169はハケ調整のみであるが、168は細かなミガキが加えられる。

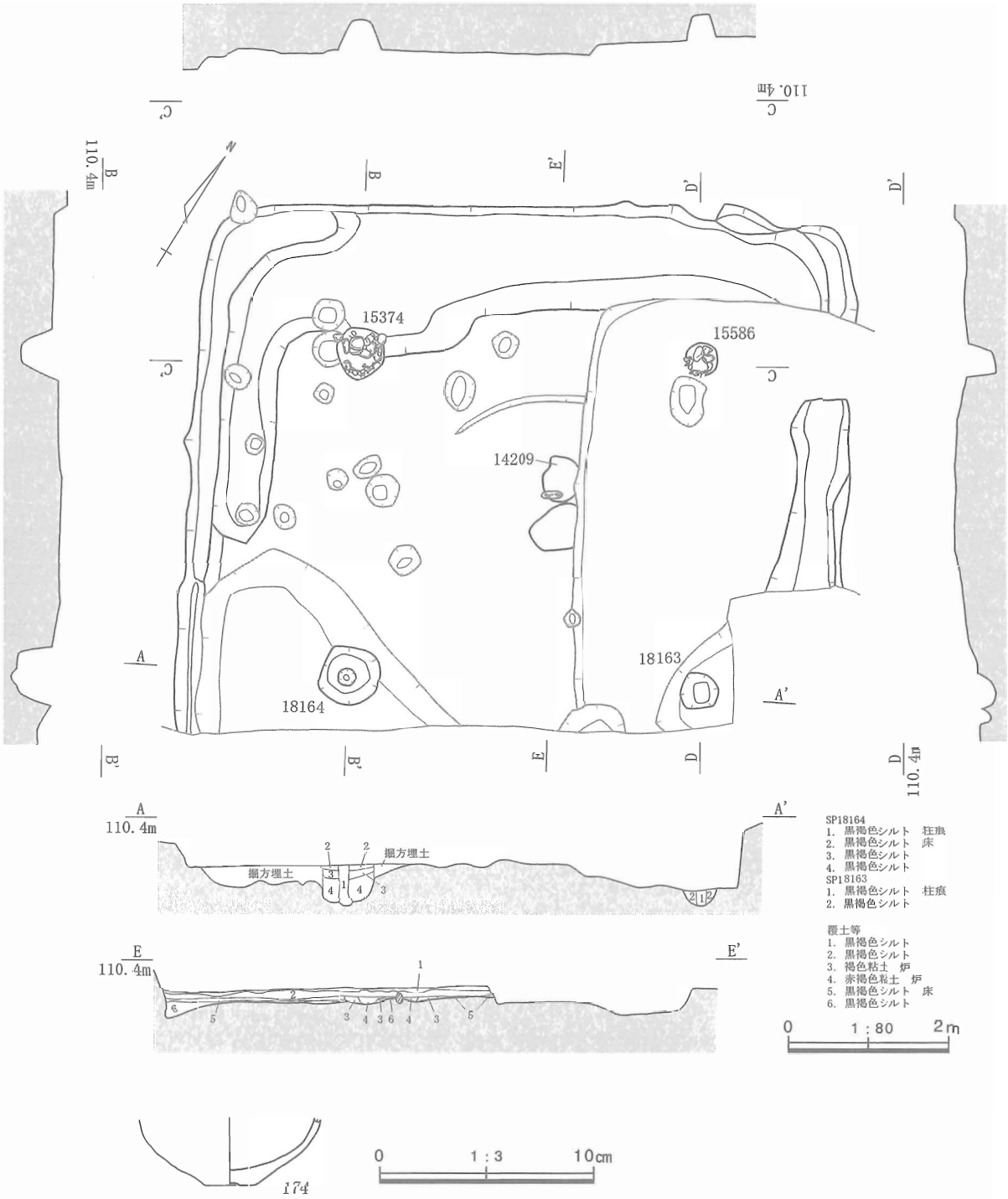
SH14209（第215～216図）

【遺構】Ｈ８～Ｉ８グリッドで検出された。東側をSH14389に切られ、南側は調査区外となる。断面では床面を見出したが検出面は掘方埋土となったので、掘方底面で住居に伴う遺構を検出した。

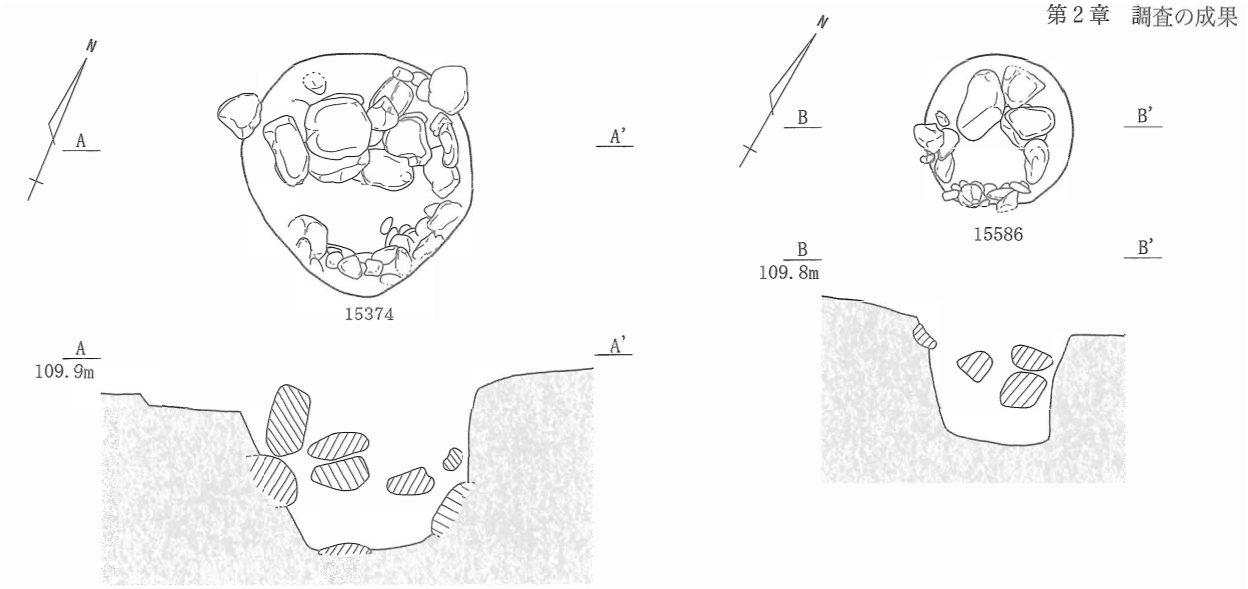
住居の掘方は底面を平らに整え、周囲に溝を備える。溝は幅0.7～1.9m、深さ６～10cm程度となり、南西側で途切れるものと考えられる。内部には黒褐色シルトが充填される。

柱穴は４か所で検出された。北側のSP15374・15586では内部に柱の根固めと考えられる握り拳大の礫が入れられていた。柱穴の間隔は芯々で南北方向に４～4.2m、東西方向に4.3～4.4mとなる。

炉は前後して作り替えられたとみられる２か所を検出した。北側の炉床上には長さ28cm、太さ８cmの焼けていない長細い礫が置かれている。２基とも深さ６～８cmの掘方をもち、内部には褐色粘土を充填



第215図　SH14209平面・断面図（掘方）



第216図　柱穴SP15374・15586平面・断面図

して上面を平らに均して炉床とする。中央部分は熱により赤褐色に変色する。

【遺物】174は小型の壺の底部～体部片で、掘方埋土中から出土した。全体に風化が進んでいるが、内面はハケ調整の後ナデを加えて平滑に整えているようである。

SH14389（第217図）

【遺構】Ｈ７～Ｉ８グリッドで検出された。西側でSH14209を切り、南側は調査区外となる。SH14209とは軸方向が同一なので、前後して建てられたものと考えられる。南側壁面等では床面を見出したが、検出面は住居の掘方埋土内となり、掘方底面で住居に伴う遺構を検出した。

住居の掘方は底面を平らに整えて溝を設ける。溝は住居立ち上がりに沿って掘削される。幅0.7～1.25m、深さ２～11cmで、南西側の一部が途切れてＣ字状を呈する。溝内からは土器がまとまって出土しており、掘方を埋め戻す際に意図的に混入しているようにも見える。

柱穴の掘方は３か所で検出した。いずれも直径60cm内外の円形状を呈し、住居の縁辺近くに掘られている。北側の柱穴SP15585は切り合いをもつ。柱の挿げ替えが行われたのであろうか、北側は南側より10cm程度深い。他には切り合いは認められない。柱穴の間隔は東西方向に芯々で４m、南北方向には3.4mとなる。対のもう１か所は調査区外となり検出できなかった。

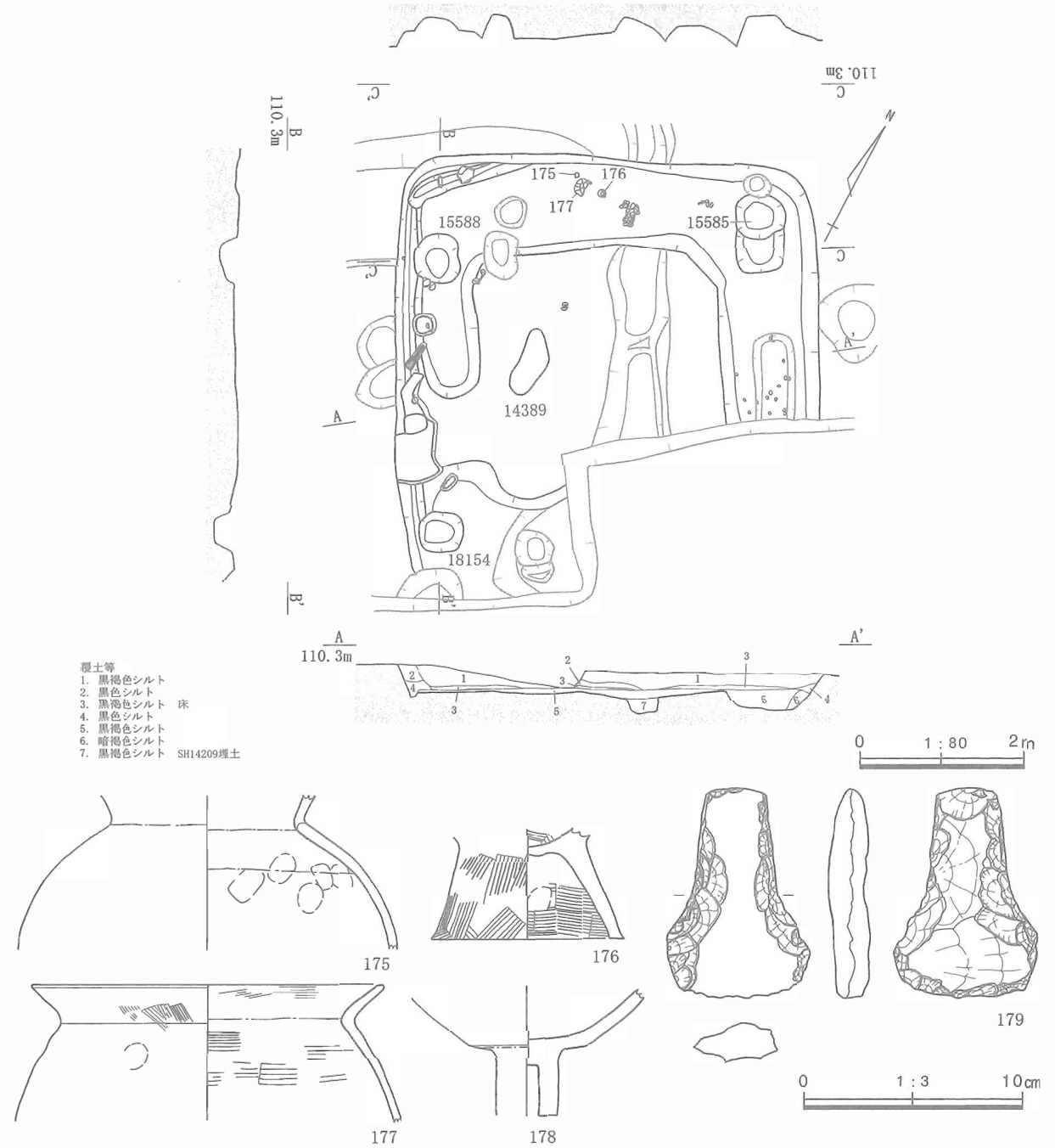
壁溝は西辺から北辺の一部にかけて残存している。幅25cm、深さ３cm前後となる。

また、住居内からは複数個所に焼土が検出されている。本来は床面上に存在したものと思われる。西側の壁際に集中しており、この部分には炭化材も認められるので、住居が焼失している可能性が感じられる。焼土14389も西側に寄った位置にあり、炉と考えると北東側に出入り口が想定されるので、類例からすれば不自然である。壁際の焼土と同様な成因と考えてよいだろう。

【遺物】遺物は主に掘方の溝内から土器と石器が出土している。

175は球形の胴部をもつ壺である。風化によって調整が失われているが、内面の一部には接合面を中心に指頭痕が残される。177は台付甕の体部～口縁部片である。口縁部は体部に直交するように設けられ、端部は素縁となる。外面には縦方向の、内面には横方向のハケ調整が観察できる。176は台付甕の台部で、外面には縦方向の、内面には横方向のにハケ調整が加えられる。178は高坏の脚部～坏部片である。脚部の上位は筒状となる。複数方向に透かしが空けられていたようで、その位置で横方向に割れている。風化により調整方法は明らかでない。

179は砂岩製の撥形を呈する打製石斧で、縄文時代の所産である。表面には原礫面を広く残し、縁辺部には両面にわたり細かな調整が加えられる。刃部は裏面方向のみを割り取り、鋭利に整えている。

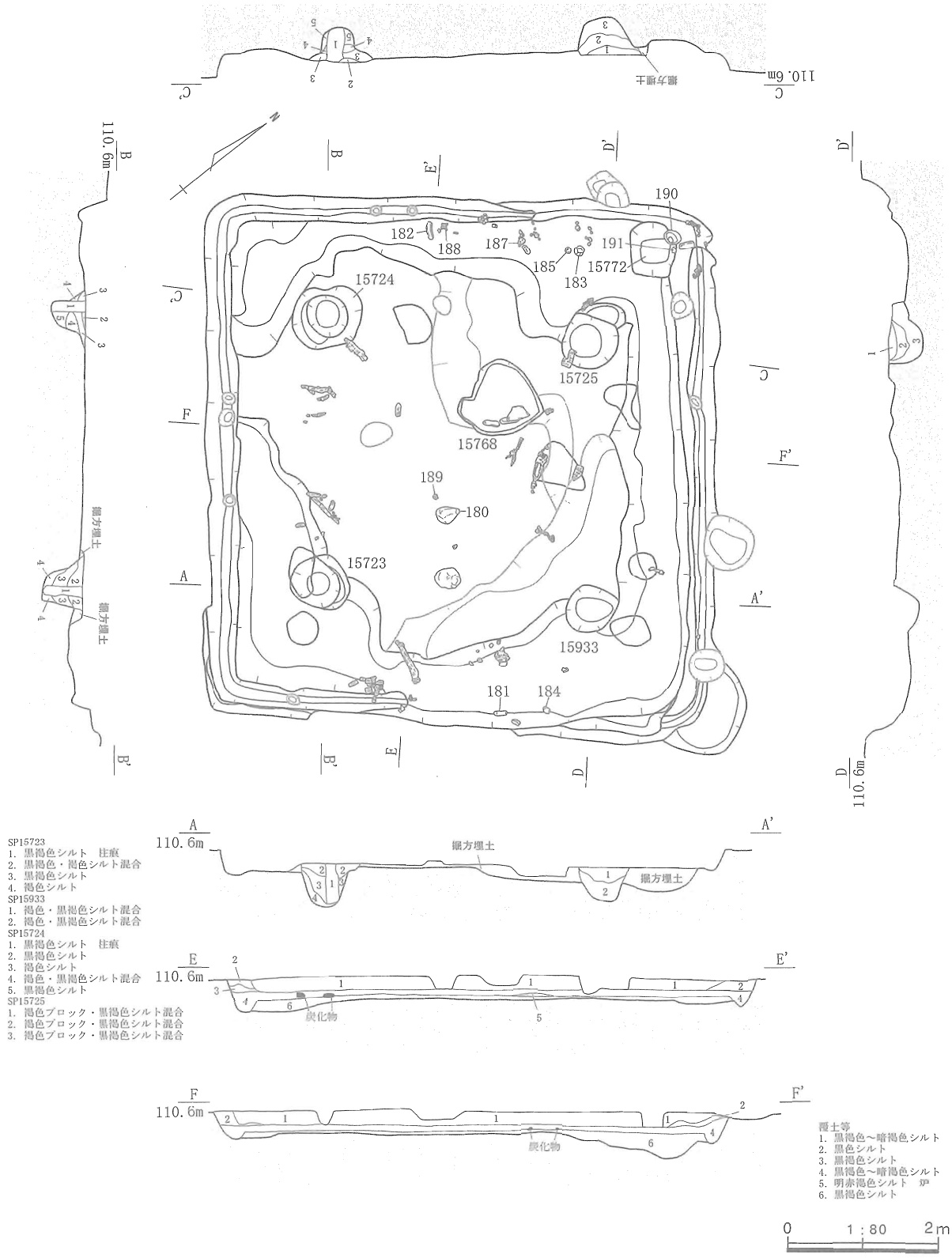


第217図　SH14389平面・断面図（掘方）、遺物実測図

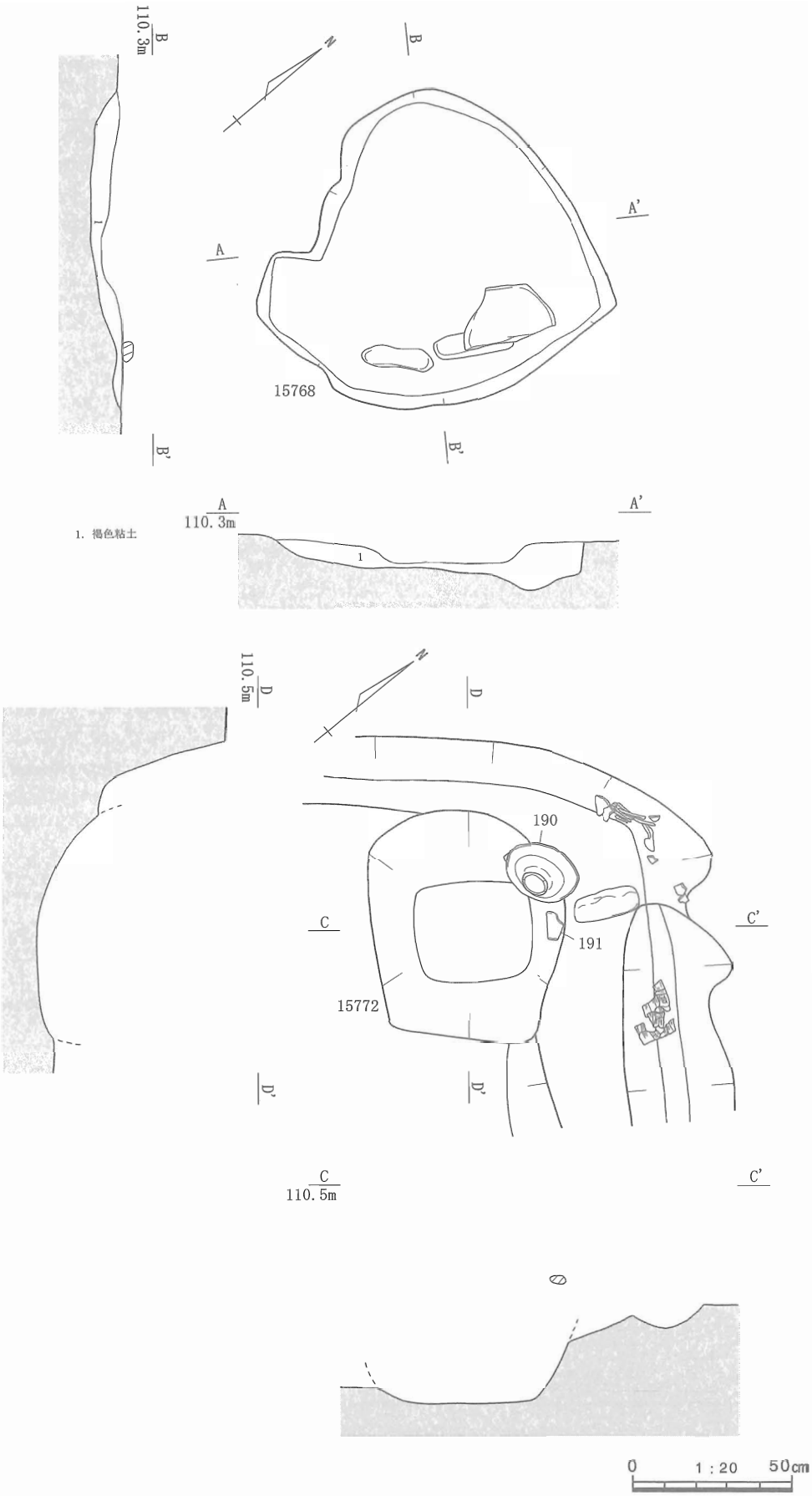
SH15285（第218～221図）

【遺構】Ｇ８～Ｇ９グリッドで検出された。東側にSH14128を切っている。炭化材や炉とは異なる焼土が検出されたので、この住居は焼けて失われたものと考えられる。調査では当初、炉を検出したので近接して床面が設けられているものと考えたが見出すことができなかった。住居の掘方上で住居に伴う遺構を検出しており、平面図上には床面に伴うと考えられる炉と炭化材の位置を合成している。

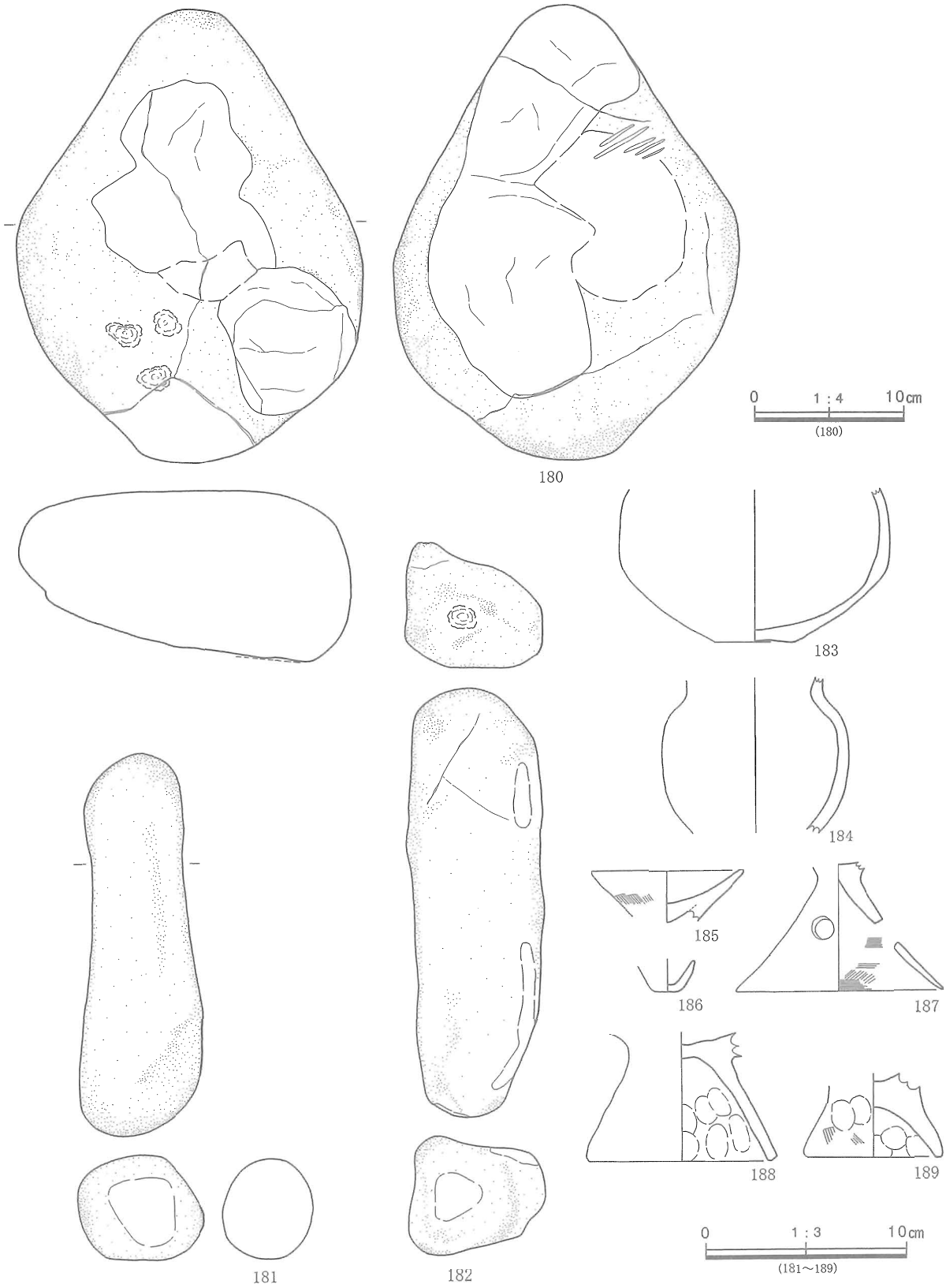
炉は住居の中央やや東寄りに設けられている。直径96cm、深さ15cmの円形状の掘方内に褐色粘土を充填し、上面を平らに整えて炉床とする。炉床は被熱して明赤褐色に変色する。炉床の上面南縁には長さ



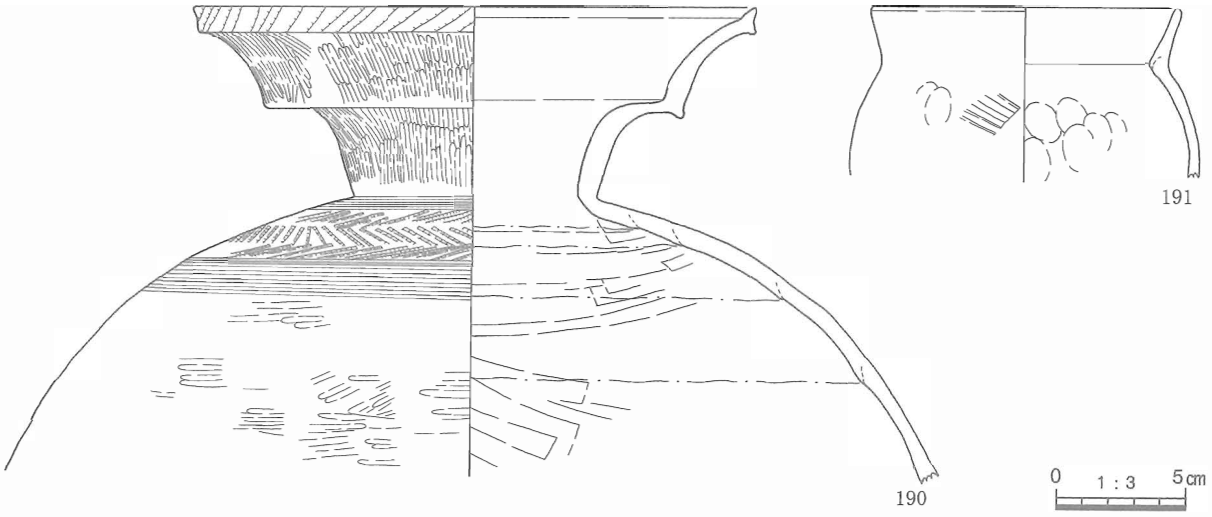
第218図　SH15285平面・断面図（掘方）



第219図　炉15768平面・断面図、貯蔵穴SK15772遺物出土状況



第220図　SH15285遺物実測図１



第221図　SH15285遺物実測図２

22～25cm、太さ６～８cmの焼けていない長細い礫を直線状に並べ、更にその上位に幅13cm、長さ30cmの平らな礫を乗せている。この炉は６層上に設けられている。その他の焼土や炭化物、遺物の出土位置もこの６層上に分布しているので、生活面は６層上にあったと考えられる。

貯蔵穴は北側隅にある土坑SK15772が該当する。長辺70cm、短辺60cmの長方形で、深さは17cmとなる。遺物の出土位置から生活面の高さを勘案すると、本来は40cm程の深さであったと考えられる。

壁溝は南西辺で一部が途切れるものの、各辺で認められた。幅26～40cm、深さ２～８cmの規模がある。

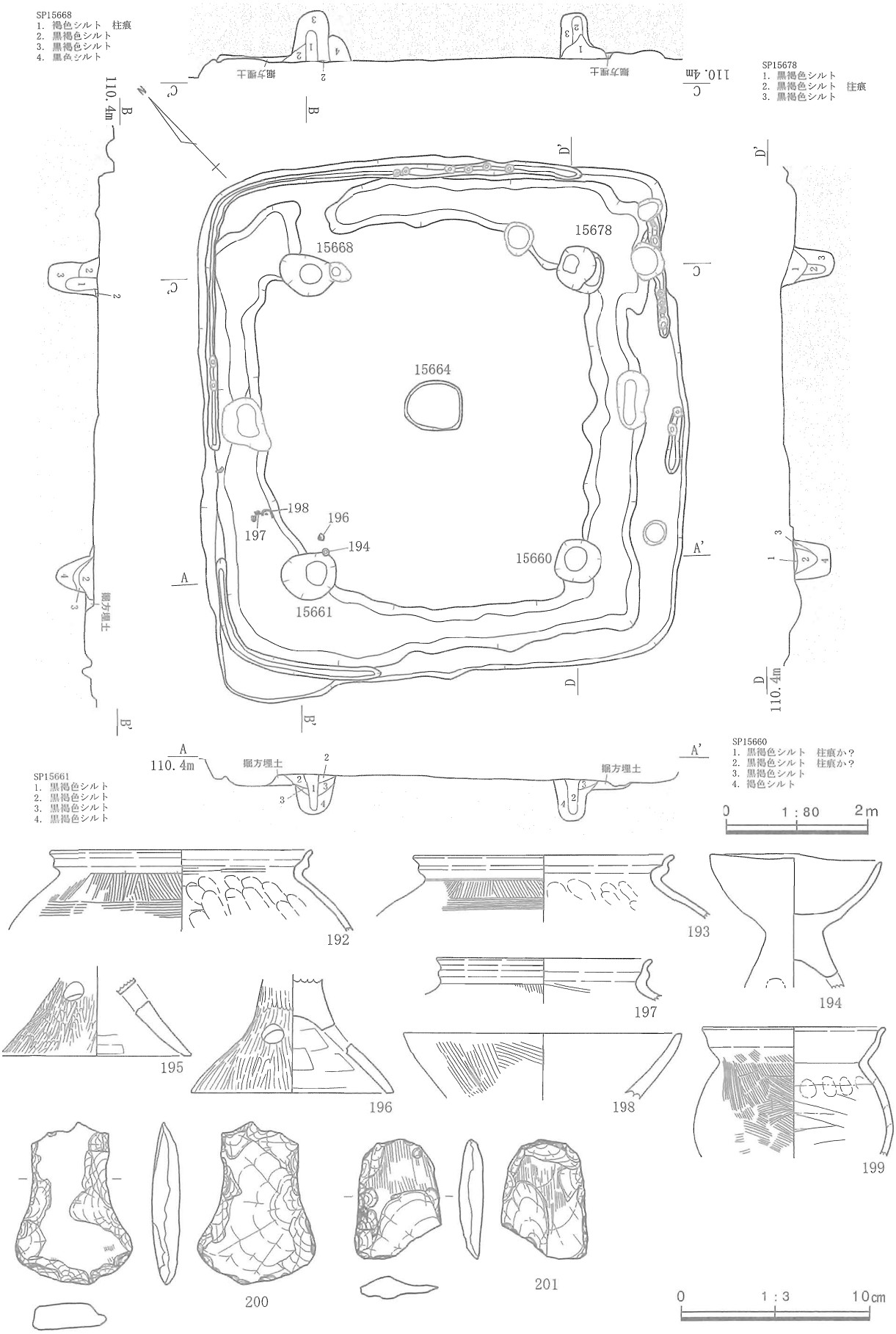
住居の掘方は底面を平らに整えて、周囲に溝を巡らせる。溝は幅0.5～1.5m、深さ４～９cmで西側に開くＣ字形を呈する。柱穴の掘方は４か所で検出されている。直径50～70cmの円形状を呈し、柱の挿げ替えや抜き取りに伴う切り合いは伴わない。SP15723・15724の断面には幅10～20cmの柱痕が観察されている。他の柱穴では柱痕が認められないので、柱穴内がさらわれて抜き去られている可能性がある。

【遺物】　床面に相当する位置から出土した遺物は180～189である。

180は台石で炉からおよそ１m隔たった位置から出土している。床面上に据え置いて使用していたものと考えられる。磨り面は両面にあり、表面に敲打痕、裏面に刃物を研いだような平行する擦痕が残されている。これに接する位置からは台付甕の台部（189）が出土している。189は低く、164のような形状を呈するのだろう。表面には指頭による成形の後、ハケ調整を加えている。乳棒状の磨石・敲石である181・182は住居の縁から出土している。182は側縁も使用し、上端で敲打している。

183は小型の壺でSK15772の南西側から出土している。184は小型で広口の壺であろう。これも風化が進んで調整痕が失われている。185・187は器台で、表面にはハケ調整が施される。各々は別個体である。186は覆土内から出土したミニュチュア土器である。壺形になるのであろうか。188は台付甕の台部である。内面には指頭による成形痕が残される。表面は風化により調整痕が失われている。

貯蔵穴SK15772とその周辺からは190・191が出土している。190は二重口縁をもつ壺で、頸部～口縁部が貯蔵穴の縁上に、体部は住居の立ち上がり際に破片が集められていた。表面は細かなミガキにより仕上げられ、肩部にはクシ工具による細かな平行する沈線を上下に引いてその間をハケ工具の刺突を羽状に施している。口縁部外面にもハケ工具の刺突を平行して付ける。また、内面には横方向のヘラナデが施される。191は小型の甕の体部上半～口縁部である。貯蔵穴の縁から出土している。指頭による成形の後、表面にはハケ調整を施している。190の頸部～口縁部・191の出土位置はいずれも貯蔵穴の底面から浮いている。191は貯蔵穴が埋められる際に、190は埋められた後に廃棄されたと考えられる。



第222図　SH14549平面・断面図（掘方）、遺物実測図

SH14549（第222図）

【遺構】Ｇ８～Ｈ９グリッドで検出された。楕円形の住居SH14158・14215・15968に乗り、西側の方形の住居SH15286を一部壊している。このことからより南を指向する15286や14389などよりも東へ振れる一群がより新しいことが分かる。検出面は掘方埋土中で、掘方底面で住居に伴う遺構を確認した。

炉は住居の中央に掘方を検出した。直径70～80cmの円形状を呈する。内面にはシルトが充填されるが、熱染みが及び褐色に変色する。炉床はすでに失われていた。

柱穴は４か所で確認している。直径50～80cmの円形状を呈し、SP15678にのみ切り合いがある。切り合う土坑の覆土は柱穴の上位で柱痕を切って覆うので、柱の抜き取りのために掘られたものと考えられる。他の柱穴では幅15～18cmの柱痕が検出されている。柱穴の間隔は芯々で4.3m前後と揃っている。

壁溝は各辺で確認されている。幅10～20cm、深さ４～10cmとなる。

貯蔵穴は該当する土坑が見当たらないので、設けられていなかったものと考えられる。

【遺物】遺物は土器、石器が出土している。194～198は標高110.25m前後から出土しているので、掘方底面から12cmほど上に床が存在していた可能性が高い。

192・193・197はＳ字甕Ｂ類である。体部外面はハケによる丁寧な調整が施され、口縁部は強く横ナデされる。194は高坏である。表面の調整痕は風化のため定かでない。ややゆがんで口縁部がわずかに波打っている。脚部には３方向に透かしをもつ。195・196は高坏の脚部である。いずれも外面に細かなミガキが施され、内面は横方向の板ナデで平滑に整えられる。３方向に円形の透かしを空けている。198は壺の口縁部であろう。表面にハケ調整が施される。199は在地の小型の台付甕である。口縁部をゆるやかにくの字に折るのはＳ字甕の影響だろうか。体部外面は斜め方向のハケ調整で整えられ、内面は板ナデが施されるが体部上端に成形時の指頭痕が残る。

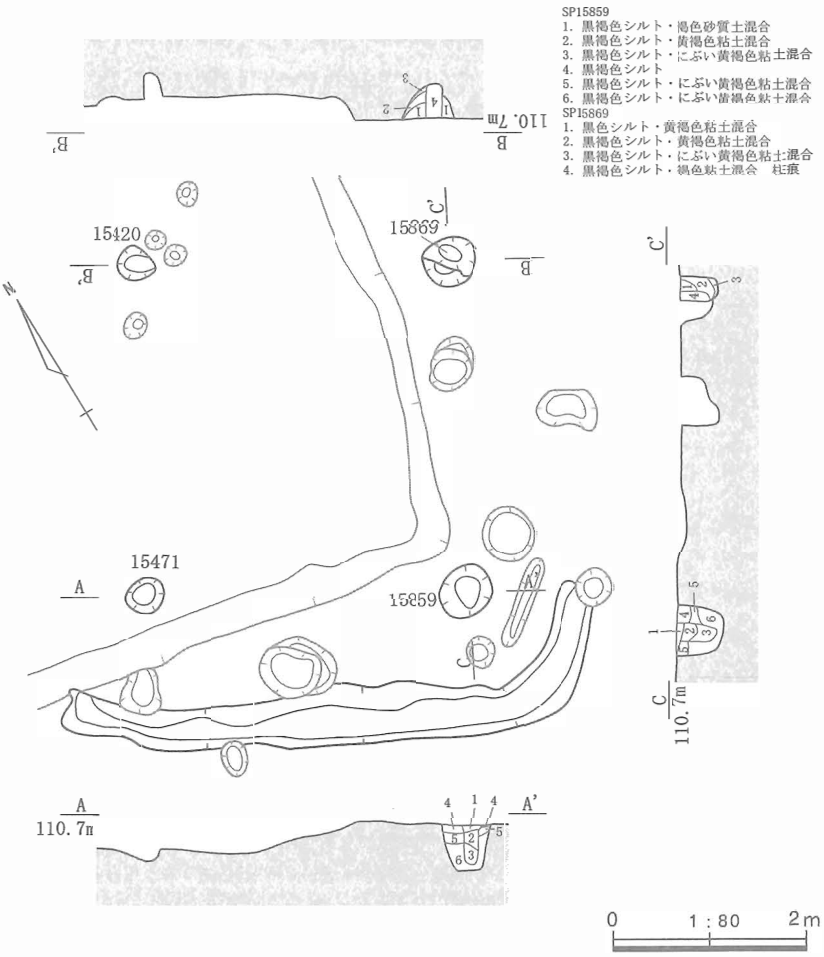
200・201は打製石斧で、縄文時代の混入品である。201には基部に使用痕が付く。

SH15855（第223図）

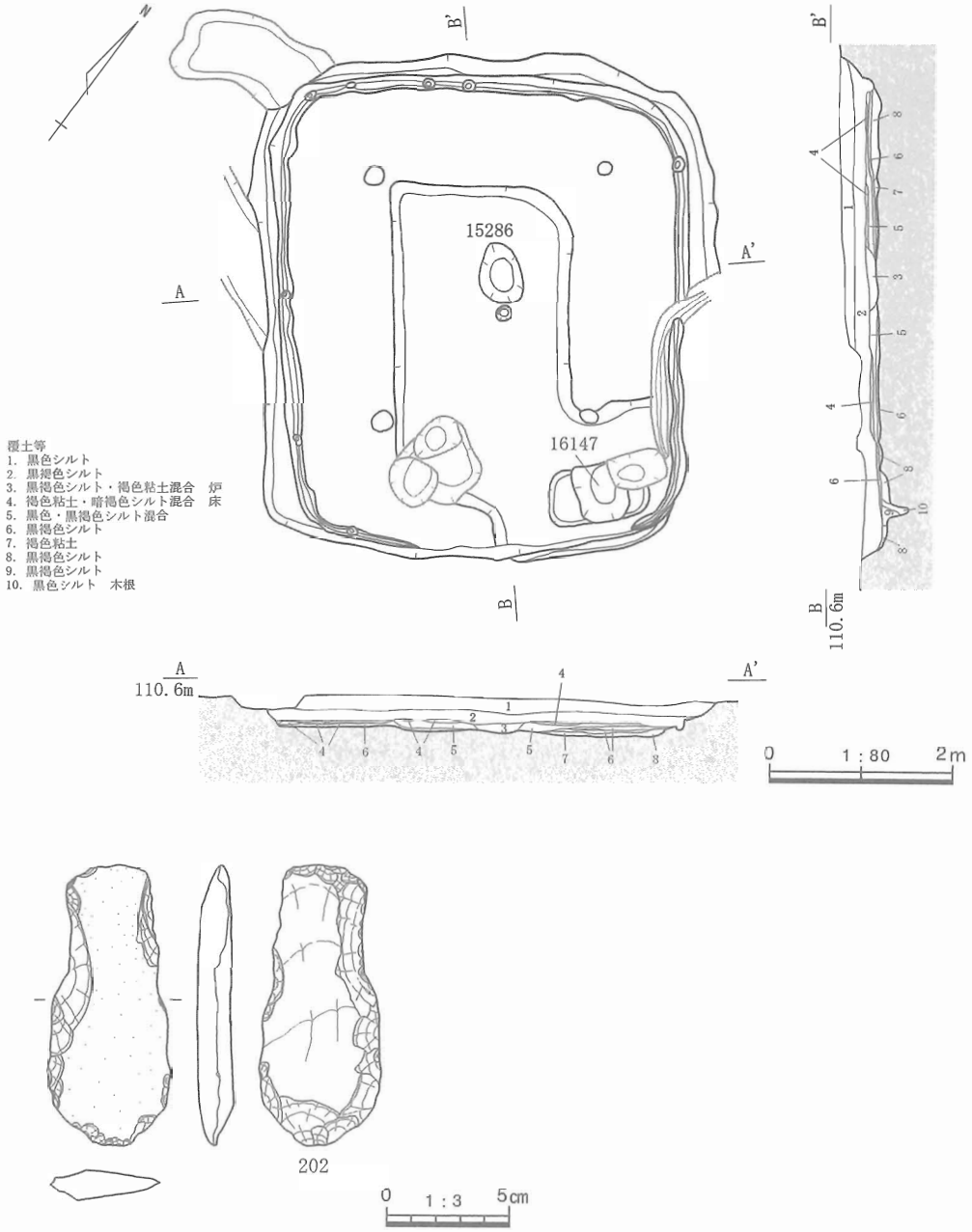
【遺構】Ｇ10～Ｇ11グリッドで検出された。住居の掘方が元来浅かったのか、溝の一部と柱穴のみが残存していた。

掘方の溝は南西側にのみ掘られている。幅45～60cm、深さ５cm前後となる。

柱穴は４か所で検出された。いずれにも切り合いは認められず、SP15869の断面に幅17cmの柱痕を確認した。SP15859の２・３層も柱痕の可能性がある。柱穴の間隔は3.3～3.6mと近似している。



第223図　SH15855平面・断面図（掘方）



第224図　SH15286平面・断面図（床面）、遺物実測図

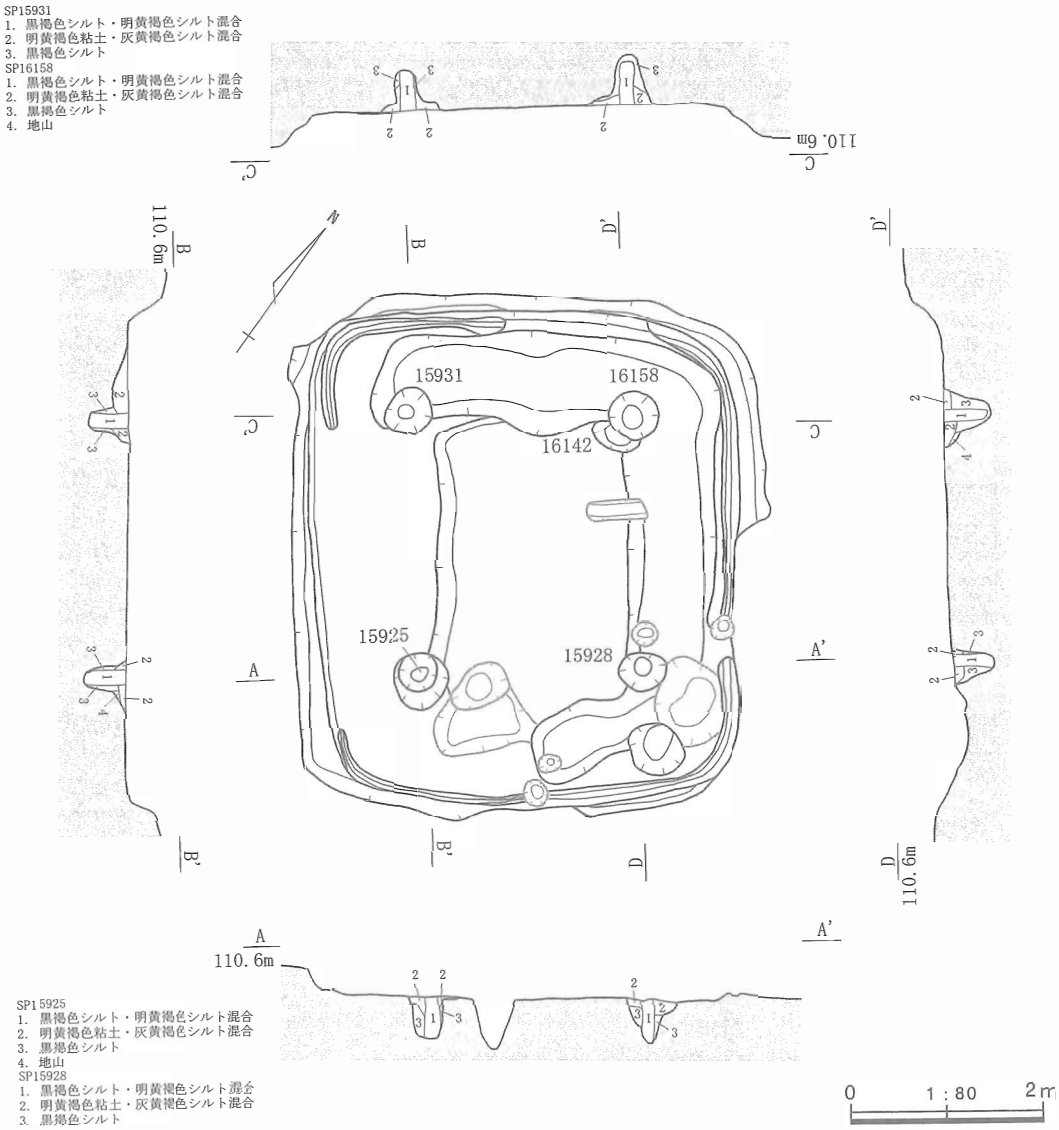
SH15286（第224～225図）

【遺構】Ｈ９グリッドで検出された。東側をSH14549により一部が壊され、西側でSH15615の東辺をわずかに切っている。掘方が深かったために遺存状況は比較的よく、床上覆土を検出面とした。

床面は２回にわたって作り替えられる。当初の床面は黄褐色粘土を用い２～４cmの厚みで張られる。この段階では外縁部が中央部よりも５～６cm、ベッド状に高まる。この高まりは全周せず、東側で途切れている。最終段階では、厚さ２～４cmの黒色・黒褐色シルトを入れて均した上に黄褐色粘土を用いて厚さ３cm前後の床が設けられる。この段階では当初段階にあった住居中心部のくぼみが失われ床は平坦となる。

床面上に直径12～20cmの柱痕が４か所検出された。柱の際まで床が張られていたことが分かる。

炉は住居の中央やや奥側に設けられる。直径55～70cm、深さ10cmの楕円形を呈する掘方内に黄色粘土ブロックの入る黒褐色シルトを充填し、上部を炉床とする。平面図に図示した炉は最終段階で、当初段



第225図　SH15286平面・断面図（掘方）

階の床に伴う炉は、床のかさ上げに伴って同じ位置に作り変えられ破壊されたものと考えたい。

貯蔵穴はSK16147で、25cm程の深さがある。両側に蓋受けと思われる2cm程度のくぼみが設けられる。

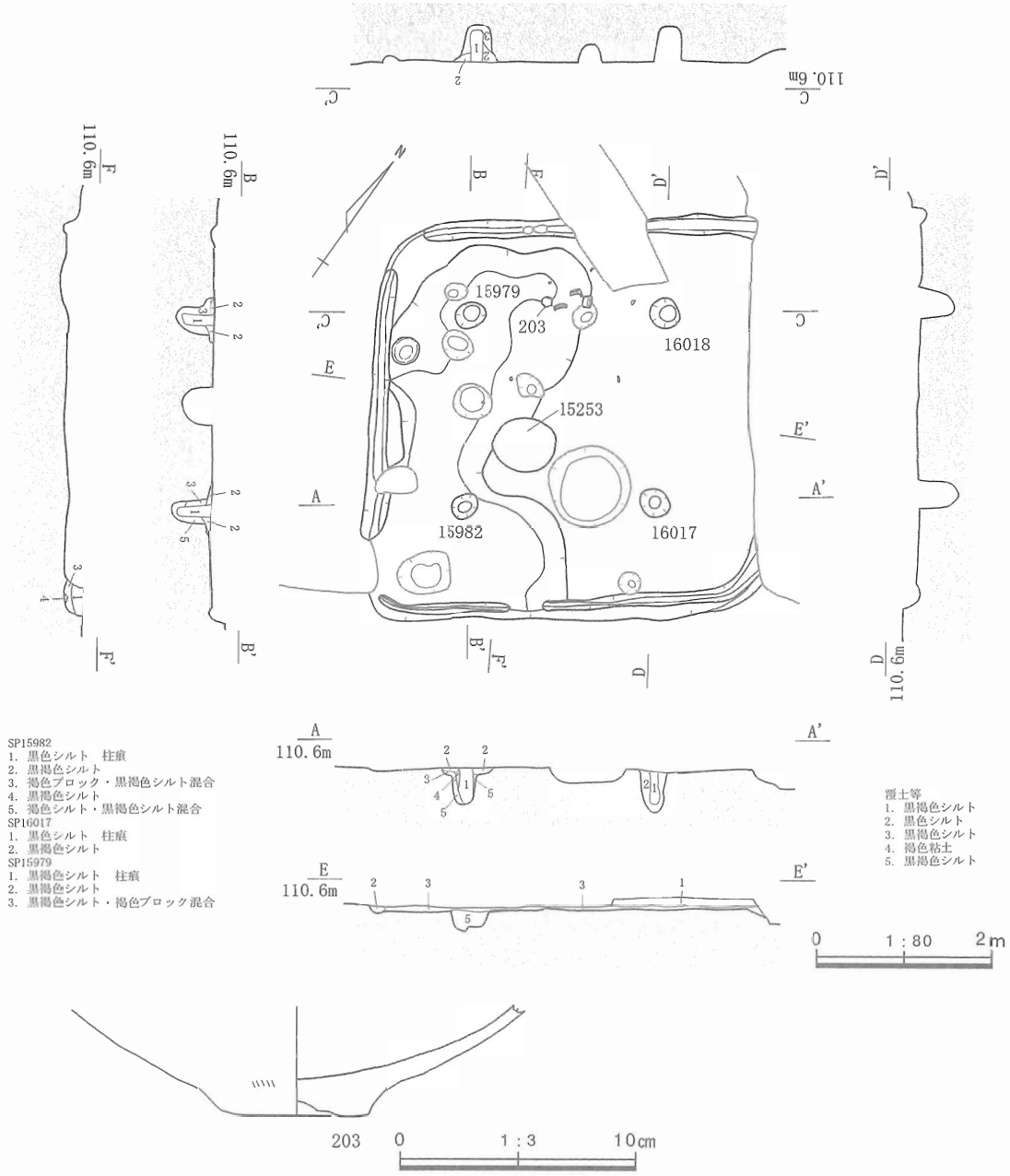
壁溝は南東側で途切れるものの、その他の部分には幅8～15cm、深さ1～4cmの規模で掘られている。

住居の掘方は西側を高めに残し、北側から南東側にかけて溝を設ける。西側の高い部分は床面のベッド状の高まりの芯の部分を削り出すので、当初の床の形状は掘方掘削以前から予定されていたと理解される。溝は0.6～1.1m、深さ4～7cmとなり、南東側がより細くなる。柱穴の掘方は直径40～50cmの円形ないしは楕円形を呈し、切り合いは認められない。いずれの柱穴でも幅10～18cmの柱痕を断面で検出している。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.65～2.75m、短手方向で同様に2.4mとなる。

【遺物】202は珪質岩製の打製石斧である。先端部は表裏共に使用により摩滅している。

SH15615（第226図）

【遺構】H9～H10グリッドで検出された。西側でSH14550・16008を切り、東側でSH15286に一部が切られる。掘方埋土が検出面となったが、炉が残存しており床面に近在するものとして一旦記録を採った。床面は住居西側の標高110.35mあたりに遺物が散布するので、この付近に床面が設けられていた可能性がある。第226図は住居の掘方に炉、出土遺物を合成したものである。



第226図　SH15615平面・断面図（掘方）、遺物実測図

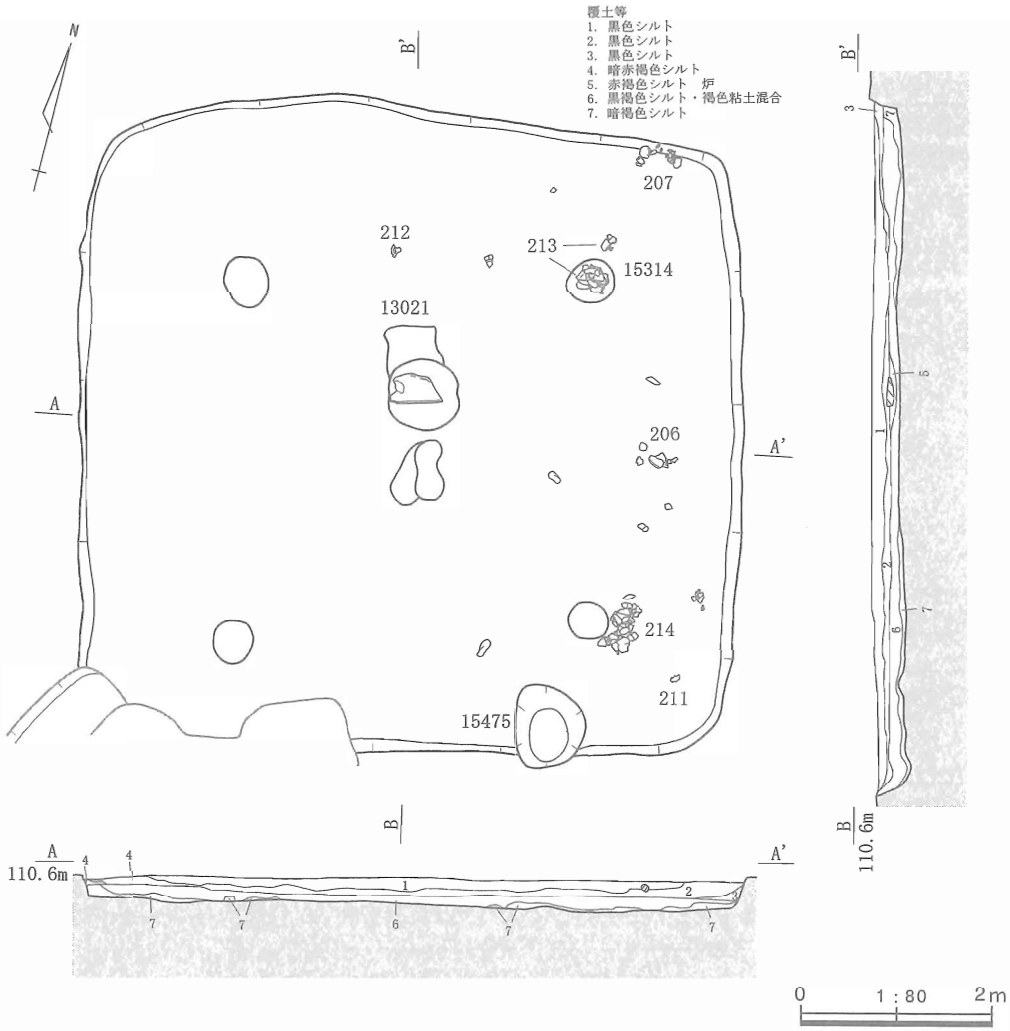
炉は住居の中央やや南西側に偏った位置に設けられている。明確な掘方は把握できず、直径60～72cmの熱染みとして存在を把握した。炉床はこの位置に熱が伝導される近接した位置にあったのだろう。

住居の掘方は底面を平らに整えて、西側に溝を設ける。溝は幅1.1～2.25m、深さ１～６cmで、住居のおよそ西半分の範囲に掘られている。外法は住居の縁辺に沿っているが内法は蛇行する。

壁溝は３辺に把握されているが、東隅で住居の縁に沿って北側に回り込むので、失われた東辺にも壁溝が設けられていたと考えられる。幅８～28cm、深さ２～５cmとなる。貯蔵穴は明確でない。

柱穴の掘方は４か所で検出された。直径25～35cmの円形をなし、全ての柱穴の断面には幅12～15cmの柱痕が観察されている。柱穴の間隔は芯々で2.2mと、揃った位置に設けられている。

【遺物】203は壺の底部で元来床面上にあったものと考えられる。内外面ともに風化が進んでいるが、外面に縦方向のハケ調整が一部に見える。底部はドーナツ状に外縁部が盛り上がり中央部がへこむ。



第227図　SH13021平面・断面図（生活面）

SH13021（第227～231図）

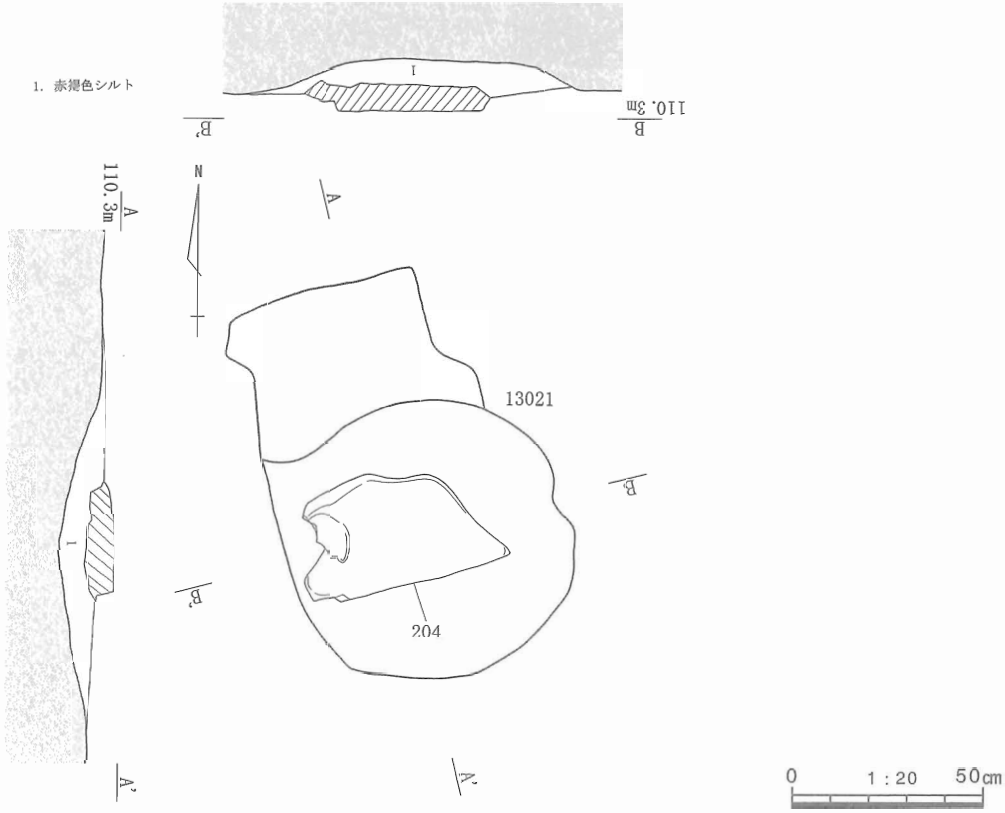
【遺構】L16～M17グリッドで検出された。南側の一部を撹乱によって切られるが、ほぼ全体にわたって形状を残していた。検出面は覆土である黒色シルト中であった。

床面は明確な敲き締められた硬化面として把握できなかったので、炉が乗る6層上を生活面と考えた。生活面上からは住居の廃絶に伴って遺棄されたとみられる土器が、住居の東側に偏って出土している。

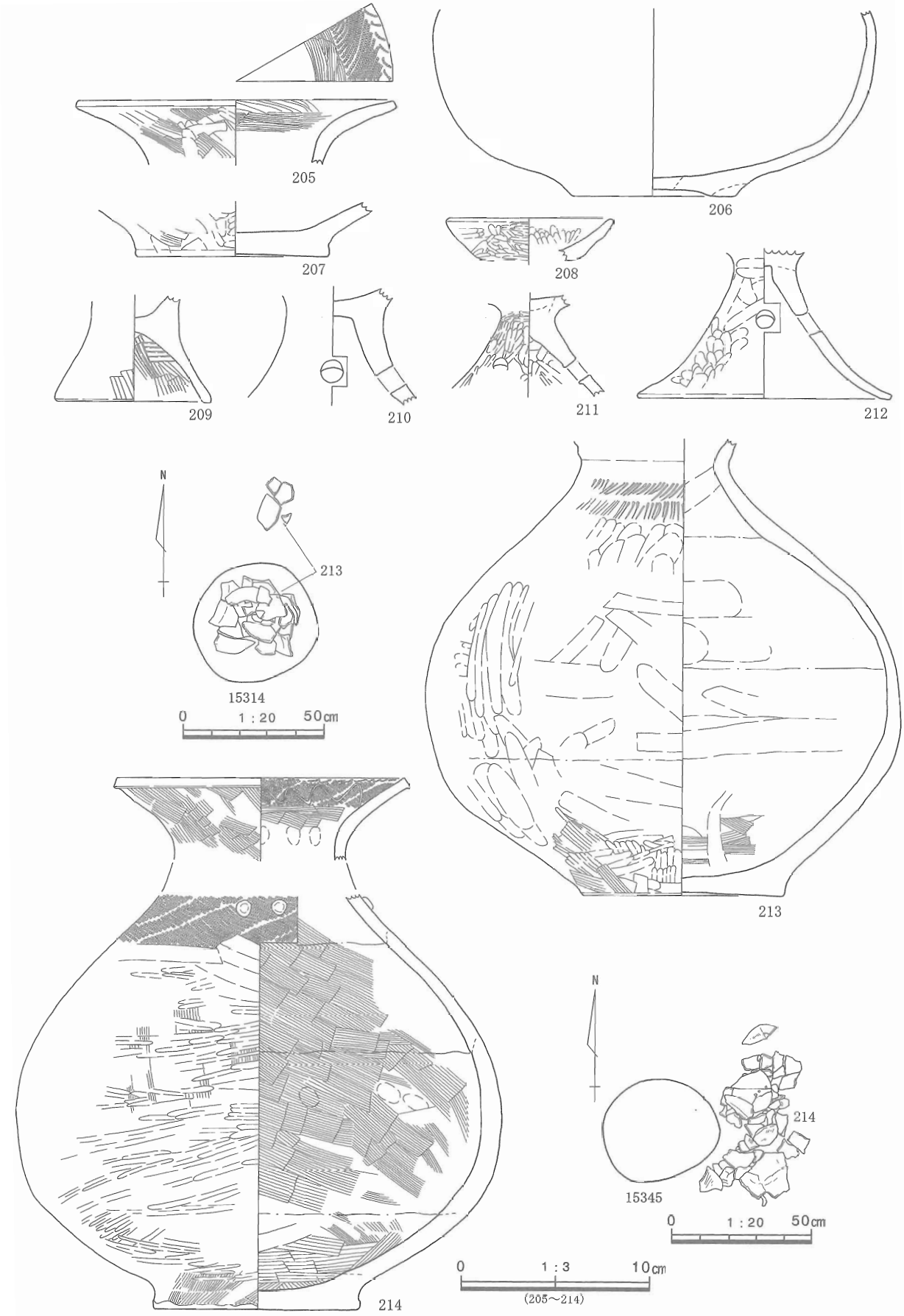
炉は3か所で検出された。炉13021は6層中に長軸1.04m、短軸0.85m、深さ12cmの掘方を穿っている。内部には元来黒褐色であったと推測されるシルトが充填されている。この部分は熱によって直径73cmの円形状の範囲が赤褐色に変色している。炉床は平らに整えられるが、頂部中央に長さ54cm、幅31cmの台石が水平に埋め込まれ炉床とともに赤褐色に焼けている。この炉床上の台石は、焼けていない礫を置く事例とは異なり、炉床上に水平面を作り出すために設置された炉の構築材と位置づけられる。この場所の北側には横幅50cm、奥行き40cm程の矩形の範囲がさらに赤褐色に焼けている。炉の奥側に熾を掻き出すなどして調理等にこの場所を用いているのだろうか。

これらの炉のすぐ南側にも炉が検出されている。長さ60cm、幅20～30cmの楕円形状の熱染みが2か所重複するように認められた。炉13021のような掘方は伴わず、生活面状を直接利用している。

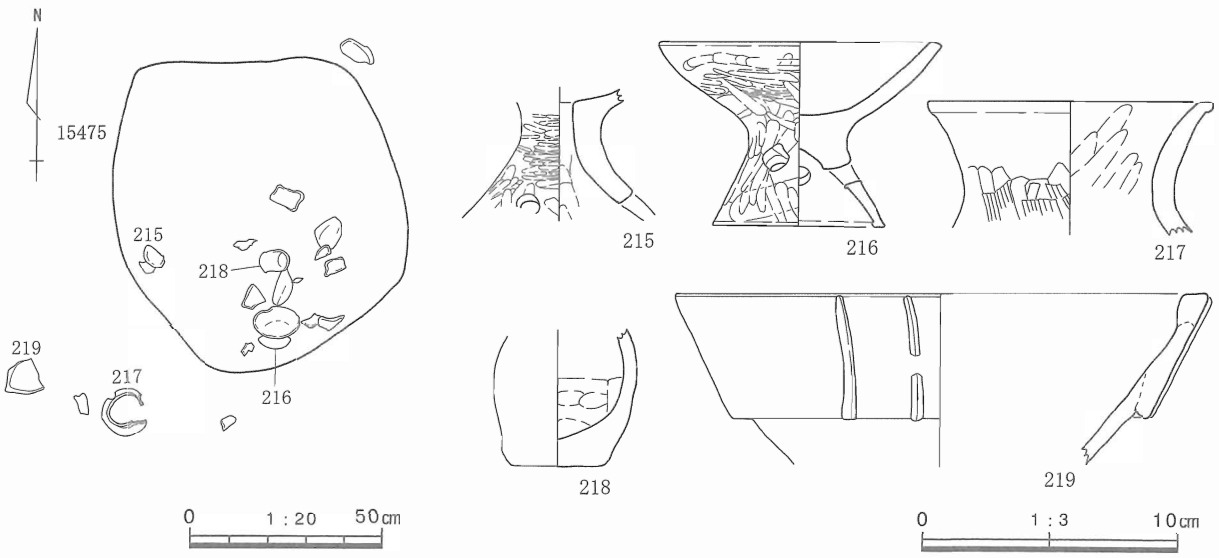
生活面上では柱穴を3か所検出している。いずれも掘方上で検出した柱穴と規模が近似するので、掘方埋土上から掘削されていることが分かる。また、SP15332のやや東側に位置するSP15314からは土器



第228図　炉13021平面・断面図、遺物実測図



第229図　SH13021遺物実測図、柱穴SP15314・15345遺物出土状況・遺物実測図



第230図　土坑SK15475遺物出土状況・遺物実測図

片が密集して出土している。何らかの用件で柱の脇に土器の投棄場所を設けたのであろうか。

壁溝は明らかでないが、B-B′断面の南側縁が若干窪むので浅い壁溝が存在した可能性もある。

貯蔵穴は南側の壁際に設けられる土坑SK15475を検出した。長軸0.85m、短軸0.75m、深さ28cmの楕円形状を呈し、生活面の高さを考慮すれば深さは48cm前後であったと推定される。内部からは土器が投棄されるように出土している。

住居の掘方は底面を平らに整え、東～南側に溝を設ける。溝は東側の住居掘方沿いから南側にかけて、Ｆ字状に掘られている。幅0.6～1.9m、深さ４～８cmとなる。通常は住居の外縁の沿う形で溝が設けられることが多く、この形状は不自然である。拡張にしては溝のつながりが自然で、より小型であった時分の柱穴も見当たらない。したがって、拡張に伴ってこのような形になったのではなく、掘方の掘削途中に設計を変更して溝を掘り直しているものと考えたい。

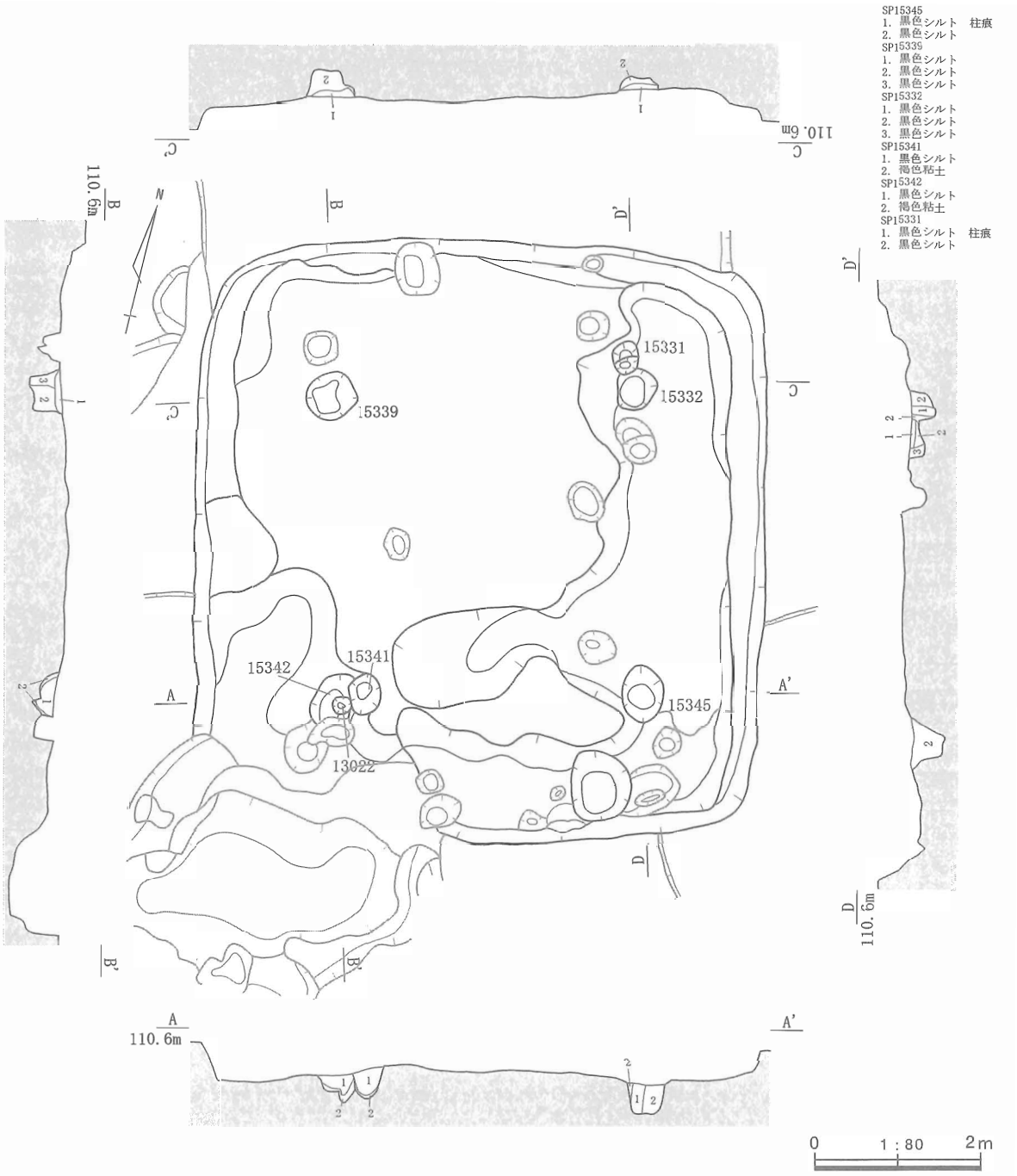
柱穴の掘方は４か所で検出されている。直径40～60cmでSP15332以外の深さはおよそ近似し、南西側のSP15341・15342、北東側の15332では切り合いが認められる。柱穴の間隔は長手方向に芯々で4.2m、短手方向で同様に3.4～3.8mとなる。

【遺物】遺物は床面上とSP15314内、貯蔵穴SK15475内から土器・石製品が出土している。

204は炉13021上に据えられたかたちで出土した台石である。砂岩製で焼けて節理によって表面が剥がれている。残存する表面は使用によって滑らかに磨滅している。

205～212は覆土～生活面直上で出土した。205は壺の口縁部で外面をハケ調整した後、口縁部のみナデを加える。内面はハケ調整の後、口縁内部に縄文を施す。206・207は壺の底部～体部片で、206はドーナツ状に底部の外縁部を盛り上げ、207は平坦にする。206は風化が進んで明らかでないが、207ではハケ調整の後に横方向の粗いミガキを加える。209は台付甕の台部で、内外面ともにハケ調整で整えられる。208・210～212は器台ないしは高坏である。208の坏部は横方向のハケ調整の後に外側は横方向の、内側は縦方向のミガキが加えられる。脚部である211は３方向に透かしを空けるが、210・212は４方向となる。210は風化により判然としないが、211・212は縦方向のミガキで平滑に仕上げられる。

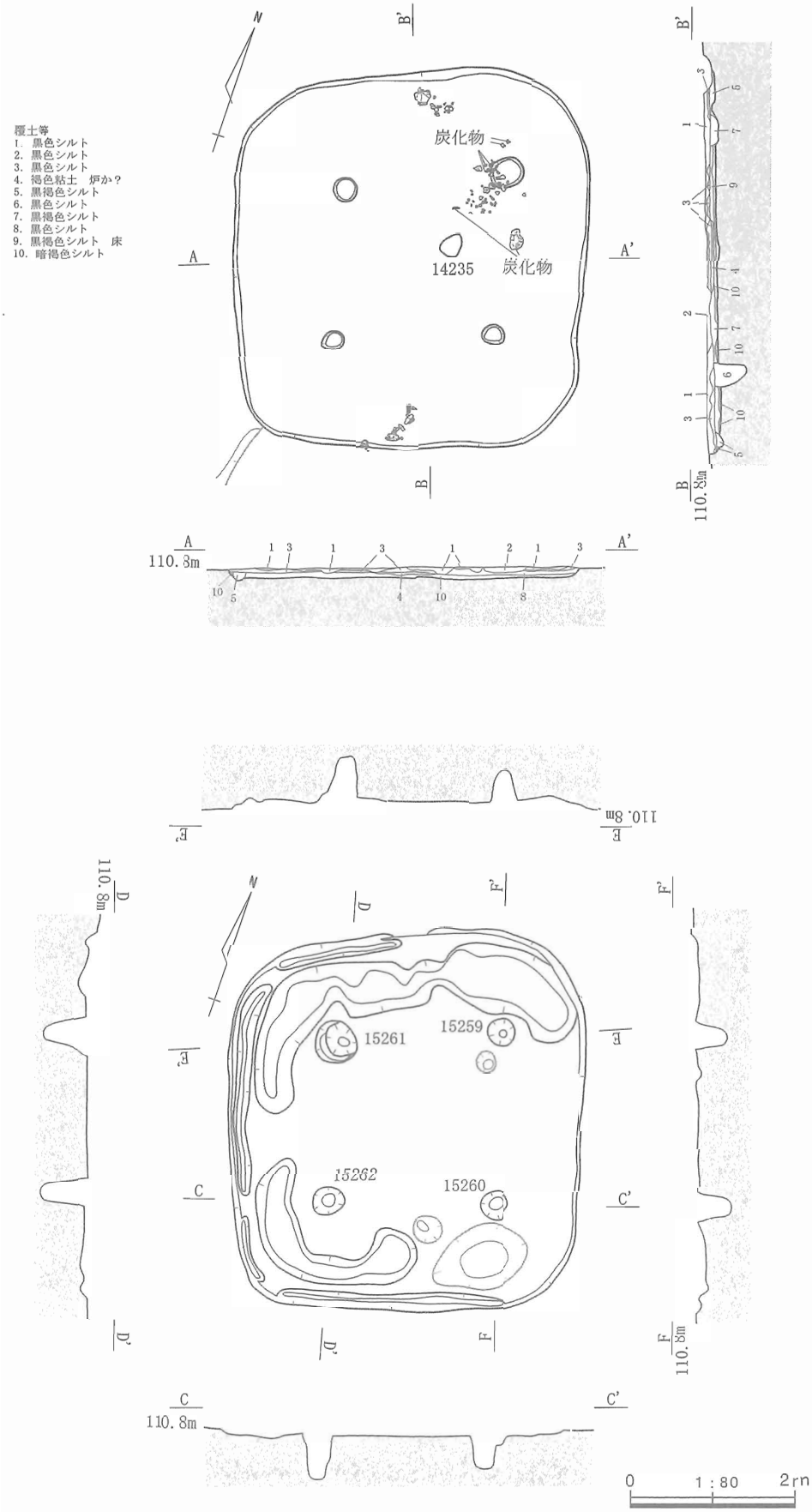
213は一部が北側の生活面上に分布するものの、多くの破片をSP15314内から出土した。口縁部が失われており、壺を小穴内で割ったというよりは破片を集めて小穴内に捨てたようにみえる。外面はハケ調整の後板ナデと粗く太い磨きが乱雑に施される。頸部は尖った工具で上から下へ短い沈線を連続して２段にわたって刻んでいる。頸部上半には２mm程の高さで８mm程の幅の突帯が巡っている。



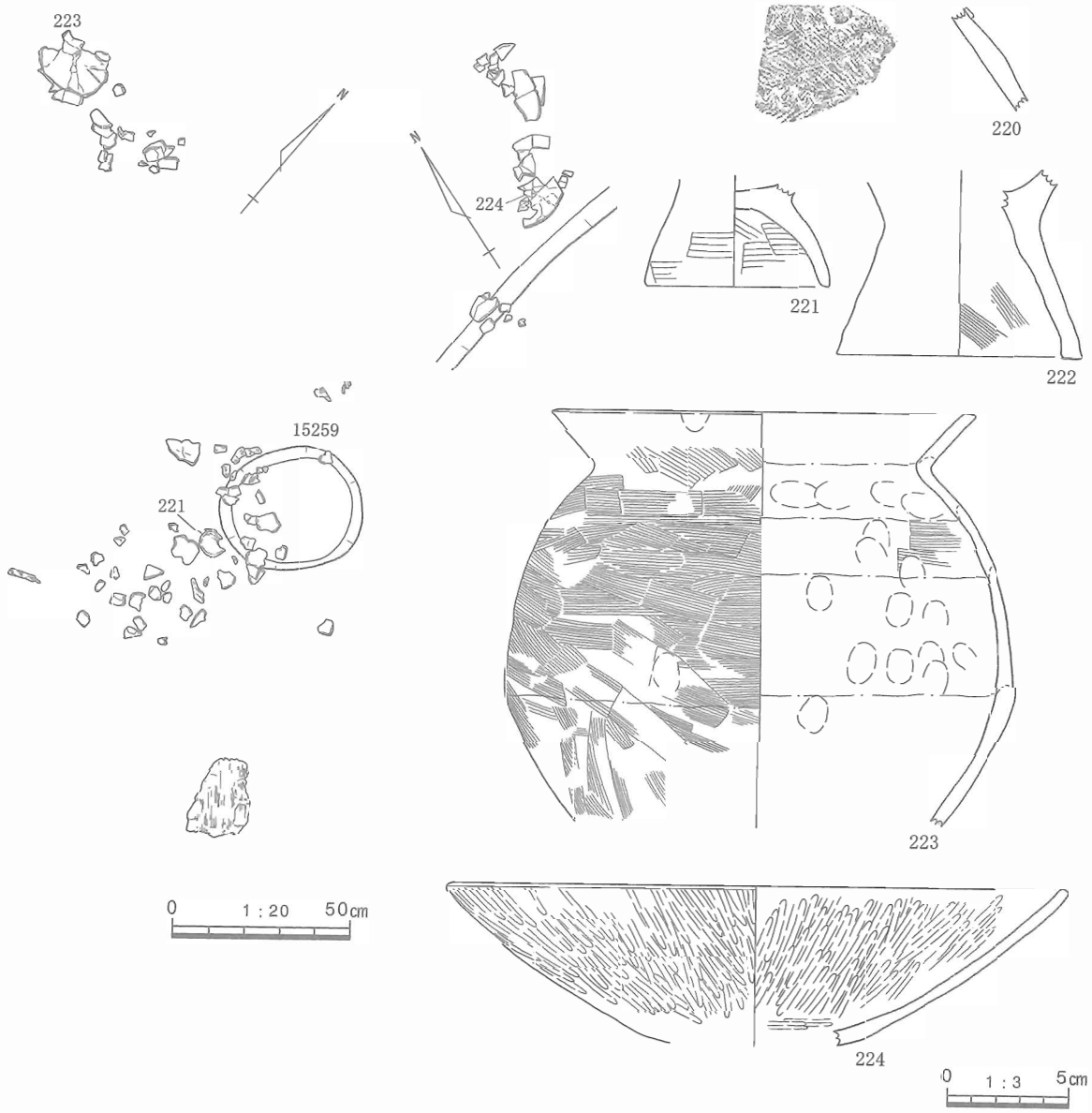
第231図　SH13021平面・断面図（掘方）

214は柱穴SP15345の東脇の生活面上に破片が集中していた。この場合も潰れたように重なる破片が少ないのでこの場に破片を集めたようである。外面はハケ調整の後に横方向のミガキを加えるが、まばらな部分ではミガキが消し去られないで残る。肩部には縄文を施し、2個1対の円形浮文を上端に貼り付ける。この縄文の下端は横方向のヘラナデで区画されるが、一部は縄文の上にかぶって消してしまっている。口縁部には斜め方向のハケ調整を加え、口唇部も横方向のハケ調整によって平らに仕上げている。内面は指頭による成形の後、ハケ調整で平滑に整える。口縁部には結節のある縄文を施している。

貯蔵穴SK15475とその周囲からは215～219が出土している。219は複合口縁をもつ大郭式の大形壺の口縁部である。218は小型の壺形を呈すると思われる。215・216は高坏であるが、脚部上位のミガキの方向が異なっている。217は壺の口縁部で、丸い体部が取り付くものと思われる。



第232図　SH14235平面・断面図（床面・掘方）



第233図　SH14235遺物出土状況・遺物実測図

SH14235（第232～233図）

【遺構】Ｉ11グリッドで検出された。南側でSH14346を切る。検出面は床上覆土下位で、炉床の一部が露出していた。また、床面上には炭化材が残されていたので、住居は焼失している可能性がある。

床面は黒褐色シルトを用い、４～６cmの厚みで硬化する。住居の北側にのみ残存しており南側等では認められない。近似した質の７層・10層の上面は床面と同等の高さなので、床は掘方埋土上面を敲き締めたものなのかもしれない。床面上の北・南側、SP15259付近から遺物が集中して出土している。

炉は住居の中央やや東寄りに一辺20～28cmの楕円形状の熱染みとして確認された。これとは別に住居の中央付近に直径75～90cmの小土坑がある（断面中４層）。炉の残欠であろうか。

壁溝は床面上では把握できなかったが、断面と掘方上で見出している。掘方上では幅12～27cm、深さ２～７cmで、東辺には見当たらない。貯蔵穴は該当する土坑がなく、設けられていなかった可能性が高い。

住居の掘方は底面を平らに整えて、周囲に溝を設ける。溝は北側と南西隅の２か所で東側には掘られていない。北側の溝は住居の立ち上がりに沿い、幅0.3～0.85m、深さ１～８cmとなる。南西側の溝は

幅0.23～0.52m、深さ１～６㎝で、南西隅にU字形に配置される。末端は住居の内側に折れ曲がる。

柱穴の掘方は４か所で検出された。直径30～55㎝で切り合いは認められない。北西側のSP15261は上下２段に掘られている。柱穴の間隔は芯々で２～2.1mと近似した値に揃っている。

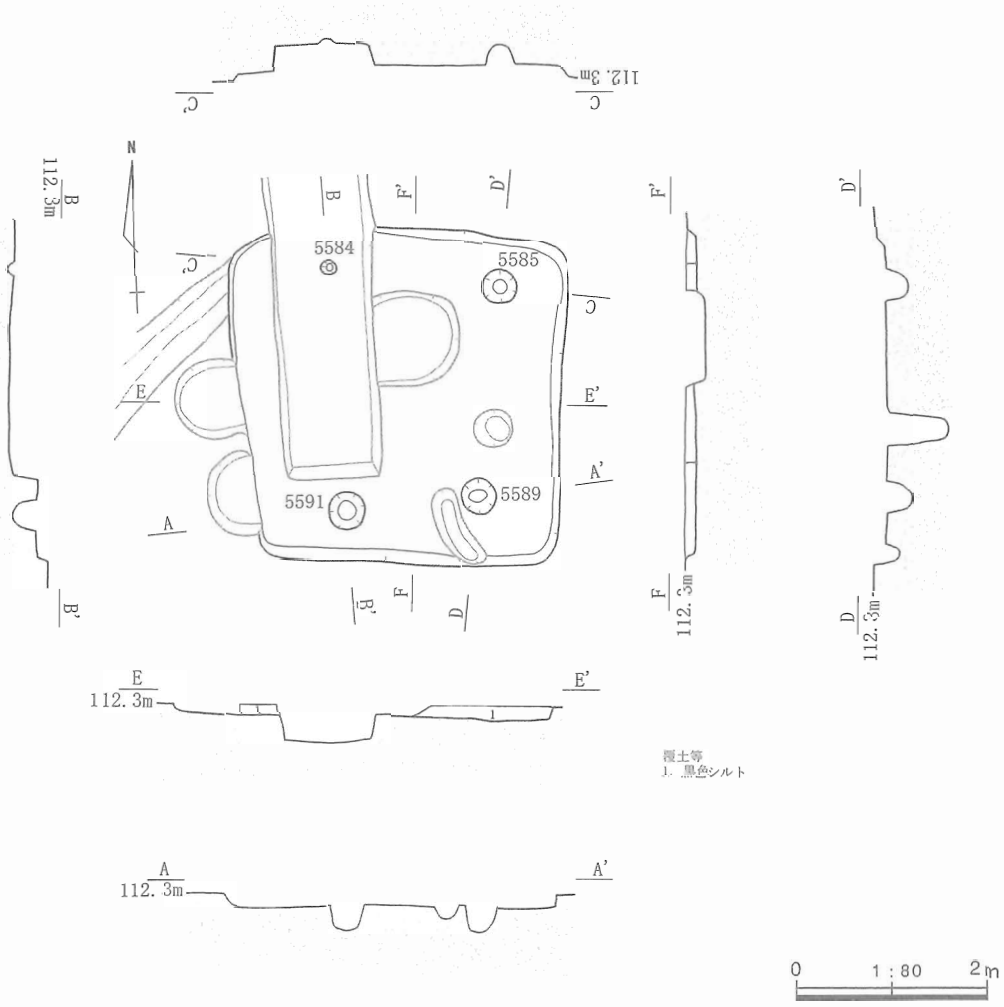
【遺物】遺物は床面上から土器が出土している。北側の住居の縁からは台付甕223が出土している。外面は細かなハケ工具で下半は斜め方向に、上半は横方向に、口縁部は再び斜め方向に調整が施される。口縁部の上半はハケ調整の後に強い横ナデが加えられて調整痕を消している。内面は成形時の指頭痕が多く残り、部分的に横方向のハケ調整が加えられる。全体的に薄手で華奢な作りとなる。

柱穴SP15259の上面～周囲にかけては台付甕の破片が散乱していた。221は小型の台付甕の台部で、全体的にハケ調整で整えられる。224は住居の南側縁付近から出土した大型の高坏の坏部で、全体的にミガキが施され、きれいに仕上げられる。220・222は覆土中の出土で、壺の頸部片である220には縄文が施される。222は台付甕の台部で風化が進んでいるが、内面はハケ調整で整えられる。

SH5162（第234図）

【遺構】K28グリッドで検出された。明確な床がなく、掘方上面まで掘削し住居に伴う遺構を把握した。

住居の掘方は底面を平らに整え、溝を伴わない。小型の住居なので、あるいはこの面が住居内の生活面だった可能性もあろう。柱穴の掘方は４か所で検出した。直径33～40㎝の円形をなし、柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.2～2.6m、短手方向で同様に1.4～1.8mとなる。壁溝・炉・貯蔵穴は確認できない。



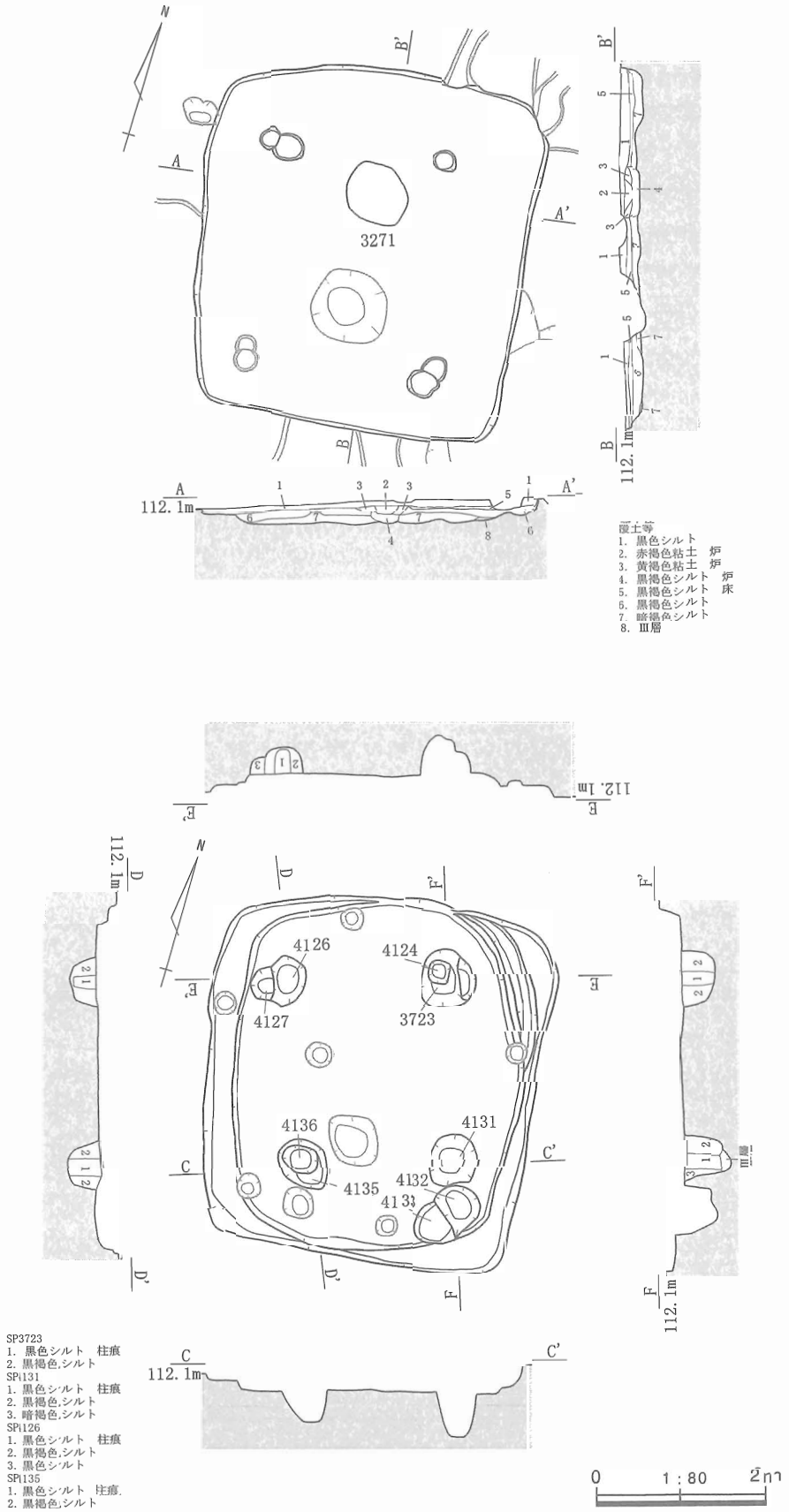
第234図　SH5162平面・断面図（掘方）

SH3271（第235～236図）

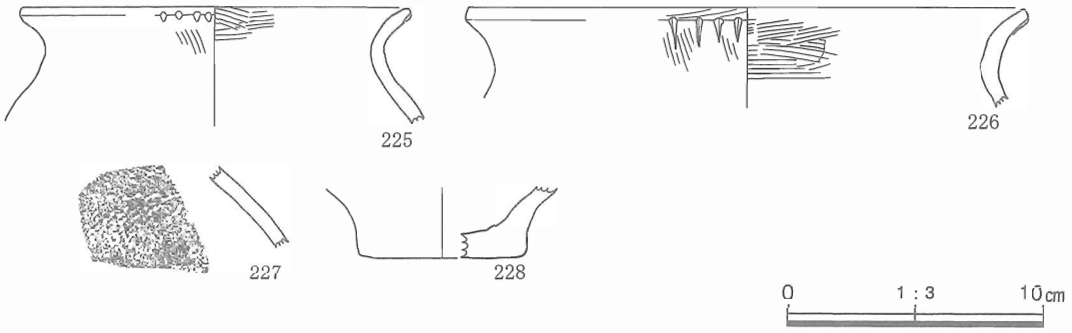
【遺構】L29～M29グリッドで検出された。隅丸方形の住居SH1685・1688等を切っている。上面は耕作による撹乱などを被るが、住居のプランは欠けることなく把握できた。検出面は住居の覆土である黒色シルト中となり、住居の掘方上で異なるプランを検出したことから改築されていることが判明した。

床面は黒褐色シルトを用い、3～7cmの厚みで硬く敲き締められている。床面上には柱痕と考えられる直径20～30cmの円形のプランが3か所に検出できた。これらから、柱の際まで床が設けられていたこと、挿げ替えられた柱の跡には床が復旧されなかったことなどが把握できる。南東側に見出した二つの円形のプランは当初柱痕と考えたが、掘方上で貯蔵穴の上位の一部であることが判明した。

炉は住居の中央やや奥側に設けられている。直径60～64cm、深さ20cmの円形状の掘方内に、黒褐色シルトを半ばまで充填し、更にその上位に黄褐色粘土を張り込んで上面を炉床とする。この掘方は2段にわたって掘られているように見え他の住居と比べてもより深いので、掘方で検出された楕円形の住居の炉上に再構築されている可能性が高い。



第235図　SH3271平面・断面図（床面・掘方）



第236図　SH3271遺物実測図

炉床は床面から２㎝程度盛り上がっている。炉床は直径70㎝程の円形に熱染みが及んでいるが、熱染みが深い部分は中央部で直径26～40㎝の楕円形となる。

方形のプランの住居には壁溝は検出されていない。断面にも見当たらないので設けられていなかったものと考えられる。

貯蔵穴は床面上では間口の一部を検出している。掘方上では直径45㎝前後、深さ16㎝のSK4133と直径50㎝、深さ30㎝前後のSK4132の２基が把握されている。床面上で把握された切り合いにより4133がより新しいと考えられ、住居のプランが変更される際に4132が再掘削されたものと考えられる。

住居の掘方は底面を平らに整えて溝をもたない。底面では異なる住居が２軒重複していることが判明した。当初に築かれたのは、内側に入る楕円形状のプランで、外側に一回り大きく方形のプランが掘られている。このことから、隅丸方形の住居が方形のプランに作り替えられていることが判明する。隅丸方形のプランには北東側に幅23㎝前後、深さ５㎝程の壁溝が伴っている。

柱穴の掘方は４か所で検出した。複数の小穴が切り合うようにみえるのは北側のSP4126・4127、3723・4124であるが、切り合う小穴はいずれも柱穴よりも浅く柱痕が断面で確認されるので一概に柱の挿げ替え、抜き取り穴とは考えられない。他の柱穴の断面からも幅14～20㎝の柱痕が検出されている。このことから、住居のプランが変更になっても、柱はそのまま用いられたことが分かる。

【遺物】遺物は貯蔵穴SK4132・4133から出土している（図版編図版206-2）。これらは皆破片であり、比較的貯蔵穴の上位から出土しているので、貯蔵穴が埋め戻される際にともに入れられたと考えられる。

225・226は台付甕の頸部～口縁部片である。いずれも内外面ともにハケ調整で整えられる。口唇部は矩形に面取りし、外面にハケ工具による刺突を連続して付ける。227は壺の肩部片である。外面には縄文を施す。228は壺の底部と考えられる。外面は判然としないが、内面はハケ調整の後にナデを施して平滑に仕上げている。

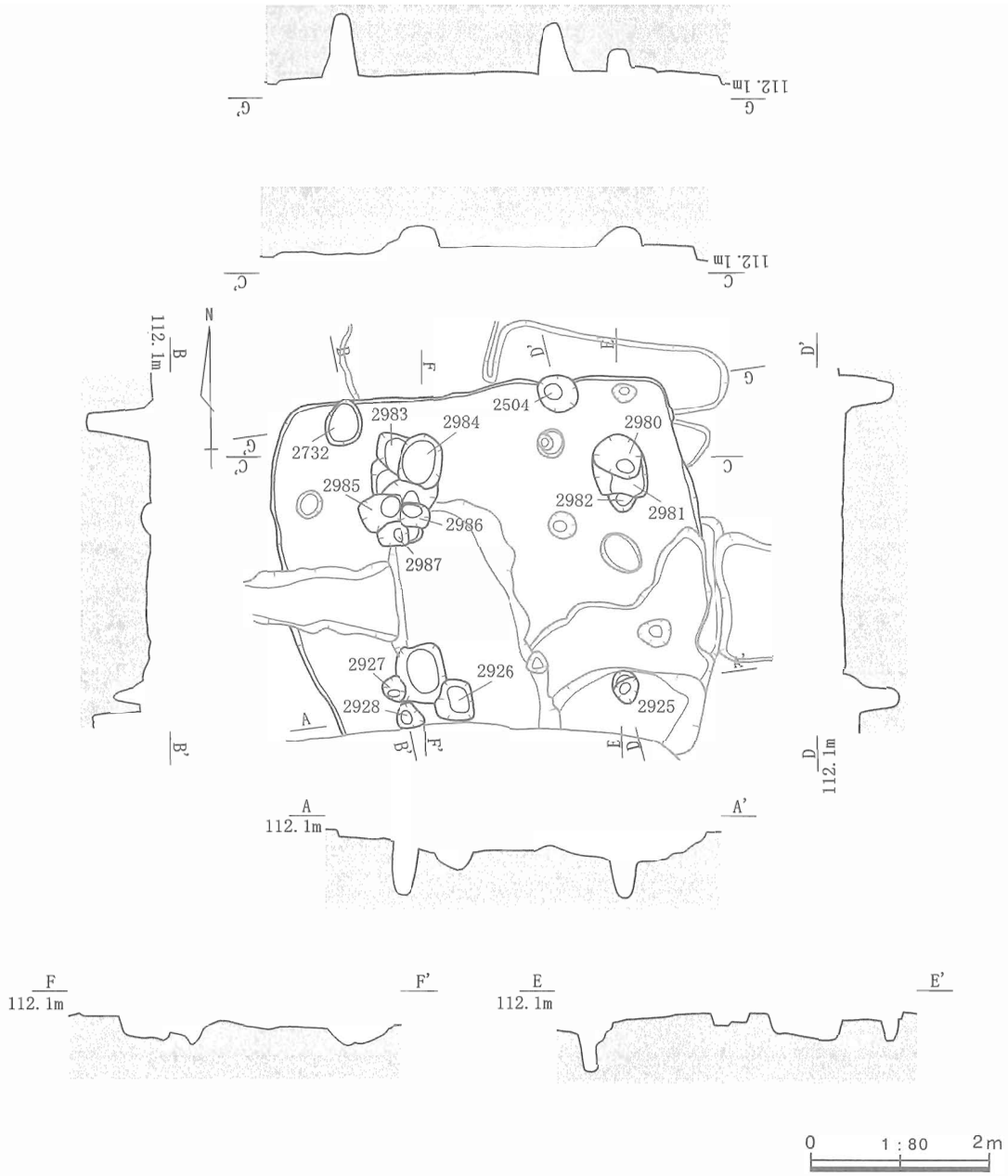
SH2508（第237図）

【遺構】N31～N32グリッドで検出された。南側の一部を方形周溝墓SZ228によって切られるほか、上面には天地返しによる撹乱が広く及んでいる。検出面はほぼ掘方底面上となった。

住居の掘方は底面を平らに整え、溝は撹乱で壊される場所もあるので存在は不確かである。

柱穴の掘方は６か所以上で検出されているので、複数回の建て替えが行われたものと考えられる。柱穴は大きく分けて住居の縁から0.4～１ｍ程度内側に入る一群と縁際に設けられるものがあり、時期的に前後する関係にあるものと思われる。

前者に該当する柱穴は、SP2925・2980～2982・2926・2983～2987と考えられる。深さは20～30㎝程度となるので、SP2925も北側に切り合う部分が前者の柱穴であった可能性がある。他の３か所は直径32～70㎝の円形～隅丸方形の小穴が複数切り合っており、特にSP2983～2987が著しい。いずれも柱の

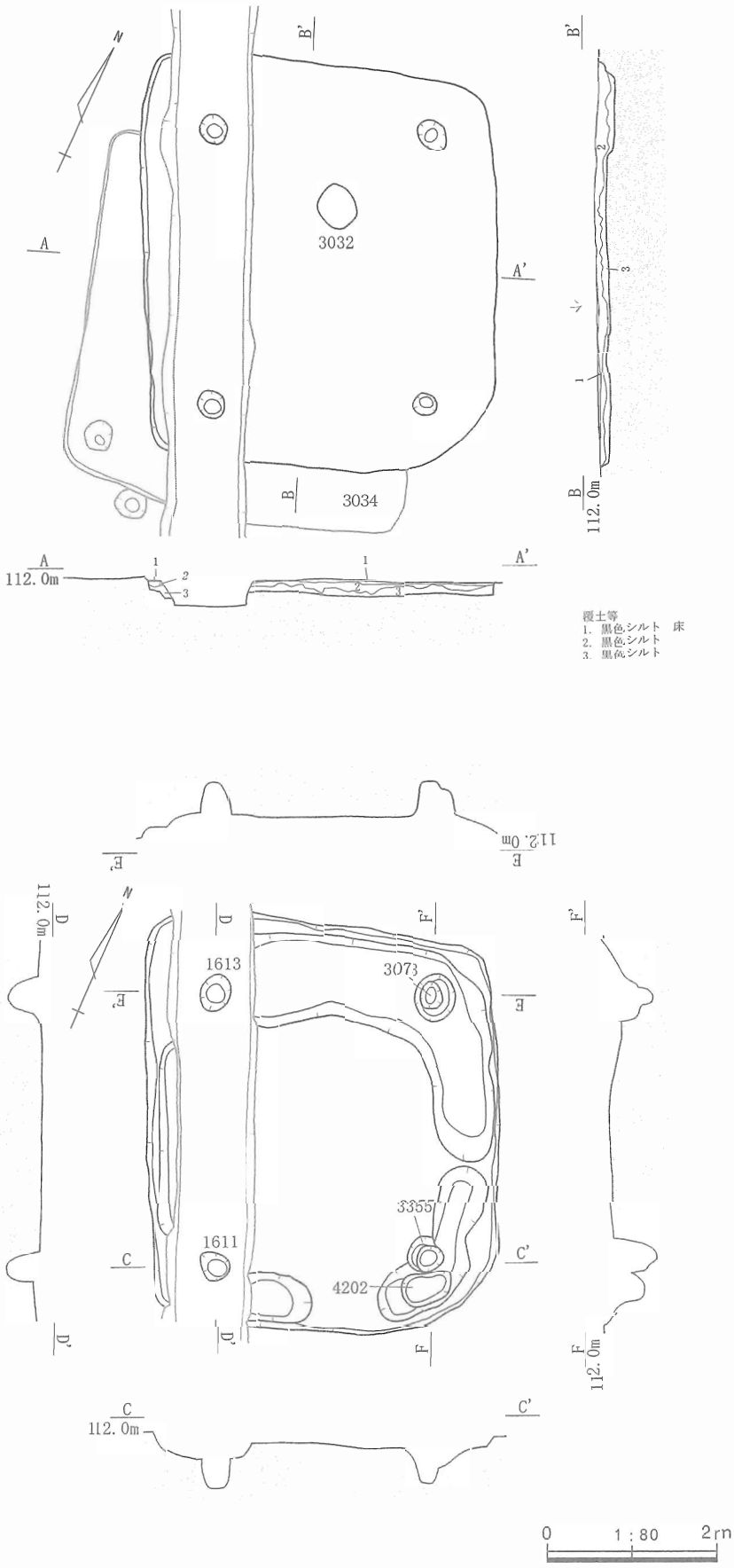


第237図　SH2508平面・断面図（掘方）

挿げ替えに伴うものと推測されるが、セット関係を特定することは難しい。内側から外側にかけて随時広げられていったのであろう。柱穴の間隔は南北方向に芯々で1.5～2.5m、東西方向では1.9～2.7mと差が大きい。これらの柱穴は、住居の掘方からはやや東側に寄っているように見える。残存する住居の掘方は後者の柱穴に伴って拡張された姿であろう。

後者に該当する柱穴はSP2925、2927・2928、2732、2504である。直径28～50cmの円形あるいは楕円形をなし、深さは60～70cmと前者の柱穴に比べ著しく深くなる。これらの柱穴には柱の挿げ替えや抜き取りに伴う切り合いが認められない。柱穴の間隔は南北方向に芯々で3.4m、東西方向で同様に2.5mと揃っているが、北側のSP2504・2732は住居の縁際となり、位置としてはやや違和感がある。

炉・貯蔵穴・壁溝は認められない。炉は撹乱によって失われているのだろうか。貯蔵穴は該当する土坑が見当たらない。SZ228によって壊されている可能性も否定できない。



第238図　SH3032平面・断面図（床面・掘方）

SH3032（第238～239図）

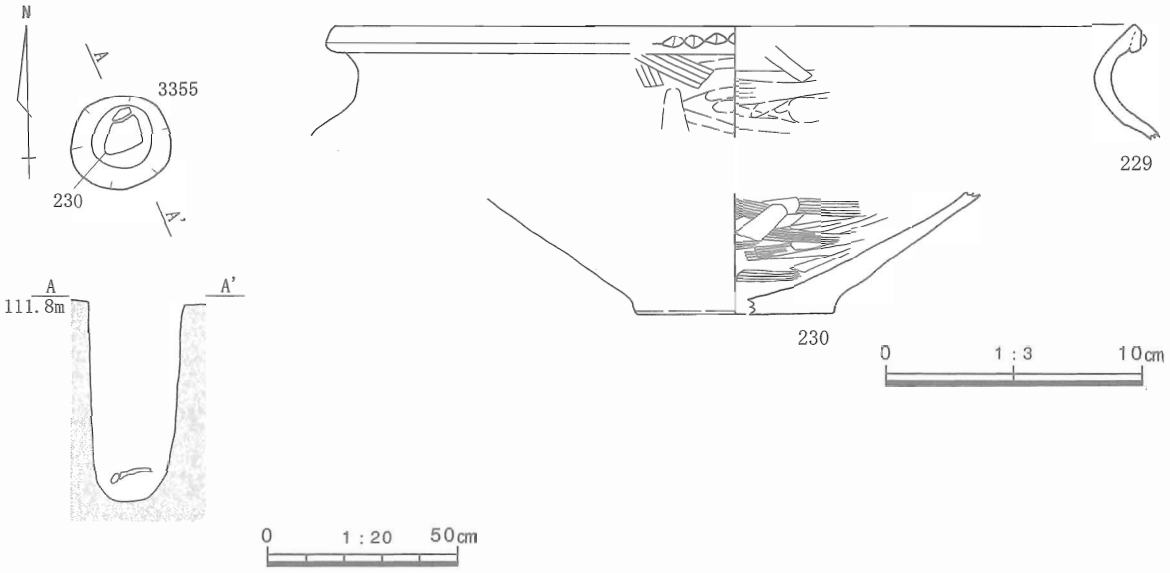
【遺構】N29グリッドで検出された。ほぼ同規模の住居SH3034に重複する。SH3034は3032よりも浅く留まるのであろうか、掘方上で伴う遺構を明らかにすることができなかった。西側は確認調査トレンチT-18によって切られている。検出面は床面直上で、北側は床が抜けて掘方埋土が露出した状況であった。

床面は黒色シルトを用い、２cm程度の厚みで硬く敲き締める。床面の残存する範囲では柱穴SP3355の位置に柱痕を１か所検出した。柱穴の間口より一回り小さく、柱の際まで床が張られていたことを示す。

炉は住居の中央やや奥側に設けられている。掘方は伴わず、炉床も失われていたが長軸50cm、短軸45cmの楕円形に熱染みが残されていた。

壁溝は平面でも確認できず床が壁際まで張られているので、設けられていない。

貯蔵穴は掘方上で検出された南東隅にあるSK4202が該当する。直径35～60cmの楕円形状を呈し、深さは20cm程度であるが床面の高さを勘案すれば深さは65cm程度であったと考えられる。



第239図　柱穴SP3355遺物出土状況・遺物実測図

住居の掘方は底面を平らに整え、周囲に溝を巡らせる。溝は東・南側で途切れ、確認調査トレンチで切られる範囲でも溝の末端が丸く終息するので、SP1613と1611付近でも途切れるものとみられる。最も規模の大きい北側の溝は幅0.7～1.1m、深さ7cm内外となる。南東側の溝は幅0.4～0.58m、深さ6～15cmとより幅が狭い。掘方内部には黒色シルトが充填されるが、上下2回に分けて入れられ均されたものと断面から観察できる。

柱穴の掘方は4か所で検出された。いずれにも柱の挿げ替え、抜き取りに伴う切り合いは認められない。深さは掘方底面から50～60cmと揃っているが、SP3073・3355は柱を建てる際に深さを調整したためであろうか、2段にわたって掘り込まれている。柱穴の間隔は長手方向に芯々で3.15～3.3m、短手方向で同様に2.5～2.6mと近似した間隔に整えられる。

【遺物】遺物は掘方埋土と柱穴SP3355の底部付近から出土している。

229は掘方埋土から出土した台付甕の頸部～口縁部片である。風化が激しく調整痕の判然としない部分もあるが、全体的にハケとナデで整えられている。口唇部にはハケ工具の刺突が連続して施される。

230はSP3355に埋め込まれていた。壺の底部片で、内面はハケ調整を施す。底面付近にあったので、抜き取りの際に入れるのは困難であろう。柱を埋め込む際に意図的に底面に敷いたのであろうか。

SH5391（第240図）

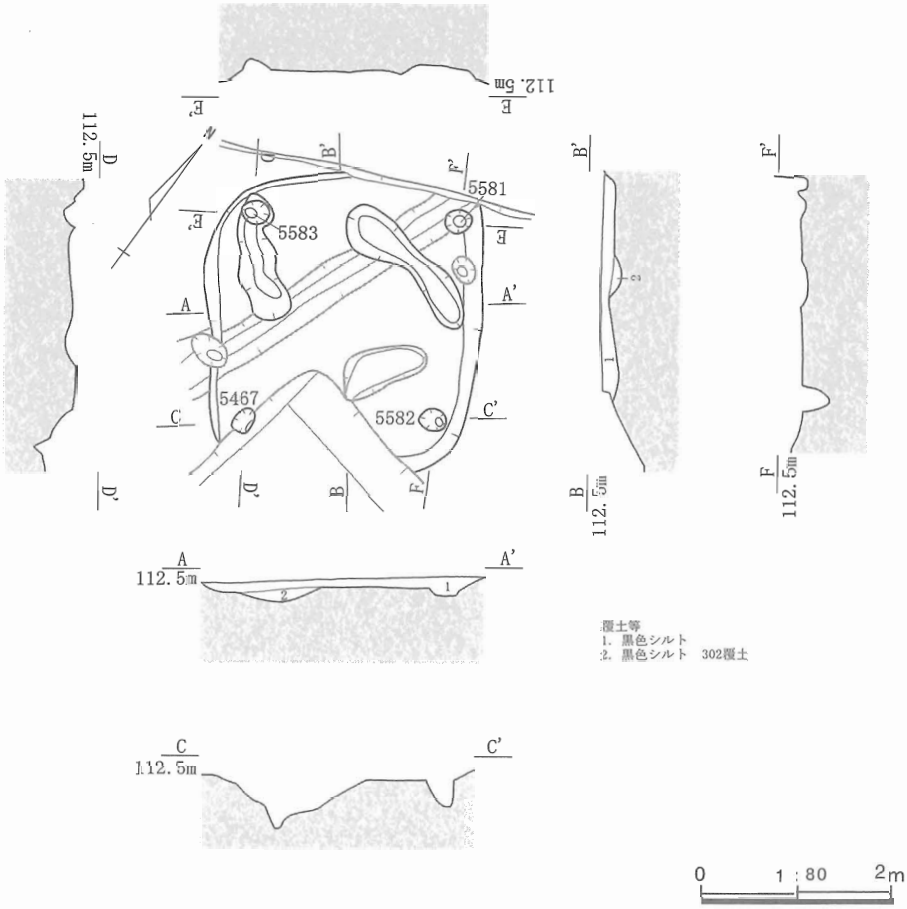
【遺構】I27～J27グリッドで検出された。南東側を天地返しによる撹乱に切られ、半ばで楕円形の住居を囲む溝SD302に重複する。検出面は掘方埋土となったので、掘方底面で住居に伴う遺構を特定した。

住居の掘方は底面を平らに整えて、小規模な溝を備える。溝は西側と東側の2か所にあり、住居の掘方方向に厳密に沿うものではない。西側の溝は柱穴SP5583から南東に延びるもので、幅25～40cm、深さ3cm程度となる。東側の溝は幅22～48cm、深さ2cm前後で東西方向に掘られる。

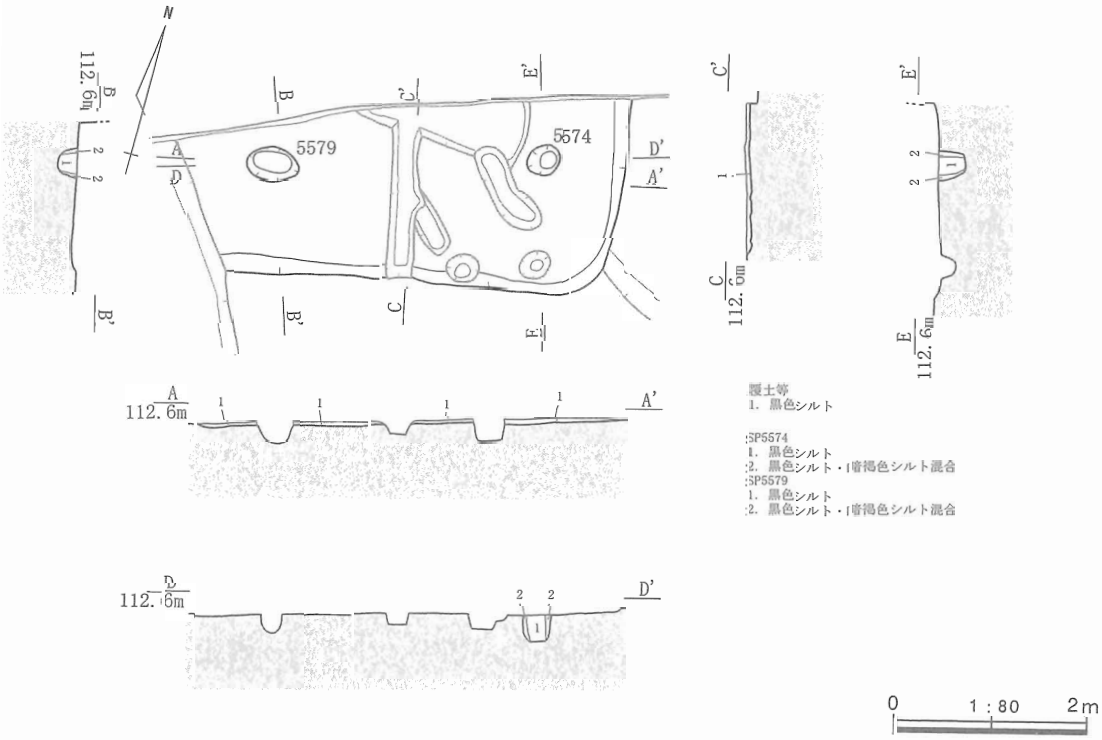
柱穴の掘方は4か所で検出された。直径22～28cmの円形あるいは楕円形を呈し、いずれも住居の隅付近にある。柱穴の間隔は芯々で2～2.2mと、比較的揃っている。

壁溝は住居の立ち上がりと柱穴間に十分な間隔がなく、貯蔵穴は該当する土坑が見当たらないので、いずれも設けられていないものと考えられる。

炉も検出されなかった。熱染みも確認できず、存在するか否かを断定することができない。



第240図　SH5391平面・断面図（掘方）



第241図　SH5392平面・断面図（掘方）

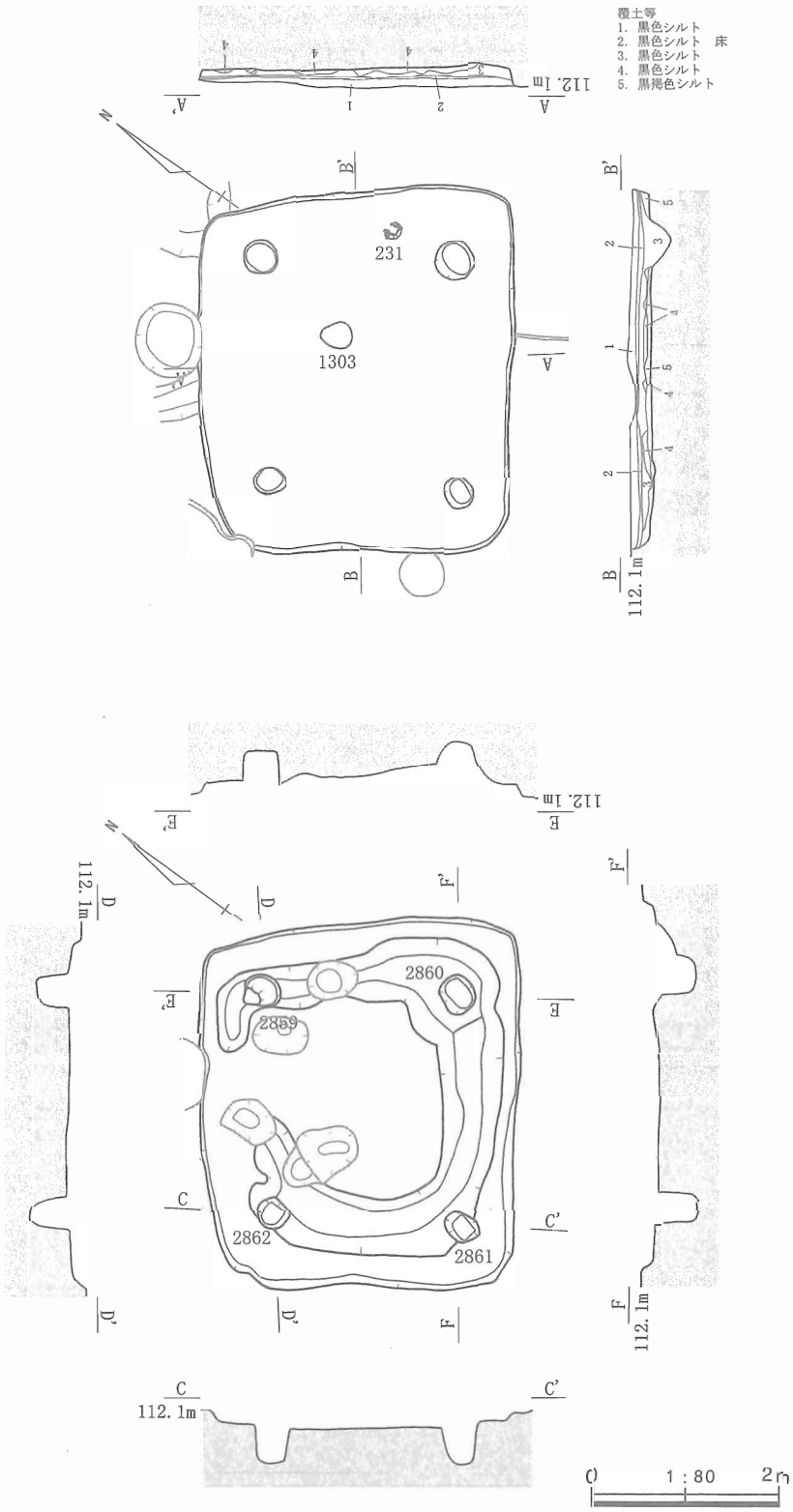
SH5392（第241図）

【遺構】Ⅰ27グリッドで検出された。西側でSH5391に切られ、北側は調査区外となる。中央付近には耕作に伴う撹乱が及んでいた。検出面は掘方埋土となったので、掘方底面で住居に伴う遺構を特定した。

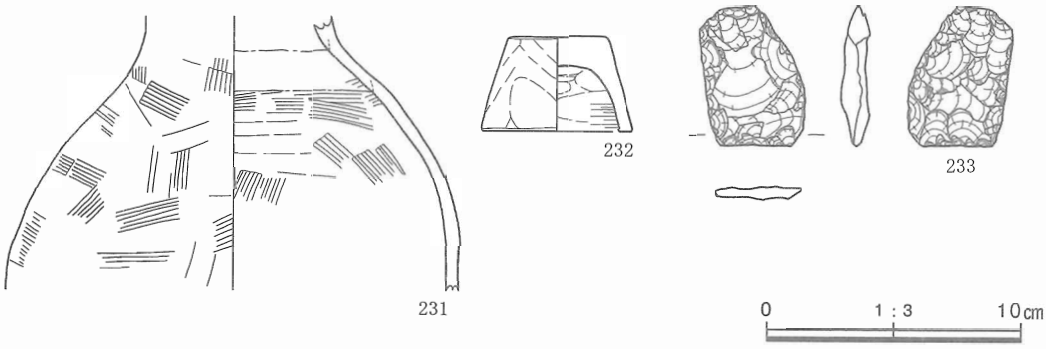
住居の掘方は検出面から6㎝程度で底面に至るので、かなりの部分が失われているものと考えられる。底面は平らに整えられ、調査を行った範囲には溝は検出されなかった。掘方内にはⅠ層に起因する黒色シルトが充填されている。炉は調査区外になると考えられ、検出されなかった。

壁溝も検出できなかった。貯蔵穴は南面に設けられているのであれば該当する土坑がない。方形の住居には変則的な配置がされるものがあり、調査区外となる住居の隅に存在する可能性も否定できない。

柱穴は南側の2か所を特定した。直径30～56㎝の円形あるいは楕円形を呈し、いずれにも柱の挿げ替えや抜き取りに伴う切り合いは認められず、断面では各々に幅18～20㎝の柱痕を見出すことができた。柱穴の深さは検出面から20～30㎝で、間隔は芯々で2.9mとなる。



第242図　SH1303平面・断面図（床面・掘方）



第243図　SH1303遺物実測図

SH1303（第242～243図）

【遺構】N30～O30グリッドで検出された。隅丸方形の住居SH2913と楕円形の住居SH1313を巡る溝SD3745を切る関係上からも住居の相対的な形状の変化をとらえることができる一例である。検出面は床上覆土中であり、黒色シルトが10cm内外の厚みで残っていた。

床面は黒色シルトを用い２～８cmの厚みで硬く敲き締められる。中央部分がやや薄いものの、ほぼ住居の全域にわたって張られている。床面上では柱痕が直径30～40cmの円形のプランとして検出されたが、この間口は住居の掘方上で検出された規模と同等なので、柱穴の掘方に相当する範囲には床が設けられていなかった可能性が窺える。また、床面上では西側縁近くに土器が１個体、遺棄されていた。

炉は住居の中央やや奥側の床面上に、直径30cmの卵形を呈する熱染みにとして把握された。掘方は掘られていないので、施設を整えず直接床面上を炉として利用していたものと考えられる。

壁溝は床面が住居の立ち上がり際まで張られるので、設けられていなかったものと考えられる。

貯蔵穴は住居の掘方上でも該当する土坑がなく、備えられていなかったと考えられる。

住居の掘方は底面を平らに整え、周囲に溝を設ける。溝は幅0.47～1.12m、深さ２～17cm北側で切れるＣ字形を呈する。住居の立ち上がりより14～46cm内側に掘られるので、この間がテラス状に残っている。掘方内にはやや明るさの異なる黒色シルトが２回に分けて充填されている。

柱穴の掘方は４か所で検出された。直径32～42cmの円形を呈し、いずれにも柱の挿げ替えや抜き取りに伴う切り合いは認められない。柱穴の間隔は長手方向に2.45～2.5m、短手方向に２～2.15mとなる。

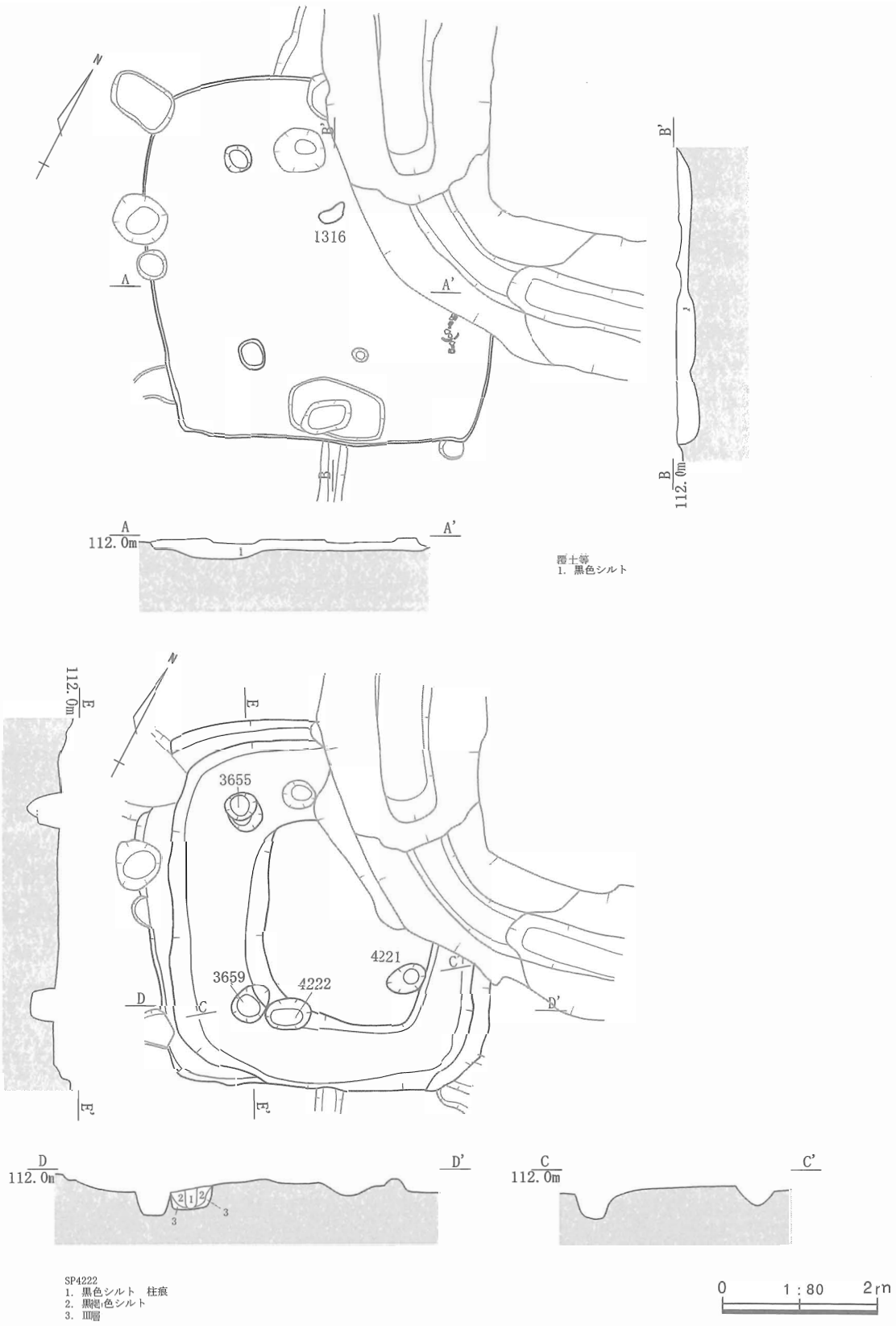
さて、炉が住居のやや奥側に設けられ、その手前側が出入り口、右手隅に貯蔵穴が設けられるという法則性からすれば、この住居の入口は南西向きであったと推測される。楕円形～隅丸方形の住居で出入り口が南西側に想定される例は調査区南西隅に見出されたSH4522であるが、SH1313のように著しく傾く例は認められない。方形の住居に至ってこのような例が出現することは、住居の建て方に従来とは異なった意図が芽生えたことを示しているのだろう。貯蔵穴の位置が北側隅になるSH15285の事例などとともに、意図の変化を精査する必要があるだろう。

【遺物】遺物は土器と石器が覆土～掘方埋土間から出土している。

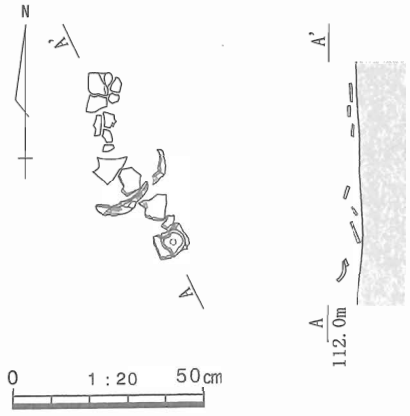
231は壺で、頸部以上と体部過半を割り取った破片が床面上に据えられるように出土している。失われた破片は住居内に残されていないので、割り取られた一部は別に捨てられているのだろう。風化が進んで一部の調整が不明瞭となるが、内外面ともにハケ調整で平滑に整えられている。

232は台状の小型製品で、覆土から出土している。内外面ともに指頭による成形を施した後、内面端部を強く横ナデする。

233は珪質岩製のスクレイパーである。表面の中央部には素材の面を広く残すが、２側縁には細かな調整を施して直線状の刃部を整えている。縄文時代の混入品である。



第244図　SH1316平面・断面図（床面相当・掘方）



第245図　SH1316遺物出土状況

SH1316（第244～245図）

【遺構】N30～N31グリッドで検出された。北東隅を方形周溝墓SZ3086によって大きく切られ、上面には耕作による撹乱を被る。住居半ばではSH1303と同様に楕円形の住居SH1313を巡る溝SD3745を切る。明確な床面は把握できなかったが、炉と遺物が集中して出土する個所が見出されたので、床面に近似するものと考え一旦記録を採ることとした。

また、東側で重複する方形の住居SH3086は規模も似通うので1316の直前の時期に存在したものと考えられるが、西側を1316に切られる上、中央部をSZ2575に大きく壊されて全容は判然としない。SH1316の掘方上で住居に伴う遺構を見出そうと考えたが、より東側の柱穴SP4222に柱穴である可能性を見出すほかは特定できなかった。掘方自体がさらに浅かった可能性を感じさせる。

前述のように床面は明確に把握していないが、集中して出土した遺物の底面が標高111.93～111.97mとほぼ一定していることから、およそこの位置に床面が設けられていたと考えられる。柱穴はこの時点で２か所が把握された。住居の掘方上で見出した柱穴と間口が近似することは、掘方に埋土を充填した後に掘削していることを示している。

炉は住居の中央やや奥側に、長さ37cm、幅15cmの楕円形状の熱染みとして把握された。炉床は検出段階ですでに失われていた。検出位置は遺物が出土した高さに近似する標高111.93～111.95mとなる。熱染みの規模・形状から炉床はここからある程度離れた位置に、若干床面から盛り上がって設けられていたものと推測される。

壁溝は平面・断面でも把握できなかったので、設けられていない可能性がある。

貯蔵穴は該当する土坑がなく、備えられていなかったものと考えられる。

住居の掘方は底面を平らに整え、周囲に溝を設ける。溝の内法は直線状に掘られ、掘り残された底部中央は平面形状が隅丸方形状となり台状に突出する。溝は幅0.6～1.3m、深さ５～13cmで全周するものと考えられ、細くなる東側がより浅い。南側では住居の立ち上がりに接するが、東～北側では10～35cm離れて、その間をテラス状に掘り残している。内部には黒色シルトが16～20cmの厚みで充填されている。

柱穴の掘方は３か所が把握できた。北東側の１か所はSZ2575によって破壊されているものと考えられる。E-E′断面の柱穴は住居の掘方から均等な位置に設けられるが、SP4221のみがやや内側に入って若干いびつな配置となる。直径34～53cmの円形～楕円形を呈し、掘方底面から35cm程の深さがあるが、西側のSP4221だけが他よりも10cm程度浅くなる。SP3655にのみ切り合いがみられる。より浅く多くの部分で重複するので、柱の抜き取り穴と考えられる。柱穴の間隔は長手方向に芯々で2.6m、短手方向で同様に2.2mとなる。

SH3086の柱穴の可能性が考慮されるSP4222の断面では、幅15cm程の柱痕が検出されている。SH1316は3086にわずかに遅れて建てられたと切り合いと形状から推測されるが、当然その時点には3086の柱は存在し得ない。抉て抜かれたか、床面上で切り取られたのであろうか、柱穴の掘方内を撹拌しない方法で撤去されているものとみられる。

【遺物】遺物は住居の東側縁近くの床面上とみられる位置から土器が出土している。台付甕１個体分の破片であるが、接合しない小破片のため図示できなかった。住居の放棄に伴って遺棄されたものと考えられるが、破片の散布状況から１個体がこの場で壊されたような状況にはなく、別の場所で壊された破片のうち一部を持ち込んでいるものと考えられる。

第１表　竪穴式住居一覧表（１）

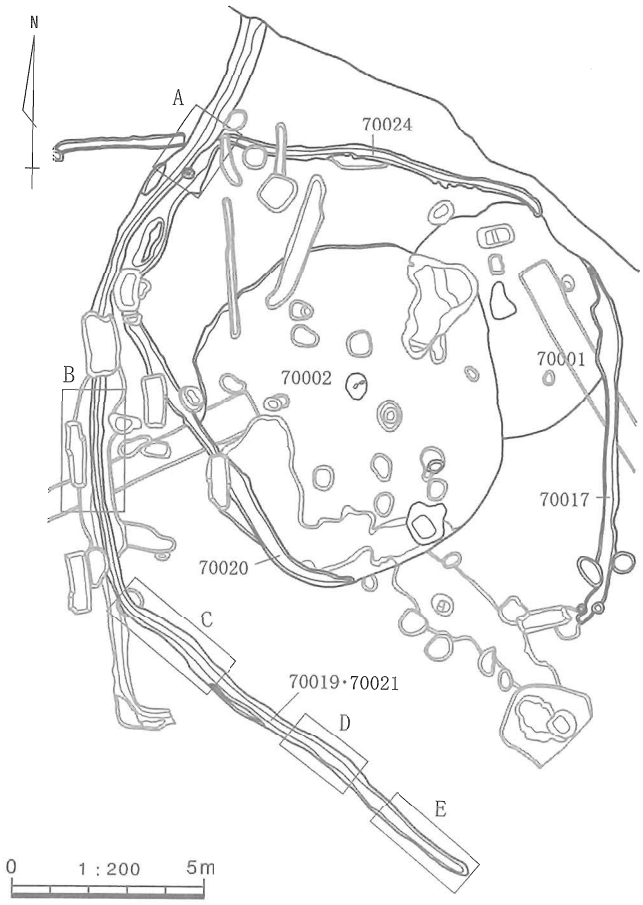
住居番号	グリッド	平面形態	規模(m)				状況			
			長軸	短軸	床面深さ	掘方深さ	床面数	貯蔵穴	拡張	掘方
SH　70002	D３～E４	楕円形	8.80	7.92	0～0.10	0～0.20	－	あり	なし	馬蹄形
SH　70001	D３～D４	楕円形	6.08	－	0～0.08	0.04～0.16	1	－	なし	方形
SH　70009	F５～F６	楕円形	5.70	4.78	－	0.02～0.24	－	なし	なし	馬蹄形
SH　14215	H８～H９	楕円形	－	－	－	0～0.24	－	なし	？	？
SH　14158	G８～H８	楕円形	6.45	－	0～0.04	0～0.18	－	あり	なし	U字形
SH　15968	H８～I９	楕円形	9.20	7.64	－	0～0.44	－	あり	なし	馬蹄形
SH　13791	E９～E10	楕円形	－	－	－	0～0.06	－	なし	なし	平坦
SH　14550	H10～I10	楕円形	7.88	－	0.02～0.08	0～0.20	1	なし	あり	平坦
SH　13847	F９～G10	楕円形	5.60	4.40	0～0.04	0.04～0.44	1	なし	あり	円形
SH　16008	H９～I10	楕円形	－	4.00	0.06～0.12	0.04～0.20	1	あり	あり	？
SH　14347	H10～I11	楕円形	9.48	6.88	0～0.12	0.04～0.24	1	－	なし	馬蹄形
SH　14346	I11	楕円形	－	－	－	0～0.16	－	なし	なし	？
SH　14322	I９～J10	楕円形	9.16	6.36	－	0.14～0.42	－	あり	なし	馬蹄形
SH　14242	I11～J11	楕円形	－	4.48	0～0.04	0～0.64	1	なし	なし	平坦
SH　14356	H11	楕円形	－	3.60	0～0.02	0～0.08	1	なし	なし	平坦
SH　14703	H12	楕円形	－	5.72	0.04～0.12	0.08～0.28	1	あり	あり	平坦
SH　18057	J10	楕円形	－	3.48	0.08～0.14	0.14～0.22	1	なし	なし	平坦
SH　18109	J10	楕円形	－	2.48	0.04～0.14	－	1	なし	なし	？
SH　15325	L16～L17	楕円形	－	－	0～0.10	0～0.52	1	－	なし	円形か馬蹄形
SH　14250	J10～J11	楕円形	7.44	5.40	0～0.08	0.08～0.24	－	あり	なし	馬蹄形？
SH　51495	I17～J18	楕円形	7.44	6.28	0.08～0.16	0～0.28	1	あり	なし	馬蹄形？
SH　52984	L17～L18	楕円形	4.88	－	0.08～0.12	0.08～0.32	2	あり	あり	C字形
SH　50800	M17～M18	楕円形	－	6.40	0.02～0.24	0.04～0.28	3	あり	あり	円形
SH　50801	M18～M19	楕円形	5.60	5.00	0.04～0.14	0～0.24	2	あり	あり	円形
SH　50610	L19～M19	楕円形	4.80	3.68	0.08～0.20	0.06～0.34	1	あり	なし	馬蹄形
SH　51147	J21～K21	楕円形	－	－	0～0.04	0～0.16	1	－	なし	馬蹄形？
SH　50001	M25～L25	楕円形	5.84	4.72	0.02～0.10	0～0.42	1	あり	なし	馬蹄形？
SH　50919	J25～K26	楕円形	6.40	－	－	0～0.28	1	あり	なし	円形？
SH　5390	K28～K29	楕円形	－	－	－	0～0.24	－	－	なし	馬蹄形
SH　1688	L28～M29	楕円形	－	4.36	0.00	－	－	－	なし	平坦
SH　3272	L28～L29	楕円形	－	－	0.00	0～0.08	－	－	あり	平坦
SH　5194	I26～J26	楕円形	5.56	4.76	0.04～0.06	0.08～0.28	1	あり	あり	平坦
SH　2157	N27～O28	楕円形	6.32	5.20	0.12～0.16	0.04～0.36	1	－	なし	円形
SH　3085	M28	楕円形	－	－	0.12～0.22	0.20～0.28	1	あり	なし	？
SH　5119	K29～K30	楕円形	8.24	－	0～0.04	0～0.44	1	あり	あり	馬蹄形？
SH　1313	M30～N30	楕円形	7.80	－	0～0.02	0.24～0.48	1	あり	なし	馬蹄形
SH　5425	L29	楕円形	－	5.48	0.14～0.16	0.08～0.28	1	あり	あり	馬蹄形
SH　1678	M29	楕円形	－	5.48	0.04～0.20	0.02～0.44	1	なし	あり	？
SH　1822	P28～P29	楕円形	4.96	－	0～0.04	0～0.20	1	あり	あり	L字形
SH　1335	M30	楕円形	－	4.24	0.08～0.20	0.04～0.36	1	なし	あり	円形
SH　2931	N31～O31	楕円形	－	－	－	0～0.12	－	－	なし	？
SH　2218	L27～M28	楕円形	4.92	3.90	0～0.06	0.04～0.16	1	なし	あり	？
SH　328	M32～N32	楕円形	6.72	5.32	0～0.12	0.04～0.24	1	あり	なし	平坦
SH　2949	L30～M30	楕円形	－	－	0～0.16	0～0.60	1	－	なし	J字形
SH　1440	R29～R30	楕円形	5.96	－	0.08～0.16	0.04～0.32	1	－	なし	平坦
SH　1426	R28～R29	楕円形	－	6.16	0～0.04	0～0.32	1	なし	なし	平坦
SH　5678	K30	楕円形	－	－	－	0～0.04	－	なし	なし	馬蹄形
SH　1203	Q30～R31	楕円形	6.08	5.00	0～0.04	0.04～0.24	1	あり	あり	馬蹄形
SH　1200	Q30～R31	楕円形	－	6.04	0.02～0.04	0.04～0.20	1	あり	なし	馬蹄形
SH　1234	Q30～Q31	楕円形	－	－	－	0～0.08	－	あり	なし	？
SH　4522	V33～V34	楕円形	－	－	0.04～0.12	0～0.24	1	－	なし	馬蹄形？
SH　54436	J26～K26	楕円形・円形	－	4.52	0.10～0.16	－	1	あり	なし	円形
SH　4486	R27～R28	楕円形	－	－	0～0.04	0～0.12	1	あり	なし	馬蹄形
SH　70007	F4～F5	楕円形・隅丸方形	8.08	6.20	0.08～0.10	0.06～0.32	－	あり	あり	馬蹄形
SH　70008	D５	楕円形・隅丸方形	－	－	－	0～0.08	－	あり	なし	平坦
SH　14319	I９～I10	楕円形・隅丸方形	3.96	2.92	－	0～0.12	－	なし	なし	L字形かC字形

第１表　竪穴式住居一覧表（２）

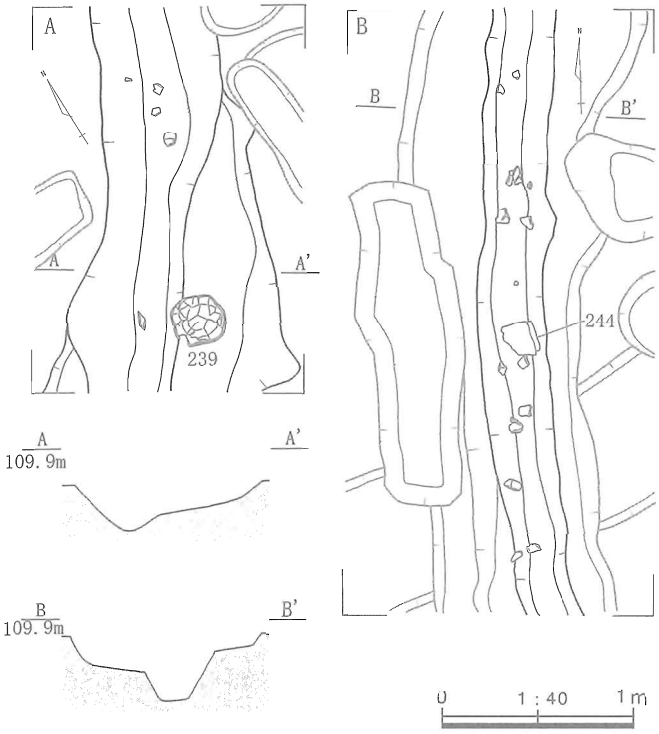
住居番号	グリッド	平面形態	規模(m)				状況			
			長軸	短軸	床面深さ	掘方深さ	床面数	貯蔵穴	拡張	掘方
SH 14131	F８	楕円形・隅丸方形	－	－	0～0.12	0～0.16	－	なし	なし	U字形
SH 14083	F８～F９	楕円形・隅丸方形	5.36	5.00	0～0.12	0～0.24	－	－	なし	円形
SH 15315	I10	楕円形・隅丸方形	－	2.68	－	－	－	なし	なし	平坦
SH 13043	L16	楕円形・隅丸方形	－	－	－	0～0.12	－	なし	なし	平坦
SH 15780 (18129)	M17	楕円形・隅丸方形	－	－	0.00	0～0.08	－	－	なし	？
SH 51496	I18	楕円形・隅丸方形	5.52	5.16	0～0.02	0～0.16	1	あり	なし	？
SH 18127	M16～M17	楕円形・隅丸方形	－	－	0.08～0.28	0～0.24	1	－	なし	円形か馬蹄形
SH 53085	H18～I18	楕円形・隅丸方形	3.12	－	－	0.08～0.24	－	－	あり	馬蹄形
SH 50896	H19～I20	楕円形・隅丸方形	3.84	3.24	0～0.04	0.04～0.12	1	なし	なし	円形
SH 54374	J19	楕円形・隅丸方形	－	－	－	0～0.12	－	－	なし	？
SH 50795	K18	楕円形・隅丸方形	－	－	－	0～0.12	－	－	なし	馬蹄形？
SH 53254	K18	楕円形・隅丸方形	－	2.12	－	0.06～0.24	1	なし	なし	円形
SH 52243	K20～L21	楕円形・隅丸方形	－	－	－	0～0.12	－	なし	なし	？
SH 51173	K20～K21	楕円形・隅丸方形	4.40	－	0～0.08	0～0.12	1	あり	なし	？
SH 50837	M20	楕円形・隅丸方形	－	－	0.00	0～0.24	1	－	なし	馬蹄形
SH 54721	M20	楕円形・隅丸方形	－	－	0～0.04	0.04～0.28	1	あり	なし	？
SH 51790	M21	楕円形・隅丸方形	－	－	0～0.06	0.04～0.14	1	－	なし	平坦
SH 50507	O23～O24	楕円形・隅丸方形	5.72	5.20	0～0.08	－	－	－	なし	平坦
SH 52100	I24～I25	楕円形・隅丸方形	－	－	0～0.04	0～0.28	1	なし	なし	円形
SH 52101	I24～J25	楕円形・隅丸方形	－	－	－	0～0.16	－	－	なし	？
SH 53142	N24～O24	楕円形・隅丸方形	－	－	0.06	0～0.20	1	－	なし	平坦
SH 52090	M25	楕円形・隅丸方形	－	4.48	－	0～0.18	－	なし	なし	平坦
SH 5447	I25～I26	楕円形・隅丸方形	－	－	－	－	－	なし	なし	平坦
SH 2934	P30	楕円形・隅丸方形	4.64	3.80	0.04～0.20	0.04～0.22	－	－	なし	平坦
SH 2933	P30	楕円形・隅丸方形	－	－	－	－	－	－	－	－
SH 5195	I26～J27	楕円形・隅丸方形	5.02	4.54	0.04～0.12	0.08～0.28	1	なし	なし	U字形・半月形
SH 5398	I26～J27	楕円形・隅丸方形	－	3.32	－	0～0.16	1	－	なし	円形
SH 1514	O29	楕円形・隅丸方形	－	－	－	0～0.40	1	なし	なし	平坦
SH 739	P30～P31	楕円形・隅丸方形	－	－	－	0～0.14	－	あり	なし	平坦
SH 14236	I10～J11	隅丸方形	4.12	3.88	0.08～0.10	0.04～0.36	1	あり	なし	円形
SH 15589	H10	隅丸方形	－	－	－	0～0.08	－	なし	なし	平坦
SH 13641	E8～F9	隅丸方形	3.16	3.08	0.04～0.08	0～0.20	1	なし	なし	円形
SH 14306	G11～H11	隅丸方形	3.32	3.24	0.08～0.12	0.12～0.24	1	なし	なし	平坦
SH 14390	J11	隅丸方形	3.16	2.76	－	0.02～0.20	1	なし	なし	U字形
SH 14239	I11～J11	隅丸方形	－	－	0.00	0.08～0.24	1	あり	なし	平坦

第１表　竪穴式住居一覧表（３）

住居番号	グリッド	平面形態	規模(m)				状況			
			長軸	短軸	床面深さ	掘方深さ	床面数	貯蔵穴	拡張	掘方
SH　14176	J11～K11	隅丸方形	4.68	－	0.04～0.08	0～0.20	－	－	なし	平坦
SH　14272	J11～K11	隅丸方形	－	4.60	0.36～0.40	0.14～0.28	1	－	なし	？
SH　53038	I17～J17	隅丸方形	4.60	4.00	0.08～0.16	0.08～0.38	1	なし	なし	円形
SH　13019	M16	隅丸方形	4.76	4.48	－	0～0.08	－	あり	なし	平坦
SH　18050	J10～K11	隅丸方形	－	2.52	－	0.32	－	－	なし	平坦
SH　50799	L18～M18	隅丸方形	4.84	4.60	0.20～0.24	0.12～0.48	1	あり	なし	円形
SH　53409	L18	隅丸方形	6.40	5.40	0～0.16	0～0.28	1	－	なし	馬蹄形
SH　52293	H20	隅丸方形	4.56	3.80	0～0.04	0～0.16	－	なし	なし	馬蹄形
SH　50898	I19～J20	隅丸方形	－	－	0.08～0.12	0～0.12	1	－	なし	馬蹄形？
SH　53256	K19～K20	隅丸方形? 楕円形？	－	3.52	0～0.06	0.08～0.18	1	なし	なし	円形か馬蹄形
SH　50802	L20	隅丸方形	4.10	3.96	0.20～0.26	0.12～0.38	1	あり	なし	馬蹄形
SH　53243	M19～M20	隅丸方形	－	－	0～0.04	0～0.20	1	なし	なし	C字形
SH　52069	N20～O21	隅丸方形	－	3.76	0.08～0.16	0.12～0.20	1	－	なし	C字形
SH　51224	L21～L22	隅丸方形	－	5.16	－	0～0.44	－	あり	なし	馬蹄形？
SH　51731	M21～M22	隅丸方形	－	－	－	0～0.14	－	－	なし	？
SH　54624	M22	隅丸方形	－	4.60	0.06～0.18	0～0.36	1	なし	なし	円形か馬蹄形
SH　51749	M22	隅丸方形	－	4.60	0.4～0.26	0～0.48	2	なし	なし	平坦
SH　1307	N30～O30	隅丸方形	3.96	3.80	0.12～0.26	0.28～0.48	1	なし	なし	U字形
SH　51780	L24～M24	隅丸方形	2.88	2.44	0～0.04	－	1	なし	なし	平坦
SH　1685	L29～M29	隅丸方形	3.76	3.56	0～0.04	－	1	なし	なし	平坦
SH　2913	N30～O31	隅丸方形	－	4.48	－	0～0.20	1	なし	なし	平坦
SH　2800	O30～O31	隅丸方形	6.28	5.84	0.06～0.10	0.10～0.44	2	なし	なし	馬蹄形
SH　2492	Q30～Q31	隅丸方形	6.12	5.52	－	0～0.16	－	なし	なし	C字形
SH　492	R31～S31	隅丸方形	－	6.04	－	0～0.24	－	あり	なし	C字形
SH　2707	M31	隅丸方形	4.88	－	－	0～0.28	－	なし	なし	平坦
SH　2895	M31	隅丸方形	－	－	－	0.20～0.40	1	－	なし	円形
SH　1059	S30～T30	隅丸方形	5.44	－	－	0～0.16	－	－	なし	C字形
SH　70005	E１～F２	方形	－	7.48	－	0.04～0.18	－	－	なし	平坦
SH　70006	F２	方形	－	－	－	－	－	あり	－	－
SH　70003	D２	方形	4.88	－	－	0～0.04	－	－	なし	？
SH　70004	E２～E３	方形	6.16	5.36	－	－	1	あり？	あり	円形
SH　70010	F６～G６	方形	5.04	5.16	0.08～0.14	0.12～0.36	1	あり	なし	平坦
SH　14209	H８～I8	方形	－	8.24	0.16～0.36	0.28～0.66	1	－	なし	円形か馬蹄形
SH　14389	H７～I8	方形	－	5.32	0.12～0.24	0.04～0.28	1	－	なし	C字形
SH　15285	G８～G９	方形	6.80	7.00	0.24～0.30	0.20～0.64	－	あり	なし	C字形
SH　14549	G８～H９	方形	7.88	7.26	0.10～0.12	0.04～0.36	－	なし	なし	円形
SH　15855	G10～G11	方形	－	－	－	0～0.08	－	－	なし	馬蹄形？
SH　15286	H９	方形	5.56	4.96	0.20～0.34	0.04～0.54	2	あり	あり	馬蹄形
SH　15615	H９～H10	方形	4.56	－	－	0～0.24	－	－	なし	馬蹄形？
SH　13021	L16～M17	方形	7.00	6.84	－	0.06～0.48	1	あり	なし	F字形
SH　14235	I11	方形	4.36	4.64	0.02～0.08	0.08～0.28	1	なし	なし	U字形
SH　5162	K28	方形	3.36	3.56	－	0.08～0.16	－	なし	なし	平坦
SH　3271	L29～M29	方形	4.34	3.96	0.04～0.10	0.12～0.32	1	あり	あり	平坦
SH　2508	N31～N32	方形	－	4.76	－	0.04～0.24	－	－	あり	平坦
SH　3032	N29	方形	4.84	4.16	0.00	0.04～0.28	1	あり	なし	？
SH　5391	I27～J27	方形	－	2.82	－	0.06～0.28	－	－	なし	？
SH　5392	I27	方形	－	－	0.04～0.06	0.04～0.22	－	なし	なし	平坦
SH　1303	N30～O30	方形	3.92	3.44	0.04～0.08	0.12～0.36	1	なし	なし	C字形
SH　1316	N30～N31	方形	4.80	－	0～0.08	0.08～0.20	－	なし	なし	円形か馬蹄形



第246図　Ａ区溝分布状況



第247図　SD70019遺物出土状況１

２　住居を巡る溝と出土遺物

住居を巡る溝はＡ区東側にあたるＣ３～Ｅ４グリッドと、Ｄ区北側にあたるＩ27～M33グリッドで検出されている。いずれも台地の縁辺に沿う位置にあり、台地の内側には設けられていないという立地的な特徴がある。Ａ区では東側の崖面方向に溝が延び、行き先が定かでないが、Ｄ区の事例からすれば基幹となる溝（SD302）が弧状に巡り、そこから分岐した溝が住居を巡る構造であったと理解できる。

溝で囲まれるのは小～中型の楕円形を呈する住居（SH5678・2218）、大型の楕円形を呈する住居（SH70002・5119・1313）があり、切り合いからすると前者が古く、後者がより新しい。隅丸方形や方形の住居が溝に囲まれる例は見当たらないので、この時期に特徴的なあり方であったと窺える。

（１）Ａ区の住居を巡る溝と出土遺物

【遺構】溝はSD70019・70021、70020、70024・70017の３条が検出されている。これらの溝はC4グリッドでＸ字状に交差し、SD70019・70021、70024・70017の２条が南側にあるSH70002を取り囲むように南側にかけて膨らんでいく。SD70020は70019・70021から分岐してSH70002の西縁に取り付く。溝は南側で連結せず、特に西側のSD70019・70021はＥ４グリッド付近から南東方向に直線状に延びる。高坏236の形状から、溝と囲まれる住居は古墳時代前期前葉のものと考えられる。

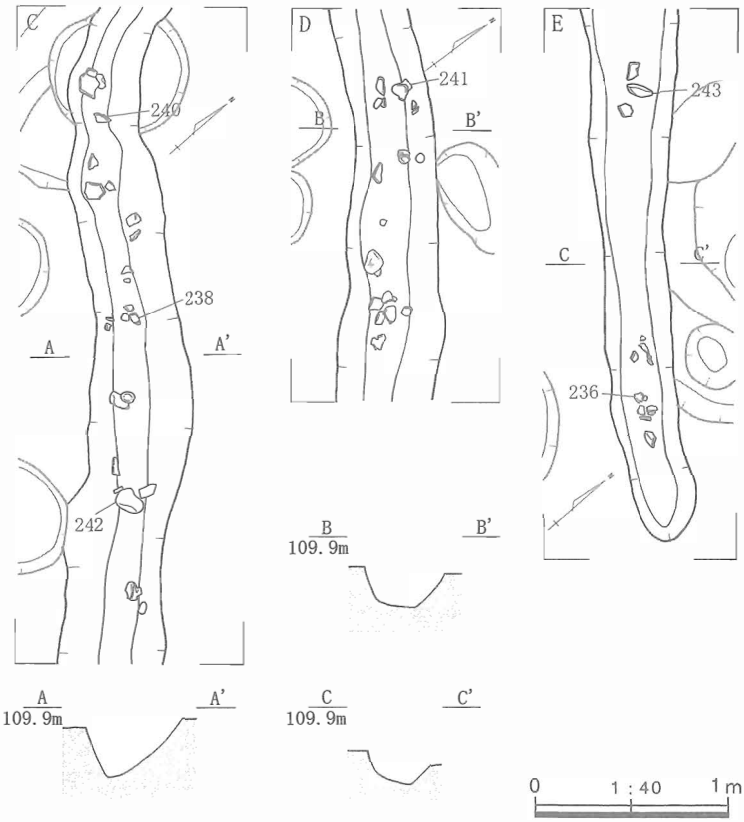
SD70019　北側がもっとも広く65cm、深さは最深で23cmとなるが、調査区際から４ｍほどで幅40cm前後と狭くなり、深さも10cm程度と浅くなる。直線状となる部分は幅50cm台、深さ23cm前後と若干規模を広げる。覆土は１層に起因する黒色～黒褐色シルトである。遺物は土器・石製品等が出土している。

SD70021　SD70019・70021と70024・70017が交差する付近から分岐する。4.5m程度はSD70019・70021と平行しているが、その後120°程南東に折れてSH70002の西縁に取り付く。平行する部分は最大幅が70cm前後に及ぶが、

屈曲部付近で25～40cm程度に狭くなる。深さは12～16cmで、住居に取り付く部分は２cm程度とごく浅くなる。覆土はⅠ層に起因する黒色～黒褐色シルトで、遺物は分岐点の南西側で壺の底部が据え置かれるようなかたちで出土している。

SD70024・70017　一部で60cm程度に幅を広げるが、多くの部分は幅20～40cm程度となる。深さは６～13cmで北側がより浅い。北側ではほぼ東西方向に直線状に延び、D3グリッドで85°ほど南に折れる。覆土はⅠ層に起因する黒色～黒褐色シルトで、遺物は土器が出土している。

【遺物】遺物は、240以外は破片であり、溝内に意図的に捨てられた痕跡に乏しい。



第248図　SD70020遺物出土状況２

234・235はSD70017から出土した。234は折り返し口縁を備える壺の頸部～口縁部片で、口唇部外面に複数本で対をなす棒状浮文を貼り付けている。表面は風化が進んで調整痕は把握できない。235は壺の底部片で、底部に木葉痕を残している。234同様に風化が進んでいる。

236～238・240～244はSD70019・70020から出土している。236は高坏である。坏部は腰が急激に折れて立ち上がる。腰部以下は円盤状に作られ体部・脚部と接合される。脚部には３方向に透かしを空ける。ハケ調整の後に脚部には縦方向のミガキを加える。坏部にもミガキが施されていたと考えられるが、風化が進んで明らかでない。237は小型の台付甕の台部、238は壺の底部である。一部にナデ調整が観察されるが風化が進んでいる。240は大型の壺の底部で外面はハケ調整、内面は横方向の板ナデが観察できる。241は台付甕の台部で細かなハケ調整で整えられる。端部の開きは小さく抑えられる。

242・243は砂岩製の敲石である。先端部あるいは側面を使用している。

244は安山岩製の台石で、割れた上、節理に沿って剥がれる。表面の一部分が使用により磨滅する。

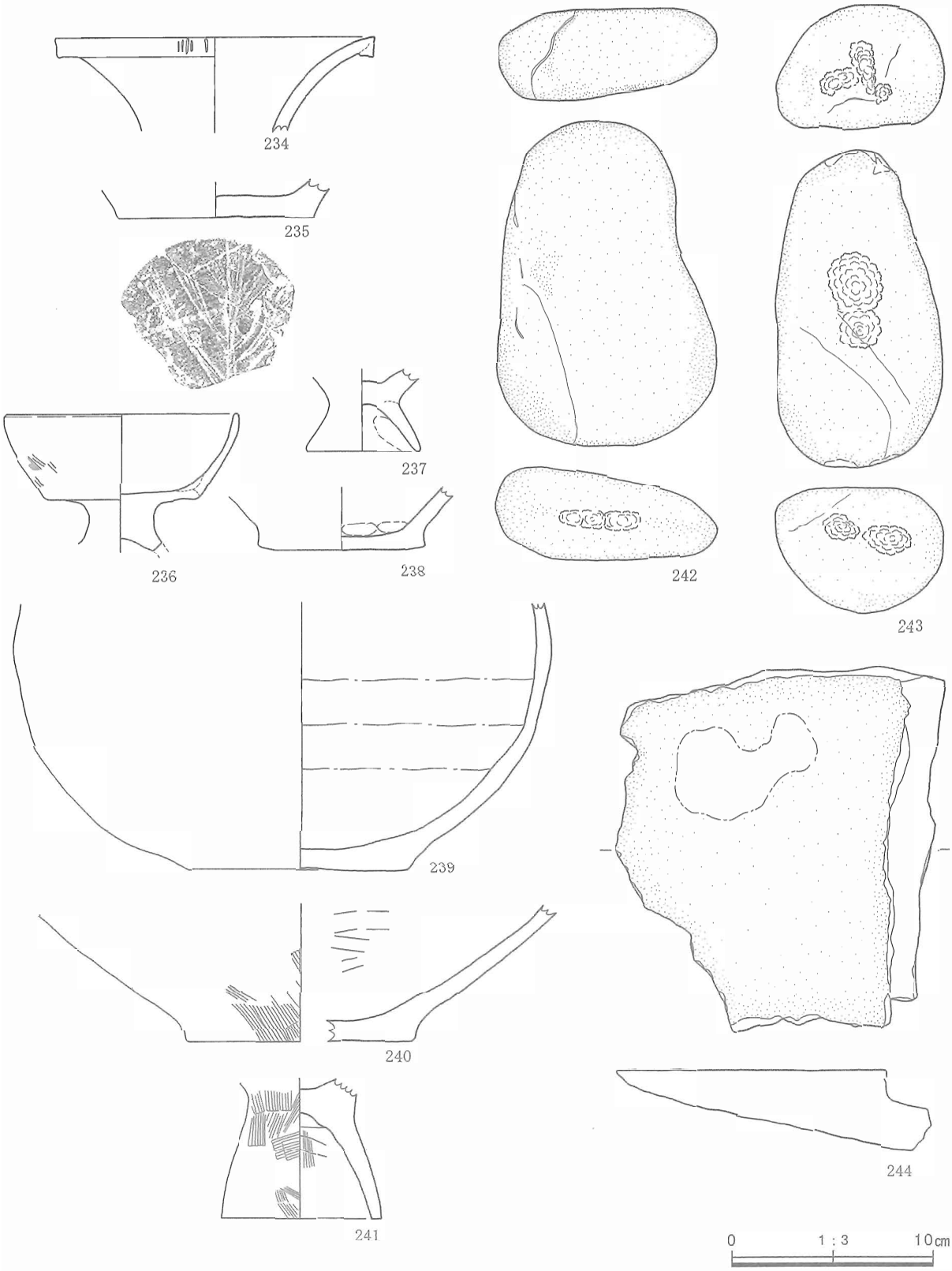
239はSD70020から出土した壺の底部～体部である。溝内に据え置かれるように出土しており、溝の分岐点近くにあることからも何らかの意味を持って置かれたものと考えたい。表面は風化が進んで調整痕を観察できないが、およそ2.2cmおきに複数段の輪積み痕が残されている。

（２）D区の住居を巡る溝と出土遺物

【遺構】溝は基幹となるSD302・2896・5902、SH2218を巡るSD2048・2204、SH5119を巡るSD5389、SH5678を巡るSD5005・5633、SH1313を巡るSD2937・3745・3586が検出されている。

基幹となるSD302・2896・5902は北側の調査区外に延びており、このまま円形に巡るのであれば直径100m以上に及ぶ可能性がある。基本的にはこの溝から各々の住居を囲む溝が分岐している。SD302・2896・5902の底面は台地の縁に向かって下がり、これらに接続する溝も接続部に向かって底面が低くなるように掘られているので、排水を考慮した構造になっていたといえる。

それぞれの溝には切り合いによって前後関係が窺える。西側ではSD302は少なくとも２時期にわたっ



第249図　SD70017・70019・70020出土遺物

て掘り直されており、その一つはSD2937に直接つながっている。SD2896は302の前身となる溝と思われるが、前後では存在が明らかでない。SD302と5389の接続部は、西側では重複するように見える。撹乱で明らかでないが、東側に直接つながる様子もないのであるいはSH70002の如く5119に直接接続しているのだろうか。このように基幹となる溝はSD2896とSD302の２時期の都合３時期に変遷するものと考えられる。北側に離れたSD5005・5633は5389に切られる。南東側に離れたSD2048・2204は302と接続する溝が検出できなかったので関係が不明瞭であるが、より離れていることからすればSD5005・5633と同時期になるのだろうか。SD5389の東側で分岐する溝がわずかに残っているが、これが南側に曲がって接続する可能性も否定できない。溝の覆土はいずれも黒色シルトである。

このように溝で囲まれた住居は、見掛け上は基幹となる溝に対し互い違いに近接して住居が配置されているように見えるが、実際はある程度距離を置いて同規模の住居が点在する構造であったとみられる。そして、最終的にはSH1313を巡る溝に縮小されたと考えられる。

SD302・2896・5902　Ｉ27グリッドからM33グリッドにかけて検出された北向きに緩やかに屈曲する基幹の溝である。検出された範囲全域にわたって同じ調子で緩やかにカーブしている。西寄りでは幅70cm前後、深さ30～50cm台となるが、Ｉ27グリッドのSD5902では幅35cm前後、深さ10cmほどと東側に行くに従ってやや規模を減じる。底面の標高値はSD5902で112.36m、SD302のＬ30グリッド東側で111.63m、SD302の西端で110.88mと西に行くに従って低くなるように掘られている。遺物は西側に多く、Ｌ30グリッド以西に集中して出土する個所がある。

SD2048・2204　Ｌ27～M28グリッドで検出したSH2218を巡る溝で、南西側にSD2048、東側に2204として検出したが従来は接続していたものと考えたい。これらの溝は他と比べて幅が広く掘られている。SD2048では幅0.4～1.15m、深さ９～30cmと北端で規模が小さくなる。SD2204では幅0.75～1.15m、深さ13～26cmで南側がやや深くなる。遺物はそれぞれから土器が出土している。

SD5389　Ｋ29～Ｌ30グリッドで検出されたSH5119を囲む溝である。住居の掘方から2.4～2.8m離れた位置に長軸15.3m、短軸12.9mの楕円形状に巡っている。幅0.45～1.15m、深さ16～41cmとなり、西側で幅が広がる部分があるが、全体的には40～60cm台とほぼ同じ幅で掘られている。底面の標高値は北側で111.92m、南側で111.67mと南側が低くなるように掘られている。遺物は土器が出土している。

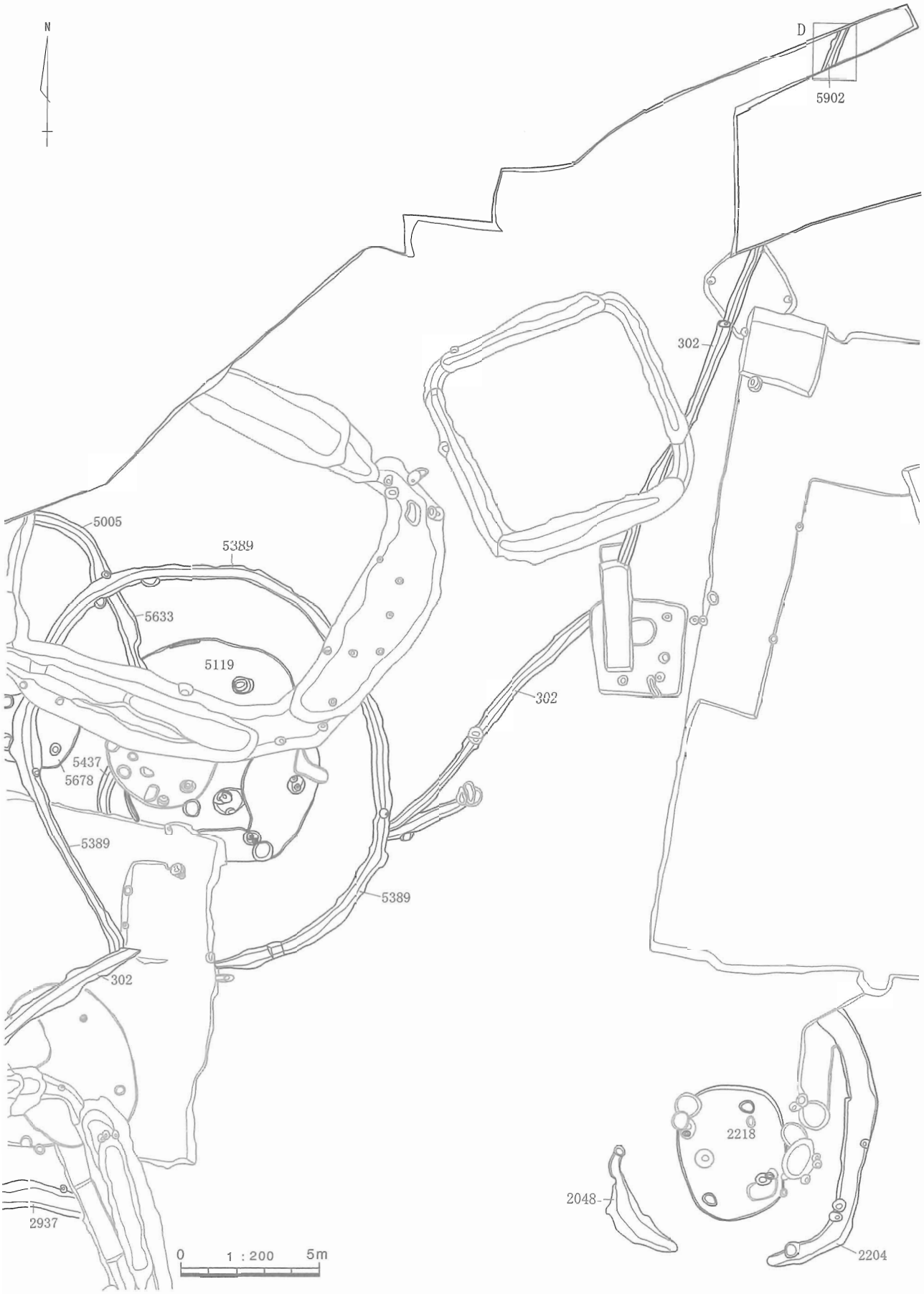
SD5005・5633　Ｊ・Ｋ30グリッドで検出されたSH5678を囲む溝である。住居の掘方から1.15～1.55m離れた位置に掘られている。溝が巡る規模は撹乱によって明らかでないが長軸12m、短軸８m程度であったろう。幅40～70cm、深さ19～23cmで、底面の標高値は北側が112.5m、南側が111.66mで南側へ低くなるように掘られている。遺物はSD5633から土器が出土しているが、いずれも細片となる。

SD2937・3745・3586　M30～N31グリッドで検出されたSH1313を巡る溝である。他の遺構等により撹乱を受ける個所が多く途切れ途切れとなるが、本来は住居から3.2～3.7mの間隔を置いた外周を長軸17m、短軸14mほどの範囲で楕円形に巡っていたものと考えられる。北側ではSD302に直結している。幅30～95cm、深さ7～45cmと、SD302へ取り付く北側部分の規模が大きくなる。底面の標高値は北側が111.43m、西側で111.86～111.9m、南側で111.92mと北側へ低くなるように掘られている。遺物は土器が出土しているが、いずれも細片となる。

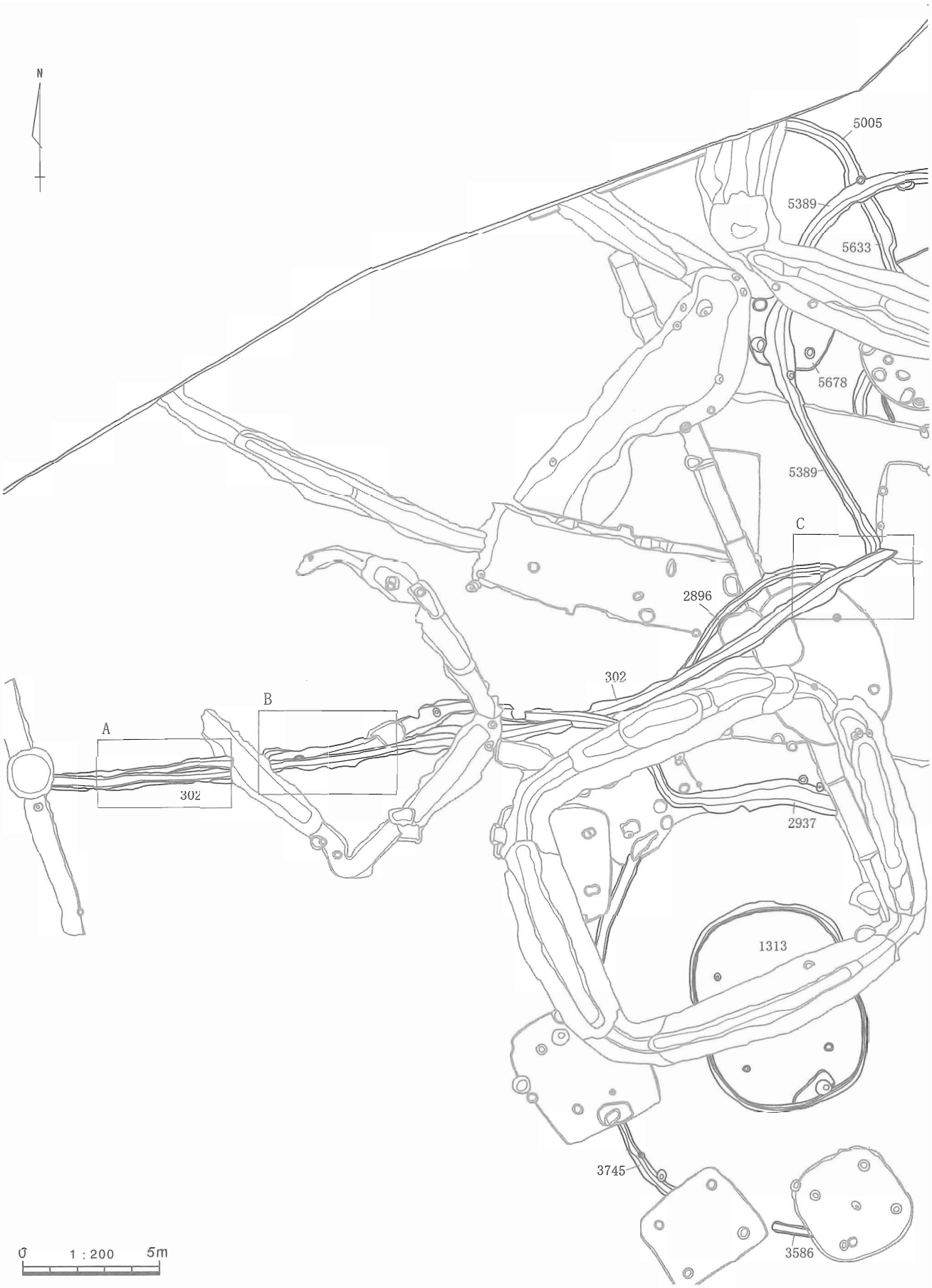
【遺物】遺物はSD5005以外の溝から出土している。土器が多く、石製品等も若干量含まれる。出土量が多いのはSD302であるが、土器で据え置かれるように出土した例や完形近くまで復原できた個体は見当たらない。一方で、流れ込んだとは思えない大破片も含まれている。他で壊された破片が持ち寄られて捨てられているようにも見える。他の溝は細片が多く、接合・復原できた個体はごく少量となる。

245～271・279～281はSD302から出土しており、弥生時代後期～古墳時代前期前半を主体とする。

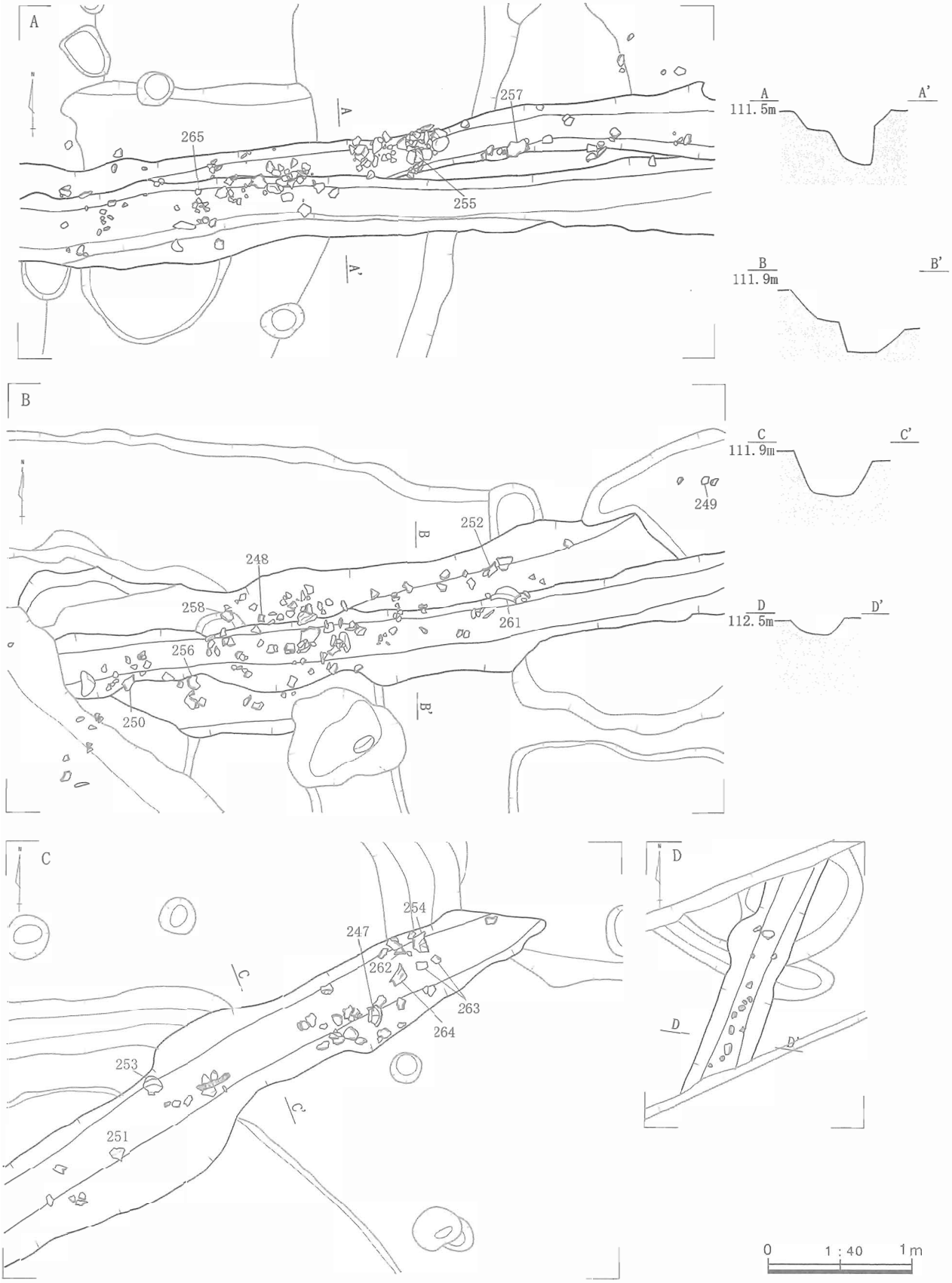
245～260・279～281は壺である。口縁部は折り返し口縁をもつもの（246・247・249・279・281）と



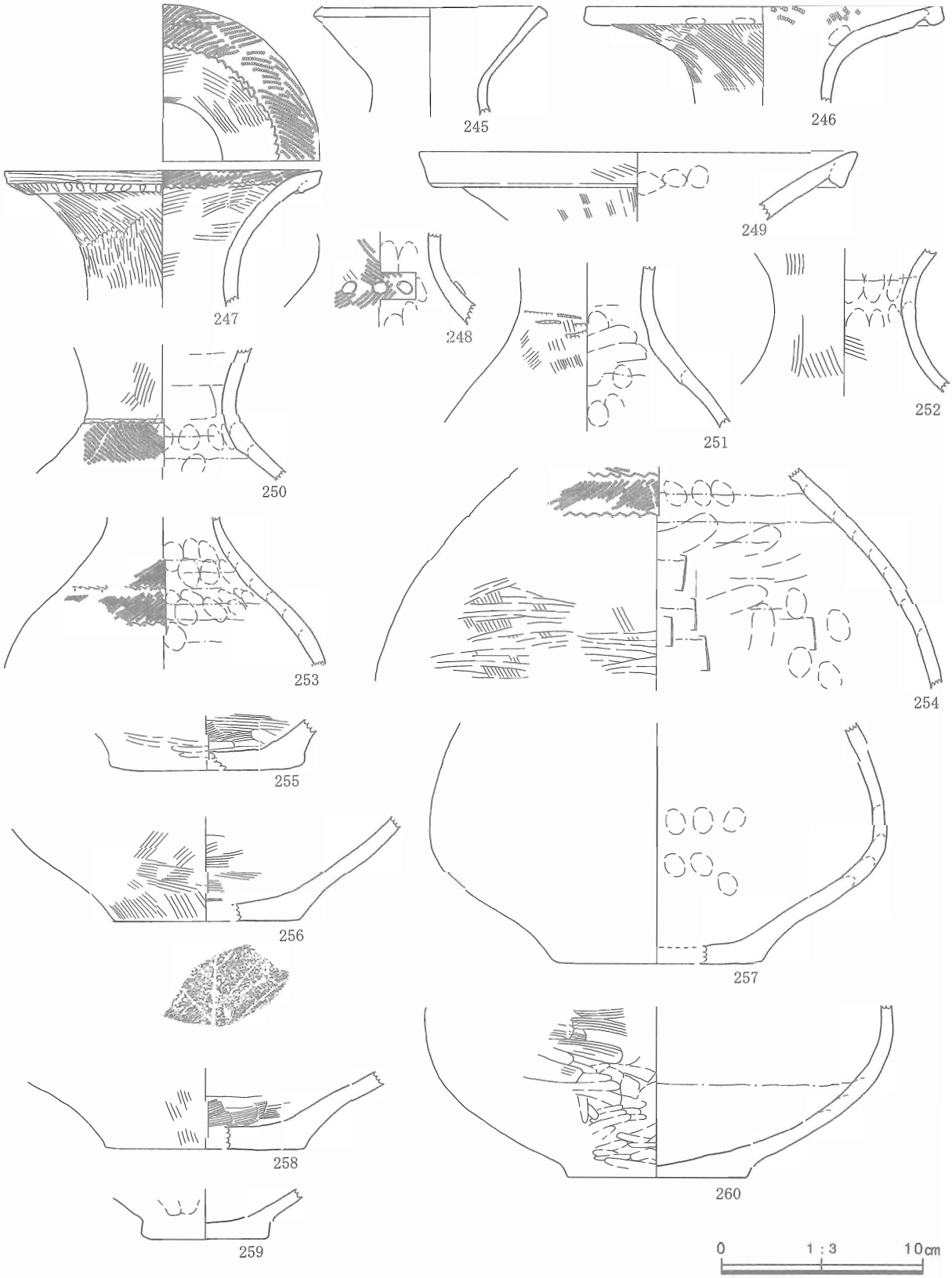
第250図　Ｄ区溝分布状況１



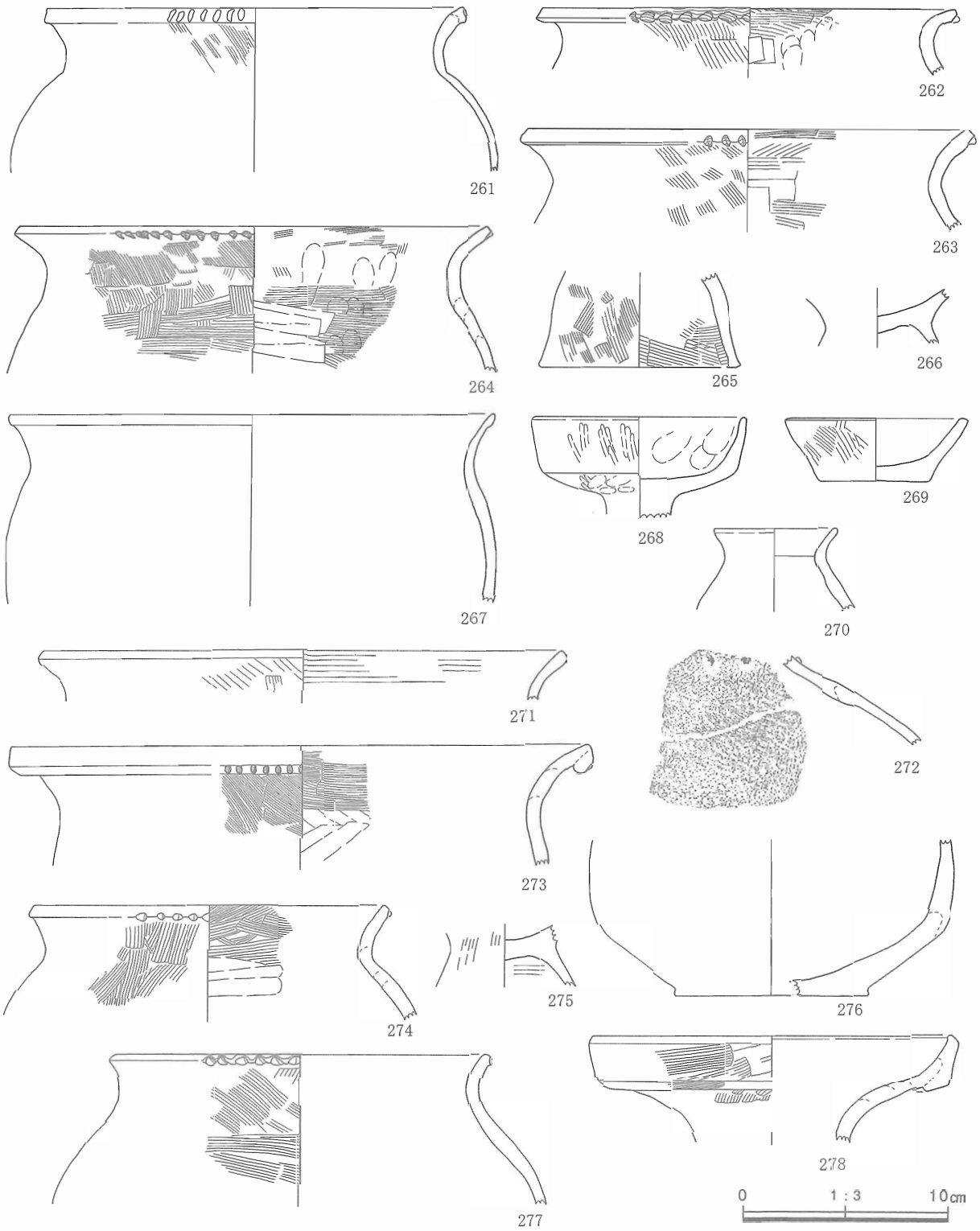
第251図　D区溝分布状況 2



第252図　SD302遺物出土状況



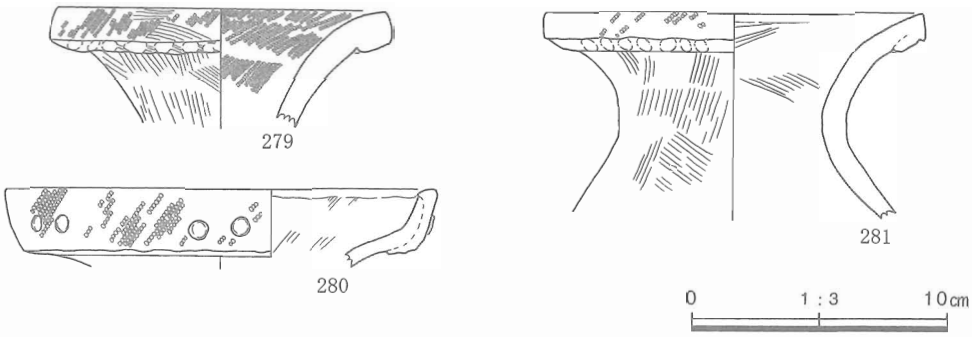
第253図　SD302等出土遺物 1



第254図　SD302等出土遺物２

素縁のもの（245）、複合口縁のもの（280）がある。

246は比較的頸部が細く急激に広く口縁部を広げる。279は頸部が細いが口縁部の広がりは246程著しくない。247・281はより頸部が太く、口縁部にかけて緩やかな広がりをみせる。それぞれの口縁部の折り返しは小さく断面は矩形をなす。249は直線状な広がりをみせるやや大形の壺で、口縁部の折り返しは大きく断面は三角形状になり、外側に広い面をもつ。いずれもハケ調整で器面を整え、249は風化の



第255図　SD302等出土遺物 3

ため把握できないが、246・247は口縁部内面に縄文を施している。279はさらに口縁外面にも縄文を施す。また、247は口縁部外面折り返しの下位に棒状工具による列点を刻んでいる。281は口縁部内側に文様をもたず頸部にも文様帯がなさそうであるが、口縁部外面には縄文を施している。

素縁となる245は風化のため調整痕が把握できない。比較的薄手で口唇部は断面を矩形に整える。

複合口縁の280は口縁部の立ち上がりが短く、外面に縄文を施した後２個１対の円形浮文を貼る。

頸部は細く絞りこまれるもの（248・253）と比較的太いもの（250・251・252）がある。253以外の外面はハケ調整で器面を整えている。文様帯は248・250・253に設けられ、縄文を施す。250は上端を細い沈線で区画し、248は３個で一対の円形浮文を貼り付ける。一方文様帯をもたない251・252はいずれも頸部がより太いものとなる。それぞれの内面には成形時の指頭痕が頻繁に残っている。

体部～底部では、体部過半が強く張るもの（257）と比較的丸く立ち上がるもの（260）があり、前者のほうが古い様相を留めている。外面の調整はハケ調整の後に横方向のミガキが加えられる個体が多く（254・255・260）、風化が進んで観察できなかったものもミガキが加えられていた可能性を感じる。内面は底部付近に横方向のハケ調整を施し（255・256・258）、体部にはナデの後に板ナデで平滑に整える（254）。底部はいずれも平底で、外縁部をドーナツ状に盛り上げるものは実測個体に含まれない。

261～267・271は台付甕である。口縁端部を面取りし、縁辺にハケ工具による刺突を連続して施すより古い様相のもの（261～264）が多いが、素縁となるもの（267・271）も含まれる。267は風化が進んで調整痕が定かでないが、他の個体は外面にハケ調整を施している。内面はハケ調整の後に横方向の板ナデを施す例（262～264）がある。265・266は台部である。265は端部がやや潰れ、内外面ともにハケ調整で整えられる。266は風化が進んで調整痕は定かでない。

268は高坏で、外面はミガキが密に施されている。内面はナデ調整で仕上げられる。脚部は棒状になるようだが失われて定かでない。269はハケ調整で仕上げられる坏状、270は小型の壺となる。

272～276はSD5389から出土している。272は壺の頸部片で、外面に縄文を施した後、円形浮文を貼り付けている。276は壺の体部～底部である。腰部の張りが強く、体部は垂直に立ちあがっている。

273は広口で無台の鉢である。口縁部は折り返されて端部にハケ工具による連続した刺突を施す。外面は斜め方向のハケ調整で整えられ、内面は体部～頸部に横方向のヘラナデの後に口縁部まで横方向のハケ調整を加える。274・275は台付甕である。肩部～口縁部の外面にはハケ調整を施し、口唇部にハケ工具による刺突を連続して加える。内面は横ナデで整えた上、口縁部に横方向のハケ調整を施す。

277・278はSD2048から出土している。277は台付甕の体部～口縁部片で、外面はハケ調整を施し、口唇部にハケ工具の連続する刺突を施す。刺突は強く狭い間隔で行われ、口縁端部は波打つように凹んでいる。278は壺の口縁部で、複合口縁をもつ。口縁部の立ち上がりは低いが垂直に近い外面を備える。外面は頸部を縦方向の、口縁部外面を横方向のハケ調整によって整える。

第２表　出土土器一覧表（１）

挿図番号	器種	遺構	グリッド	層位	時期	口径(cm)	底径(cm)	頸部径(cm)	最大径(cm)	器高(cm)	色調 内面	色調 外面	残存率
1	壺	SK70280	D3・4	覆土	古墳前期		5.1		(10.4)		5YR6/6橙色		20%
2	台付甕	SK70280	D3・4	覆土	古墳前期	(10.4)		(9.7)	11.7		7.5YR7/4にぶい橙色		80%
5	鉢	SH70009	F6	掘方埋土	弥生後期		8.4				10YR6/4にぶい黄橙色		10%
6	S字甕	SH14550	H9	覆土	古墳前期	(10.0)		(9.5)			10YR6/4にぶい黄橙色		5%
7	S字甕	SH14550	H10	掘方埋土	古墳前期	(10.0)		(9.4)			10YR6/3にぶい黄橙色		5%
10	壺	SH13847	F10	床上覆土	弥生後期	(17.8)					7.5YR6/4にぶい橙色		1%
11	壺	SH14242	J11	床上覆土	弥生後期		5.6				10YR6/3にぶい黄橙色		5%
12	壺	SH14703	I12	床直上	弥生後期	34.0					7.5YR6/5橙色	7.5YR7/6橙色	10%
13	壺	SK15209	H12	覆土	弥生後期		6.8	4.3	14.8		7.5YR6/6橙色～10YR6/2灰黄褐色		85%
14	台付甕	SH51495	I～J17	床上覆土	弥生後期	(15.4)		(14.7)			7.5YR6/3にぶい褐色		20%
16	壺	SK53886	M18	覆土	弥生後期		(7.4)	(6.4)	(17.2)		10YR6/4にぶい黄橙色	10YR7/6明黄褐色	90%
17	壺	SH50800	M18～19	床上覆土	弥生後期		9.0				10YR7/4にぶい黄橙色		5%
18	壺	SH50800	M18	床上覆土	弥生後期		7.0				2.5Y5/2暗灰黄色	5YR6/4にぶい橙色	5%
19	壺	SH50800	M18	床上覆土	弥生後期	(20.2)					5YR6/6橙色	7.5YR6/4にぶい橙色	5%
22	台付甕	SH50801	M19	床直上	弥生後期	(18.9)		(16.4)			7.5YR5/2灰褐色	7.5YR7/2明褐灰色	10%
23	台付甕	SK54033	L・M19	覆土	弥生後期	18.6		17.5	(22.8)		10YR6/4にぶい黄橙色		70%
24	台付甕	SH50610	L・M19	床直上	弥生後期	(19.0)		(17.5)	(28.0)		7.5YR6/1褐灰色～7/1明褐灰色	5YR4/1褐灰色～8/3淡橙色	25%
25	台付甕	SH50610	L・M19	床直上	弥生後期	19.6		16.2			10YR7/4にぶい黄橙色		80%
26	壺	SH50610	L・M19	床直上	弥生後期	(18.6)					7.5YR6/3にぶい褐色		5%
28	台付甕	SH51147	J・K21	床直上	弥生後期	(26.0)		(22.8)			7.5YR6/4にぶい橙色		15%
29	壺	SK53363	K21	覆土	弥生後期	(15.0)					10YR7/4にぶい黄橙色		10%
32	壺	SK4117・4118	L28	覆土	弥生後期		8.2		(23.0)		7.5YR6/3にぶい褐色	7.5YR5/4にぶい褐色	70%
33	壺	SP4111	L29	覆土	弥生後期						7.5YR7/4にぶい橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	1%
34	壺	SH3272内小穴	L28	覆土	弥生後期						10YR7/4にぶい黄橙色	5YR7/8橙色	1%
35	壺	SH3272内小穴	L28	覆土	弥生後期	(21.0)					10YR6/4にぶい黄橙色		3%
36	台付甕	SH5194	I・J26	床直上	弥生後期	21.6		(19.0)			10YR7/3にぶい黄橙色		30%
37	台付甕	SH5194	I・J26	床直上	弥生後期	26.8		(23.3)	29.2		10YR7/1にぶい黄橙色	10YR3/1黒褐色～7/2にぶい黄橙色	85%
38	壺	SH2157	N27・O28	床上覆土	弥生後期						10YR4/1褐灰色	10YR7/4にぶい黄橙色	20%
39	壺	SH2157	N27・O28	床上覆土	弥生後期						2.5Y4/1黄灰色	10YR8/3浅黄橙色	1%
40	台付甕	SH2157	N27・O28	床上覆土	弥生後期～古墳前期		(8.4)				10YR5/4にぶい黄褐色		20%
41	高坏か器台	SH2157	N27・O28	床上覆土	弥生後期～古墳前期						7.5YR5/6明褐色		5%
42	壺	SH2157	N27・O28	床直上	弥生後期	(21.6)					7.5YR7/6橙色		20%
43	台付甕	SH2157	N27・O28	床直上	弥生後期		8.2				10YR5/3にぶい黄褐色		40%
44	壺	SH3085	M28	覆土	弥生後期		7.6				10YR7/4にぶい黄橙色		10%
45	台付甕	SK4337	M28	覆土	弥生後期	(22.0)		(19.1)	(26.2)		10YR5/2灰黄褐色	10YR7/4にぶい黄橙色～5/1褐灰色	35%
46	壺	SK5426	K29	覆土	弥生後期	(17.6)					7.5YR6/4にぶい橙色		2%
47	壺	SH5119	K29	掘方埋土	弥生後期	(15.8)					2.5Y7/2灰黄色		1%
48	壺	SH5119	K29	掘方埋土	弥生後期	(10.0)					10YR7/4にぶい黄橙色		2%
49	壺	SP5650	K29	覆土	弥生後期						7.5YR7/4にぶい橙色	7.5YR8/4浅黄橙色	1%
50	壺	SH5119	K29	掘方埋土	弥生後期	(15.6)					7.5YR7/4にぶい橙色		1%
51	台付甕	SH5119	K29	掘方埋土	弥生後期	(16.8)		(16.9)			10YR6/3にぶい黄橙色		5%
52	台付甕	SH5119	K29	掘方埋土	弥生後期	(26.0)		(23.9)			10YR6/3にぶい黄橙色		5%
53	鉢	SK5424	L29	覆土	弥生後期	(20.0)		(18.0)			5YR7/8橙色～2.5Y7/3浅黄色		15%
54	台付甕	SK5377	K29	覆土	弥生後期	(26.0)		(23.0)			10YR7/4にぶい黄橙色	2.5Y6/2灰黄褐色	5%
55	壺	SK5377	K29	覆土	弥生後期		11.4				10YR6/3にぶい黄橙色	7.5YRにぶい橙色	10%
56	台付甕	SK5377	K29	覆土	弥生後期						10YR7/4にぶい黄橙色		1%
57	壺	SH1313	M・N30	床上覆土	弥生後期						2.5Y6/3にぶい黄色	7.5YR7/6橙色	3%
58	台付甕	SH1313	M・N30	床上覆土	弥生後期		(9.0)				10YR6/3にぶい黄橙色		10%
59	台付甕	SH1313	M・N30	床直上	弥生後期		(10.8)				10YR7/3にぶい黄橙色～2.5YR6/3にぶい褐色		5%
60	台付甕	SH1313	M・N30	床上覆土	弥生後期	(15.8)		(15.2)	(17.0)		7.5YR7/4にぶい橙色		10%
61	台付甕	SH1313	M・N30	床直上	弥生後期		12.6				10YR7/4にぶい黄橙色		10%
62	壺	SH1313	M・N30	床直上	弥生後期	8.5	5.7	4.5	8.6	10.0	7.5YR7/6橙色		100%
63	壺	SH1313	M・N30	床直上	弥生後期	(10.8)	7.5	4.7	16.5	18.9	10YR7/3にぶい黄橙色		95%
65	台付甕	SK3081	N30	覆土	弥生後期	14.0		(12.8)	(17.5)		10YR6/3にぶい黄橙色	10YR3/1黒褐色	40%
66	鉢	SK3081	N30	覆土	弥生後期	(32.0)		(27.6)			10YR7/4にぶい黄橙色		10%
67	壺	SH5425	L29	床上覆土	弥生後期	(20.8)		(19.4)			10YR8/4浅黄橙色		5%
68	壺	SH5425	L29	床上覆土	弥生後期	(15.8)					5YR8/3淡橙色	7.5YR8/1灰白色	5%
69	壺	SH5425	L29	床直上	弥生後期	12.0		4.9			7.5YR7/4にぶい橙色		30%

出土土器一覧表（2）

挿図番号	器種	遺構	グリッド	層位	時期	口径(cm)	底径(cm)	頸部径(cm)	最大径(cm)	器高(cm)	色調 内面	色調 外面	残存率
70	壺	SH5425	L29	床直上	弥生後期		5.9	5.0	15.7		7.5YR7/4にぶい橙色		85%
71	壺	SK5661	L29	覆土	弥生後期		(6.0)				10YR5/1褐灰色	7.5YR8/4浅黄橙 10YR7/1灰白	10%
72	台付甕	SK5661	L29	覆土	弥生後期		8.6				10YR8/2灰白色	10YR7/3にぶい黄橙色	10%
73	壺	SK5661	L29	覆土	弥生後期	(7.0)		(6.7)	(7.6)		10YR8/1灰白色		10%
74	台付甕	SK5825	L29	覆土	弥生後期						10YR6/3にぶい黄橙色 ～5/2灰黄褐色	10YR7/4にぶい黄橙色	20%
75	台付甕	SH1678	M29	床直上	弥生後期		(6.4)				10YR6/3にぶい黄橙色		5%
76	台付甕	SP3200	M29	覆土	弥生後期？	(20.0)					10YR7/4にぶい黄橙色		2%
77	壺	SP3200	M29	覆土	弥生後期？		(10.2)				2.5Y7/3浅黄色	10YR7/4にぶい黄橙色	3%
78	台付甕	SH1335	M30	床上覆土	弥生後期？		(10.0)				10YR7/3にぶい黄橙色		5%
80	壺	SP3184	M27	覆土	弥生後期～ 古墳前期	(16.8)		(10.4)			7.5YR7/4にぶい橙色		20%
81	壺	SH2218	L27～ M28	床直上	弥生後期？						10YR6/2灰黄褐色	10YR5/2灰黄褐色	1%
82	台付甕	SK2302	N32	覆土	弥生後期	(16.2)		(15.0)			10YR7/4にぶい黄橙色		5%
83	台付甕	SK2302	N32	覆土	弥生後期	(24.2)		(22.2)			10YR7/4にぶい黄橙色		10%
84	台付甕	SK2302	N32	覆土	弥生後期						10YR7/4にぶい黄橙色		20%
85	台付甕	SP3339	R29	覆土	弥生後期	(22.1)		(18.5)	(25.3)		7.5YR5/3にぶい橙色	7.5YR7/3にぶい橙色 ～4/1褐灰色	70%
86	壺	SH1426	R29	床直上	弥生後期			6.5			10YR6/4にぶい黄橙色		20%
88	台付甕	SH1203	R30	床上覆土	弥生後期	(19.6)		(18.3)	(24.0)		7.5YR5/4にぶい褐色		10%
89	壺	SH1203	Q31	床上覆土	弥生後期	(24.0)					10YR6/6明黄褐色		10%
90	台付甕	SH1203	Q30	床直上	弥生後期	(22.0)		(20.1)	(22.8)		7.5YR5/4にぶい褐色		20%
91	台付甕	SH1203	Q30	床直上	弥生後期	(23.8)		(23.5)	(27.3)		10YR5/4にぶい黄褐色		30%
92	台付甕	SK3057	R30	覆土	弥生後期	(21.8)		(20.4)			7.5YR6/3にぶい褐色		10%
94	壺	SH51079	K26	床上覆土	古墳前期		4.2				10YR8/3浅黄橙色	10YR5/3にぶい黄褐色	15%
96	壺	SH70007	E～F5	掘方埋土	弥生後期～ 古墳前期		6.6		18.9		5YR7/4にぶい橙色		50%
97	台付甕	SP70131	F5	覆土	古墳前期	(13.6)		(11.8)	(18.0)		7.5YR6/4にぶい橙色		35%
98	高坏	SP70131	F5	覆土	古墳前期	22.8					7.5YR8/2灰白色		20%
99	壺	SH15315	I10	覆土	弥生後期						7.5YR8/2灰白色	7.5YR7/4にぶい橙色	1%
100	壺	SH15315	I10	覆土	弥生後期						7.5YR8/2灰白色	7.5YR7/4にぶい橙色	1%
103	壺	SH51496	I18	床直上	弥生後期～ 古墳前期	(19.6)					7.5YR7/6橙色		10%
104	壺	SH51496	I18	床直上	弥生後期～ 古墳前期		8.0				7.5YR7/4にぶい橙色		10%
105	台付甕	SH51496	I18	覆土	弥生後期～ 古墳前期	(21.2)		(19.6)			5Y7/2灰白色		20%
106	壺	SH53142	N・O24	覆土	弥生後期	12.8		5.8			7.5YR7/6橙色～8/2灰白色	7.5YR8/6浅黄橙色	25%
107	壺	SH2934	P30	覆土	弥生後期～ 古墳前期						7.5YR7/4にぶい橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	2%
108	台付甕	SH2934	P30	床直上	弥生後期	(26.6)		(25.0)	(29.6)		7.5YR6/3にぶい褐色		15%
109	台付甕	SH2934	P30	床直上	弥生後期	(20.2)		(19.4)	(25.2)		7.5YR5/2灰褐色		20%
110	台付甕	SH2934	P30	床直上	弥生後期						7.5YR5/2灰褐色	10YR7/3にぶい黄橙色	5%
111	鉢	SH2934	P30	床直上	弥生後期		9.5		(29.3)		7.5YR6/6橙色		40%
112	台付甕	SH2934	P30	床直上	弥生後期		(13.0)				7.5YR6/3にぶい褐色		10%
114	壺	SH2934	P30	床直上	弥生後期～ 古墳前期	(15.0)	(9.3)	6.7	(21.5)	26.8	10YR5/3にぶい黄褐色	5YR7/6橙色	60%
115	高坏	SH5398	I・J27	掘方埋土	古墳前期	10.5					10YR7/2にぶい黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	50%
116	壺	SK2411	P30・31	覆土	弥生後期	15.0					7.5YR6/4にぶい橙色		1%
117	台付甕	SH14250	J11	床直上	弥生後期～ 古墳前期	17.0		(15.4)	(17.6)		10YR6/3にぶい黄橙色		40%
118	壺	SH14272	J11	掘方埋土	弥生後期	18.0					7.5YR8/4浅黄橙色	7.5YR7/6橙色	1%
119	台付甕	SH13019	M16	覆土	古墳前期		(10.3)				10YR7/4にぶい黄橙色		10%
121	壺	SK53906	M18	覆土	古墳前期		4.8		(13.2)		7.5YR4/1褐灰色	7.5YR6/4にぶい橙色	35%
123	杯？	SH50799	M18	覆土	古墳前期	8.4	3.0			4.2	5YR6/3にぶい橙色		15%
124	壺	SH53409	I18	覆土	弥生後期	(13.0)					10YR7/3にぶい黄橙色		5%
125	壺	SH50802	L20	床直上	弥生後期		6.8		(16.0)		7.5YR6/6橙色		40%
126	壺	SH50802	L20	床直上	弥生後期			(5.0)	(15.4)		7.5YR6/4にぶい橙色		40%
127	台付甕	SH50802	L20	床直上	弥生後期		10.4				10YR6/3にぶい黄橙色		30%
128	鉢	SH1307	O30	床直上	弥生後期		8.0				10YR7/3にぶい黄橙色 ～4/1褐灰色	10YR6/2灰黄色～5/2灰黄色	25%
130	小型壺	SH2800	O30	掘方埋土	弥生後期		5.1				10YR8/3浅黄橙色	7.5YR7/4にぶい橙色・ 7.5YR8/2灰白色	5%
131	壺	SK432	S31	覆土	弥生後期			7.9	(20.0)		10YR7/4にぶい黄橙色	10YR7/4にぶい黄橙色	80%
132	高坏	SH70006	F2	覆土	古墳前期	(11.0)	8.8			8.3	5YR6/6橙色		67%
133	鉢	SH70006	F2	覆土	古墳前期	(12.5)	3.4	(9.9)			7.5YR7/4にぶい橙色		50%
134	壺	SH70006	F2	覆土	古墳前期			(6.8)	(13.0)		5YR7/6橙色		40%

出土土器一覧表（３）

挿図番号	器種	遺構	グリッド	層位	時期	口径(cm)	底径(cm)	頸部径(cm)	最大径(cm)	器高(cm)	色調 内面	色調 外面	残存率
135	台付甕	SK70218	F2	覆土	古墳前期	12.2		(10.0)	12.8		5YR7/6橙色		40%
136	台付甕	SK70218	F2	覆土	古墳前期		8.3	10.0	15.5		10YR8/3浅黄橙色		90%
137	台付甕	SK70218	F2	覆土	古墳前期	15.4	8.9	13.6	20.5	24.9	7.5YR7/6橙色		99%
138	台付甕	SK70218	F2	覆土	古墳前期	15.4		13.0	16.3		7.5YR7/6橙色		70%
139	台付甕	SH70005	E・F2	掘方埋土	古墳前期				(19.6)		10YR3/2黒褐色		20%
140	台付甕	SH70005	E・F2	掘方埋土	古墳前期		12.4				7.5YR8/4浅黄橙色		10%
141	台付甕	SH70005	E・F2	掘方埋土	古墳前期		4.6				7.5YR8/3浅黄橙色		15%
142	敲き甕	SH70005	E・F2	掘方埋土	古墳前期						7.5YR7/4にぶい橙色		1%
146	高坏	SH70004	E4	床上覆土	古墳前期	(15.6)	8.2			11.6	2.5YR6/8橙色		50%
147	台付甕	SH70004	E3	床上覆土	古墳前期	(14.0)		(13.2)			2.5YR7/4淡赤橙色		5%
148	台付甕	SH70004 SP70087	E3	床上覆土・覆土	古墳前期	(15.0)		(12.6)	(19.4)		2.5YR7/6橙色		30%
149	台付甕	SH70004	E3 E4	床上覆土	古墳前期	(21.2)		(18.6)	(23.0)		5YR4/1褐灰色		40%
150	台付甕	SH70004	E4	床上覆土	古墳前期	(16.0)		(12.8)	(20.0)		5YR7/6橙色		15%
151	台付甕	SH70004	E4	床上覆土	古墳前期						5YR7/6橙色		40%
152	台付甕	SH70004	E4	床上覆土	古墳前期	17.6		(16.0)	24.55		7.5YR3/1黒褐色	10YR7/3にぶい黄橙色	75%
158	土馬	SH70004	E4	床上覆土	古墳前期					2.2	5YR7/8橙色		85%
160	台付甕	SH70010	F・G6	床直上	古墳前期	(12.3)	(8.2)	(10.0)	(19.4)	24.2	7.5YR6/3にぶい褐色		50%
161	壺	SH70010	F・G6	床直上	古墳前期	14.6					7.5YR8/4浅黄橙色		5%
162	高坏	SH70010	F・G6	床直上	古墳前期	11.9					2.5YR6/4にぶい橙色		80%
163	壺	SH70010	F・G6	床相当	古墳前期	(11.3)	5.4	(7.8)	(15.4)	14.9	7.5YR7/6橙色		80%
164	台付甕	SH70010	F・G6	床相当	古墳前期	(19.2)	5.65	(16.3)	(20.0)	19.6	7.5YR8/4浅黄橙色		50%
165	台付甕	SH70010	F・G6	床相当	古墳前期	15.1	8.7	(12.4)	19.8	25.3	10YR6/2灰黄褐色		90%
166	台付甕	SH70010	F・G6	床相当	古墳前期	15.7	10.45	12.9	24.2	25.8	10YR6/3にぶい黄橙色		80%
167	小型壺	SK70380	F・G6	覆土	古墳前期				8.6		7.5YR7/4にぶい橙色		55%
168	高坏	SK70380	F・G6	覆土	古墳前期	9.8	7.4			6.7	10YR8/3浅黄橙色		99%
169	高坏	SK70380	F・G6	覆土	古墳前期	11.0					10YR7/4にぶい黄橙色		45%
170	小壺	SH70010	F・G6	床直上	古墳前期		4.0	6.0	13.7		10YR7/4にぶい黄橙色		75%
171	壺	SH70010	F・G6	床直上	古墳前期		7.0		(17.8)		10YR7/3にぶい黄橙色		20%
174	壺	SH14209	H8	掘方埋土	弥生後期～古墳前期		2.4				10YR5/3にぶい黄褐色	10YR6/3にぶい黄橙色	20%
175	台付甕	SH14389	H7～I8	掘方埋土	古墳前期			(9.2)			7.5YR5/6明褐色		20%
176	台付甕	SH14389	H7～I8	掘方埋土	古墳前期		9.0				10YR6/3にぶい黄橙色		20%
177	台付甕	SH14389	H7～I8	掘方埋土	古墳前期	(16.4)		(13.8)			10YR7/4にぶい黄橙色	10YR5/2灰黄褐色	20%
178	高坏	SH14389	H7～I8	掘方埋土	古墳前期						10YR7/4にぶい黄橙色		20%
183	壺	SH15285	G9	床相当	古墳前期		3.8		(13.7)		5YR5/6明赤褐色	7.5YR5/6明褐色	30%
184	台付甕	SH15285	G9	床相当	古墳前期			(7.4)	(9.5)		10YR5/3にぶい黄褐色		30%
185	器台	SH15285	G9	床相当	古墳前期	7.7					10YR7/4にぶい黄橙色		40%
186	ミニチュア	SH15285	G9	床相当	古墳前期		1.0				7.5YR7/6橙色		90%
187	器台	SH15285	G9	床相当	古墳前期		(10.5)				7.5YR5/6明褐色		10%
188	台付甕	SH15285	G9	床相当	古墳前期		9.6				7.5YR6/6橙色		25%
189	台付甕	SH15285	G9	床相当	古墳前期		6.8				7.5YR6/4にぶい橙色		10%
190	壺	SH15285	G9	床相当	古墳前期	22.4					2.5YR6/8橙色	5YR6/4にぶい橙色	30%
191	台付甕	SH15285	G9	床相当	古墳前期	(10.2)		(11.4)			10YR6/4にぶい黄橙色		10%
192	S字甕	SH14549	G8	床上覆土	古墳前期	(14.0)		(13.0)			10YR8/4浅黄橙色		10%
193	S字甕	SH14549	G8	床上覆土	古墳前期	(14.0)		(12.7)			10YR7/3にぶい黄橙色		10%
194	高坏	SH14549	H9	床相当	古墳前期	9.3					5YR7/6橙色～2.5Y7/2灰黄色		75%
195	高坏	SH14549	H9	床相当	古墳前期		10.4				7.5YR6/3にぶい褐色		15%
196	高坏	SH14549	H9	床相当	古墳前期		11.0				7.5YR7/4にぶい橙色		15%
197	S字甕	SH14549	H9	床相当	古墳前期	(11.6)		(11.1)			10YR7/3にぶい黄橙色		5%
198	壺	SH14549	H9	床相当	古墳前期	(15.2)					7.5YR7/4にぶい橙色		10%
199	台付甕	SH14549	H9	床相当	古墳前期	(9.8)		(8.0)	(10.8)		7.5YR6/4にぶい橙色		20%
203	壺	SH14550	H10	床相当	古墳前期		6.4				5YR7/6橙色		10%
205	壺	SH13021	L16	覆土	弥生末～古墳前期	(17.4)					7.5YR7/4にぶい橙色	7.5YR6/4にぶい橙色	10%
206	壺	SH13021	M16	床相当	古墳前期		(8.6)		(24.0)		5YR7/6橙色	7.5YR7/4にぶい橙色	20%
207	壺	SH13021	L16	床相当	古墳前期		10.3				7.5YR8/4浅黄橙色	7.5YR7/4にぶい橙色	10%
208	器台	SH13021	L16	覆土	古墳前期	(9.2)					7.5YR8/4浅黄橙色	7.5YR6/4にぶい橙色	15%
209	台付甕	SH13021	L17	覆土	古墳前期		8.4				5YR7/6橙色		10%
210	台付甕	SH13021	L17	覆土	古墳前期						7.5YR6/6橙色	10YR7/1灰色	10%
211	高坏か器台	SH13021	M16	床相当	古墳前期						7.5YR6/4にぶい橙色		5%
212	高坏	SH13021	L16	床相当	古墳前期		(13.8)				7.5YR8/4浅黄橙色	5YR7/4にぶい橙色	30%
213	壺	SH13021 SP15314	L16	床相当・覆土	弥生末～古墳前期		11.0	8.0	(25.7)		2.5YR7/6橙色	7.5YR8/2灰色	70%

出土土器一覧表（4）

挿図番号	器種	遺構	グリッド	層位	時期	口径(cm)	底径(cm)	頸部径(cm)	最大径(cm)	器高(cm)	色調 内面	色調 外面	残存率
214	壺	SH13021	M16	床相当	弥生末～古墳前期	15.6	11.0	9.3	(26.0)		7.5YR7/4にぶい橙色		40%
215	高坏	SK15475	M16	覆土	古墳前期						5YR7/8橙色	5YR6/6橙色	10%
216	高坏	SK15475	M16	覆土	古墳前期	11.3	6.8			7.2	10YR7/4にぶい黄橙色	7.5YR6/4にぶい橙色	98%
217	壺	SH13021	M16	床相当	古墳前期	(11.4)		(8.4)			7.5YR7/4にぶい橙色	5YR8/2灰白	10%
218	小型壺	SK15475	M16	覆土	古墳前期		3.6		(5.6)		2.5YR7/3橙色	2.5YR6/8橙色	80%
219	壺	SH13021	M16	床相当	古墳前期	(21.4)					5YR7/6橙色	5YR7/8橙色	5%
220	壺	SH14235	I11	覆土	弥生後期						10YR7/3にぶい黄橙色	7.5YR8/6浅黄橙色	1%
221	台付甕	SH14235	I11	床直上	古墳前期		7.8				7.5YR5/4にぶい褐色		20%
222	台付甕	SH14235	I11	覆土	弥生後期？		(10.4)				7.5YR5/6明褐色		20%
223	台付甕	SH14235	I11	床直上	古墳前期	(18.2)		(14.4)	(21.7)		10YR6/3にぶい黄橙色		35%
224	高坏	SH14235	I11	床直上	古墳前期	(26.0)					10YR6/4にぶい黄橙色		35%
225	台付甕	SK4133	M29	覆土	弥生末～古墳前期	(15.4)		(13.5)			10YR7/3にぶい黄橙色		5%
226	台付甕	SK4132	M29	覆土	弥生末～古墳前期	(22.2)		(20.1)			7.5YR6/6橙		3%
227	壺	SK4133	M29	覆土	弥生末～古墳前期						7.5YR7/3橙色	5YR7/6橙色	2%
228	壺	SK4132	M29	覆土	弥生末～古墳前期		(6.6)				7.5YR6/3にぶい褐色		3%
229	台付甕	SP3073	N29	覆土	弥生末～古墳前期	(32.0)		(30.0)			7.5YR8/4浅黄橙色	7.5YR8/3浅黄橙色	1%
230	壺	SP3355	N29	覆土	弥生末～古墳前期		8.0				5YR6/6橙色	2.5YR6/6橙色	10%
231	壺	SH1303	N・O-30	床相当	古墳前期			7.5			5YR7/8橙色	5YR6/6橙色	20%
232	台？	SH1303	N・O-30	覆土	古墳前期		(6.0)				7.5YR7/6橙色		55%
234	壺	SD70017	D・E3	覆土	弥生末～古墳前期	(15.8)					10YR7/4にぶい黄橙色		10%
235	壺	SD70017	D・E3	覆土	弥生末～古墳前期		(9.6)				10YR5/2灰黄褐色～10YR6/2灰黄褐色		10%
236	高坏	SD70020	E3～4	覆土	弥生末～古墳前期	(11.5)					5YR6/4にぶい橙色		30%
237	台付甕	SD70020	E3～4	覆土	弥生末～古墳前期		5.6				10YR6/3にぶい黄橙色～7.5YR6/4にぶい橙色		40%
238	壺	SD70020	E3～4	覆土	弥生末～古墳前期						5YR6/6橙色		10%
239	壺	SD70019 SD70020	D4	覆土	弥生末～古墳前期		10.8		(27.2)		2.5YR6/3橙色		75%
240	壺	SD70020	E3～4	覆土	弥生末～古墳前期		(11.4)				7.5YR6/2灰褐色	7.5YR7/4にぶい橙色	5%
241	台付甕	SD70020	E3～4	覆土	弥生末～古墳前期		(8.0)				7.5YR6/4にぶい橙色	7.5YR7/4にぶい橙色	15%
245	壺	SD302	M32	覆土	弥生後期	(10.8)		(5.8)			7.5YR6/4にぶい橙色		10%
246	壺	SD302	L31	覆土	弥生後期	(17.6)					10YR5/4にぶい黄褐色		15%
247	壺	SD302	L30	覆土	弥生後期	(15.8)					10YR7/4にぶい黄橙色		10%
248	壺	SD302	M32	覆土	弥生後期			(6.0)			7.5YR7/4にぶい橙色		5%
249	壺	SD302	M31	覆土	弥生後期	(22.0)					10YR6/1褐灰色	7.5YR7/6橙色	10%
250	壺	SD302	M32	覆土	弥生後期			(7.4)			7.5YR7/3橙色		5%
251	壺	SD302	L30	覆土	弥生後期			(6.5)			10YR7/3にぶい黄橙色	7.5YR7/6橙色	10%
252	壺	SD302	M32	覆土	弥生後期			(7.0)			7.5YR7/4にぶい橙色		5%
253	壺	SD302	L30	覆土	弥生後期			(5.6)			10YR7/4にぶい黄橙色		20%
254	壺	SD302	L30	覆土	弥生後期						10YR5/2灰黄褐色	7.5YR7/6橙色	15%
255	壺	SD302	M32	覆土	弥生後期		(9.6)				10YR5/2灰黄褐色	7.5YR6/3にぶい褐色	5%
256	壺	SD302	M32	覆土	弥生後期		(9.4)				2.5Y7/3浅黄色	7.5YR7/4にぶい橙色	5%
257	壺	SD302	M32	覆土	弥生後期		(10.4)		(22.8)		7.5YR7/3橙色		40%
258	壺	SD302	M32	覆土	弥生後期		(10.0)				5YR6/4にぶい橙色	7.5YR6/4にぶい橙色	5%
259	壺	SD302	M31	覆土	弥生後期		6.4				10YR7/3にぶい黄橙色	7.5YR7/6にぶい橙色	10%
260	壺	SD302	L・M31	覆土	弥生後期～古墳前期		(9.0)		(23.3)		7.5YR6/4にぶい橙色		15%
261	台付甕	SD302	M32	覆土	弥生後期	(20.2)		(18.4)	(23.8)		10YR5/2灰黄褐色		30%
262	台付甕	SD302	L30	覆土	弥生後期	(20.2)		(18.2)			10YR5/3にぶい黄褐色	7.5YR6/4にぶい橙色	2%
263	台付甕	SD302	L30	覆土	弥生後期	(21.6)		(19.0)			10YR6/3にぶい黄橙色	7.5YR7/6橙色	3%
264	台付甕	SD302	L30	覆土	弥生後期	(22.8)		(20.2)			10YR6/4にぶい黄橙色		5%
265	台付甕	SD302	M32	覆土	弥生後期		(9.4)				10YR6/4にぶい黄橙色		10%
266	台付甕	SD302	M31	覆土	弥生後期						10YR7/4にぶい黄橙色	5YR6/4にぶい橙色	5%
267	台付甕	SD302	M31	覆土	古墳前期	(23.6)		(21.6)	(24.0)		2.5Y7/3浅黄色～7.5YR7/6橙色	7.5YR7/3橙色～10YR7/4にぶい黄橙色	10%
268	高坏	SD302	M32	覆土	古墳前期	(10.2)					10YR6/4にぶい黄橙色		40%
269	坏？	SD302	L30	覆土	古墳前期	9.0	5.4			3.1	7.5YR7/4にぶい橙色		90%
270	小型壺	SD302	M31	覆土	古墳前期	(6.0)		(4.9)			10YR7/6明黄褐色		25%

出土土器一覧表（５）

挿図番号	器種	遺構	グリッド	層位	時期	口径(cm)	底径(cm)	頸部径(cm)	最大径(cm)	器高(cm)	色調 内面	色調 外面	残存率
271	台付甕	SD302	M31	覆土	古墳前期	(25.2)					10YR5/3にぶい黄褐色		5%
272	壺	SD5389	L29	覆土	弥生後期						10YR5/2灰黄褐色	10YR7/4にぶい黄橙色	5%
273	鉢	SD5389	K30	覆土	弥生後期	(28.6)		(23.7)			7.5YR7/4にぶい橙色	7.5YR7/4にぶい橙色	5%
274	台付甕	SD5389	K30	覆土	弥生後期	(17.8)		(16.1)			7.5YR7/4にぶい橙色	5YR7/6橙色	5%
275	台付甕	SD5389	L29	覆土	弥生後期						10YR6/4にぶい黄橙色		10%
276	壺	SD5389	L29	覆土	弥生後期		(9.6)		(18.1)		10YR6/4にぶい黄橙色		30%
277	台付甕	SD2048	M28	覆土	弥生後期	(18.6)		(17.2)			7.5YR7/6橙色	10YR6/4にぶい黄橙色	10%
278	壺	SD2048	M28	覆土	弥生後期	(18.0)					7.5YR7/6橙色	7.5YR8/6浅黄橙色	10%
279	壺	SD302	M32～33	覆土	弥生後期	(13.0)					7.5YR7/2明褐灰色		25%
280	壺	SD302	M32	覆土	弥生後期	(17.0)					7.5YR7/6橙色～7.5YR 4/2灰褐色	7.5YR7/6橙色	25%
281	壺	SD302	M32～33	覆土	弥生後期	(14.8)		(9.0)			7.5YR7/4にぶい橙色		25%

第３表　出土石器一覧表

挿図番号	器種	遺構	グリッド	層位	時期	幅（cm）	長さ（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石質	残存率
3	磨石	SH70002	D4	炉上	古墳前期	7.6	16.0	4.9	916.1	珪質岩	100%
4	磨石	SH70002	D4	炉上	古墳前期	8.4	15.65	5.6	1200	珪質岩	100%
8	台石・砥石	SH14550	H10	床直上	古墳前期	31.1	34.7	13.0	19400	砂岩	100%
9	打製石斧	SH14550	H10	掘方埋土	縄文	4.9	9.5	1.75	97.6	砂岩	100%
15	台石	SH52984	L17～18	床直上	弥生後期	(10.5)	(20.5)	(4.2)	1000	砂岩	40%
20	打製石斧	SH50801	M19	掘方埋土	縄文	(5.7)	(13.6)	2.5	(159.7)	珪質岩	90%
21	打製石斧	SH50801	M19	掘方埋土	縄文	6.1	(10.55)	1.8	(70.9)	珪質岩	70%
27	台石	SK53363	K21	覆土	弥生後期	(13.6)	(18.6)	(5.8)	1400	砂岩	30%
30	台石	SK54017	J26	覆土	弥生後期	(16.4)	20.1	7.7	3600	砂岩	50%
31	打製石斧	SH5390	K29	掘方埋土	縄文	(7.75)	(9.45)	1.05	(65.4)	珪質岩	70%
64	敲石	SH1313	N30	床直上	弥生後期	10.4	10.7	10.8	1000	砂岩	70%
79	打製石斧	SH1335	M30	床上覆土	縄文	4.35	11.35	2.35	134.5	珪質岩	100%
87	打製石斧	SH1200	R30	床上覆土	縄文	8.0	9.8	2.3	222.8	珪質岩	100%
93	石錘	SH51079	K26	床上覆土	縄文	4.3	5.65	1.3	34.9	珪質岩	100%
95	台石	SH4486	R28	炉上	弥生後期	(12.2)	(17.1)	1.9	600	砂岩	60%
101	台石	SH15315	I～J9	床直上	弥生後期	12.9	12.5	8.4	1600	砂岩	15%
102	台石	SH15315	I～J9	床直上	弥生後期	(33.3)	(32.3)	(5.2)	7400	砂岩	80%
113	台石	SH2934	P30	床直上	弥生後期～古墳前期	(12.2)	23.5	8.1	4200	砂岩	50%
120	台石	SK53906	M18	床上覆土	古墳前期	16.1	20.1	5.7	1800	砂岩	30%
122	台石	SH50799	L～M18	床直上	古墳前期	28.4	34.7	15.0	21000	砂岩	100%
129	スクレイパー	SH2913	N30	掘方埋土	縄文	5.4	4.1	1.4	24.3	珪質岩	100%
143	磨石	SH70005	E・F2	掘方埋土	弥生後期？	6.3	10.0	2.2	199.9	砂岩	100%
144	台石	SH70005	E・F2	掘方埋土	弥生後期？	(11.7)	(8.3)	(2.9)	(301.4)	砂岩	10%
145	磨石	SH70005	E・F2	掘方埋土	弥生後期？	7.9	17.5	6.8	1400	珪質岩	100%
153	石錘	SH70004	E3	床面相当	古墳前期	6.3	3.5	1.18	33.4	珪質岩	100%
154	磨石	SH70004	E3	掘方埋土	弥生後期？	1.35	11.35	3.45	92.3	珪質岩	100%
155	磨石	SH70004	E3	掘方埋土	弥生後期？	(7.4)	(9.0)	(3.1)	(284.5)	砂岩	60%
156	敲石	SH70004	E3	床面相当	古墳前期	7.1	8.1	(3.7)	(283.5)	砂岩	50%
157	石鏃	SH70004	E3	掘方埋土	縄文	1.65	2.0	1.75	2.1	黒曜石	100%
159	磨石	SH70010	F・G6	炉上	古墳前期	4.8	15.3	4.9	588.9	砂岩	100%
172	磨石	SH70010	F・G6	床直上	古墳前期	12.1	21.8	7.8	2600	砂岩	100%
173	台石	SH70010	F・G6	床直上	古墳前期	28.0	29.4	7.0	12600	砂岩	100%
179	打製石斧	SH14389	H-7 H-8	掘方埋土	縄文	6.6	9.7	1.8	116.0	砂岩	100%
180	磨石・砥石	SH15285	G-9	床直上	古墳前期	23.0	35.0	(11.0)	9000	砂岩	100%
181	磨石	SH15285	G-8	床直上	古墳前期	5.9	19.1	5.3	1000	砂岩	100%
182	磨石・敲石	SH15285	G-9	床直上	古墳前期	6.7	21.4	6.35	1400	砂岩	100%
200	打製石斧	SH14549	H-9	掘方埋土	縄文	6.2	(18.7)	1.45	(182.5)	砂岩	85%
201	打製石斧	SH14549	G8～9	掘方埋土	縄文	(4.6)	(16.55)	1.3	(138.9)	珪質岩	40%
202	打製石斧	SH15286	H-9	床上覆土	縄文	5.0	11.5	1.55	86.0	珪質岩	100%
204	台石	SH13021	L16～M17	炉上	古墳前期	30.4	45.5	6.6	16000	砂岩	80%
239	スクレイパー	SH1303	N30	床面中	縄文	2.75	3.75	0.75	7.5	珪質岩	100%
242	敲石	SD70020	E3～4	覆土	弥生後期?	11.0	16.2	4.6	1200	砂岩	100%
243	磨石・敲石	SD70020	E3～4	覆土	弥生後期?	8.3	16.0	6.2	1200	砂岩	100%
244	磨石	SD70020	E3～4	覆土	弥生後期?	15.7	18.3	3.8	1400	安山岩	40%

図　　版

2

5

13

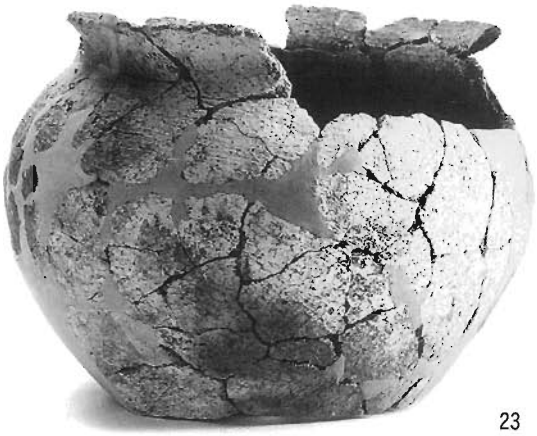
117

25

16

出土遺物 1

図版 2



23

32

36

37

45

43

56

44

出土遺物 2

61

58

72

62

65

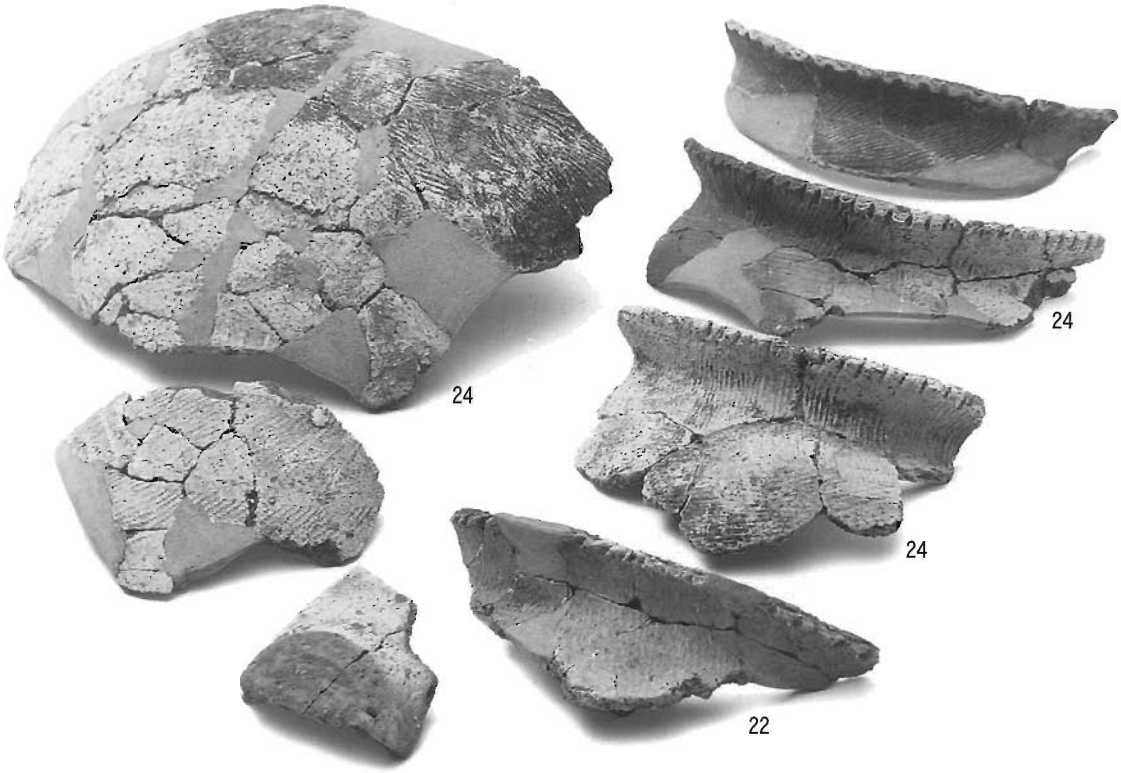
63

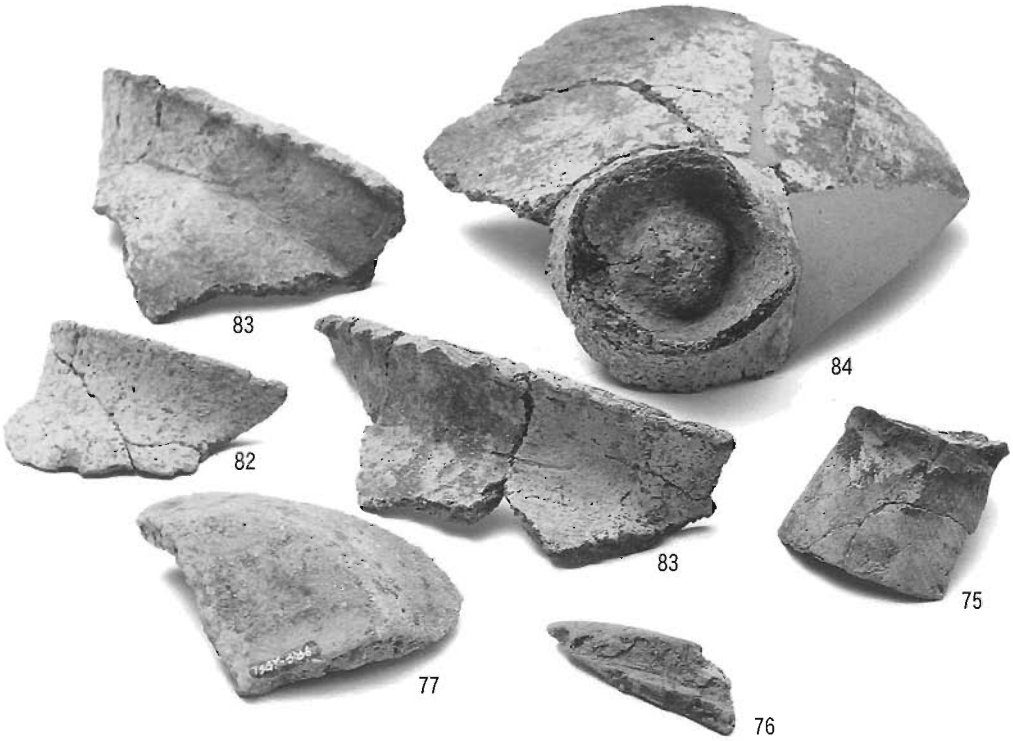
70

出土遺物 3

図版 4

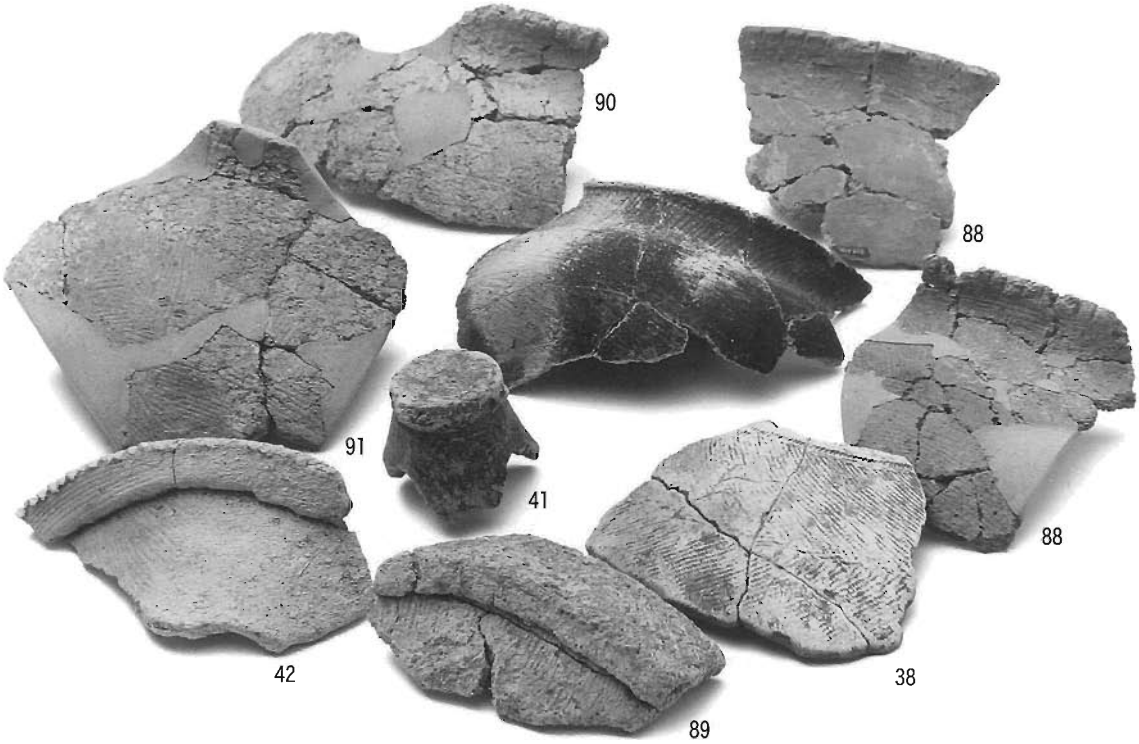
出土遺物 4

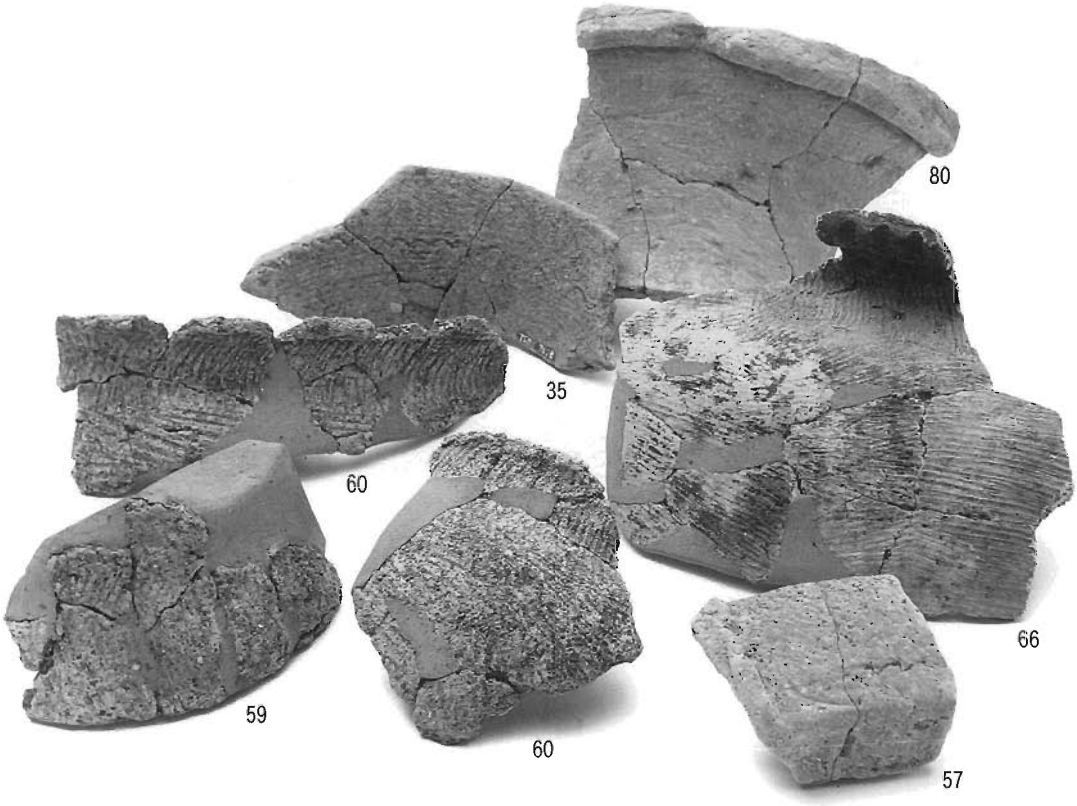




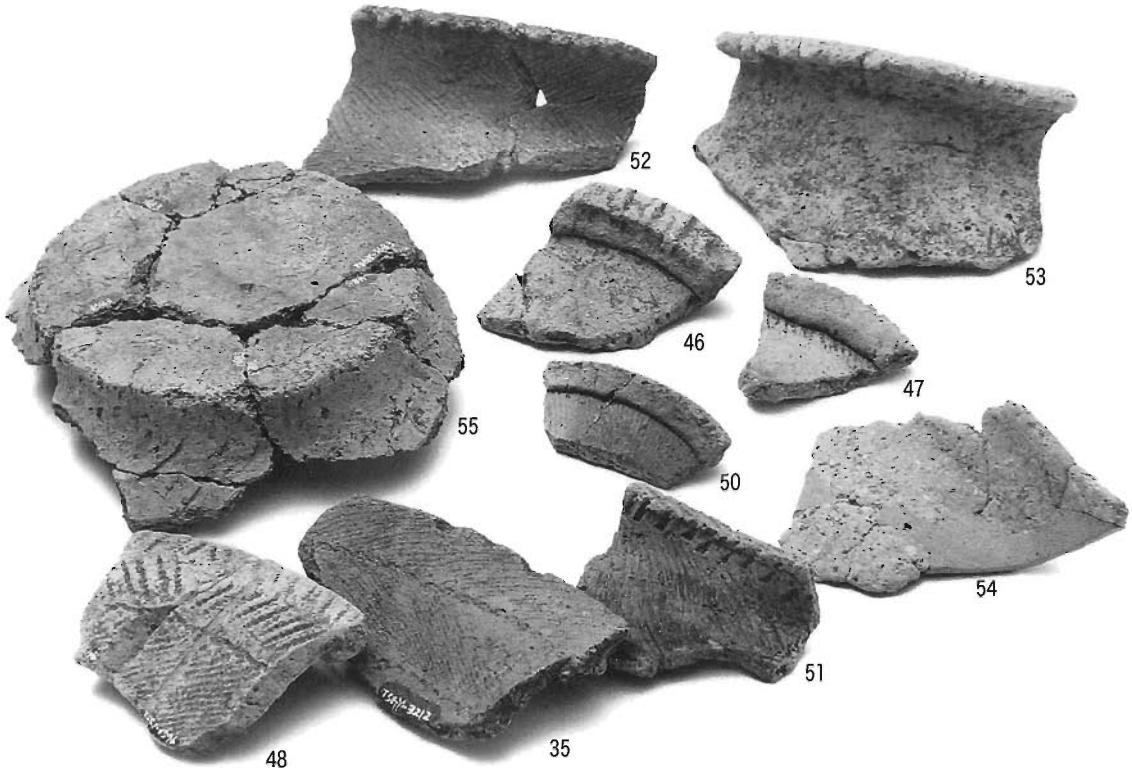
出土遺物 5

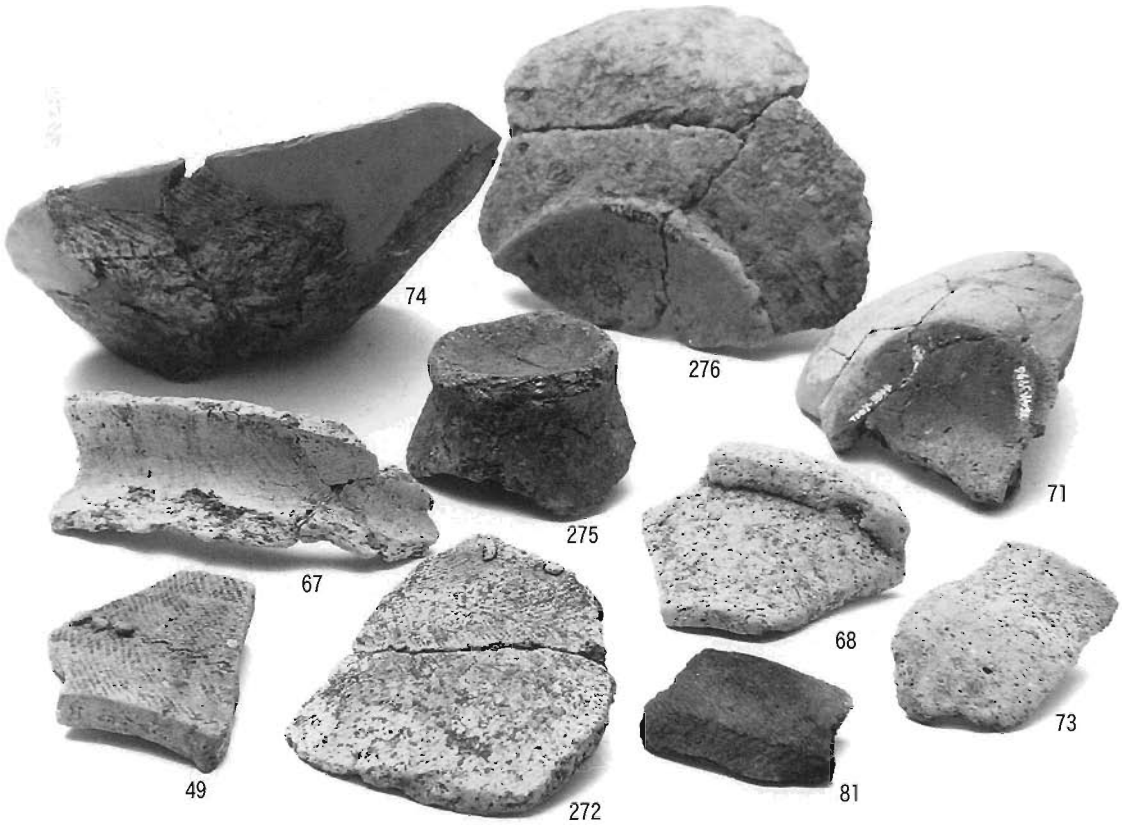
図版 6





出土遺物 6





出土遺物 7

図版 8

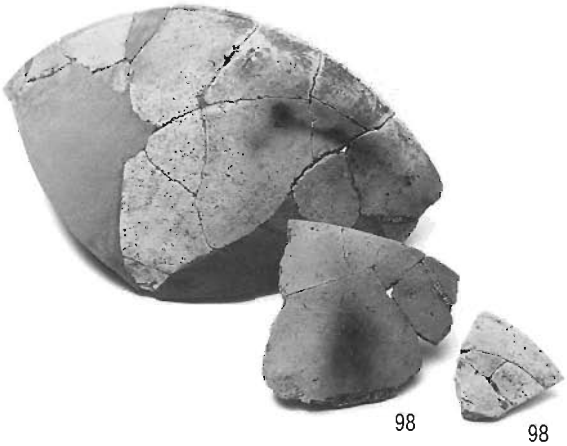
106

115

96

114

97



98 98

111

出土遺物 8

112

119

127

126

121

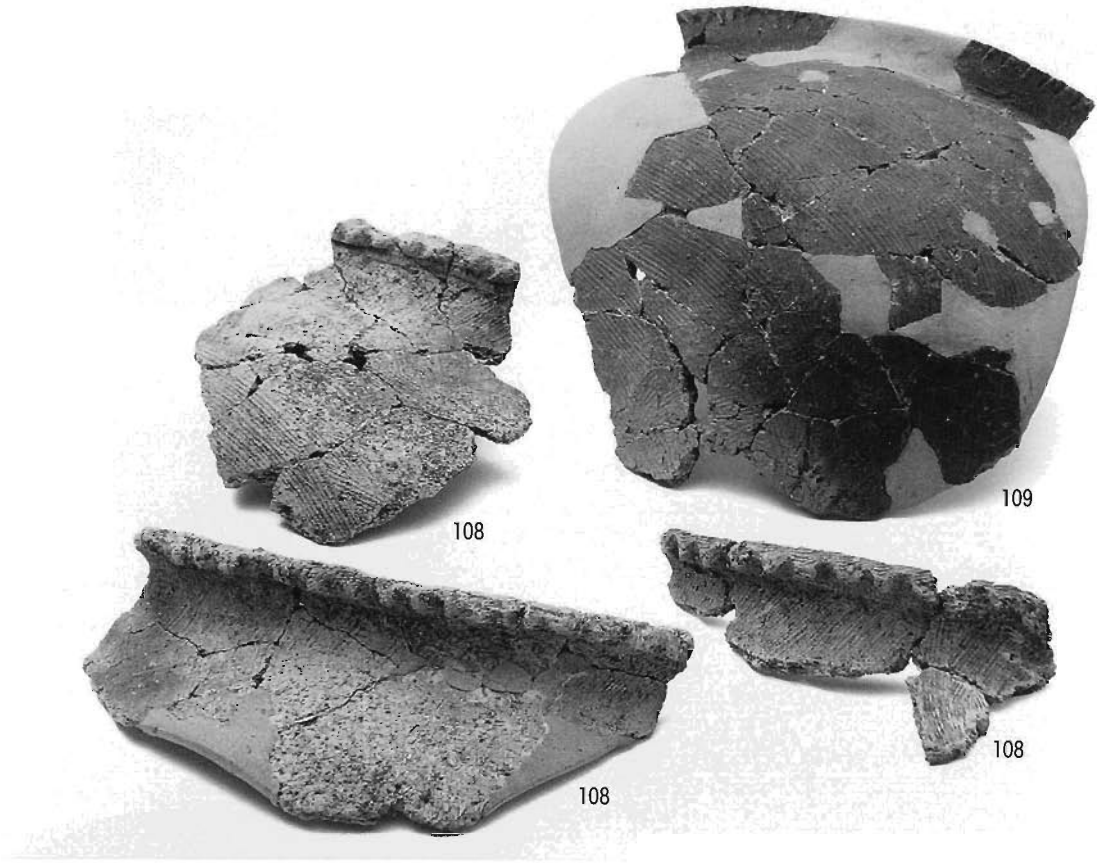
128

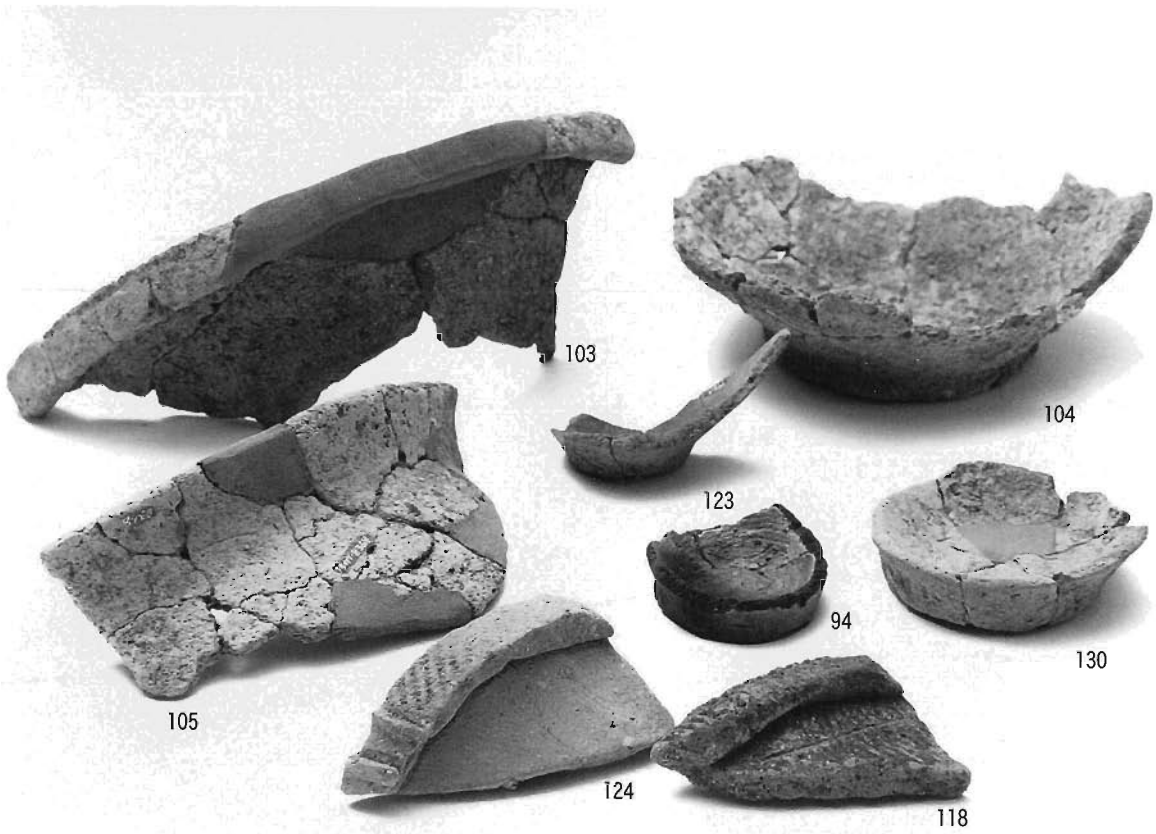
125

131

出土遺物 9

図版10

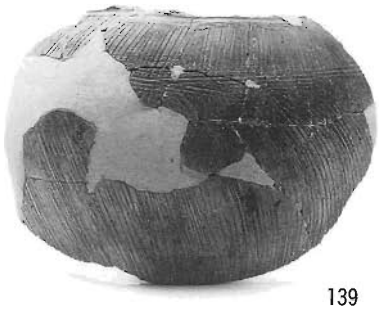




出土遺物10

141

140



139

135

136

137

138

出土遺物11

図版12

132

134

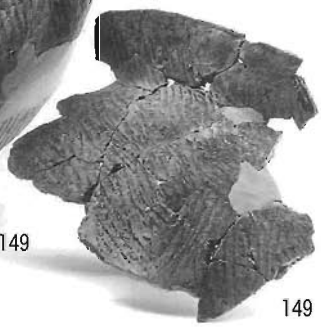
133

152

148

151

149


149

146

出土遺物12

150

147

167

165

164

160

166

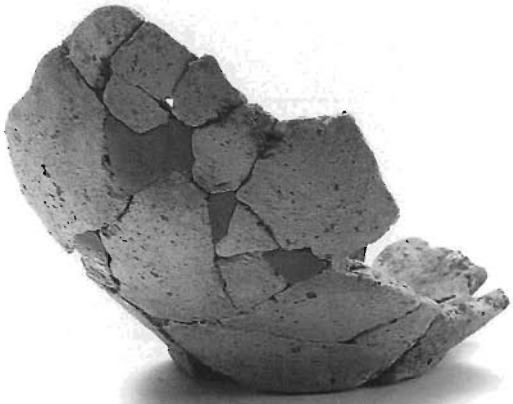
出土遺物13

図版14

162

168

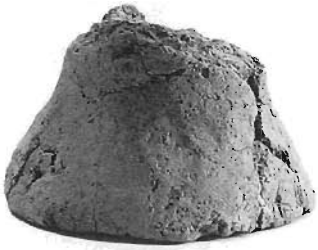
170


171

163

169

176


189

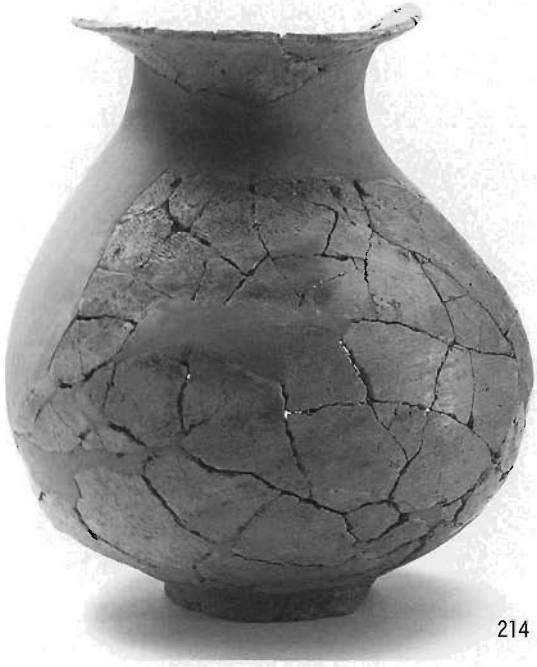
188

187

186

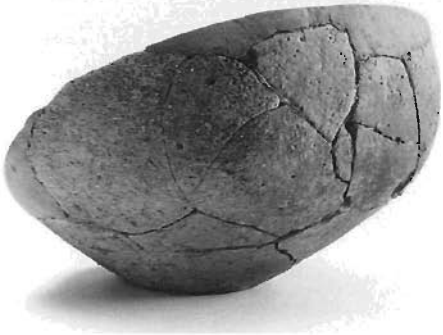
出土遺物14

190



214

206



183

185

209

198

出土遺物15

図版16

194

196

195

218

215

216

213

210

212

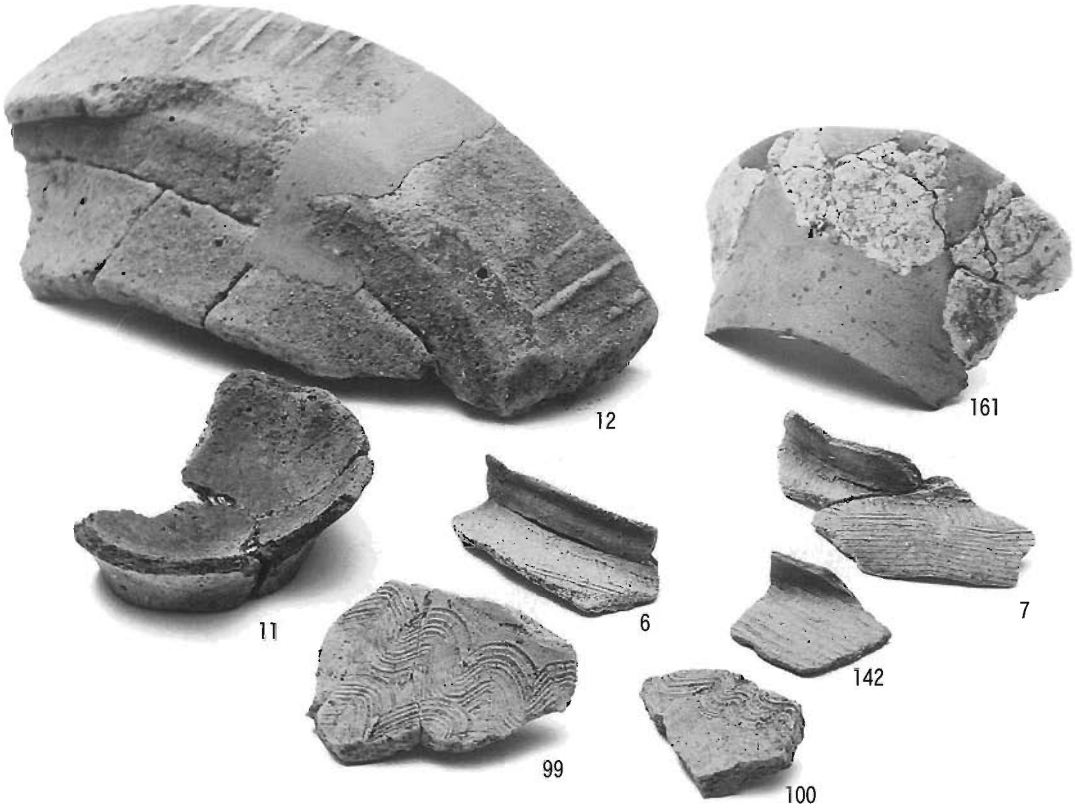
222

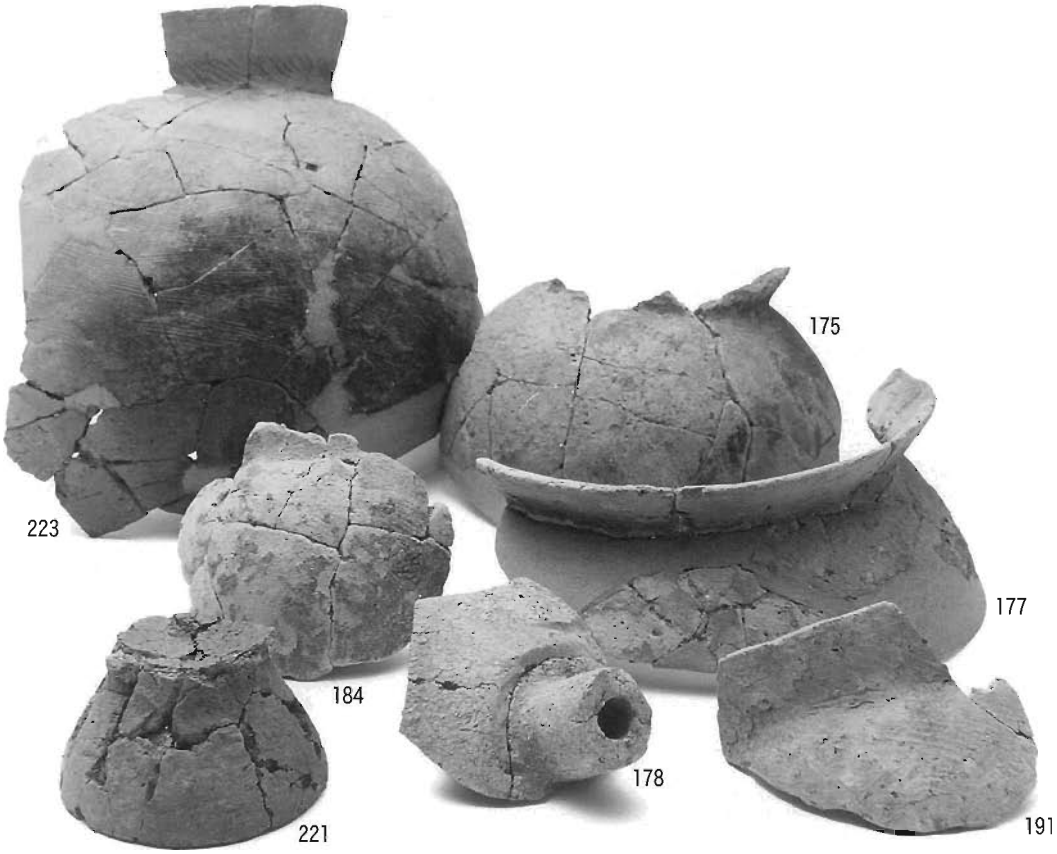
40

224

231

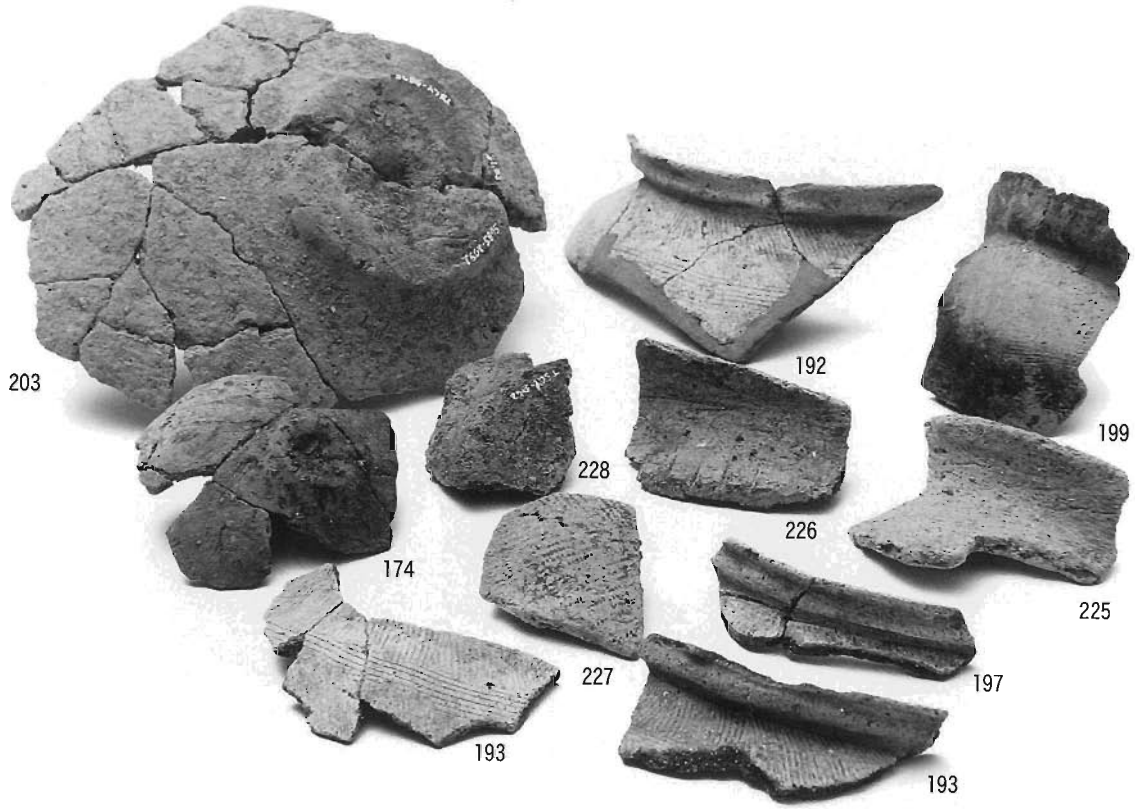
出土遺物16

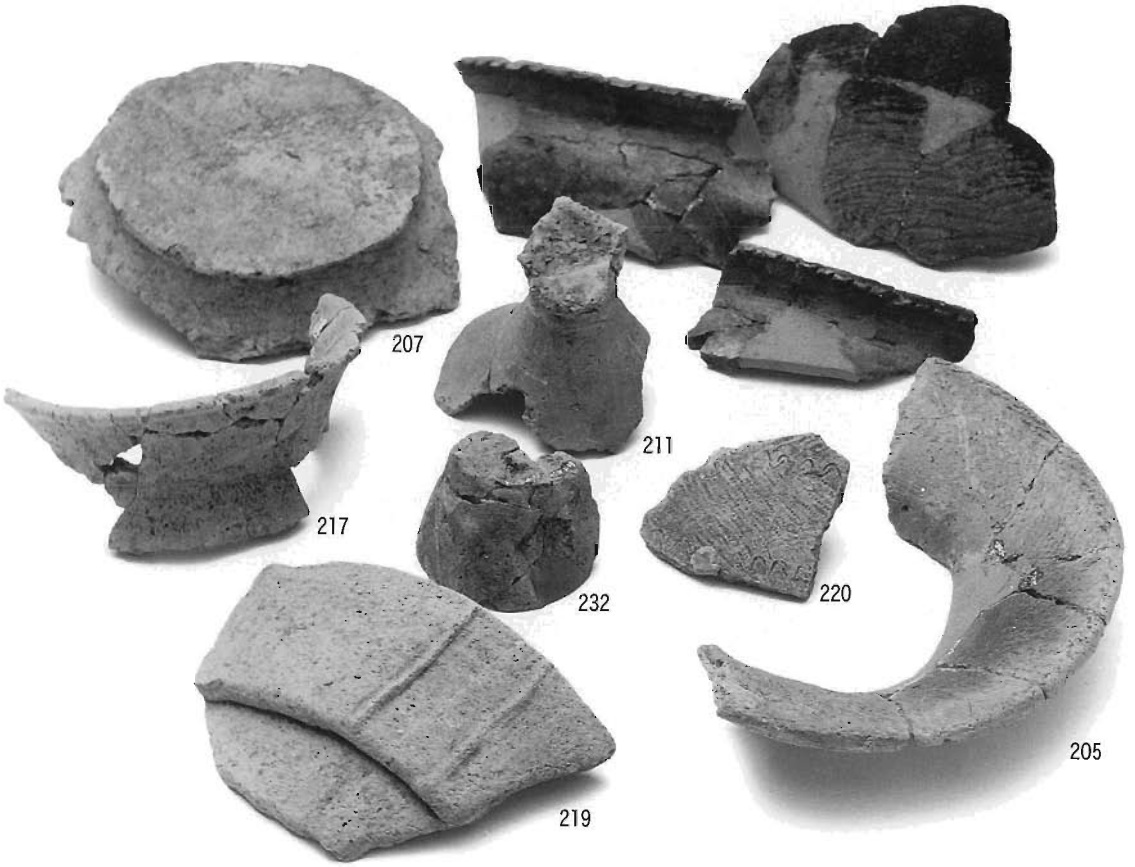




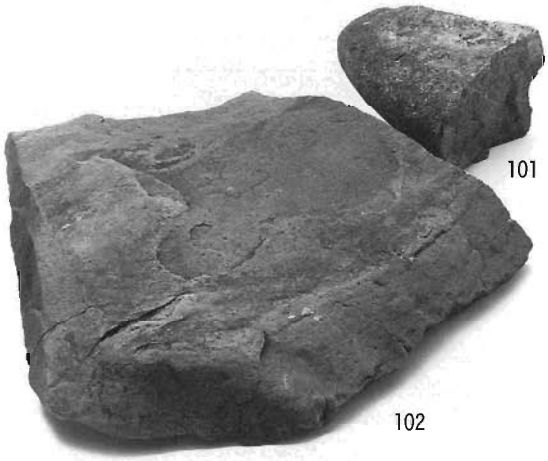
出土遺物17

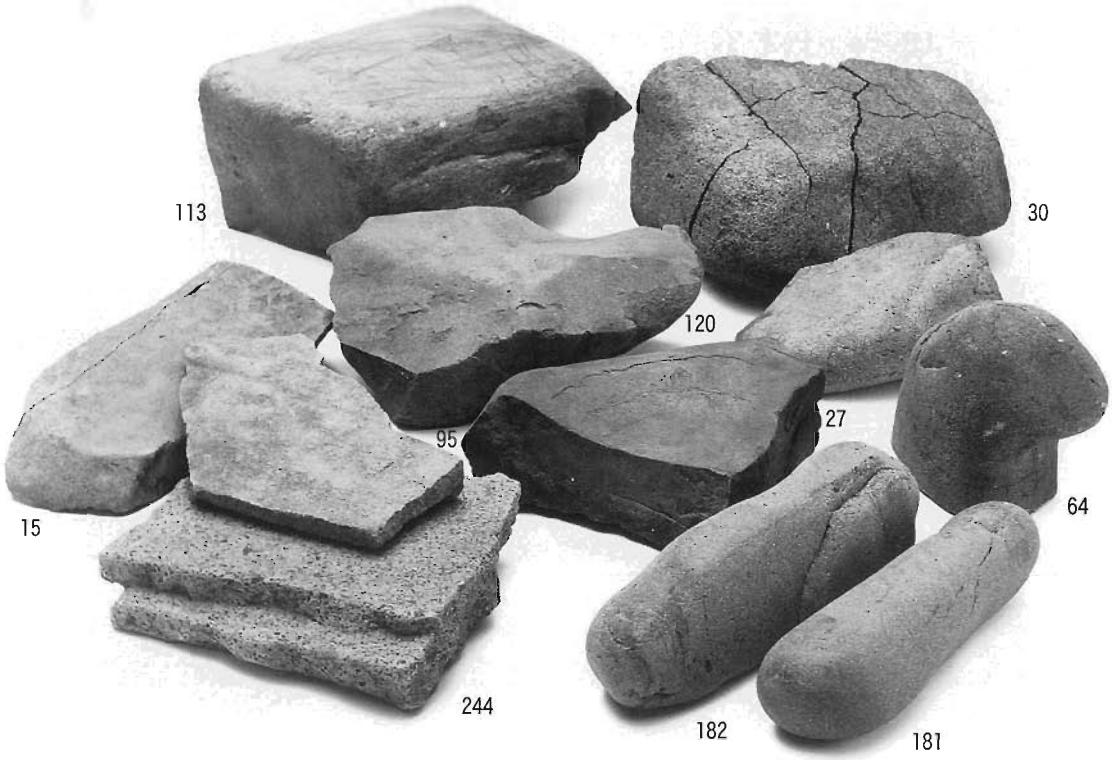
図版18


203
192
199
228
226
174
225
227
197
193
193


207
211
217
232
220
205
219

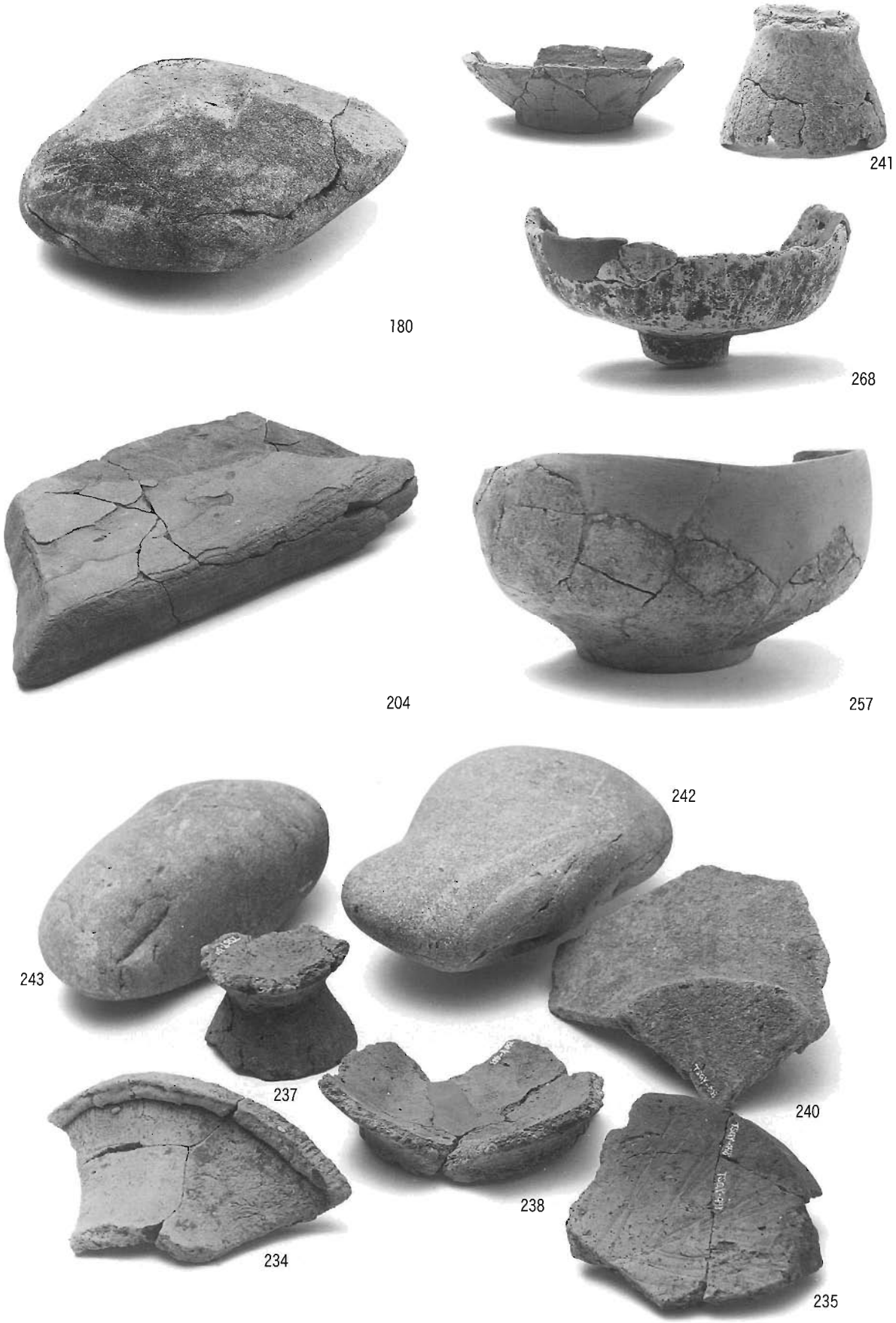
出土遺物18



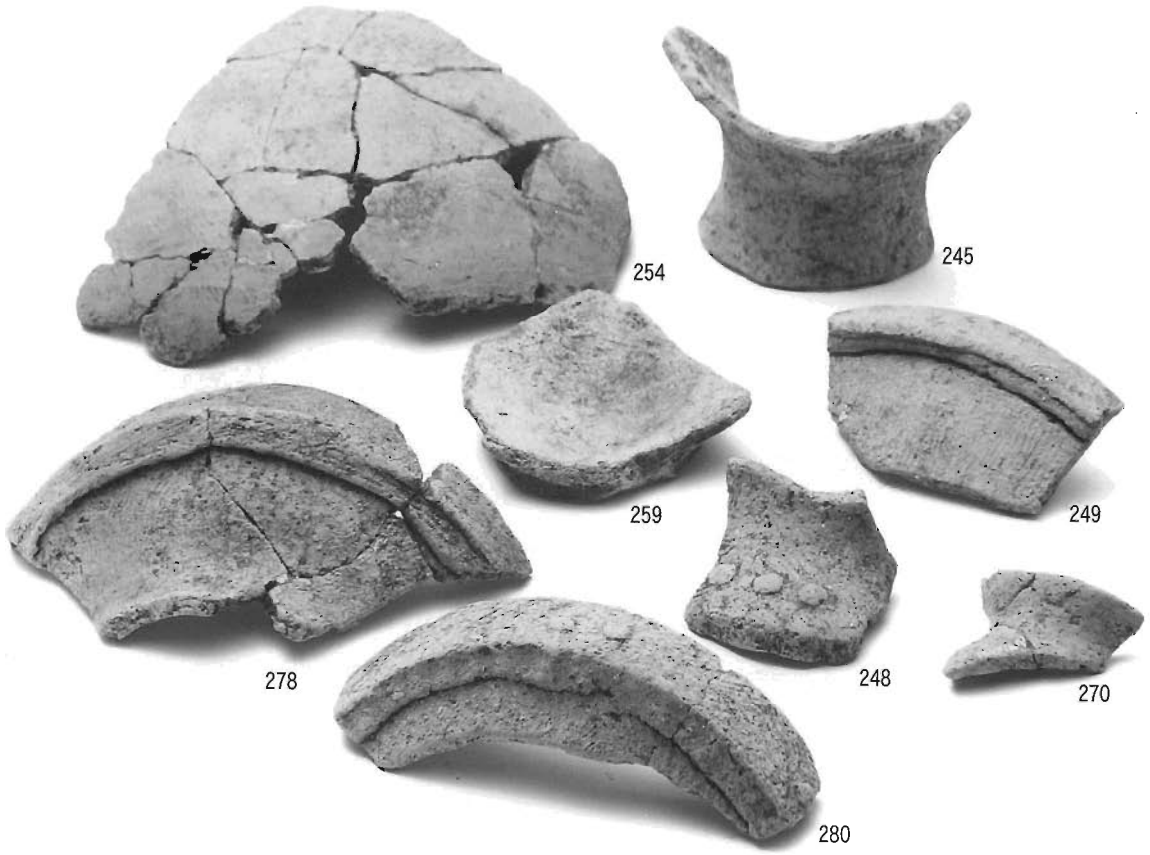


出土遺物19

図版20



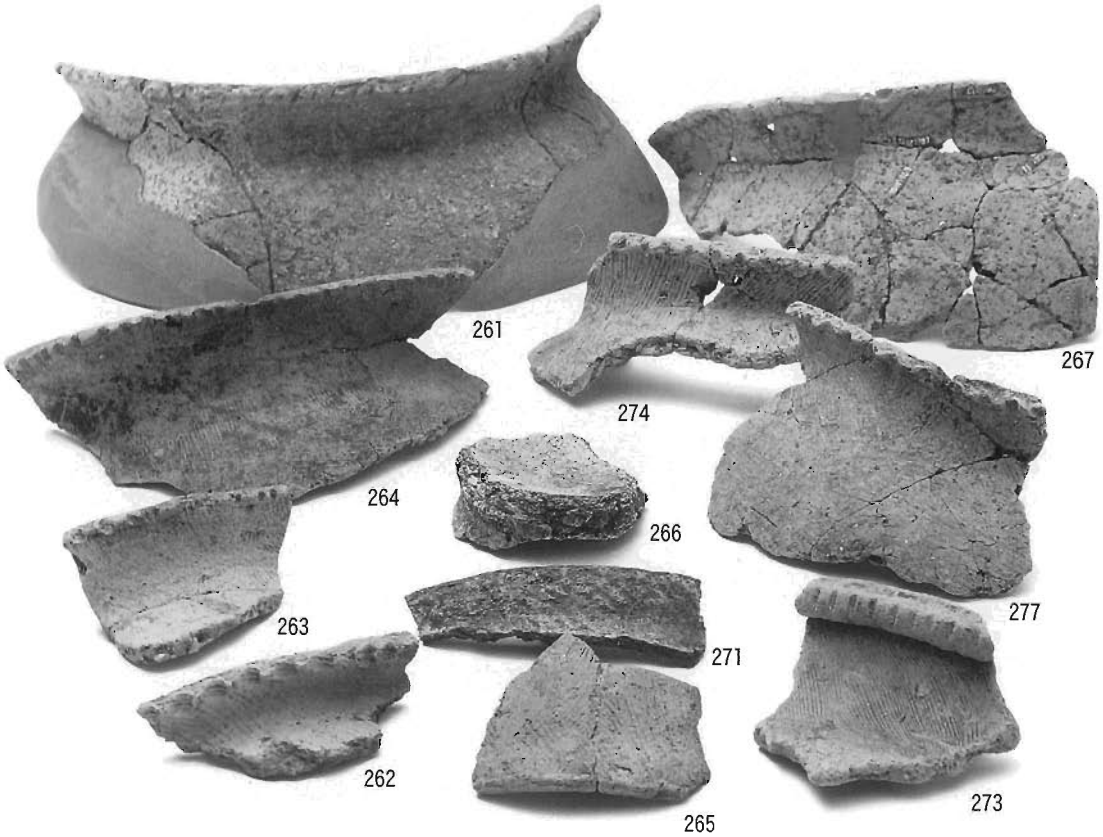
出土遺物20



出土遺物21

図版22

253
250
269
255
251
256
258


261
267
274
264
266
277
263
271
262
265
273

出土遺物22

報告書抄録

ふりがな	するがやまいせきⅢ（やよい・こふん・れきしじだいへんいち）
書名	駿河山遺跡Ⅲ（弥生・古墳・歴史時代編１）
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	島田市－５
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第213集
編著者名	河合修
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20 TEL054－262－4261（代表）　FAX054-262－4266
発行年月日	2010年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町名	遺跡番号					
駿河山遺跡（するがやまいせき）	島田市（しまだし） 牛尾（うしお）	22209	25	世界測地系 34°51′13″ 日本測地系 34°51′1″	世界測地系 138°7′46″ 日本測地系 138°7′57″	199808 ～ 200203	23783㎡	開発等の事業に伴うもの（道路）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
駿河山遺跡	集落	弥生時代後期中葉～古墳時代前期中葉	竪穴式住居、溝	弥生式土器、土師器、石器、石製品	

要約

駿河山遺跡は、縄文時代中期前半～後期前半、弥生時代後期～古墳時代前期、平安時代～中世に至る複合遺跡である。本書は弥生時代～古墳時代・歴史時代についての第1分冊である。

駿河山の台地上に人が住み始めるのは縄文時代中期前半からで、後期前半頃までで一旦集落は廃絶する。その後人が住み始めるのは弥生時代後期中葉で、後期後葉にかけて急激に集落が拡大したものとみられる。

竪穴式住居はおよそ200棟が存在し、楕円形あるいは円形・隅丸方形・方形など平面形状に差を認めることができる。また、外周に溝を巡らせる楕円形の住居が台地の末端部に営まれており、特異性を感じさせる。それぞれの形態ごとに分布域が異なっており、台地上の利用の変遷が窺える。

住民が使用していた土器は、東遠江地方から志太平野で使用される在地産が主体である。しかし、古墳時代前期に至るとＳ字甕や叩き甕など外来の土器が入り始め、この頃に社会的な変動が生じていることが窺える。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第213集

駿河山遺跡Ⅲ（弥生・古墳・歴史時代編１）

第二東名№91地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島田市－５

平成22年３月31日

編集・発行　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL　054-262-4261㈹
FAX　054-262-4266

印　刷　所　松本印刷株式会社
〒421-0303　静岡県榛原郡吉田町片岡2210
TEL　0548-32-0851㈹